

一般国道
10号線

椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第8集

中村石丸遺跡

福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査

上巻

1996

福岡県教育委員会

中村石丸遺跡

福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査

上巻



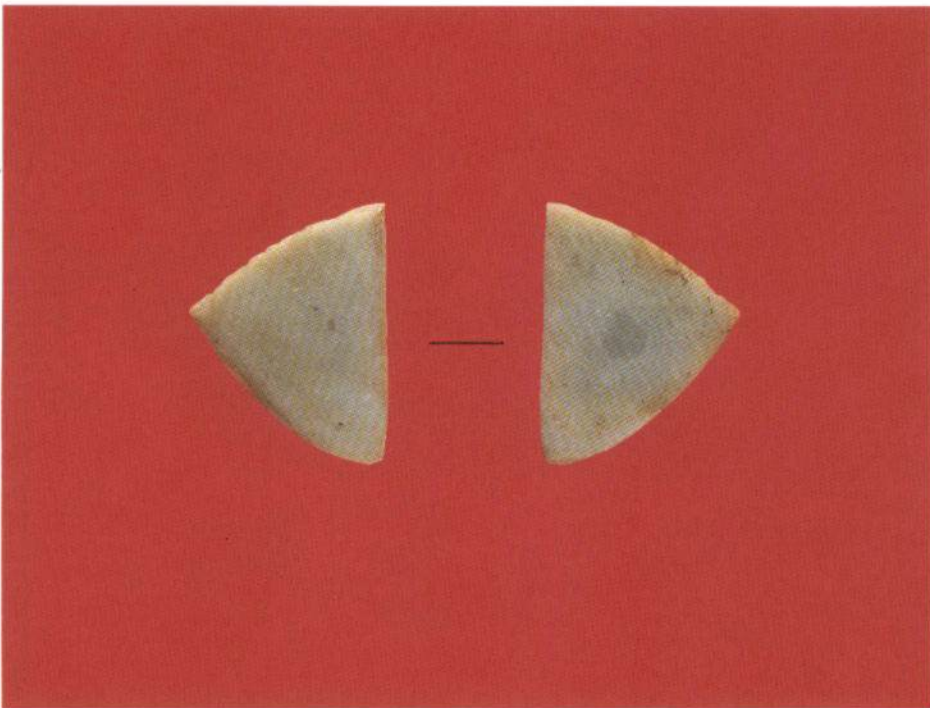
(1) 中村石丸遺跡全景. 1 (南西から)



(2) 中村石丸遺跡全景. 2 (北東から)



(1) 中村石丸遺跡出土異形縄紋土器



(2) 中村石丸遺跡出土玦状耳飾

序

福岡県教育委員会では建設省九州地方建設局の受託を受けて、昭和61(1986)年度から一般国道10号線椎田道路の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査は平成2年度に終了し、平成4年12月25日に椎田道路は全線開通しました。

この報告書は、昭和63(1988)年度に発掘調査を実施した豊前市大字中村所在の中村石丸遺跡の記録です。周防灘沿岸地域は瀬戸内海の西端部に位置し、九州と近畿・瀬戸内地域とを結ぶ九州の玄関口として、歴史的にも常に注目されてきました。従来、当該地域における縄紋時代の実態は不明な点が少なくありませんでしたが、今回、他に例を見ないほど多量の遺物を出土した縄紋時代後期の集落跡が確認され、当時の交流の復原にとって大変意義のある成果を得ることができました。

本書が、縄紋時代における地域間交流の研究や文化財保護思想の普及と活用の一助となれば幸甚に存します。

発掘調査および整理作業や報告書の作成にあたって、ご協力いただいた多くの方々に対しまして深甚の謝意を表します。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

例 言

- 1 この報告書は、昭和63（1988）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の受託を受けて実施した一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第8集である。
- 2 本書に記録した中村石丸遺跡・中村石丸A遺跡・黒峰尾10号墳はいずれも豊前市内に所在する。本来、中村石丸遺跡は町道を挟んで北側を中村石丸A遺跡、南側を中村石丸B遺跡として調査を進めたが、本報告書刊行以降は縄紋時代後期の単純集落跡である中村石丸B遺跡をもって「中村石丸遺跡」とする。
- 3 本書に掲載した遺構図は、柳田康雄・飛野博文・緒方 泉・水ノ江和同・犬塚カヲル・荒巻朋子が作成した。
- 4 本書に掲載した遺構写真は柳田・緒方・水ノ江が、遺物写真については巻頭図版を九州歴史資料館石丸洋が、その他を水ノ江と北岡伸一が撮影した。なお、空中写真については空中写真企画に委託した。
- 5 出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復原作業を行ない、実測作業は福岡県文化課太宰府事務所において平田春美の、図面浄書作業は豊福弥生・原カヨ子・関久江・土山真弓美の協力を得て実施した。
- 6 中村石丸遺跡の5号土坑および1号甕棺墓より採集された土壌の残在脂肪酸分析は（株）ズコーシャに、9～12号竪穴住居跡炉跡で実施した熱残留地磁気分析は島根大学伊藤晴明先生（現島根職業能力開発短期大学校）・時枝克安先生に、9～12号竪穴住居跡の復原家屋の設計図は九州大学工学部山本輝雄先生に、その模型を（株）日精にそれぞれ委託した。
- 7 使用した方位はすべて真北である。
- 8 出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化課太宰府事務所において保管している。
- 9 本書の執筆については委託した分析等の原稿を除いて、中村石丸遺跡は第二章第3節の弥生土器を柳田が、他はすべて水ノ江が、中村石丸A遺跡を柳田が、黒峰尾10号墳は緒方が行なった。
- 10 本書の編集は、中村石丸遺跡・中村石丸A遺跡は水ノ江が、黒峰尾10号墳は緒方がそれぞれ行なった。

本文目次

I. はじめに		
1. 調査の経緯と組織	1	
2. 位置と環境	4	
II. 発掘調査の記録		
1. 調査の概要	8	
2. 縄紋時代の遺構と遺物	9	
(1) 竪穴住居跡	(2) 土坑	(3) 甕棺墓
(4) 炉跡	(5) 溝	(6) ピット
(7) ピット・包含層出土の遺物	(8) 表採の遺物	(9) 土製円盤
3. 弥生時代の遺構と遺物	300	
(1) 土坑	(2) 土壌墓	(3) ピット・包含層出土の遺物
III. 中村石丸A遺跡		
1. はじめに	306	
2. 遺物	306	
IV. 分析と復原		
1. 5号土坑および1号甕棺墓における残在脂肪酸分析について	313	
2. 2号(9~12号)竪穴住居跡炉跡と周辺焼土の熱残留磁気測定	322	
3. 2号(9~12号)竪穴住居跡の復原について	329	
V. まとめ		
1. 中村石丸遺跡の概要	332	
2. 中村石丸遺跡出土の縄紋土器について	333	
3. 中村石丸遺跡出土の石器について	339	
4. 中村石丸遺跡出土の土製円盤について	341	
5. 中村石丸遺跡の竪穴住居跡について	342	
6. おわりに	343	
付. 黒峰尾10号墳		
1. はじめに	379	
2. 遺構と遺物	380	
3. おわりに	387	

巻頭図版目次

- 巻頭図版1 (1) 中村石丸遺跡全景. 1 (南西から) (2) 中村石丸遺跡全景. 2 (北東から)
巻頭図版2 (1) 中村石丸遺跡出土異形土器 (2) 中村石丸遺跡出土球状耳飾

図版目次

〔中村石丸遺跡〕

- 図版1 (1) 中村石丸遺跡全景. 1 (南東から) (2) 中村石丸遺跡全景. 2 (南西から)
図版2 (1) 中村石丸遺跡全景. 3 (北東から) (2) 中村石丸遺跡全景. 4 (真上から)
図版3 (1) 1号竪穴住居跡. 1 (東から) (2) 1号竪穴住居跡. 2 (北西から)
図版4 (1) 3号竪穴住居跡. 1 (南東から) (2) 3号竪穴住居跡炉跡 (北から)
図版5 (1) 4号竪穴住居跡遺物出土状態 (東から) (2) 4号竪穴住居跡完掘状態 (東から)
図版6 (1) 5号竪穴住居跡遺物出土状態 (北から) (2) 5号竪穴住居跡完掘状態 (北から)
図版7 (1) 5号竪穴住居跡炉跡. 1 (北から) (2) 5号竪穴住居跡炉跡. 2 (南西から)
図版8 (1) 6号竪穴住居跡 (北東から) (2) 6号竪穴住居跡炉跡 (西から)
図版9 (1) 7号竪穴住居跡遺物出土状態 (北西から) (2) 7号竪穴住居跡完掘状態 (南西から)
図版10 (1) 7号竪穴住居跡完掘状態 (北から) (2) 8号竪穴住居跡 (北西から)
図版11 (1) 9～12号竪穴住居跡. 1 (北西から) (2) 9～12号竪穴住居跡. 2 (北西から)
図版12 (1) 9～12号竪穴住居跡. 3 (北西から) (2) 9～12号竪穴住居跡完掘状態 (北西から)
図版13 (1) 9号竪穴住居跡炉跡 (南西から) (2) 10号竪穴住居跡炉跡 (南東から)
図版14 (1) 12号竪穴住居跡炉跡 (西から) (2) 11・12号竪穴住居跡炉跡完掘状態 (南東から)
図版15 (1) 10号竪穴住居跡遺物出土状態. 1 (北西から) (2) 10号竪穴住居跡遺物出土状態. 2 (東から)
図版16 (1) 10号竪穴住居跡遺物出土状態. 3 (北西から) (2) 10号竪穴住居跡遺物出土状態. 4 (南から)
図版17 (1) 1・6号土坑遺物出土状態 (西から) (2) 1・6号土坑完掘状態 (北東から)
図版18 (1) 2号土坑 (北西から) (2) 3号土坑 (北東から)
図版19 (1) 5号土坑. 1 (南東から) (2) 5号土坑. 2 (北東から)
図版20 (1) 1号甕棺墓. 1 (南東から) (2) 1号甕棺墓. 2 (東から)
図版21 (1) 2号甕棺墓 (南東から) (2) 3号甕棺墓 (南から)
図版22 (1) 4号甕棺墓 (北東から) (2) 1号溝遺物出土状態 (北から)
図版23 (1) 1号炉跡 (南東から) (2) 2号炉跡 (北から)
図版24 (1) ピット356 (南西から) (2) ピット714 (南西から)

- 図版25 (1) 7号土坑(北西から) (2) 8号土坑(南東から)
 図版26 (1) 1号土墳墓(北東から) (2) 2号土墳墓(北西から)
 図版27 (1) 3号土墳墓(北東から) (2) 発掘調査風景(北から)
 図版28 1・3・4号竪穴住居跡出土土器
 図版29 4・5号竪穴住居跡出土土器
 図版30 5号竪穴住居跡出土土器. 1
 図版31 5号竪穴住居跡出土土器. 2
 図版32 5号竪穴住居跡出土土器. 3
 図版33 5・6号竪穴住居跡出土土器
 図版34 7号竪穴住居跡出土土器
 図版35 10号竪穴住居跡出土土器
 図版36 10・12号竪穴住居跡および1～4号土坑出土土器
 図版37 4・6号土坑および1号溝・1号甕棺墓出土土器
 図版38 ピット356出土異形高坏
 図版39 ピット・包含層出土土器および各種文様. 1
 図版40 各種文様. 2
 図版41 (1) 1号竪穴住居跡出土石器 (2) 4号竪穴住居跡出土石器. 1
 (3) 4号竪穴住居跡出土石器. 2
 図版42 (1) 5号竪穴住居跡出土石器. 1 (2) 5号竪穴住居跡出土石器. 2
 (3) 5号竪穴住居跡出土石器. 3
 図版43 (1) 5号竪穴住居跡出土石器. 4 (2) 5号竪穴住居跡出土石器. 5
 (3) 6号竪穴住居跡出土石器
 図版44 (1) 7号竪穴住居跡出土石器 (2) 10号竪穴住居跡出土石器. 1
 (3) 10号竪穴住居跡出土石器. 2
 図版45 (1) 12号竪穴住居跡出土石器 (2) 1号溝出土石器
 (3) ピット・包含層出土石器. 1
 図版46 (1) ピット・包含層出土石器. 2 (2) ピット・包含層出土石器. 3
 (3) ピット・包含層出土石器. 4
 図版47 (1) 土製円盤. 1 (2) 土製円盤. 2
 (3) 土製円盤. 3
 図版48 (1) 中村石丸遺跡出土弥生土器 (2) 中村石丸A遺跡全景. 1(北西から)
 図版49 (1) 中村石丸A遺跡全景. 2(北東から) (2) 中村石丸A遺跡石組遺構(北西から)

[黒峰尾10号墳]

- 図版50 (1) 黒峰尾10号墳調査区全景 (南から)
(2) 黒峰尾10号墳全景 (南から 閉塞石除去前)
- 図版51 (1) 黒峰尾10号墳近景 (南から 閉塞石除去前)
(2) 黒峰尾10号墳全景 (南から 閉塞石除去後)
- 図版52 (1) 黒峰尾10号墳近景 (正面から 閉塞石除去後)
(2) 黒峰尾10号墳前室 (玄室から 閉塞石除去後)
- 図版53 (1) 黒峰尾10号墳玄室奥壁
(2) 黒峰尾10号墳玄室床面
- 図版54 黒峰尾10号墳出土土器検出状況
- 図版55 黒峰尾10号墳出土遺物

挿 図 目 次

第1図	椎田道路開通後の中村石丸遺跡 (南東から 1995年11月撮影)	1
第2図	中村石丸遺跡周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	3
第3図	中村石丸遺跡調査地点 (1/5,000)	5
第4図	中村石丸遺跡遺構配置略図 (1/600)	6
第5図	1号竪穴住居跡・1号溝実測図 (1/60)	10
第6図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)	11
第7図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/3)	12
第8図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/3)	13
第9図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.4 (1/3)	14
第10図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.5 (1/3)	15
第11図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.6 (1/3)	16
第12図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.7 (1/3)	17
第13図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.8 (1/3)	18
第14図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.9 (1/3)	19
第15図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.10 (1/3)	20
第16図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.1 (2/3)	21
第17図	1号竪穴住居跡出土土器実測図.2 (1/2)	22
第18図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	23
第19図	3号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/20)	24

第20図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	25
第21図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	26
第22図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)	27
第23図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)	28
第24図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/3)	29
第25図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)	30
第26図	3号竪穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)	31
第27図	3号竪穴住居跡出土石器実測図 (14~21は1/3 23・24は1/2 22は1/4)	32
第28図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第29図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	35
第30図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	36
第31図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)	37
第32図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)	38
第33図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/3)	39
第34図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)	40
第35図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)	41
第36図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 8 (1/3)	42
第37図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 9 (1/3)	43
第38図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 10 (1/3)	44
第39図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 11 (1/3)	45
第40図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 12 (1/3)	46
第41図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 13 (1/3)	47
第42図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 14 (1/3)	48
第43図	4号竪穴住居跡出土土器実測図. 15 (1/3)	49
第44図	4号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (25~34は2/3 35~40は1/2)	50
第45図	4号竪穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/2)	51
第46図	4号竪穴住居跡出土石器実測図. 3 (1/2)	52
第47図	4号竪穴住居跡出土石器実測図. 4 (1/4)	53
第48図	5号竪穴住居跡実測図	55
第49図	5号竪穴住居跡3層下部および4層遺物出土状態実測図 (1/60)	56
第50図	5号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/20)	57
第51図	5号竪穴住居跡1層出土土器実測図. 1 (1/3)	58
第52図	5号竪穴住居跡1層出土土器実測図. 2 (1/3)	59

第53图	5号竖穴住居跡1層出土土器実测图.3 (1/3)	60
第54图	5号竖穴住居跡1層出土土器実测图.4 (1/3)	61
第55图	5号竖穴住居跡1層出土土器実测图.5 (1/3)	62
第56图	5号竖穴住居跡1層出土土器実测图.6 (1/3)	63
第57图	5号竖穴住居跡1層出土土器実测图.7 (1/3)	64
第58图	5号竖穴住居跡1層出土土器実测图.8 (1/3)	65
第59图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.1 (1/3)	66
第60图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.2 (1/3)	67
第61图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.3 (1/3)	68
第62图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.4 (1/3)	69
第63图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.5 (1/3)	70
第64图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.6 (1/3)	71
第65图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.7 (1/3)	72
第66图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.8 (1/3)	73
第67图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.9 (1/3)	74
第68图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.10 (1/3)	75
第69图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.11 (1/3)	76
第70图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.12 (1/3)	77
第71图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.13 (1/3)	78
第72图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.14 (1/3)	79
第73图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.15 (1/3)	80
第74图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.16 (1/3)	81
第75图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.17 (1/3)	82
第76图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.18 (1/3)	83
第77图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.19 (1/3)	84
第78图	5号竖穴住居跡2・3層出土土器実测图.20 (1/3)	85
第79图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.1 (1/3)	87
第80图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.2 (1/3)	88
第81图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.3 (1/3)	89
第82图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.4 (1/3)	90
第83图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.5 (1/3)	91
第84图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.6 (1/3)	92
第85图	5号竖穴住居跡3層下部出土土器実测图.7 (1/3)	93

第86图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 8 (1/3)	94
第87图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 9 (1/3)	95
第88图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 10 (1/3)	96
第89图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 11 (1/3)	97
第90图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 12 (1/3)	98
第91图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 13 (1/3)	99
第92图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 14 (1/3)	100
第93图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 15 (1/3)	101
第94图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 16 (1/3)	102
第95图	5号竖穴住居迹3層下部出土土器実测图. 17 (1/3)	103
第96图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 1 (1/3)	104
第97图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 2 (1/3)	105
第98图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 3 (1/3)	106
第99图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 4 (1/3)	107
第100图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 5 (1/3)	108
第101图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 6 (1/3)	109
第102图	5号竖穴住居迹4層出土土器実测图. 7 (1/3)	110
第103图	5号竖穴住居迹床面出土土器実测图. 1 (1/3)	111
第104图	5号竖穴住居迹床面出土土器実测图. 2 (1/3)	112
第105图	5号竖穴住居迹床面出土土器実测图. 3 (1/3)	113
第106图	5号竖穴住居迹内溝出土土器実测图. 1 (1/3)	114
第107图	5号竖穴住居迹内溝出土土器実测图. 2 (1/3)	115
第108图	5号竖穴住居迹周溝・主柱穴出土土器実测图 (1/3)	116
第109图	5号竖穴住居迹出土球状耳飾実测图 (2/3)	117
第110图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 1 (1/2)	118
第111图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 2 (1/2)	119
第112图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 3 (1/2)	120
第113图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 4 (1/2)	121
第114图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 5 (1/2)	122
第115图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 6 (1/2)	123
第116图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 7 (1/2)	124
第117图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 8 (1/2)	125
第118图	5号竖穴住居迹出土石器実测图. 9 (1/2)	126

第119図	5号竪穴住居跡出土石器実測図. 10 (1/4)	127
第120図	5号竪穴住居跡出土石器実測図. 11 (1/4)	128
第121図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	129
第122図	6号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30)	130
第123図	6号竪穴住居跡炉跡型取り風景 (西から)	130
第124図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	131
第125図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	132
第126図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)	133
第127図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)	134
第128図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/3)	135
第129図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)	136
第130図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)	137
第131図	6号竪穴住居跡出土土器実測図. 8 (1/3)	138
第132図	6号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (153~159は2/3 160・161は1/2)	139
第133図	6号竪穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/4)	140
第134図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	141
第135図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	142
第136図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	143
第137図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)	144
第138図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)	145
第139図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/3)	146
第140図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)	147
第141図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)	148
第142図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 8 (1/3)	149
第143図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 9 (1/3)	150
第144図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 10 (1/3)	151
第145図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 11 (1/3)	152
第146図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 12 (1/3)	153
第147図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 13 (1/3)	154
第148図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 14 (1/3)	155
第149図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 15 (1/3)	156
第150図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 16 (1/3)	157
第151図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 17 (1/3)	158

第152図	7号竪穴住居跡出土土器実測図. 18 (1/3)	159
第153図	7号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (165~179は2/3 180~184は1/3)	160
第154図	7号竪穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/2)	161
第155図	7号竪穴住居跡出土石器実測図. 3 (195~200は1/3 201・202は1/4)	162
第156図	8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	163
第157図	9~12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第158図	9~12号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/20)	165
第159図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	167
第160図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	168
第161図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)	169
第162図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)	170
第163図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/3)	171
第164図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)	172
第165図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)	173
第166図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 8 (1/3)	174
第167図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 9 (1/3)	175
第168図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 10 (1/3)	176
第169図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 11 (1/3)	177
第170図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 12 (1/3)	178
第171図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 13 (1/3)	179
第172図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 14 (1/3)	180
第173図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 15 (1/3)	181
第174図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 16 (1/3)	182
第175図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 17 (1/3)	183
第176図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 18 (1/3)	184
第177図	10号竪穴住居跡出土土器実測図. 19 (1/3)	185
第178図	10号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (2/3)	186
第179図	10号竪穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/2)	187
第180図	10号竪穴住居跡出土石器実測図. 3 (1/2)	188
第181図	10号竪穴住居跡出土石器実測図. 4 (1/2)	189
第182図	10号竪穴住居跡出土石器実測図. 5 (1/4)	190
第183図	12号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	192
第184図	12号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	193

第185図	12号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)	194
第186図	12号竪穴住居跡出土土器実測図. 1(234~241は2/3 242~248は1/3)	195
第187図	12号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/2)	196
第188図	10・12号竪穴住居跡出土土器実測図. 1 (1/3)	197
第189図	10・12号竪穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)	198
第190図	10・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	199
第191図	1・6号土坑実測図 (1/30)	200
第192図	1号土坑出土土器実測図. 1 (1/3)	202
第193図	1号土坑出土土器実測図. 2 (1/3)	203
第194図	1号土坑出土土器実測図. 3 (1/3)	204
第195図	1号土坑出土土器実測図. 4 (1/3)	205
第196図	1号土坑出土土器実測図. 5 (1/3)	206
第197図	1号土坑出土土器実測図. 6 (1/3)	207
第198図	1号土坑出土土器実測図. 7 (1/3)	208
第199図	1号土坑出土土器実測図 (262~273は2/3 274~279は1/3)	209
第200図	2号土坑実測図 (1/30)	210
第201図	2号土坑出土土器実測図 (1/3)	211
第202図	2号土坑出土土器実測図 (280~282は2/3 283・285は1/3 284・286は1/4)	212
第203図	3・4号土坑実測図 (1/30)	213
第204図	3号土坑出土土器実測図 (1/3)	214
第205図	4号土坑出土土器実測図. 1 (1/3)	215
第206図	4号土坑出土土器実測図. 2 (1/3)	216
第207図	3~5号土坑出土土器実測図 (287~291は2/3 292~294は1/2)	217
第208図	5号土坑実測図 (1/30)	218
第209図	5号土坑出土土器実測図 (1/4)	219
第210図	6号土坑出土土器実測図. 1 (1/3)	221
第211図	6号土坑出土土器実測図. 2 (1/3)	222
第212図	6号土坑出土土器実測図. 3 (1/3)	223
第213図	6号土坑出土土器実測図. 4 (1/3)	224
第214図	6号土坑出土土器実測図. 5 (1/3)	225
第215図	6号土坑出土土器実測図. 6 (1/3)	226
第216図	6号土坑出土土器実測図. 7 (1/3)	227
第217図	6号土坑出土土器実測図(296~298は2/3 299~301は1/3 302は1/4)	228

第218図	1～4号甕棺墓実測図 (1/15)	229
第219図	1号甕棺実測図 (1/3)	230
第220図	2・4号甕棺実測図 (1/3)	231
第221図	1号甕棺出土石器実測図 (1/2)	231
第222図	1・2号炉跡実測図 (1/20)	232
第223図	1・2号炉跡出土土器実測図 (1102は1号 1103・1104は2号 1/3)	232
第224図	1号溝出土土器実測図.1 (1/3)	235
第225図	1号溝出土土器実測図.2 (1/3)	236
第226図	1号溝出土土器実測図.3 (1/3)	237
第227図	1号溝出土土器実測図.4 (1/3)	238
第228図	1号溝出土土器実測図.5 (1/3)	239
第229図	1号溝出土土器実測図.6 (1/3)	240
第230図	1号溝出土石器実測図 (1/2)	241
第231図	ピット714・356実測図 (1/15)	242
第232図	ピット・包含層出土土器実測図.1 (1/3)	245
第233図	ピット・包含層出土土器実測図.2 (1/3)	246
第234図	ピット・包含層出土土器実測図.3 (1/3)	247
第235図	ピット・包含層出土土器実測図.4 (1/3)	248
第236図	ピット・包含層出土土器実測図.5 (1/3)	249
第237図	ピット・包含層出土土器実測図.6 (1/3)	250
第238図	ピット・包含層出土土器実測図.7 (1/3)	251
第239図	ピット・包含層出土土器実測図.8 (1/3)	252
第240図	ピット・包含層出土土器実測図.9 (1/3)	253
第241図	ピット・包含層出土土器実測図.10 (1/3)	254
第242図	ピット・包含層出土土器実測図.11 (1/3)	255
第243図	ピット・包含層出土土器実測図.12 (1/3)	256
第244図	ピット・包含層出土土器実測図.13 (1/3)	257
第245図	ピット・包含層出土土器実測図.14 (1/3)	258
第246図	ピット・包含層出土土器実測図.15 (1/3)	259
第247図	ピット・包含層出土土器実測図.16 (1/3)	260
第248図	ピット・包含層出土土器実測図.17 (1/3)	261
第249図	ピット・包含層出土土器実測図.18 (1/3)	262
第250図	ピット・包含層出土土器実測図.19 (1/3)	263

第251図	ピット・包含層出土土器実測図. 20 (1/3)	264
第252図	ピット・包含層出土土器実測図. 21 (1/3)	265
第253図	ピット・包含層出土土器実測図. 22 (1/3)	266
第254図	ピット・包含層出土土器実測図. 23 (1/3)	267
第255図	ピット・包含層出土土器実測図. 24 (1/3)	268
第256図	ピット・包含層出土土器実測図. 25 (1/3)	269
第257図	ピット・包含層出土土器実測図. 26 (1/3)	270
第258図	ピット・包含層出土土器実測図. 27 (1/3)	271
第259図	ピット・包含層出土土器実測図. 28 (1/3)	272
第260図	ピット・包含層出土土器実測図. 29 (1/3)	273
第261図	ピット・包含層出土土器実測図. 30 (1/3)	274
第262図	ピット・包含層出土土器実測図. 31 (1/3)	275
第263図	ピット・包含層出土土器実測図. 32 (1/3)	276
第264図	ピット・包含層出土土器実測図. 33 (1/3)	277
第265図	ピット・包含層出土土器実測図. 34 (1/3)	278
第266図	ピット・包含層出土土器実測図. 35 (1/3)	279
第267図	ピット・包含層出土土器実測図. 1 (2/3)	280
第268図	ピット・包含層出土土器実測図. 2 (2/3)	281
第269図	ピット・包含層出土土器実測図. 3 (2/3)	282
第270図	ピット・包含層出土土器実測図. 4 (412~414は2/3 415~419は1/2)	283
第271図	ピット・包含層出土土器実測図. 5 (1/2)	284
第272図	ピット・包含層出土土器実測図. 6 (1/2)	285
第273図	ピット・包含層出土土器実測図. 7 (1/2)	286
第274図	ピット・包含層出土土器実測図. 8 (1/2)	287
第275図	ピット・包含層出土土器実測図. 9 (453~456は1/2 457は1/4)	288
第276図	表採土器実測図 (1/3)	289
第277図	表採土器実測図. 1 (458~473は2/3 474~477は1/2)	290
第278図	表採土器実測図. 2 (1/2)	291
第279図	表採土器実測図. 3 (1/4)	292
第280図	土製円盤実測図. 1 (1/3)	293
第281図	土製円盤実測図. 2 (1/3)	294
第282図	土製円盤実測図. 3 (1/3)	295
第283図	土製円盤実測図. 4 (1/3)	296

第284図 土製円盤実測図.5 (1/3)	297
第285図 土製円盤実測図.6 (1/3)	298
第286図 1号土坑出土土器実測図 (1/3)	300
第287図 7・8号土坑実測図 (1/30)	301
第288図 7号土坑出土土器実測図 (1/3)	302
第289図 8号土坑出土土器実測図 (1/3)	303
第290図 1～3号土壙墓実測図 (1/30)	304
第291図 2号土壙墓出土土器実測図 (1/3)	305
第292図 包含層出土弥生土器実測図 (1/3)	305
第293図 中村石丸A遺跡遺構全体図 (1/80)	307
第294図 中村石丸A遺跡出土縄紋土器・石器実測図 (1/2)	308
第295図 中村石丸A遺跡出土須恵器実測図.1 (1/3)	308
第296図 中村石丸A遺跡出土須恵器実測図.2 (1/4)	309
第297図 中村石丸A遺跡出土土器実測図 (1/4)	310
第298図 中村石丸A遺跡出土陶磁器実測図 (1/3)	311
第299図 中村石丸A遺跡全景 (北西から).....	312
第300図 5号土坑および1号甕棺墓における試料採集地点 (縮尺不統一).....	314
第301図 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成	320
第302図 土壌試料に残存する脂肪のステロール組成	320
第303図 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	321
第304図 土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関	321
第305図 12号竪穴住居跡炉跡周辺熱残留磁気分析用試料採集風景 (北西から).....	325
第306図 12号竪穴住居跡炉跡近傍焼土の残留磁気の方向	326
第307図 12号竪穴住居跡炉跡床面焼土の残留磁気の方向	326
第308図 10号竪穴住居跡炉跡近傍焼土の残留磁気の方向	327
第309図 9号竪穴住居跡炉跡近傍焼土の残留磁気の方向	327
第310図 中村石丸遺跡のデータと西南日本の過去2,000年間の地磁気永年変化曲線との比較	328
第311図 2号 (9～12号) 竪穴住居跡想像復原図 (1/15)	330
第312図 2号 (9～12号) 竪穴住居跡復原模型.1	331
第313図 2号 (9～12号) 竪穴住居跡復原模型.2	331
第314図 小池原上層式から鐘崎式までの波頂部(1～9)と胴部文様(10～16)の変遷模式図	336
第315図 中村石丸遺跡発掘調査風景 (北東から).....	344
第316図 黒峰尾10号墳と周辺地形 (図 1/2,000)	379

第317図	黒峰尾10号墳地形測量図 (1/200)	381
第318図	黒峰尾10号墳地山整形図 (1/200)	382
第319図	黒峰尾10号墳墳丘土層図 (1/60)	折り込み
第320図	黒峰尾10号墳閉塞石実測図 (1/60)	383
第321図	黒峰尾10号墳石室実測図 (1/60)	384
第322図	黒峰尾10号墳出土土器実測図 (1/3)	385
第323図	黒峰尾10号墳出土土製品・石製品実測図 (2/3)	386
第324図	黒峰尾10号墳発掘調査風景	388
付 図	中村石丸遺跡遺構配置図 (1/200)	

表 目 次

第1表	土壤試料の残存脂肪抽出量	319
第2表	土壤試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合	319
第3表	焼土の特徴と熱残留磁気測定用の定方位試料	323
第4表	残留磁気の平均方向と誤差の目安	324
第5表	縄紋土器観察表. 1	345
第6表	縄紋土器観察表. 2	346
第7表	縄紋土器観察表. 3	347
第8表	縄紋土器観察表. 4	348
第9表	縄紋土器観察表. 5	349
第10表	縄紋土器観察表. 6	350
第11表	縄紋土器観察表. 7	351
第12表	縄紋土器観察表. 8	352
第13表	縄紋土器観察表. 9	353
第14表	縄紋土器観察表. 10	354
第15表	縄紋土器観察表. 11	355
第16表	縄紋土器観察表. 12	356
第17表	縄紋土器観察表. 13	357
第18表	縄紋土器観察表. 14	358
第19表	縄紋土器観察表. 15	359
第20表	縄紋土器観察表. 16	360
第21表	縄紋土器観察表. 17	361

第22表	繩紋土器觀察表. 18	362
第23表	繩紋土器觀察表. 19	363
第24表	繩紋土器觀察表. 20	364
第25表	繩紋土器觀察表. 21	365
第26表	石器觀察表. 1	365
第27表	石器觀察表. 2	366
第28表	石器觀察表. 3	367
第29表	石器觀察表. 4	368
第30表	石器觀察表. 5	369
第31表	石器觀察表. 6	370
第32表	石器觀察表. 7	371
第33表	石器觀察表. 8	372
第34表	土製円盤觀察表. 1	372
第35表	土製円盤觀察表. 2	373
第36表	土製円盤觀察表. 3	374
第37表	土製円盤觀察表. 4	375
第38表	土製円盤觀察表. 5	376
第39表	弥生土器觀察表. 1	377
第40表	弥生土器觀察表. 2	377

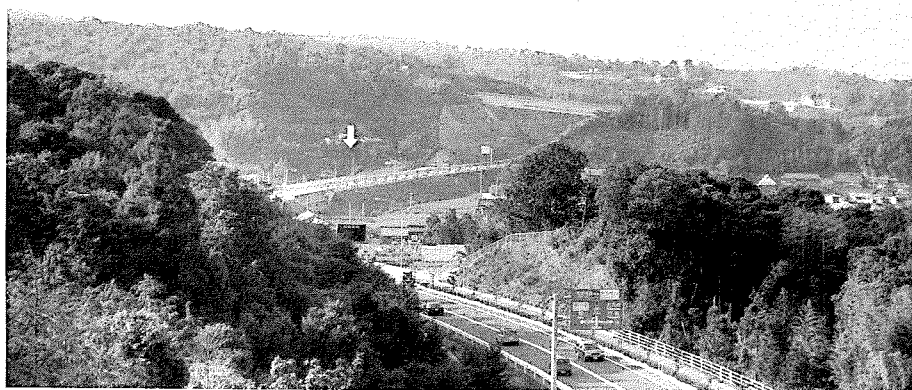
I はじめに

1. 調査の経緯と組織

一般国道10号線のバイパスである椎田道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に至る経緯については、『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集「辻垣ヲサマル遺跡」(1993年)を参照されたい。

中村石丸遺跡の発掘調査は、昭和63(1988)年7月23・24日に行なわれた試掘調査の成果に基づき、建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所と適宜協議しながら、同年8月16日から12月20日までの約4カ月間に亘って実施した。当初、調査期間として3カ月間を予定していたが、遺構検出の難しさと予想を上回る出土遺物量の多さに手間取り、1カ月間の延長はやむを得ない状況であった。

著しい削平により遺跡の遺存状態は必ずしも良好ではなかったが、様々な形態とサイズの竪穴住居跡が検出され、またそれらの遺構から出土する遺物量が膨大であること、さらにはわずかな弥生時代の遺構と遺物を除いてほとんどが縄紋時代後期に限定されるといった様々な特徴、そして赤色顔料が塗布された異形高坏の出土等、調査開始当初より遺跡の重要性が大いに注目されていた。そこで、渡辺誠先生(名古屋大学教授)・泉拓良先生(奈良大学教授)等の指導を受けつつ、10月18日に新聞発表を行なった。また、10月18・19日には第6回九州縄紋研究会を緊急に開催して、九州をはじめ近畿・中国・四国地域の多くの研究者にも様々な助言を賜わった。11月26日に実施した現地説明会では、300人を越える地域住民の参加で大盛会となり、多くの人に遺跡の重要性を知っていただくこともできた。



第1図 椎田道路開通後の中村石丸遺跡(南東から 1995年11月撮影)

その結果、椎田道路建設に伴い消滅する運命にあった中村石丸遺跡は、北九州国道工事事務所の協力によりピットを除いた各種遺構に真砂土が入れられ、調査区内については盛り土をした上で道路建設工事が実施され、実際には目にすることができないながらも、現在供用されている椎田道路の下にはほぼ完全に保存された。また、9～12号竪穴住居跡については本報告においても述べているように、1軒の大きな竪穴住居跡（調査時点では2号竪穴住居跡）としての可能性も存在しており、やはり北九州国道事務所の協力を得て1/10の模型を作成して記録保存を試みている。

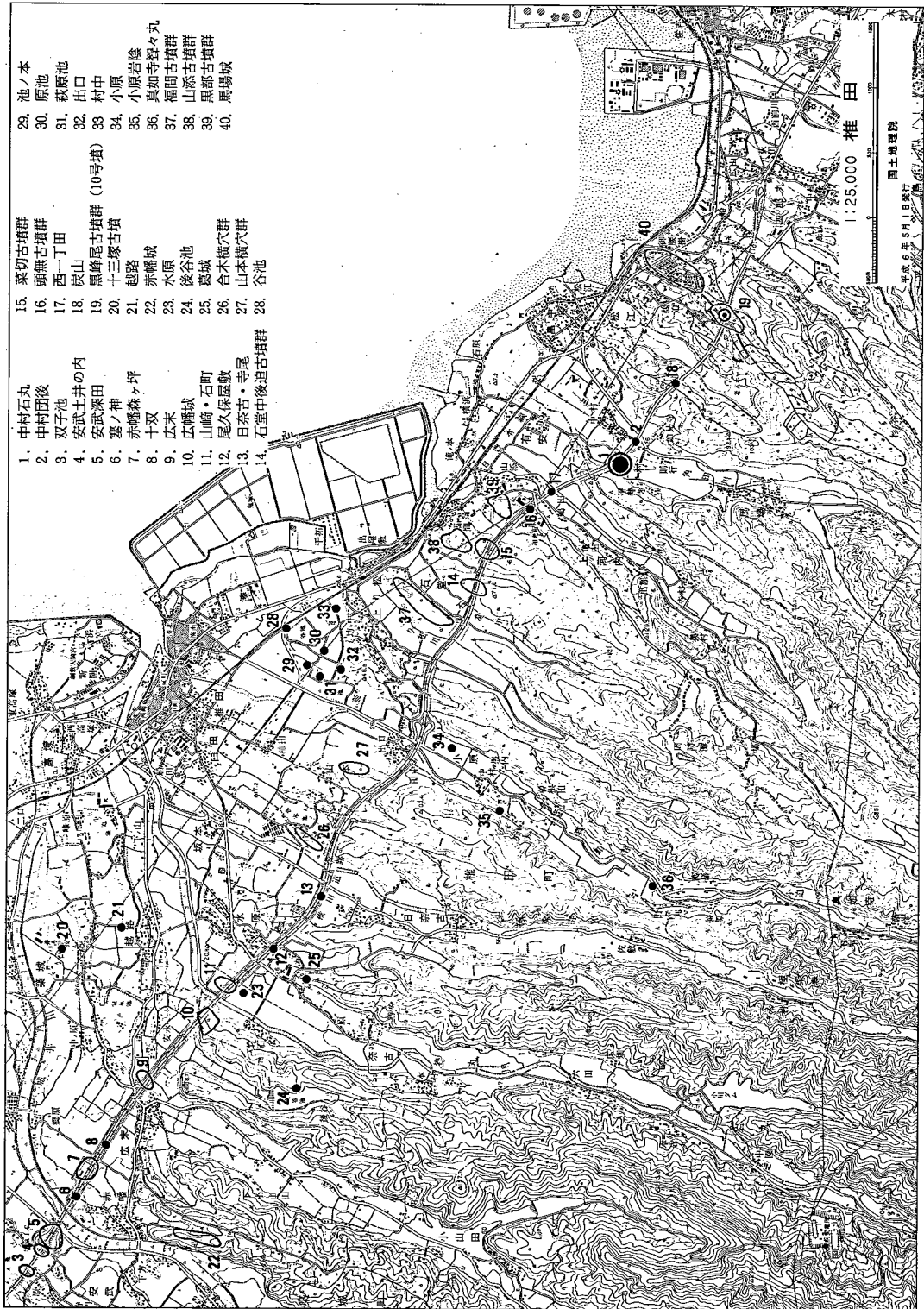
昭和63年度の発掘調査および平成7年度の報告書作成に関する組織と関係者は以下の通りである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	昭和63年度	平成7年度
所長	高橋松男	大内英吉郎
副所長	竹中幸生	高崎寿男
建設専門官	古賀秀登	安部純弘
工務課長	衛藤恒利	中川博勝
工務係長	諏訪憲二	徳重栄紀
調査課長	久良木 裕	田中光助
調査係長	田中敏則	竹下卓宏
建設技官	池田稔浩	田邊 稔
建設監督官	桃坂 繁	児玉敏幸

福岡県教育委員会

	昭和63年度	平成7年度
教育長	竹井 宏	光安常喜
教育次長	大鶴英雄	松枝 功
指導第二部長	大平岩男	丸林茂夫
文化課長	葉石 勲	松尾正俊
参事兼文化財保護室長		柳田康雄
課長補佐	平 聖峯	元永浩士
技術補佐	宮小路賀宏	
参事補佐	柳田康雄	井上裕弘 橋口達也
庶務		
管理係長	池原脩二	柴田恭郎



第2図 中村石丸遺跡周辺の遺跡分布図 (1/5,000)

事務主査	和田健作	久保正志
主任主事	沢田俊夫	高田裕康
調査		
参事補佐兼調査班総括	柳田康雄（調査担当）	
技術主査	副島邦弘	
主任技師	飛野博文 緒方 泉	水ノ江和同（報告書担当）
技師	水ノ江和同（調査担当）	

発掘調査期間中の現地においては、福岡県文化財保護指導委員（京築教育事務所管内担当）の一川淳江・川本義継・宮本工・濱島三司先生をはじめ、以下の諸先生より多大な御教示・御助言を賜ったことを心からお礼申し上げます。

井上洋一 岡村道雄 小田富士雄 金子昌浩 武末純一 西谷 正
春成秀爾 宮本一夫 森 浩一 渡辺正気（五十音順 敬称略）

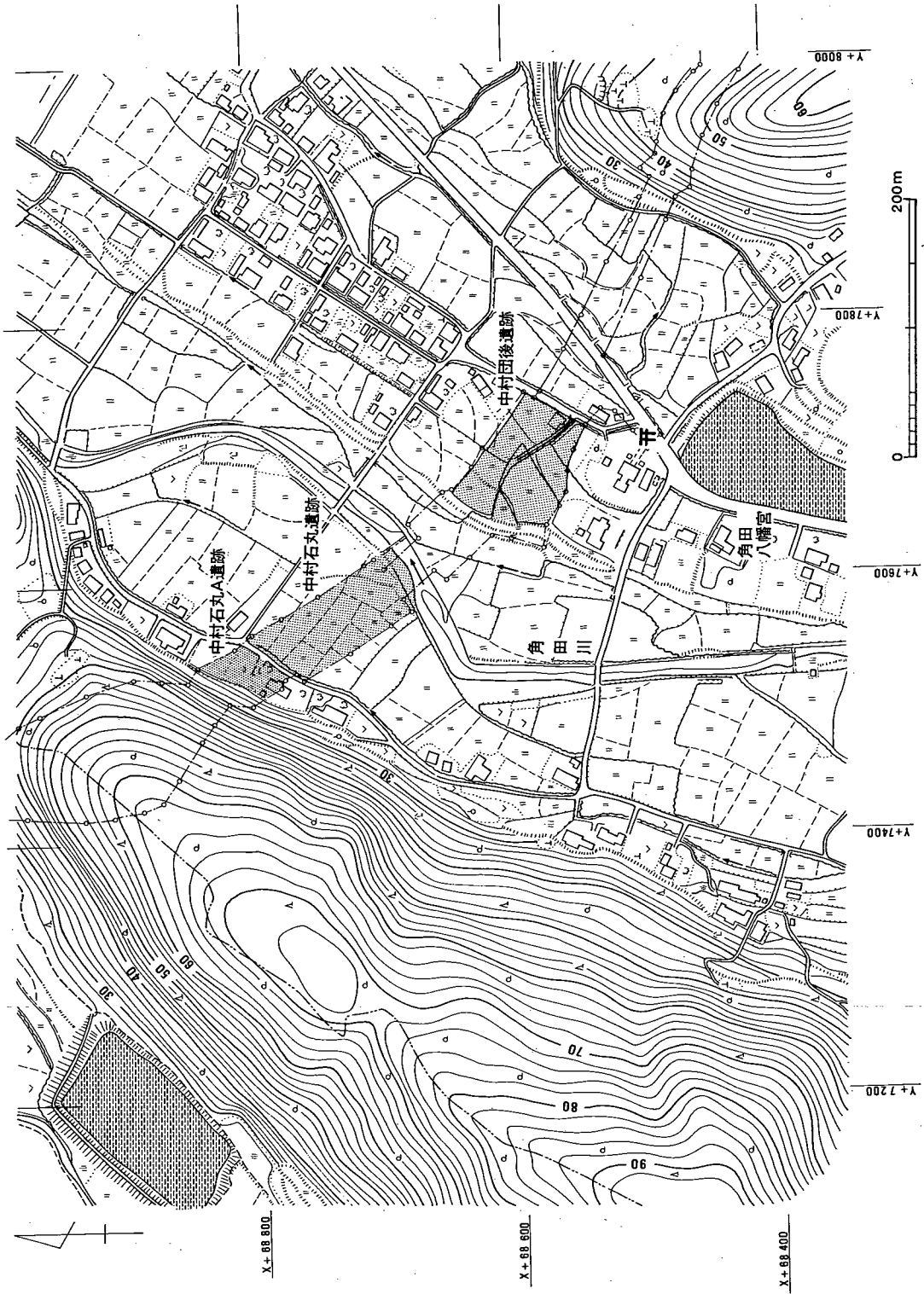
また、調査補助員として天石夏実・若林邦彦（当時同志社大学学生）が参加し、豊前市教育委員会（丹羽博氏）には多大な御協力・御配慮を賜りましたことを心からお礼申し上げます。

2. 位置と環境

中村石丸遺跡は、豊前市の最北端部である大字中村字石丸93-4・94-1・95-4番地外に所在する（第2図）。椎田町・豊前市を地理的な中心とした周防灘沿岸部一帯は、英彦山系から派生する細長い丘陵が八つ手状に広がり、それらに挟まれるような状態で狭くて沖積作用のあまり発達しない平野部が形成される。また、この丘陵は海岸部近くまで伸びるため海岸部にも広い平野部はなく、それ故に随所に干拓による新田開発が積極的に行なわれてきた。晴天で波も穏やかな日には、丘陵上はもちろん海岸部においても、山口県の宇部方面や黒曜石の原産地として有名な姫島が水平線上に臨める。

本遺跡（第3図）は、求菩提山系から流れ出る角田川と細長い丘陵下端部との間にある幅90m、標高13mの狭い微高地上（低位段丘）に立地する。角田川の水面標高は11.5mほどであり、増水や氾濫が本遺跡に及ぼした影響は少なくないと当初考えていた。しかし発掘調査の結果、本遺跡が洪水などによって埋没した痕跡は窺えず、また河床が岩盤であることや、水害の記録と記憶はないという地元古老の話などから、角田川自体は所々に蛇行が見られるものの基本的には現在の流路をそれほど変更していないということが想定される。

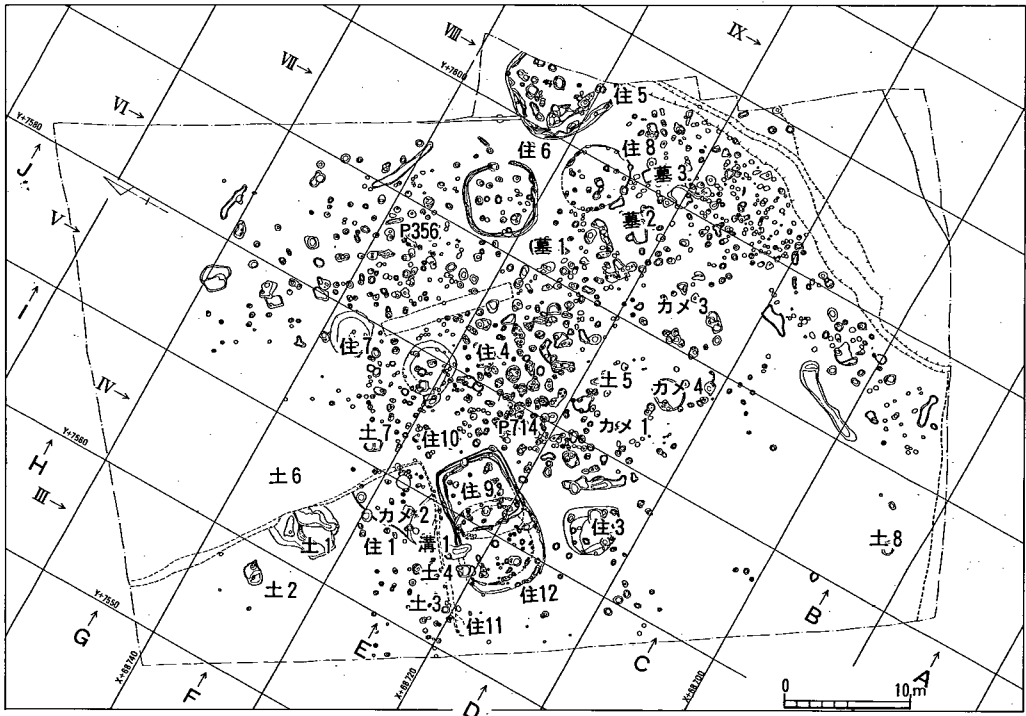
角田川左岸に立地する本遺跡は、わずかな弥生時代中期の遺構と遺物を除いて、他は膨大な遺物量の縄紋時代後期にほぼ占められるが、昭和63年4～6月と平成元年4・5月に調査され



第 3 図 中村石丸遺跡調査地点 (1/5,000)

た対岸の角田川右岸に立地する団後遺跡では、縄紋時代晩期・古墳時代初頭期・古墳時代後期・奈良時代・中世といった中村石丸遺跡とは時間的に共存しない遺構と遺物が確認されており、角田川を挟んで異なった時代の人々の暮らしを窺うことができる（副島邦弘・緒方泉編『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第3集 団後遺跡 西一丁田遺跡 炭山遺跡』福岡県教育委員会1994）。

従来、周防灘沿岸部の縄紋時代（第2図）といえば大分県中津市の森貝塚や楠野貝塚等が有名であるが、福岡県では新吉富村垂水遺跡、椎田町小原岩陰・石町遺跡、菊田町浄土院遺跡等で若干の遺物や遺構が確認されている程度で、遺跡数が少ないうえに遺跡自体の性格が判明した例もほとんどなく、縄紋時代遺跡の稀薄な地域とされてきた。しかし、近年の農業基盤整備事業や一般国道10号線のバイパス建設といった各種開発に伴い、この周防灘沿岸地域においても他地域と同様、あるいはむしろ多いくらいに縄紋時代遺跡が確認されつつある。例をあげれば、北九州市の下吉田遺跡（後期中葉）・勝円B遺跡（後期初頭）・貫川遺跡（晩期を中心に草創期～晩期）・菊水町遺跡（後期中葉）、豊津町の節丸西遺跡（後期中葉）、築城町の松丸遺跡（後期後葉）・大坪遺跡（草創期・早期）、椎田町の山崎・石町遺跡（後期中葉）・小原岩陰（前期）、豊前市の吉木遺跡（早期）・小石原泉遺跡（後期中葉）、大平村の原井三ッ江（後期後葉）・土佐井遺跡（後期後葉）・上唐原遺跡（後期中葉）、三光村の佐知遺跡（後期中葉）、



第4図 中村石丸遺跡遺構配置略図 (1/600)

中津市のボウガキ遺跡（後期中葉）、国東町の下堀田遺跡（後期前葉）等があり、いずれも纏まった遺構と遺物が確認され、当該地域の縄紋時代の様相は一気に解明されつつある。特に、必ずしも生活に適したとは考えがたい、低地で礫の多い後期中葉～後葉遺跡（小池原上層式～三万田式）の数は他の時期を圧倒しており、当該期における周防灘沿岸部の繁栄ぶりを如実に窺い知ることができる。

今回、小池原上層式から三万田式までの集落変遷を追うことのできる中村石丸遺跡の調査成果は、多くの遺跡で得られた情報を系統立てて位置づける格好の材料となるだけに、本報告が当該地域における今後の縄紋時代後期の研究と調査に与える影響は当然大きいものと考えられよう。

〔参考文献〕

- 伊崎俊秋編 1992『小原谷 I - 小原岩陰』椎田町教育委員会
伊崎俊秋編 1992『城井谷 I 松丸遺跡』築城町教育委員会
宇野慎敏編 1985『勝円遺跡（C地点）』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
小池史哲編 1989『原井三ッ江遺跡』大平村教育委員会
小池史哲編 1992『山崎遺跡 付、石町遺跡 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集』福岡県教育委員会
坂本嘉弘編 1979『石原貝塚・西和田貝塚』宇佐市・大分県教育委員会
佐藤浩司他編 1985『下吉田遺跡』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
嶋田正浩・藤本啓二編 1991『下堀田遺跡』国東町教育委員会
浄土院遺跡調査団編 1972『浄土院遺跡調査概報』
高橋 章編 1989『吉木遺跡』福岡県教育委員会
末永弥義編 1990『豊前国府および節丸西遺跡』豊津町教育委員会
高橋 章編 1990『土佐井地区遺跡』大平村教育委員会
豊前市編 1994『豊前市史』
前田義人編 1988～1995『貫川遺跡 1～8』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
村上久和編 1992『ボウガキ遺跡』三保の文化財を守る会・中津市教育委員会
山口義信編 1988『菊水町遺跡』（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
渡辺正気 1983『福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告』『古文化談叢』11

II 発掘調査の記録

1 調査の概要

中村石丸遺跡の発掘調査は、昭和63（1988）年8月16日から同年12月20日までの約4カ月間に亘って実施された。一般国道10号線椎田道路建設に伴う事前調査であることから、長さ約68m、幅約44mと北西-南東方向にやや細長い調査区になった。調査対象面積はほぼ3,000㎡であるが、調査区北側 $\frac{1}{3}$ は大きく削平されて遺構の遺存は悪く、また調査区南側 $\frac{1}{3}$ はもともと遺構が少なかったようで、遺構と遺物の大部分は調査区中央部に集中していた。遺跡の遺存状態自体は悪く、竪穴住居跡も深さ15~30cm程度しか残っていなかったが、遺物の出土量は極めて多くパンケースで300箱に及んだ。その大半は縄紋後期土器で、出土状況から竪穴住居が生活の場として使用されていた時のものではなく、住居廃絶後にゴミ捨て場的な用途として破損した土器や石器を遺棄したものと考えられる。

実際の調査では調査区の北西側から南東側へ掘り進め、竪穴住居跡11軒、土坑8基、甕棺墓4基、炉跡2基、土壇墓3基、溝1本の他に約1500基のピットを検出した（第4図）。遺構の大半は縄紋時代後期に属し、弥生時代の遺構としては7・8号土坑と1~3号土壇墓のほかに1号土壇の最上部から少量の弥生土器が多量の縄紋土器に混ざって出土している。調査区全体には薄く黒褐色の包含層が広がっていたため、この包含層の遺物については国土座標に沿って南北方向に10mごとにI~IXのローマ数字で、東西方向にはやはり10mごとにA~Hのアルファベットで、10m正方形のグリッドを設定して遺物の取り上げを実施した。この中でも、グリッドVF区・VIF区・VG区・VIG区の20m四方の400㎡については包含層が20cm程度と厚く、また特に遺物の出土が著しいことから竪穴住居跡の存在が想定され、2mグリッドを組んで精査を行なった結果、4号竪穴住居跡が検出された。

自然科学的な分析としては、12号竪穴住居跡の炉跡の周辺で厚く焼けた痕跡が床面において検出されたため熱残留磁気分析を、5号土坑および1号甕棺墓については残留脂肪酸分析を実施した。

なお、調査時点で付した遺構の名称と番号については、報告書作成作業の過程で下記のとおりに変更している。

SB-01→1号竪穴住居跡	SB-02→9~12号竪穴住居跡	SB-03→3号竪穴住居跡
SB-04→4号竪穴住居跡	SB-05→5号竪穴住居跡	SB-06→6号竪穴住居跡
SB-07→7号竪穴住居跡	SB-08→8号竪穴住居跡	SX-01→1号土坑
SX-02→2号土坑	SX-03→3号土坑	SX-04→4号土坑

SX-05 → 5号土坑

Pit-23 → 6号土坑

Pit-47 → 7号土坑

Pit-84 → 8号土坑

SD-01 → 1号溝

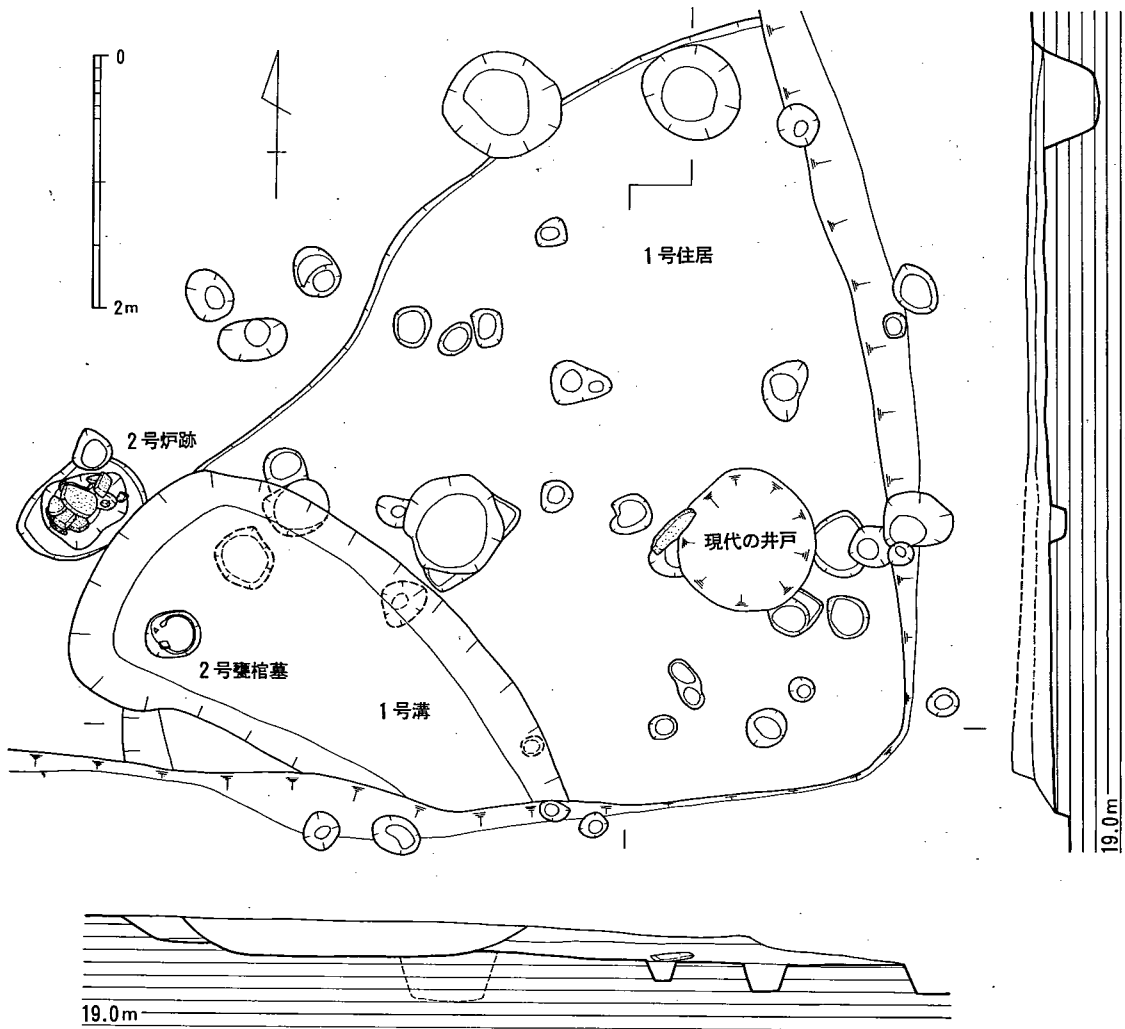
2. 縄紋時代の遺構と遺物

中村石丸遺跡において検出された縄紋時代の遺構には、竪穴住居跡11軒、土坑8基、甕棺墓4基、炉跡2基、溝1本の他に多数のピットからなるが、その大部分は調査面積約3,000㎡のうち、その中央部の1,500㎡の範囲に集中する（第4図）。遺物はこのほかに調査区全体に広がる黒褐色の包含層からも多量に出土しており、総遺物量パンケース300箱のうち、遺構からの出土は236箱になる。遺構数と遺構の遺存状態からすればその出土量は膨大で、当時の生活における土器への依存度（土器の製作および使用）はかなりのものであったことが推察される。以下、各遺構ごとに説明していきたい。

(1) 竪穴住居跡

中村石丸遺跡で検出された竪穴住居跡は11軒を数える。切り合う9～12号竪穴住居跡を除いて、他は調査区中央部付近に切り合うことなく満遍なく集中する。遺存状態はいずれも悪く壁高は15～20cm程度であるが、最も東側に位置する5号竪穴住居跡だけは40cmを測り比較的良好な遺存状態を見せる。基本的な構造は、住居跡の中央部に炉を有し、壁は垂直ではなく緩やかに開くように立ち上がる。支柱穴は4本で、支柱穴と支柱穴の間に補助柱を伴うものもある。おそらくいずれの住居跡においても貼り床を有していたと考えられるが、調査では明確な貼り床を検出することができなかった。竪穴住居跡からの遺物の出土は多いが、当時の住居内での生活の痕跡を窺える出土状態はほとんどなく、いずれも破損して使用できなくなった土器や石器が遺棄（投棄）されたような状態での出土であった。また、いずれの竪穴住居跡においても焼けた骨片が埋土に含まれていたが、最高でも1cm程度のサイズしか残っておらず、種の同定までには至っていない。なお、11軒とした竪穴住居跡のうち、1号竪穴住居跡については落ち込み状遺構の可能性が高く、8号竪穴住居跡については削平が著しいため詳細な構造や所属年代が不明である。

9～12号竪穴住居跡については複雑に切り合うが、切り合い関係は古い順に9号→10号→11号→12号、となる。これらの竪穴住居跡群は、当初1軒の横に長い大形竪穴住居跡と考えていたため2号竪穴住居跡としてすべての遺物の取り上げを行なったが、調査の最終段階およびその後の報告書作成過程において4軒の竪穴住居跡の切り合いという認識に至った。しかし後述するように、単に4軒の竪穴住居跡の切り合いとしては結論づけられない要素もあり、今後

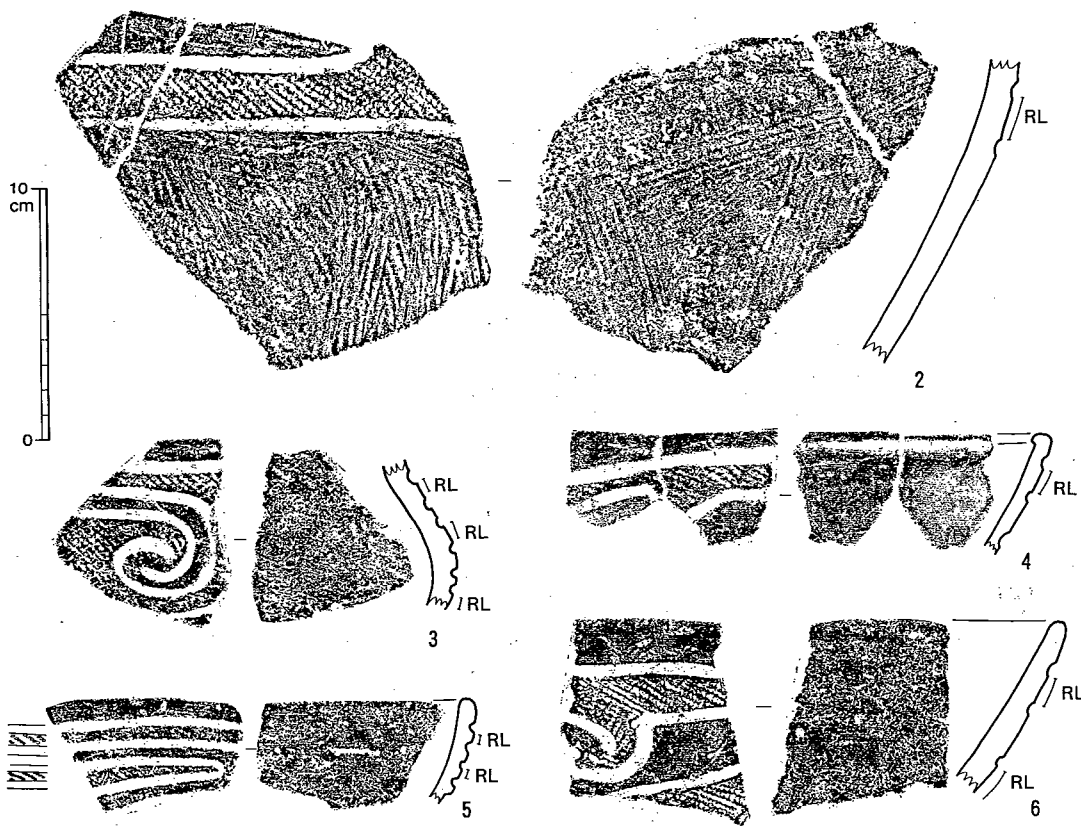
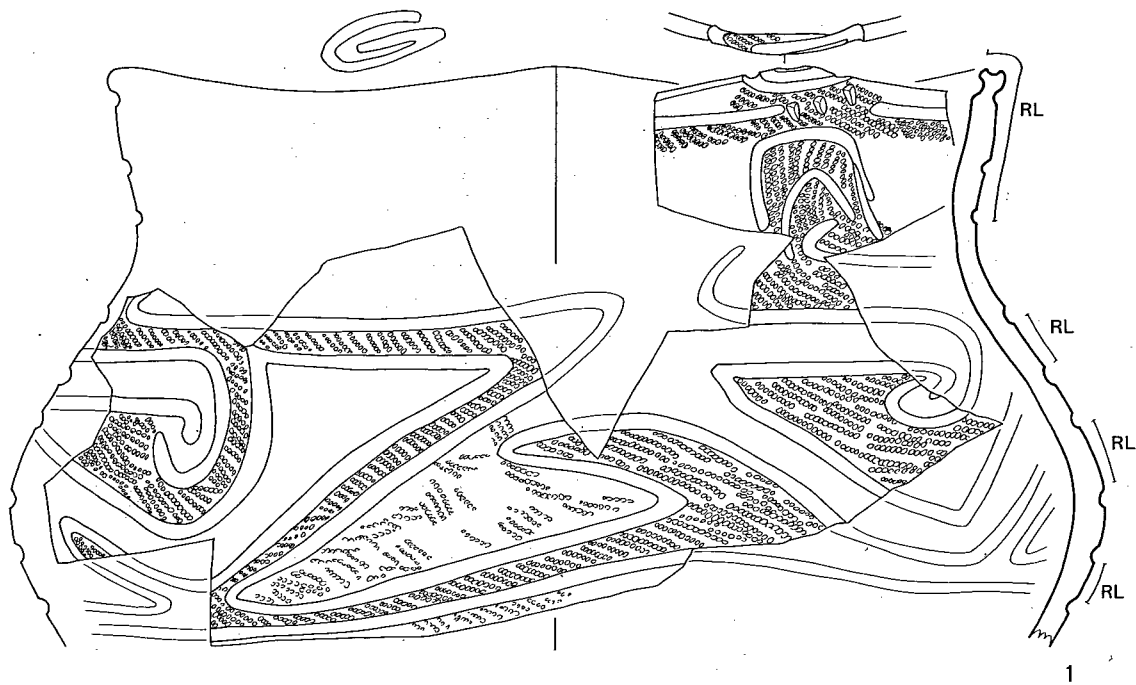


第5図 1号竪穴住居跡・1号溝実測図 (1/60)

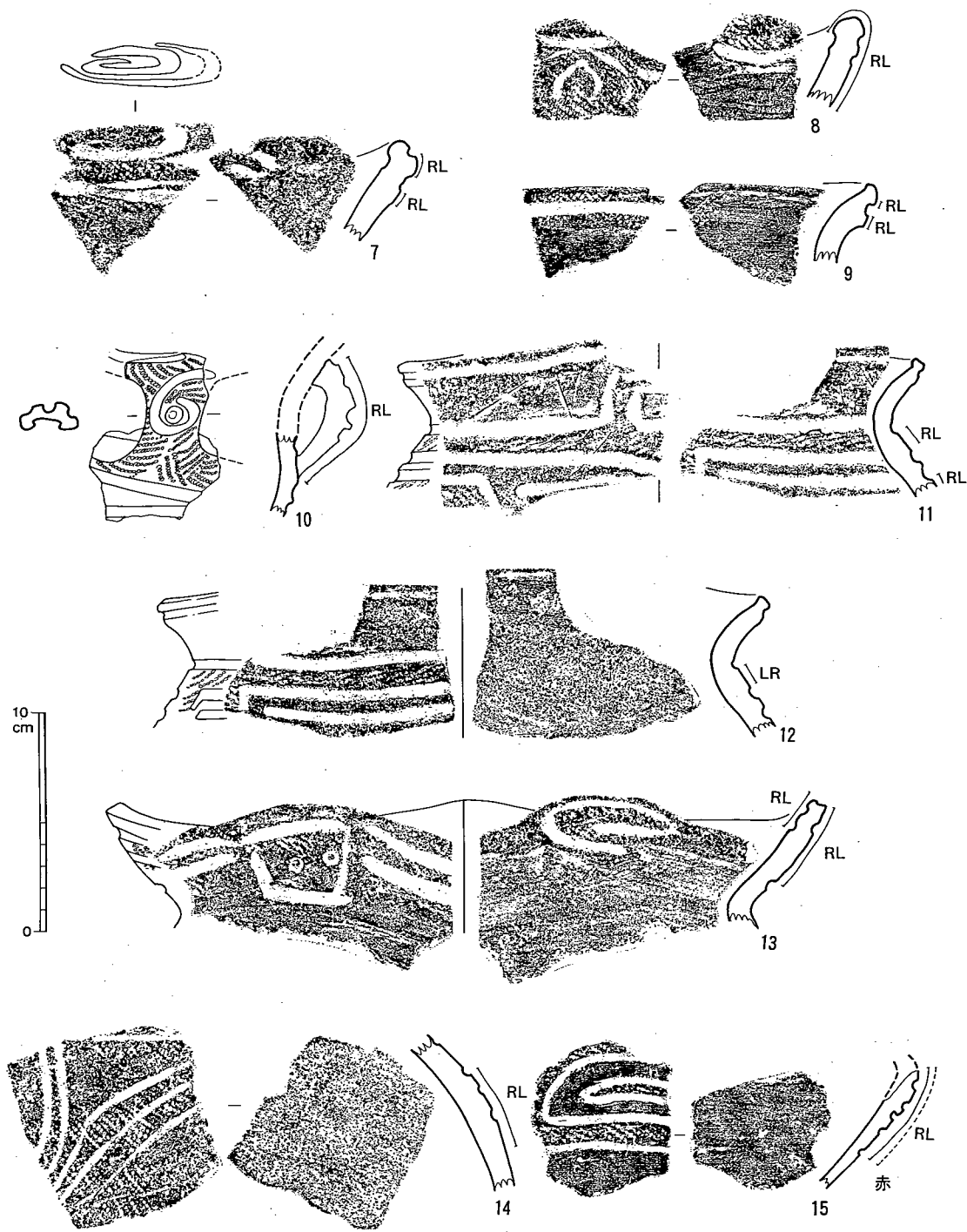
の課題としておきたい。

1号竪穴住居跡 (図版3 第5図)

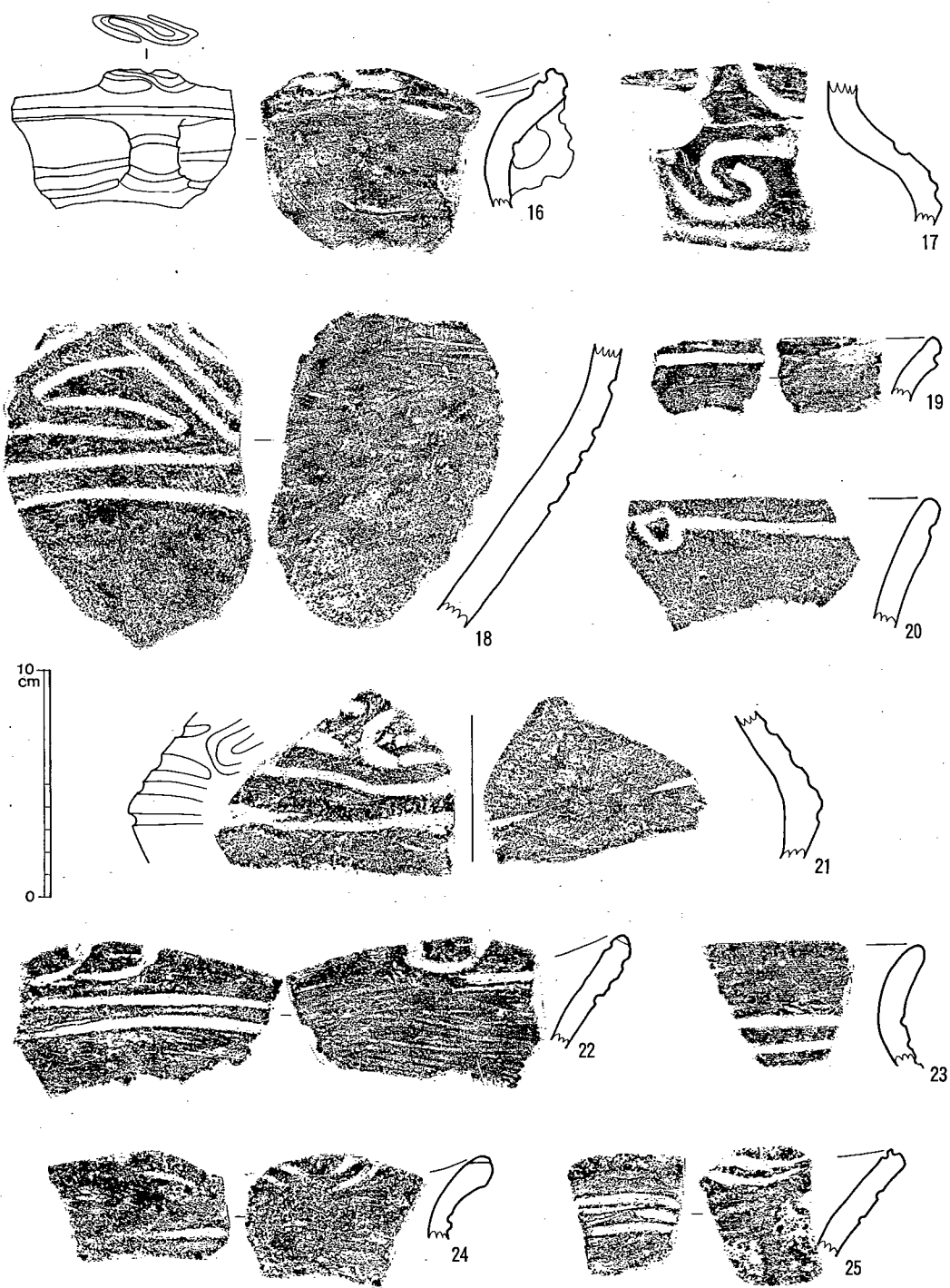
1号竪穴住居跡は調査区北西部のIV区に位置し、その大部分は削平され遺存していない。仮に全体が遺存していたとしても、位置関係から年代的に後出する9・10号竪穴住居跡に大きく切られていたと考えられる。1号溝や2号甕棺墓に南西隅を、現代の井戸に中央部東寄りを切られる。西端部では2号炉跡を切るという先後関係が認められる。平面プランについては円形か方形か明確に規定できない不定形を呈するが、南北および東西の方向にそれぞれ残存長



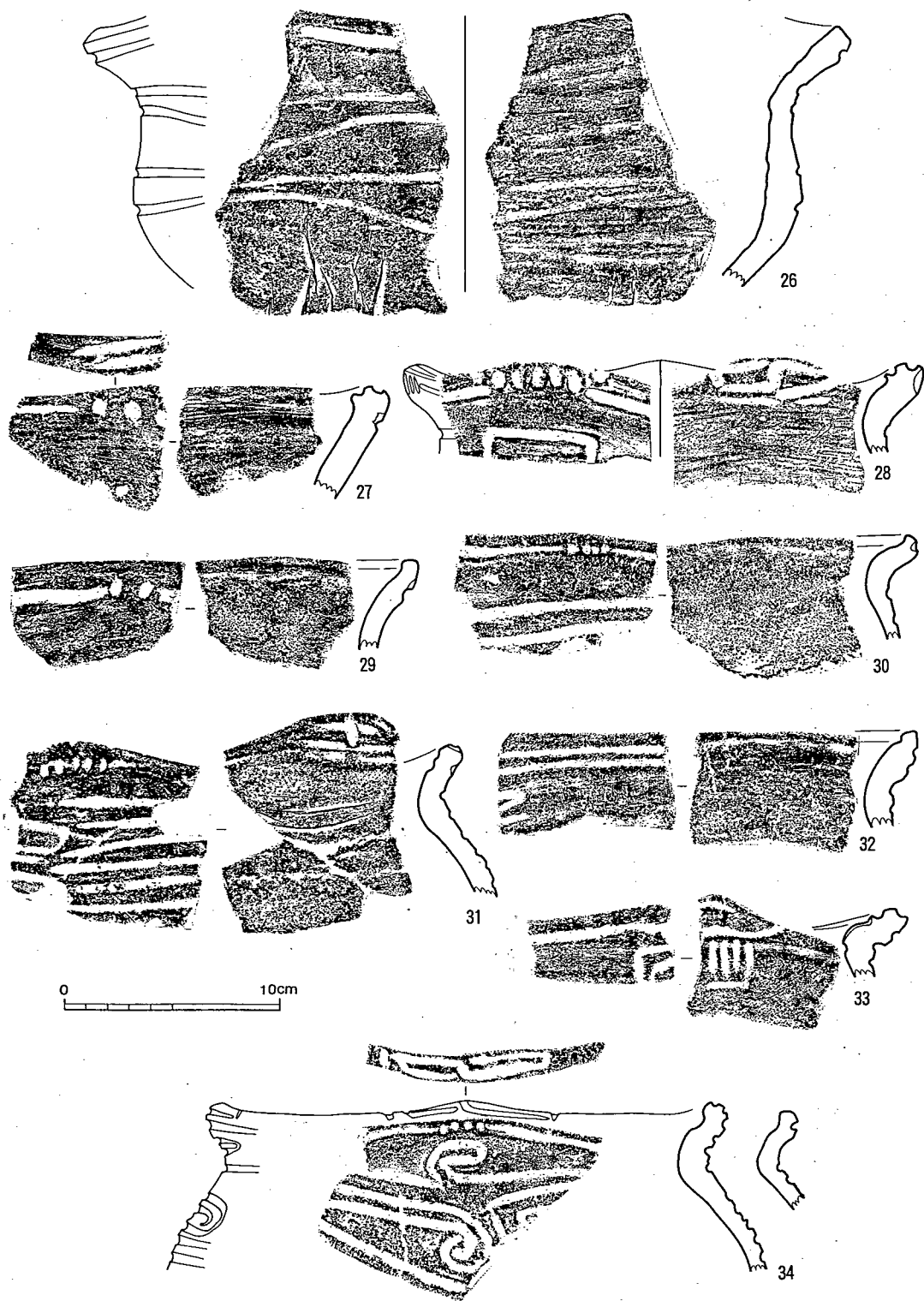
第 6 图 1号竖穴住居跡出土土器実測図.1 (1/3)



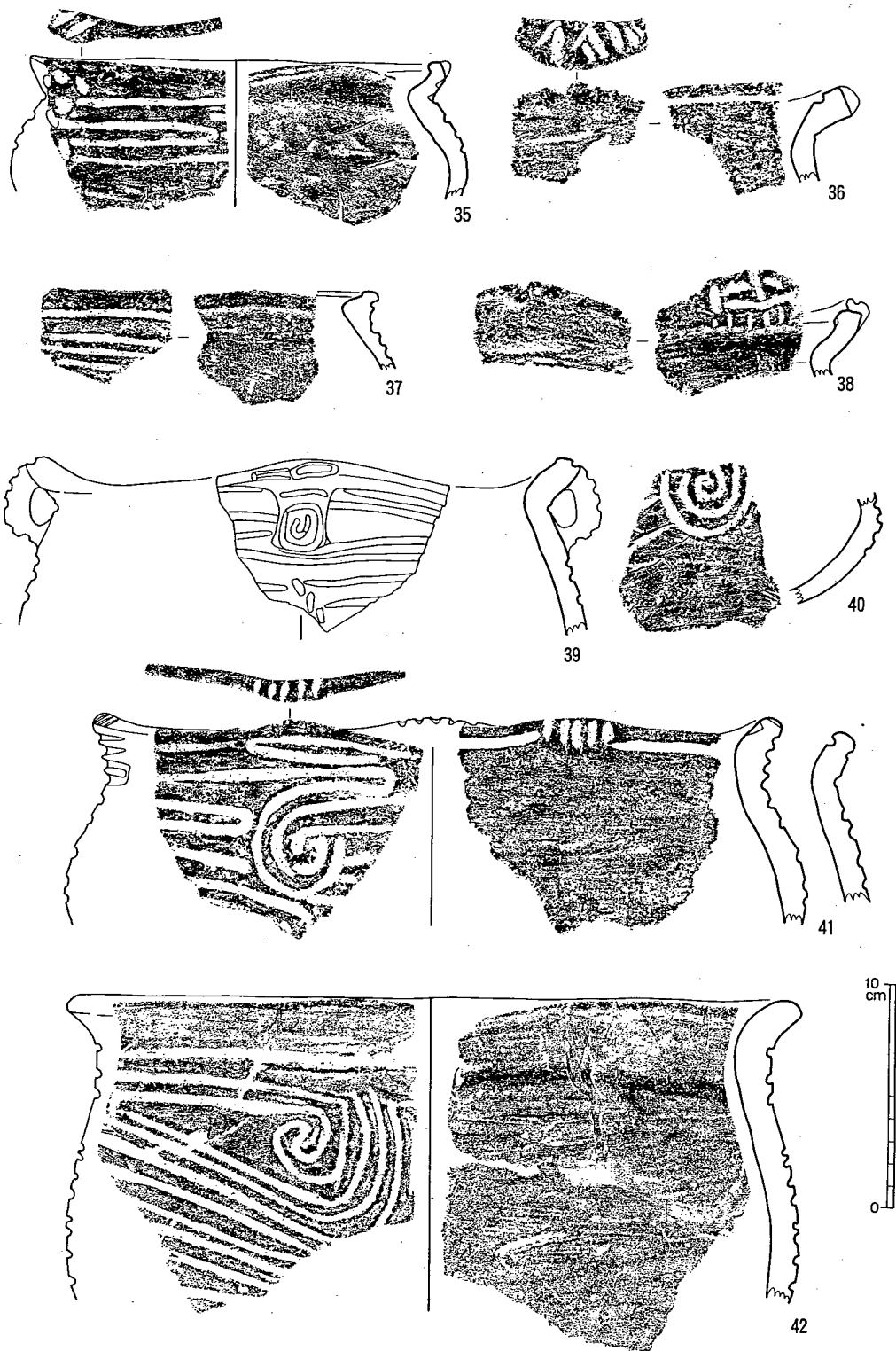
第 7 图 1 号竖穴住居迹出土土器实测图. 2 (1/3)



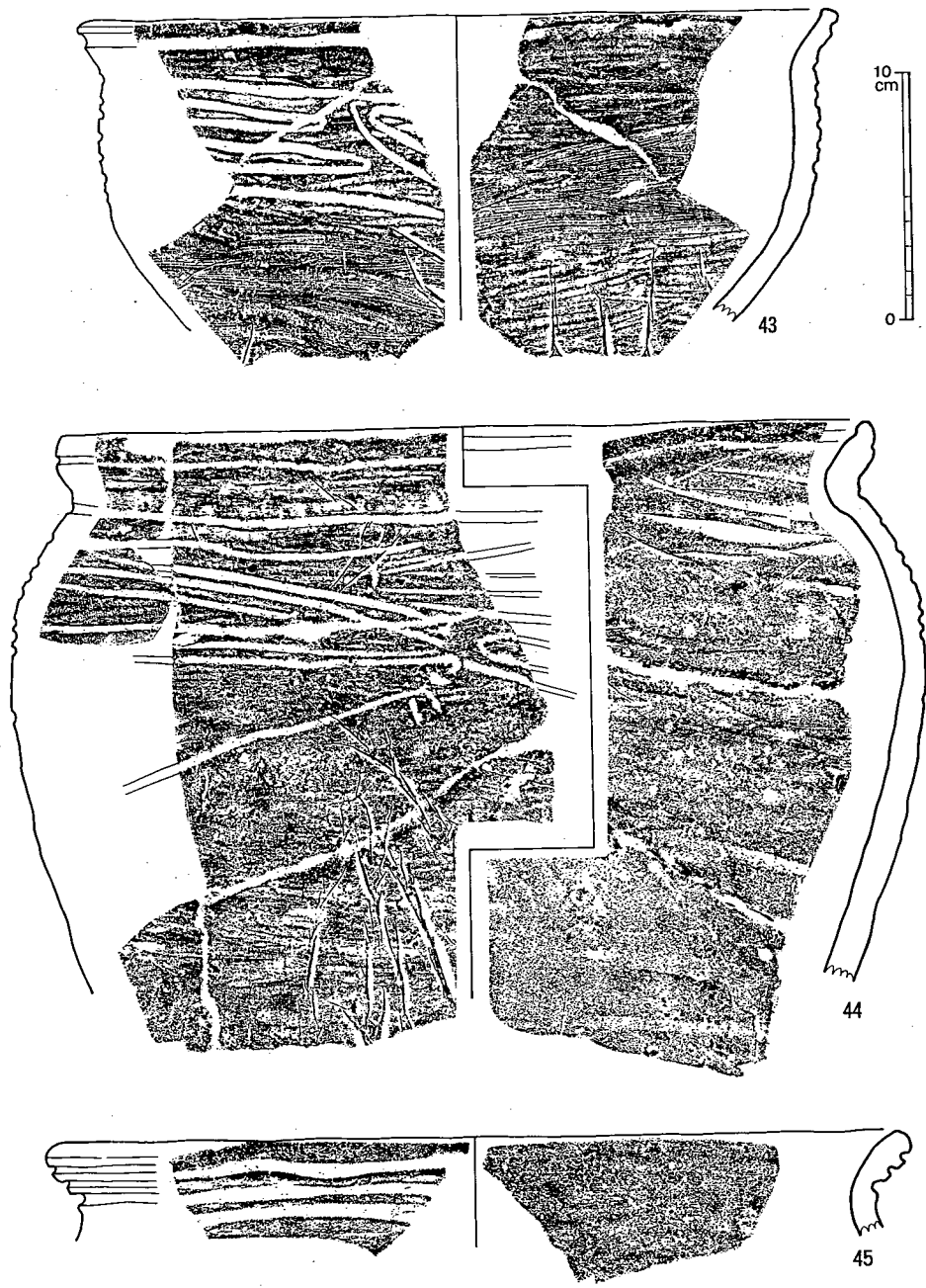
第 8 图 1 号竖穴住居迹出土土器实测图. 3 (1/3)



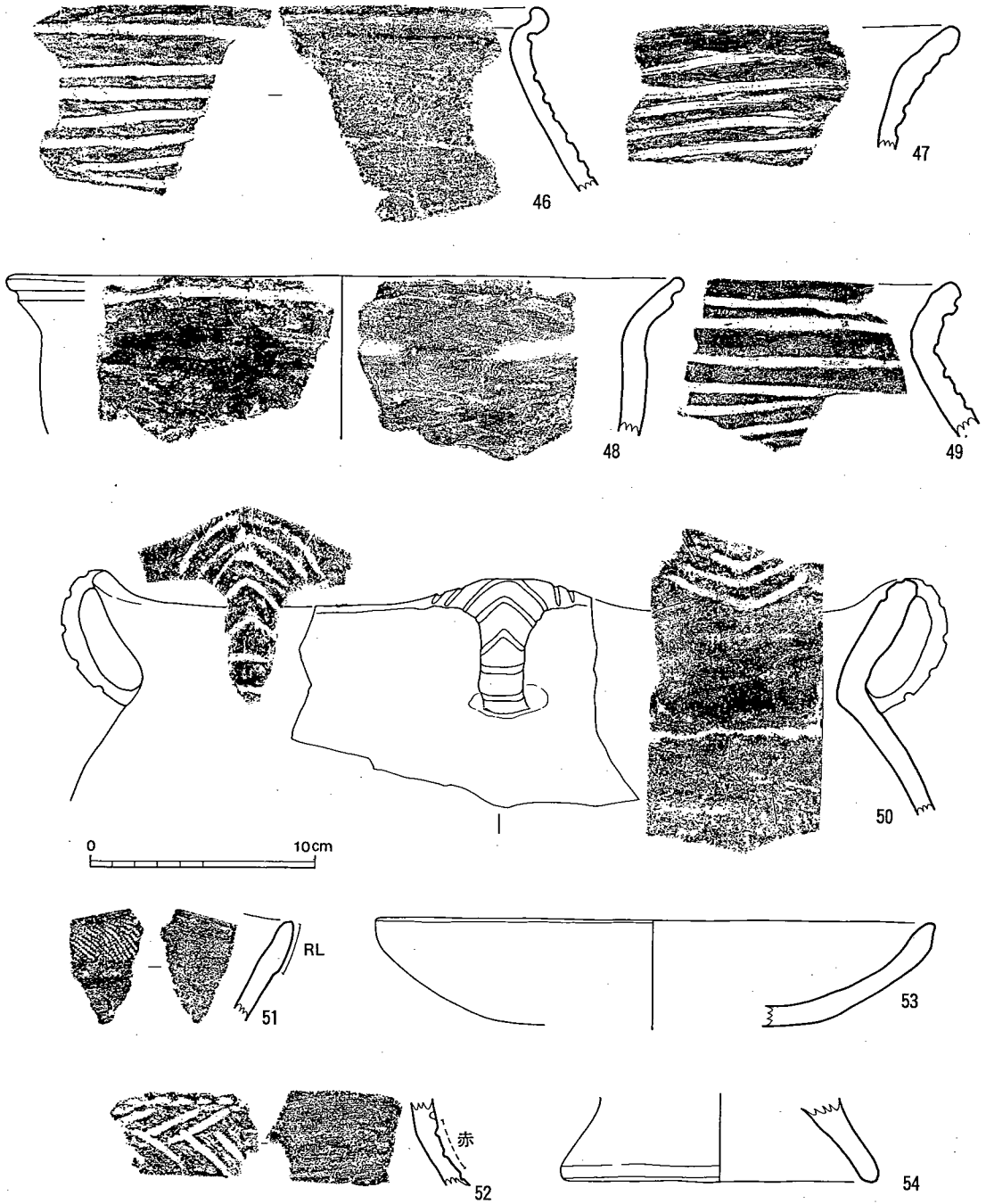
第 9 图 1 号竖穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)



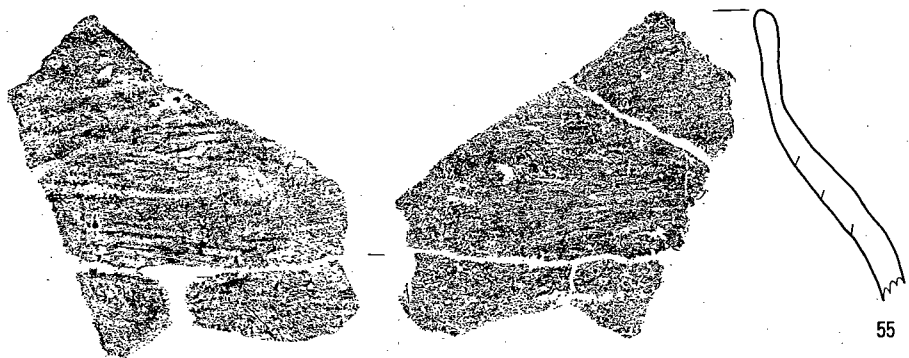
第 10 图 1号竖穴住居跡出土土器实测图.5 (1/3)



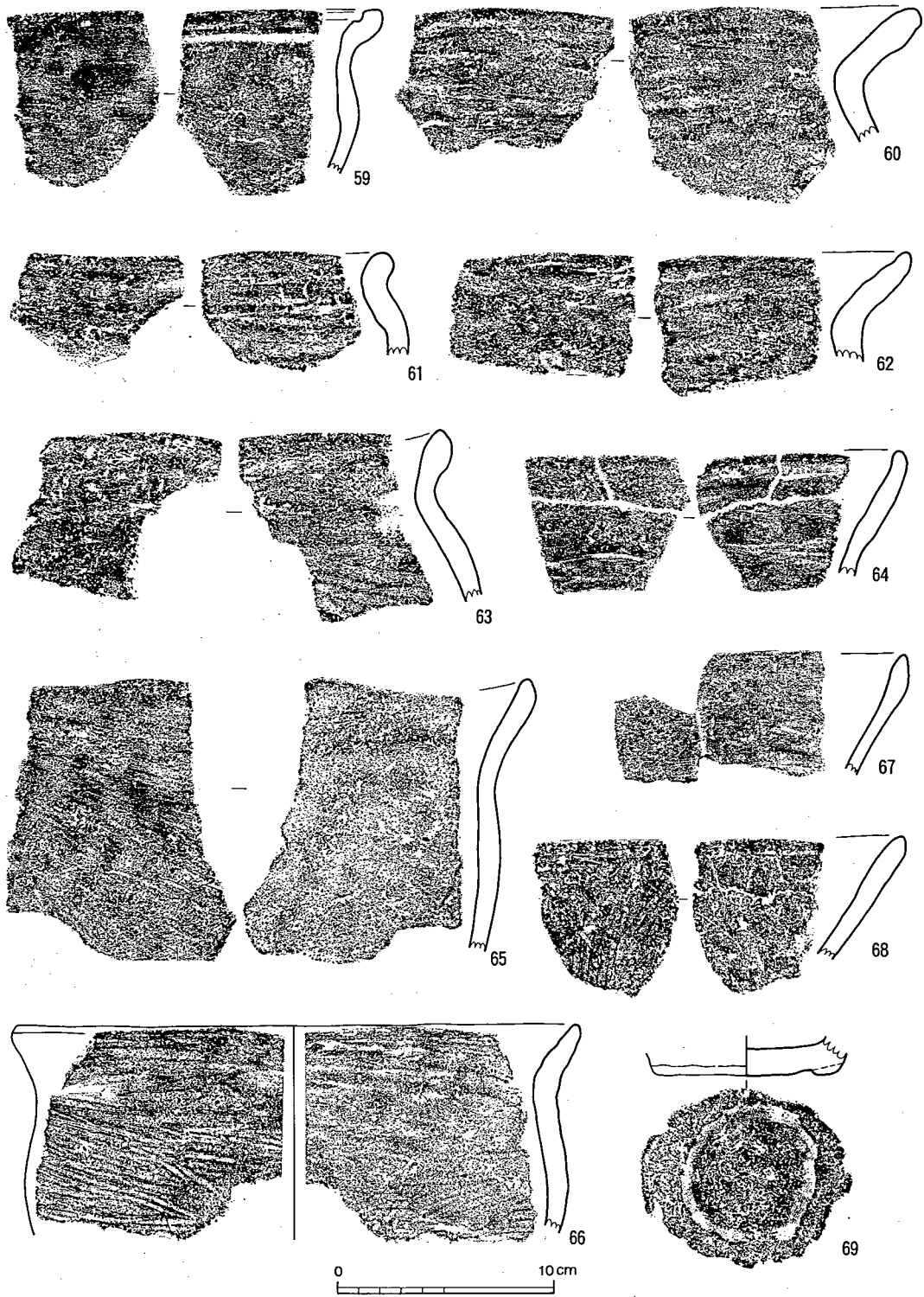
第 11 图 1 号竖穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)



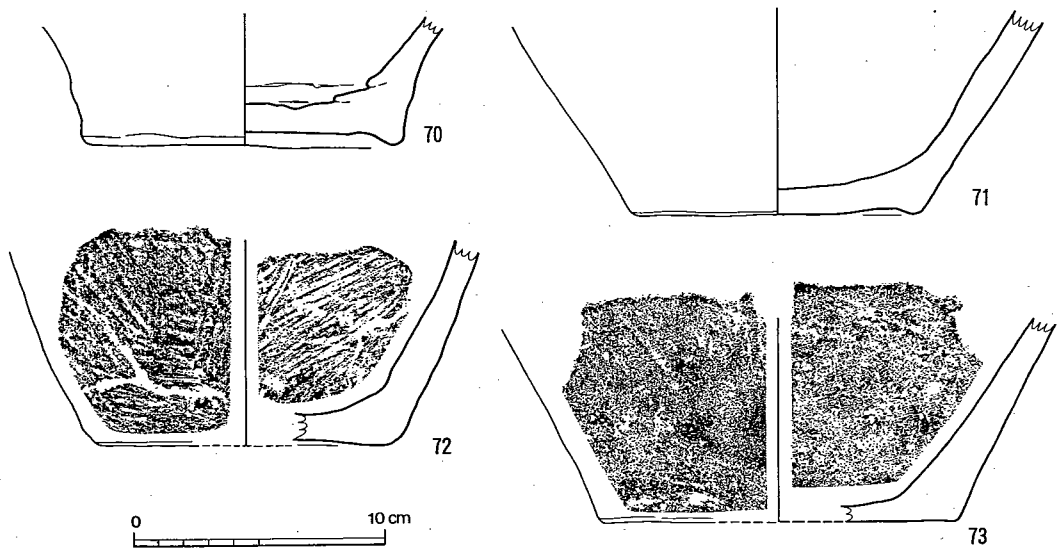
第 12 图 1 号竖穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)



第 13 图 1号竖穴住居跡出土土器实测图. 8 (1/3)



第 14 图 1 号竖穴住居跡出土土器实测图. 9 (1/3)

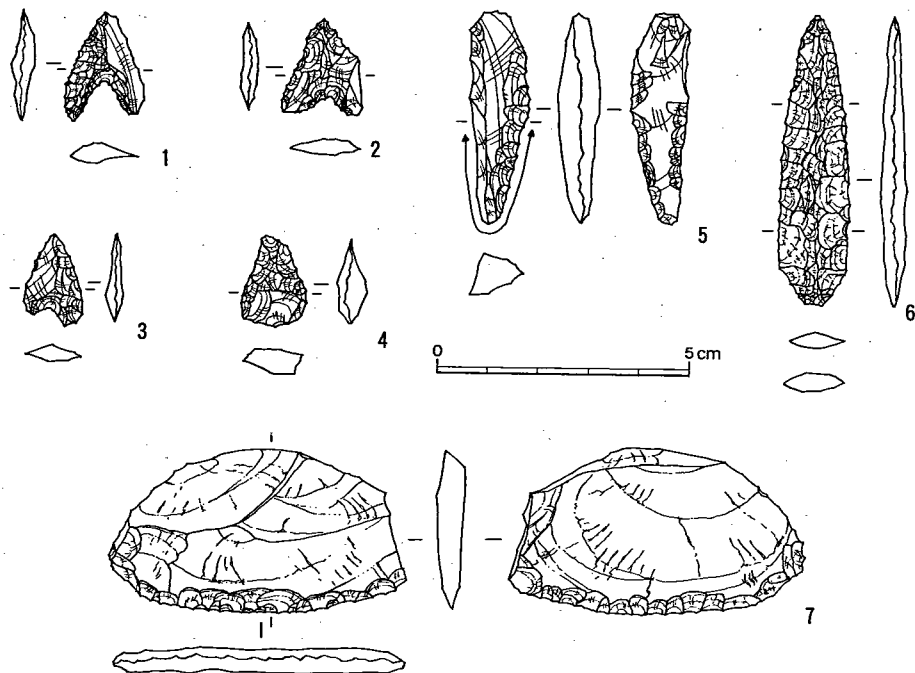


第 15 図 1号竪穴住居跡出土土器実測図. 10 (1/3)

6.3mと6.2mを測る。一見したところでは円形もしくは方形の竪穴住居跡が1/4ほどだけ残存しているように見えるが、仮にそれが正しいとした場合、径12m以上のかかなり大きな規模を有していたことになる。壁高は25cmを測るが、極めて緩やかに開くように立ち上がる。埋土は黒褐色土で貼り床は検出できていない。この住居跡については炉跡や支柱穴は確認されてなく、また壁の立ち上がりや平面プランから判断しても、おそらくは竪穴住居跡ではなく落ち込み状の遺構と考えられるが、遺物整理に際しての混乱を避けるため、取りあえず竪穴住居跡として位置づけた。遺物は局部的に集中することなく全体的に満遍なく散在するが、いずれも完形に復原されることはなく、破損品が遺棄されたような状態で出土した。

出土遺物量はパンケースにして11箱を数える。土器については小池原上層式とそれに後続する鐘崎式の前半代部分でほぼ占められる。ただし、第12図51・52・54のようにそれらに明らかに後出するものもごく少量含まれるが、これらについては量的な点から判断して混入と考えられよう。

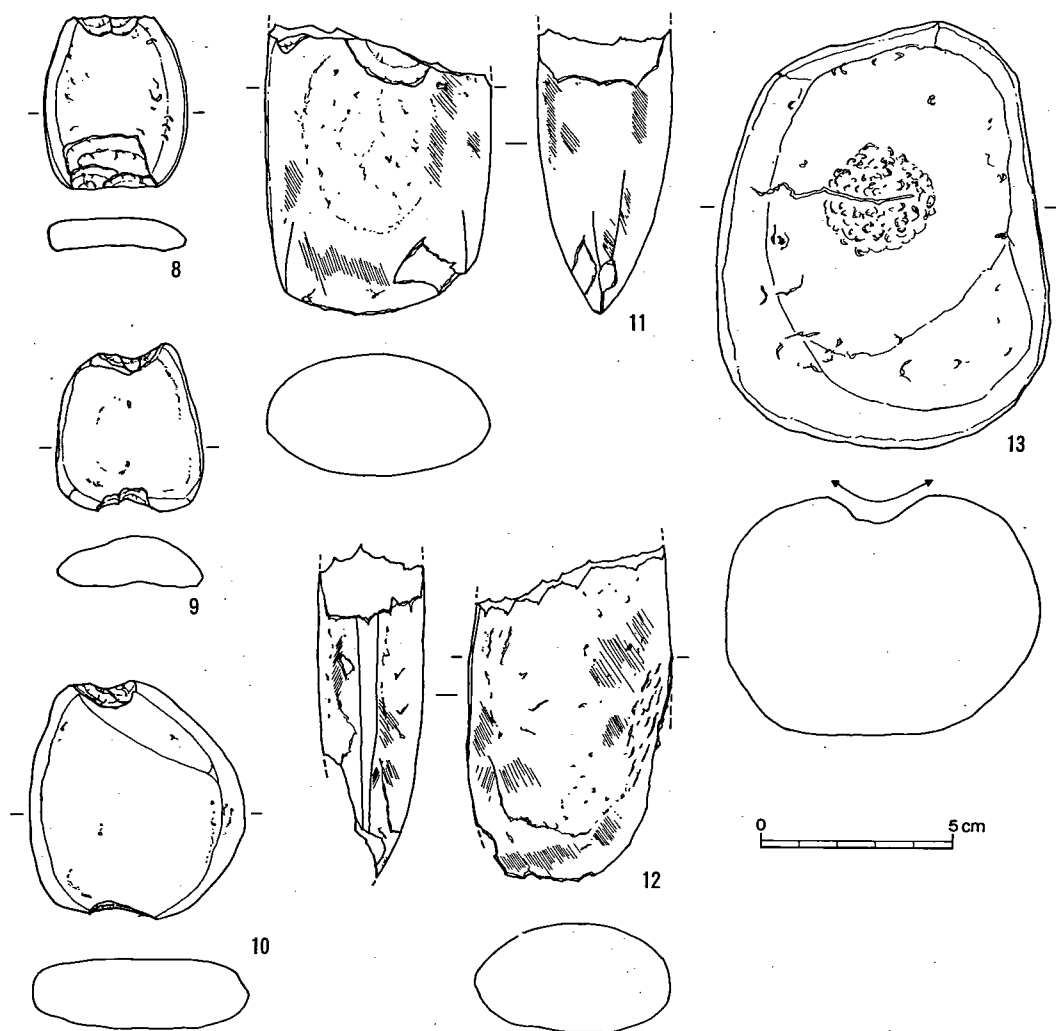
土器（第6～15図）土器は73点を図示した。前述したように、小池原上層式とそれに後続する鐘崎式の前半代部分でほぼ全体が占められる。小池原上層式は1～30・32・33までで、縄紋を有するものと有さないもの大きく2つに分かれ、後者については小池原上層式独特の太い沈線文による鉤手文が細線化・簡略化・小型化されるのが特徴である。前者についても、ボウル状の器形は例外として、大きな鉢形の場合は文様が丁寧に細かく施されるが、小さな場合は施文面積が狭くなるためかやはり文様の細線化・簡略化・小型化が窺える。縄紋はRLが主体的



第 16 図 1号竖穴住居跡出土石器実測図. 1 (2/3)

で、同一個体の11・12のみ LR が施される。縄紋と沈線文との先後関係はまちまちで、磨消縄紋があれば充填縄紋もあり、1のように磨消縄紋として縄紋を磨り消しているが完全に消しきれず痕跡的に縄紋が観察される資料もある。1の頸部には口縁の波頂部と胴部とを結ぶ文様が施されるが、この頸部文様内の縄紋は磨り消されない。波頂部には外面と内面の両側にかかるように渦巻文が施される。2の器面調整は一見して巻貝条痕文のように見えるが、あるいは二枚貝による条痕文であるかもしれない。4～6は鉢形を呈する。一般に小池原上層式の縄紋を有する有文土器の波頂部には、外面と内面にまたがるように渦巻文が施されるが、この渦巻文は次第に変化していき「U」字を二つ向かい合わせに組み合わせるようになる。15には赤色塗布が行なわれる。53は色調や器面の雰囲気からして小池原上層式に属するであろう。

31・34～49は鐘崎式である。しかし、縄紋が施される資料は見当たらない。小池原上層式と比較した場合、器高が低くなって文様帯が圧縮され、結果として頸部の狭小化や沈線文の細線化と多条化が鐘崎式の特徴となる。波頂部の渦巻文は「U」字を二つ組み合わせたものから、これを連続的に描いたような「8」字状になる。50～52・54は鐘崎式に後続するいわゆる北久根山式段階のものである。50は把手にのみ文様が施されるが、器形から深鉢形を呈する。54



第 17 図 1号竪穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/2)

は台付鉢もしくは台付皿の脚台部である。

55～73は無文土器と底部であるが、どれが小池原上層式に伴い、どれが鐘崎式に伴うのかを分けることは難しい。器面調整はナデが目立つが、条痕調整も少なくない。条痕文については巻貝のものが主体を成すと考えられるが、中には二枚貝によるものかと思われるものもある。有文土器と比較した場合、量的には無文土器が7割ほどを占める。

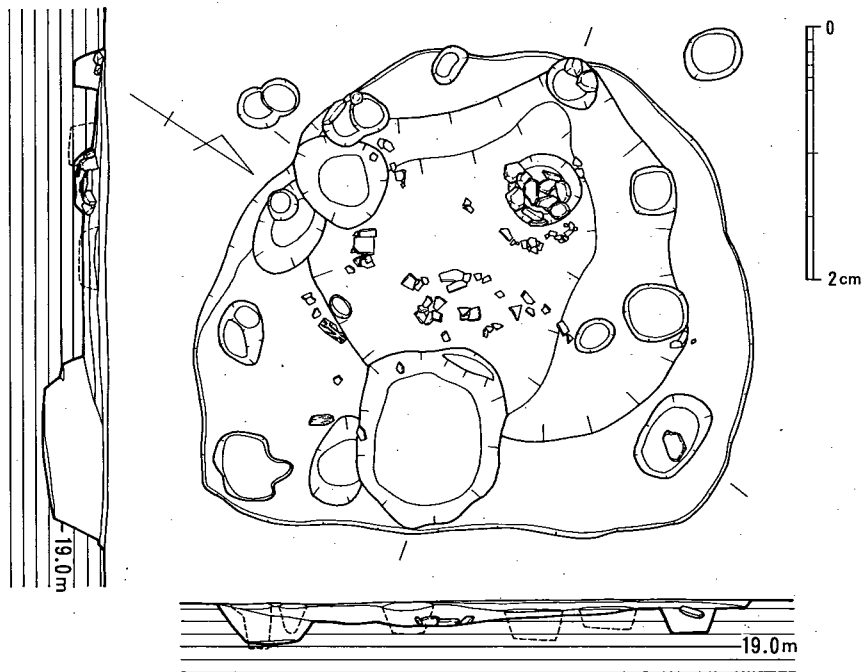
石器（第16・17図）石器は石鏃・石錐・スクレイパー・磨製石斧・石錘・くぼみ石と多彩。

第16図6の石鏃はあたかも縄紋草創期に見られる有舌尖頭器のような形態を呈しているが、かなり薄くて器面の風化もあまり進行しておらず、縄紋後期に属するものとして問題ないであろう。ここでは結晶片岩製の打製石斧を図示していないが、これは図示に耐えうるほどの資料がなかっただけで、小さな破片自体はかなり出土している。

土製円盤（第280～285図）土製円盤の出土は6点で、すべて図示した。このうち15は沈線文を施す有文土器の一部を転用したものである。

2号堅穴住居跡

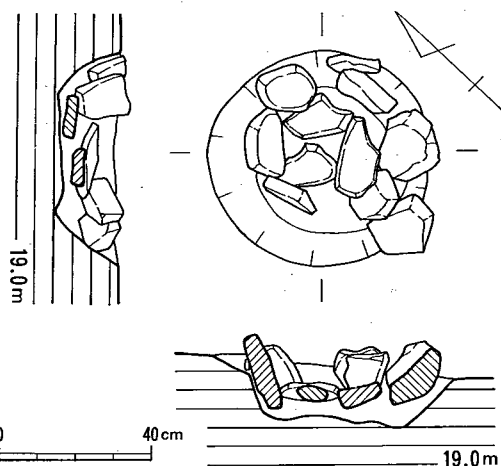
2号堅穴住居跡は当初1軒の大きな堅穴住居跡と想定していた遺構であったが、調査の最終段階および報告書作成作業の過程で4軒の堅穴住居跡の切り合いによるものという認識に至っている。しかし、いくつかの状況から単に4軒の切り合いという結論には収まりそうになく、今後課題を残す部分も少なくない。本報告では混乱を避けるため、2号を欠番として9～12号の4軒に分けて取り扱っているが、遺物自体に注記された遺構の名称と番号は調査時点での所見を尊重してすべて「2号」としている。なお「2号」堅穴住居跡では、包含層の場合かなり細かく分けけて遺物の取り上げを行ない、また床面出土の遺物はすべて出土地点を記録しているので、かなりの精度をもって9～12号のそれぞれの堅穴住居跡に帰属するものとして分類することができた。



第18図 3号堅穴住居跡実測図 (1/60)

3号竪穴住居跡 (図版4 第18・19図)

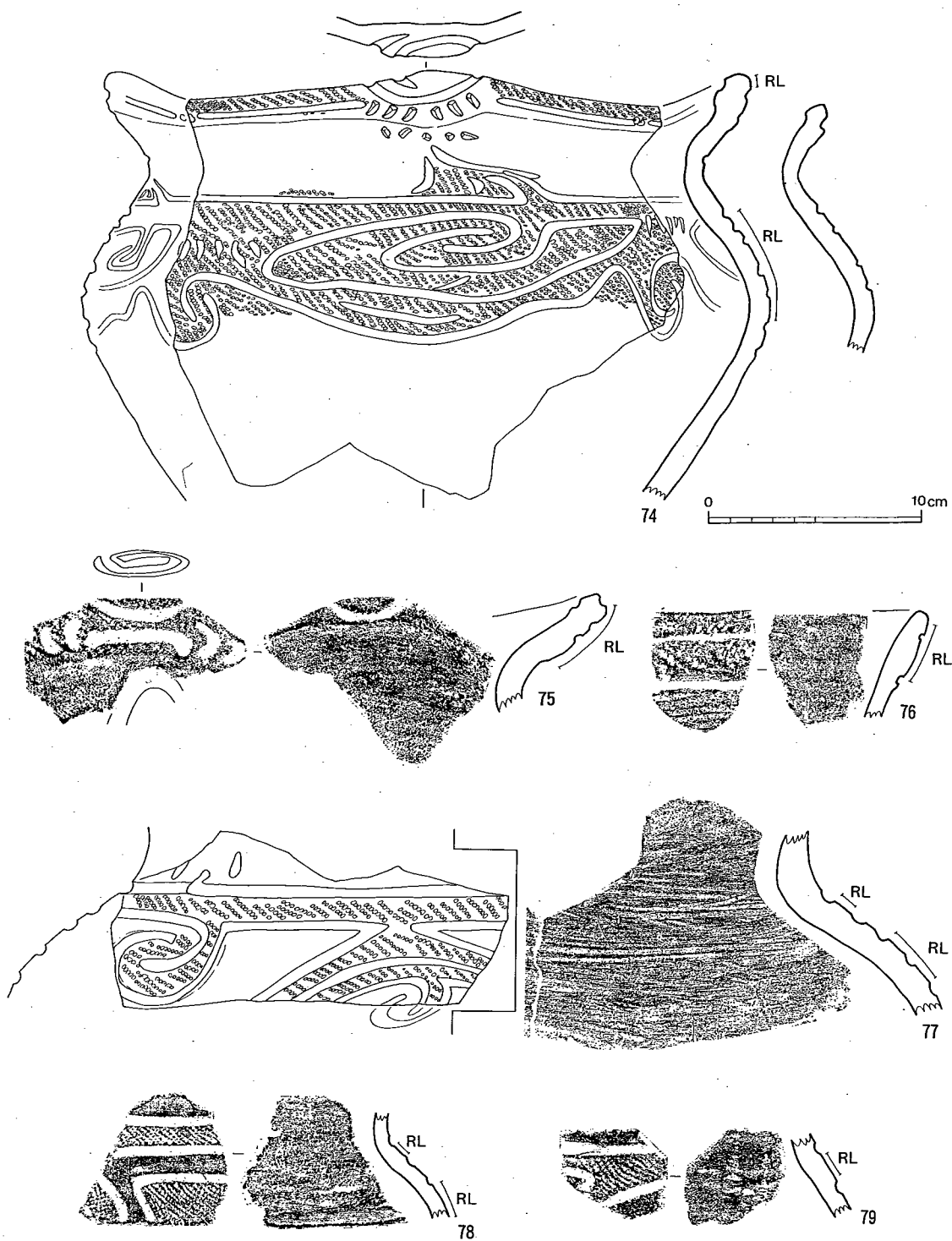
3号竪穴住居跡は調査区の南西部VD区に位置し、12号竪穴住居跡の南東2m、1号甕棺墓の南西5mに近接する。平面プランは4.3×4.2mの北東部が直線的になる円形で、深さは最高で20cmを測る。本住居跡全体の断面形態は緩やかに窪む程度の掘り鉢状を呈するだけで壁といえるものはなく、また貼り床も確実に検出できなかったため、当初は落ち込み状の遺構を想定していた。しかし、本住居跡の中央部からかなり西側に寄ったところで石組炉が検出されたこと



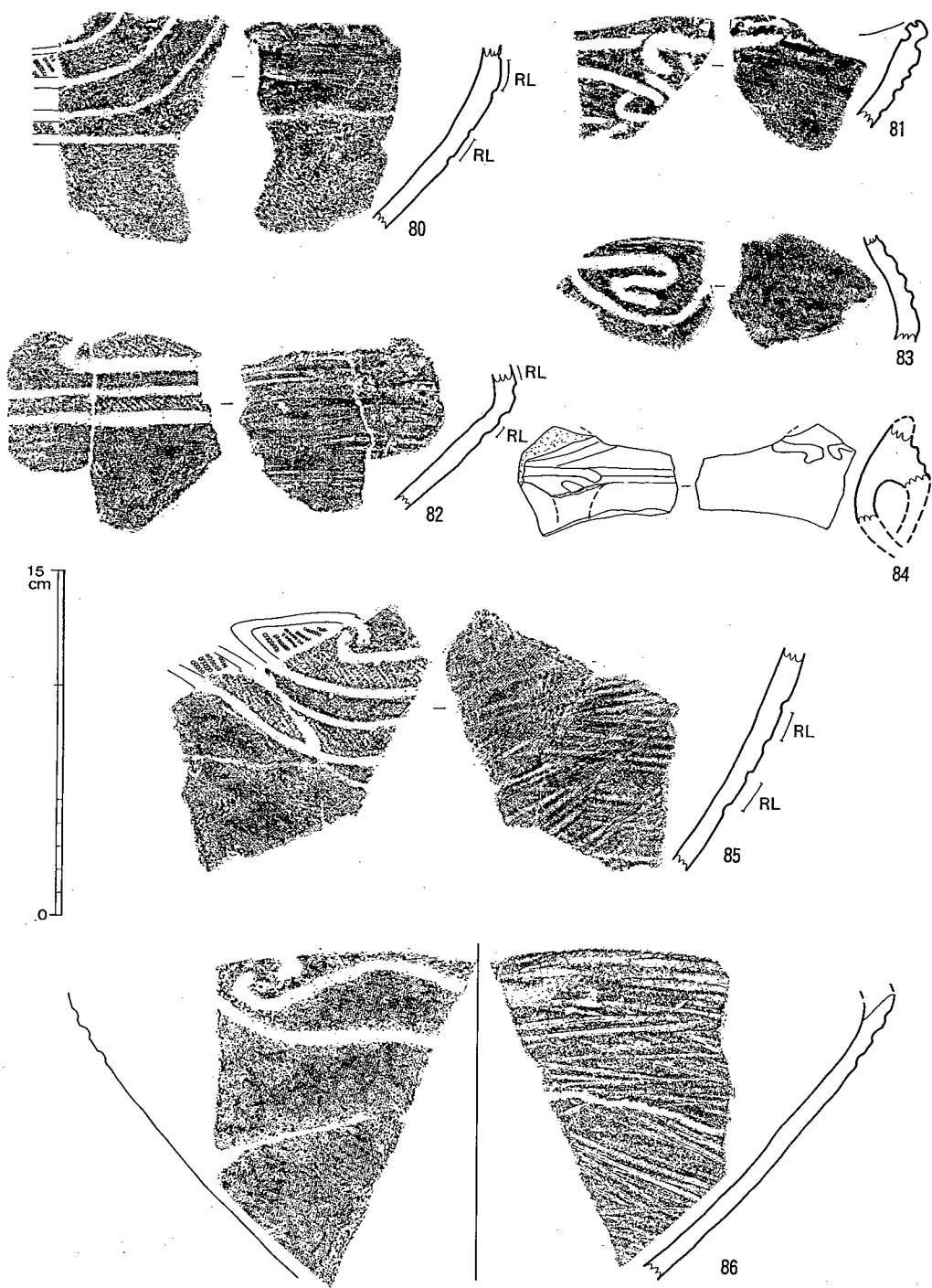
第19図 3号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/20)

から竪穴住居跡という認識に至った。支柱穴としては壁(縁辺)に沿って約60~70cm間隔で、径20~40cm、深さ20~30cmの比較的小さくて浅いものを9基確認したが、北東部の直線的な壁の部分では検出できなかった。ただし、この北東部の壁際において1.4×1.1×0.5cmの大きな土坑状の遺構を検出したが、これは床面まで掘り下げた時点で確認されたこと、また北東部の壁に接していること等から、この竪穴住居跡に本来伴うものと考えられる。石組炉(第19図)は60×55×20cmの掘り方の底面と側面に20~25cm程度の比較的扁平な自然礫を組んだもので、すべて内側が赤く焼けているが、埋土には少量の焼土や炭化物が含まれるだけであった。遺物の出土量は本遺跡においては比較的少なくパンケース6箱程度であったが、かなり大きな破片が纏まって出土した。ただし、他の住居跡と同様に完形品になることはなく、また当時の生活の痕跡を直接的に想定できるような出土状況でもなかった。土器については小池原上層式に限られ他をまったく含んでおらず、極めて良好な資料といえる。したがって、この竪穴住居跡から出土した石器や土製円盤も小池原上層式期に限定できるものであることを強調しておきたい。

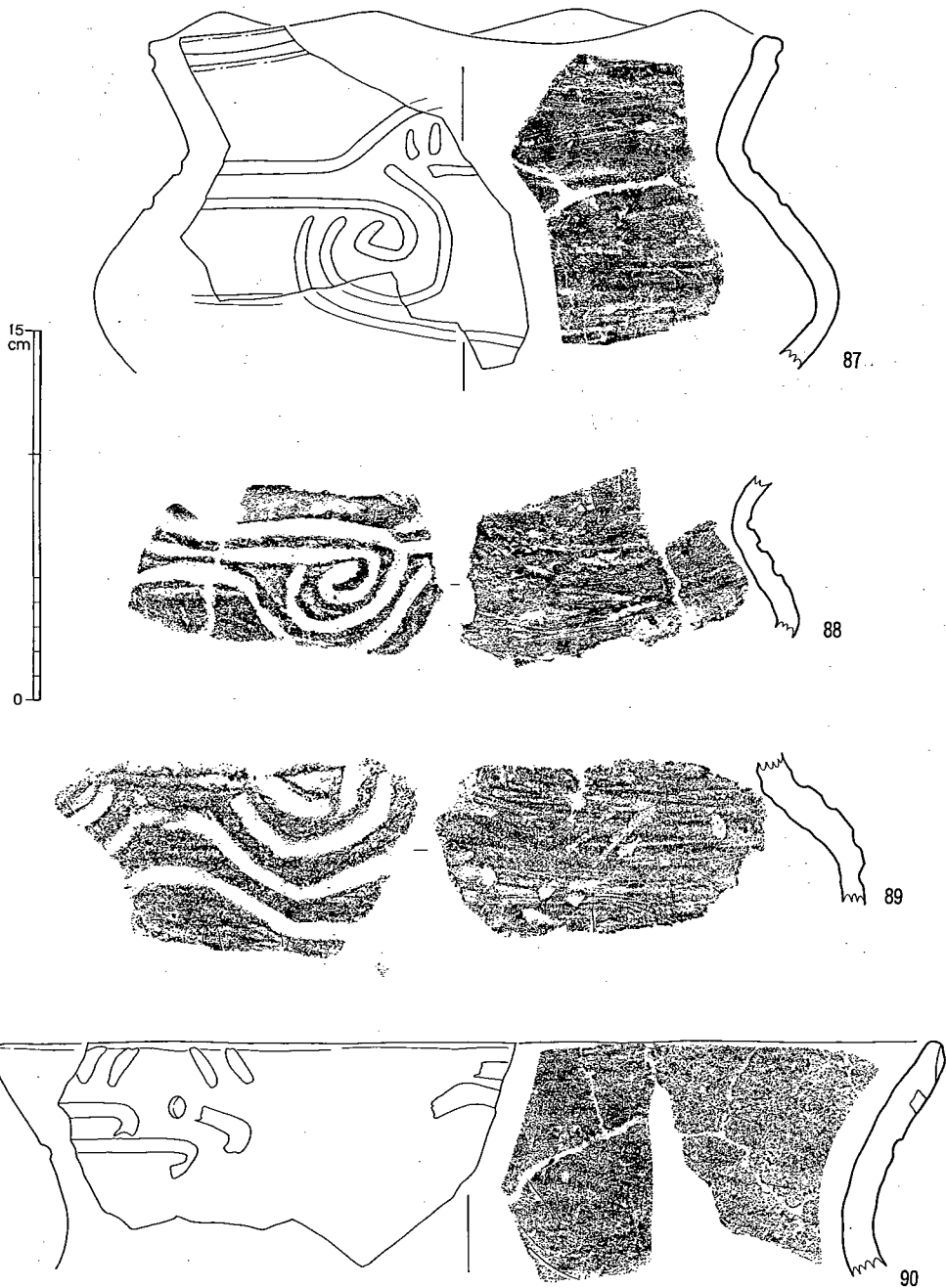
土器(第20~26図) 土器は45点を図示した。有文土器でも縄紋の有無によって文様のモチーフや沈線文の太さが異なる。本住居跡から出土してる縄紋施文の土器は、すべて沈線文→RL→磨消縄紋の順序で施文される。74については磨消が行なわれてなく、また頸部の文様や胴部全体の文様にモチーフのやや乱れた感じのする特徴や、沈線文が若干細いといった特徴から、本住居跡出土の小池原上層式とは多少の年代差が存在しているかのように見られることもできる。しかし、器高や胴部径のサイズから判断して、小型だからこそ見られる特徴と理解したほうが妥当であろう。波頂部の資料については渦巻文が施されているが、「U」字文の組み合わせは見られない。縄紋が施される有文土器については、口縁部が肥厚して強く外反し、胴部もかなり張るのが特徴といえよう。87~89は縄紋が施されない資料の典型で、沈線文の間隔が詰まり



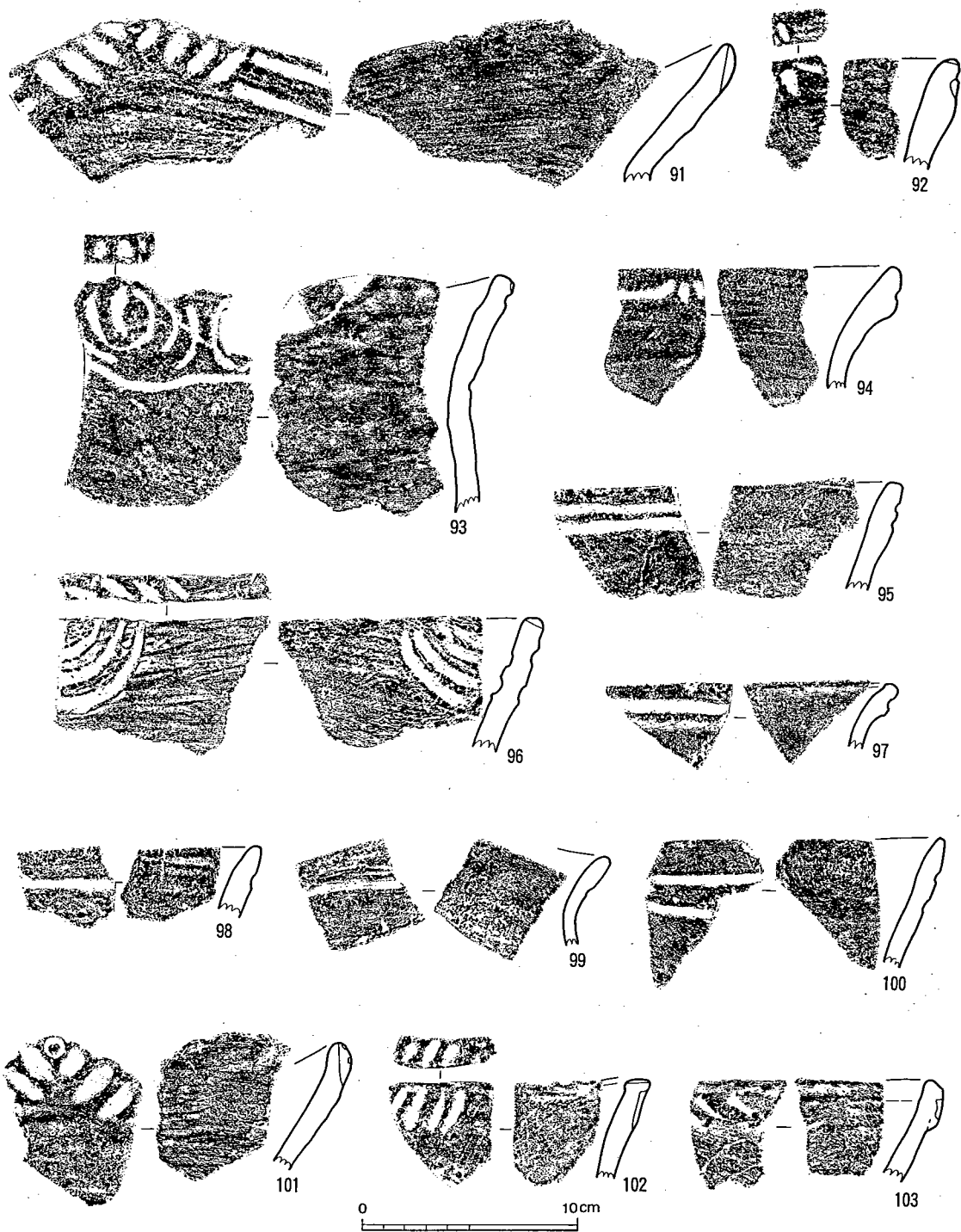
第 20 图 3号竖穴住居迹出土土器实测图.1 (1/3)



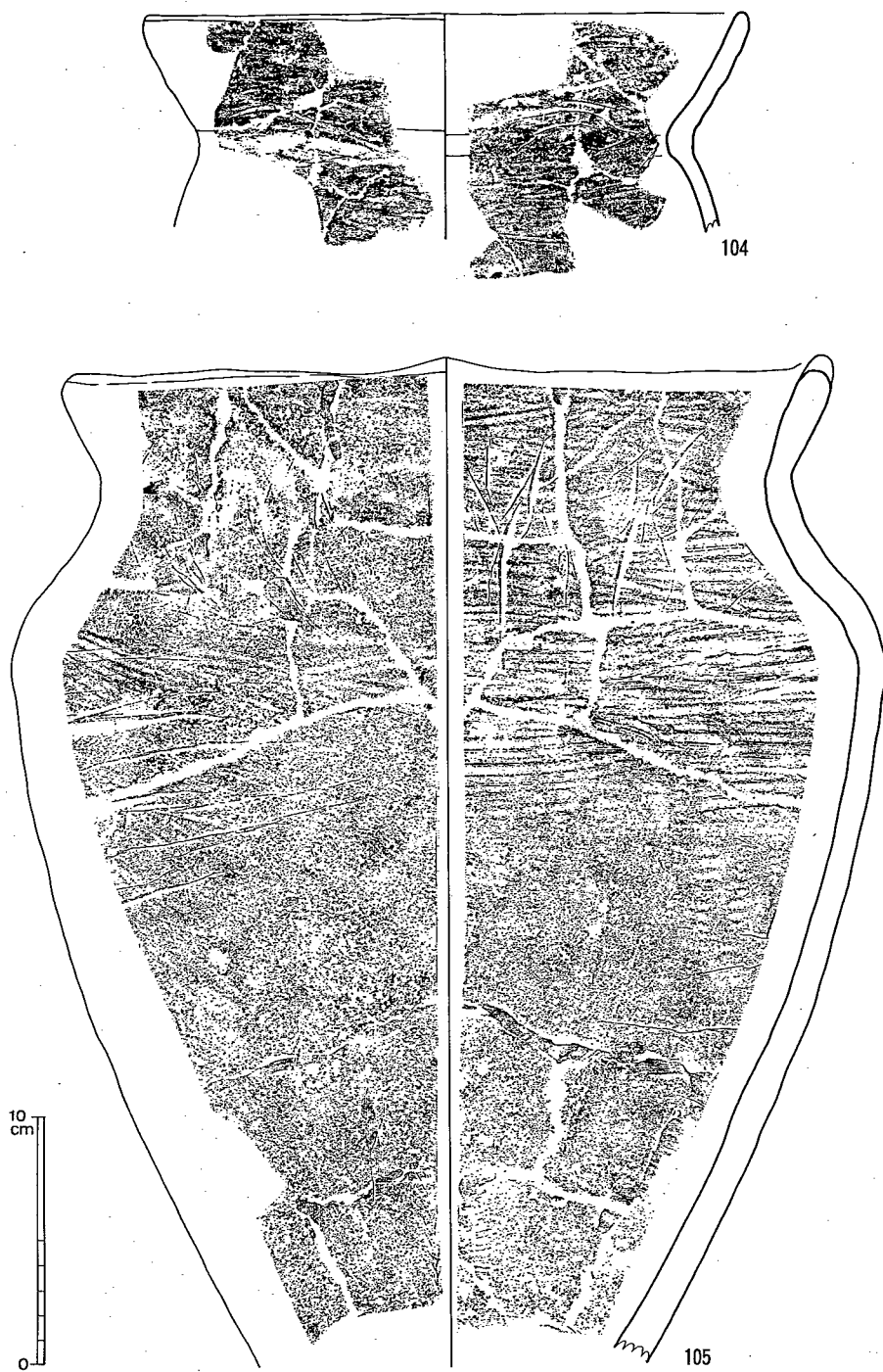
第 21 图 3 号竖穴住居跡出土土器実測图. 2 (1/3)



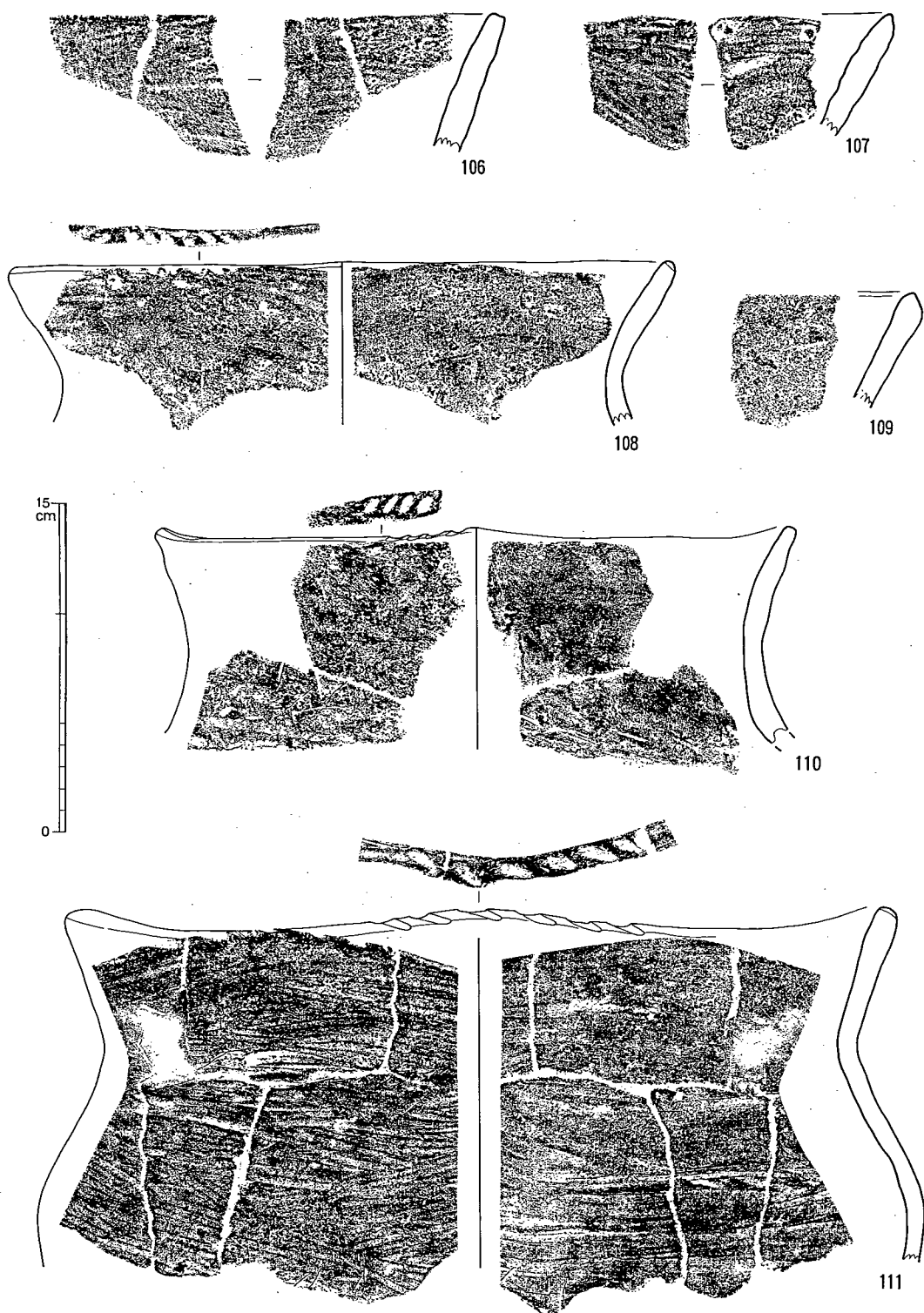
第 22 图 3 号竖穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)



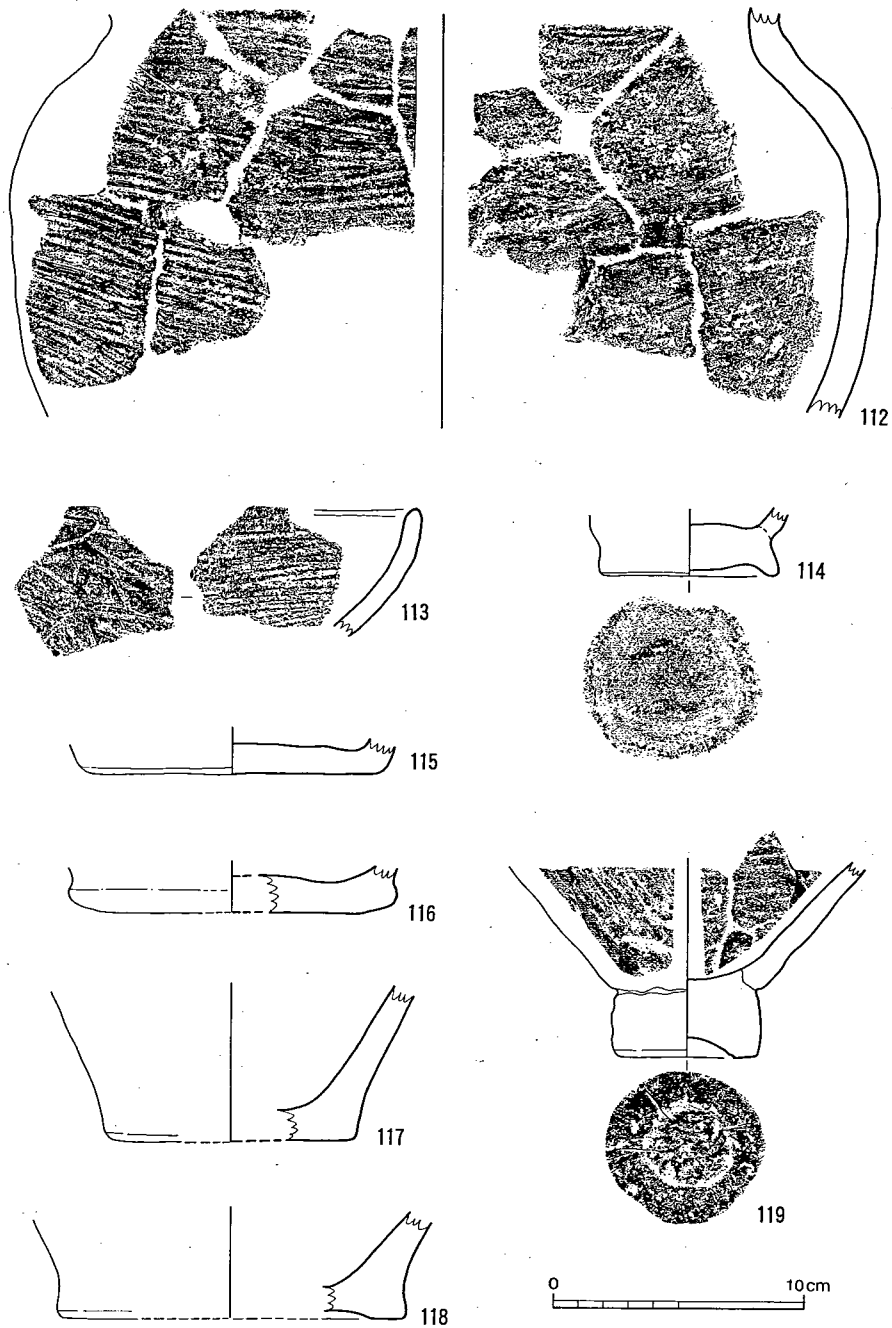
第 23 图 3号竖穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)



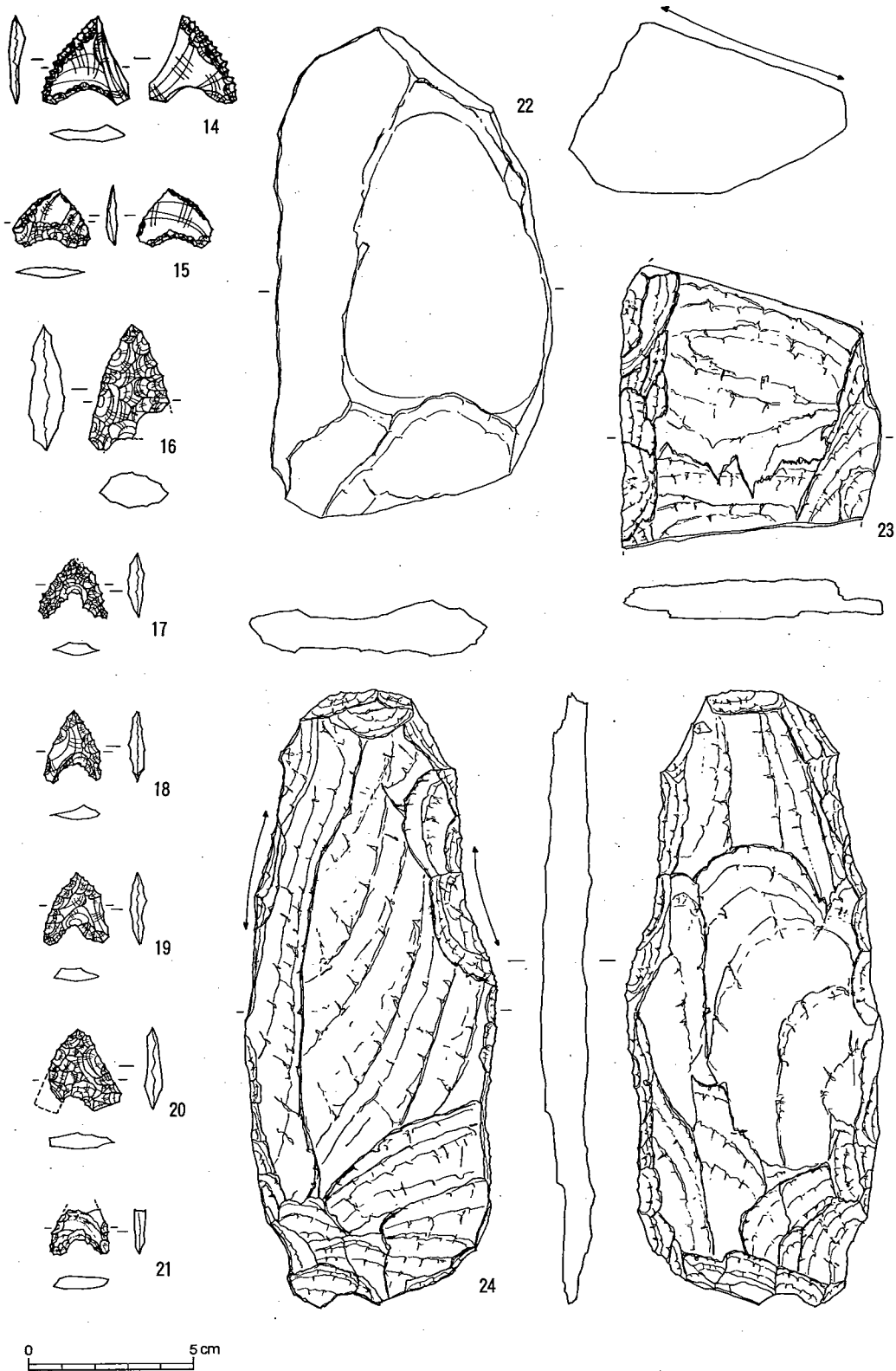
第 24 图 3号竖穴住居跡出土土器实测图. 5 (1/3)



第 25 图 3 号竖穴住居跡出土土器実測図. 6 (1/3)



第 26 图 3 号竖穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)



第 27 图 3 号竖穴住居跡出土石器実測図 (14~21は1/3 23・24は1/2 22は1/4)

モチーフも単純化されている。90～103は有文の深鉢形で、縄紋が施される資料はない。口縁部の肥厚はわずかで、器面調整は粗いのが特徴的。104～119は無文土器と底部。無文土器については深鉢形に限られ、器面調整は巻貝条痕文が主流でナデも見られる。緩やかな波状口縁部を形成するものもあり、その波頂部を中心に比較的大きな刻み目を施すものもある。先述したように本住居跡の土器は小池原上層式に限定されており、1号竪穴住居跡の資料等を考慮に入れるなら、縄紋施文の有文鉢、縄紋のない有文鉢、縄紋施文のボウル状鉢、縄紋のない有文深鉢、無文の深鉢、皿形等がその器形構成と考えられる。

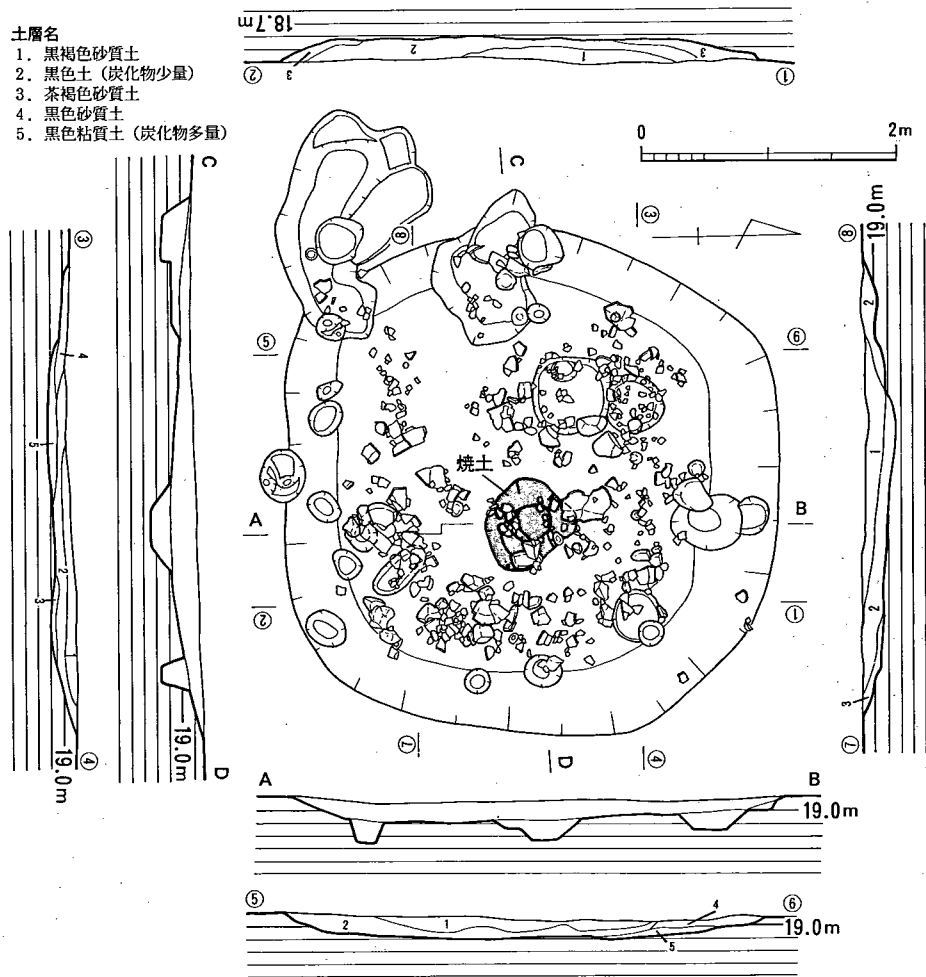
石器（第27図）石器は石鏃8点、打製石斧2点、台石（砥石）1点を図示した。石鏃は腰岳産黒曜石とサヌカイトが1点ずつあるだけで、他はすべて姫島産黒曜石製。24の打製石斧の両側縁にはわずかに抉れて階段状剥離や擦れたような摩滅の痕跡が窺えるが、これは柄を紐等で装着した時の緊縛痕であろうか。先述したように、これらの石器はすべて小池原上層式期に限定される資料である。

土製円盤（第280～285図）土製円盤については5点出土しており、そのすべてを図示した。いずれも無文土器あるいは有文土器の無文部の破片を転用したものである。

4号竪穴住居跡（図版5 第28図）

4号竪穴住居跡は調査区のほぼ中央部で、VE区・VIE区・VF区・VIF区の交点に位置し、7号竪穴住居跡の南3m、10号竪穴住居跡の北東6mに近接する。この付近（VE区・VIE区・VF区・VIF区）では黒褐色土の包含層が比較的厚く遺存していたことや遺物の出土量が特に著しかったこと等から、2mグリッドを組んで徐々に平面的に掘り下げて遺構の検出を試みた。その結果、4.2×3.9mの隅丸方形にやや近い円形の平面プランを検出できたが、深さは最高でも18cm程度。全体の断面形態は中央部へ向けて緩やかに窪む程度の掘り鉢状を呈するだけで明確に壁といえるものではなく、また貼り床も確実に検出できなかったため、当初は落ち込み状の遺構を想定していた。ところが、中央部底面から焼土を多量に含んだ75×60×15cmの炉跡が検出されたことから、竪穴住居跡という認識に至った次第である。支柱穴としては底面から緩やかに立ち上がり始める部分、つまり底面でも中央部ではなく外縁部付近で径20cm、深さ20cmのものをいくつか検出できたが、間隔や配列は不定型で不確定要素が多い。土層断面図で示したように明確に貼り床といえる土層は存在せず、調査時点においても人間が踏みしめたような固い面を検出することができなかった。埋土は部分的に砂質土や粘質土が見られるものの、全体的には2層とした黒色土が厚く広がっていた。遺物は5cmほどの小礫から人頭大までの自然礫と混在の状態が多量（パンケース12箱）に出土したが、部分的に偏ることなく全体的に満遍なく出土した。土器についてはかなり大きな破片もあるが完形品になることはなく、またそれらは流れ込みではなく遺棄されたような状態の出土で、必ずしも当時の人間の生活を想定できるようなものではない。小池原上層式から三万田式までが満遍なく出土しているが、

- 土層名
1. 黒褐色砂質土
 2. 黒色土 (炭化物少量)
 3. 茶褐色砂質土
 4. 黒色砂質土
 5. 黒色粘質土 (炭化物多量)

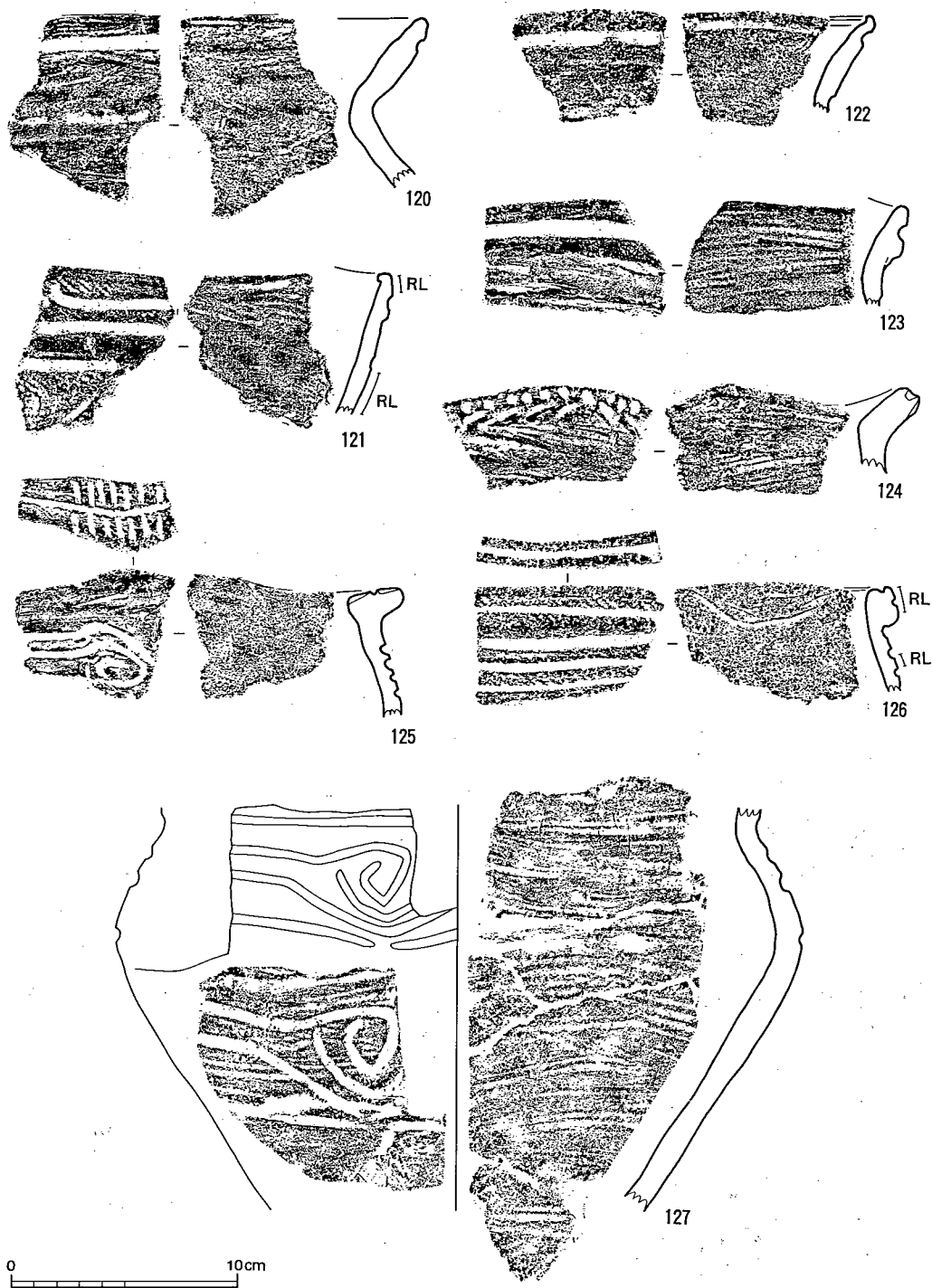


第 28 図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

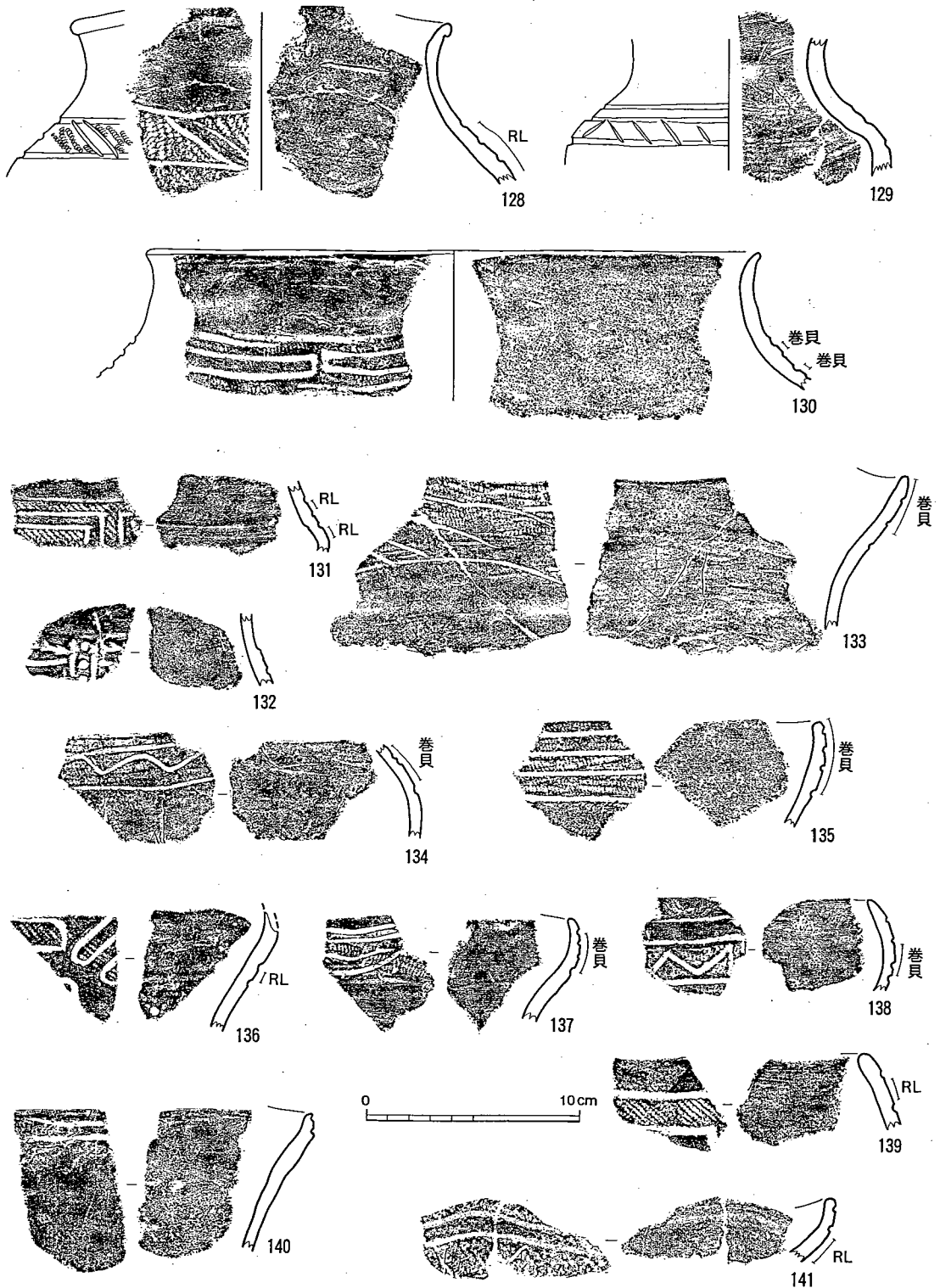
量的に安定していて破片も最も大きく遺存状態が良好なのは三万田式である。無文土器の量は膨大で、全体の8割以上を占めている。

土器 (第29~43図) 土器は100点を図示した。120~123・127は小池原上層式で、121はボウル状の鉢になる。124もおそらく小池原上層式に属する資料であろうが、あるいは鐘崎式のものかもしれない。125・126は鐘崎式で、126については沈線文の後にRLが施される。

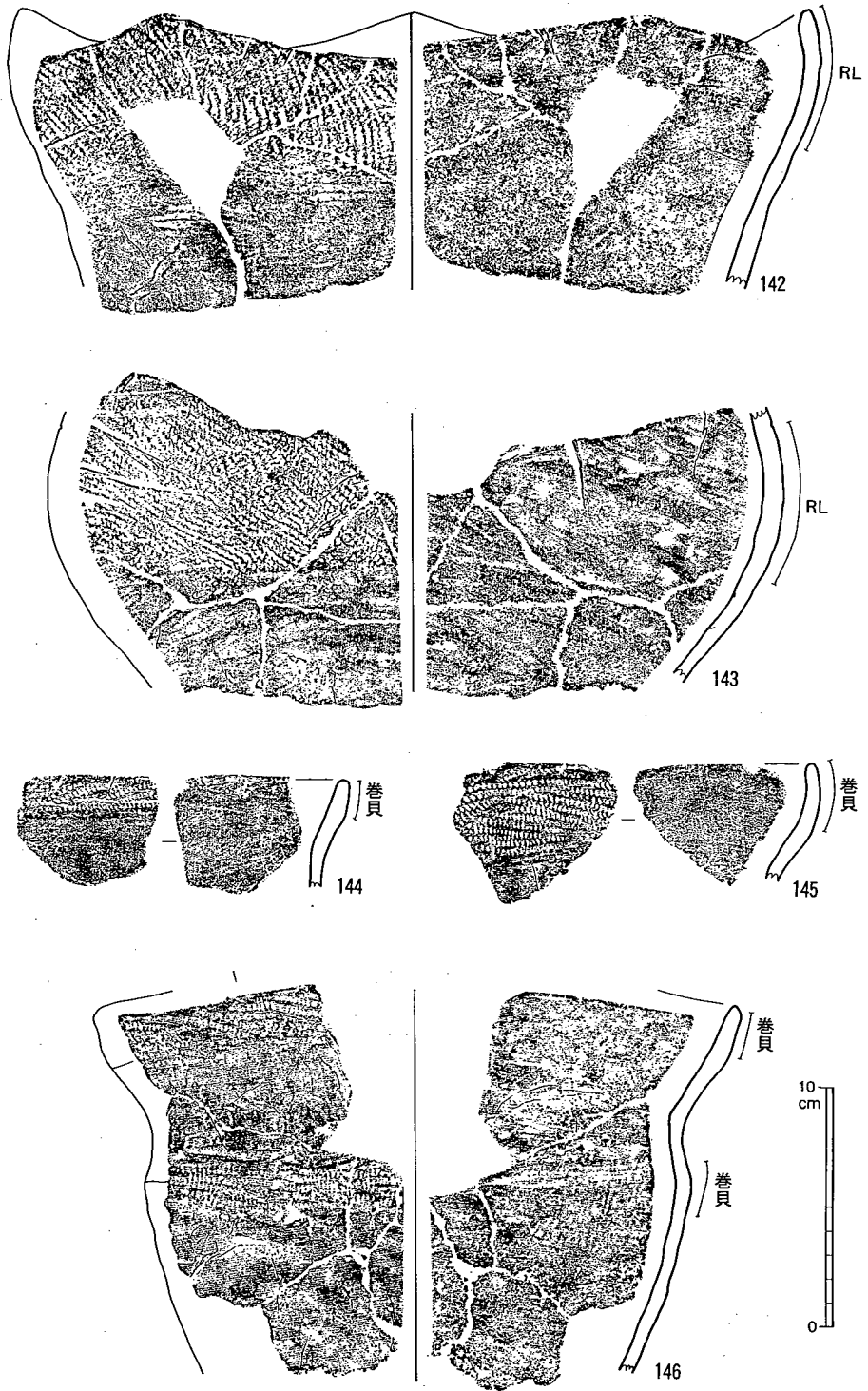
128~149は鐘崎式と西平式の間でも、比較的新しい段階に位置づけられる一群である。従来、鐘崎式と西平式の間といえば北久根山式という型式名称がそれに該当する。しかし、北久根山式とは中九州から西北九州に分布する当該期の土器に対して与えられた名称である。したがって、いくら鐘崎式と西平式の間だからといっても東九州のそれは中・西北九州に分布する一群



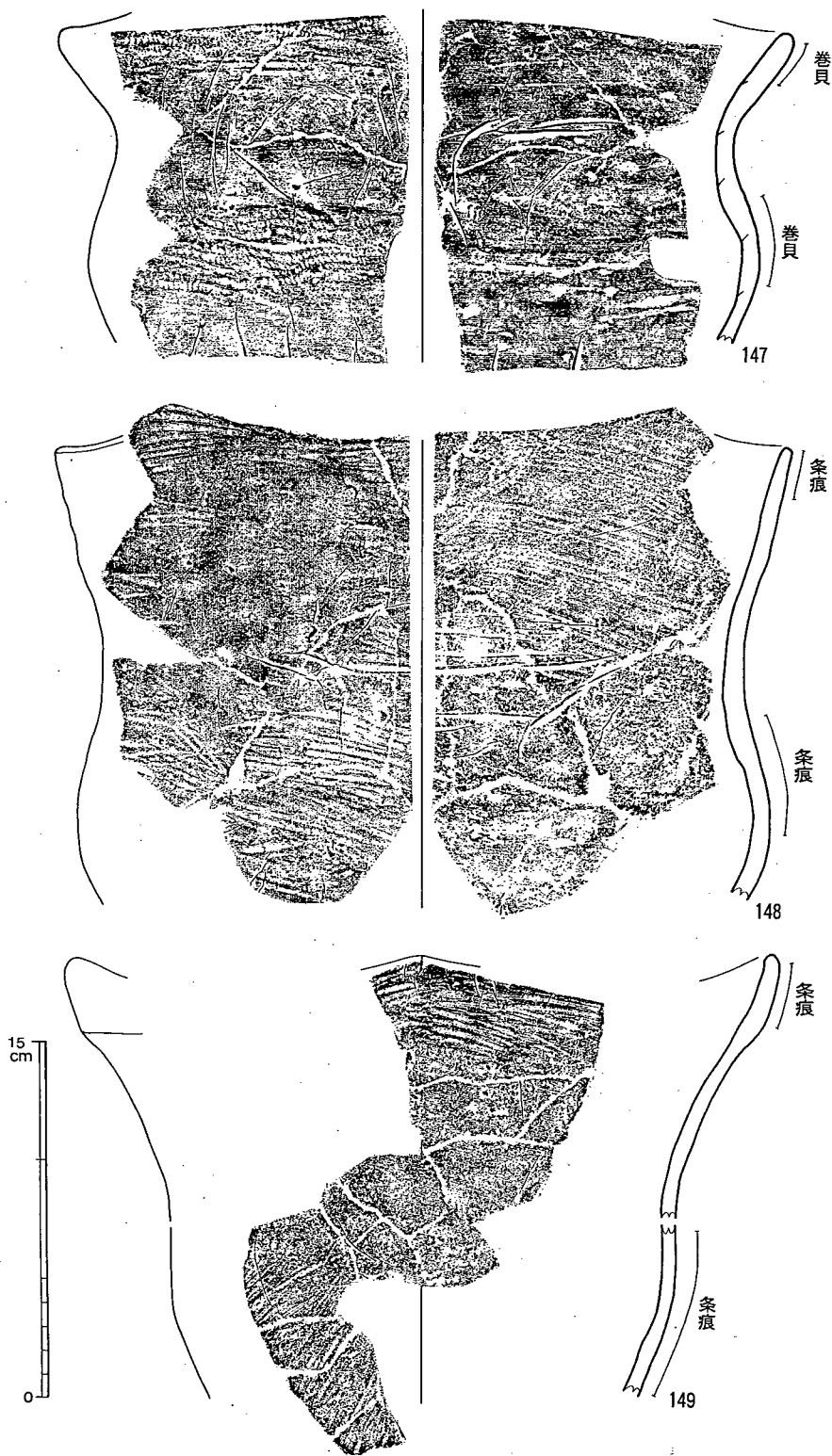
第 29 图 4 号竖穴住居迹出土土器实测图, 1 (1/3)



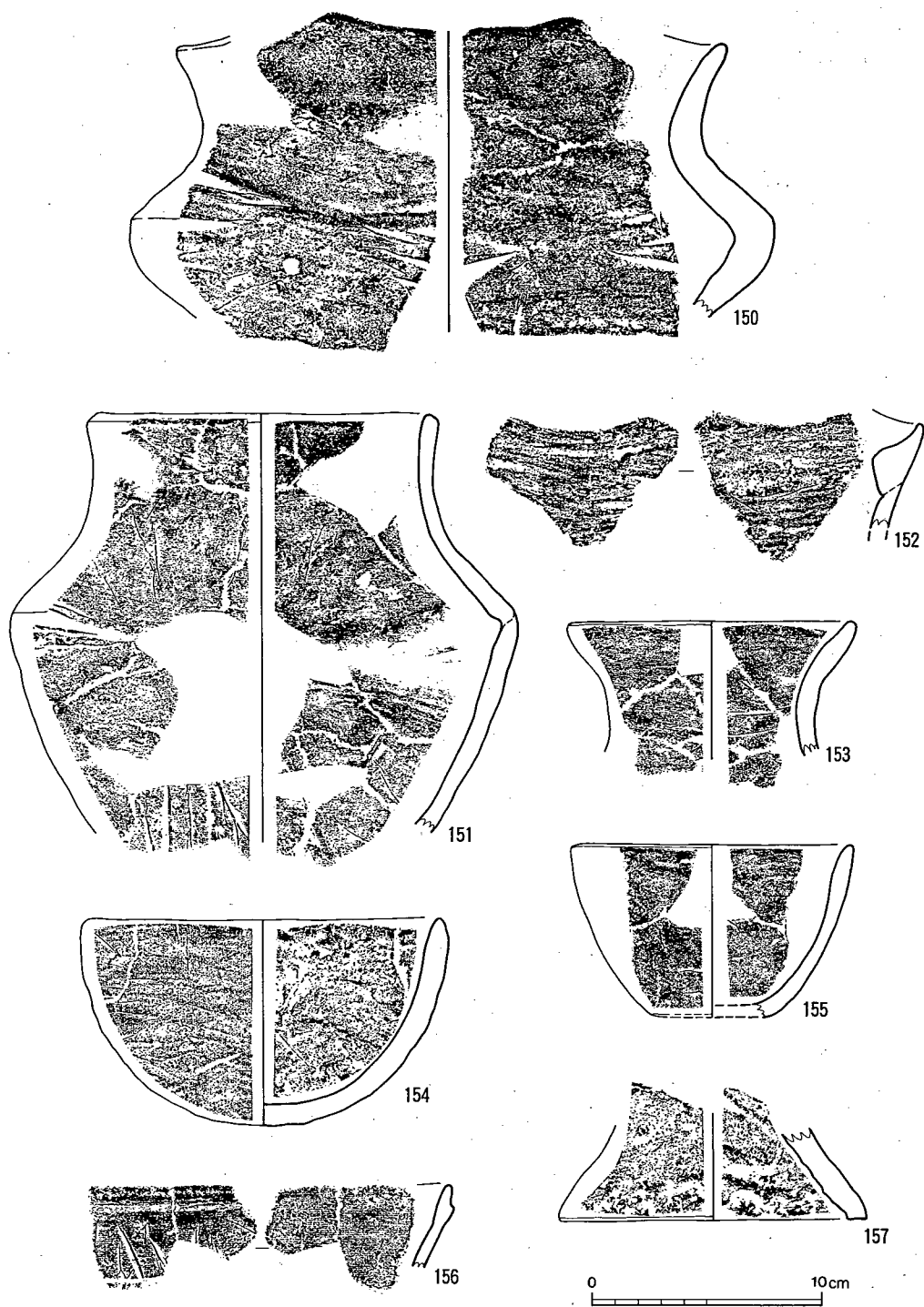
第 30 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測图. 2 (1/3)



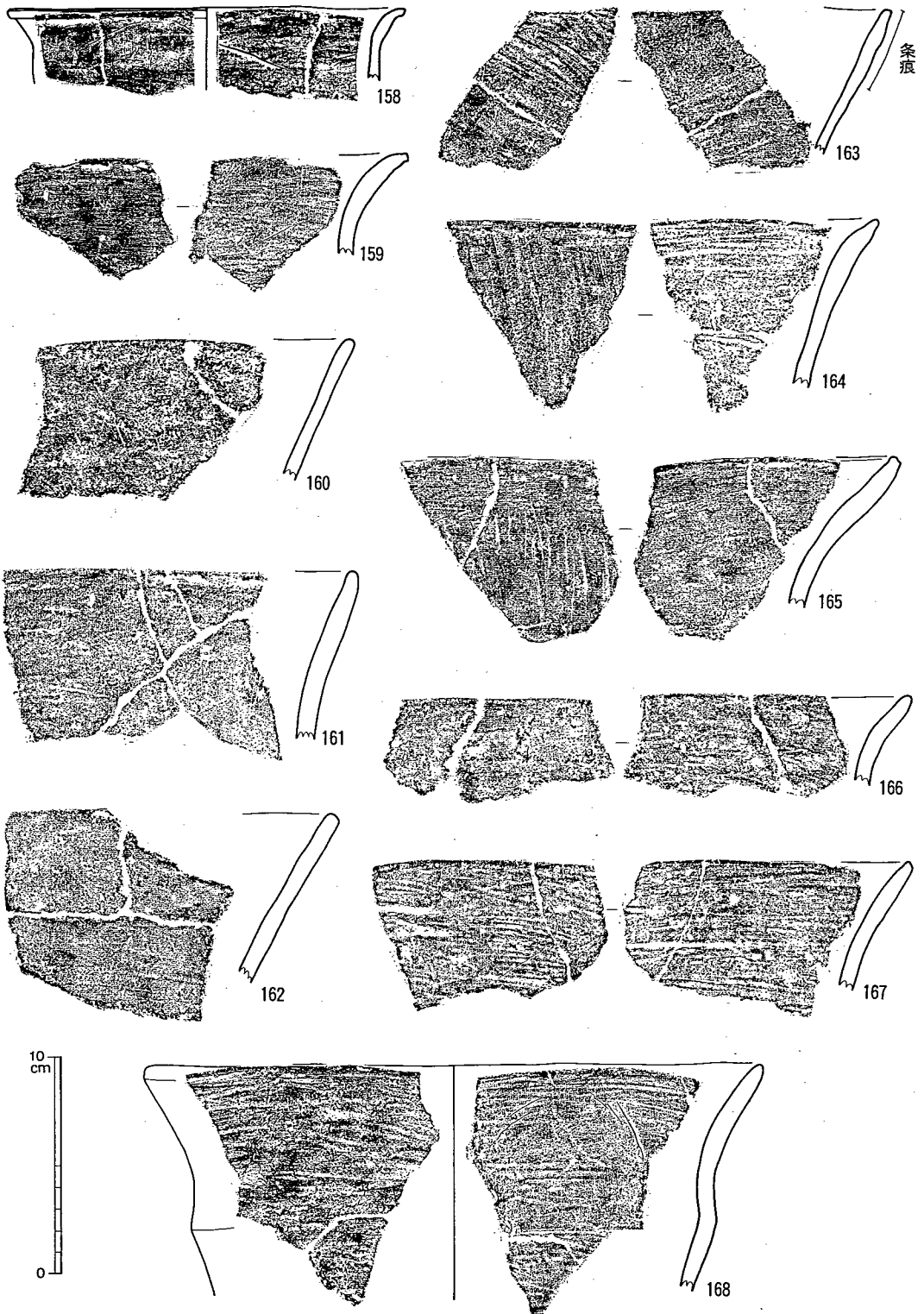
第 31 図 4号竪穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)



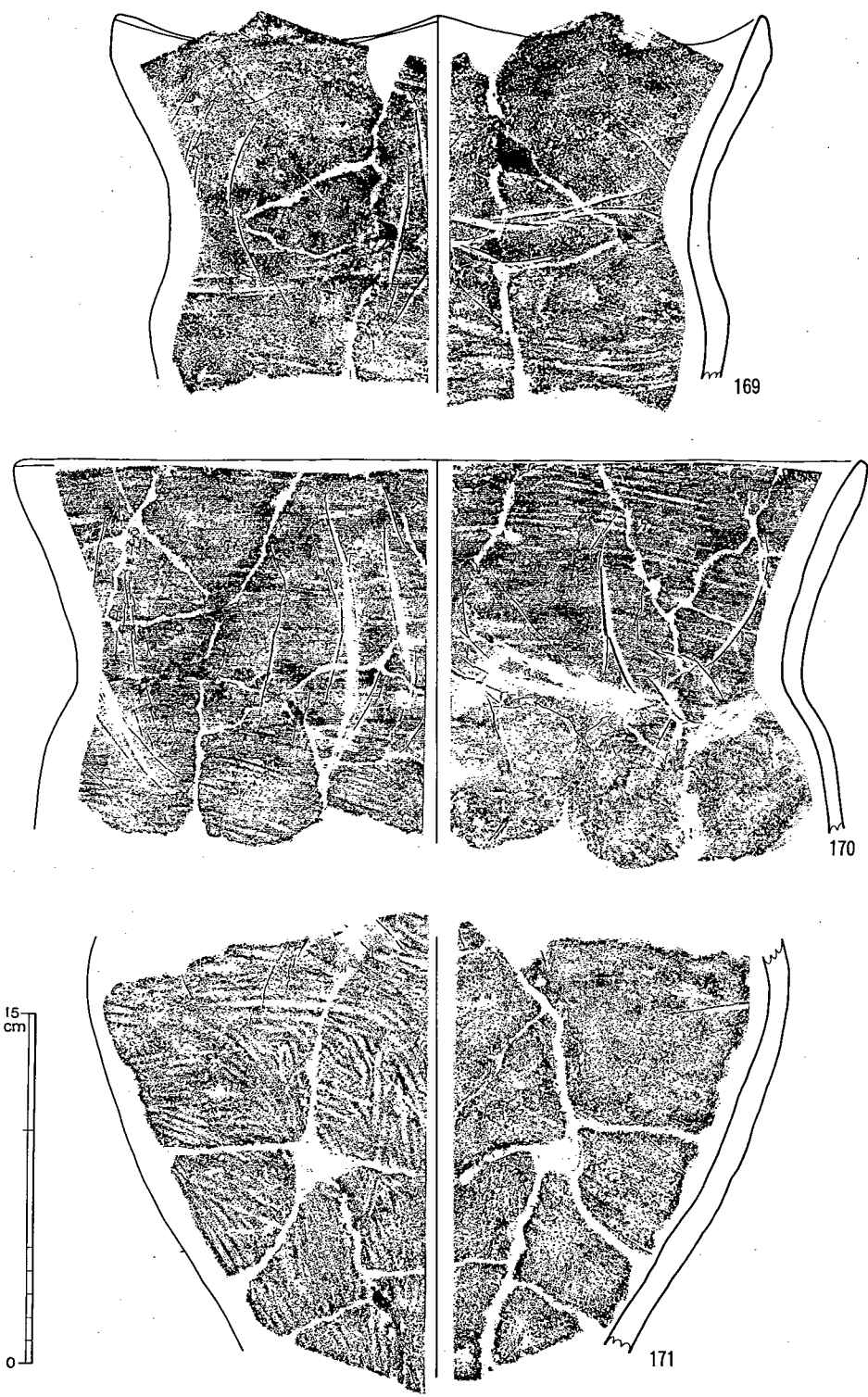
第 32 图 4 号竖穴住居跡出土土器实测图. 4 (1/3)



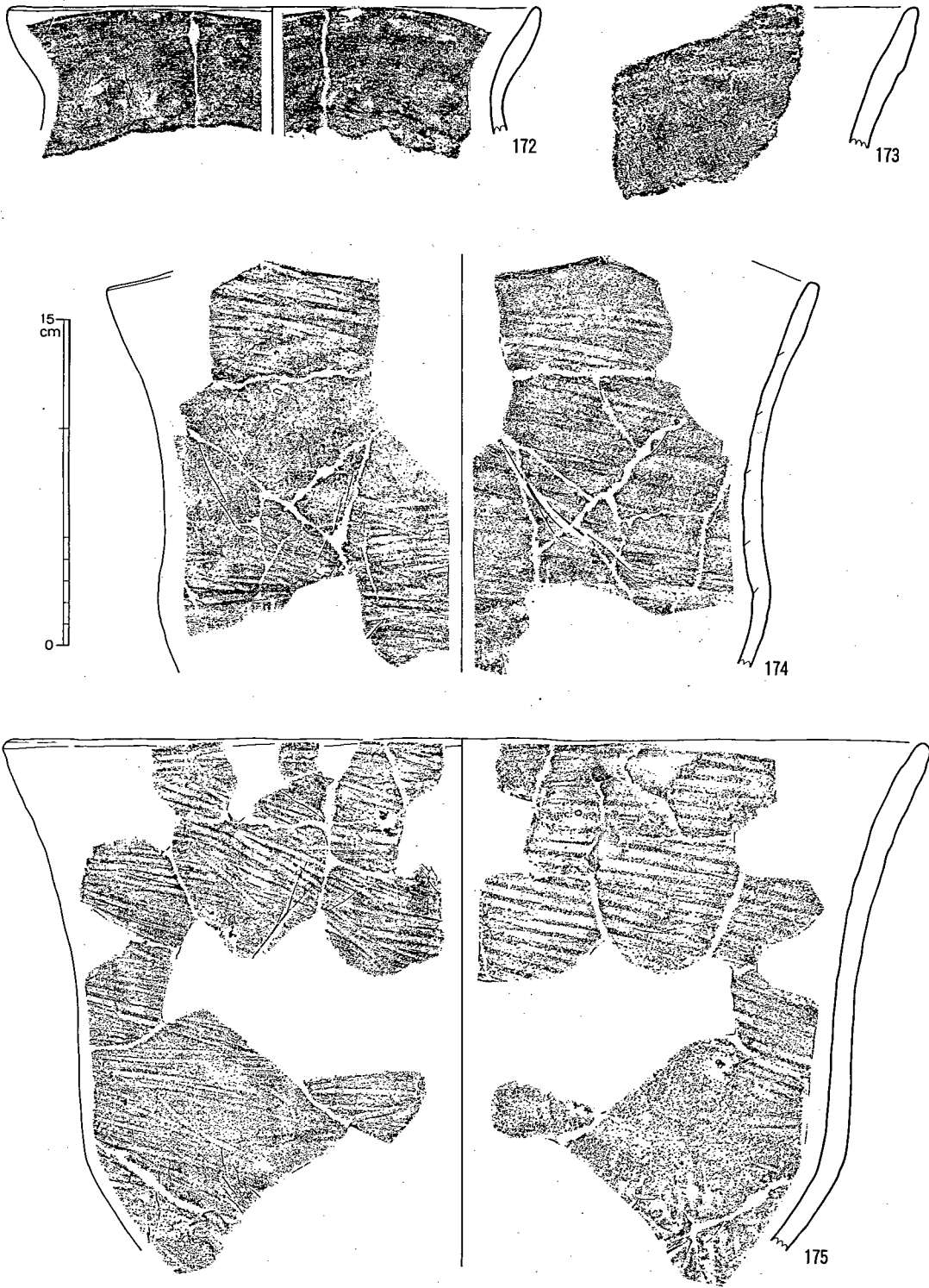
第 33 图 4 号竖穴住居迹出土土器实测图. 5 (1/3)



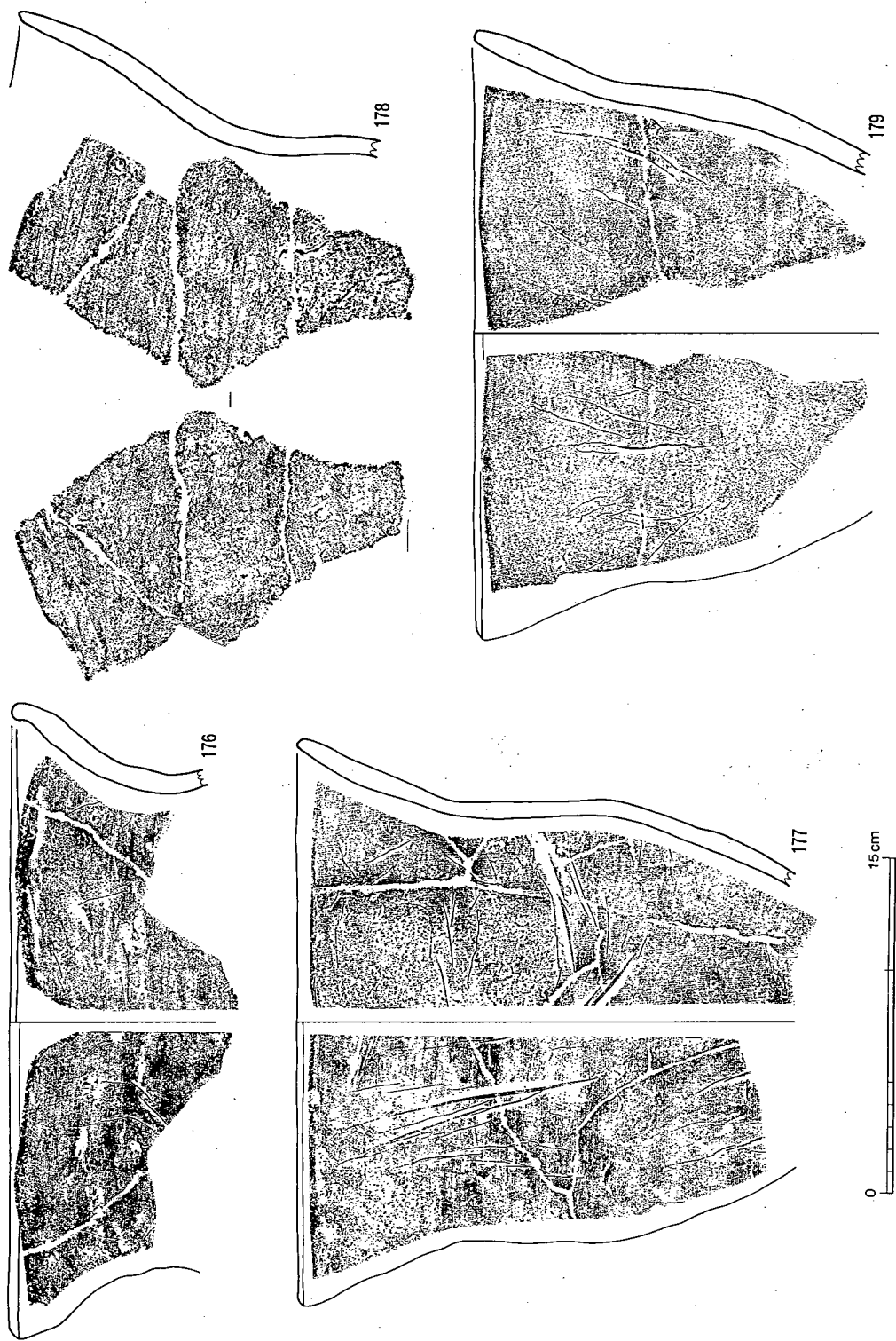
第 34 图 4 号竖穴住居迹出土土器实测图. 6 (1/3)



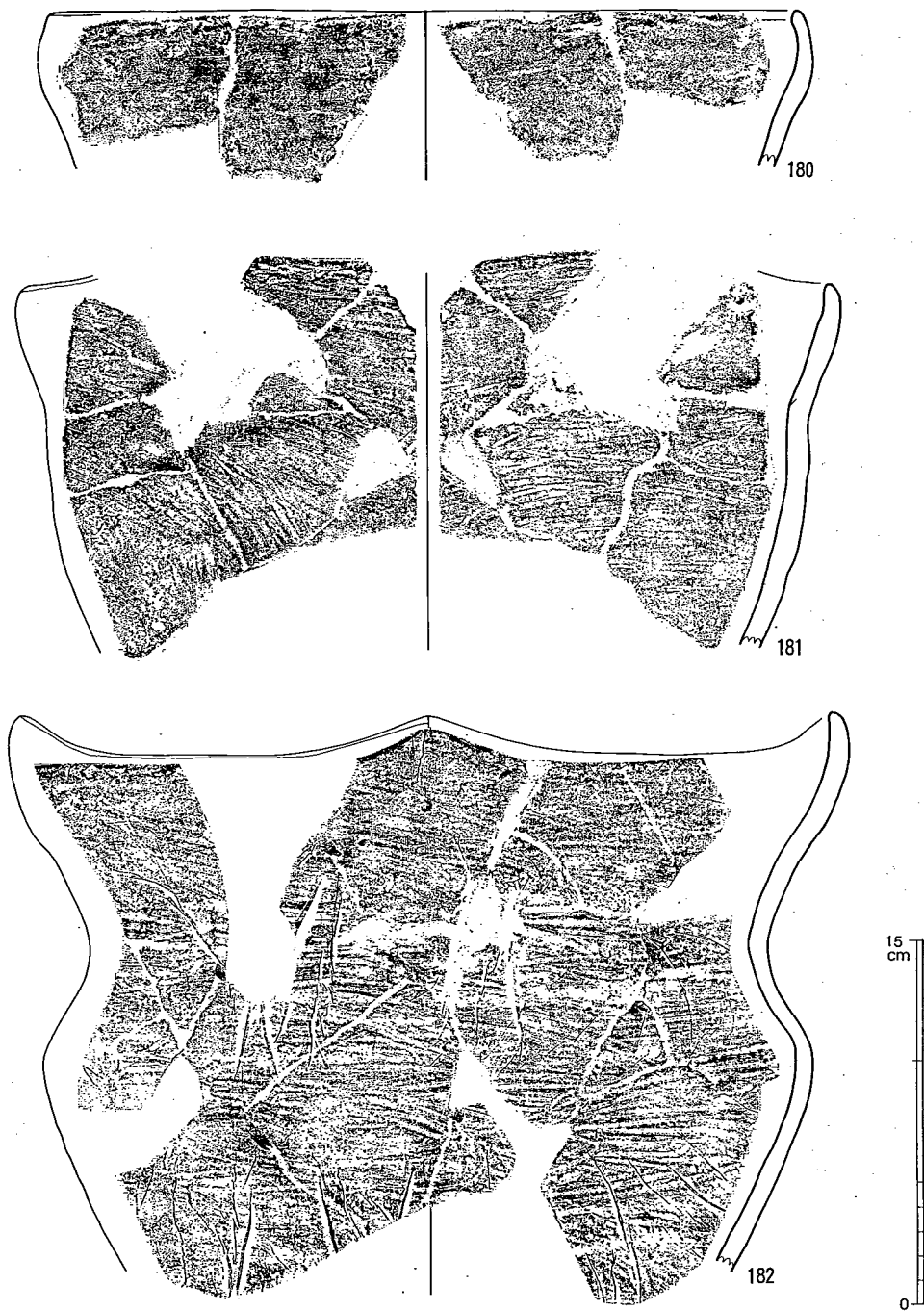
第 35 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測図. 7 (1/3)



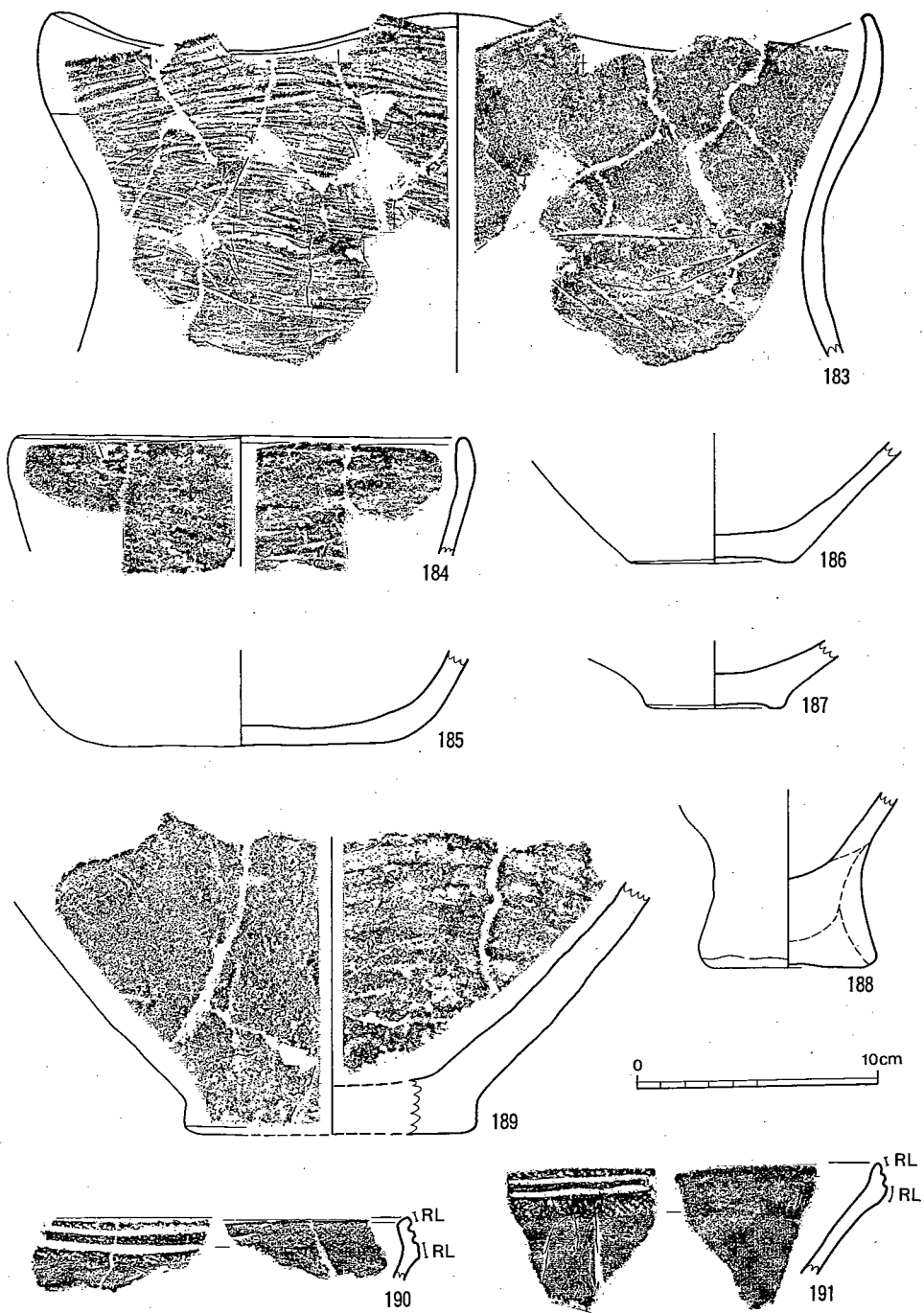
第 36 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測図. 8 (1/3)



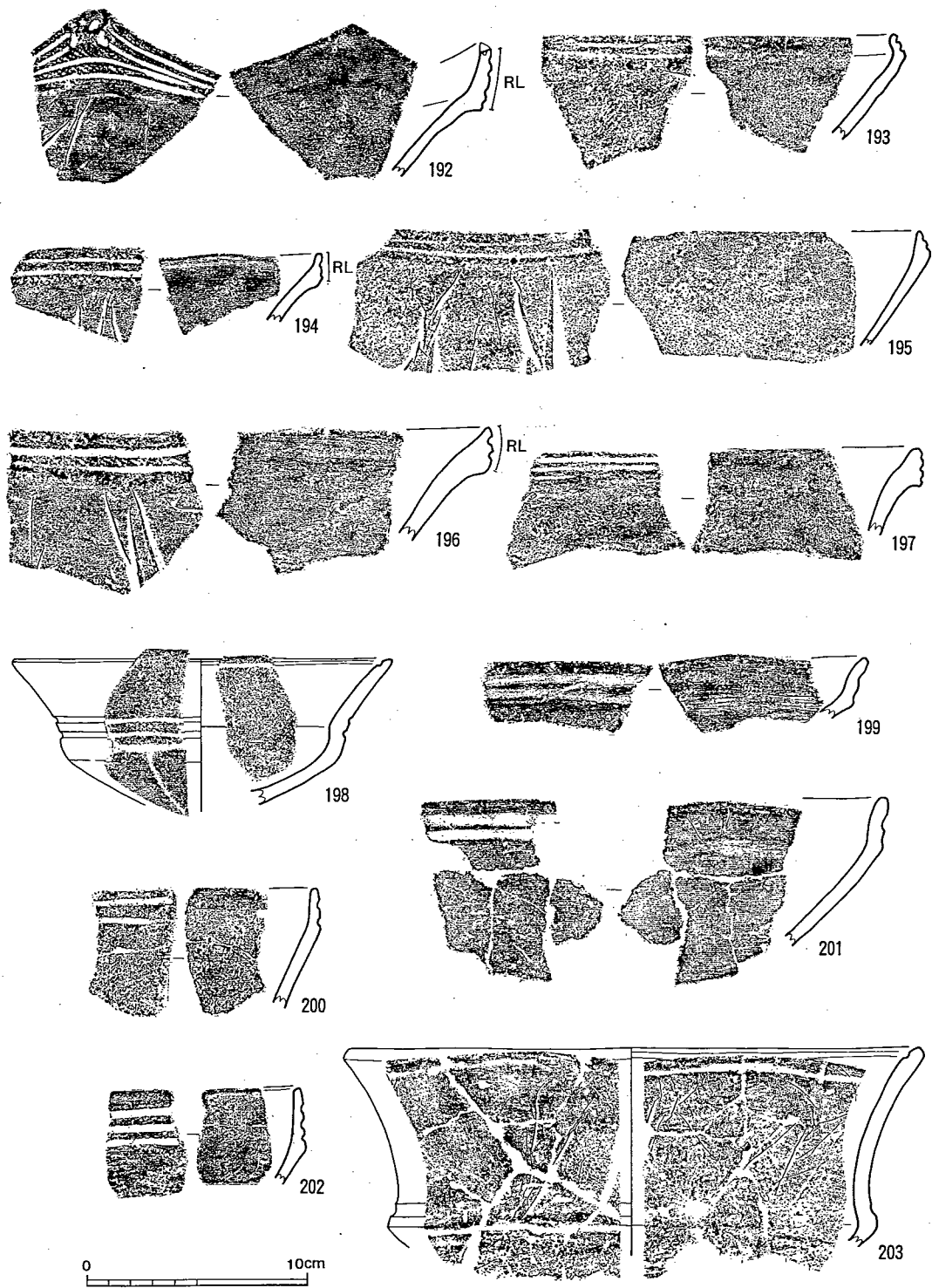
第 37 图 4 号整穴住居跡出土土器実測图. 9 (1/3)



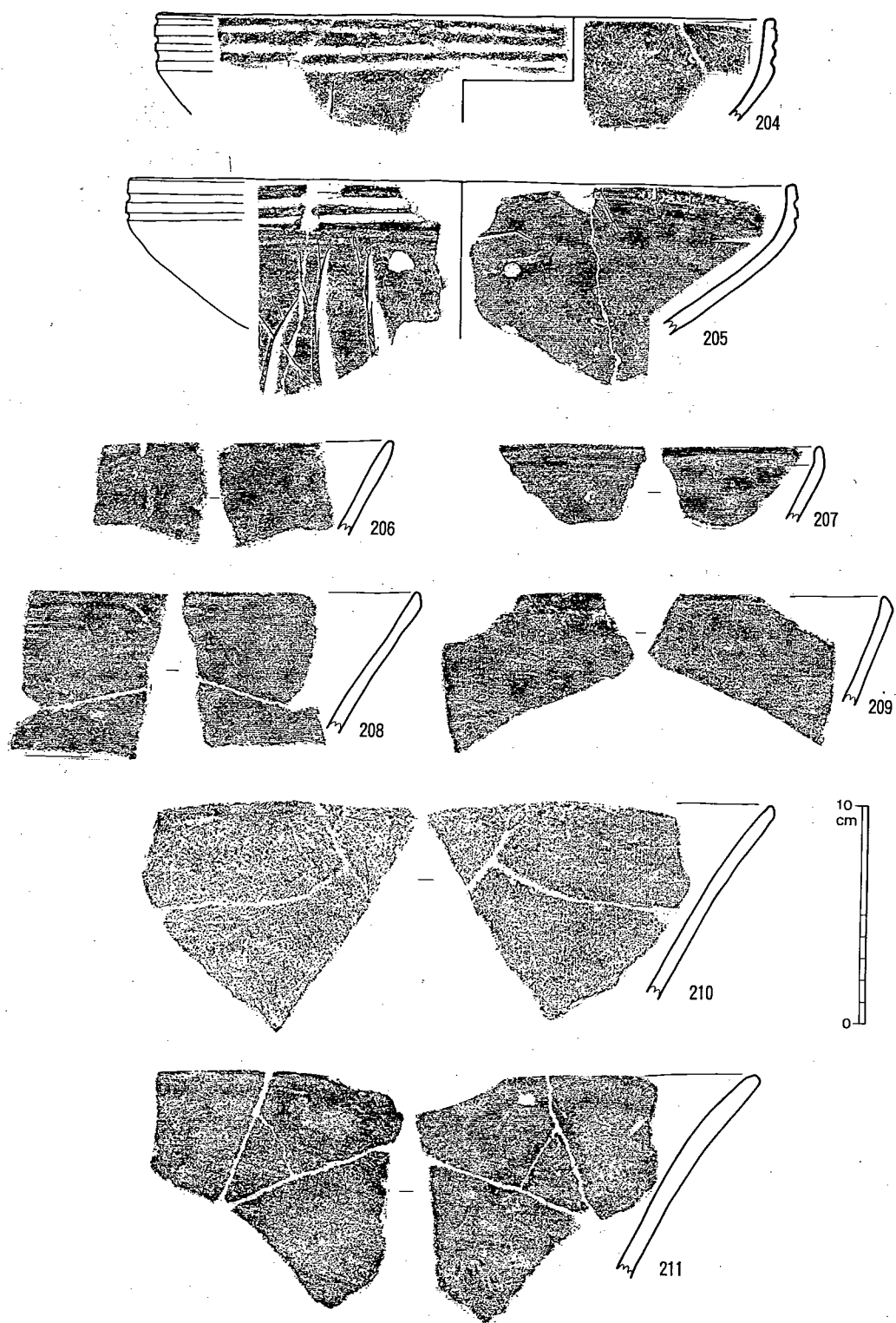
第 38 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測図. 10 (1/3)



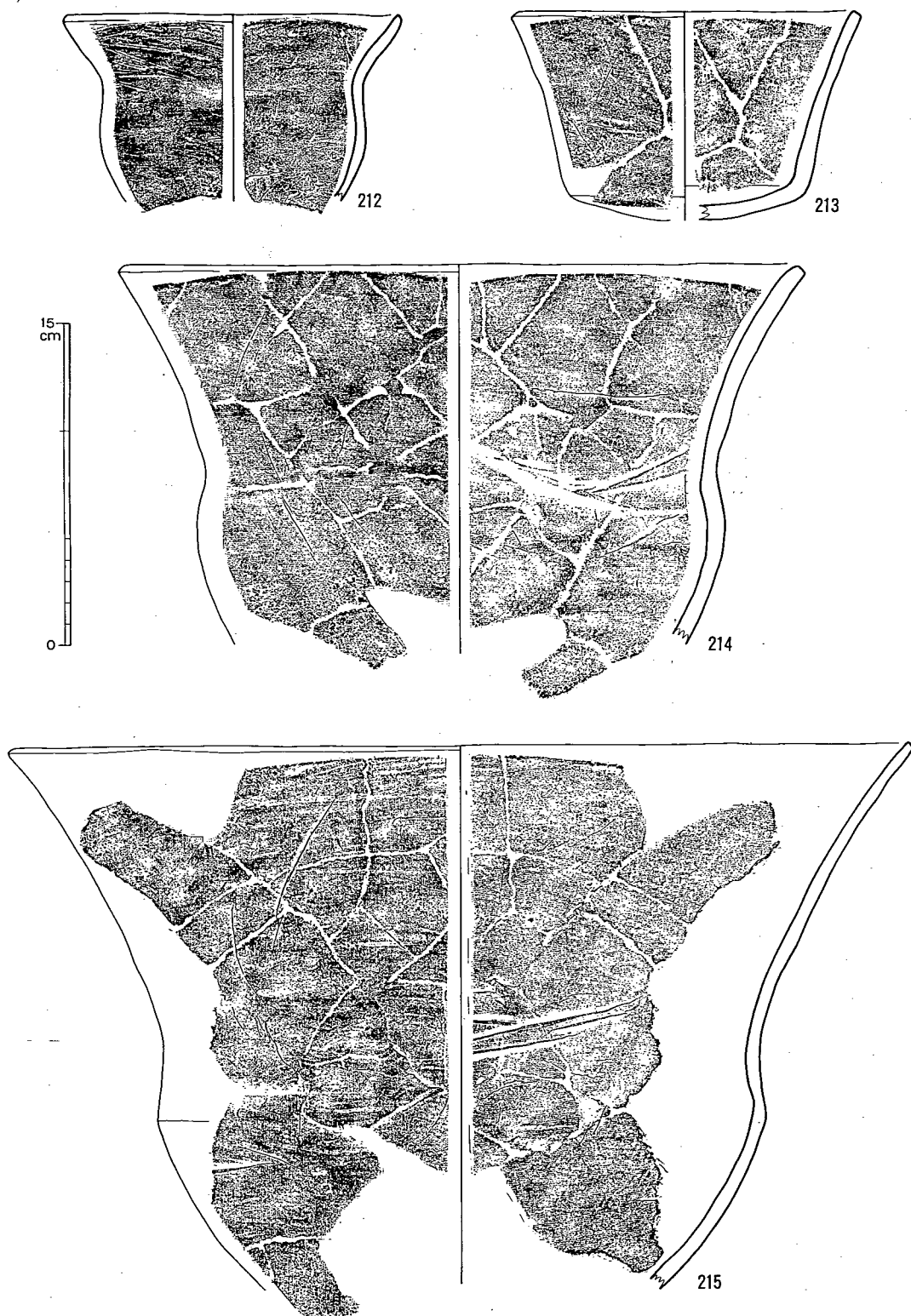
第 39 图 4 号竖穴住居迹出土土器实测图. 11 (1/3)



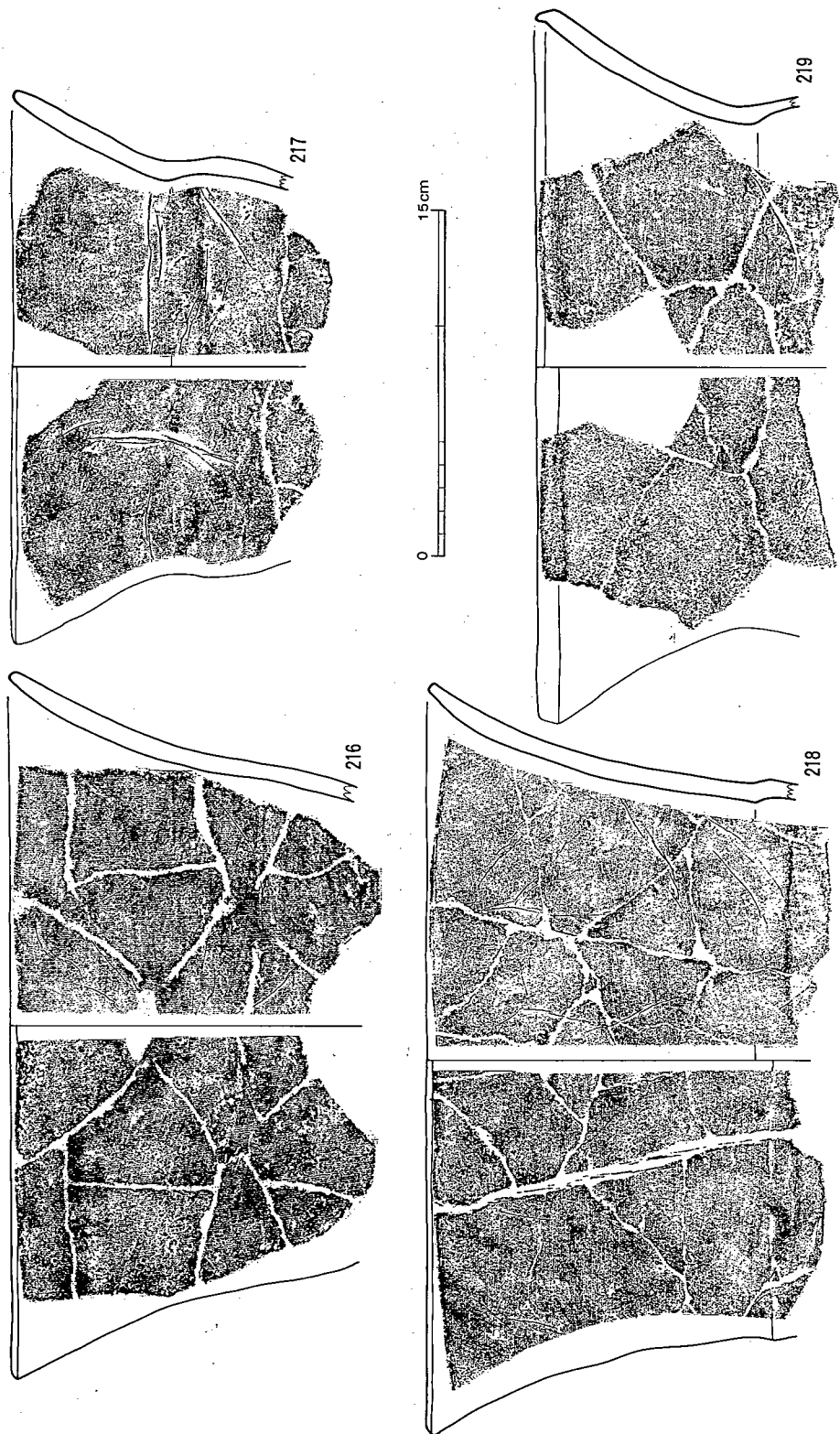
第 40 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測図. 12 (1/3)



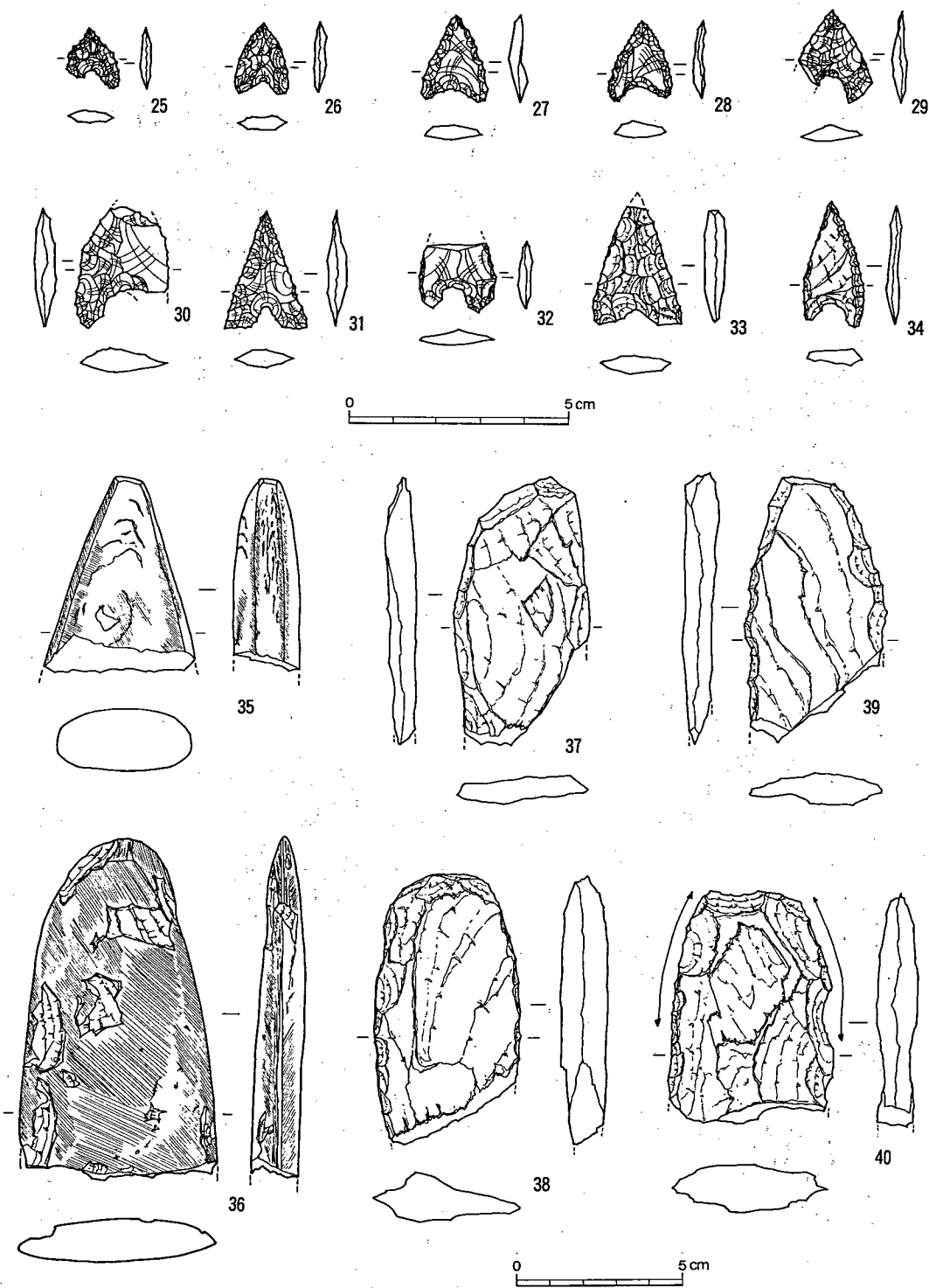
第 41 图 4 号竖穴住居迹出土土器实测图. 13 (1/3)



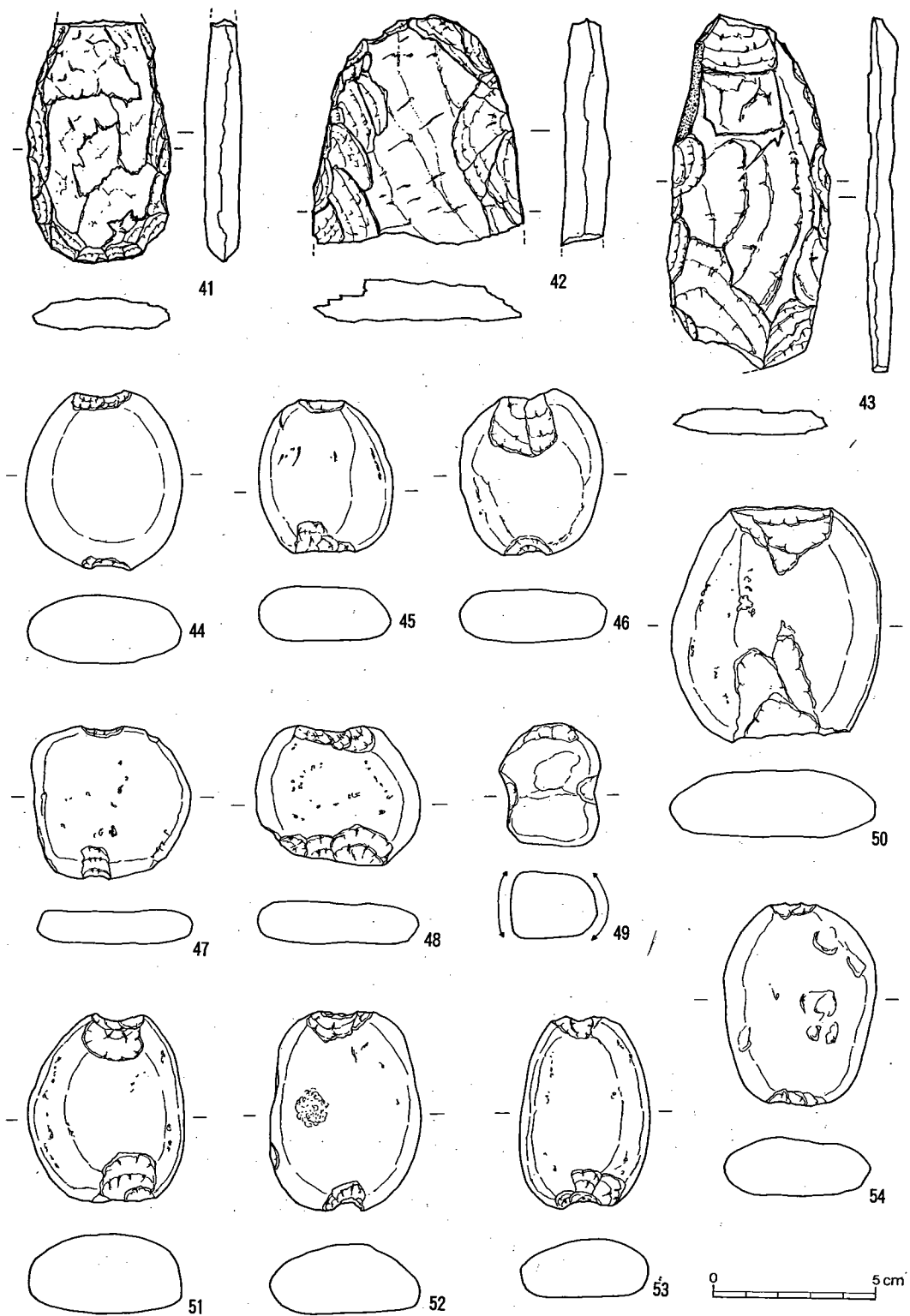
第 42 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測図. 14 (1/3)



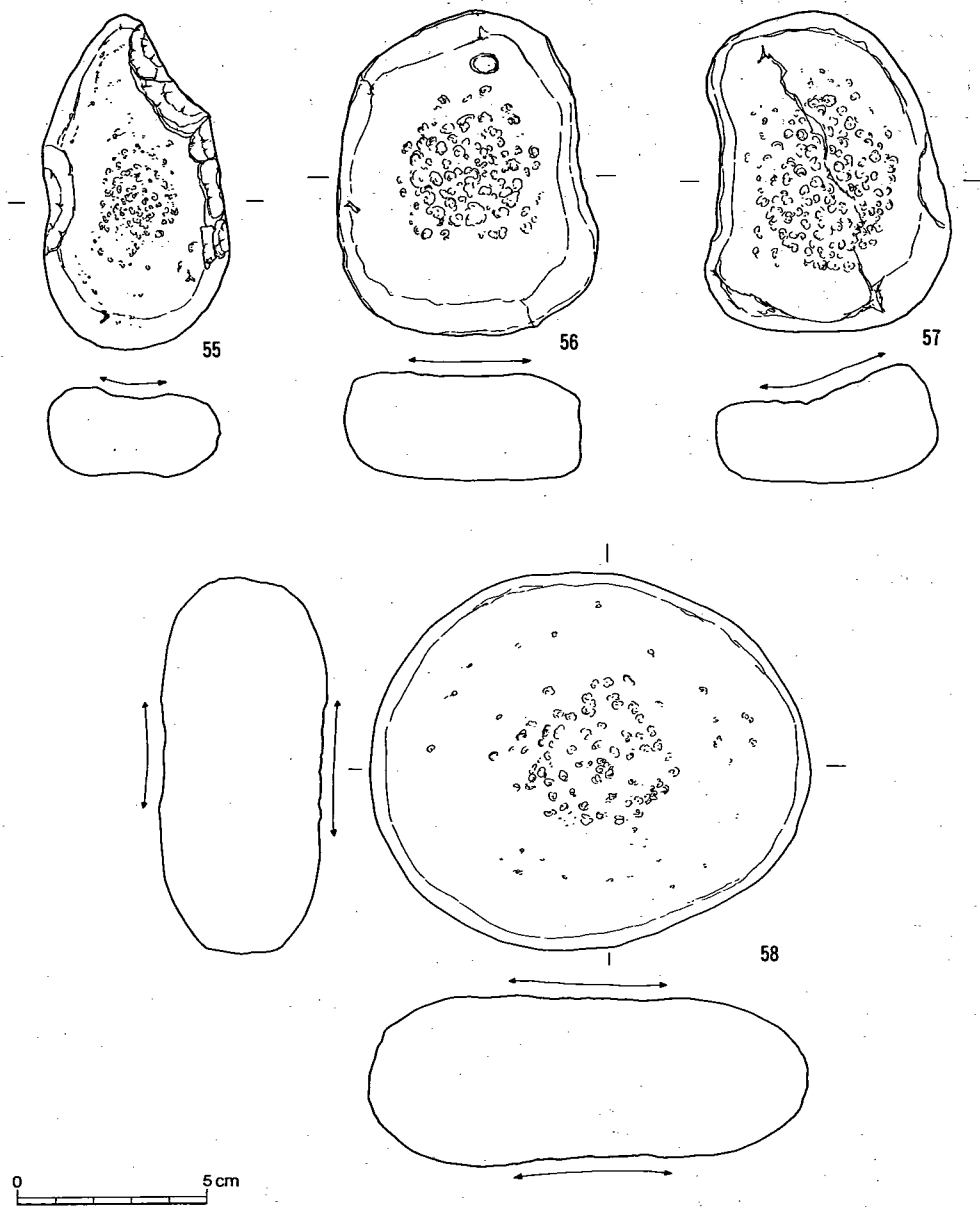
第 43 图 4 号竖穴住居跡出土土器実測図. 15 (1/3)



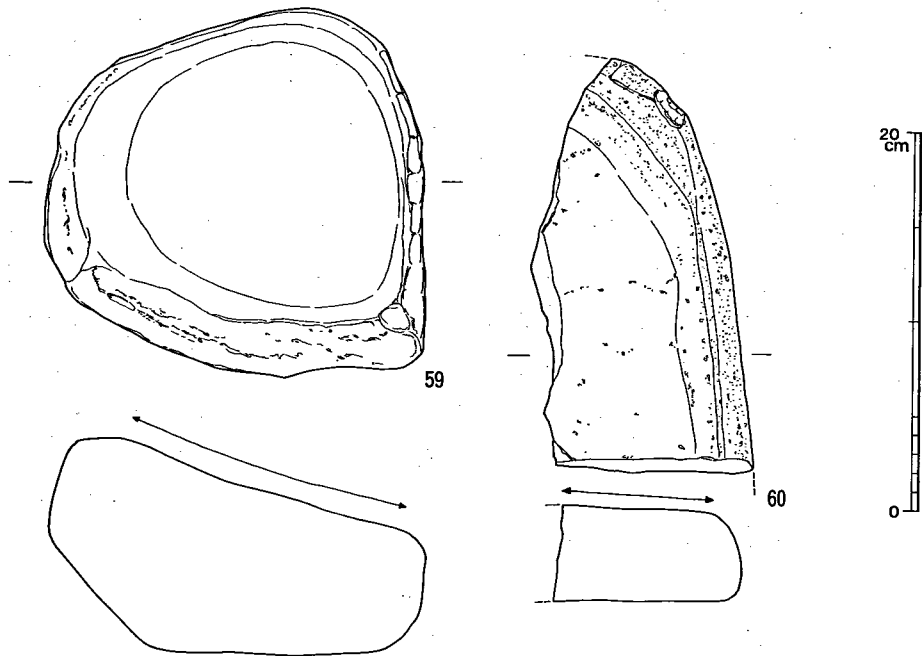
第 44 图 4号竖穴住居跡出土石器实测图.1 (25~34は2/3 35~40は1/2)



第 45 图 4 号竖穴住居跡出土石器実測图. 2 (1/2)



第 46 图 4 号竖穴住居迹出土石器实测图. 3 (1/2)



第 47 図 4号竪穴住居跡出土石器実測図. 4 (1/4)

とは特徴が明らかに異なるだけに、安易に北久根山式という名称を使用することは、その地域性を埋没させることになるだけに慎重でなければならない。128～141は沈線文だけや、沈線文と縄紋や巻貝による疑似縄紋との組み合わせによる一群である。136・138・139を除いて、縄紋や巻貝疑似縄紋の後に沈線文が施される。器形は133・135・137が深鉢形に、138・139がボウル状の浅鉢形になる以外はすべて鉢形であろう。142～146は口縁部や胴部に、縄紋や巻貝疑似縄紋のみが施される一群である。口縁部の形態は内湾ぎみに丸く立ち上がるのが特徴で、器面調整はおよそナデ。147～149は口縁部と胴部に巻貝条痕文を施すことで、142～146の一群と視覚的には同じ効果をもたらしている。ただし、口縁部の形態は内湾ぎみではなく直線的であったり、肥厚させたりしている。

150～189は無文土器を中心に、ボウル状鉢・台付鉢の脚台部・底部を図示した。150は強く張る胴部の特徴から小池原上層式に属するものであろう。151は器形から三万田式に属するかもしれない。156は突帯文ではなく肥厚させた口縁部である。154・155はボウル状鉢であるが、155は平底になる。157は台付鉢もしくは台付皿の脚台部である。158～183はすべて深鉢になる。口縁部は直線的に開くかやや外反するのが主体をなすが、180～183のように内湾ぎみに丸く立ち上がるものもある。器面調整にはナデと巻貝条痕文が施されるが、後者については胴部上半や下半だったりして、部分的にしか施されない場合があるが、これは文様の効果を醸し出して

いるのかもしれない。

190～197は西平式であるが、195については西平式に後続する太郎迫式であろう。RL 縄紋が施された後に沈線文が施され、器面調整は丁寧なナデ。192の波頂部文様は3本沈線文からなる典型的な西平式である。

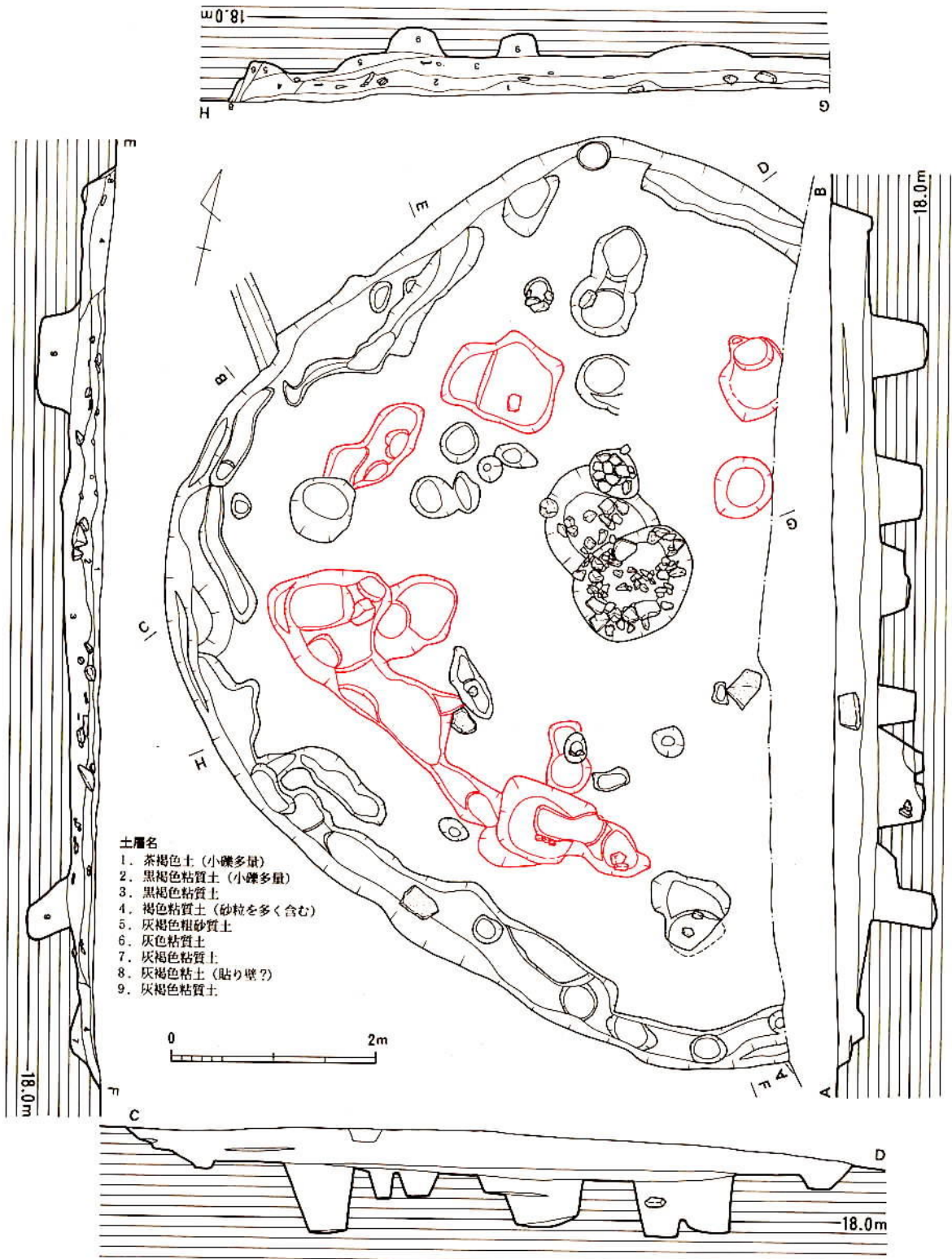
198～219は三万田式であるが、199・201については沈線文が凹線文化しており三万田式に後続する鳥井原式に属しよう。器面調整は丁寧なナデもしくは研磨で、器厚が薄くて口縁端部に平坦面を作出し、色調は全体的に黒褐色か暗褐色になるのが特徴。198・203のように口縁部の内面に1本の沈線文が施されるのが三万田式の特徴の一つ。205の穿孔は焼成後の補修孔。三万田式の無文土器に器面調整として研磨が施される場合、215のように胴部の屈曲する部分より上位の内外面にのみ施されるのが一般的である。

石器（第44～47図）石器は35点を図示した。石鏃10点のうち33・34はサヌカイト製であるが、他の8点は姫島産黒曜石製。2点の磨製石斧は蛇紋岩製で、7点の結晶片岩製打製石斧のうち40は緊縛痕と考えられる擦れたような摩滅が両側縁に窺え、基端部には階段状剥離が著しい。55は両側縁に抉りを有する石錘であるとともに、両面が使用されたくぼみ石でもある。58も両面が使用されたくぼみ石であるが、これについては全面に研磨痕の残る磨石である。59・60のように30cmを越えるような大きな石は石皿と呼ばれることが多いが、形態的には皿形を呈しているわけではないので、台石（作業台石）と呼んだほうが適当であろう。

土製円盤（第280～285図）確実に土製円盤といえるのは5点だけすべて図示しているが、西平式や三万田式の破片を転用したものはみられない。

5号竪穴住居跡（図版6・7 第48～50図）

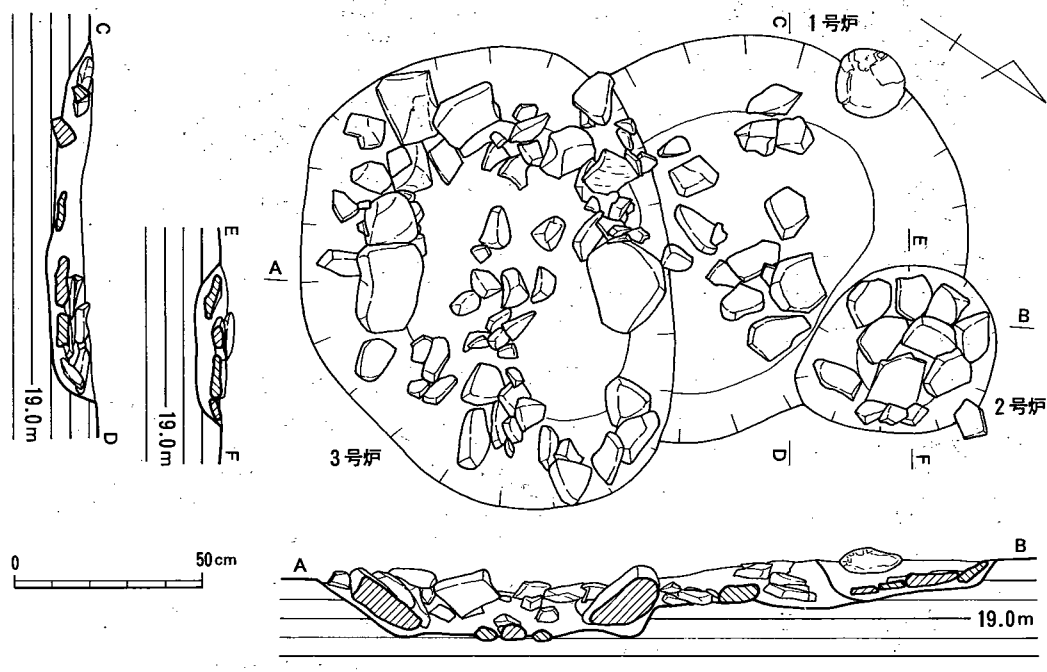
5号竪穴住居跡は調査区中央部の東端ⅧF区に位置し、6号竪穴住居跡の東3m、8号竪穴住居跡の北東2mに近接する。このあたりは包含層も薄く、ピット等も稀薄になっていたので竪穴住居跡等の検出はあまり期待できなかった。しかし、調査を進める過程で調査区の端で竪穴住居跡らしき遺構をわずかに確認したため、地権者の協力を得て調査区を拡張し、遺構の性格究明を図った。それでも竪穴住居跡の全体を検出することはできなかったが、平面プランは8.8×7.7mを若干上回るほどの大きな隅丸方形になることが予想された。深さは最大で40cmと本遺跡にあっては最も遺存状態の良好な住居跡である。床面中央部には大小3基の石組炉跡（第50図）が検出されたが、これらは切り合い関係を有しており、最も先行するものを1号炉跡、1号を切る2基の石組炉跡のうち小さいものを2号炉跡、大きいものを3号炉跡とした。1号はすでに石がかなり抜かれており、また2・3号に切られているためその全体像は不明であるが、120×100×15cm程度の規模を有していたと考えられる。2号は底面に石が敷かれており、55×45×10cmを測る。3号もかなり石が抜かれたような状態であるが、規模的には125×95×15cmと本遺跡においては最も大きい。2号と3号については検出状態から先後関係を判定



第 48 图 5号竖穴住居跡実测图



第 49 図 5 号竪穴住居跡 3 層下部および 4 層遺物出土状態実測図 (1/60)

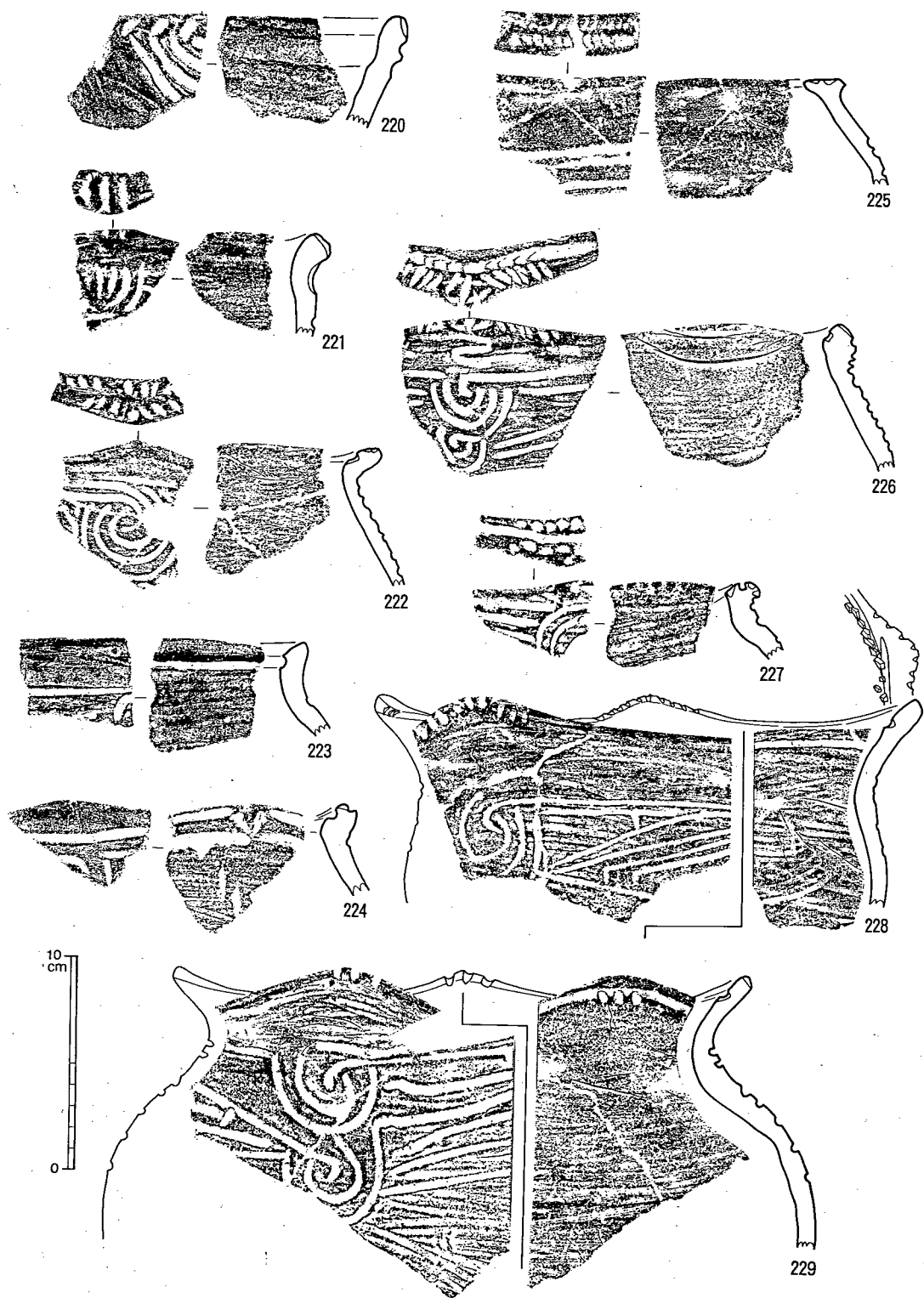


第 50 図 5号竪穴住居跡実測図 (1/20)

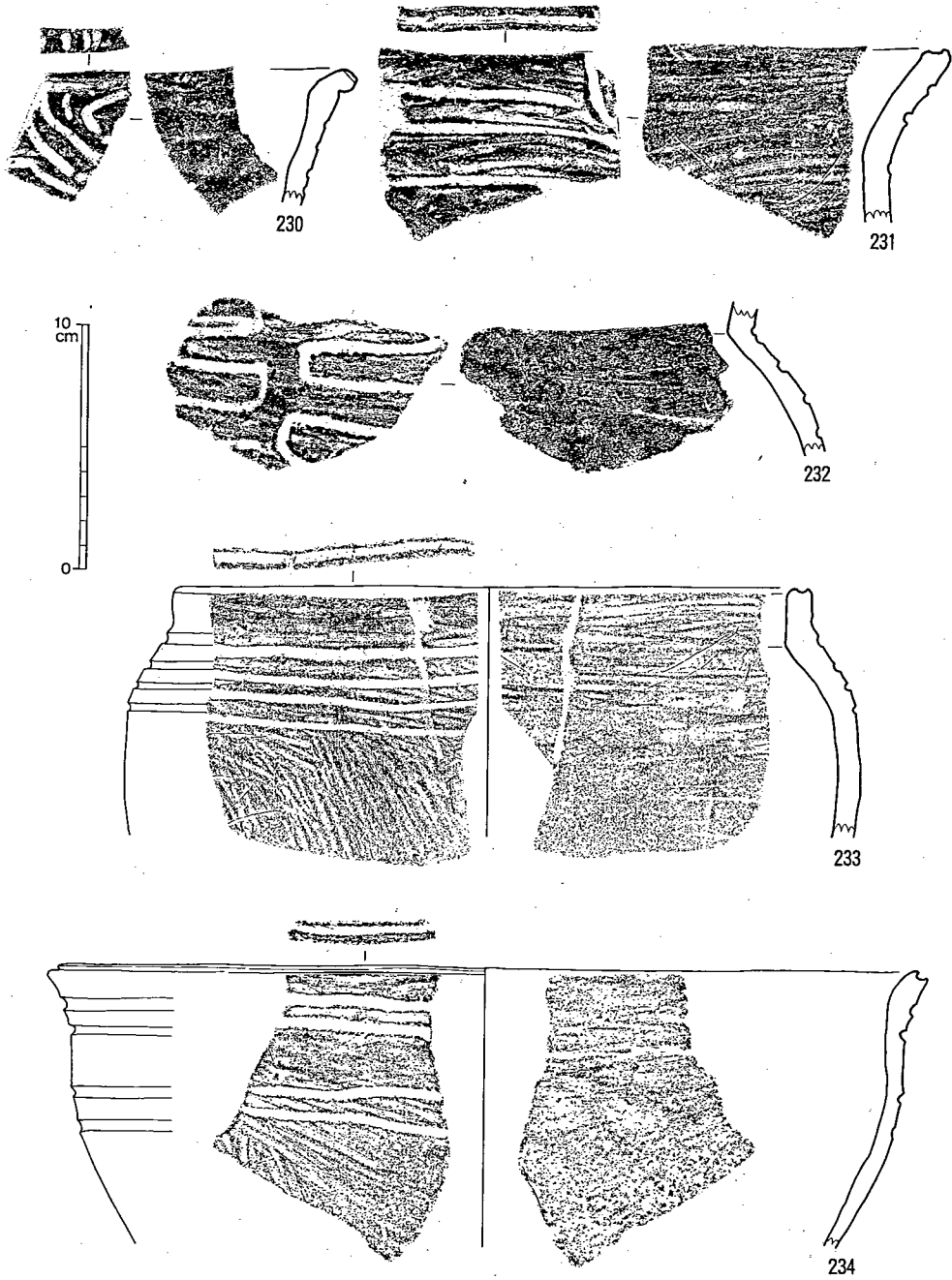
することはできず、あるいは同時共存していて用途の違いが存在していた可能性も否定できない。支柱穴については3本しか検出できていないが、その位置関係から本来は4本で、残りの1本は調査区外に存在していると考えられる。いずれも径60~70cm、深さも60~70cmとかなり大きい。また、これらの支柱穴には切られるものの、支柱穴と支柱穴を繋ぐような位置関係で幅20~30cm、深さ20cm程度の溝が検出されたが、その機能については必ずしも明確ではなく取りあえず内溝として遺物の取り上げを行なった。壁に沿って部分的に切れることはあるものの、幅10~25cm、深さ5~10cm程度の浅い周溝も検出されている。壁は直線的に立ち上がることはなく、緩やかに開くようになる。この壁には土層断面図で6・8層とした灰色粘質土や灰褐色粘土が厚さ2~5cm程度でほぼ全面に巡るが、あるいは貼り壁的な機能を有していたものであるかもしれない。

以上のように、複数の石組炉跡の存在から竪穴住居の建て替えや拡張の可能性も想定されるが、支柱穴においては1軒分しか確認されておらず、また4・5層も自然堆積的な状況であり、必ずしもすべての面においてその可能性を肯定するものではない。

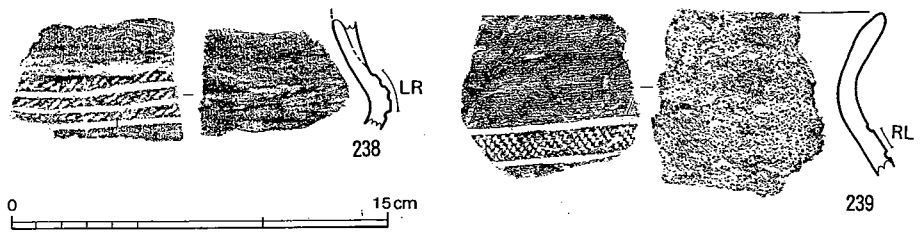
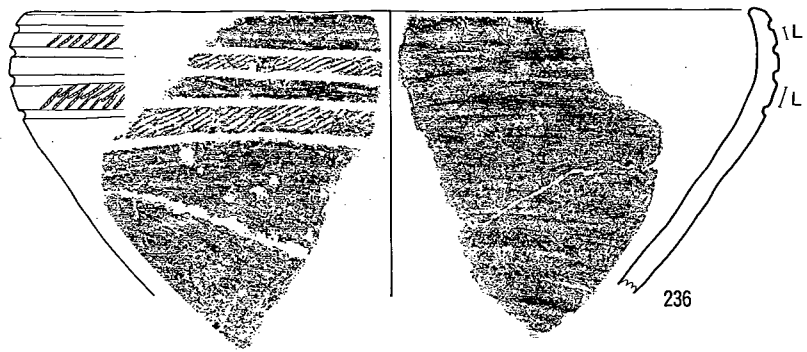
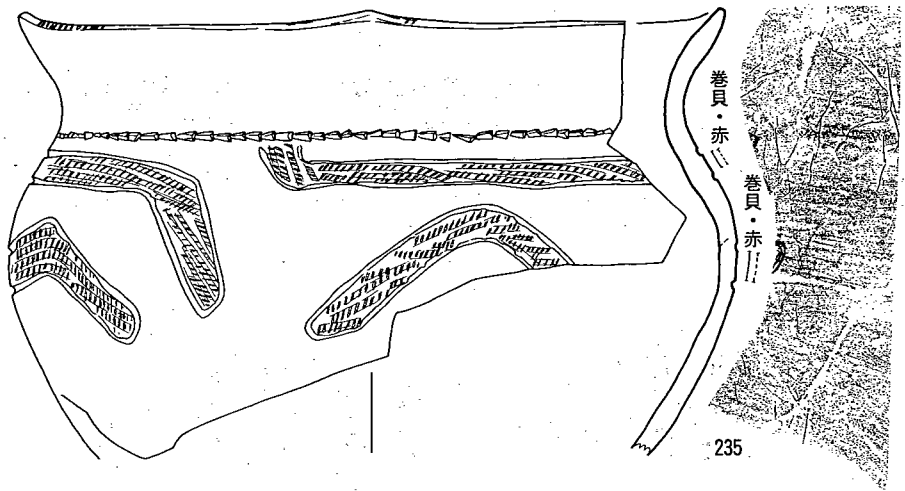
実際の調査では土層断面を残しながら層位的に遺物を取り上げ、本住居跡の埋没過程を把握することを試みた。遺物の出土はパンケースで63箱と膨大で、本遺跡においては最高の出土量をみた。1層は小礫を多量に含む茶褐色土。2・3層は土層断面図を作成する時点で分層した



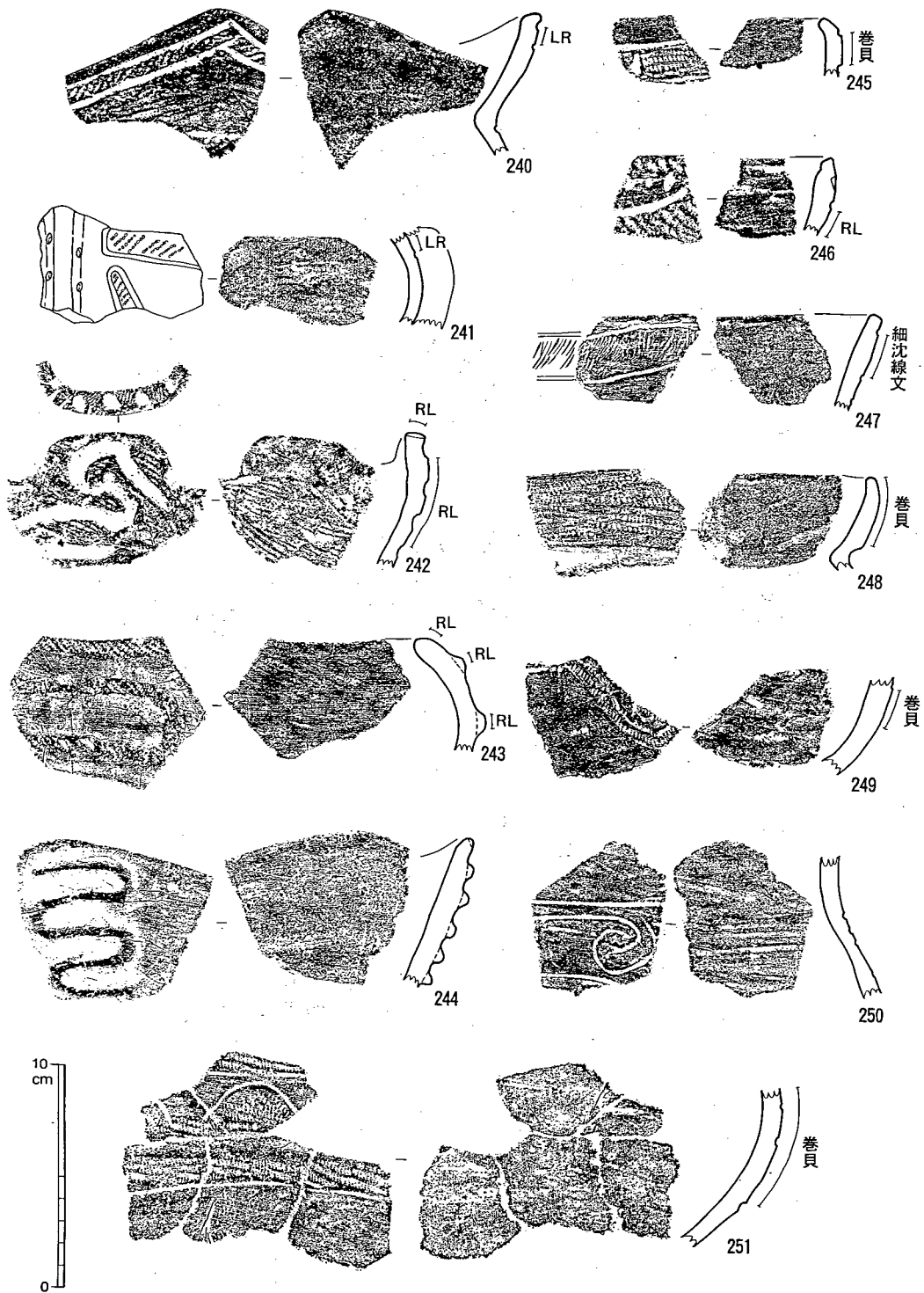
第 51 图 5 号竖穴住居迹 1 层出土土器实测图. 1 (1/3)



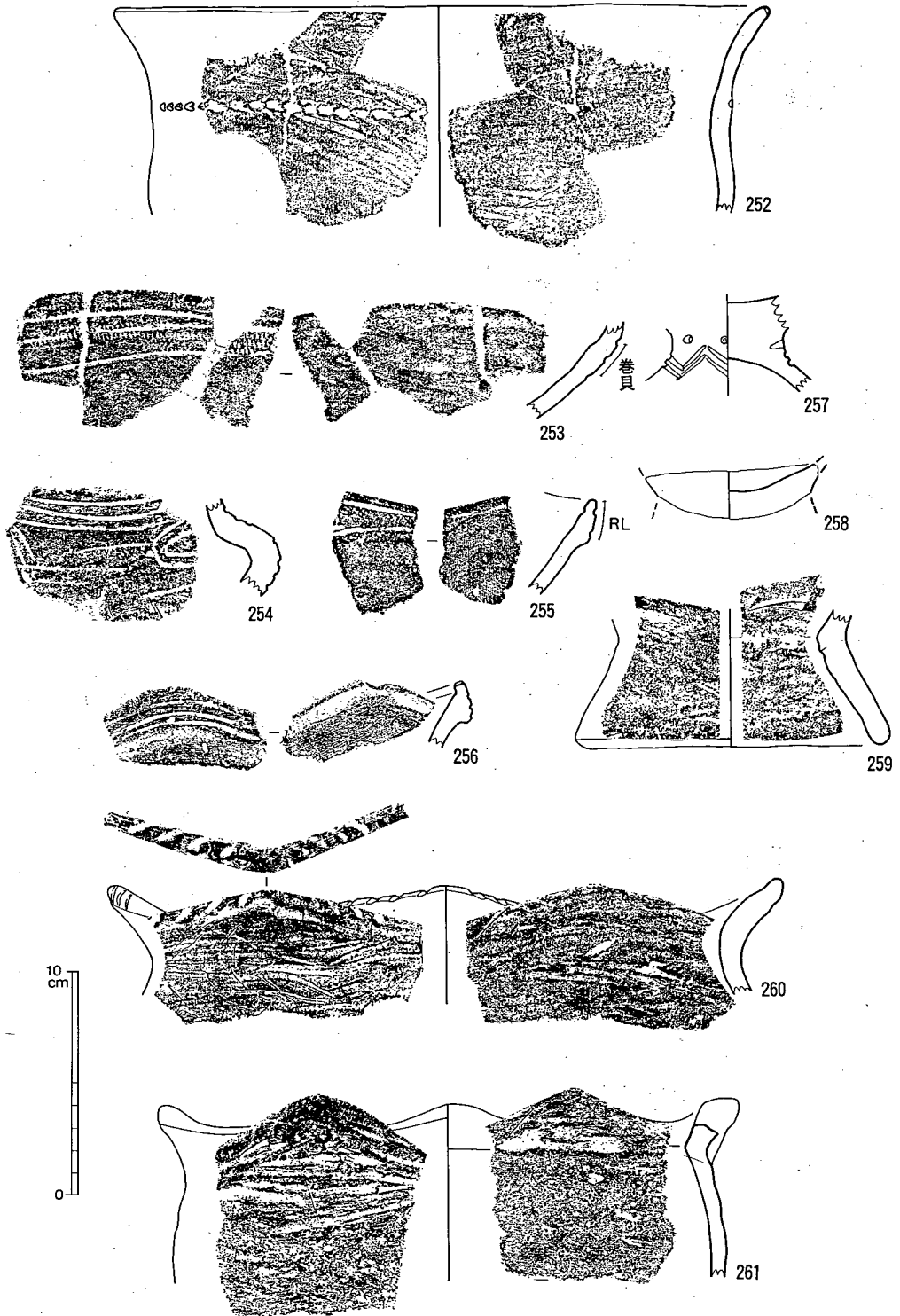
第 52 图 5 号竖穴住居跡 1 層出土土器実測图. 2 (1/3)



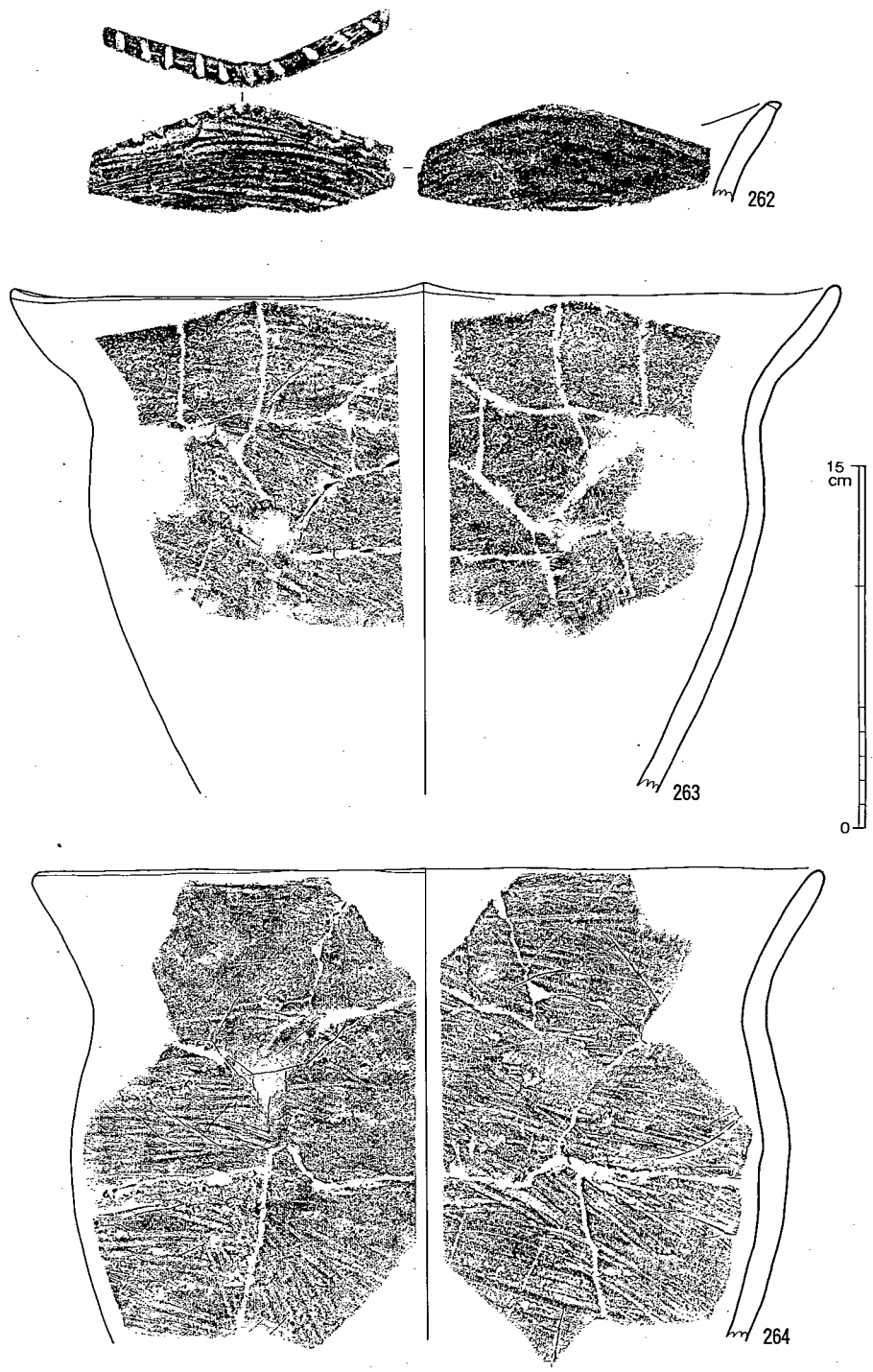
第 53 图 5 号竖穴住居跡 1 層出土土器实测图. 3 (1/3)



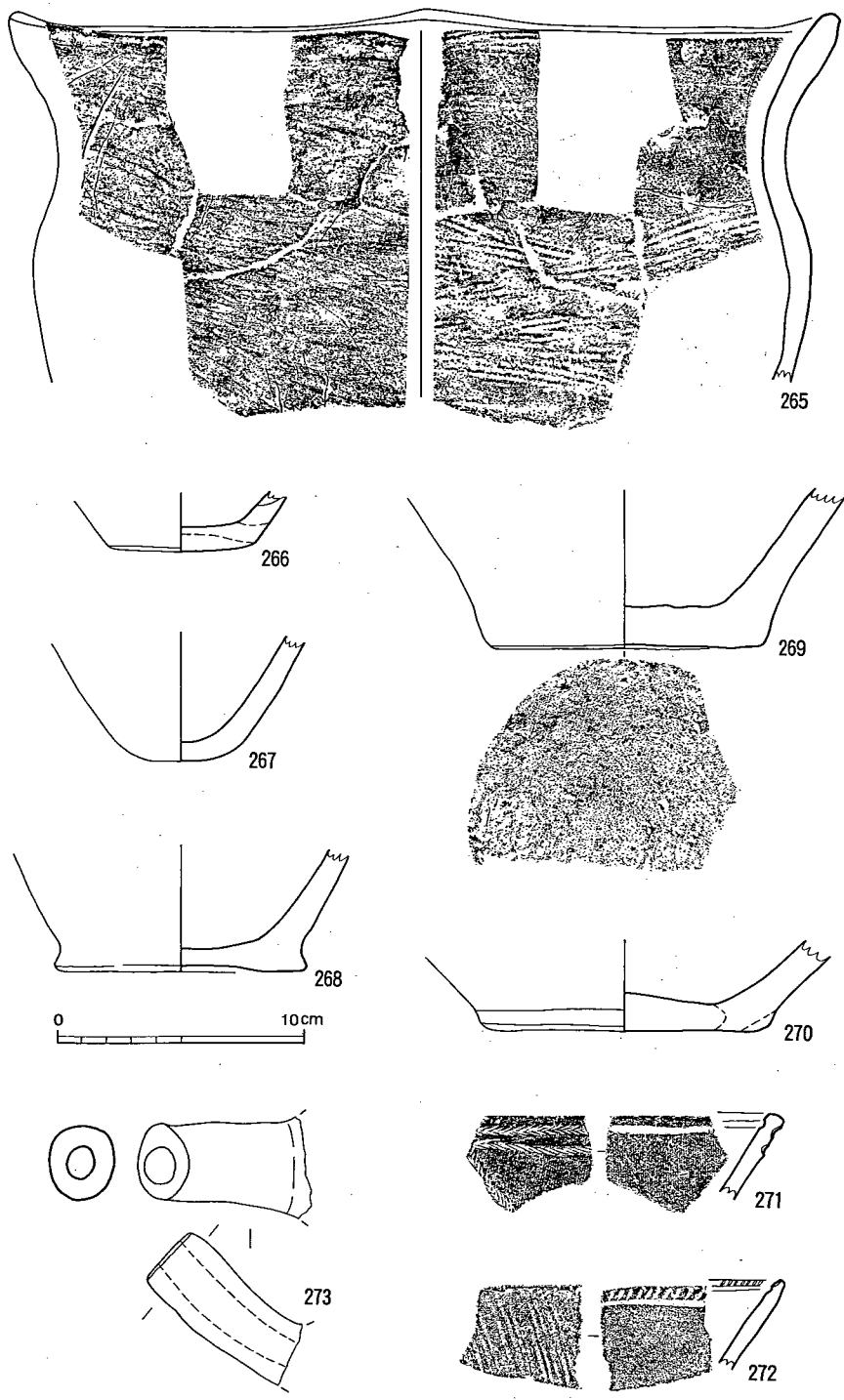
第 54 图 5号竖穴住居跡1層出土土器実測图. 4 (1/3)



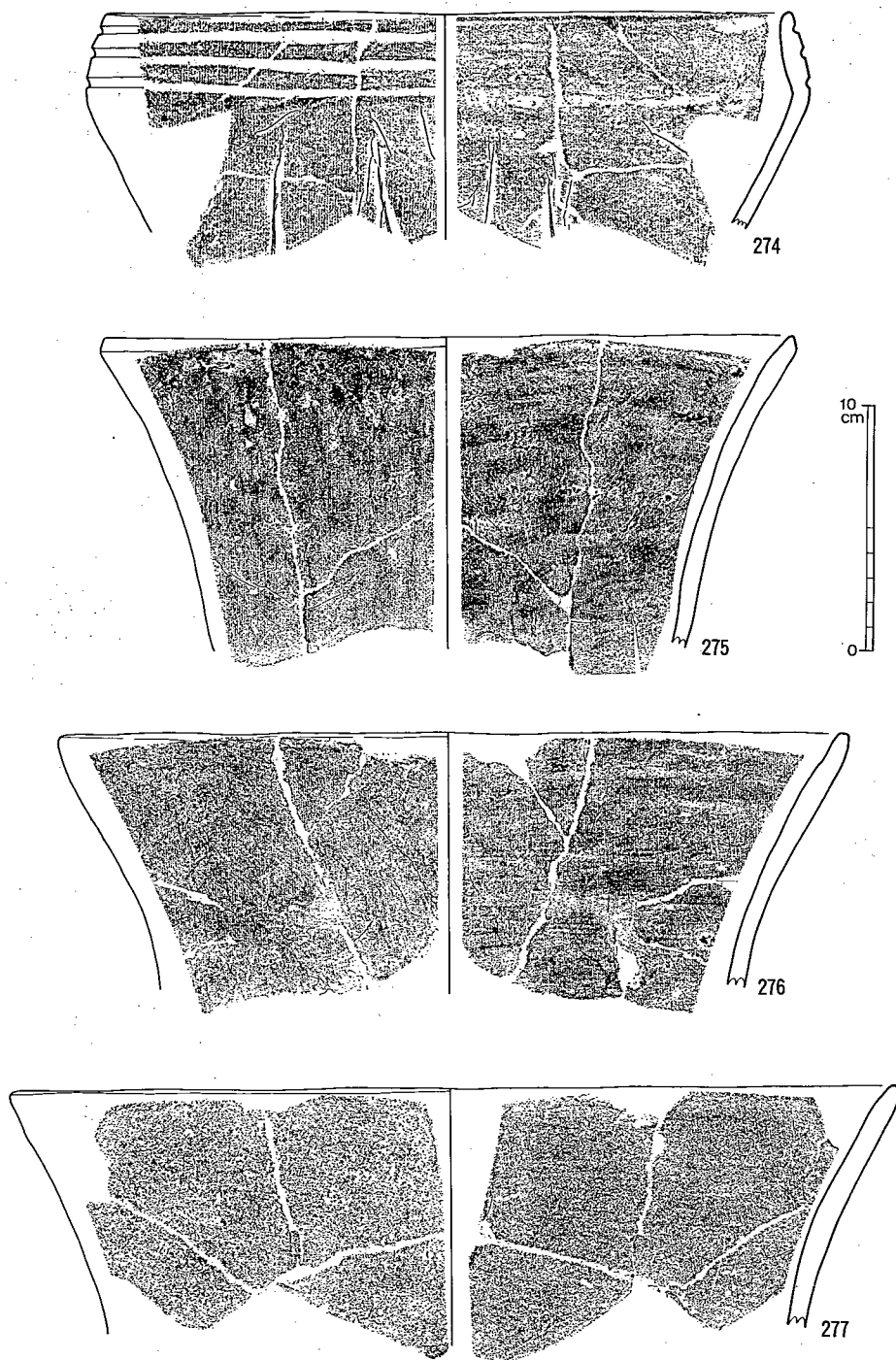
第 55 图 5 号竖穴住居跡 1 層出土土器実測图. 5 (1/3)



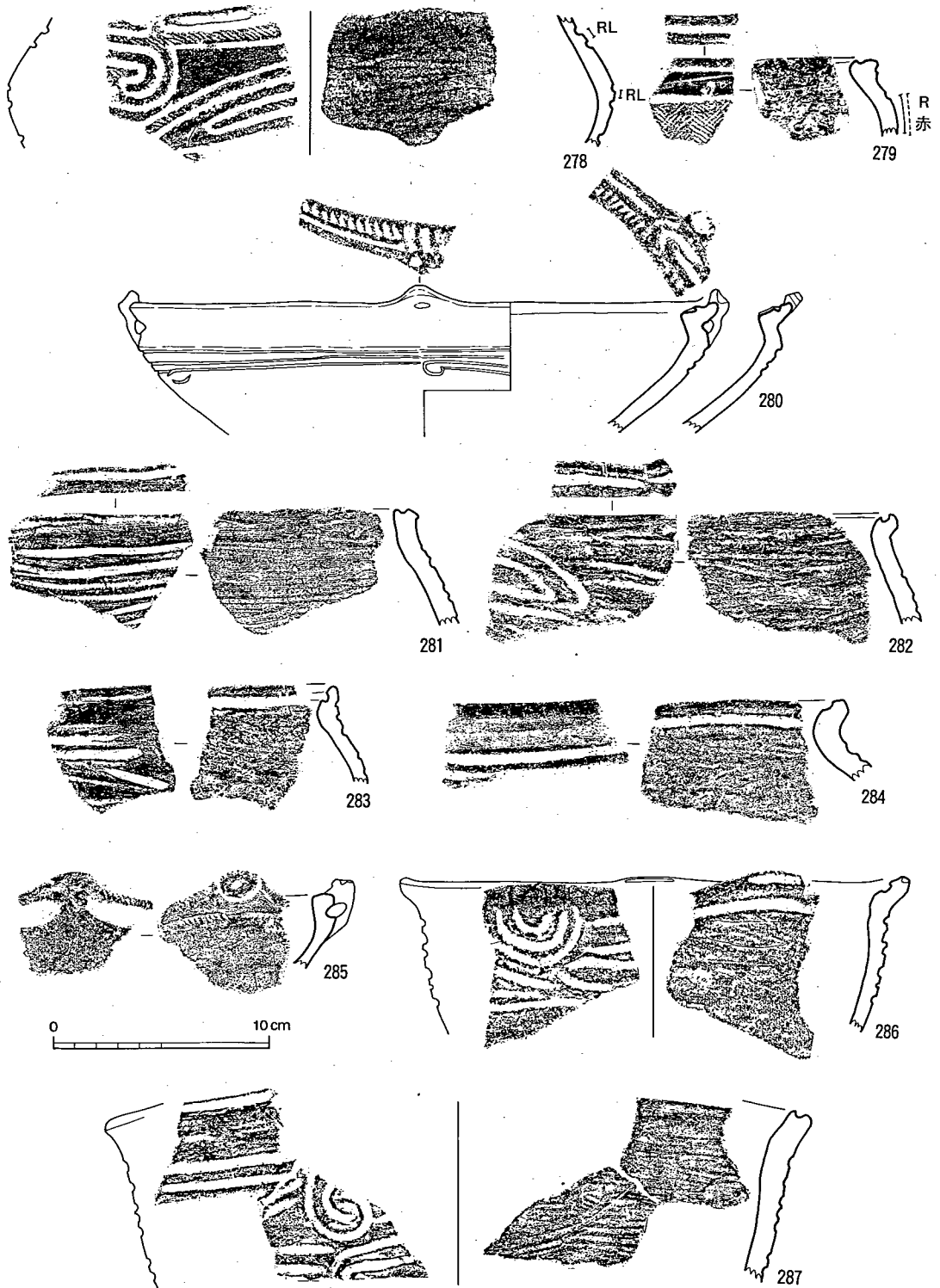
第 56 图 5 号竖穴住居跡 1 層出土土器実測図. 6 (1/3)



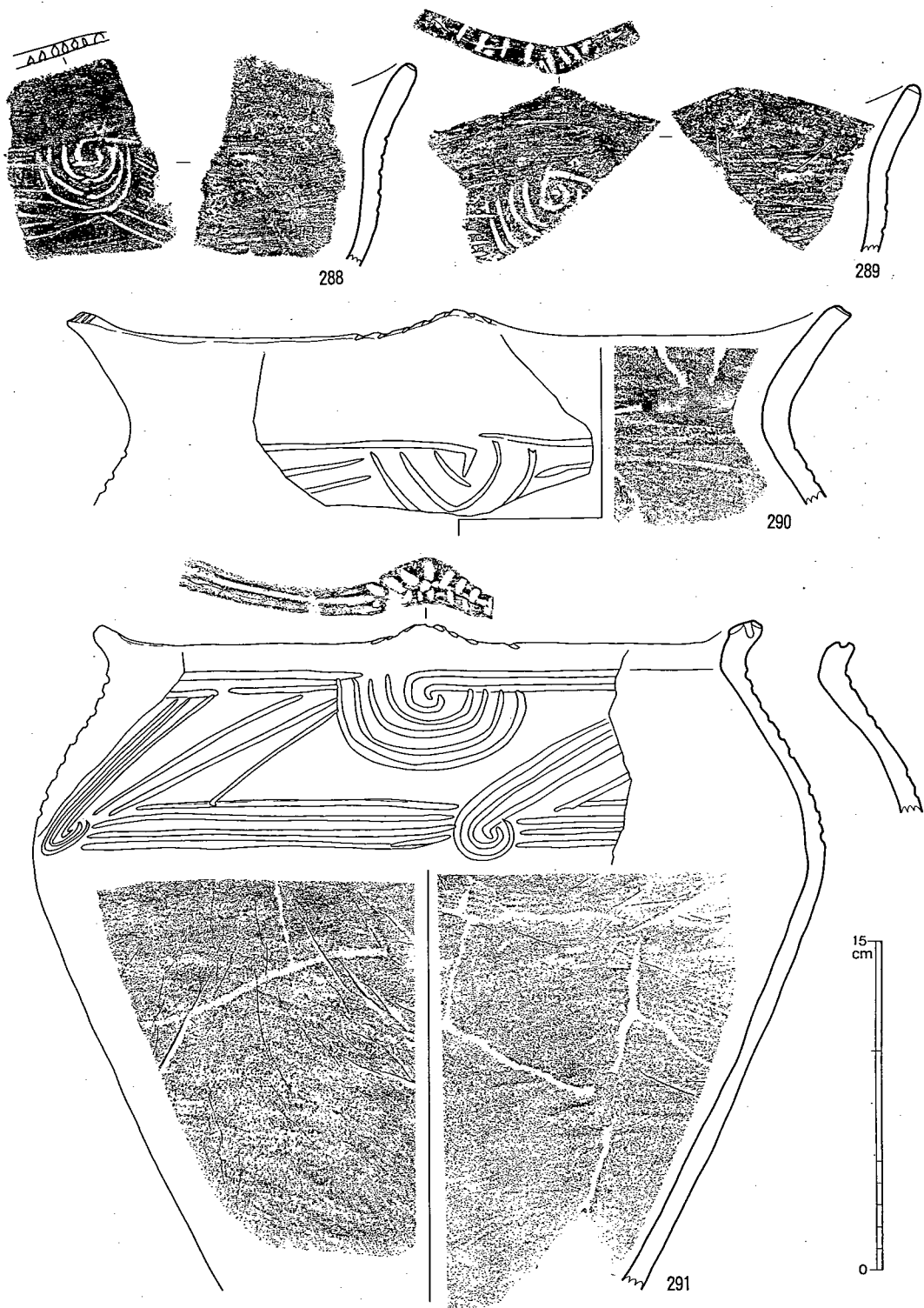
第 57 图 5 号竖穴住居跡 1 層出土土器実測图. 7 (1/3)



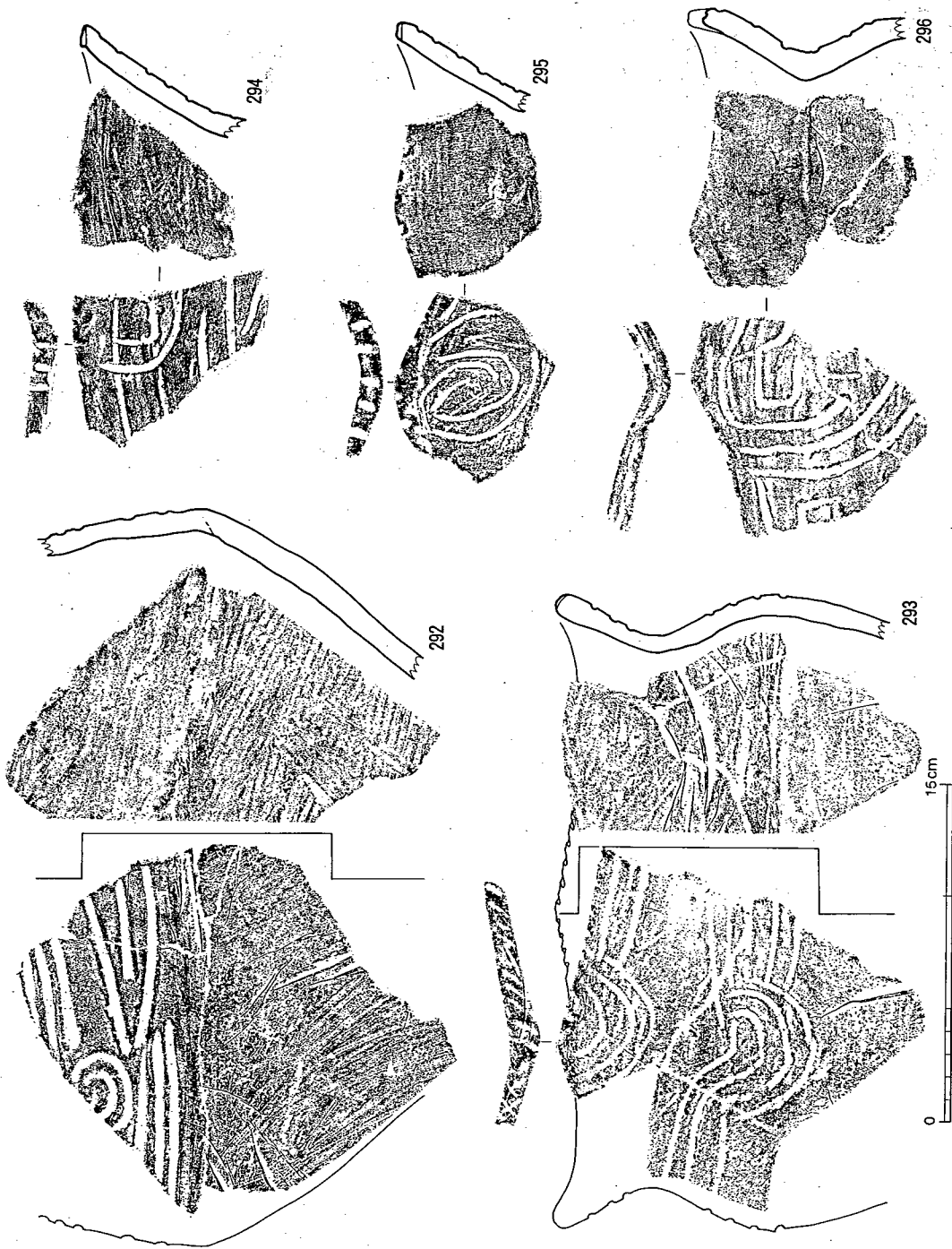
第 58 图 5 号竖穴住居跡 1 層出土土器実測图. 8 (1/3)



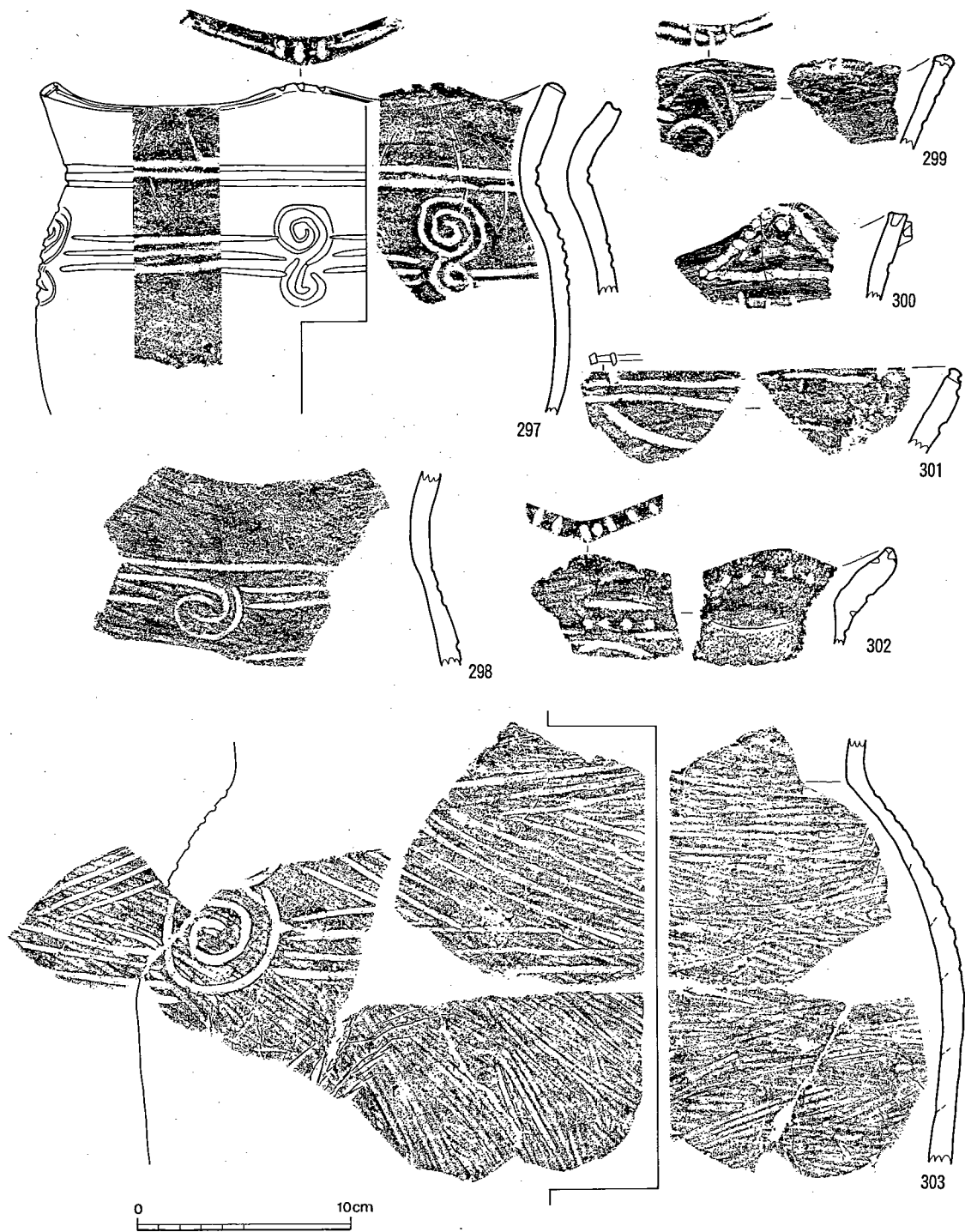
第 59 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 1 (1/3)



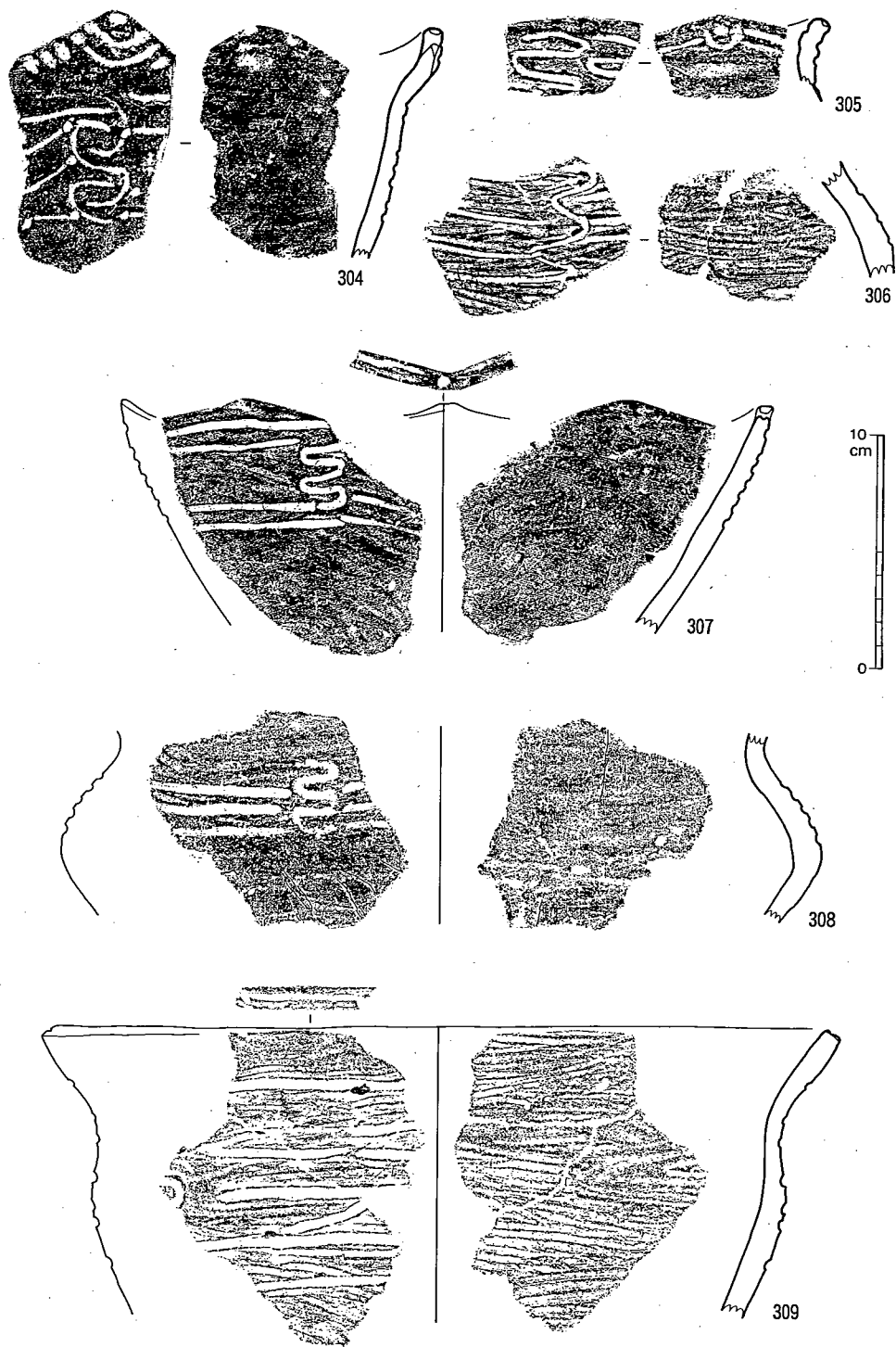
第 60 图 5 号竖穴住居迹 2·3 层出土土器实测图. 2 (1/3)



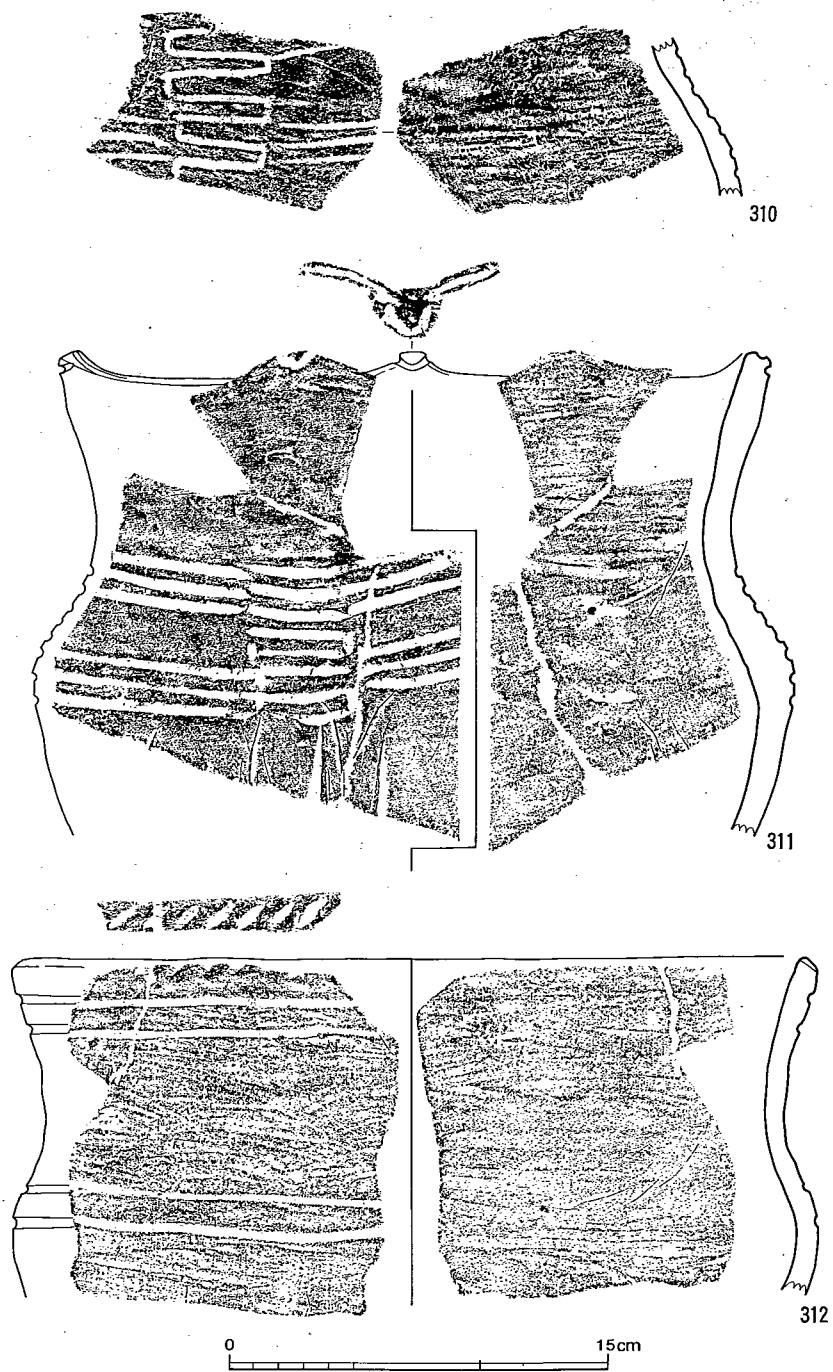
第 61 图 5 号竖穴住居迹 2·3 层出土土器美测图. 3 (1/3)



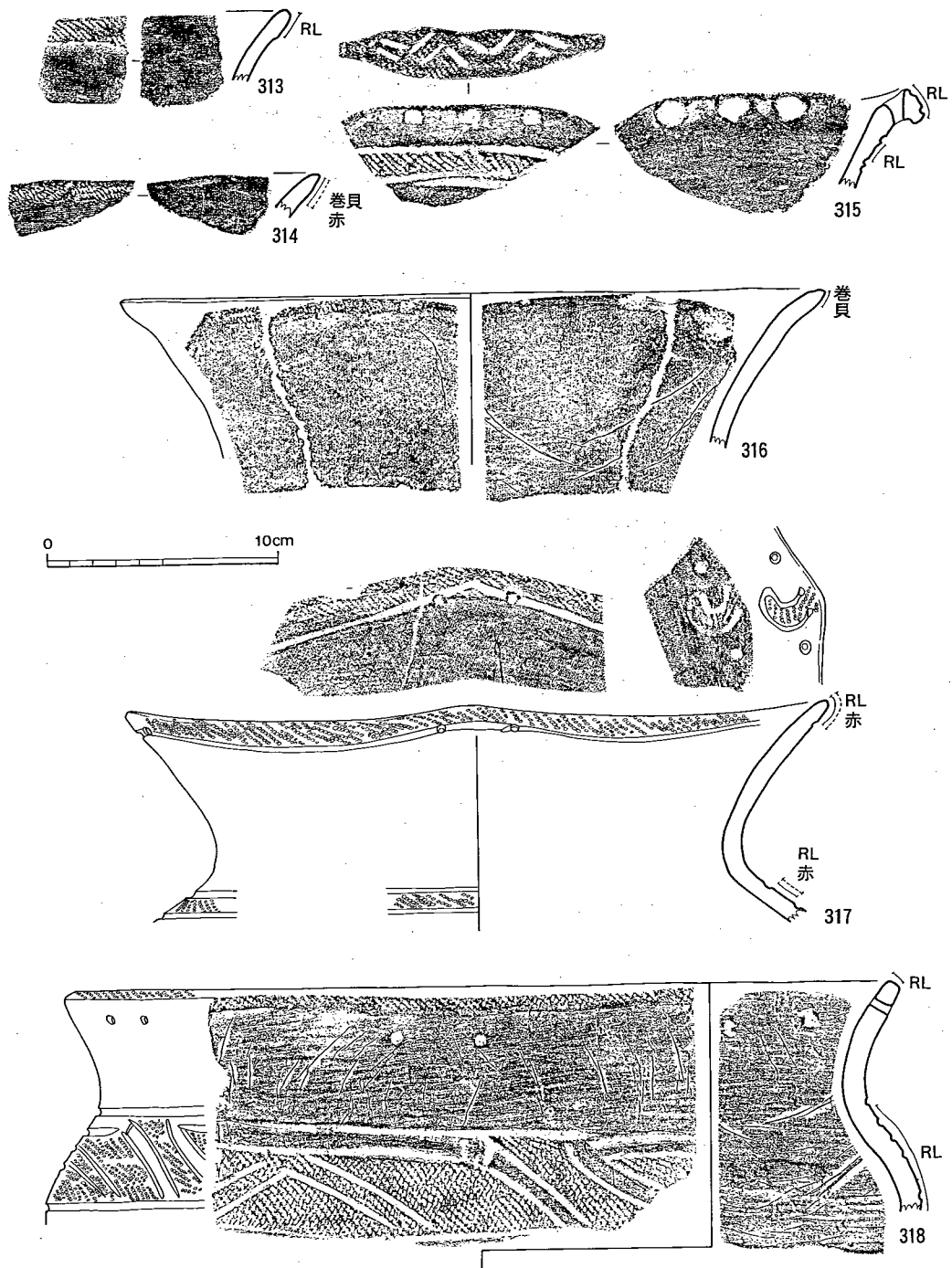
第 62 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器实测图. 4 (1/3)



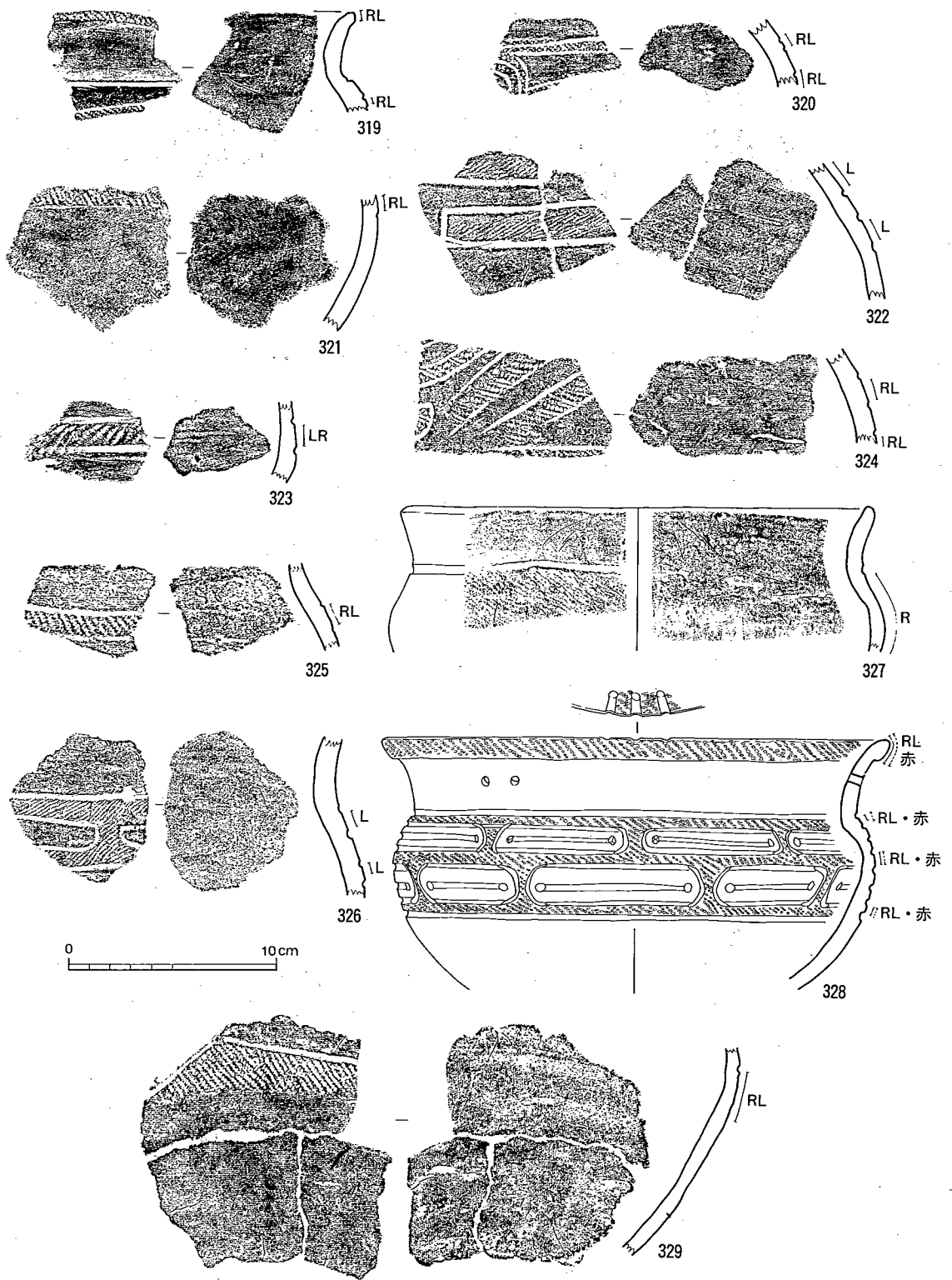
第 63 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器实测图. 5 (1/3)



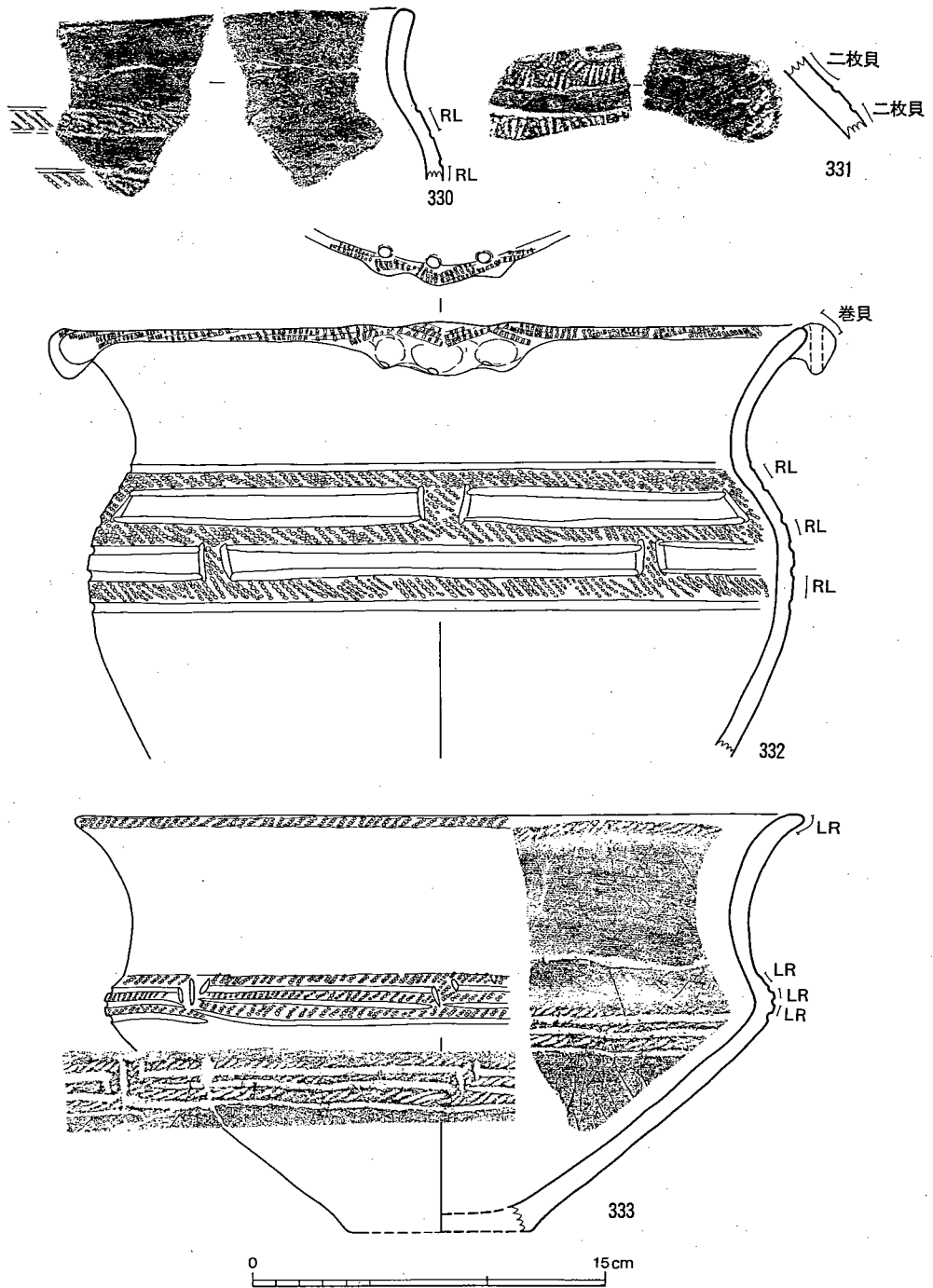
第 64 图 5号竖穴住居跡 2・3層出土土器実測图.6 (1/3)



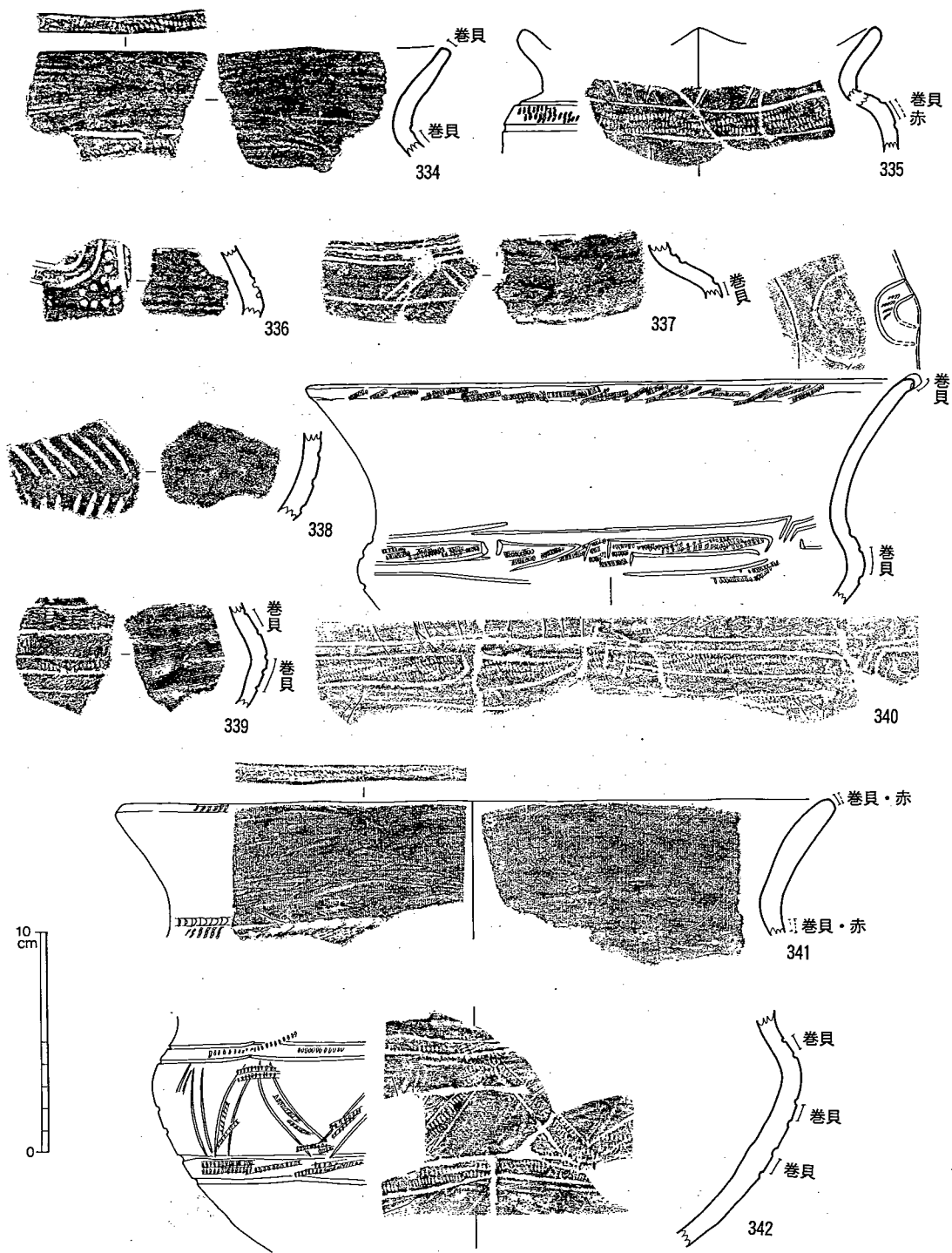
第 65 图 5 号竖穴住居迹 2・3 层出土土器实测图. 7 (1/3)



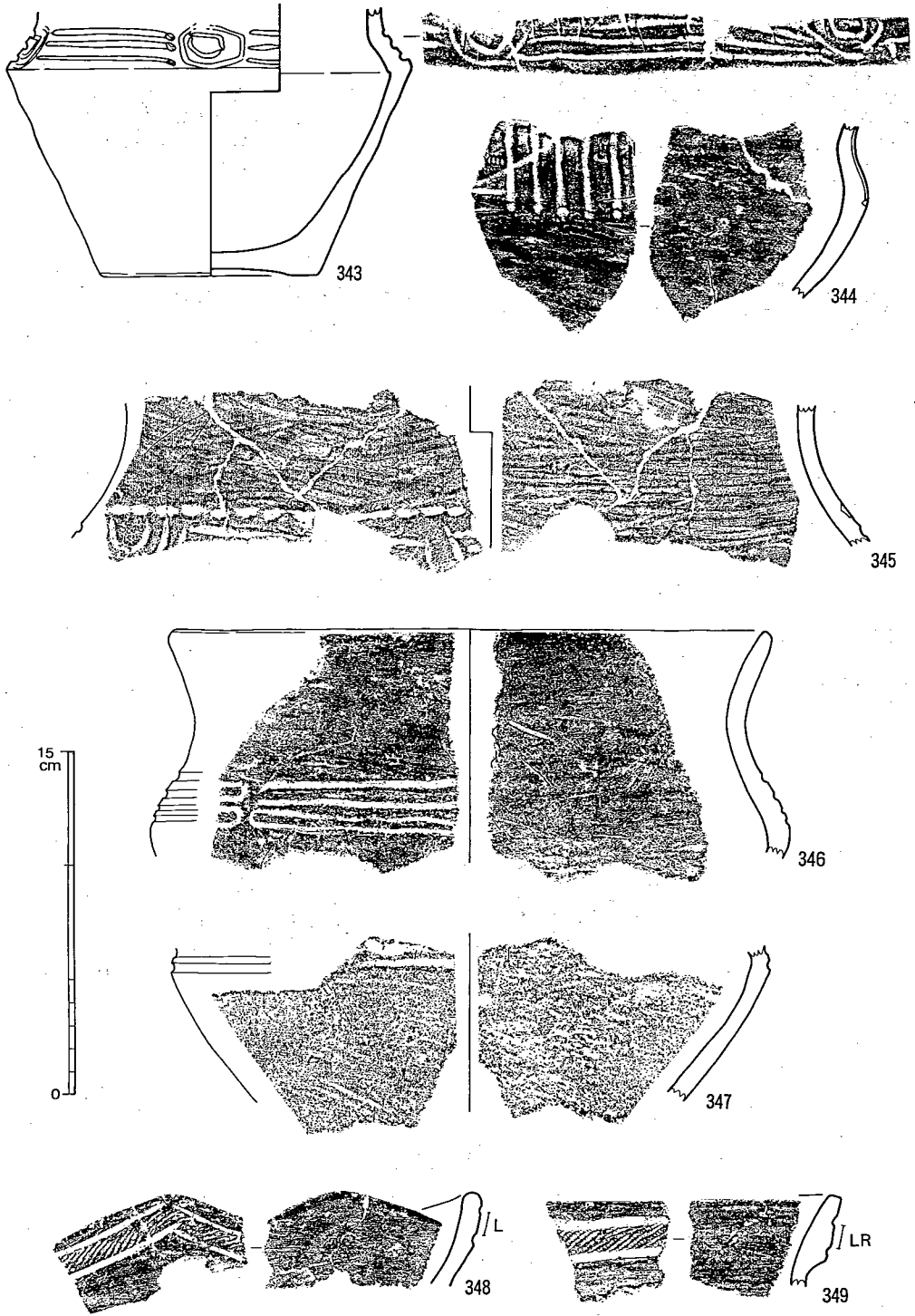
第 66 图 5 号竖穴住居跡 2·3 層出土土器実測図. 8 (1/3)



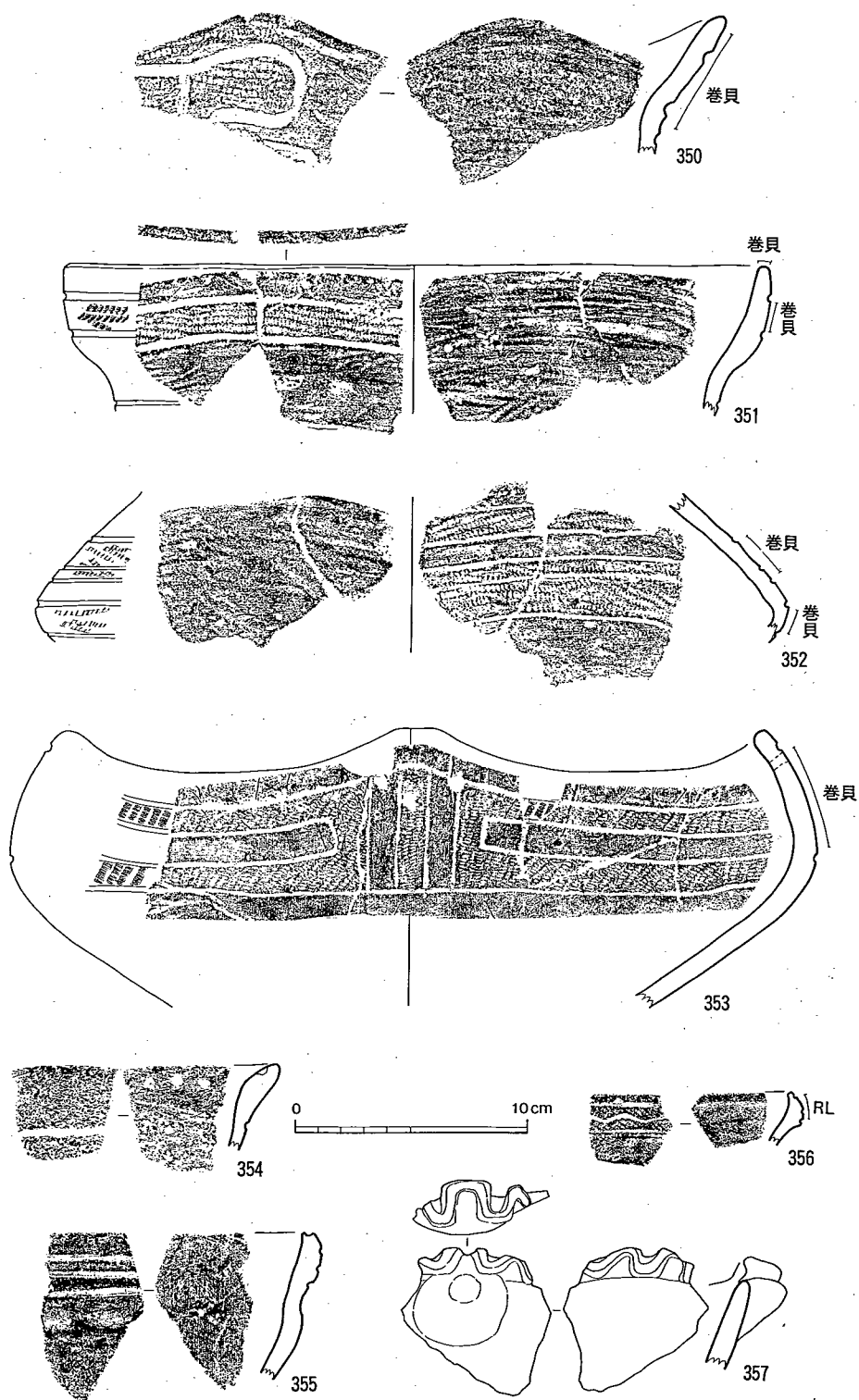
第 67 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測图. 9 (1/3)



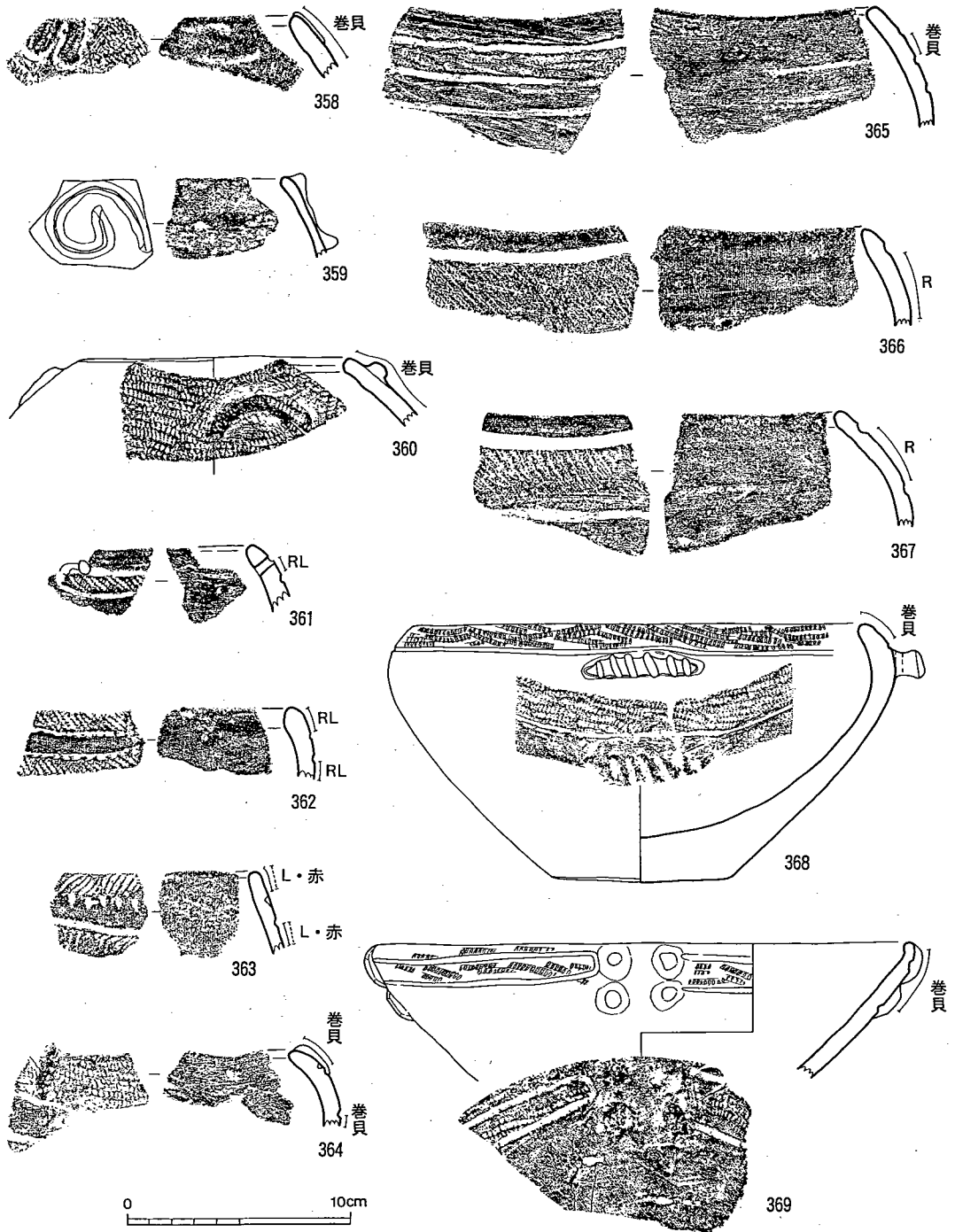
第 68 图 5号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 10 (1/3)



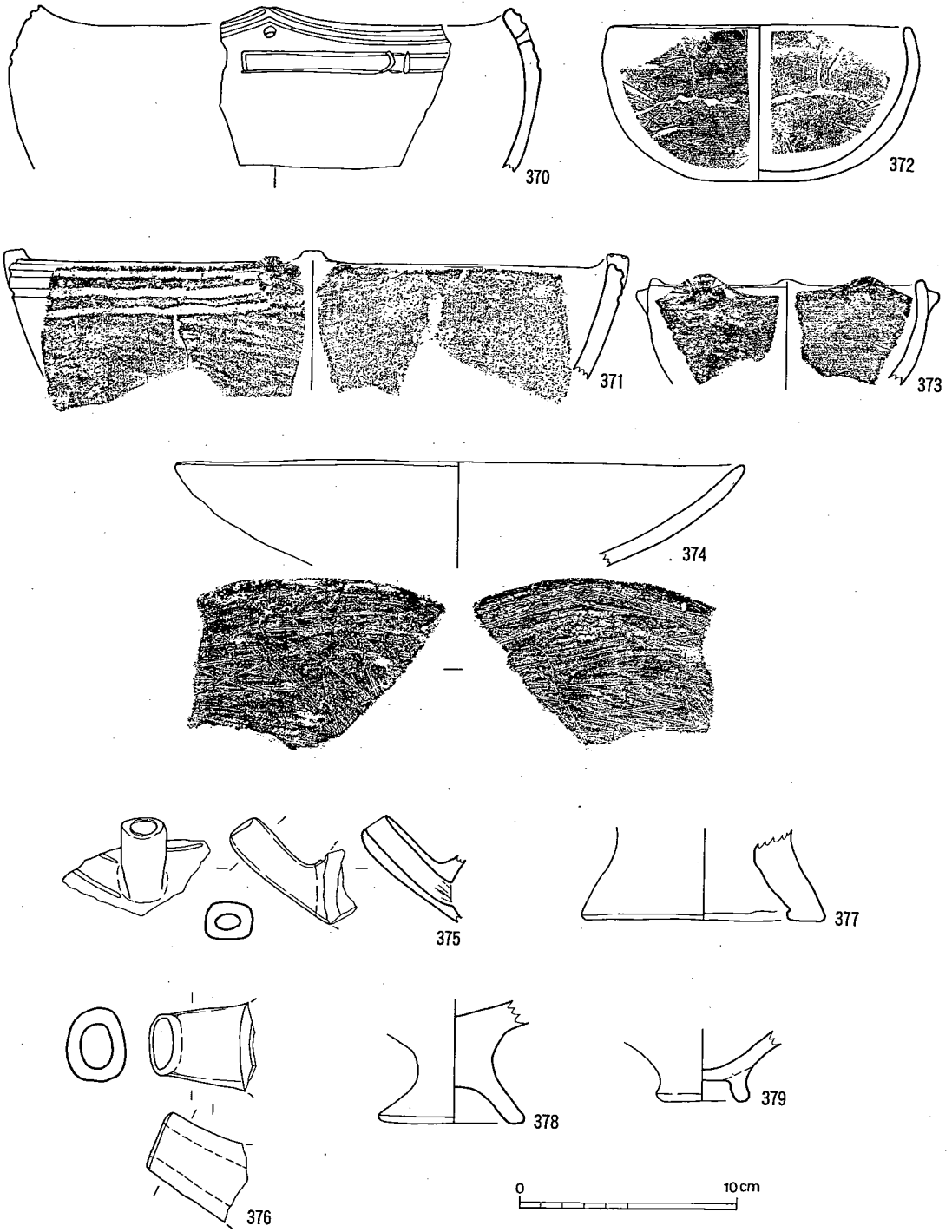
第 69 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 11 (1/3)



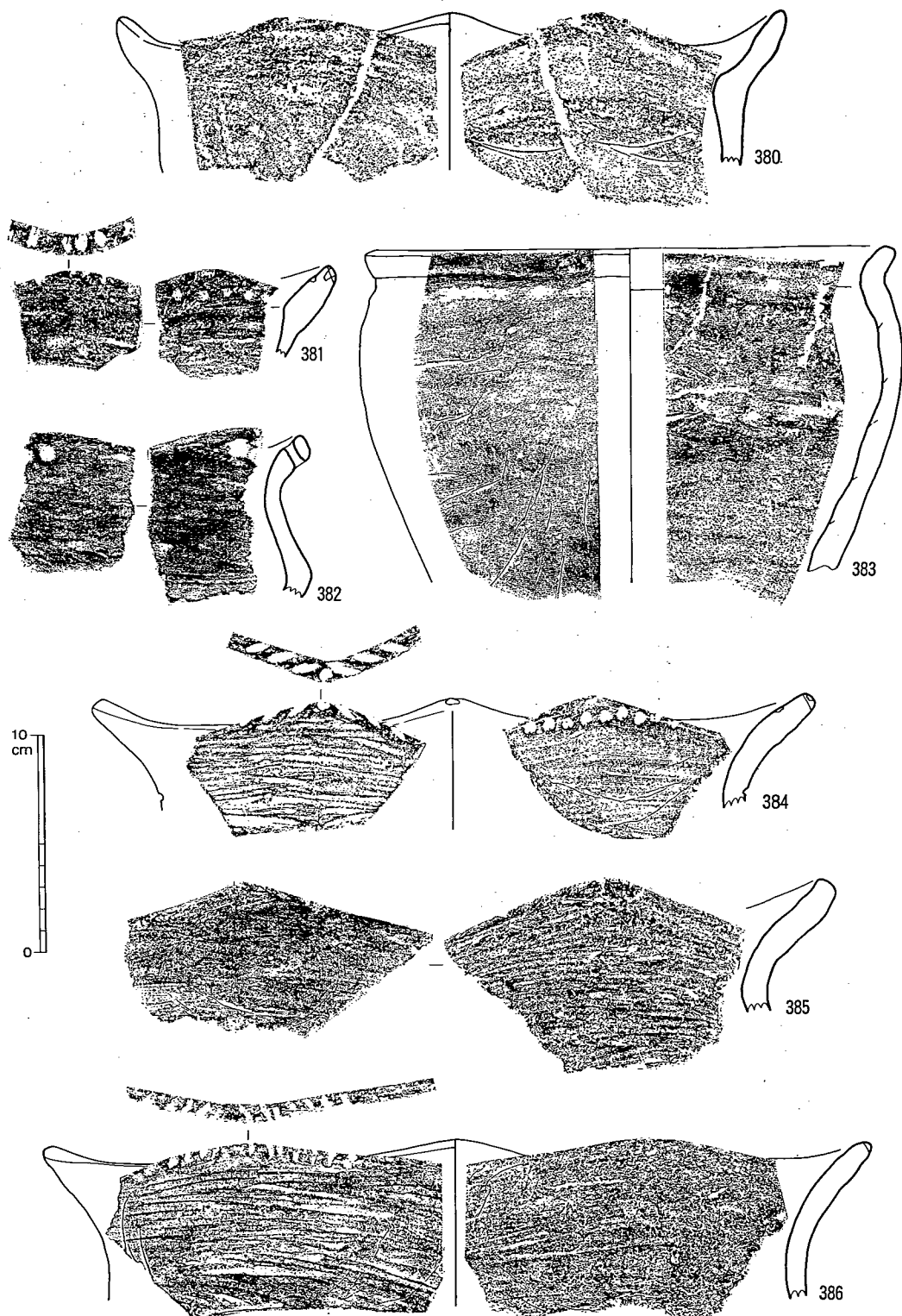
第 70 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 12 (1/3)



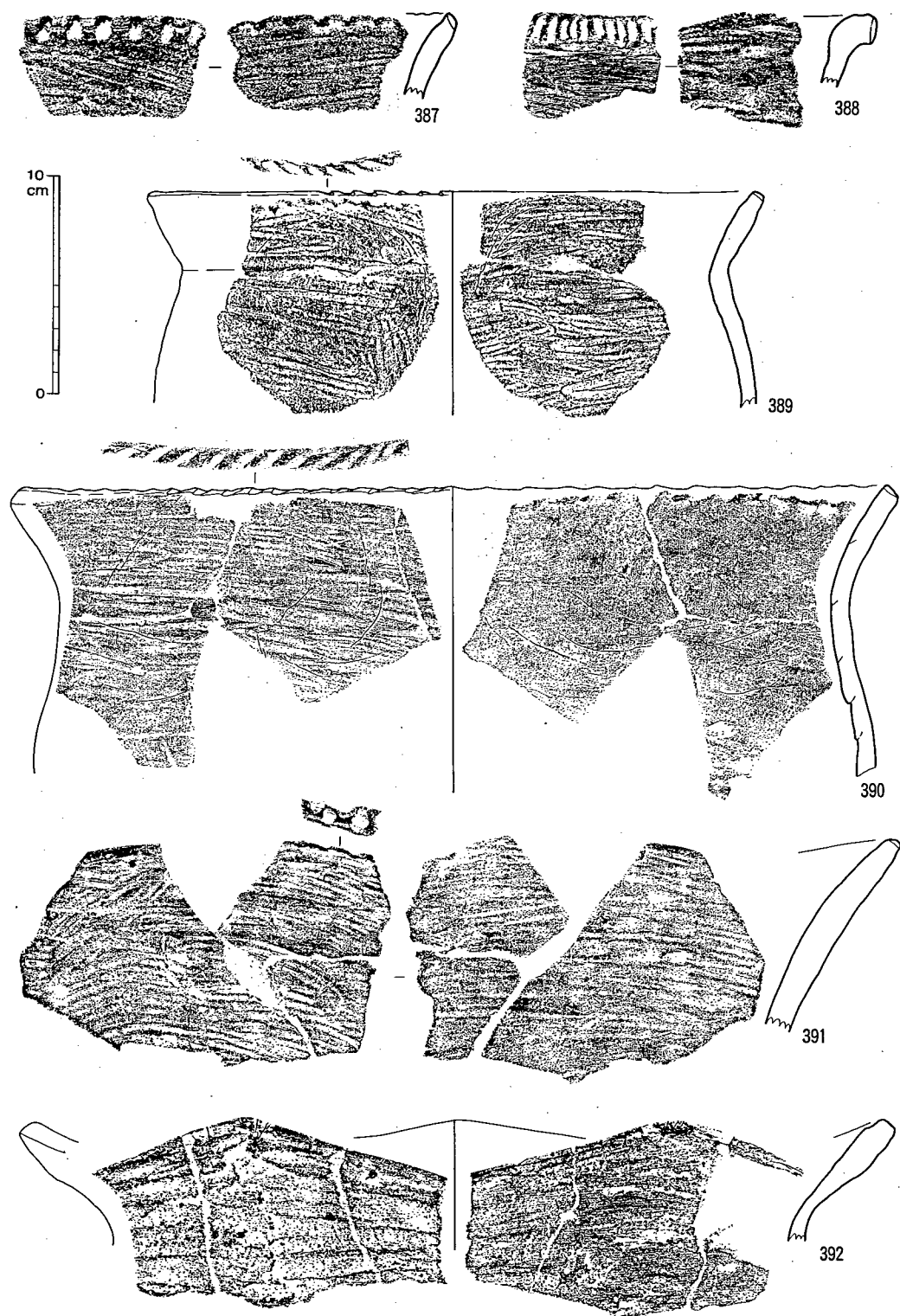
第 71 图 5号竖穴住居跡 2・3層出土土器実測図. 13 (1/3)



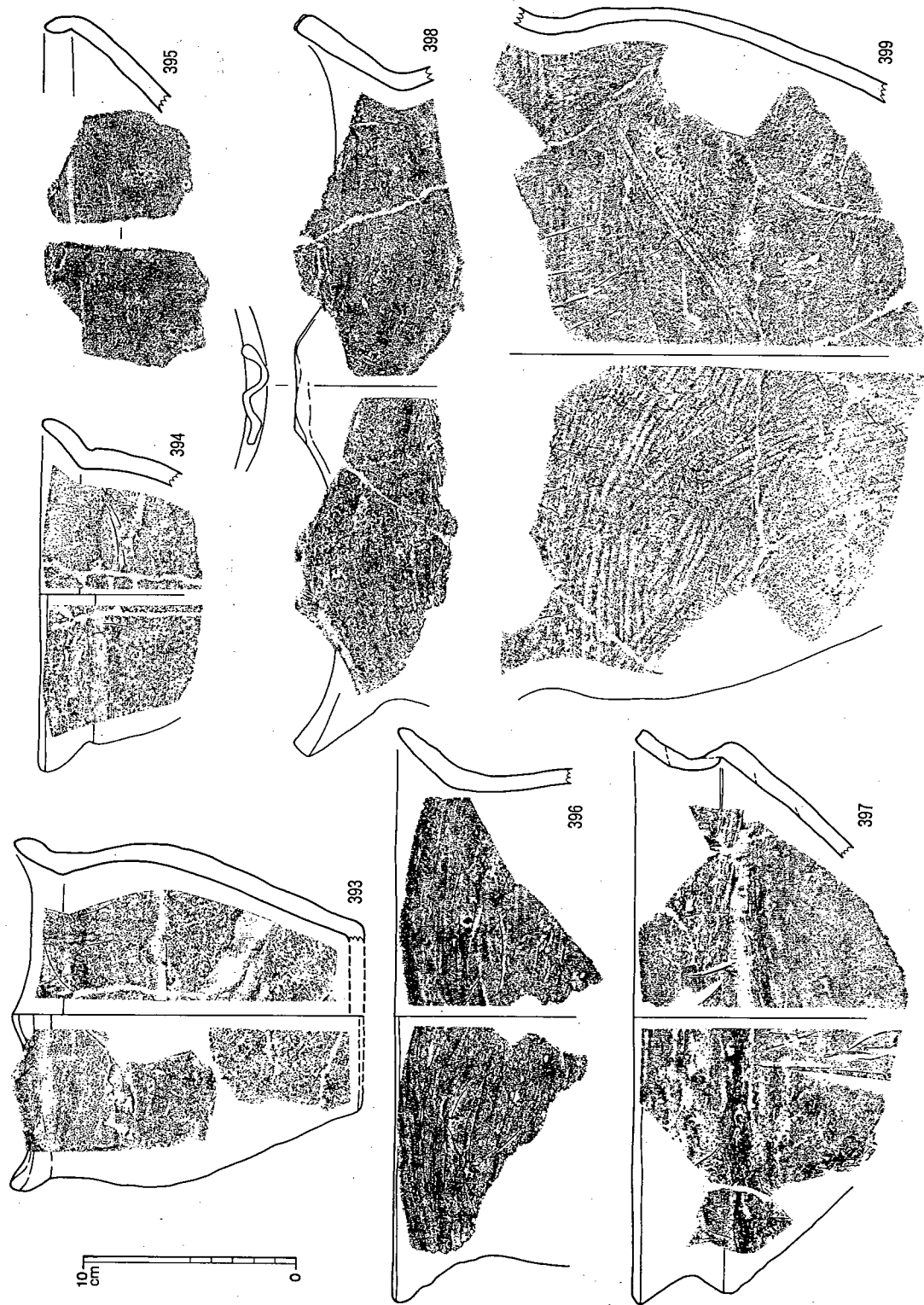
第 72 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 14 (1/3)



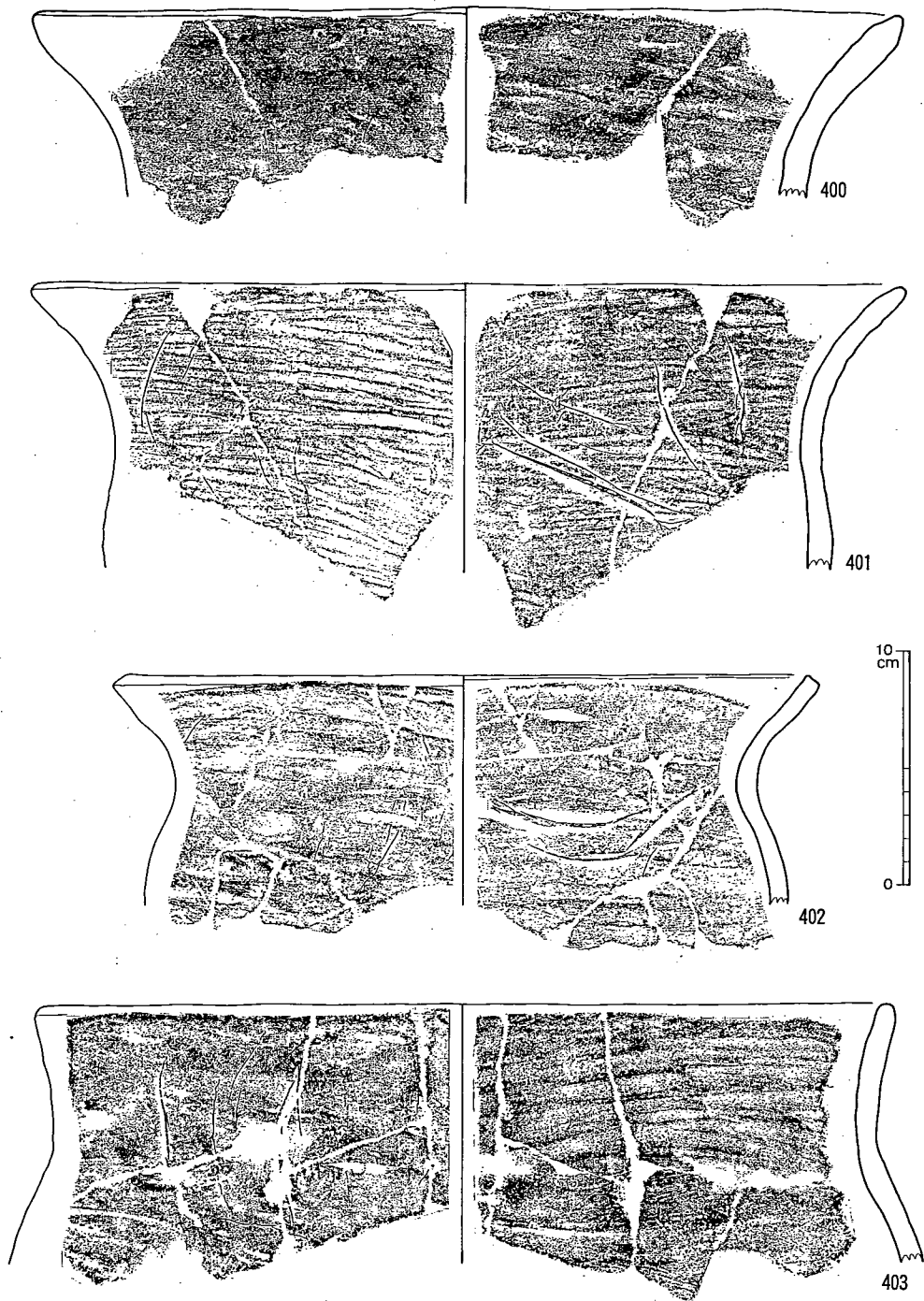
第 73 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 15 (1/3)



第 74 图 5 号竖穴住居迹 2·3 层出土土器实测图. 16 (1/3)



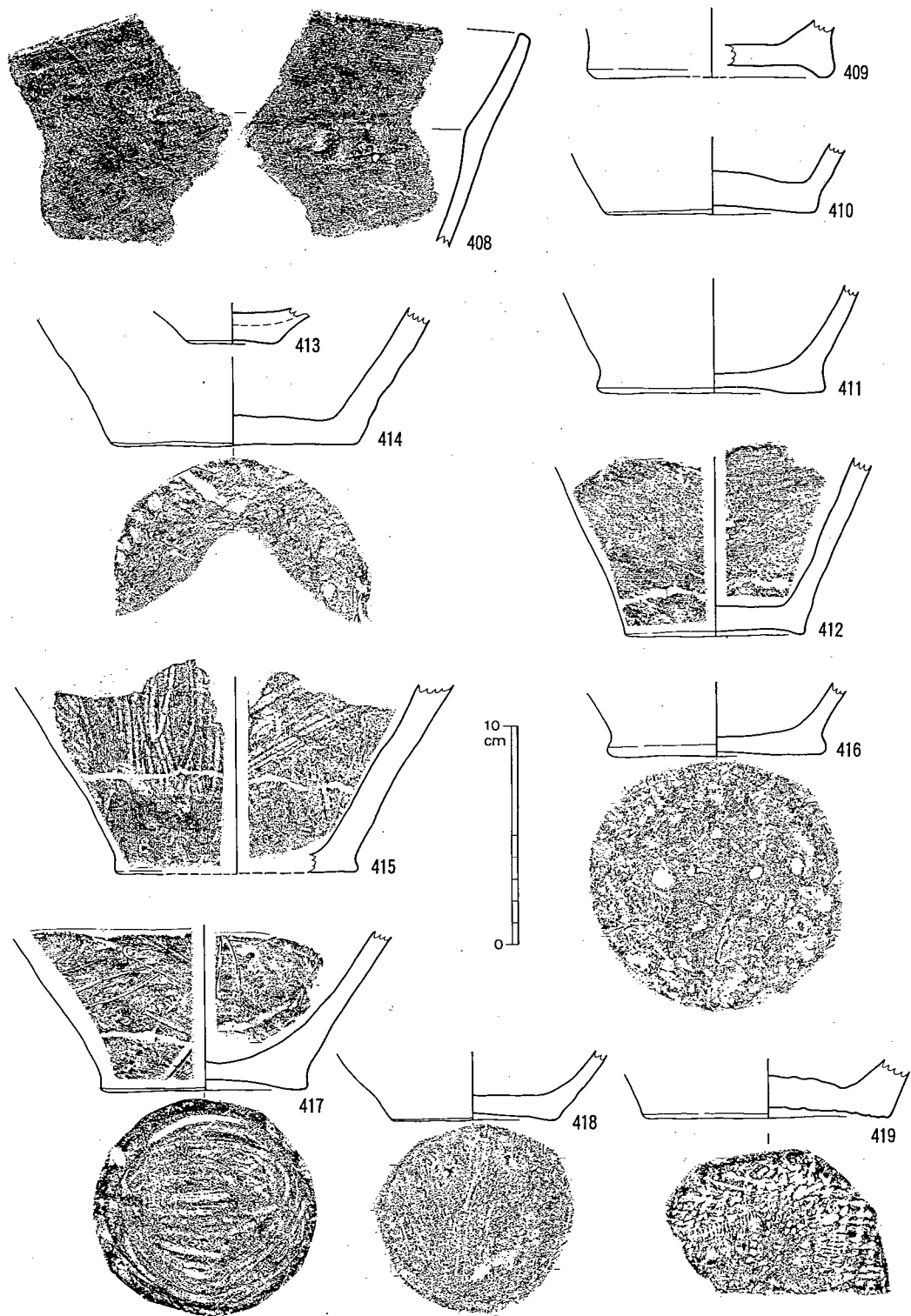
第 75 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器表測図. 17 (1/3)



第 76 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 18 (1/3)



第 77 图 5 号竖穴住居迹 2·3 层出土土器实测图. 19 (1/3)



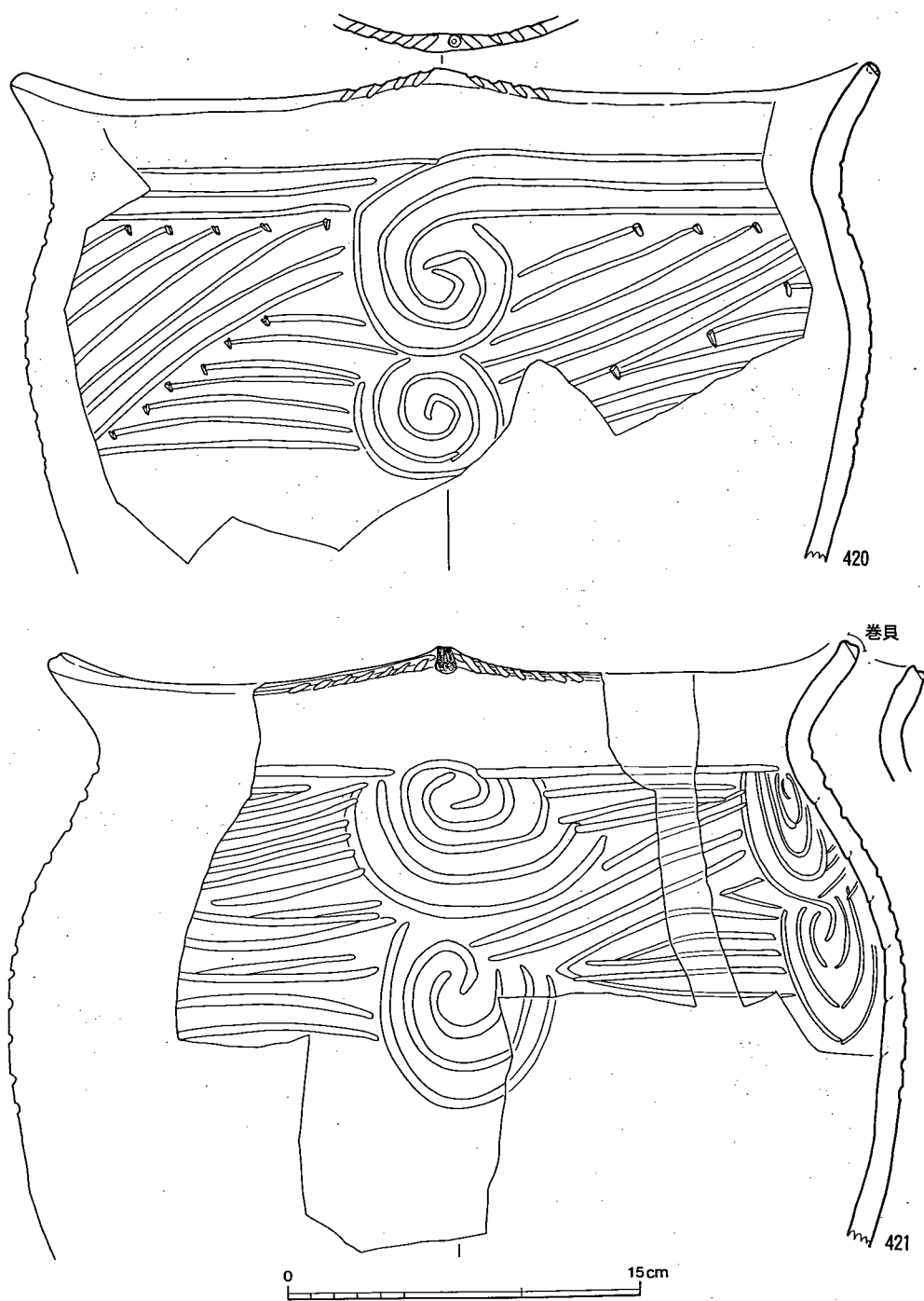
第 78 图 5 号竖穴住居跡 2・3 層出土土器実測図. 20 (1/3)

もので、実際の取り上げでは黒褐色粘質土で一括した。この土層は本住居跡の中央部にのみ堆積している。3層の中でも床面により近い遺物は遺存状態が比較的良かったことから、ほぼすべての遺物の出土地点を記録して、3層下部として第49図にその出土状況を図示した。4層は小礫を多量に含む褐色粘質土で、壁に沿って約1mの幅で壁際を巡る。遺物はそれほど多くないが、2・3層や3層下部の遺物に層的に先行するものである。5層は4層の下位でやはり壁際に広がり、遺物はほとんど含まれない。6層や8層は壁際に貼り付くように検出された粘質土であるが、薄く壁全体に広がることから、あるいは人為的に貼り付けられたもの(貼り壁?)であるかもしれないが、遺物についてはほとんど出土していない。床面からも遺物は多く出土したが、貼り床らしき土は確認できないままで、地山に貼り付くような状態にあった。

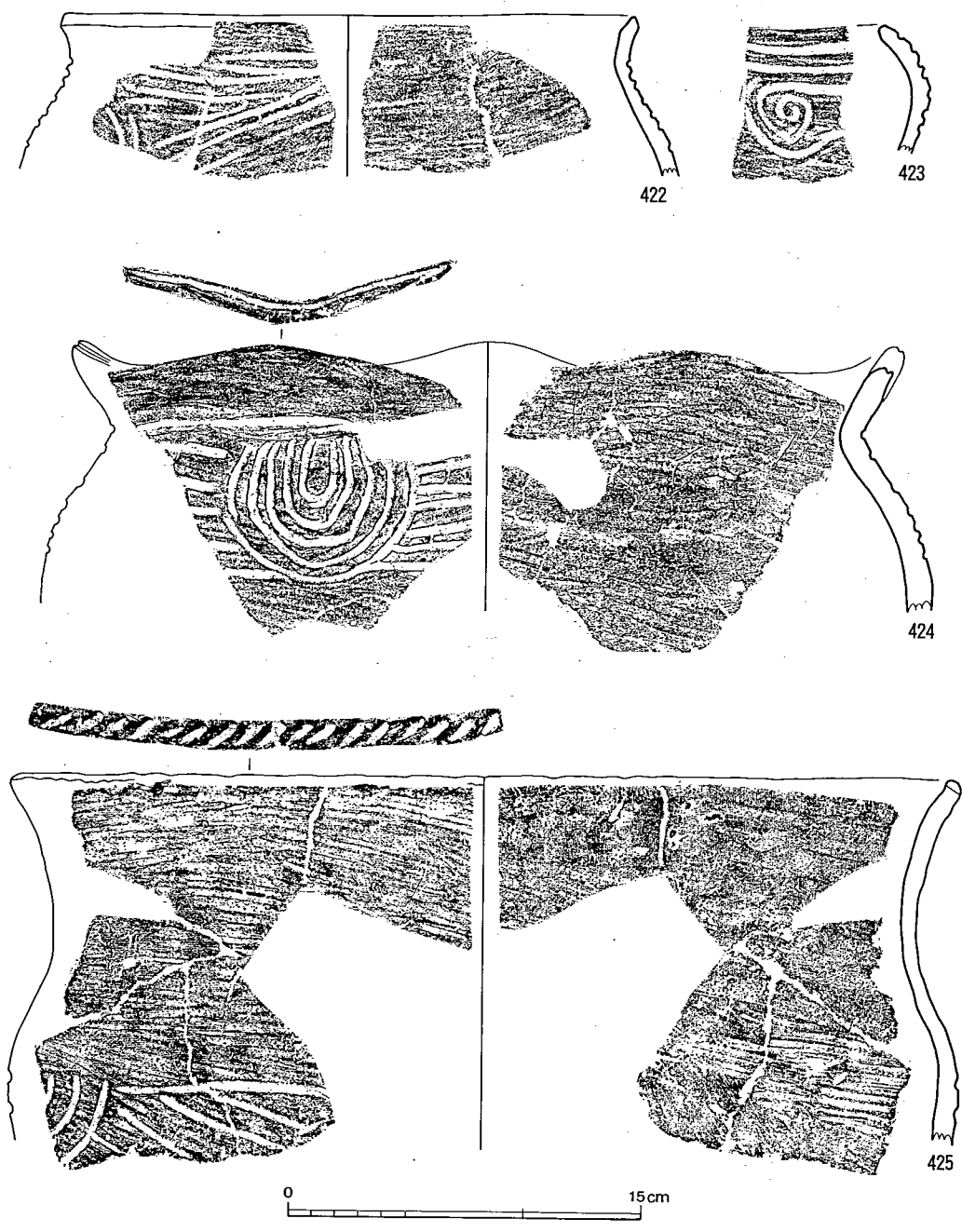
土器(第51~108図) 土器は349点を図示したが、内訳は1層が58点、2・3層が142点、3層下部が77点、4層が42点、床面が15点、内溝が7点、周溝が2点、支柱穴が6点である。

1層(第51~58図)では小池原上層式から三万田式まで様々な土器が出土しているが、三万田式の遺存状態が最も良好であり、2・3層以下では三万田式が全く出土していないことから三万田式期に形成されたものと考えられる。220は3号竪穴住居跡出土の資料から小池原上層式に比定されよう。225~229までは鐘崎式の鉢であるが、その古い段階のものから新しい段階のものまで様々である。230~234はごく新しい段階の鐘崎式で、渦巻文等が形骸化して横方向の直線文に渦巻文の簡略化した文様が付加される一群である。器面調整には巻貝条痕文が施される。235~259は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群である。235の口縁端部と胴部の沈線文内には巻貝疑似縄紋が施されるが、これらの部分のみ赤色塗布が窺える。236・245・246はボウル状の鉢で、沈線文の後にRLや巻貝疑似縄紋が施される。242~244は波頂部に連続「S」字文が沈線文や隆帯文として施される一群で、縄紋との組み合わせが興味深い。これらはいずれも深鉢になるのか。257~259台付鉢に関連した資料で、258は坏部(鉢部)と脚部とを繋ぐ円盤充填そのものである。260~265は小池原上層式~西平式以前に位置づけられる無文土器で、器面調整は巻貝疑似縄紋が主流である。271~277は三万田式で、271・272は浅鉢形の口縁部で、内面の沈線文や外面の羽状文はその典型になる。器面調整は丁寧なナデもしくは研磨で、272のように外面に二枚貝条痕文を施す例は、少ないながらも見られる。

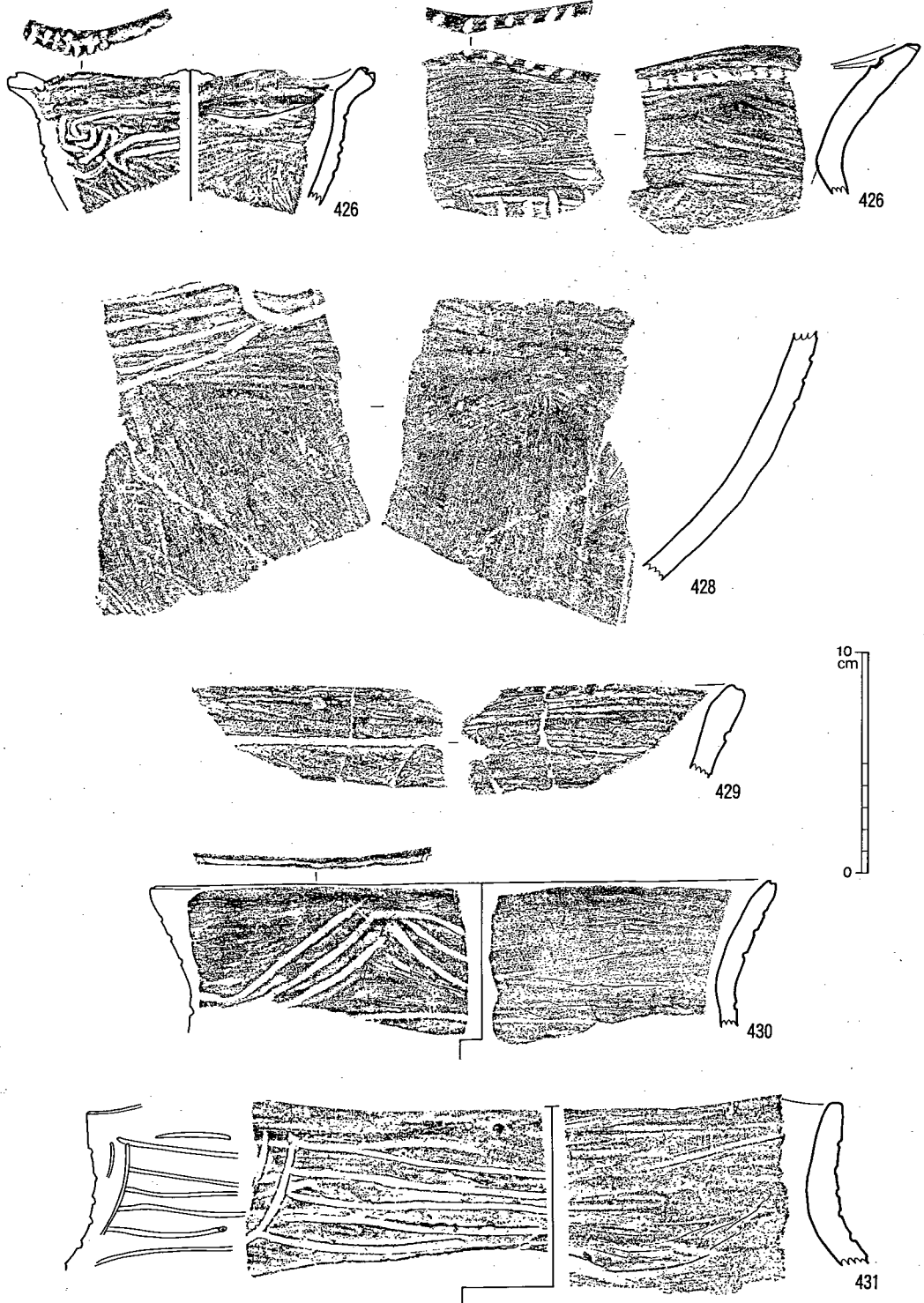
2・3層(第59~78図)では鐘崎式から西平式以前までが出土した。278~312は鐘崎式であるが、古い段階のものは278~280・285の4点程度で、他はほとんど中段階と新段階のものである。279は口縁部形態や口縁端部に沈線文を施す特徴から鐘崎式の古い段階のものであるが、胴部の文様は赤色塗布された羽状縄紋で珍しい。羽状縄紋といっても一つのRL原体を方向を変えて施文したもので、羽状になる縄紋どうしが切り合っている。中段階というのは、口縁端部の平坦面が小さくなっていき、胴部の鉤手文と渦巻文との組み合わせが簡略化・単純化していくもので、渦巻文については2つになって1つは波頂部までせり上がっていく(281~293)。



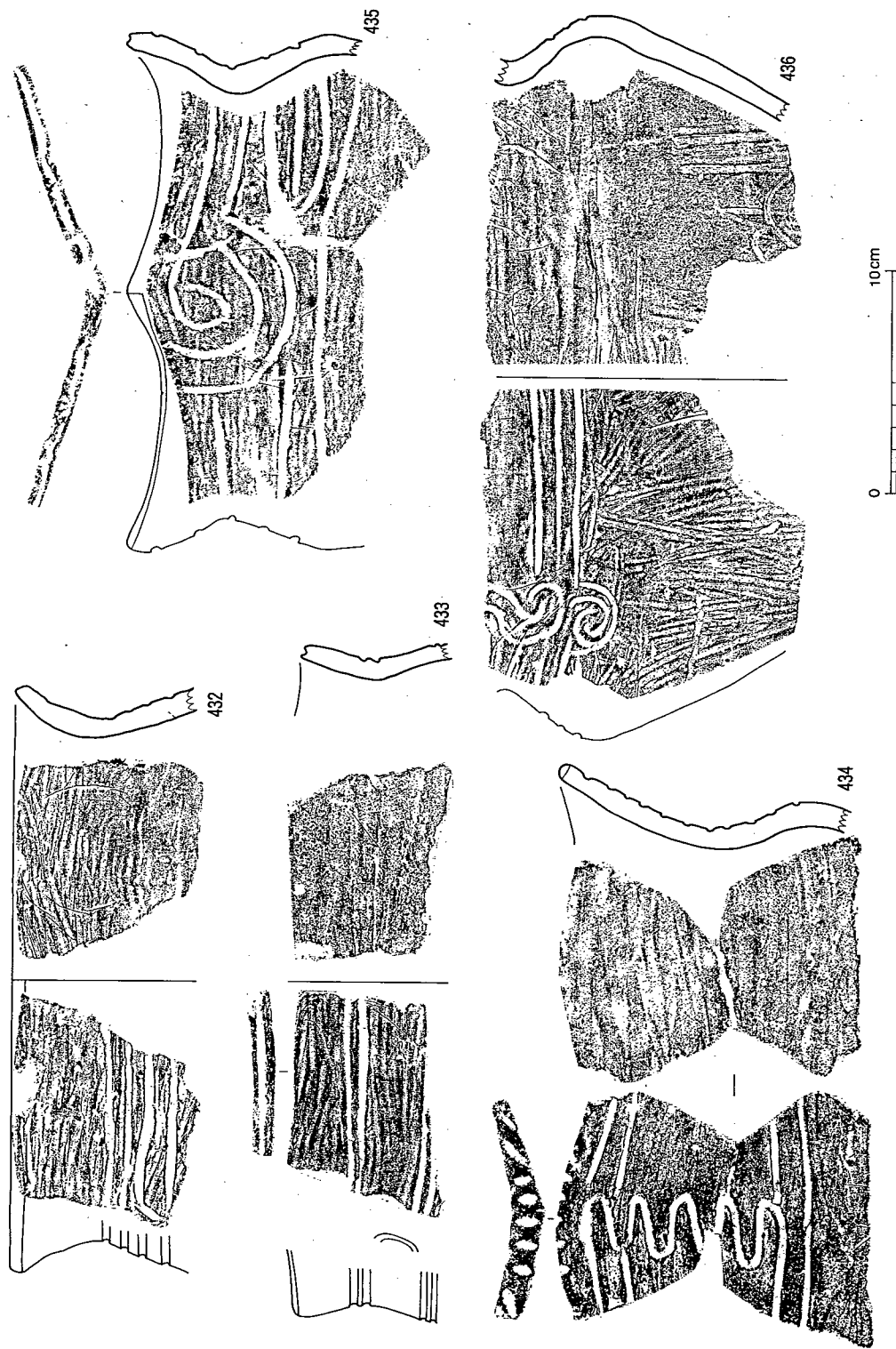
第 79 图 5号竖穴住居跡3層下部出土土器实测图.1 (1/3)



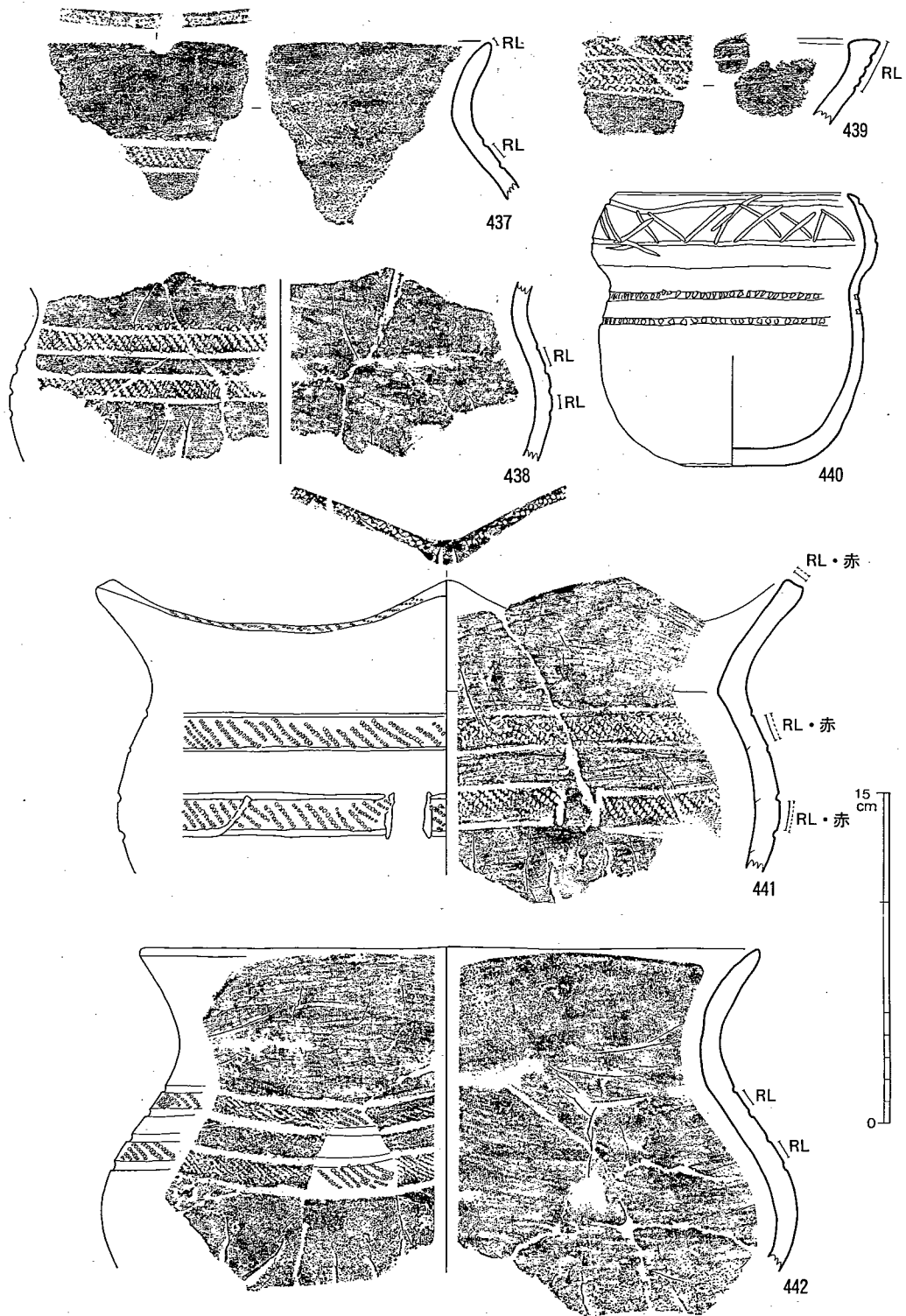
第 80 图 5 号竖穴住居迹 3 层下部出土土器实测图. 2 (1/3)



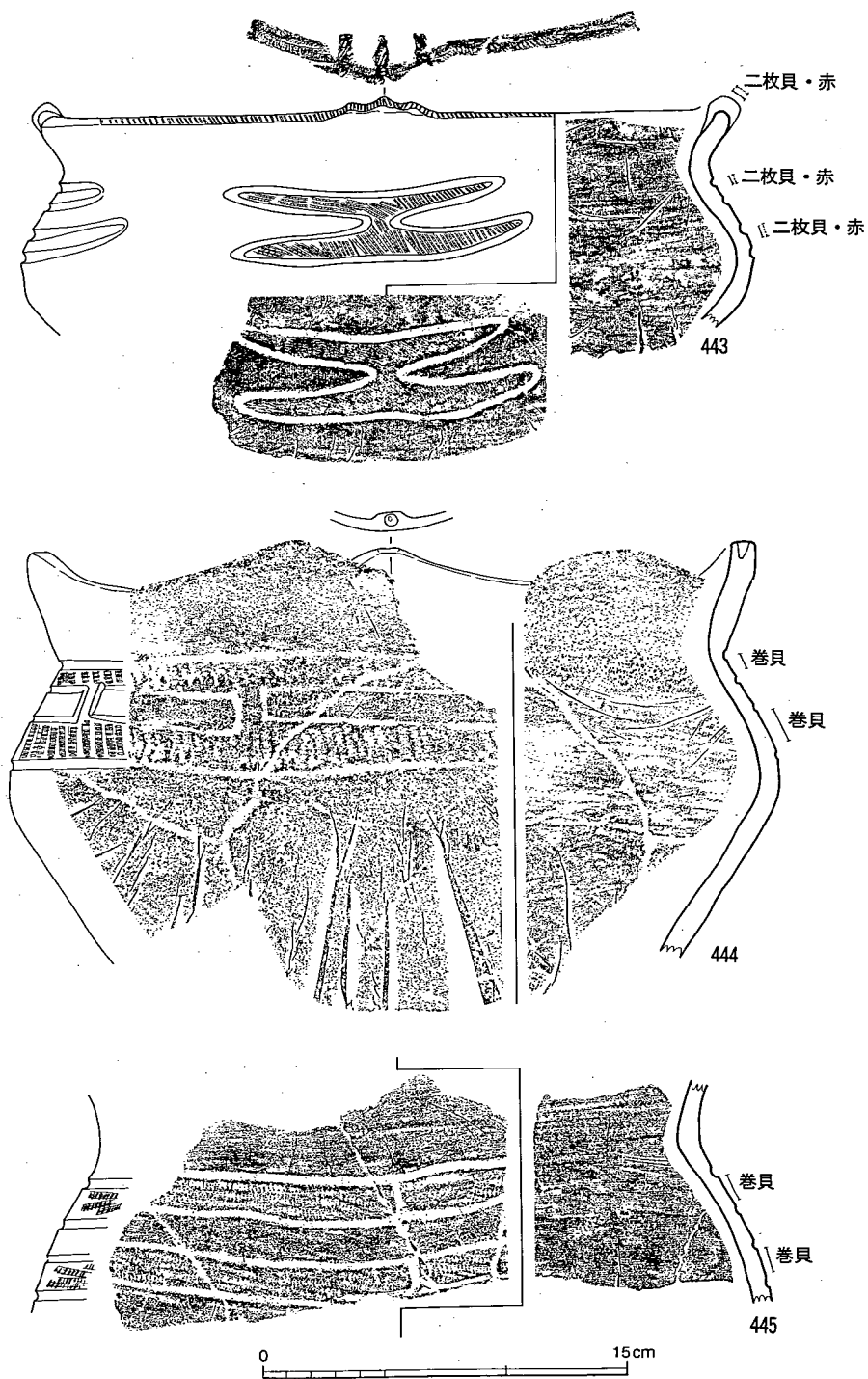
第 81 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 3 (1/3)



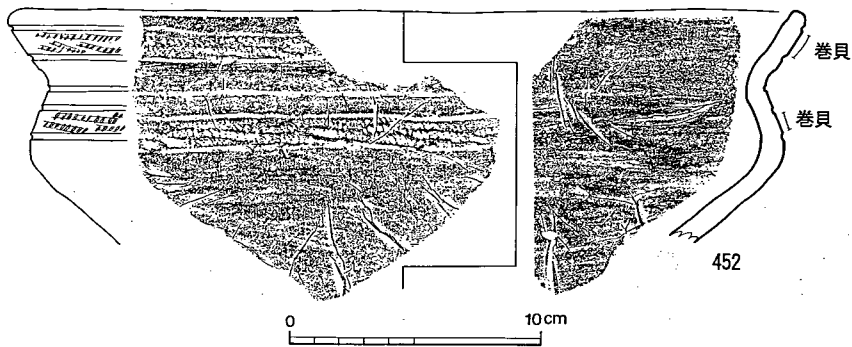
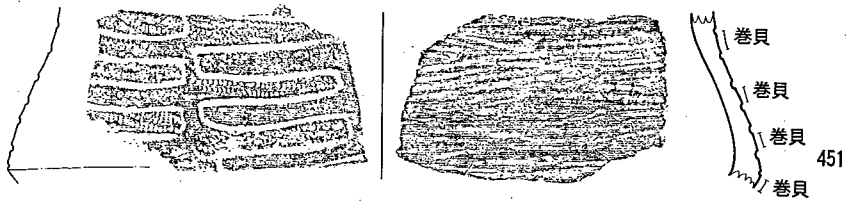
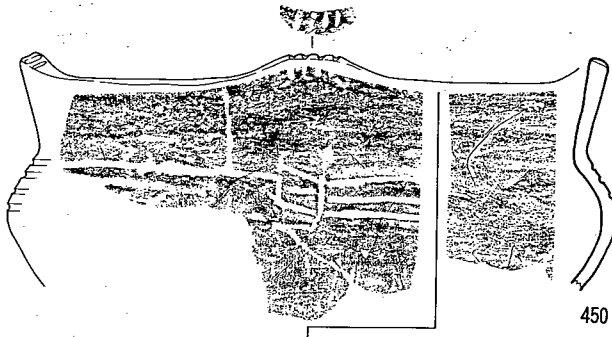
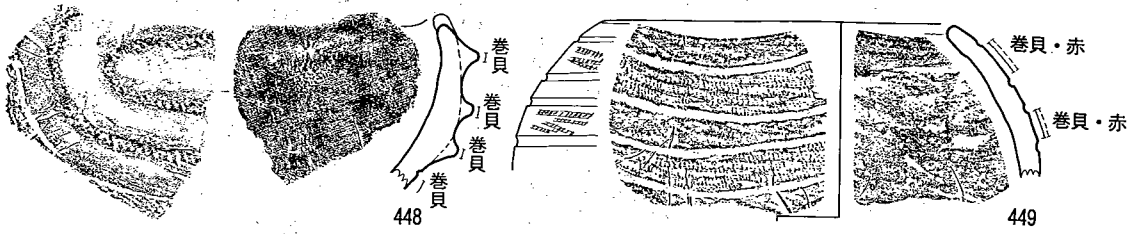
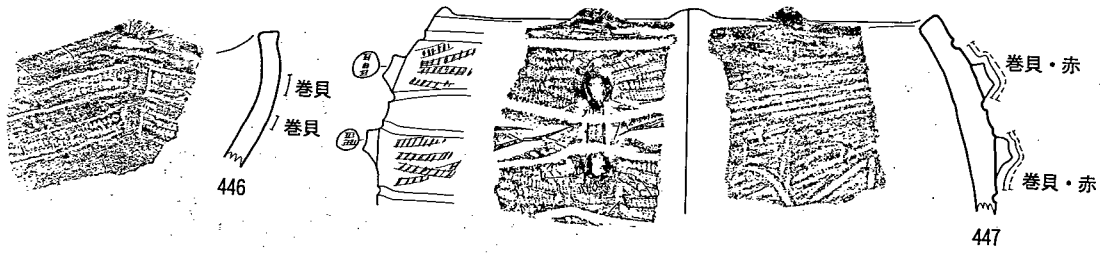
第 82 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 4 (1/3)



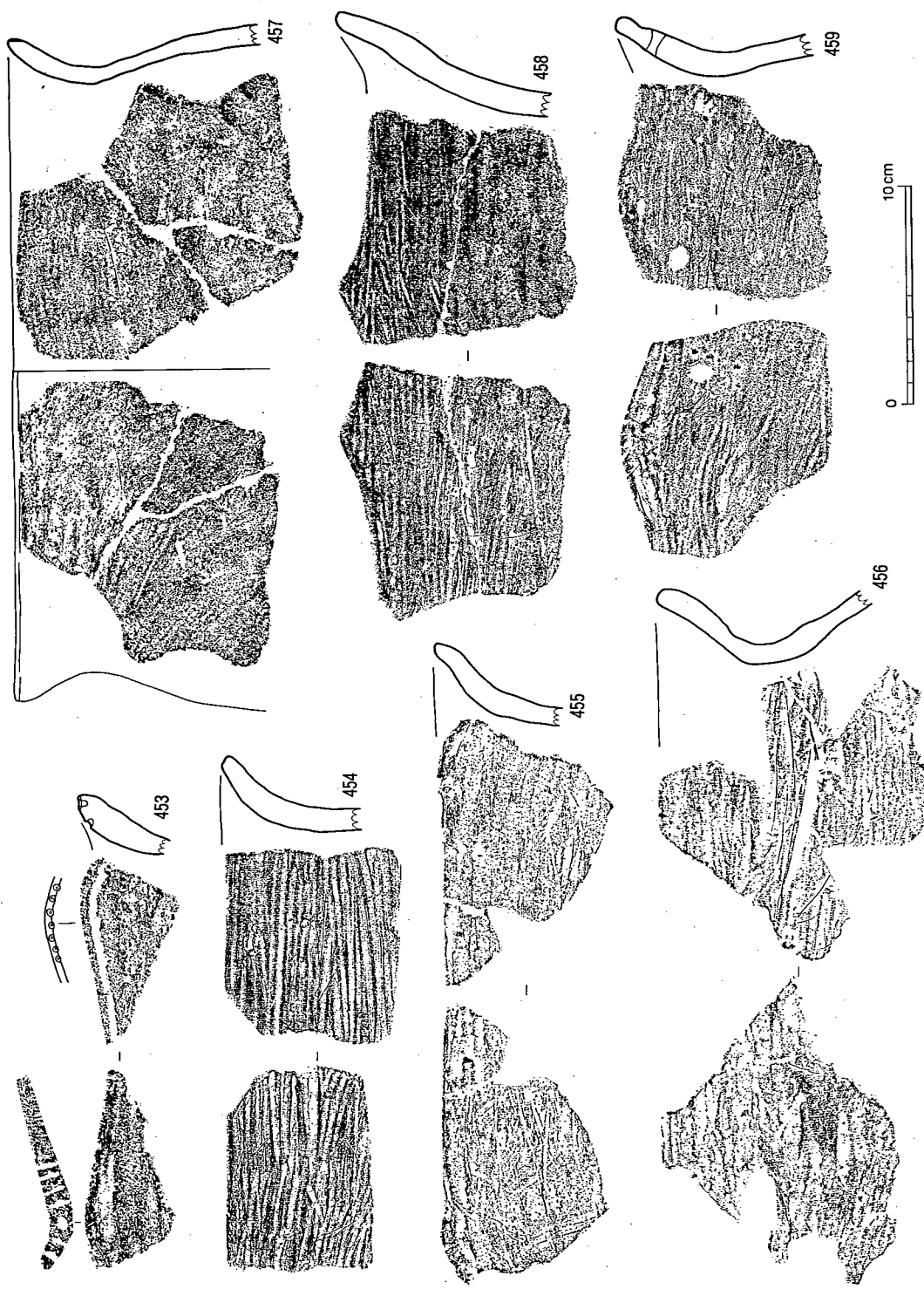
第 83 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 5 (1/3)



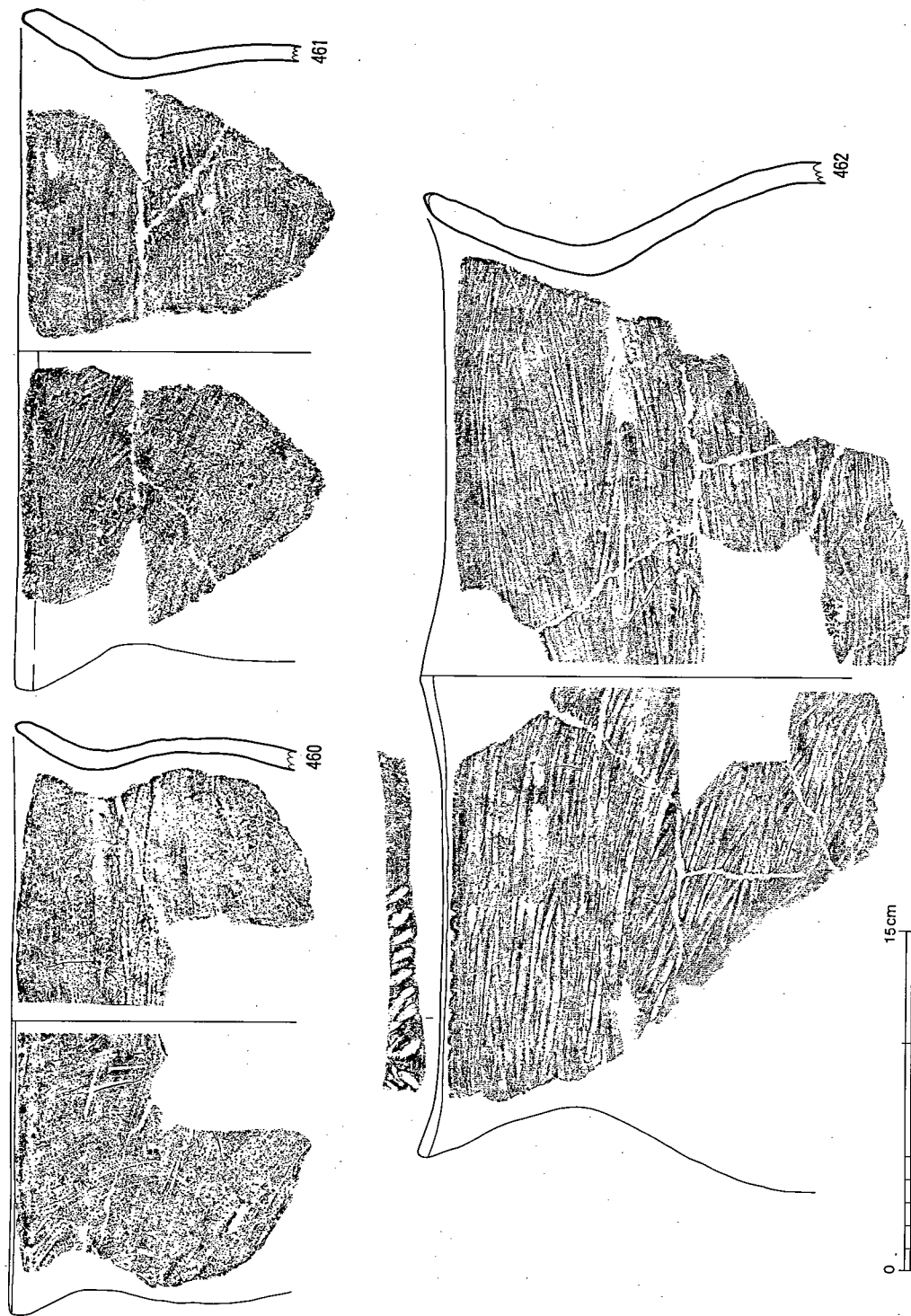
第 84 图 5号竖穴住居跡 3層下部出土土器实测图. 6 (1/3)



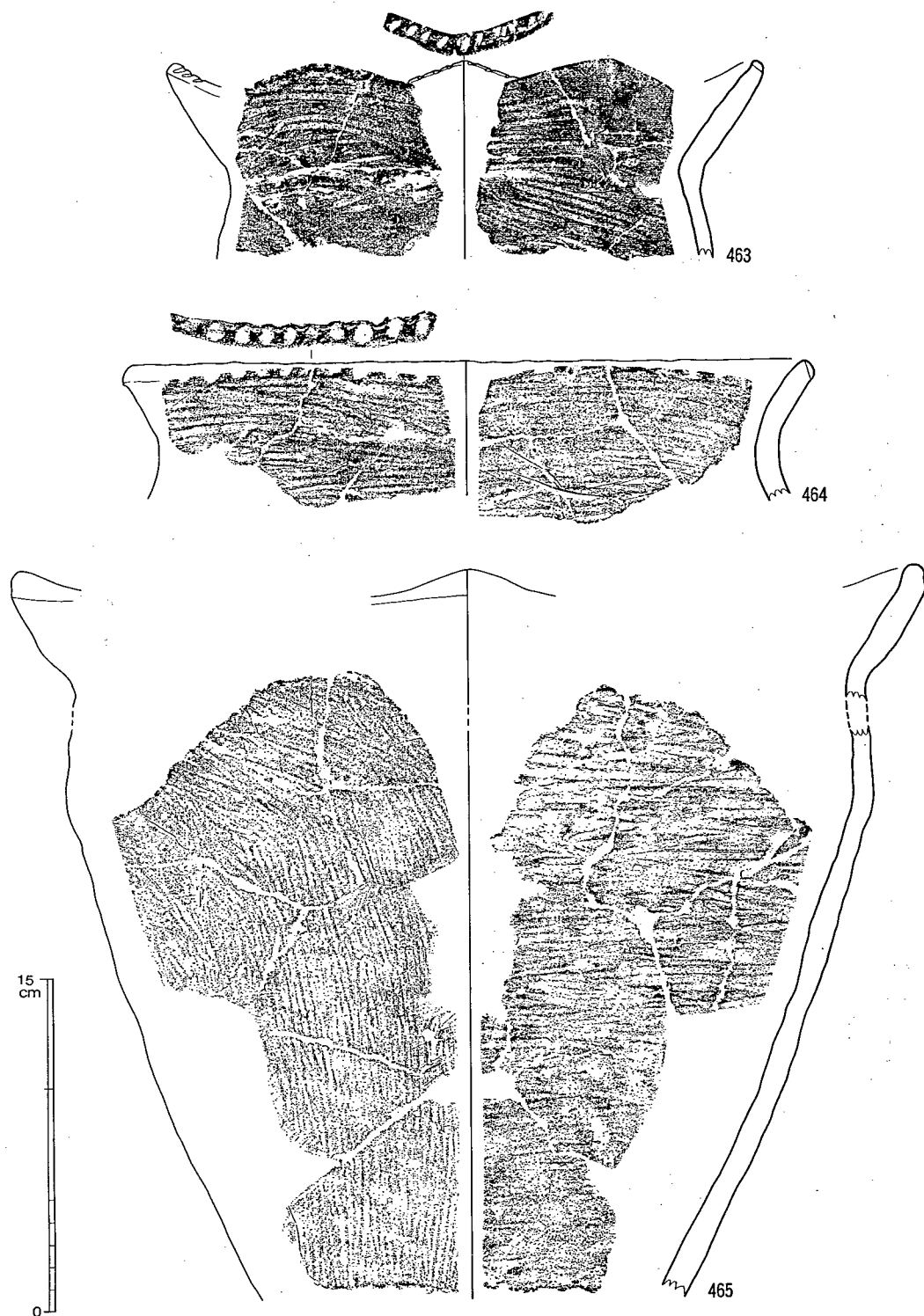
第 85 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 7 (1/3)



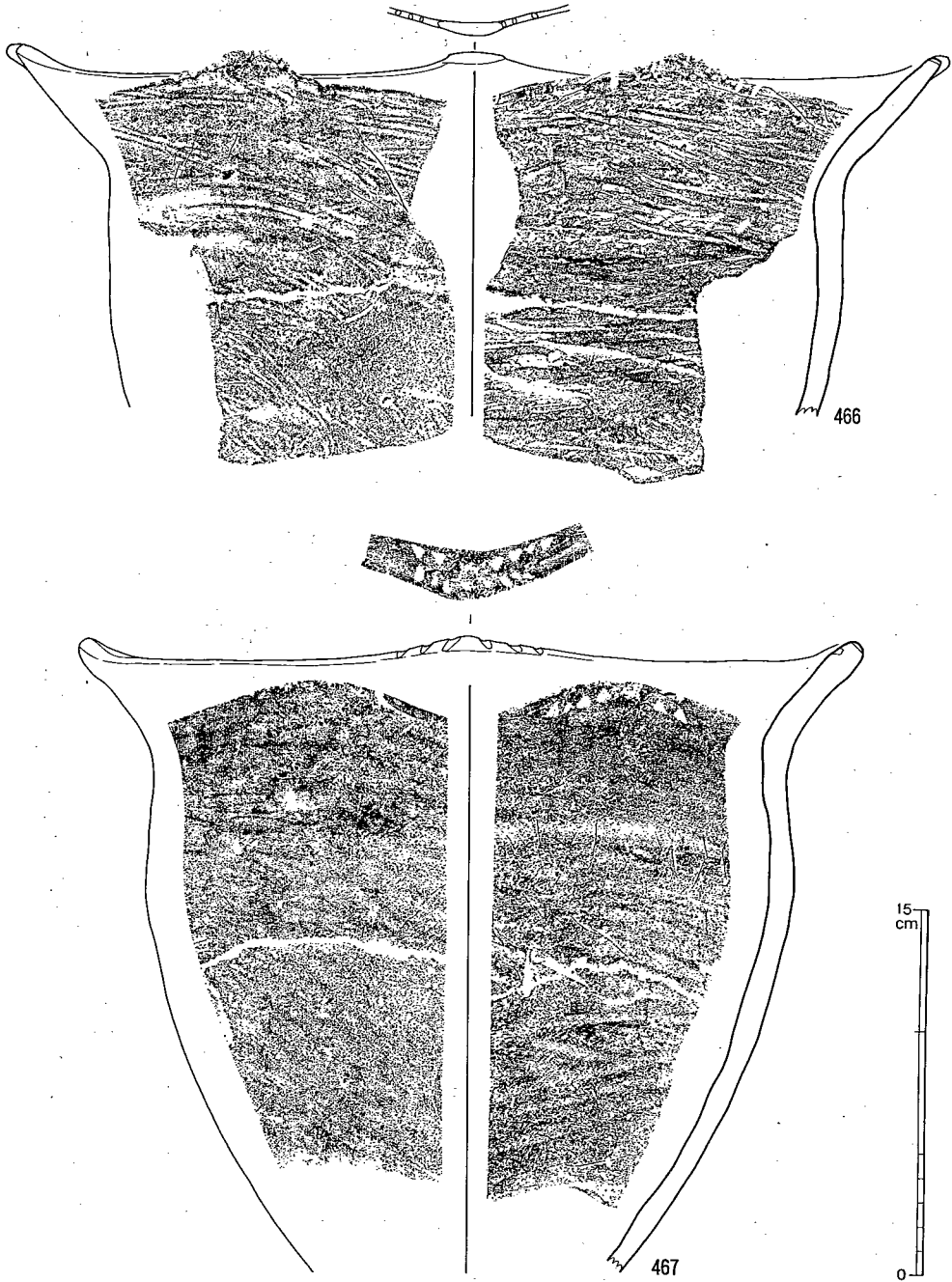
第 86 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器美測図. 8 (1/3)



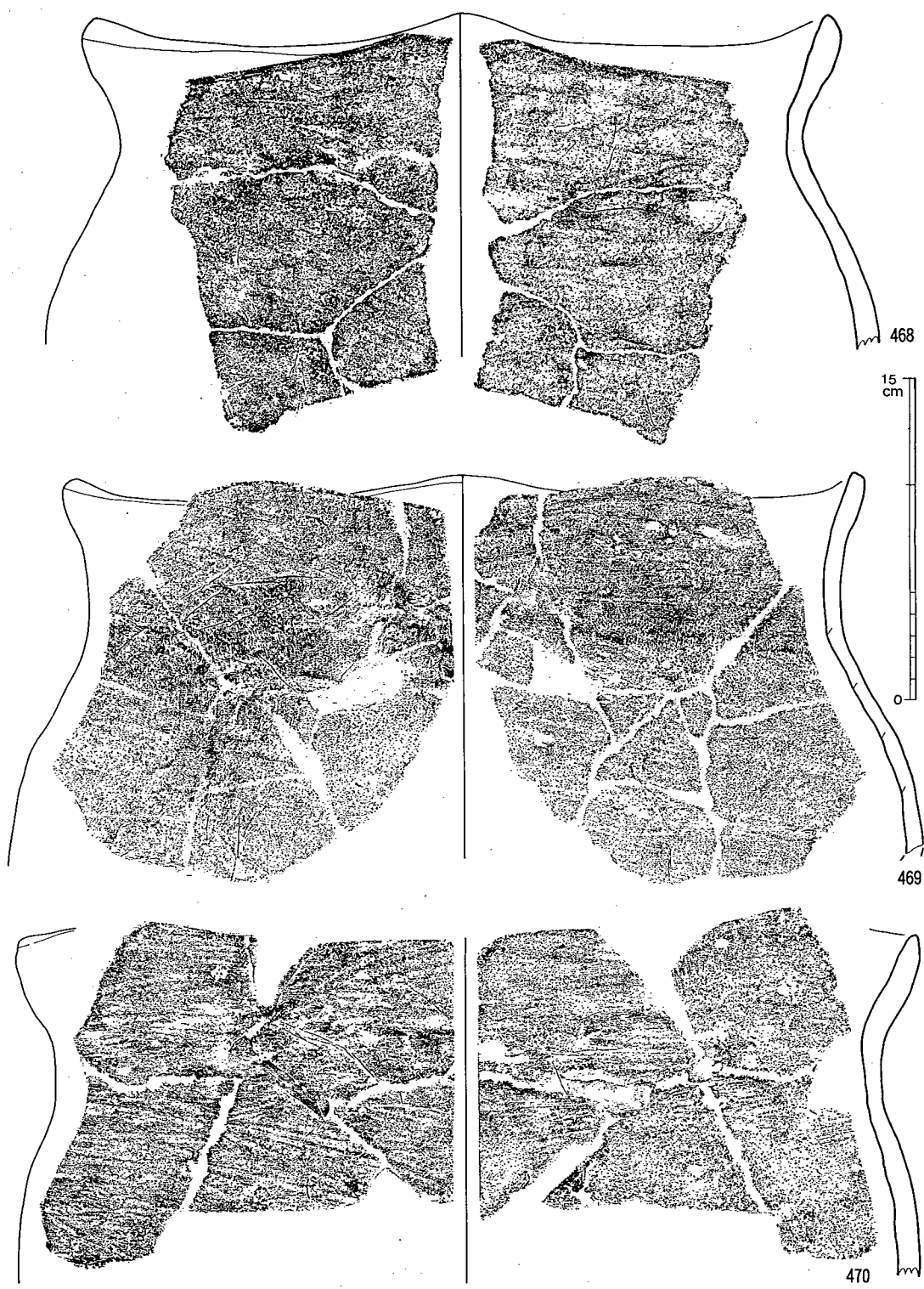
第 87 图 5 号竖穴居住迹 3 层下部出土土器实测图. 9 (1/3)



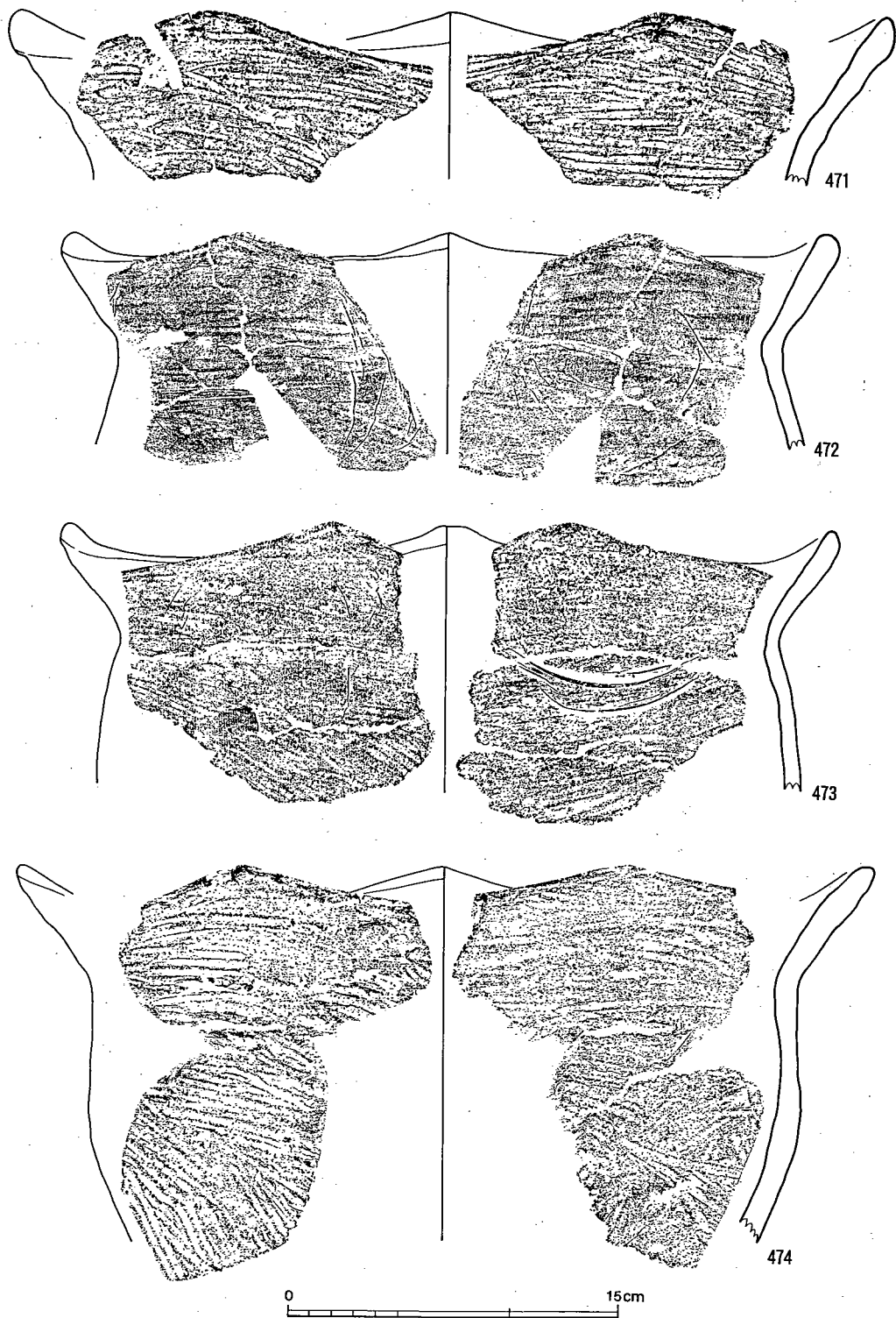
第 88 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測图. 10 (1/3)



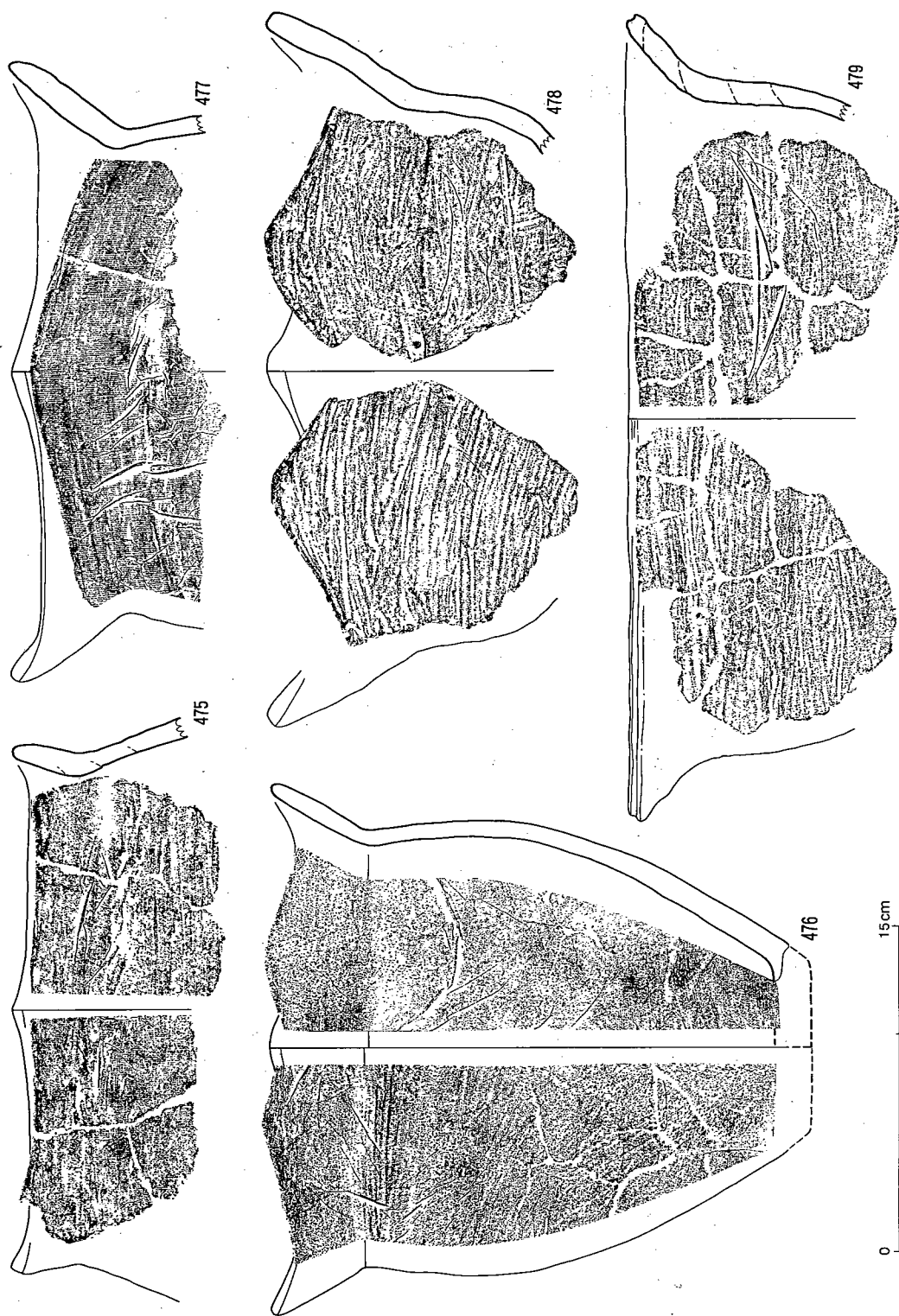
第 89 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 11 (1/3)



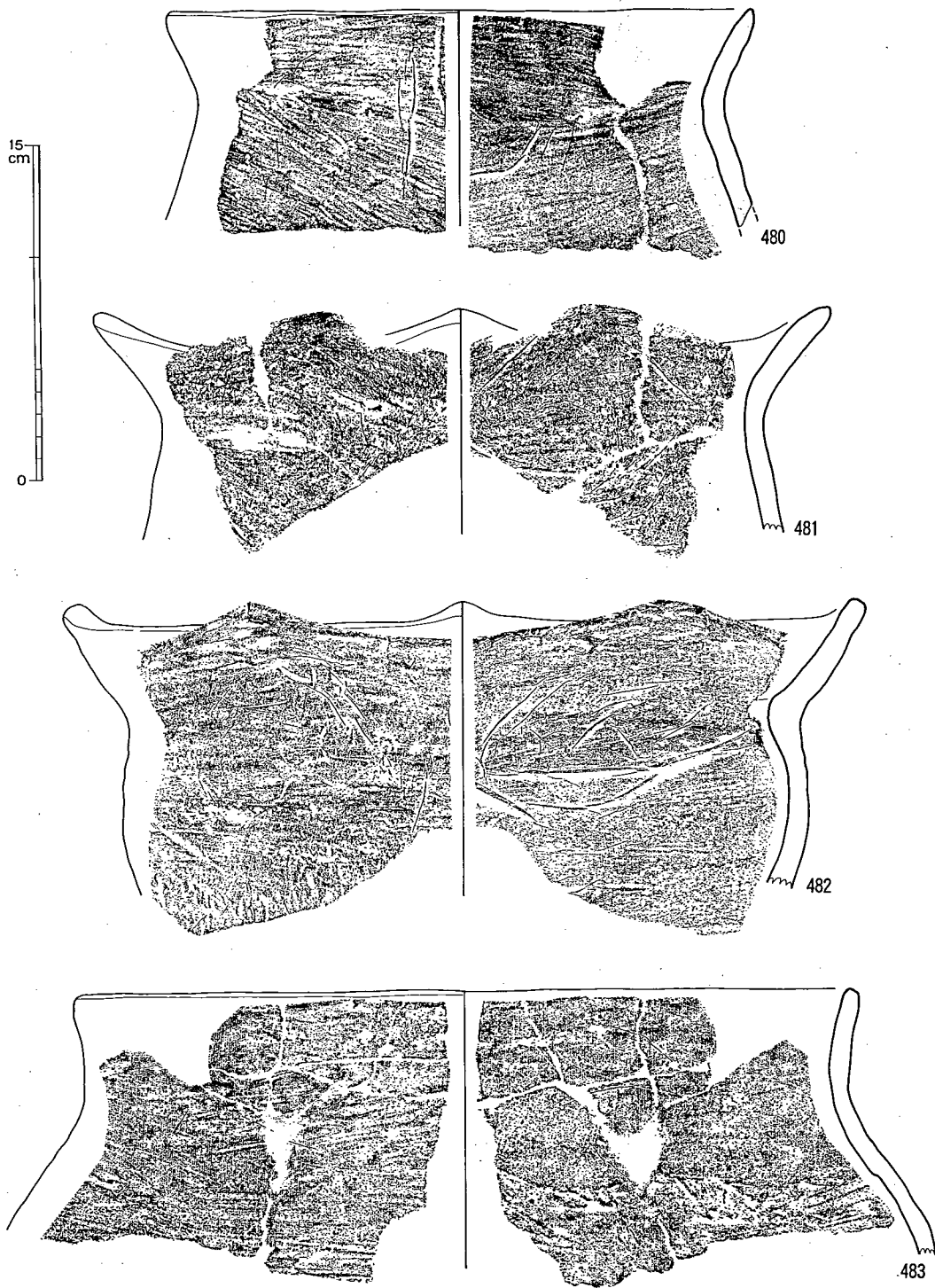
第 90 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器实测图. 12 (1/3)



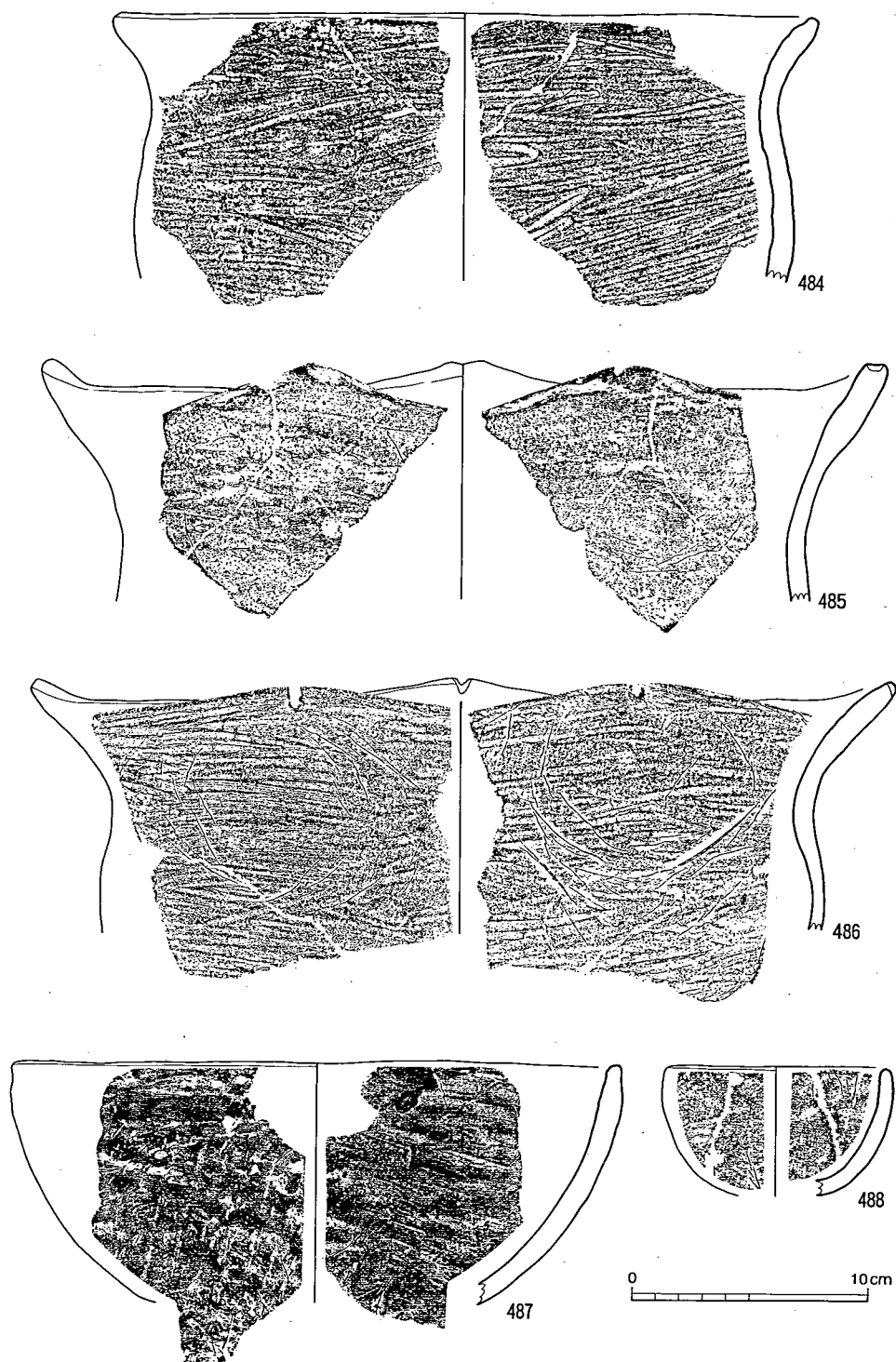
第 91 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 13 (1/3)



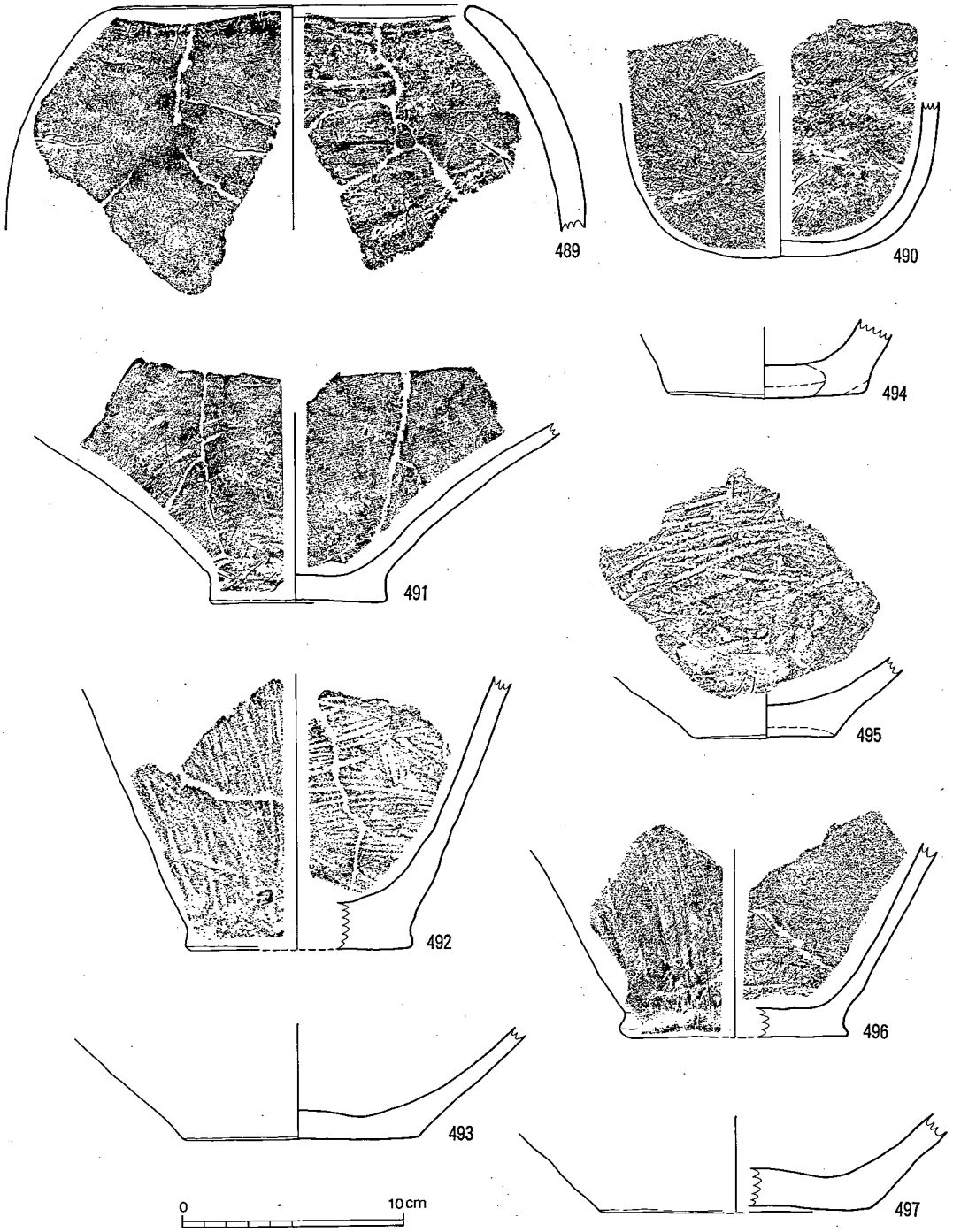
第 92 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 14 (1/3)



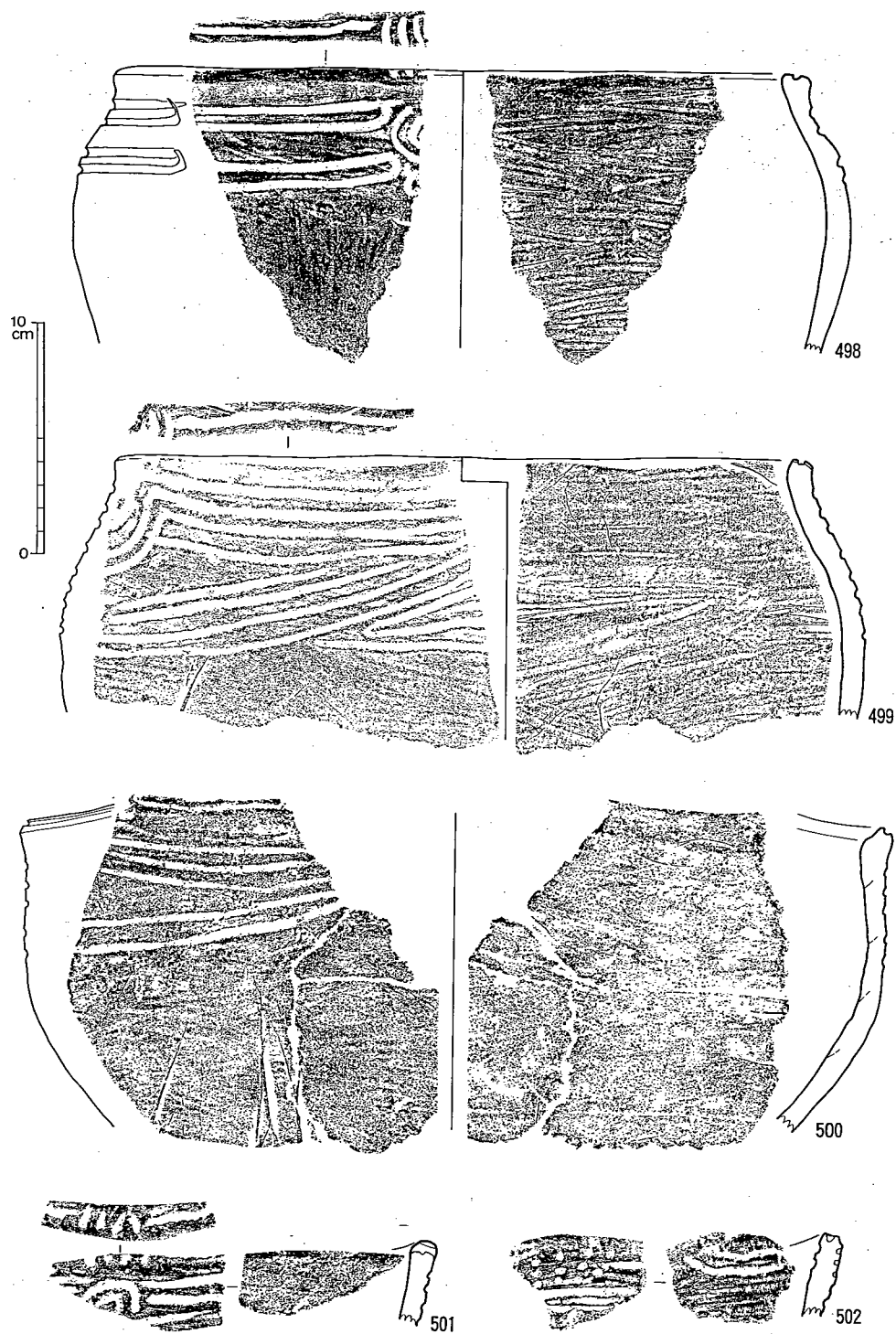
第 93 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測图. 15 (1/3)



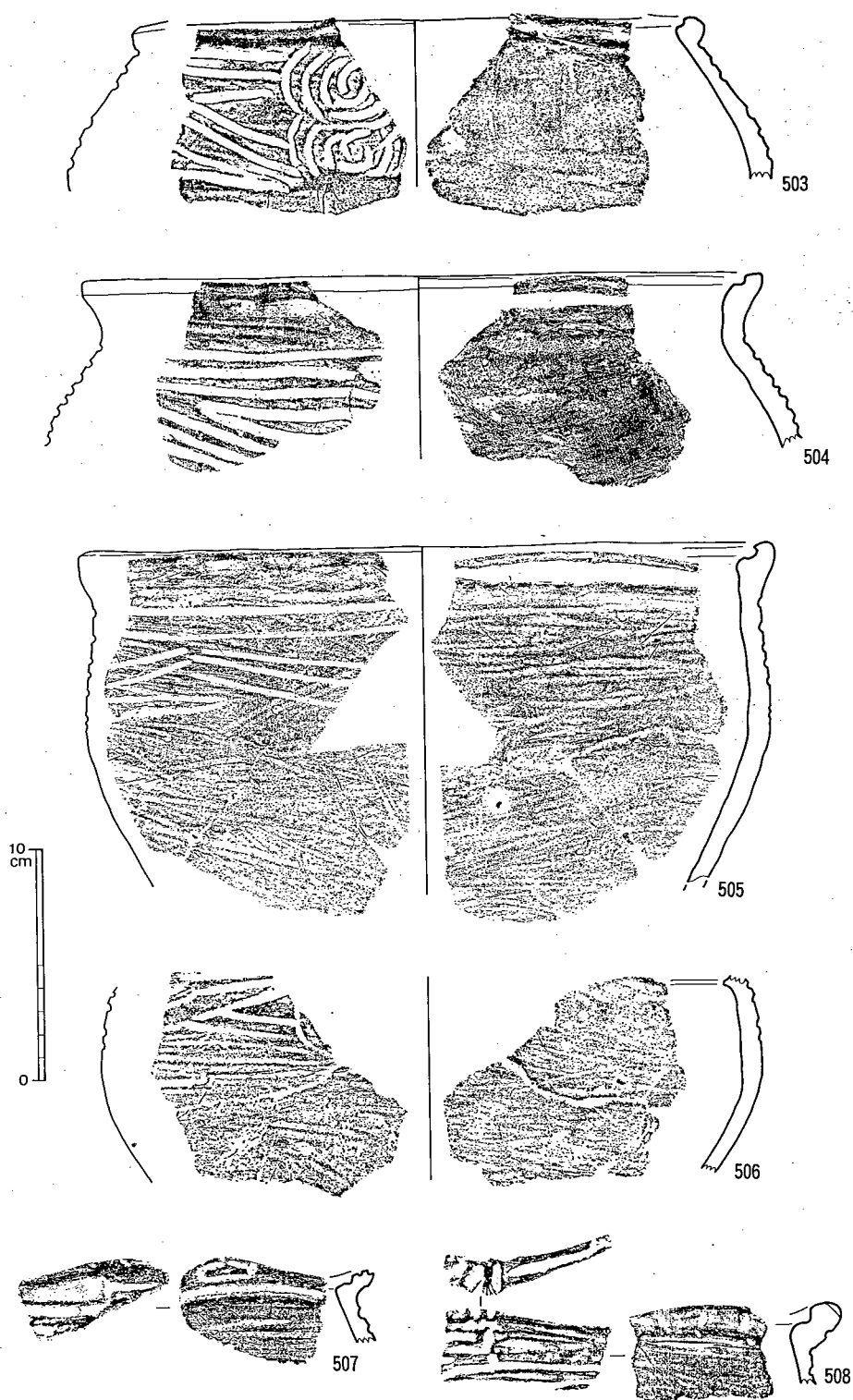
第 94 图 5 号竖穴住居迹 3 层下部出土土器实测图. 16 (1/3)



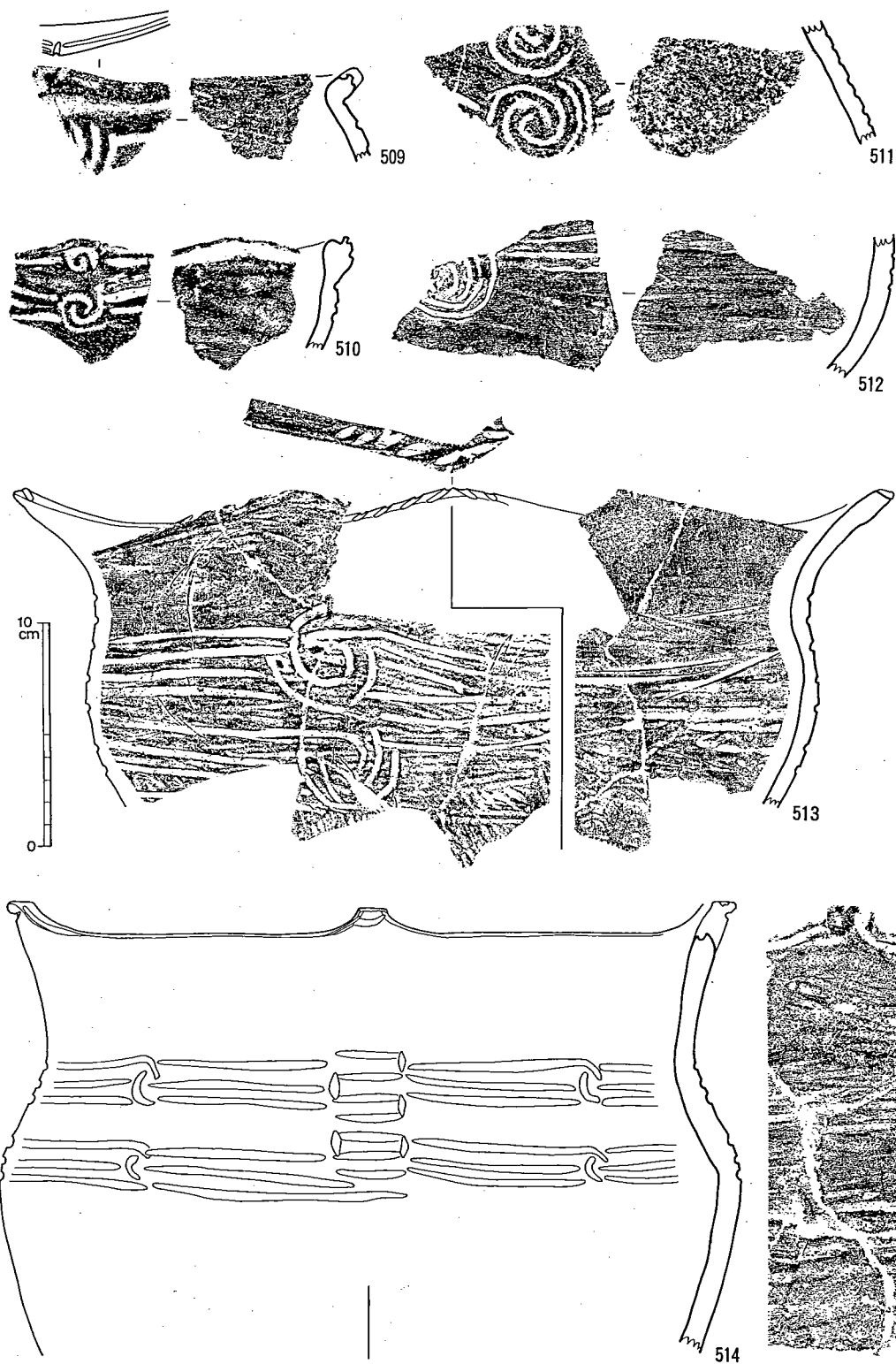
第 95 图 5 号竖穴住居跡 3 層下部出土土器実測図. 17 (1/3)



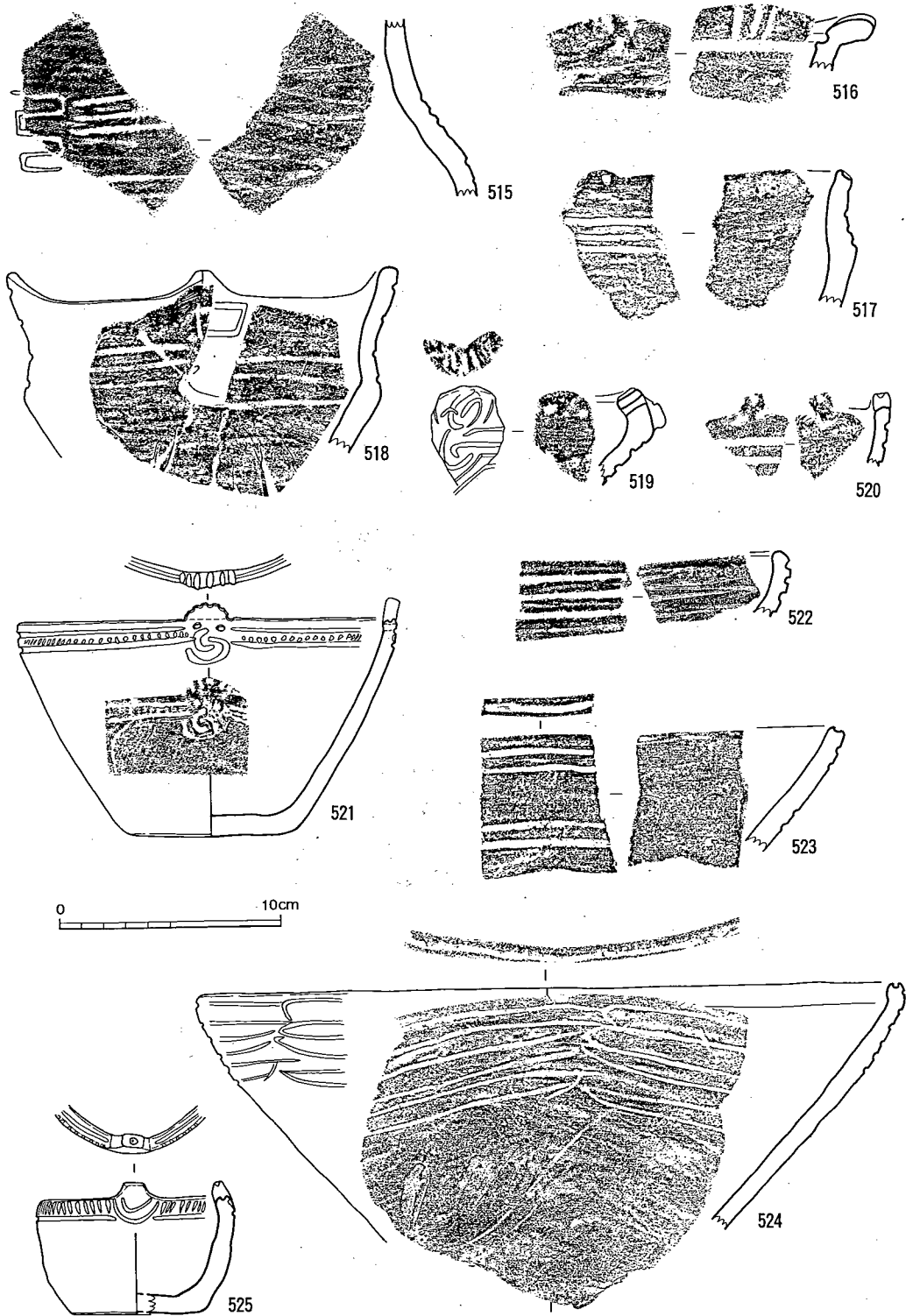
第 96 图 5 号竖穴住居跡 4 層出土土器実測図. 1 (1/3)



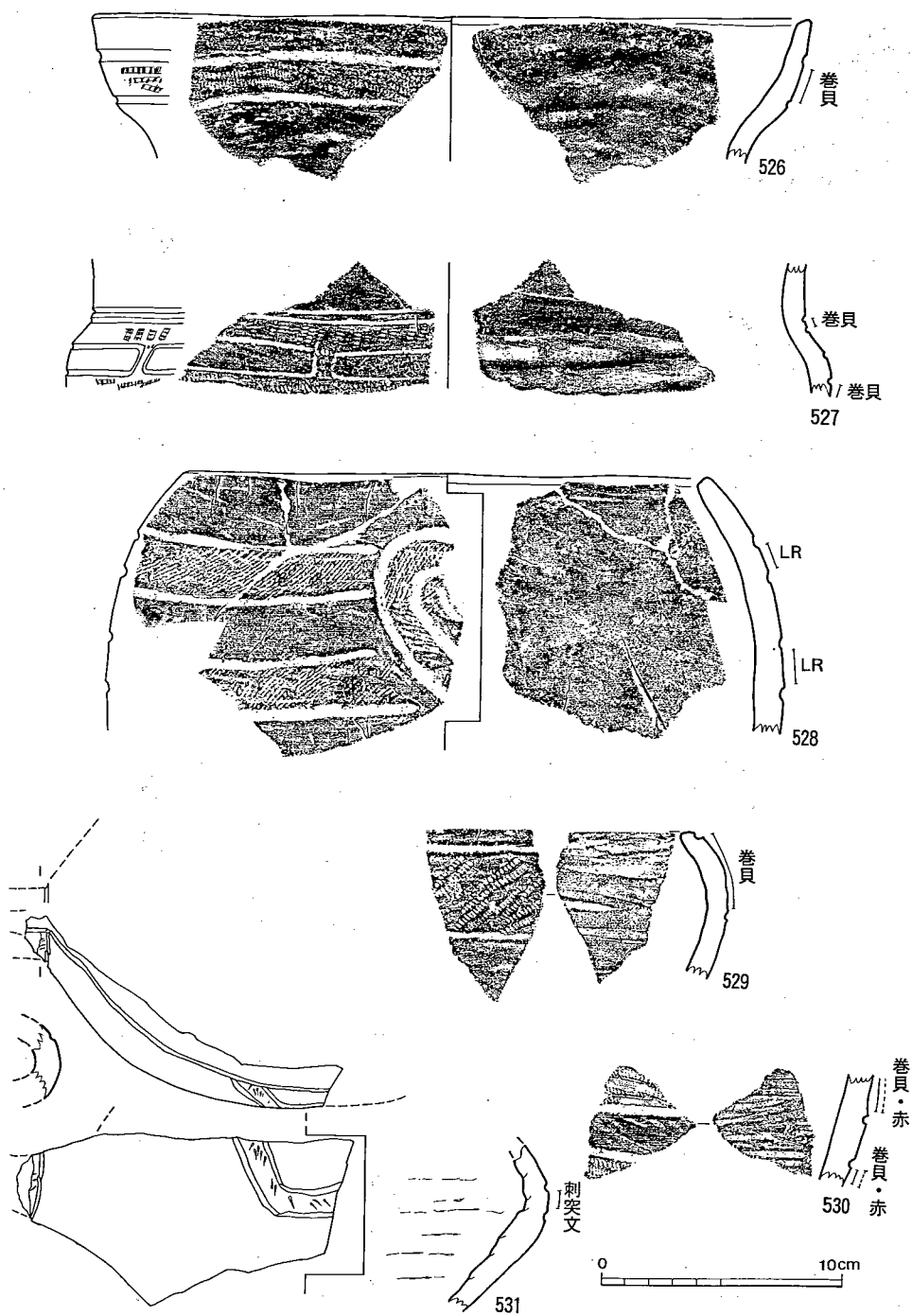
第 97 图 5 号竖穴住居跡 4 層出土土器実測图. 2 (1/3)



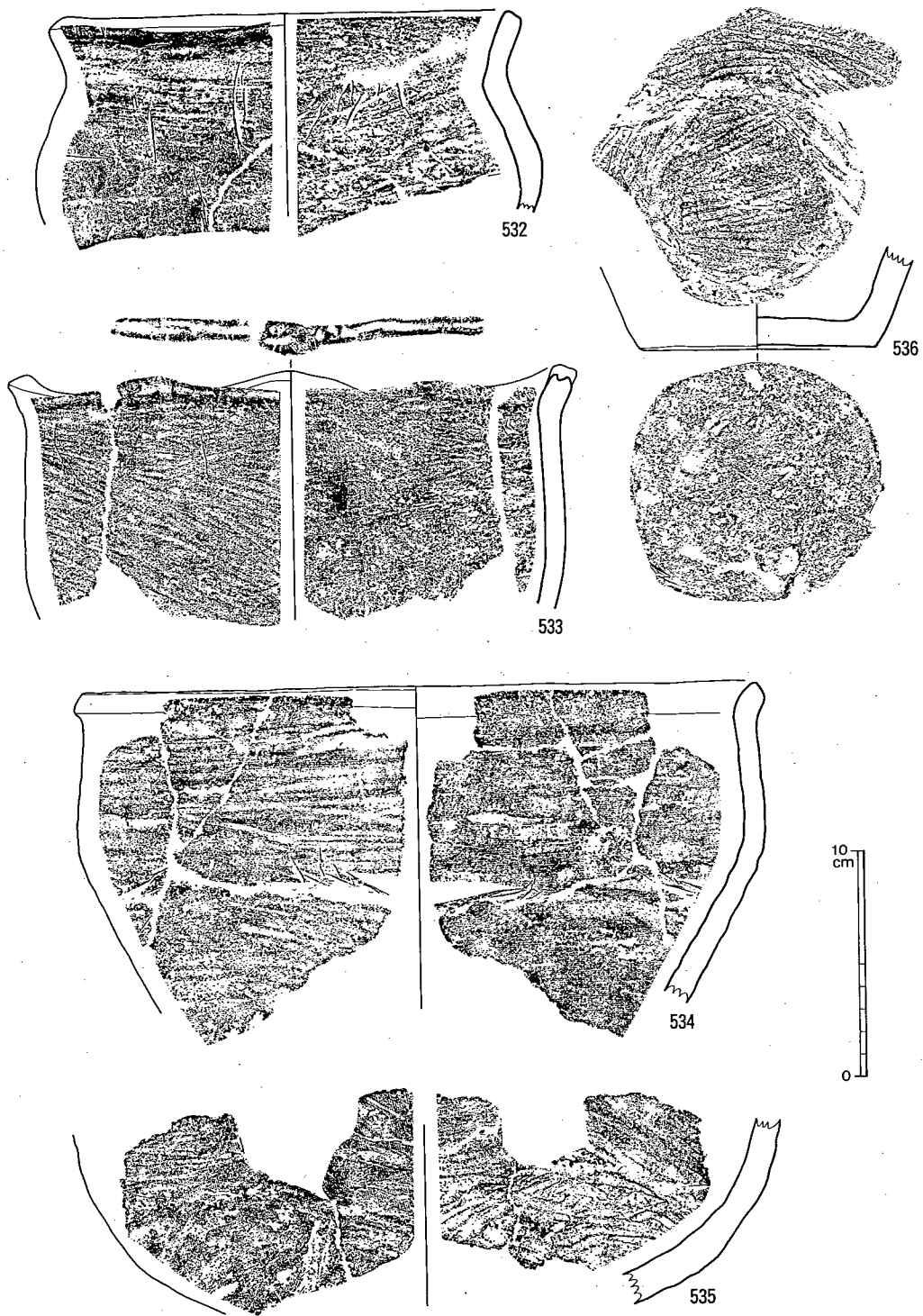
第 98 图 5 号竖穴住居迹 4 层出土土器实测图. 3 (1/3)



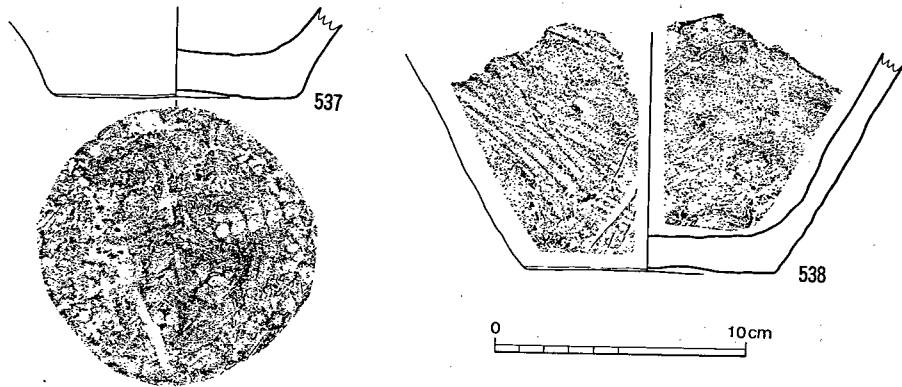
第 99 图 5 号竖穴住居跡 4 層出土土器実測图. 4 (1/3)



第 100 图 5号竖穴住居跡 4層出土土器実測图. 5 (1/3)



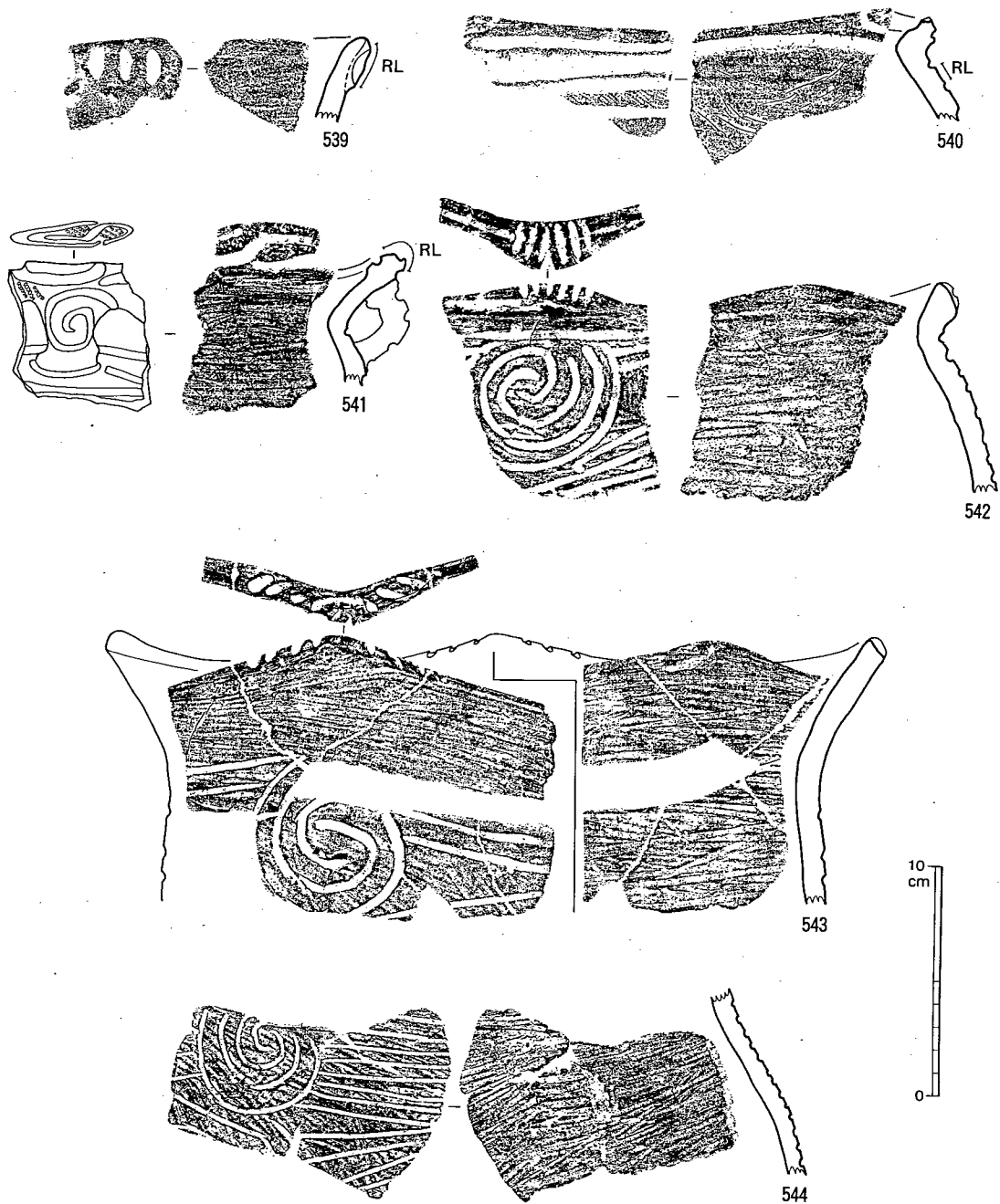
第 101 图 5 号竖穴住居跡 4 層出土土器実測図. 6 (1/3)



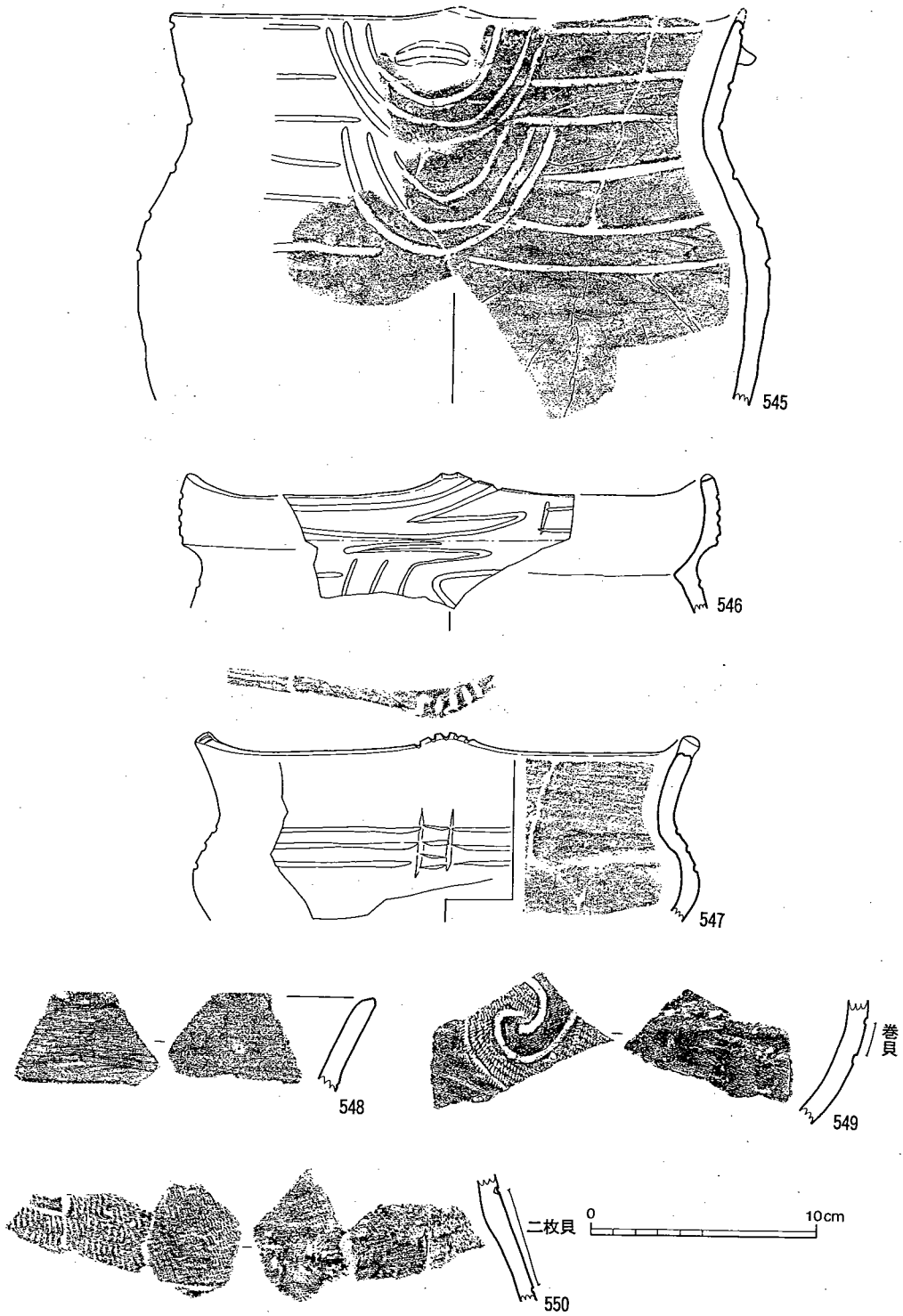
第 102 図 5号竪穴住居跡 4層出土土器実測図. 7 (1/3)

新段階になると文様の簡略化・単純化・粗雑化はさらに進行し、巻貝条痕文の器面調整を残す深鉢と流水文的な縦位波状文を多用する鉢とに器形が分化していく (294~312)。313~379は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群であるが、鐘崎式と連続的な型式変遷上にあるのではなく、むしろ西平式に近い一群と考えられる。鉢 (294~347)については口縁部が強く外反して胴部も強く張るもので、口縁部には縄紋もしくは巻貝疑似縄紋だけが、胴部には沈線文と縄紋 (疑似縄紋) との組み合わせによる磨消縄紋が施される。疑似縄紋は巻貝が主流だが、331のように二枚貝のものもある。332のように口縁部には巻貝疑似縄紋、胴部にはRL縄紋が施される場合もある。315・328・332のように口縁部の波頂部には3単位の穿孔や刺突文が出現する。深鉢 (348~353)の口縁部は内湾ぎみに肥厚するのが特徴。357には円錐形の突起の上に北久根山式的な逆W字状の隆帯文が付くが、332の口縁部と比較すると両者に近い関係が認められ、敢えて北久根山式との関連性を想定する必然性はない。358~374はボウル状の鉢もしくは浅鉢である。沈線文と縄紋 (疑似縄紋) とが合わさって磨消縄紋を形成したり突起を多用する特徴は、ここまで説明してきた鉢や深鉢の特徴と整合性を示すものである。375・376の注口部も文様から西平式や三万田式のものではなく、それ以前に位置づけられよう。380~408は無文土器で、巻貝条痕文による器面調整が目立つ。380~390の波頂部の刻み目や短く強く外反する特徴は確実に鐘崎式に伴うものといえるが、391~408までの器形や波頂部の特徴はそれ以降に位置づけられよう。409~419までの底部のうち、416は種子圧痕が、419には網代状の圧痕が残る。口縁部356、無文408、底部413は西平式直前に位置づけられよう。

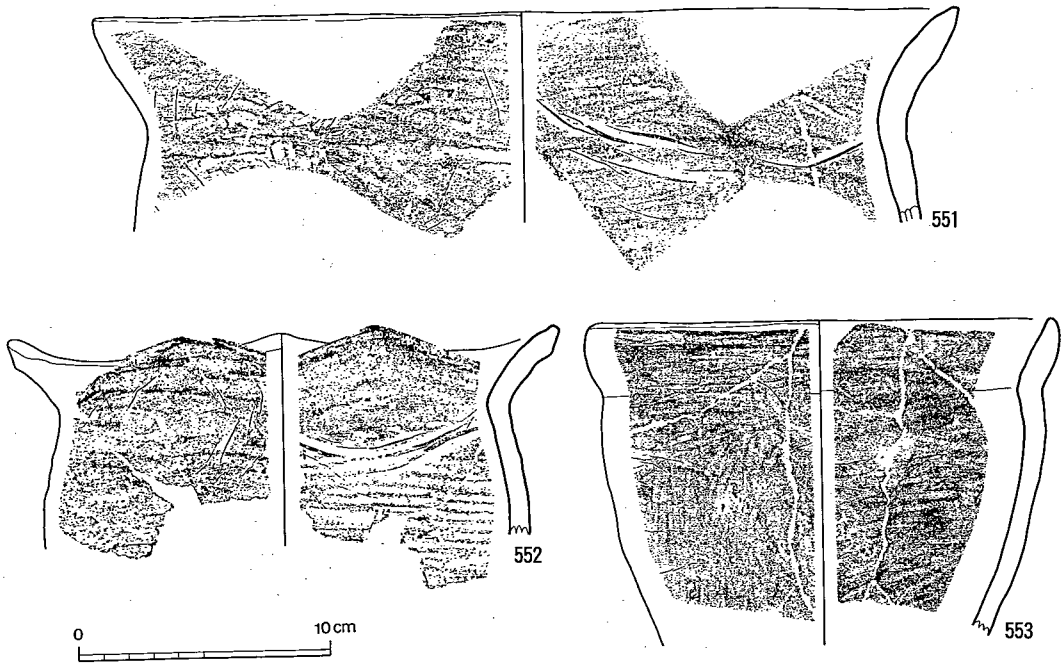
3層下部 (第79~95図)でも鐘崎式から西平式以前までが出土したが、2・3層と異なるのは鐘崎式の古段階や西平式に近い一群が存在しないことである。420~428は中段階のもので、鉤手文と渦巻文との組み合わせが形骸化しながらも辛うじて残っている段階である。420は沈線文の端部が刺突文と合わさるのが特徴的。421の波頂部には巻貝の側面が押圧される。429



第 103 图 5 号竖穴住居迹床面出土土器实测图. 1 (1/3)



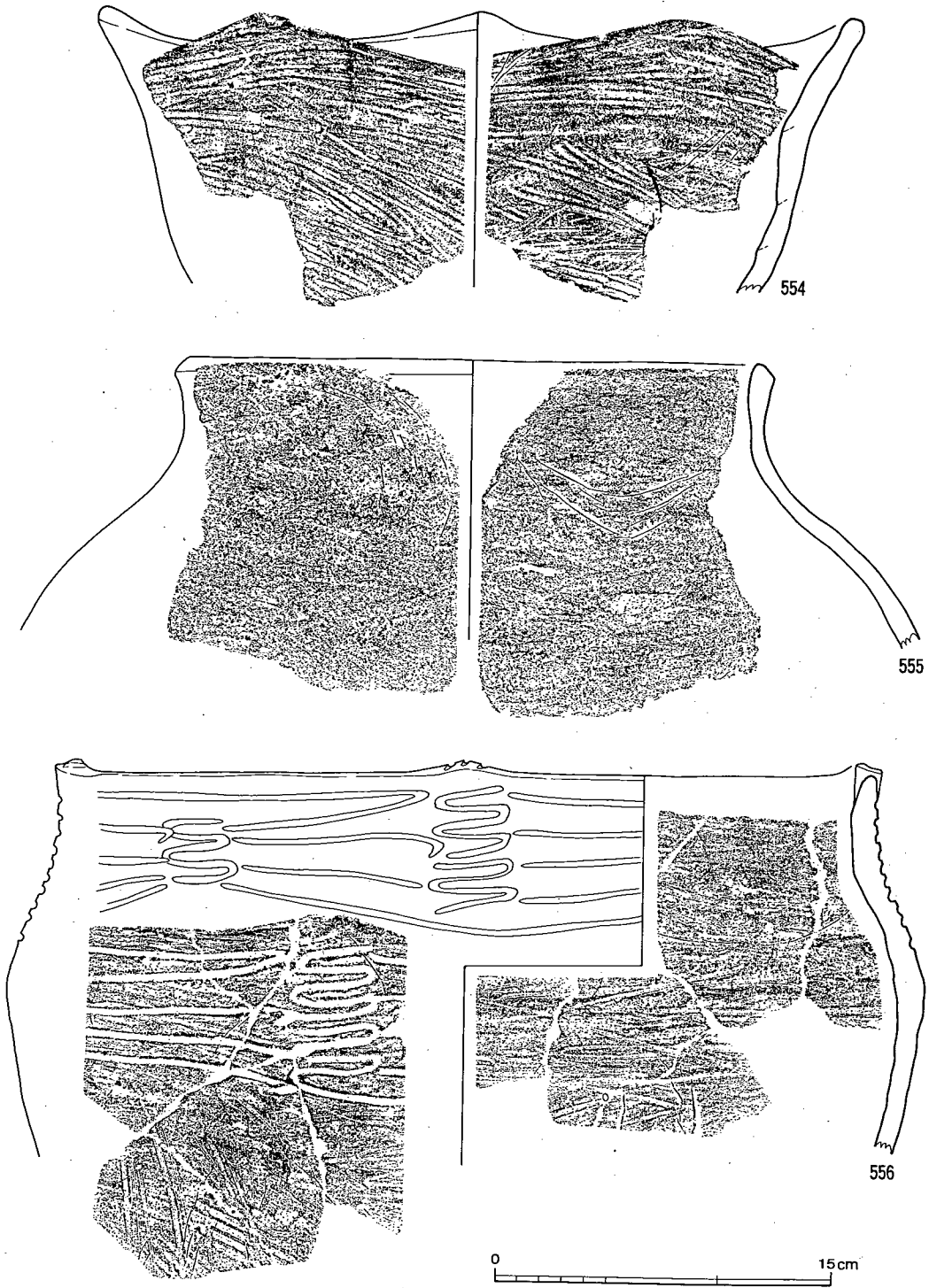
第 104 图 5号竖穴住居跡床面出土土器实测图. 2 (1/3)



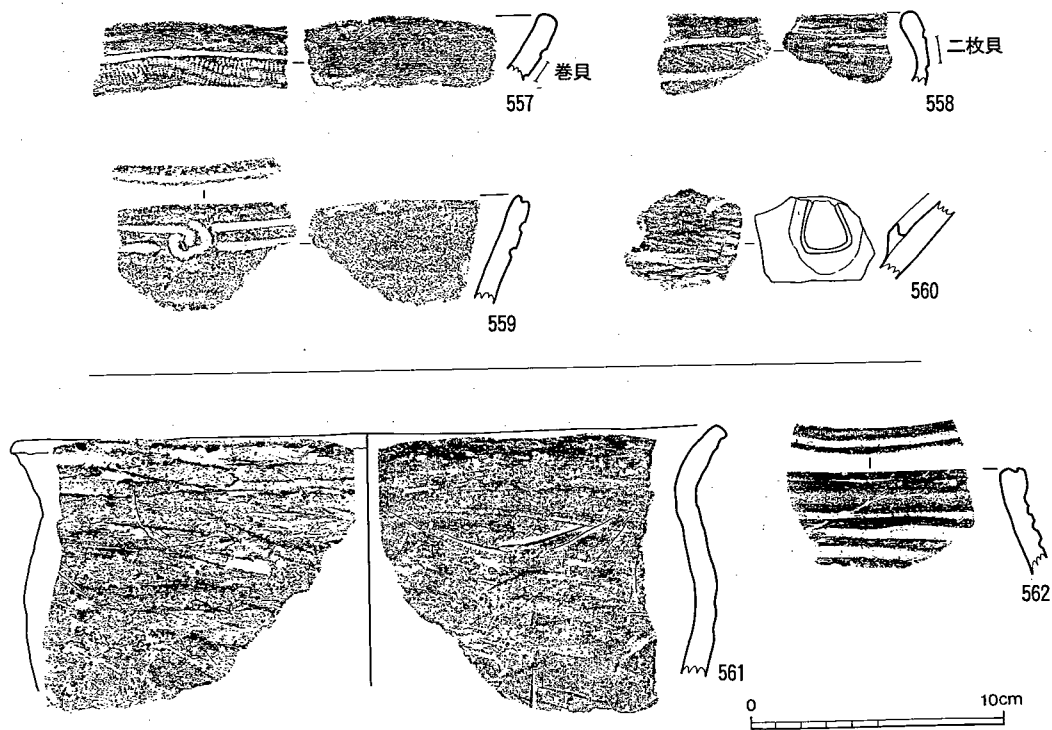
第 105 図 5 号竪穴住居跡床面出土土器実測図. 3 (1/3)

～436では鉤手文は横位の直線文になり、渦巻文についても辛うじて残るかあるいは流水文的な縦位の波状文へ変化して本来の姿をもはや留めていない。437～452は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群で、鉢の縄紋あるいは疑似縄紋施文部には赤色塗布が頻繁に行なわれる。447のボウル状の鉢では、突起を付けた後に沈線文が施され、そしてさらに赤色塗布が行なわれる。突起の上にも巻貝疑似縄紋が施され、内面には巻貝条痕文が明瞭に窺える。453～486は無文の深鉢と鉢で、口縁部が長く外反するタイプは鐘崎式以降に位置づけられよう。487～490はボウル状の鉢。491～497の底部のうち、西平式もしくはその直前に位置づけられそうなものはない。

4層（第96～102図）からは鐘崎式の中段階を中心に、若干の新段階とそれに後続する一群が出土した。498～513のように、複数の渦巻文に鉤手文の名残りになる多条化した斜位や横位の沈線文が組合わるものが、中段階の主流となる。514は中段階のものがさらに簡略化したもので、波頂部下の胴部では渦巻文の形骸化した縦位の波状文が、波頂部と波頂部の間の胴部には沈線文の先端部を湾曲させて同じような効果を表出させている。521や525は小型のボウル状鉢で、口縁部の沈線文間の刺突文は一見疑似縄紋的に見えるが、この段階では縄紋が施されることはないのでその系譜ではなからう。526～531は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群であるが、その中でもより新しく位置づけられようか。526は深鉢の口縁部で、わずかに内



第 106 图 5 号竖穴住居迹内沟出土土器实测图. 1 (1/3)



第 107 図 5 号竪穴住居跡内溝出土土器実測図. 2 (1/3)

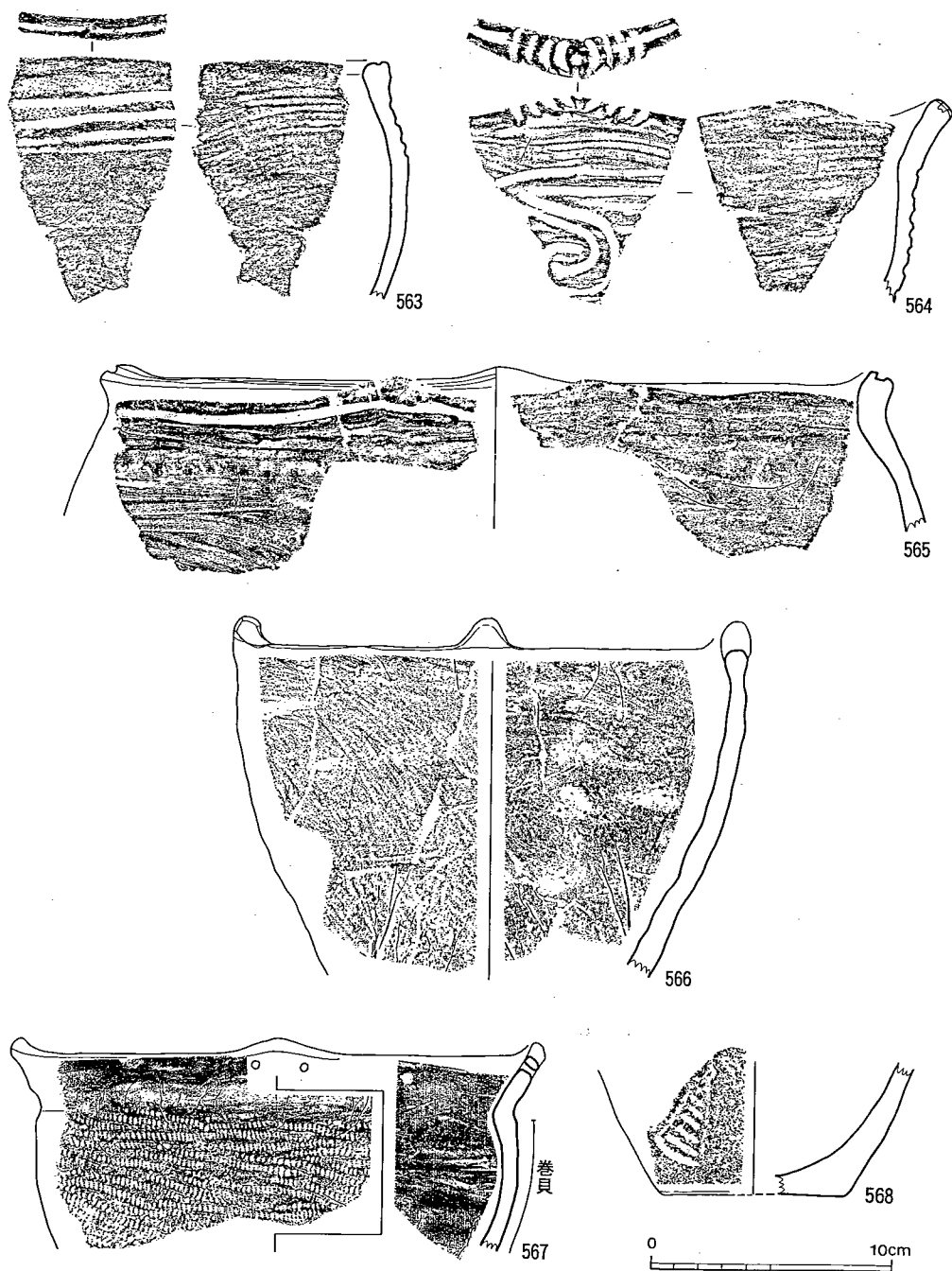
湾化している。531は注口土器であるが、器形は注口部のラインを長軸とした楕円形になる。疑似縄紋が施されるが、原体不明の刺突文である。537の底部には網代状の圧痕が窺える。

床面（第103～105図）からは鐘崎式の中段階を中心に、新段階とそれに後続する土器もわずかに出土した。539～541のように小池原上層式もしくは鐘崎式の古段階も見られるが小破片ばかりで、大きな破片は542～547の中段階になる。542～544は巻貝条痕文がそのまま残る。545波頂部下には突起が付き、それを取り囲むように半円形の弧状文が2段巡り、さらに横位の沈線文がそこから伸びる。546は西平式に近い段階のもので、内面の頸部にはシャープな稜ができる。口縁部は内湾ぎみに肥厚して、そこに施される沈線文は胴部の文様に連続する。

内溝（第106・107図）からは鐘崎式の新段階を中心に、それに後続する土器もわずかに出土した。556のモチーフには渦巻文と議手文の組み合わせの名残りがよく残っている。560は鉢の口縁部で、内面には円形の隆帯文が付く。

周溝（第107図）から出土した土器のうち562は鐘崎式の中段階。

支柱穴（第108図）からは鐘崎式の中段階を中心に、鐘崎式と西平式の間に位置づけられる



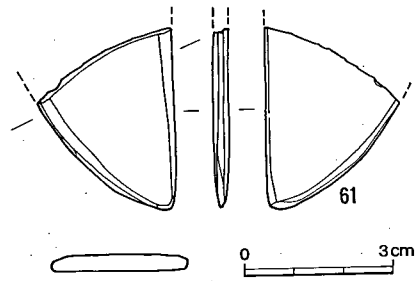
第 108 图 5 号竖穴住居迹周沟·主柱穴出土土器实测图 (1/3)

一群が出土した。567は胴部に巻貝疑似縄紋が全面に施され、波頂部には焼成前穿孔の穴が2つある。568は底部付近の破片であるが、三角形に斜位の沈線文が組み合わさる文様が施され、施文部位としては珍しい。

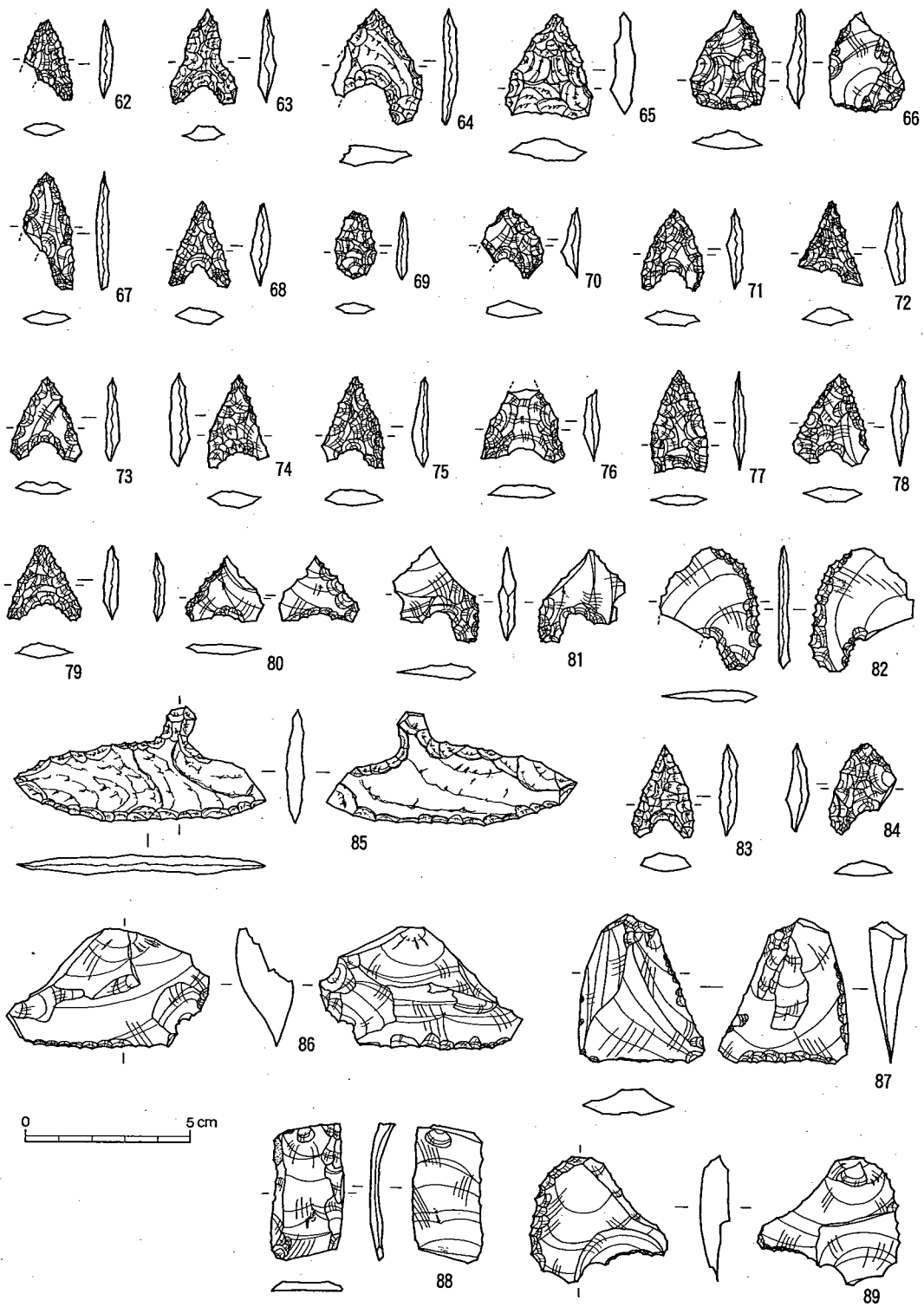
石器（第109～120図）石器も多量に出土しておりそのうち92点を図示したが、土器のように層位的には分けて図示していない。61はおそらく翡翠製の球状耳飾の破片。残存長3.6cm、残存幅2.6cm、厚さ3mm、重量0.4gを測る。淡緑白色を呈し、側

縁には面を作るように研磨されている。1層出土のため、小池原上層式から三万田式までの年代幅が与えられるが、縄紋後期に属するには間違いない。石鏃23点のうち姫島産黒曜石18点、サヌカイト4点、腰岳産黒曜石1点で、腰岳産黒曜石については鈴桶技法によって作出された縦長剥片を素材とした剥片鏃ではない。86はスクレイパー、87は使用痕による微細剥離痕のある縦長剥片。88は鈴桶技法による断面台形の縦長剥片。89は二次加工のある剥片。102・103はドーナツ形の石錘であろうか。細くなった部分は擦れたように摩滅しており、紐等を緊縛した痕跡と考えられる。104～119は磨製石斧。すべて蛇紋岩製で、断面形態や刃部形態から両刃石斧になるのは104・106・108～111・113・114・116・117である。片刃石斧の場合、自然面を多く残しているような傾向が窺える。120～137は結晶片岩製の打製石斧。120・123・127・129～132・134～136の両側縁には、柄を装着した際についた緊縛痕と考えられる擦れたような摩滅痕や階段状剥離が観察される。125の基端部には加工による研磨痕が窺える。131・135の刃部は研磨されているが、いずれも比較的細長い形態を呈しており、あるいは他の打製石斧と異なった使用方法が存在していたと考えられる。137の刃部には光沢のある擦れた摩滅痕があり、あるいは皮を嘗めしたような痕跡かもしれない。138・139は湾曲した側縁にのみ不定形な階段状剥離が見られる結晶片岩製の石器で、その形態と使用痕跡から石庖丁形石器としておきたい。140～145・147のくぼみ石のうち、140・141・144は敲石としても使用されていたようである。146は側縁の一部に自然面を残すほぼ全面を使用した磨石。148～152は木の実を敲きつぶしたり、擦りつぶしたりする作業を行なう台石で、いずれも重くて持ち運びが困難なものである。

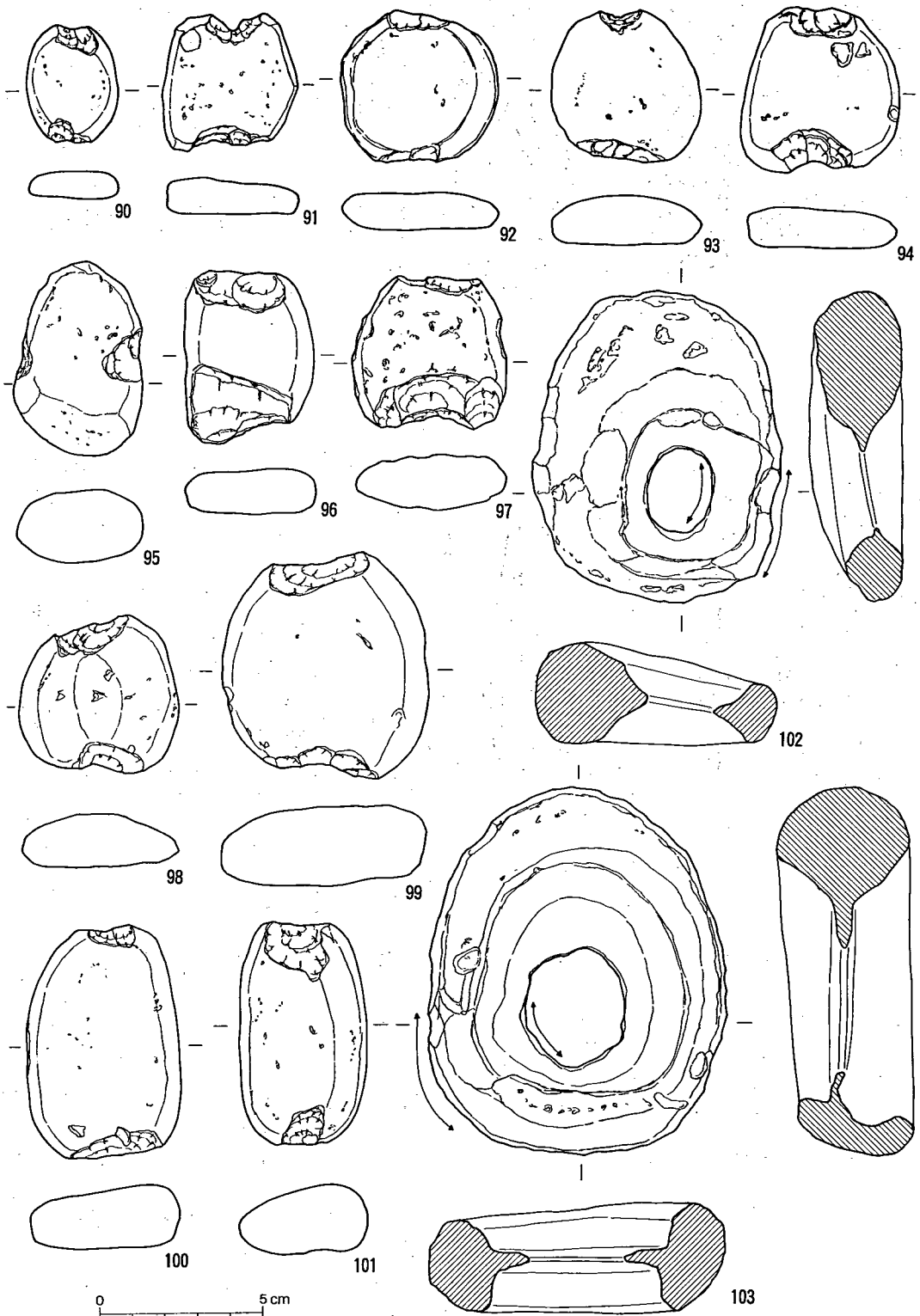
土製円盤（第280～285図）土製円盤は74点出土したが、ここで図示したのは27点である。そのうち文様を有するものは4点で、5・7・9は鐘崎式の新しい段階に、14は鐘崎式と西平式の間でもより鐘崎式に近い段階に位置づけられるものである。5 竪穴住居跡では最も多くの土製円盤が出土したが、この5号竪穴住居跡は遺物の出土量自体が膨大で、そのことを考慮すればそれなりの量と考えられる。



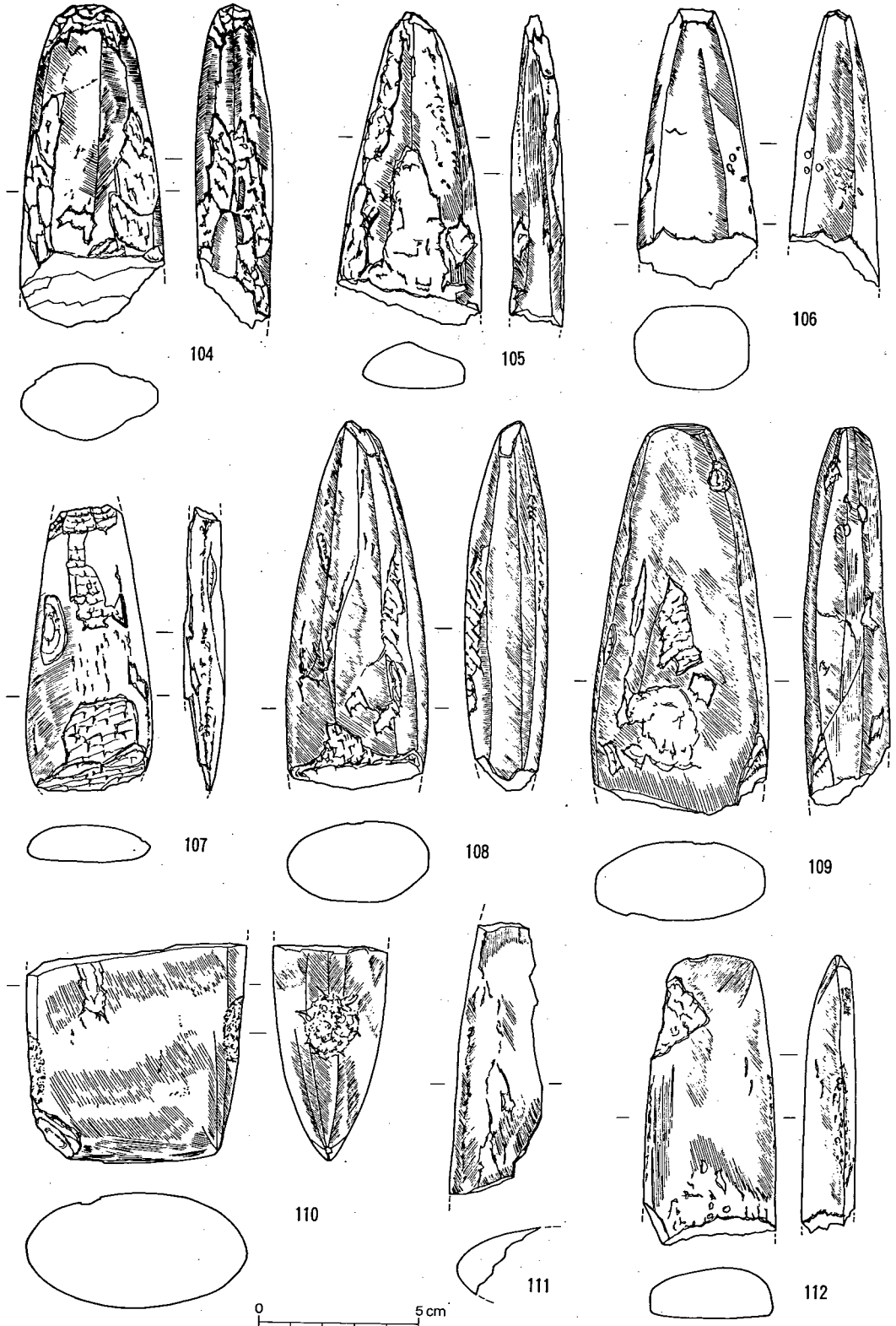
第 109 図 5号竪穴住居跡出土
球状耳飾実測図 (2/3)



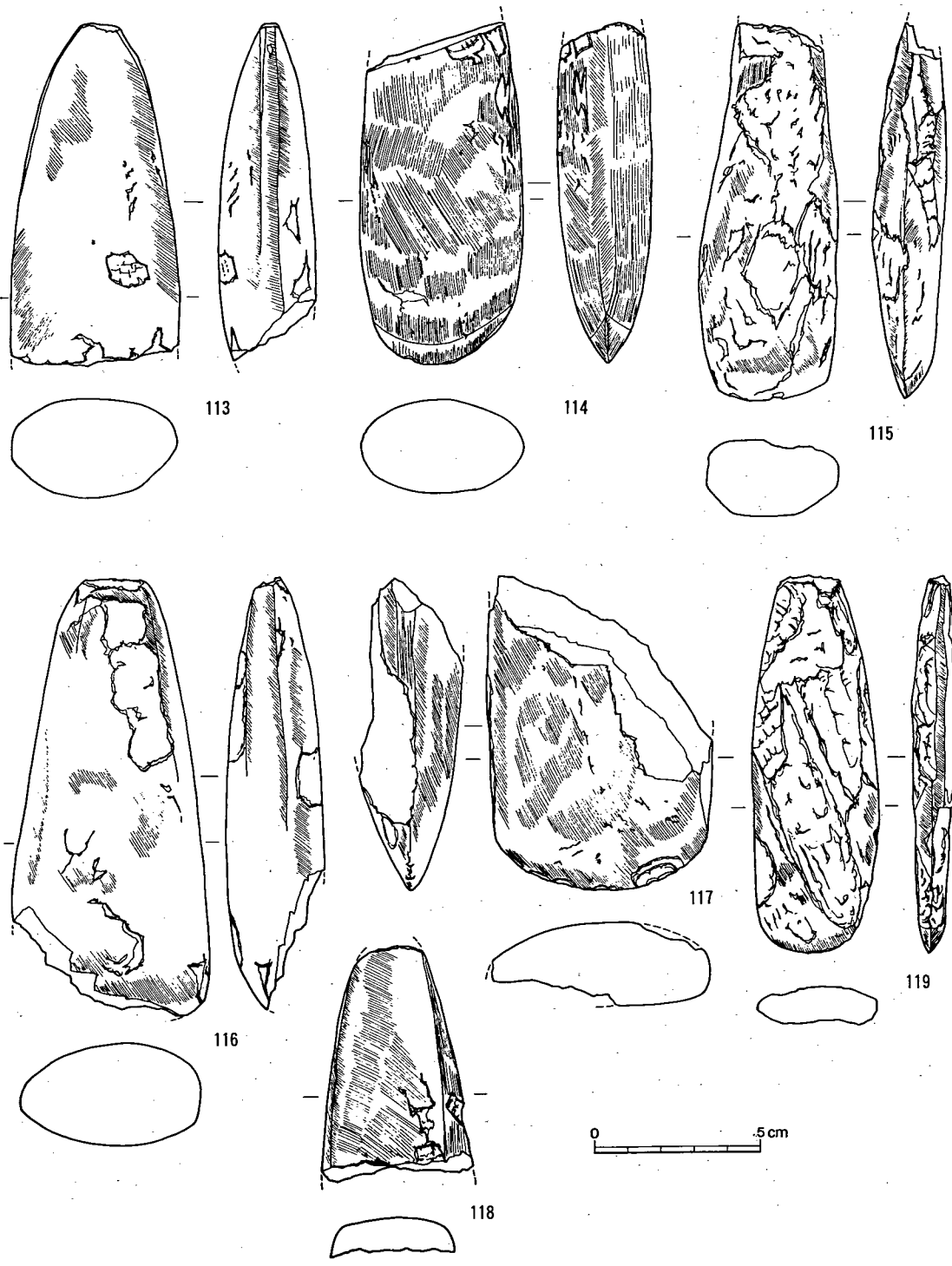
第 110 图 5 号竖穴住居迹出土石器实测图. 1 (1/2)



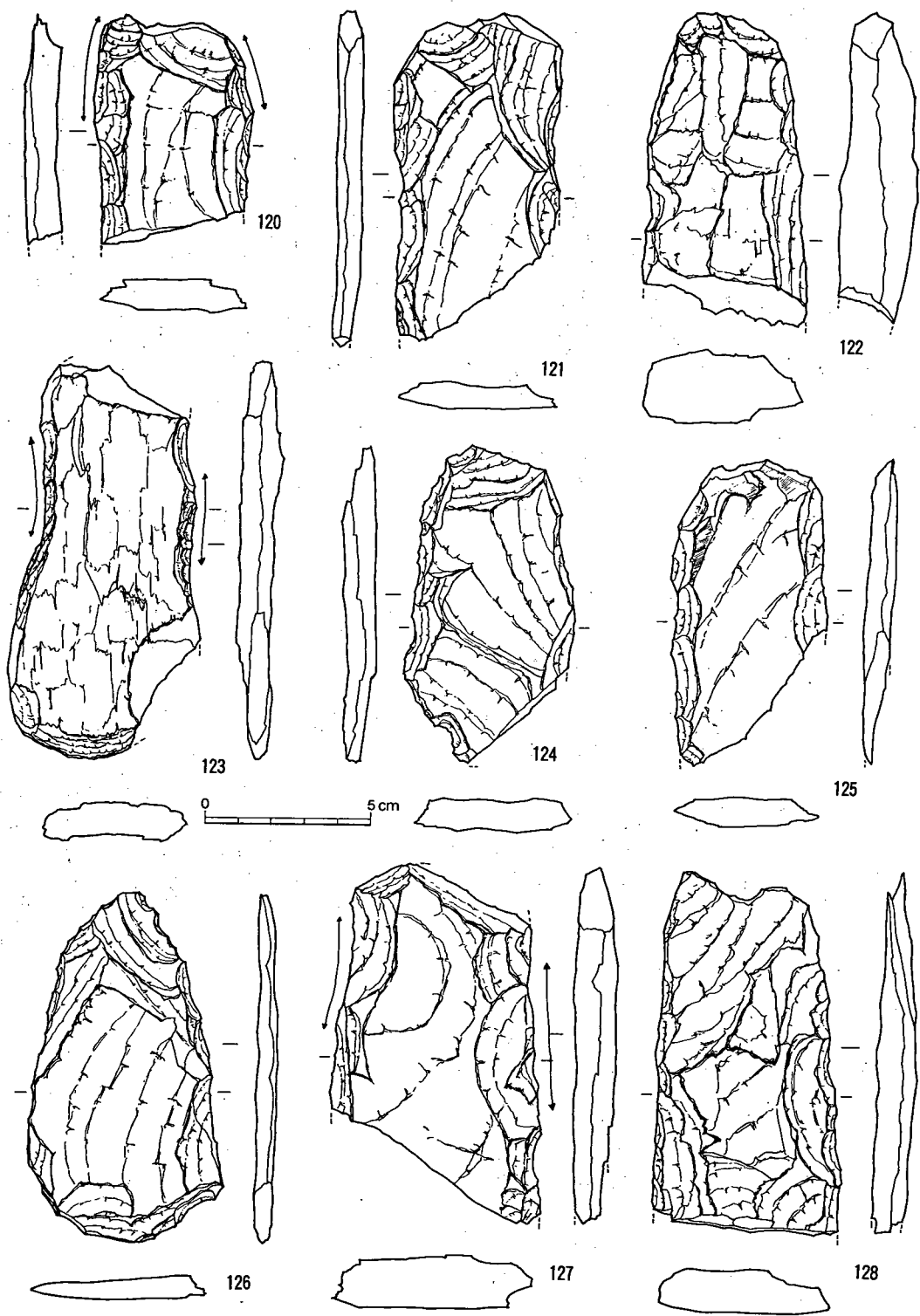
第 111 图 5 号竖穴住居迹出土石器实测图. 2 (1/2)



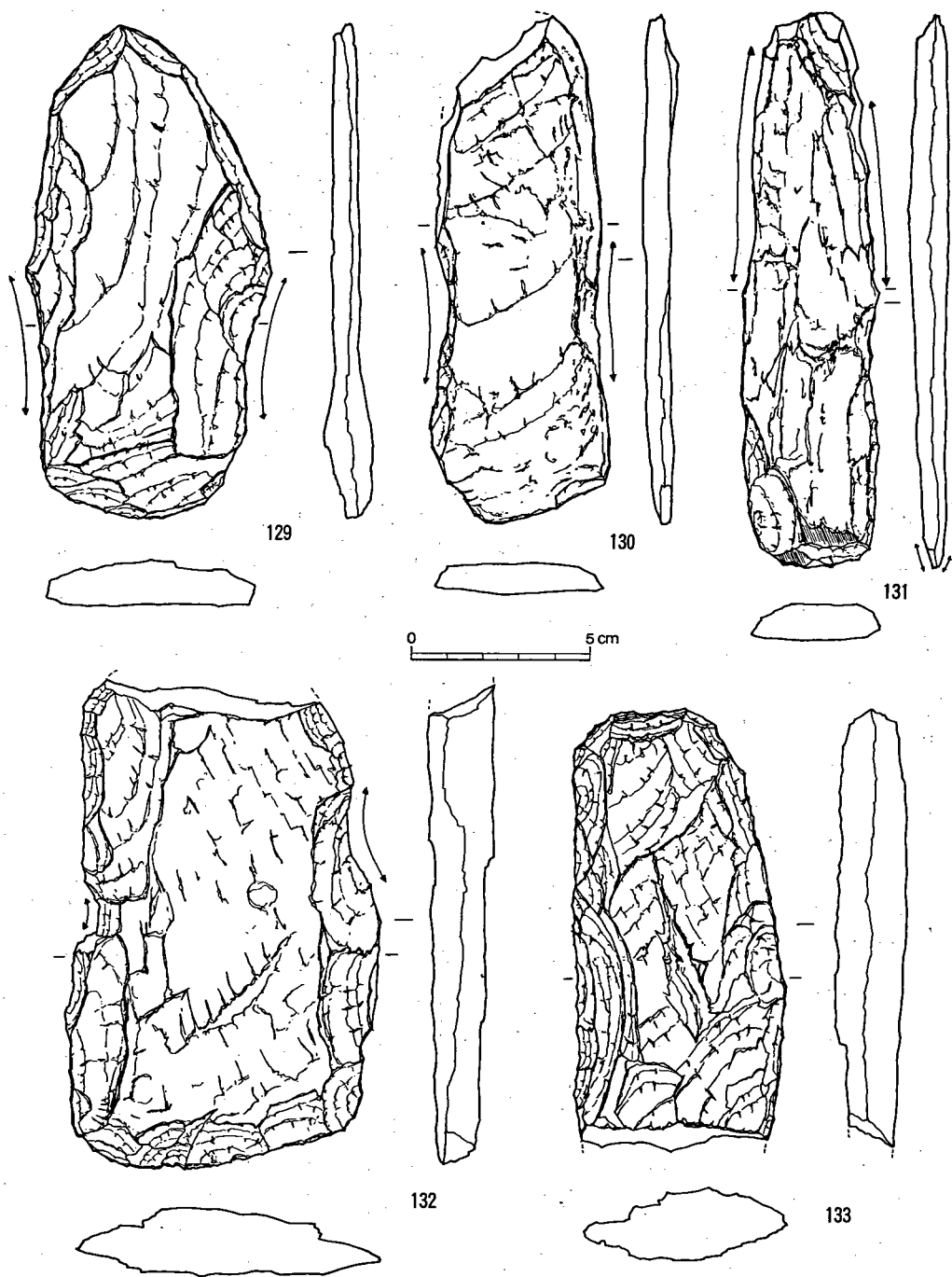
第 112 图 5 号竖穴住居跡出土石器实测图. 3 (1/2)



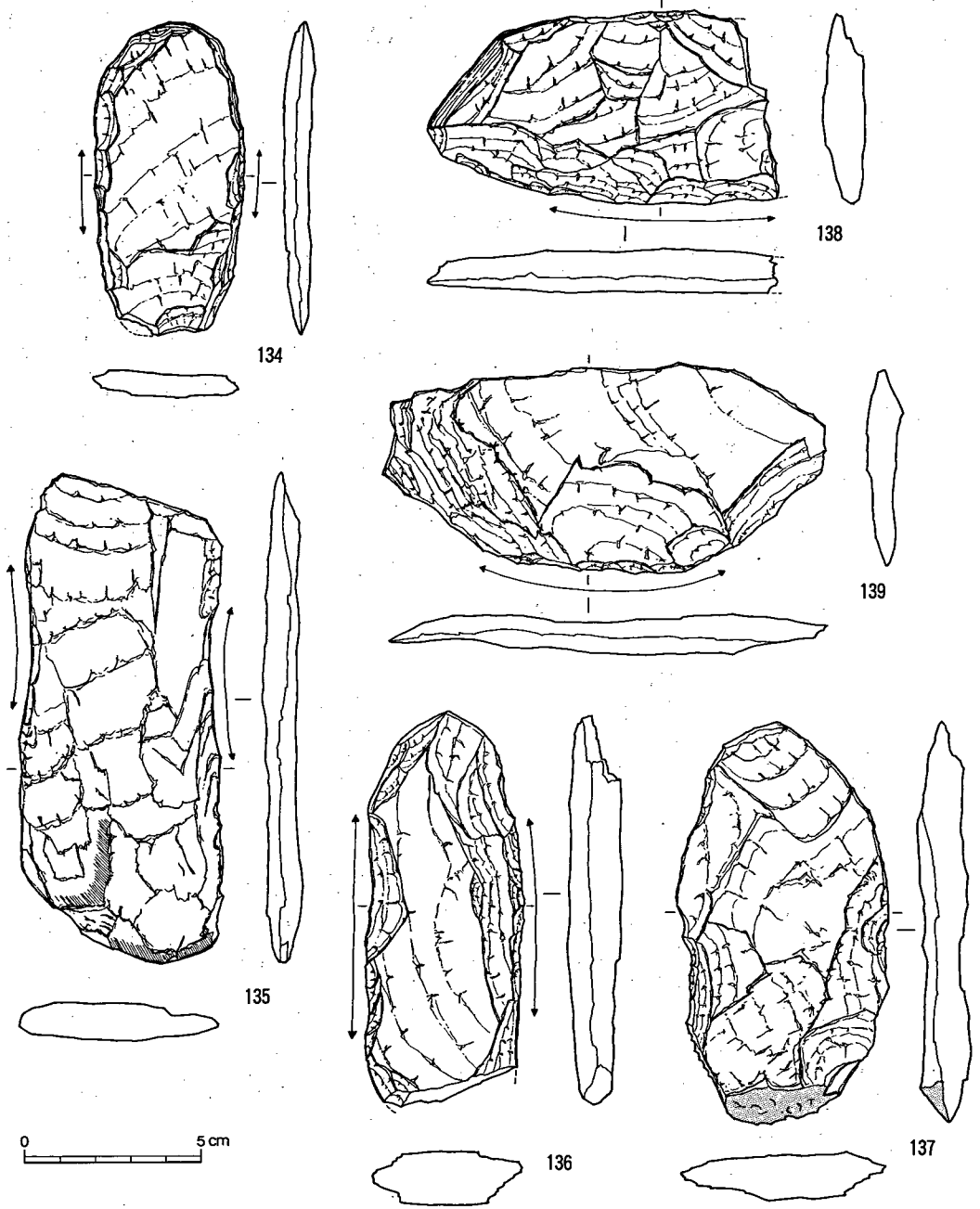
第 113 图 5 号竖穴住居跡出土石器実測図. 4 (1/2)



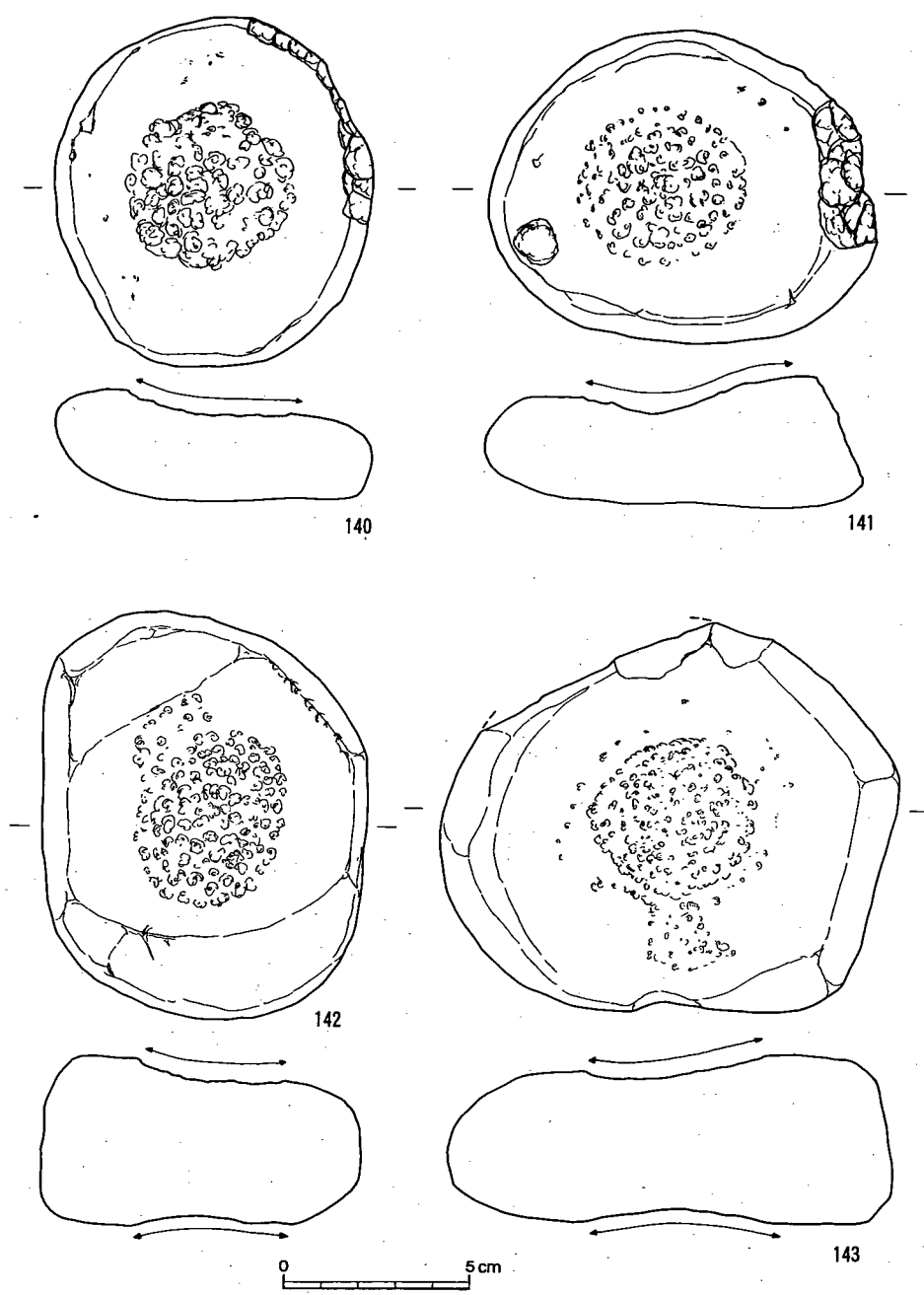
第 114 图 5 号竖穴住居迹出土石器实测图. 5 (1/2)



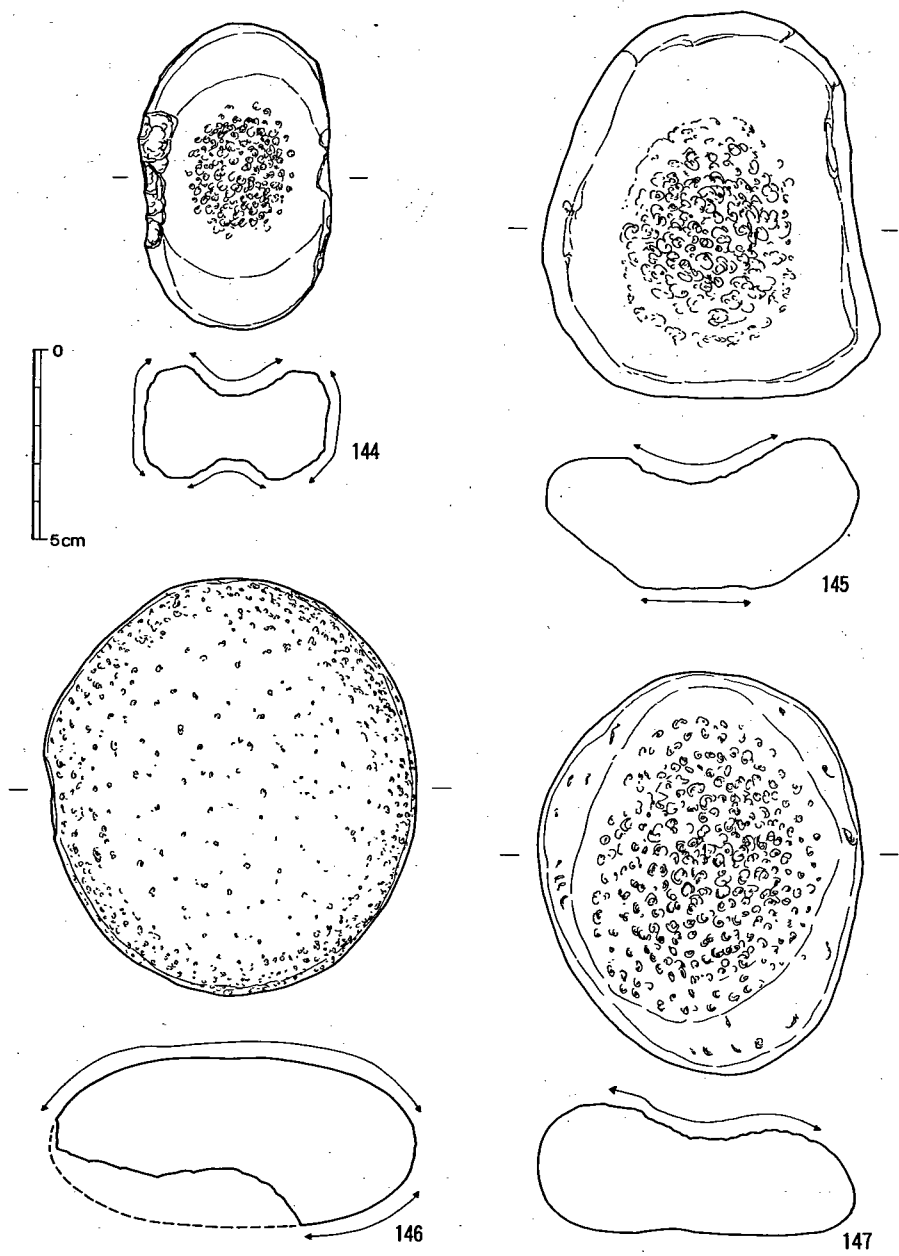
第 115 图 5 号竖穴住居跡出土石器实测图. 6 (1/2)



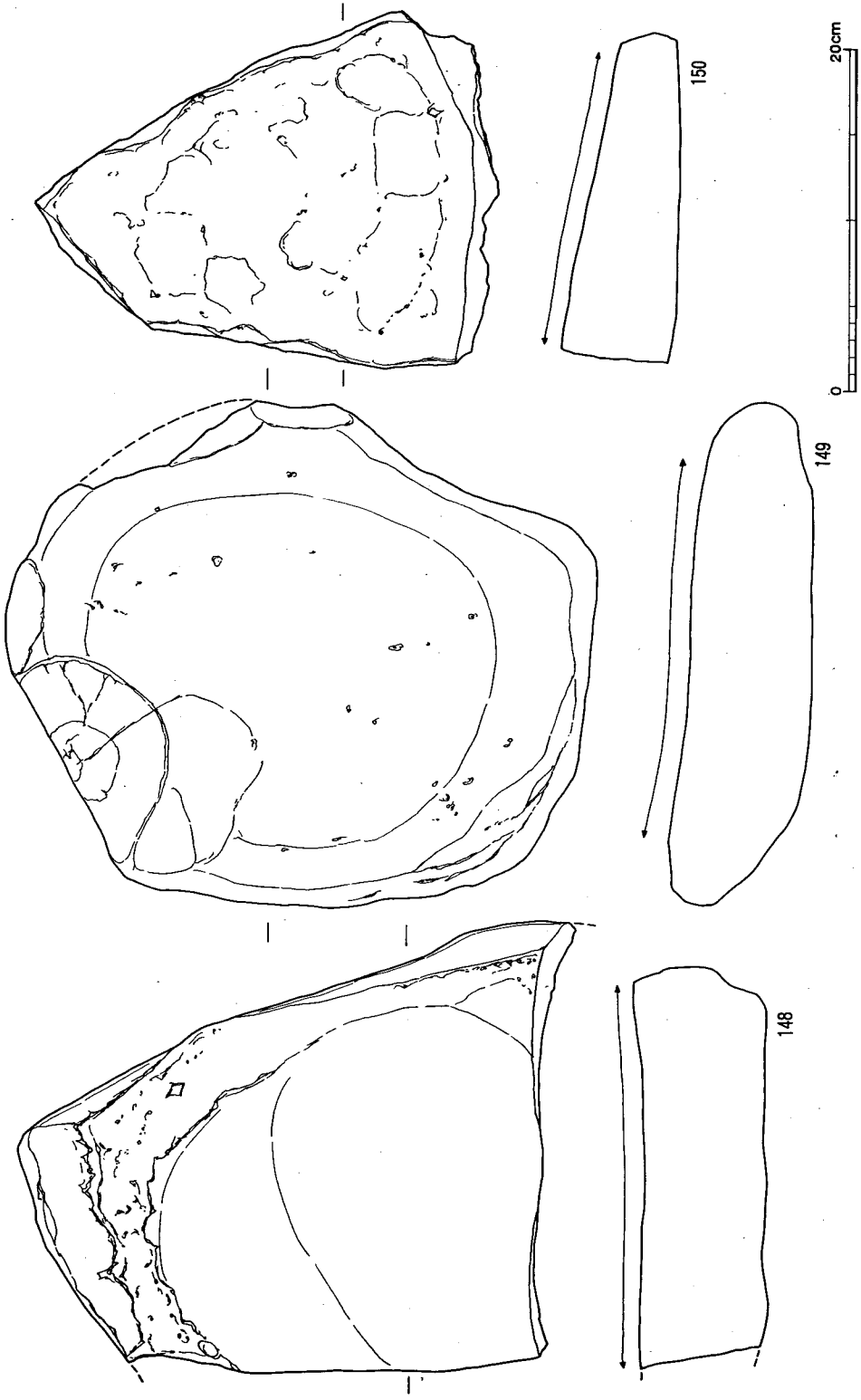
第 116 图 5 号竖穴住居迹出土石器实测图. 7 (1/2)



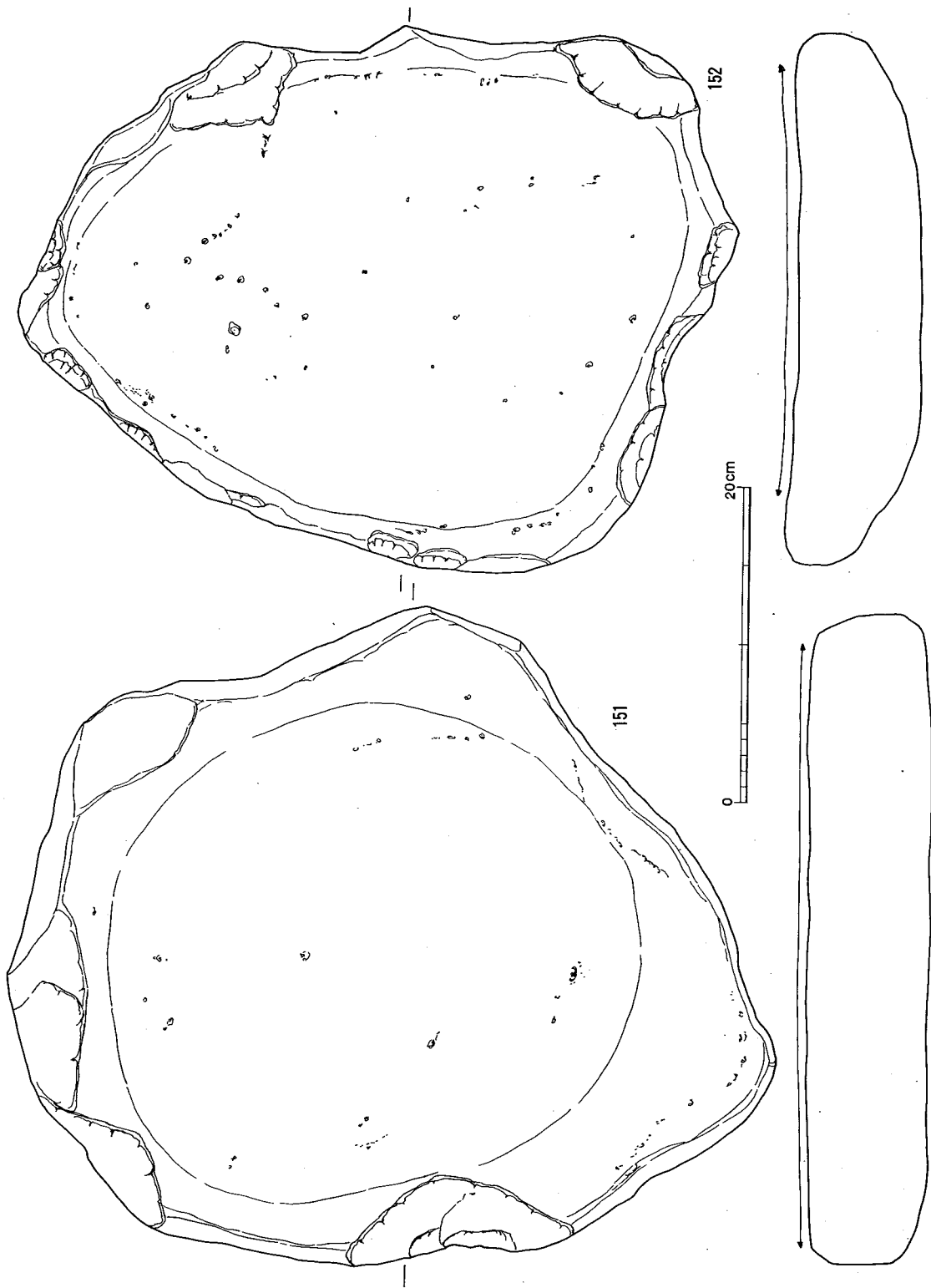
第 117 图 5 号竖穴住居迹出土石器实测图. 8 (1/2)



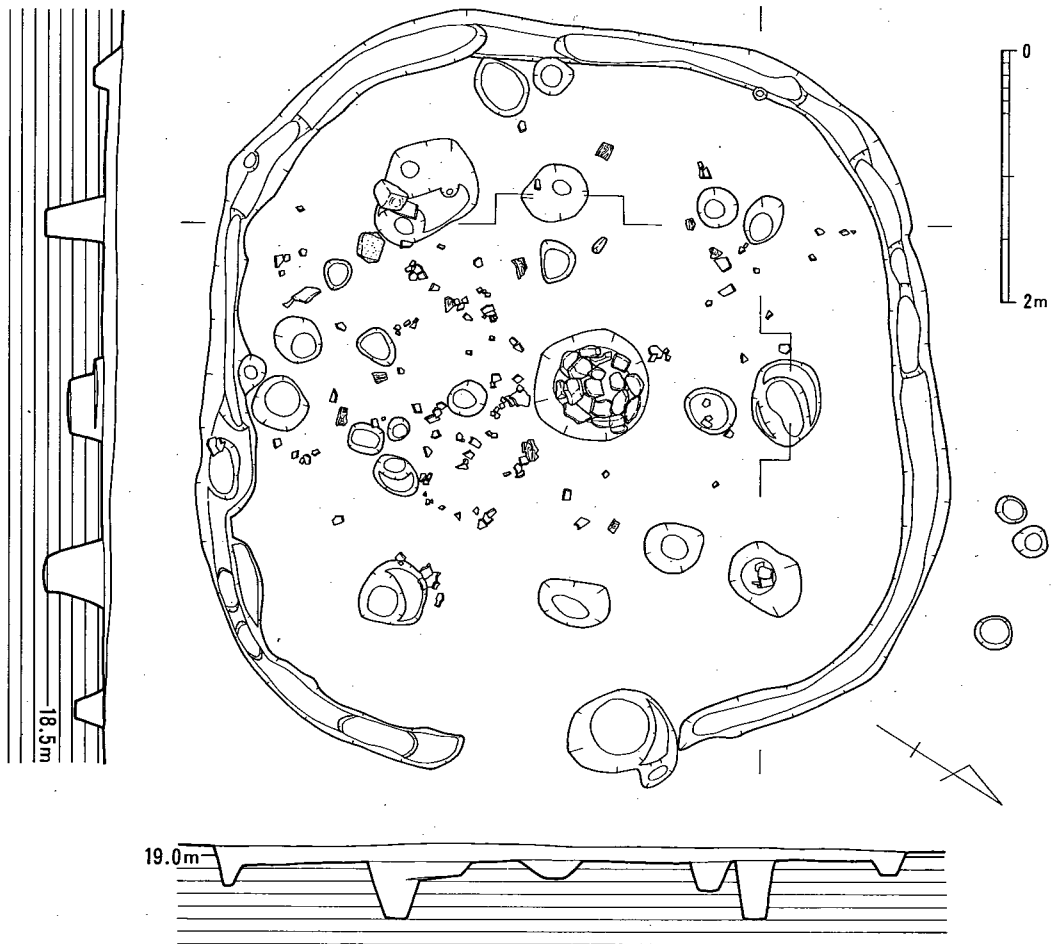
第 118 图 5 号竖穴住居跡出土石器实测图. 9 (1/2)



第 119 图 5 号竖穴住居跡出土石器実測図. 10 (1/4)



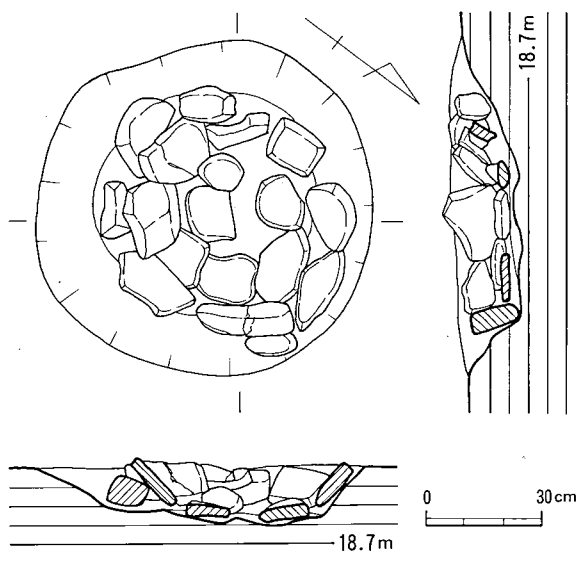
第 120 图 5 号竖穴住居跡出土石器実測图. 11 (1/4)



第 121 図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

6号竪穴住居跡 (図版 8 第121・122図)

6号竪穴住居跡は調査区中央部の東寄りVII F区に位置し、5号竪穴住居跡の西3 m、8号竪穴住居跡の北西2 mに近接する。平面プランは5.8×5.7mの隅丸方形で、床面までの深さは最高で15cm。幅20~35cm、深さ15~20cmの溝が壁に沿ってほぼ全周するが、北西壁の中央部だけ幅1.7mに亘ってこの溝が切れる。この部分は特に削平が著しい訳ではなく、また溝自体が徐々になくなっていくのではなく急に終わっているため、おそらく入口部になるのであろう。溝の底は一定の深さで平坦になるのではなく、浅く窪んだりピット状に深くなったりしている。主柱穴は幅50~70cm、深さ45cmに統一されるのが4本で、柱間は均等にほぼ3 m。柱間の中間部分には径35~55cm、深さ15~30cmの比較的浅い柱穴が4基あるが、これらは主柱穴の補助柱



第 122 図 6号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/30)

になろう。竪穴住居跡の中央部には90×85cmの掘りかたの中に、底に石を敷いた石組炉があり赤く焼けている(第122図)。埋土は暗茶褐色土だけで床面まで至り、貼り床を検出することはできなかった。遺物(パンケース9箱)は南側半分に集中する傾向にあるが、いずれも破片ばかりが散在して完形に復原できるものはなかった。石組炉については本遺跡において最も遺存状態が良好だったので、発砲ウレタンによって型取りを行ない復原できるような措置を講じた(第123図)。遺物は鐘崎式を中心に若干鐘崎式と西平式の間位置づけられるものも出土したが、後者については本遺構の検出段階で出土

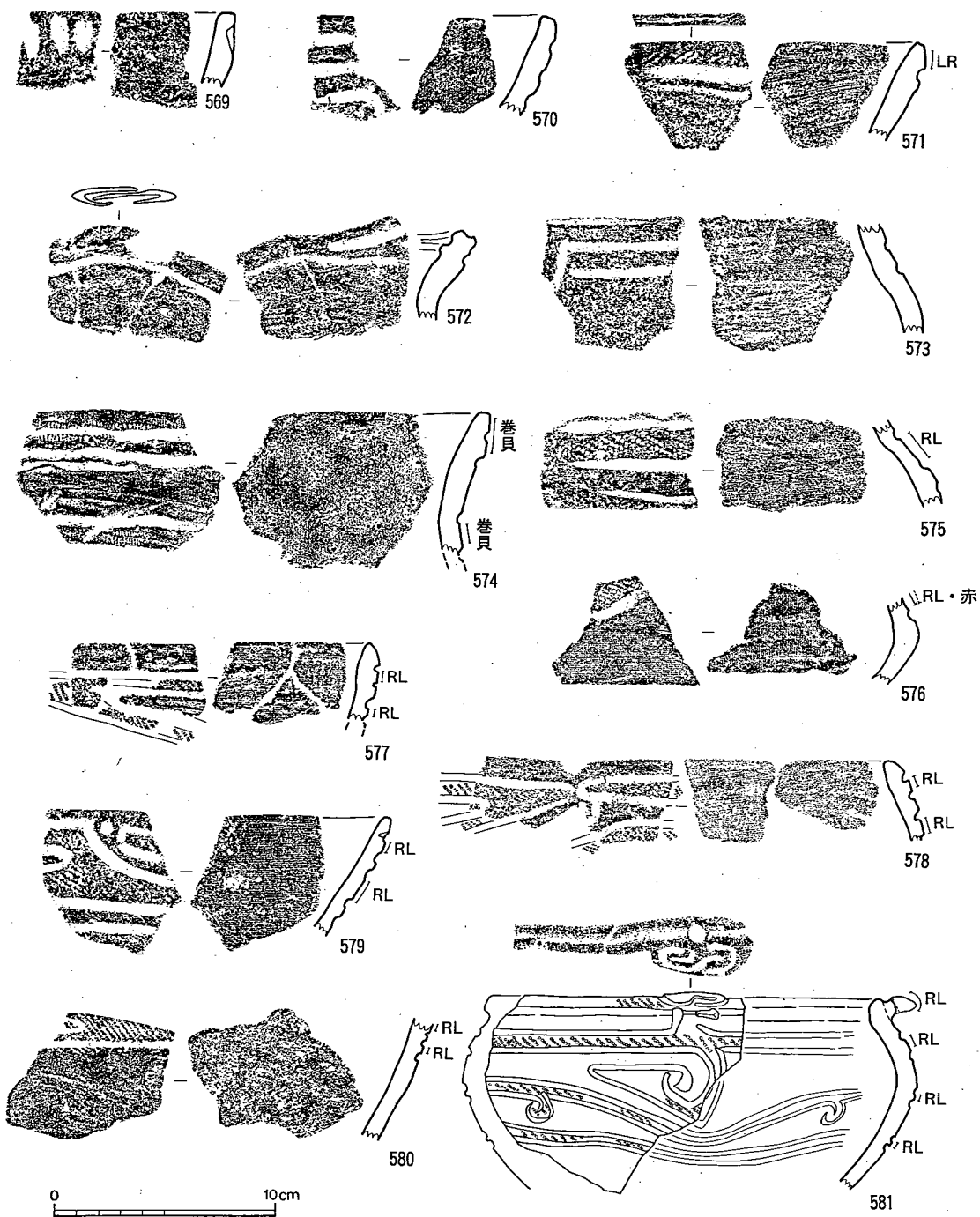
したもので、床面付近からは鐘崎式しか出土していない。

土器(第124~131図)土器は67点を図示した。569~576・587は小池原上層式である。574は沈線文の後に巻貝疑似縄紋を施す。肥厚した口縁部外面の中央部と頸部との境に沈線文を施す特徴は小池原上層式独特なものである。587は縄紋が施されない小池原上層式で、沈線文は粗雑で文様自体も簡略化されている。577~586・588~609は鐘崎式の有文土器である。577~586・588~591の文様構成は小池原上層式とほとんど変わらないもので、器高が低くなり文様が圧縮して沈線文も細くなる。592~609は小池原上層式以来の文様構成が崩れ、渦巻文や鉤手

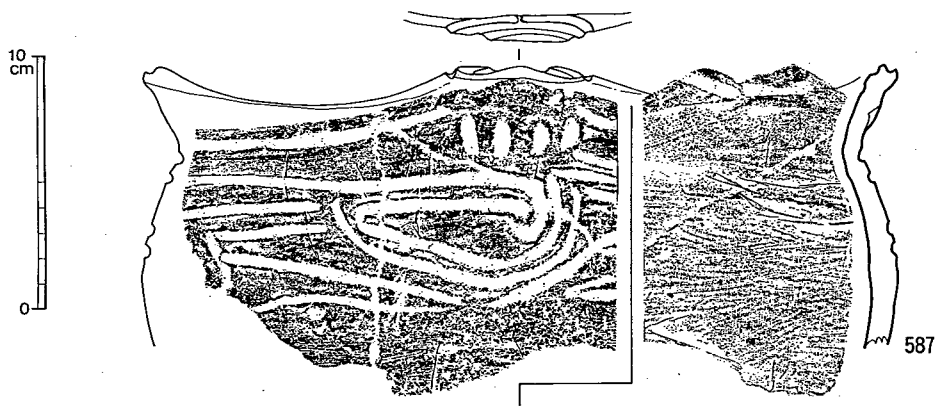
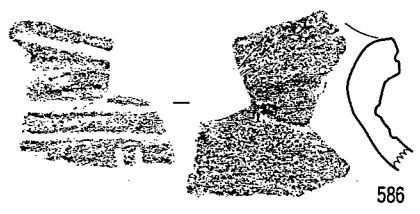
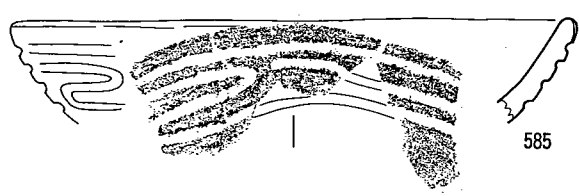
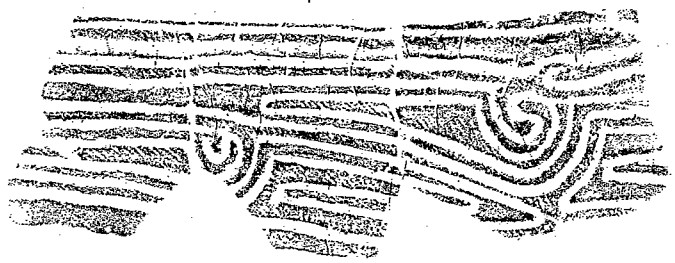
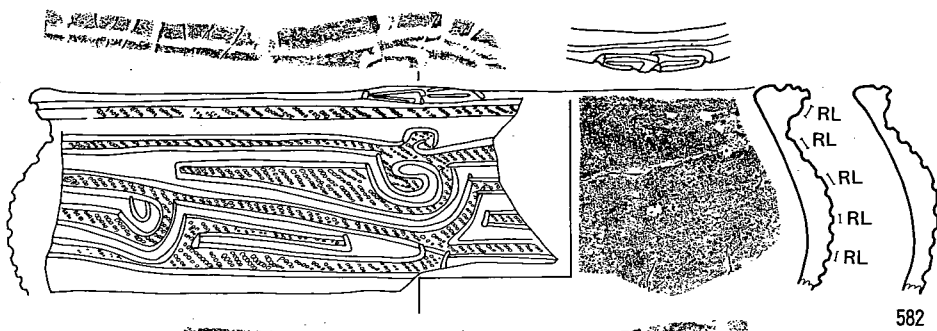


第 123 図 6号竪穴住居跡炉跡型取り風景(西から)

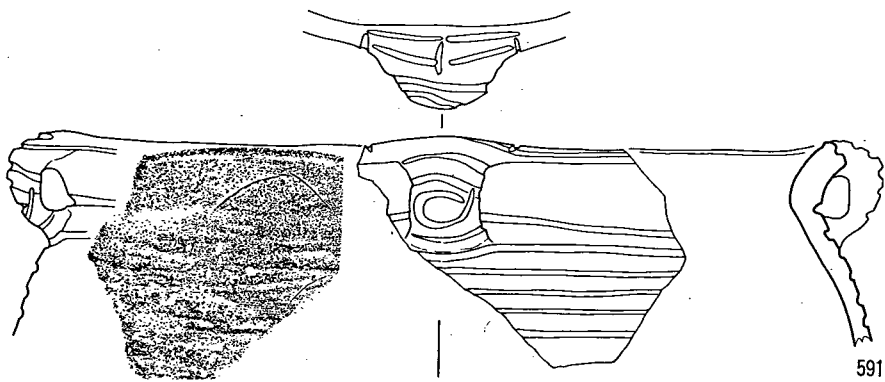
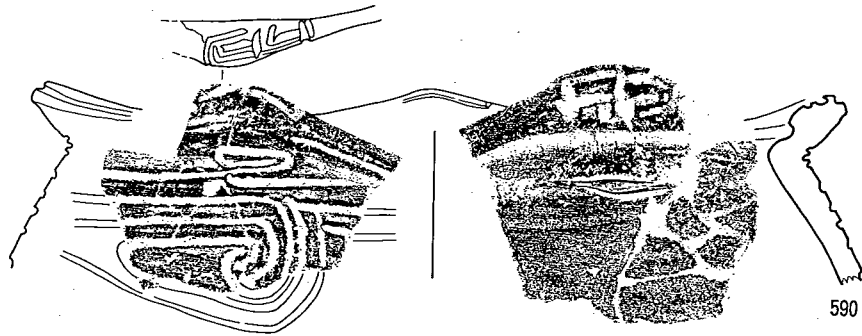
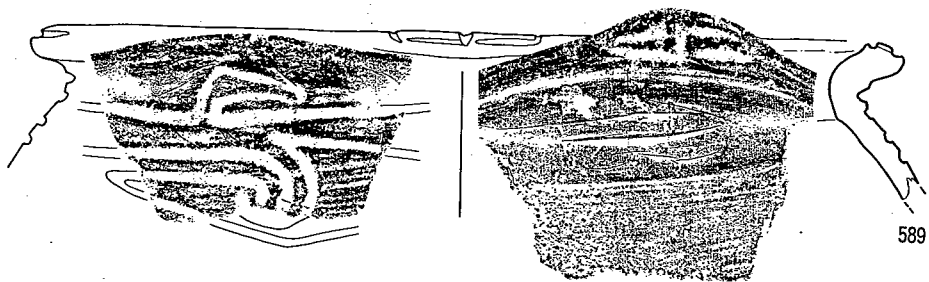
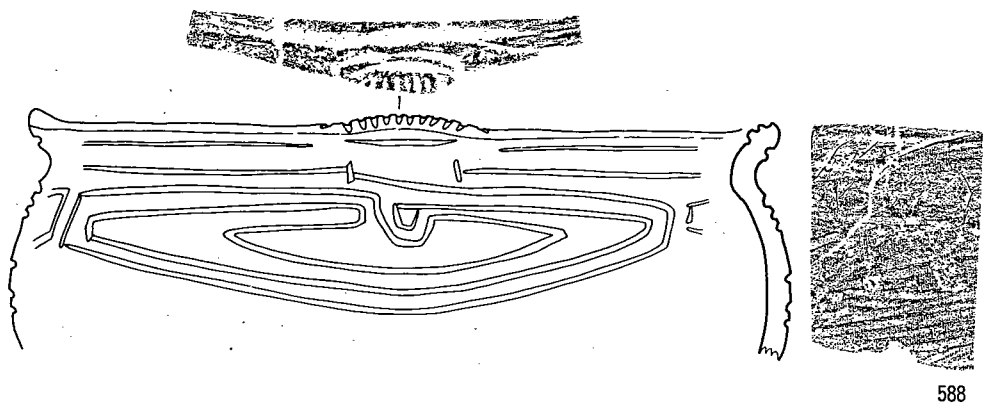
文の基本的な構成は残すものの文様自体の多様化が窺える段階である。ただし、渦巻文が2つになる段階ではないようである。610~624は鐘崎式の無文深鉢と鉢で、短い口縁部が厚く外反するのが特徴



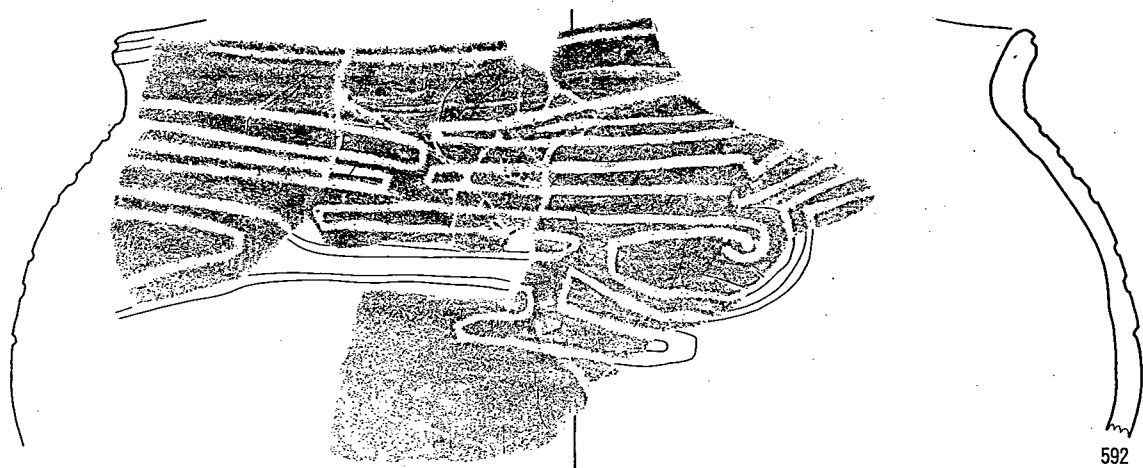
第 124 图 6 号竖穴住居迹出土土器实测图. 1 (1/3)



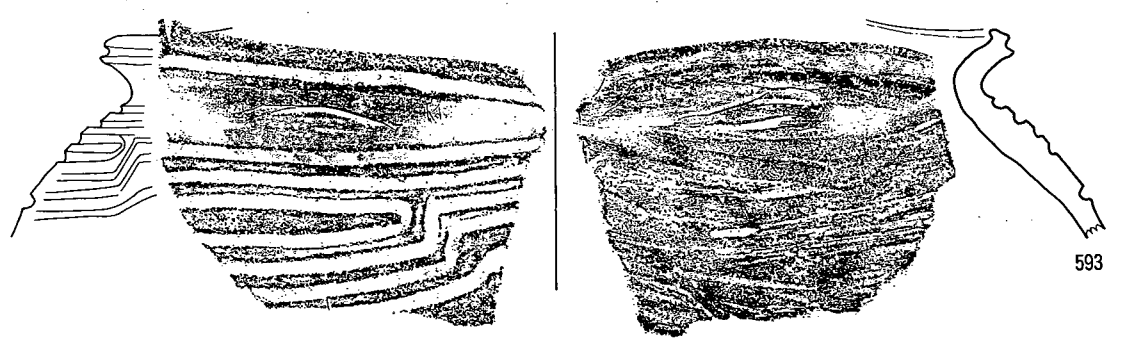
第 125 图 6 号竖穴住居迹出土土器实测图. 2 (1/3)



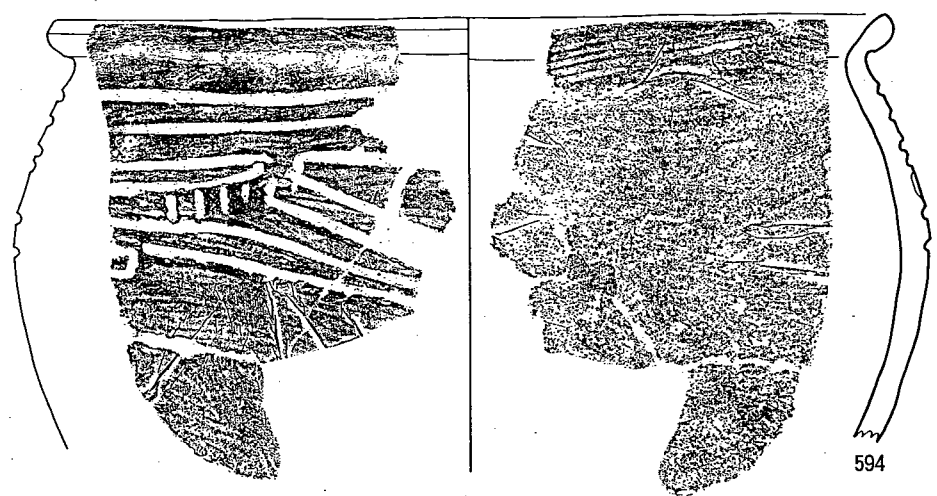
第 126 图 6 号竖穴住居跡出土土器実測図. 3 (1/3)



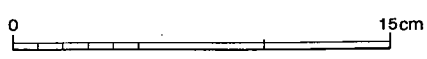
592



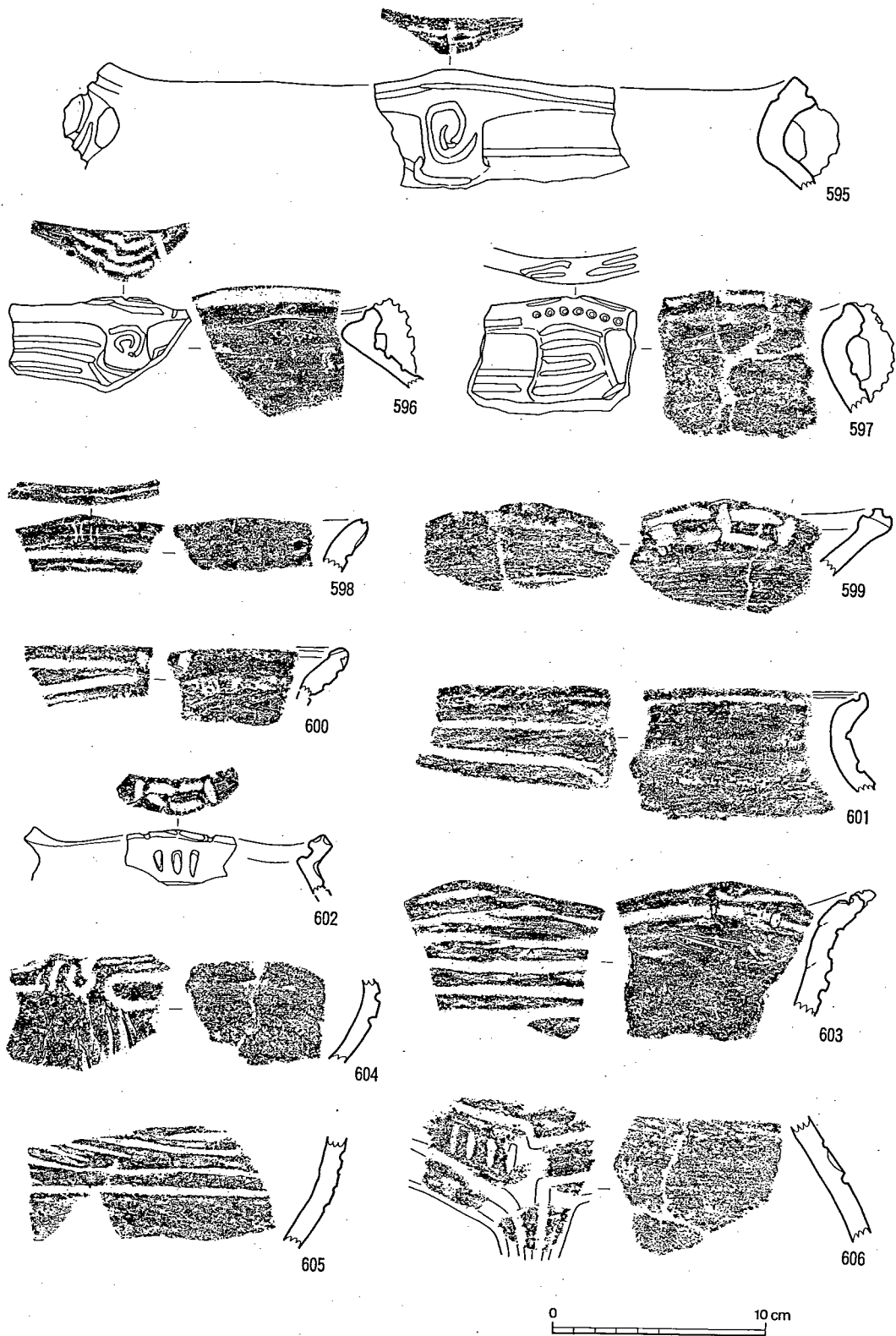
593



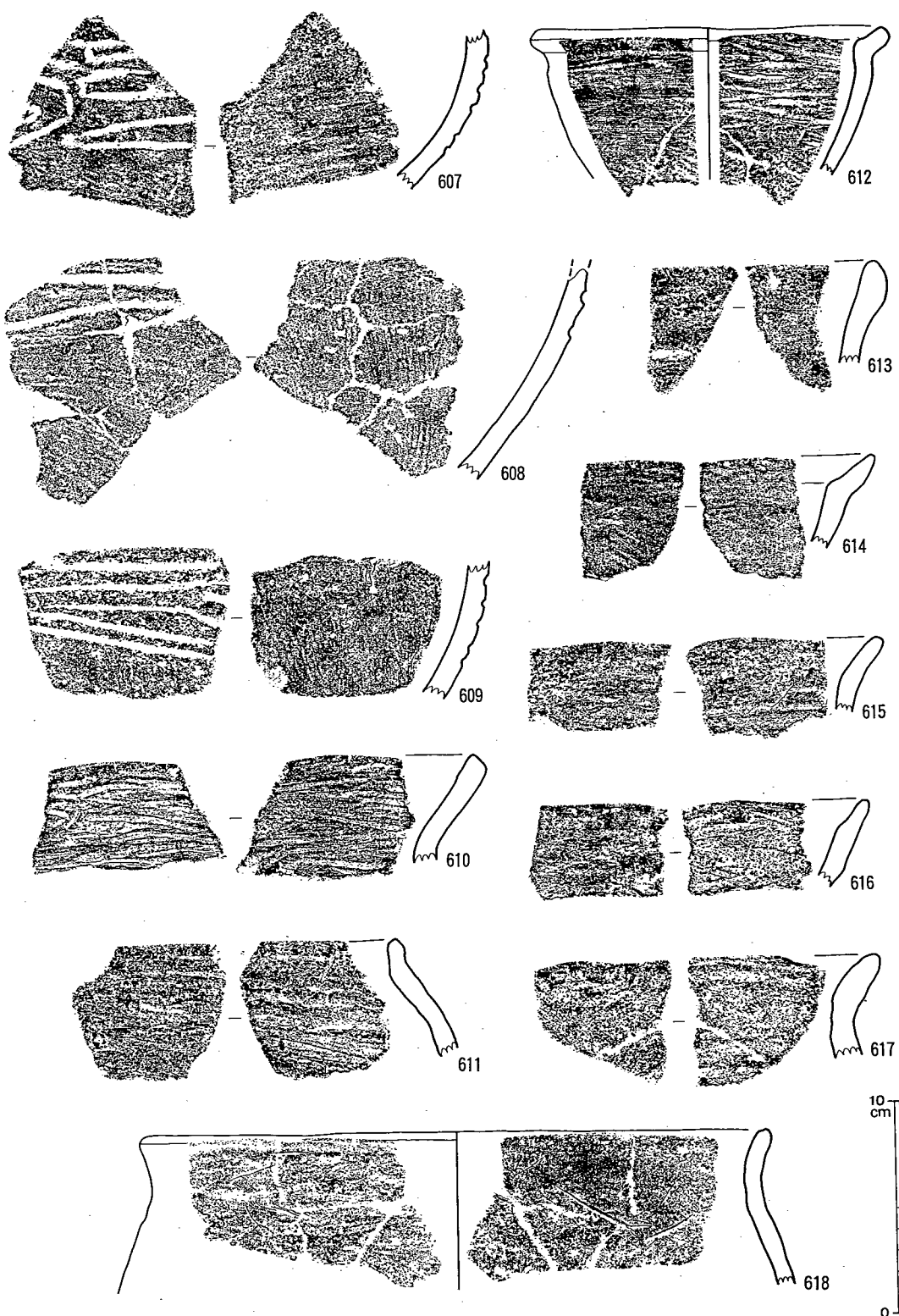
594



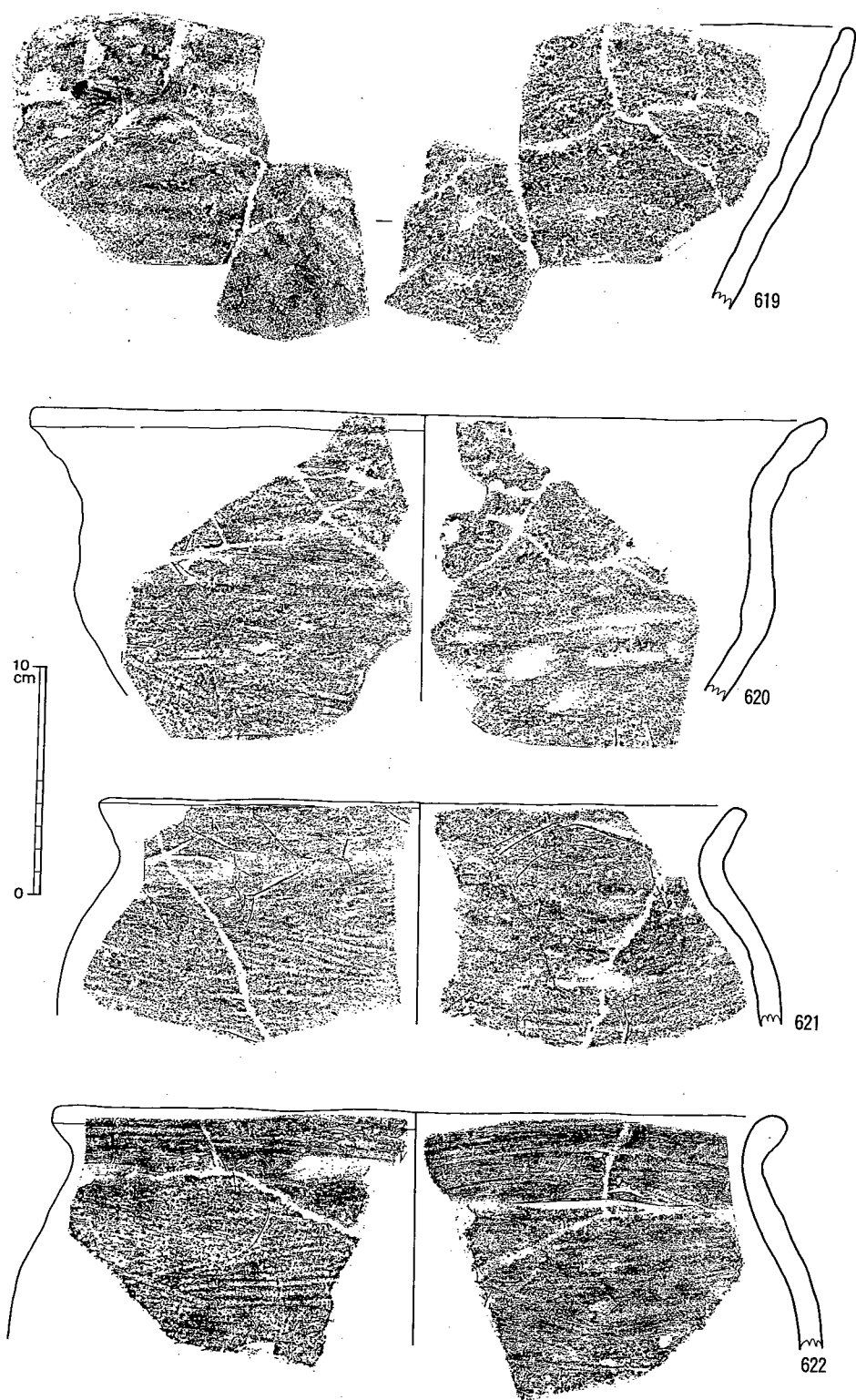
第 127 图 6 号竖穴住居迹出土土器实测图. 4 (1/3)



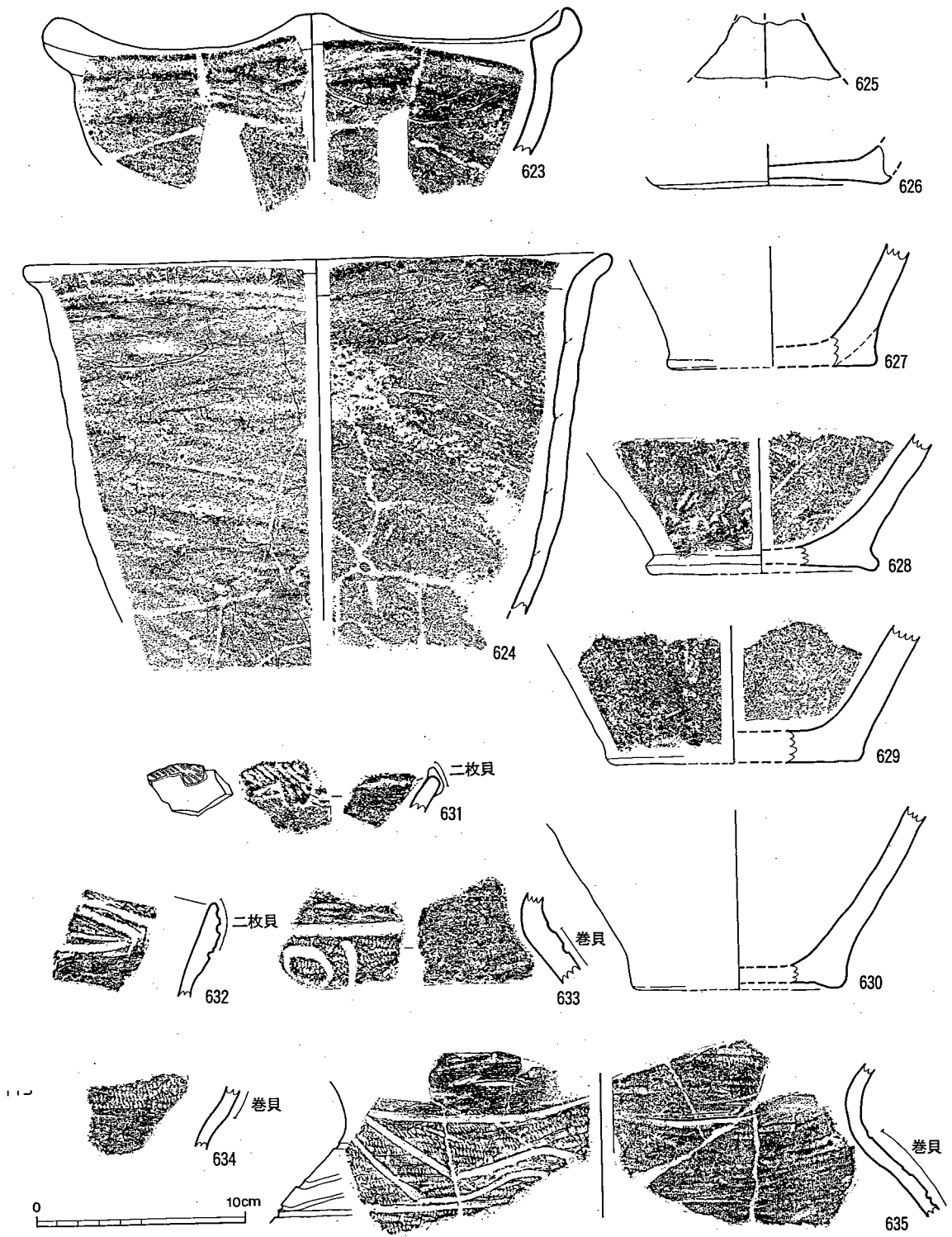
第 128 图 6 号竖穴住居跡出土土器实测图. 5 (1/3)



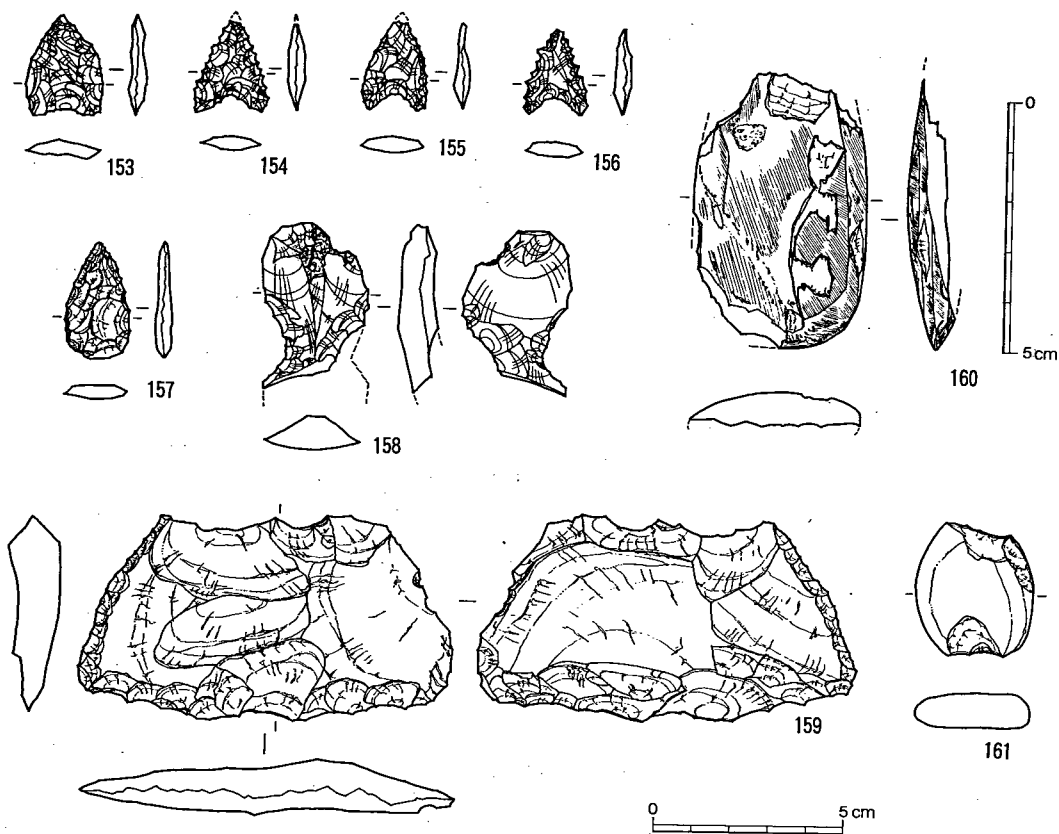
第 129 图 6 号竖穴住居跡出土土器実測图. 6 (1/3)



第 130 图 6 号竖穴住居跡出土土器实测图. 7 (1/3)



第 131 图 6 号竖穴住居跡出土土器実測图. 8 (1/3)

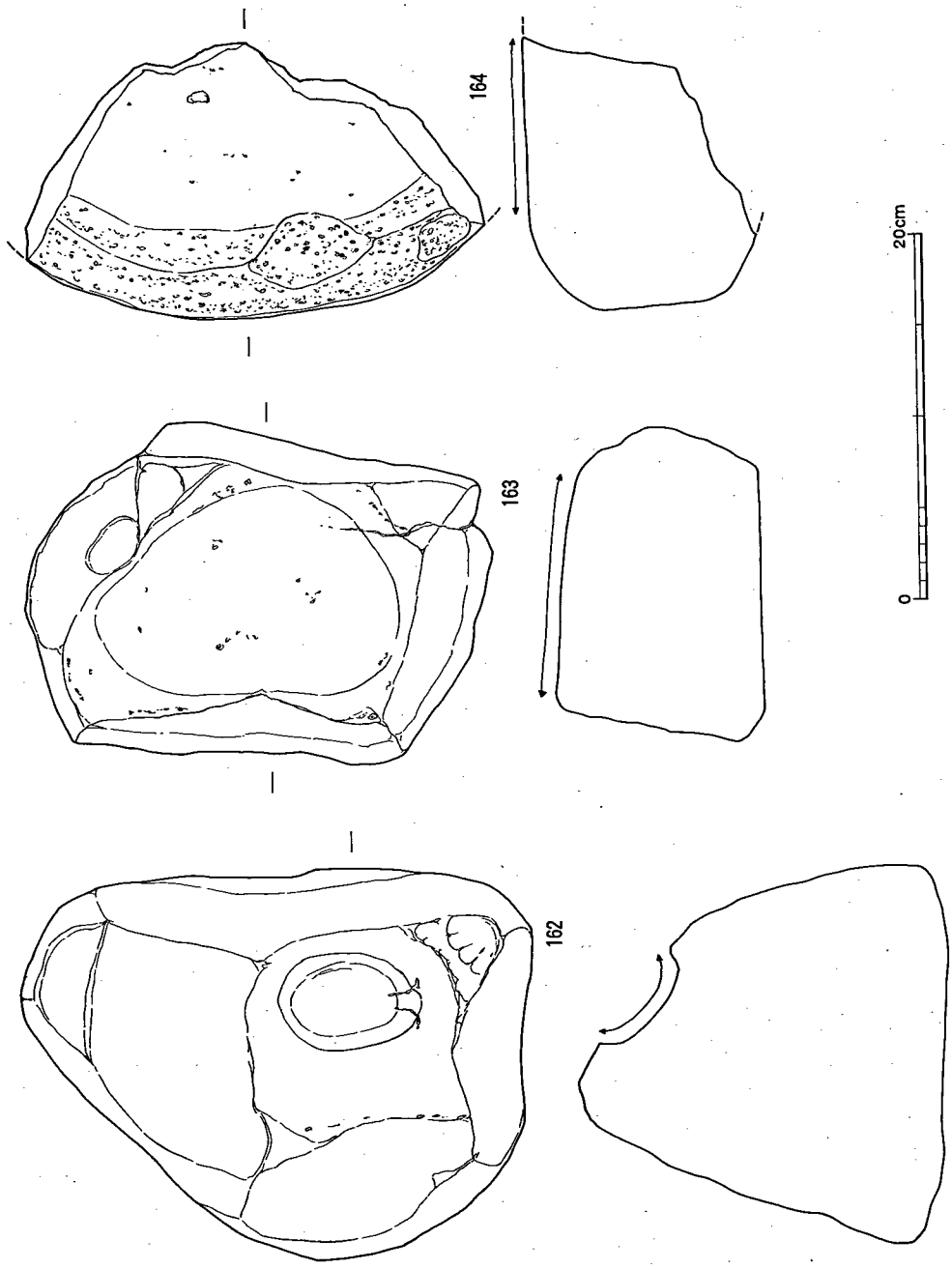


第 132 図 6 号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (153~159は2/3 160・161は1/2)

的。631~635は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群であるが、破片が小さく量的にも少ないこと、そして遺構検出作業の時点で出土するものがある等、本来この竪穴住居跡に伴うものではないであろう。631は波頂部に二枚貝疑似縄紋が施される粘土が貼り付けられる。632も二枚貝による疑似縄紋で、口縁部は肥厚しながらわずかに内湾する。633~635はいずれも巻貝による疑似縄紋が施される。

石器（第132・133図）石鏃（153~157）は5点図示したが、このうち157は結晶片岩製のようである。158は鈴桶技法による縦長剥片を素材とした剥片鏃を作る際に生じる腰岳産黒曜石製のつまみ形石器で、これによって本遺跡内で剥片鏃が作られたことを物語る資料として重要である。159はサヌカイト製のスクレイパー。160は比較的小さな蛇紋岩製の片刃石斧。162~164は台石で、162については径5cm、深さ2cmの穴が見られるだけである。

土製円盤（第280~285図）6号竪穴住居跡では4点の土製円盤が出土しており、ここではそのうち3点を図示した。いずれも文様はなく、比較的小さなものばかりである。



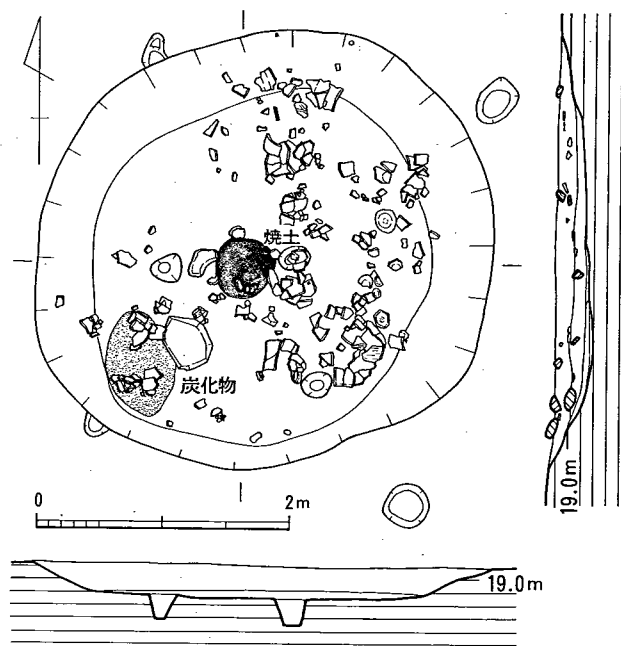
第 133 图 6 号竖穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/4)

7号竪穴住居跡 (図版9・10 第134図)

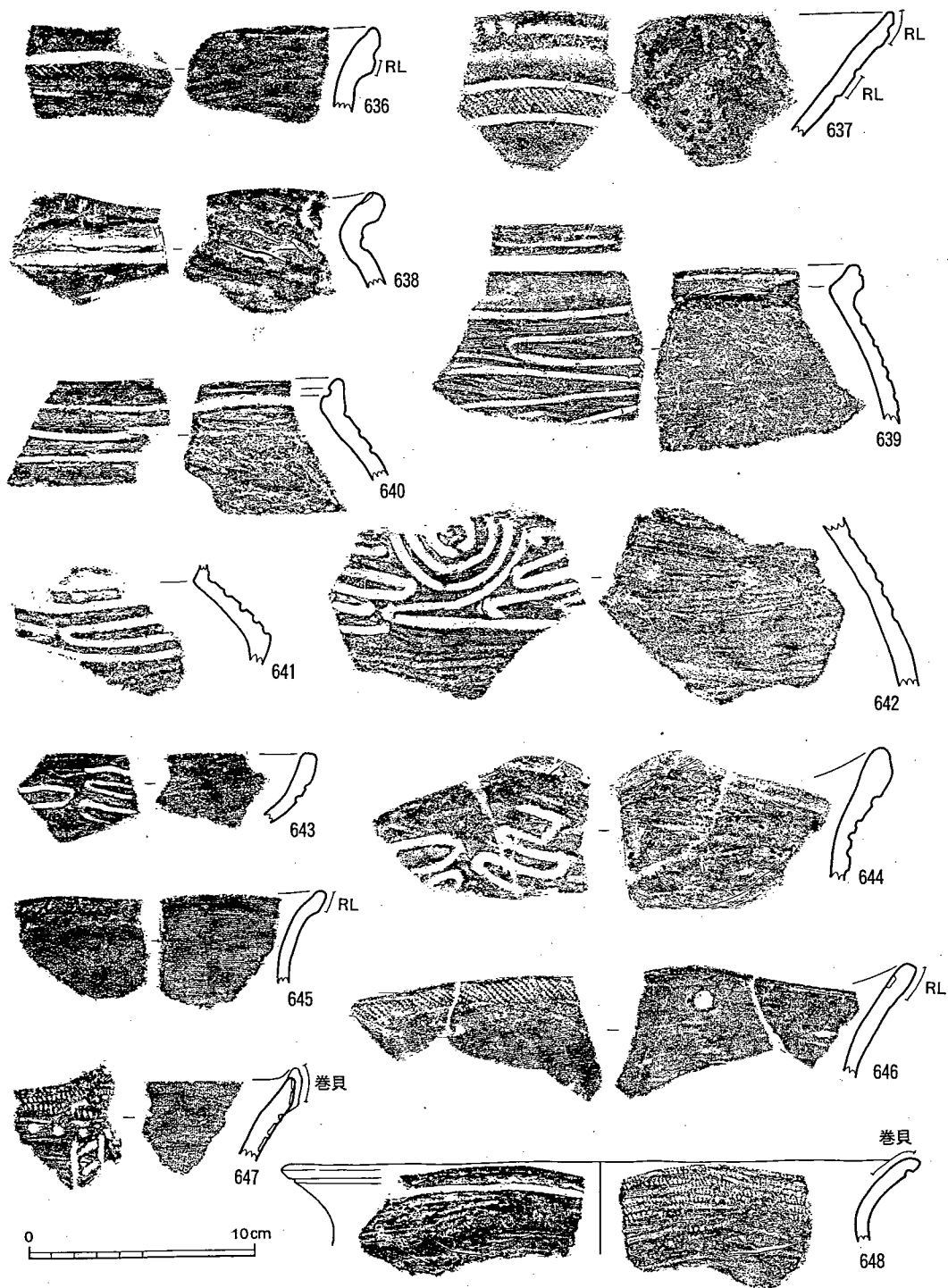
7号竪穴住居跡は調査区中央部やや北寄りVF区に位置し、4号竪穴住居跡の北3mに近接する。平面プランは3.8×3.3mの楕円形を呈し、本遺跡にあっては最も小さな竪穴住居跡である。床面までの深さは最高で18cmを測り、壁の立ち上がりは極めて緩やかで、住居跡の断面形態は皿状に開く。壁としての明瞭な立ち上がりはほとんどない、柱穴も確認できない、貼り床といえるものが確認できなかった、竪穴住居跡とするにはかなり小さなサイズ、といったことから調査当初では落ち込み状の遺構として捉えていた。しかし、床面に至った段階で中央部に焼土が詰まった炉跡が検出されてからは、竪穴住居跡という認識で柱穴等の検出に全力を注いだ、それらしきものは確認できなかった。遺物は多く破損品がパンケース16箱分纏まって出土したが、完形品になるものはなく、また床面から貼りついたような状態でもなく、大部分は破損品が遺棄された状態のものと考えられる。南西部床面において炭化物の集中部を見つけたが、その性格や炉跡との関係についてははっきりしていない。床面で主柱穴を検出できなかったので竪穴住居跡の周辺部にその存在を想定して精査したが、うまく適合するものは検出できなかった。

土器 (第135~152図) 土器は121点を図示したが、その大半は鐘崎式と西平式の間でも築上郡築城町松丸遺跡 SX-7 出土土器群に若干先行するものであろう。ただし、小池原上層式・鐘崎式・西平式・太郎迫式も少量出土している。

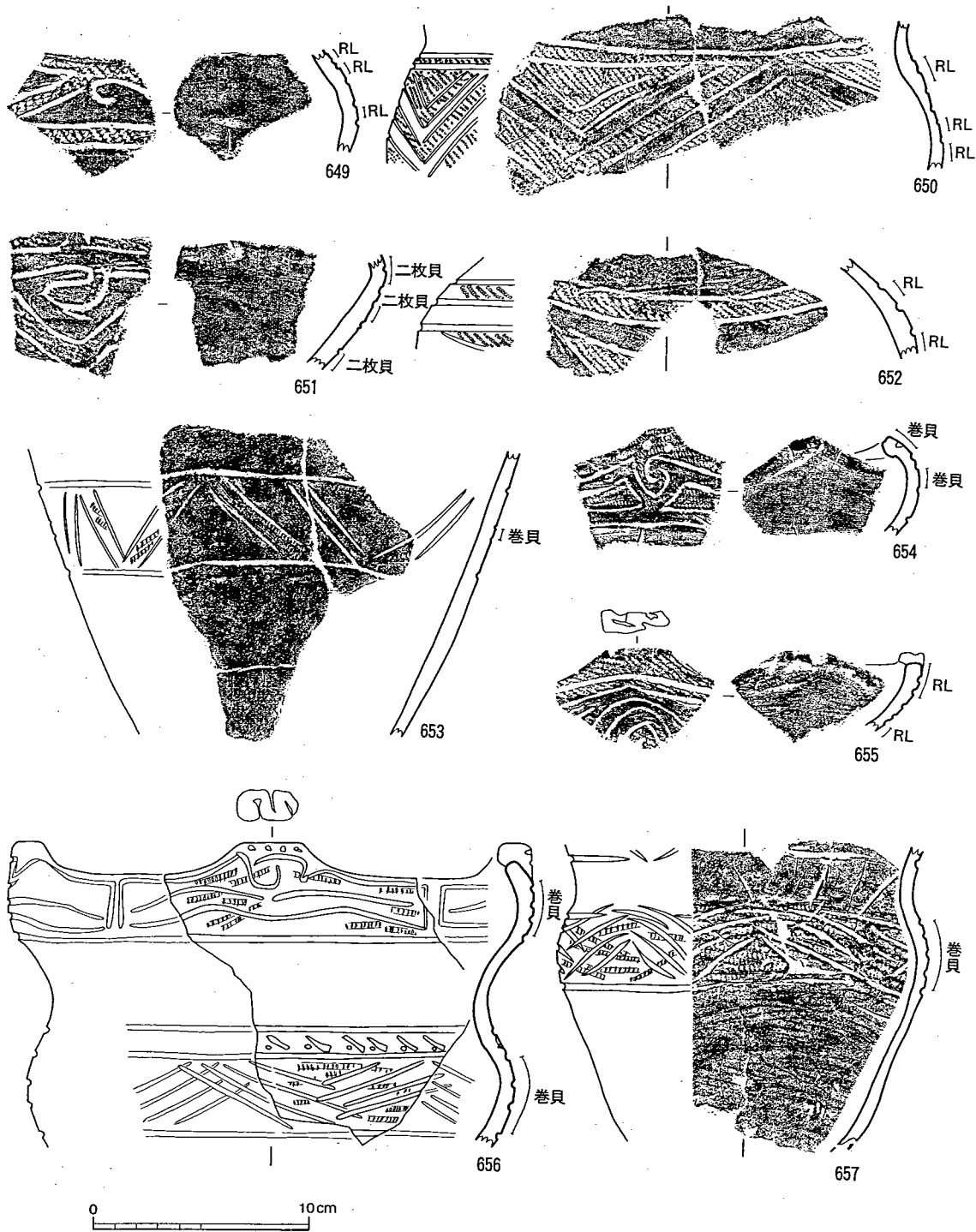
636・637は小池原上層式で、沈線文の後にRLが施される。638~644は鐘崎式であるが中・新段階に属するもので、古いタイプのものは見られない。645~697は鐘崎式と西平式の間でも築上郡築城町松丸遺跡 SX-5 出土土器群に若干先行するものであろう。647の口縁部には巻貝疑似縄紋が施され、その直下の刺突文も巻貝の殻頂部によるものである。648の口縁部外面には沈線文が、内面には巻貝疑似縄紋が施される。651は二枚貝による疑似縄紋が施される。654の口縁部には沈線文の後に巻貝疑似縄紋が施され、それを研磨することで磨消縄紋的效果を作り出す。波頂部下の2点の



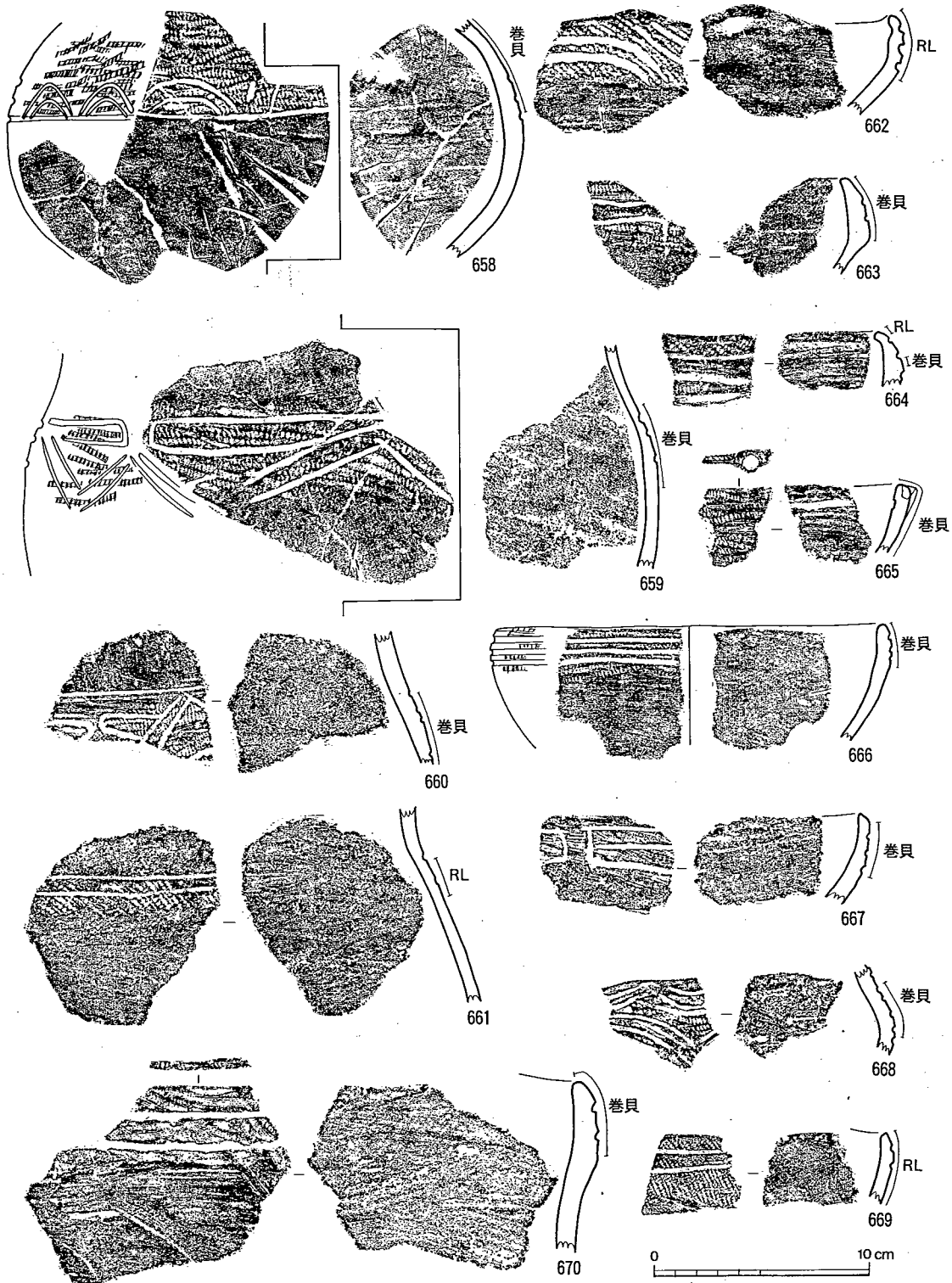
第134図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)



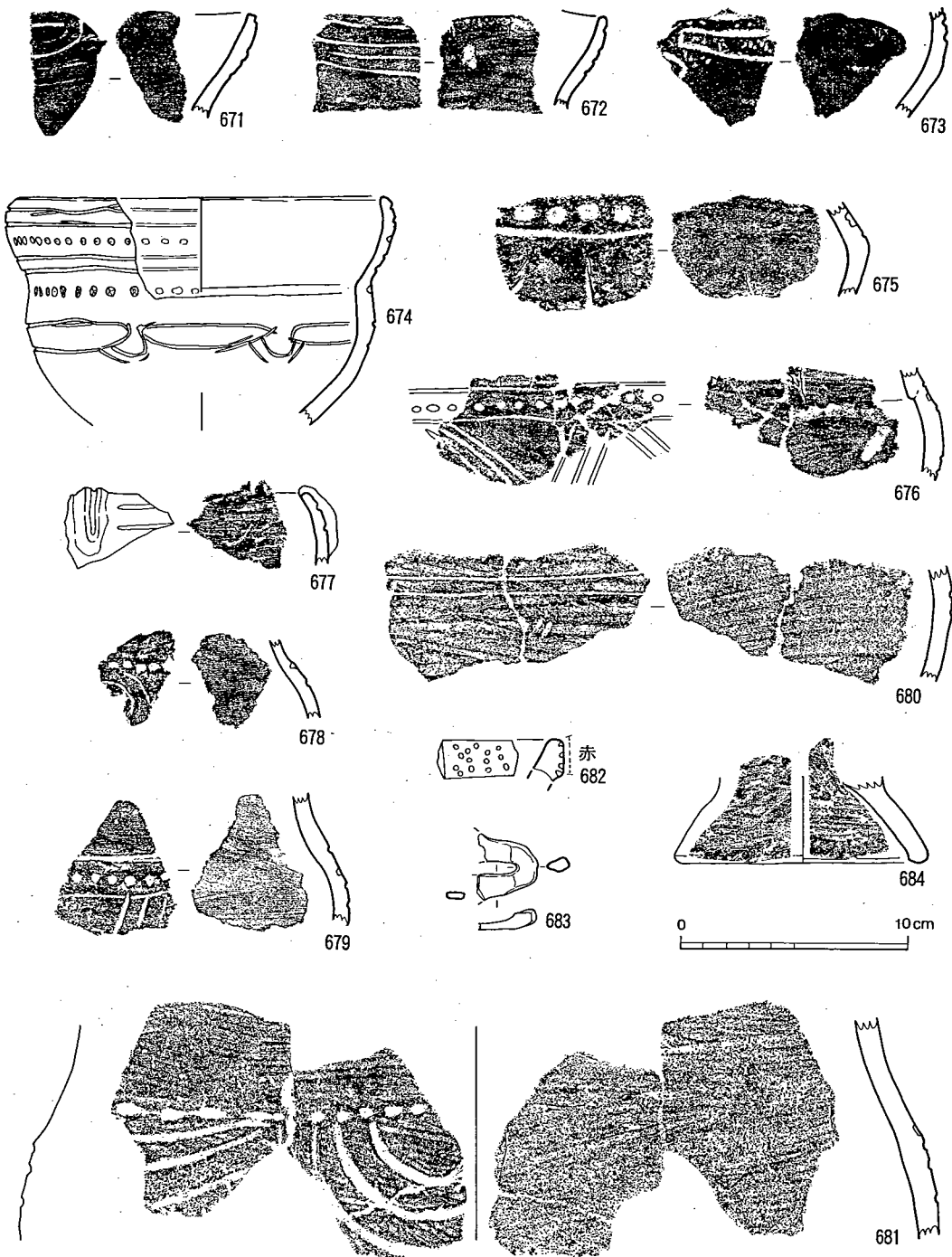
第 135 图 7 号竖穴住居跡出土土器実测图. 1 (1/3)



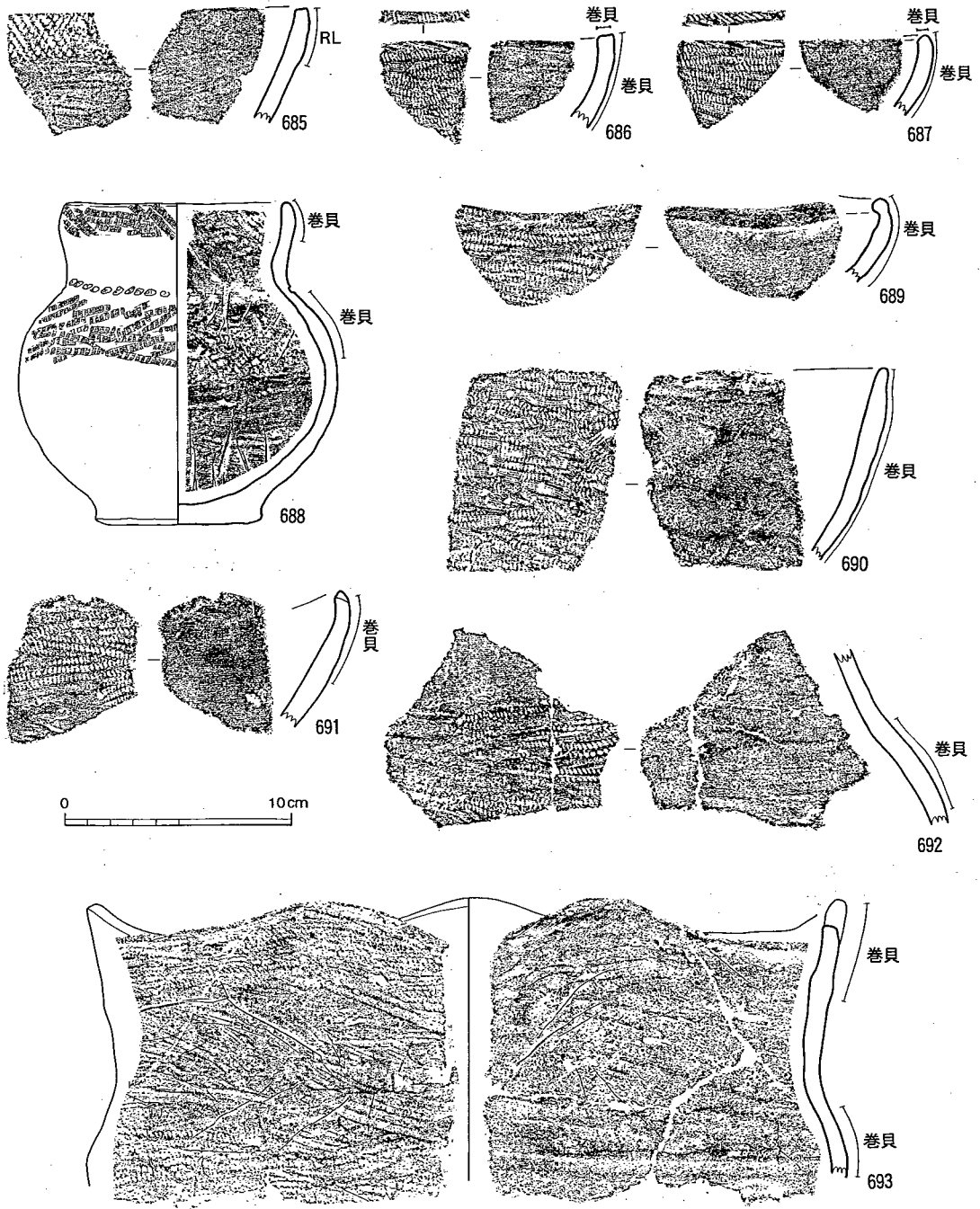
第 136 图 7 号竖穴住居迹出土土器实测图. 2 (1/3)



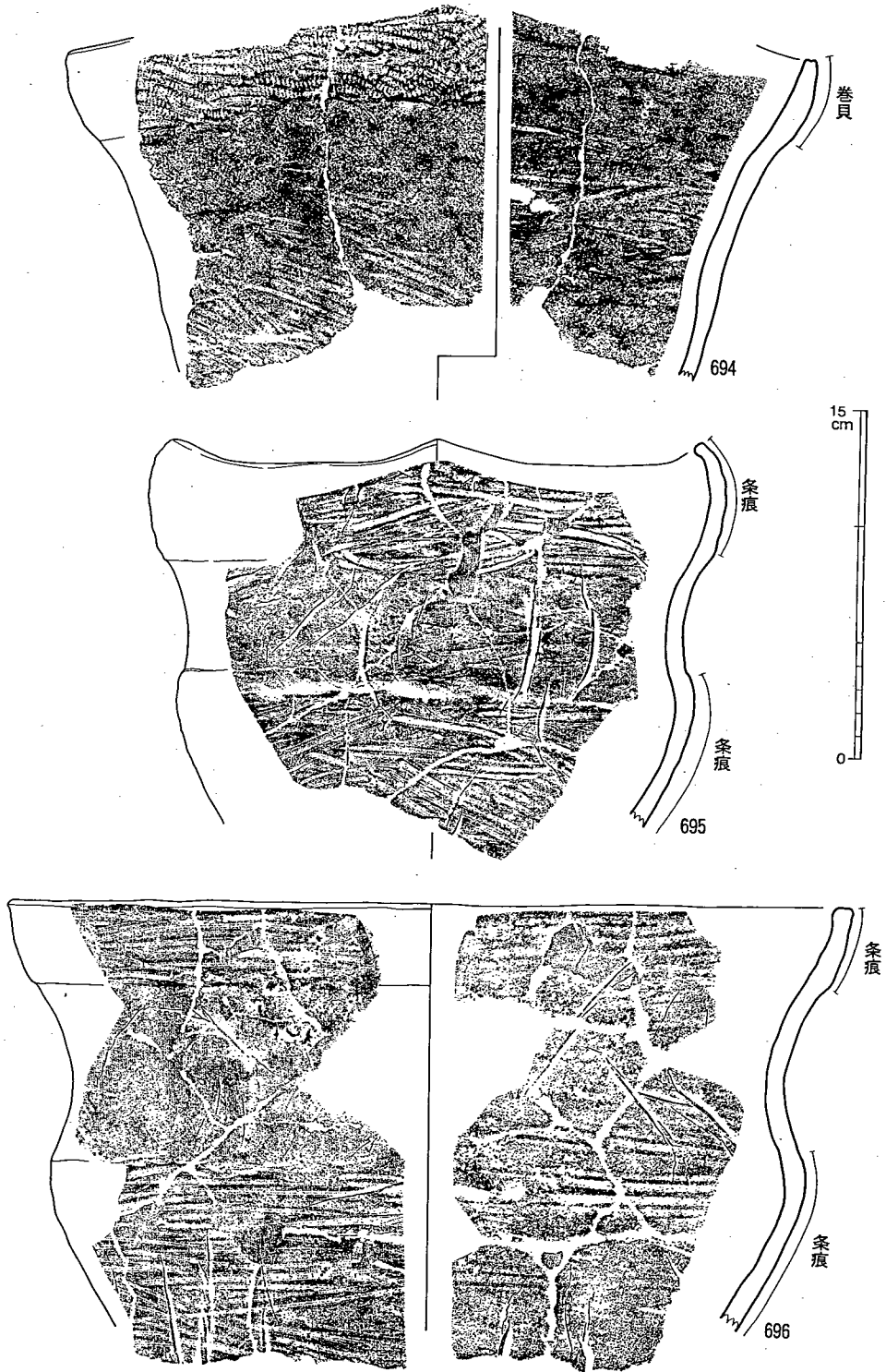
第 137 图 7 号竖穴住居跡出土土器実測图. 3 (1/3)



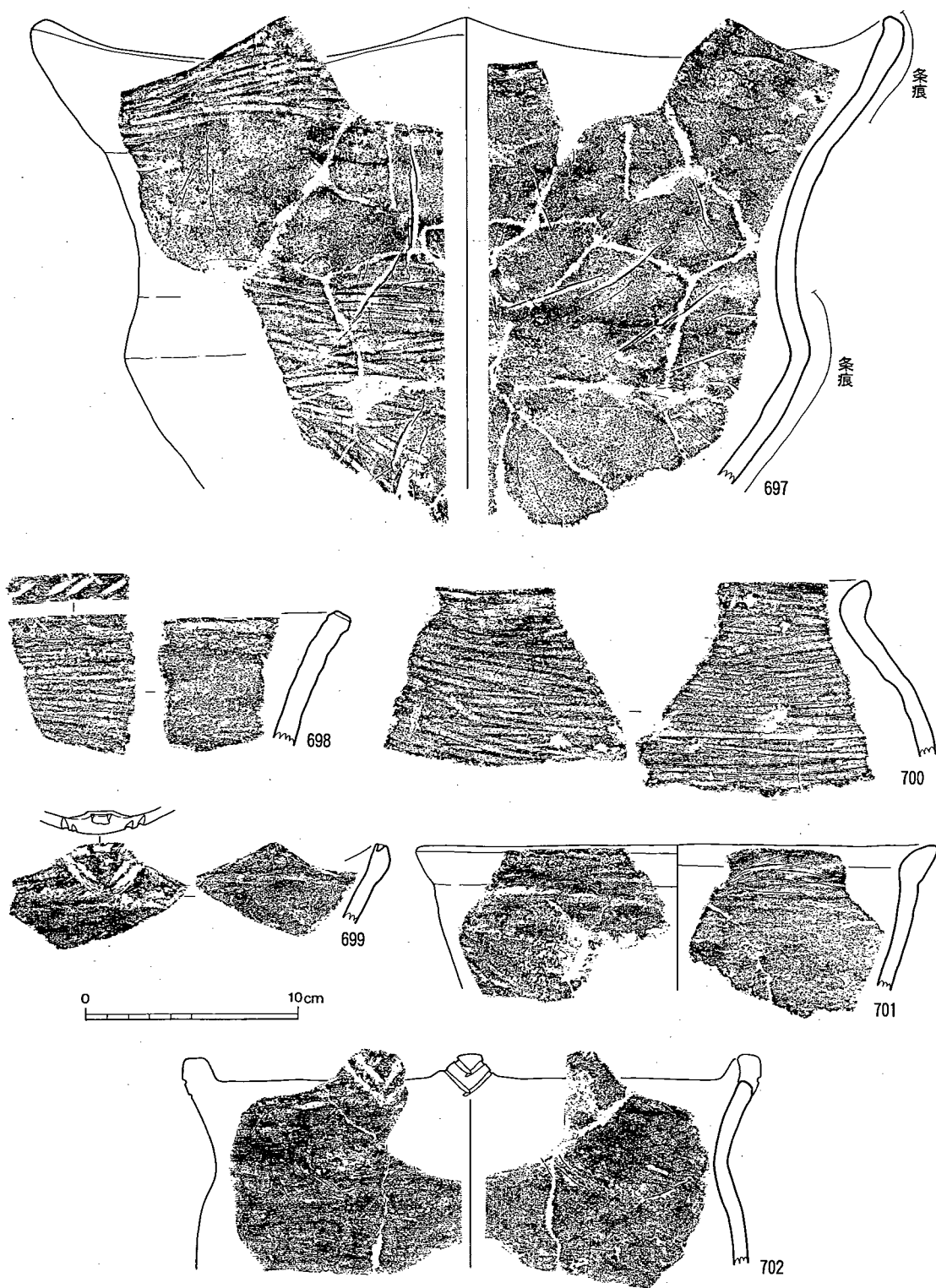
第 138 图 7 号竖穴住居跡出土土器実測图. 4 (1/3)



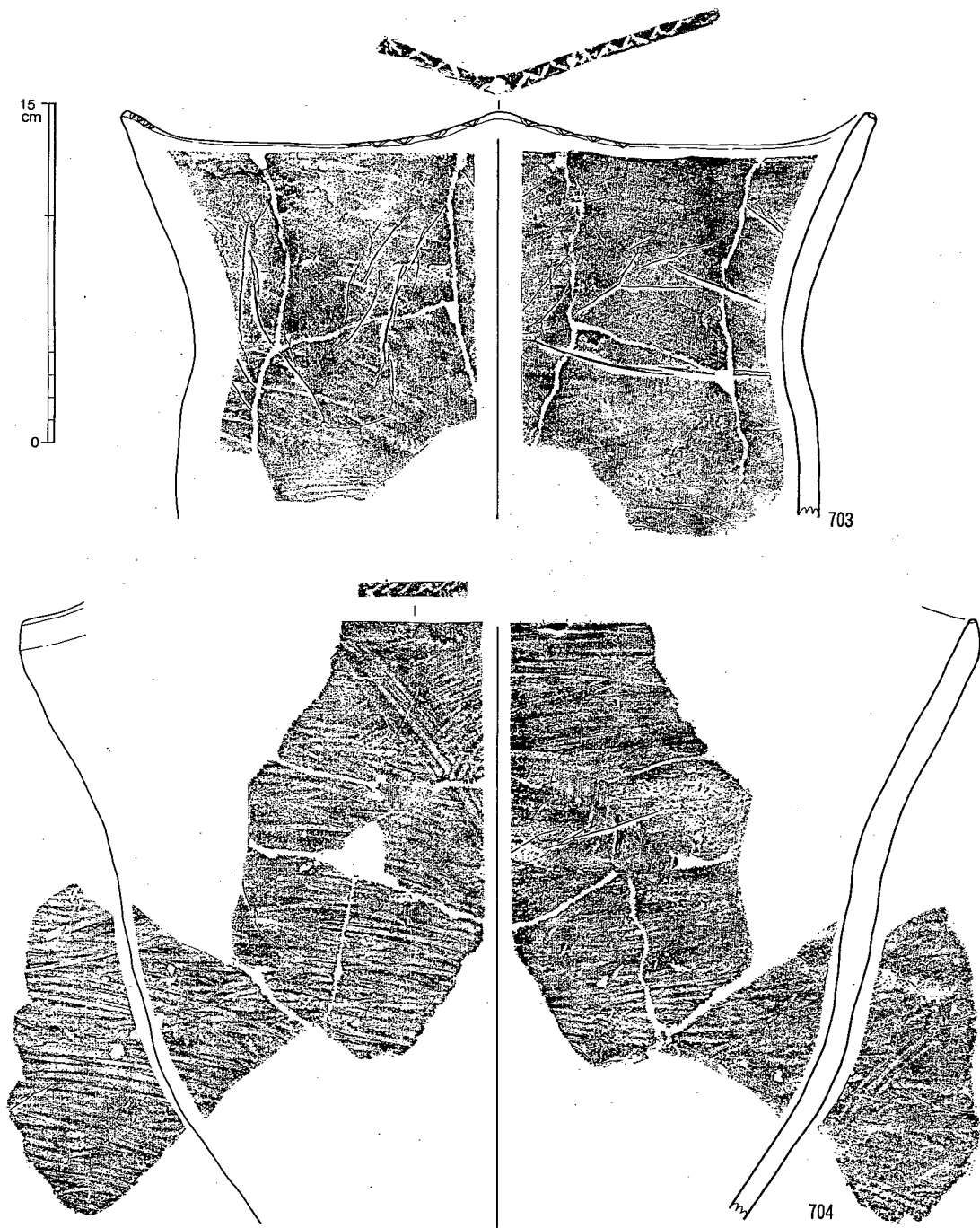
第 139 图 7 号竖穴住居跡出土土器实测图. 5 (1/3)



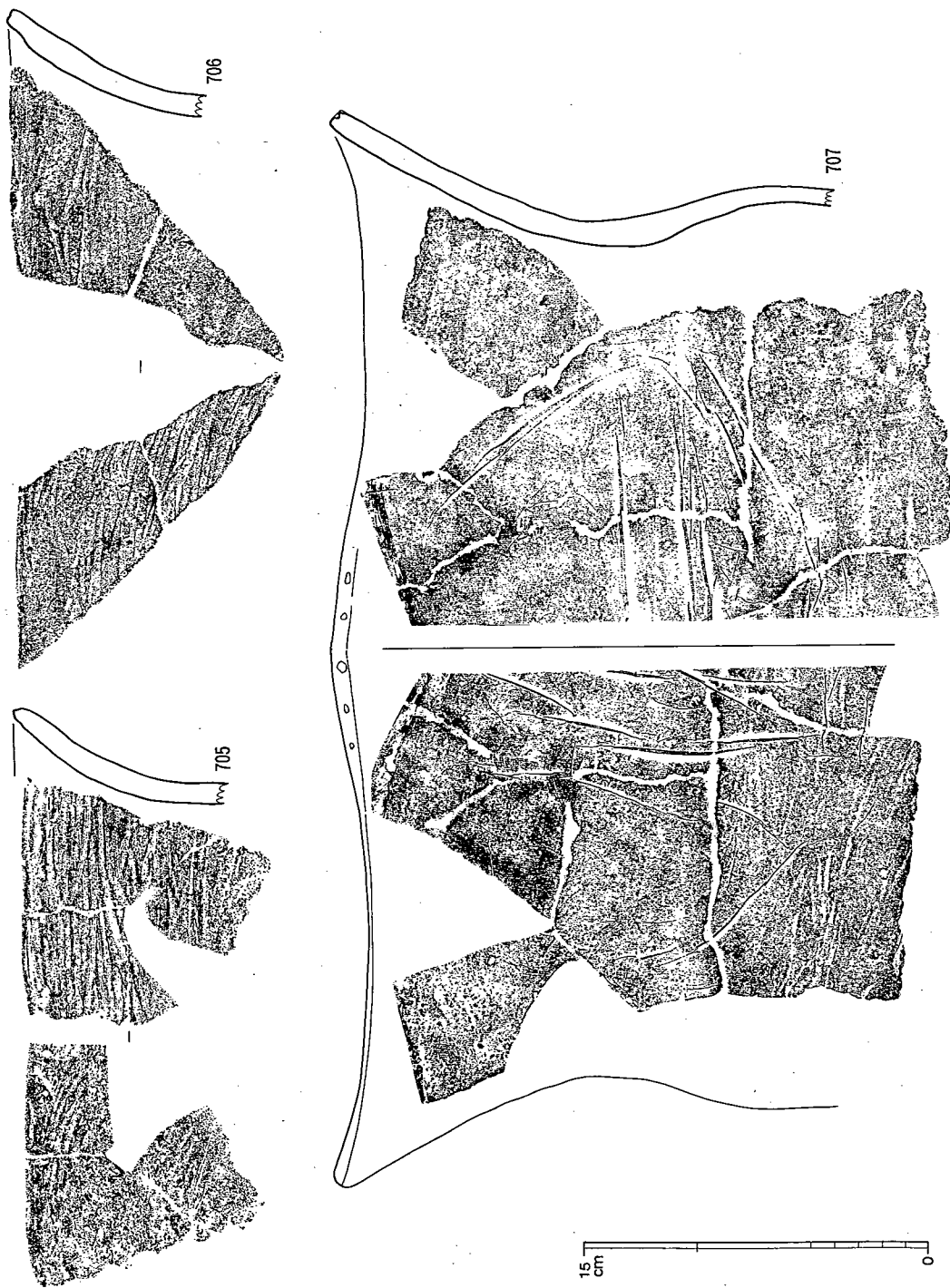
第 140 图 7号竖穴住居跡出土土器实测图.6 (1/3)



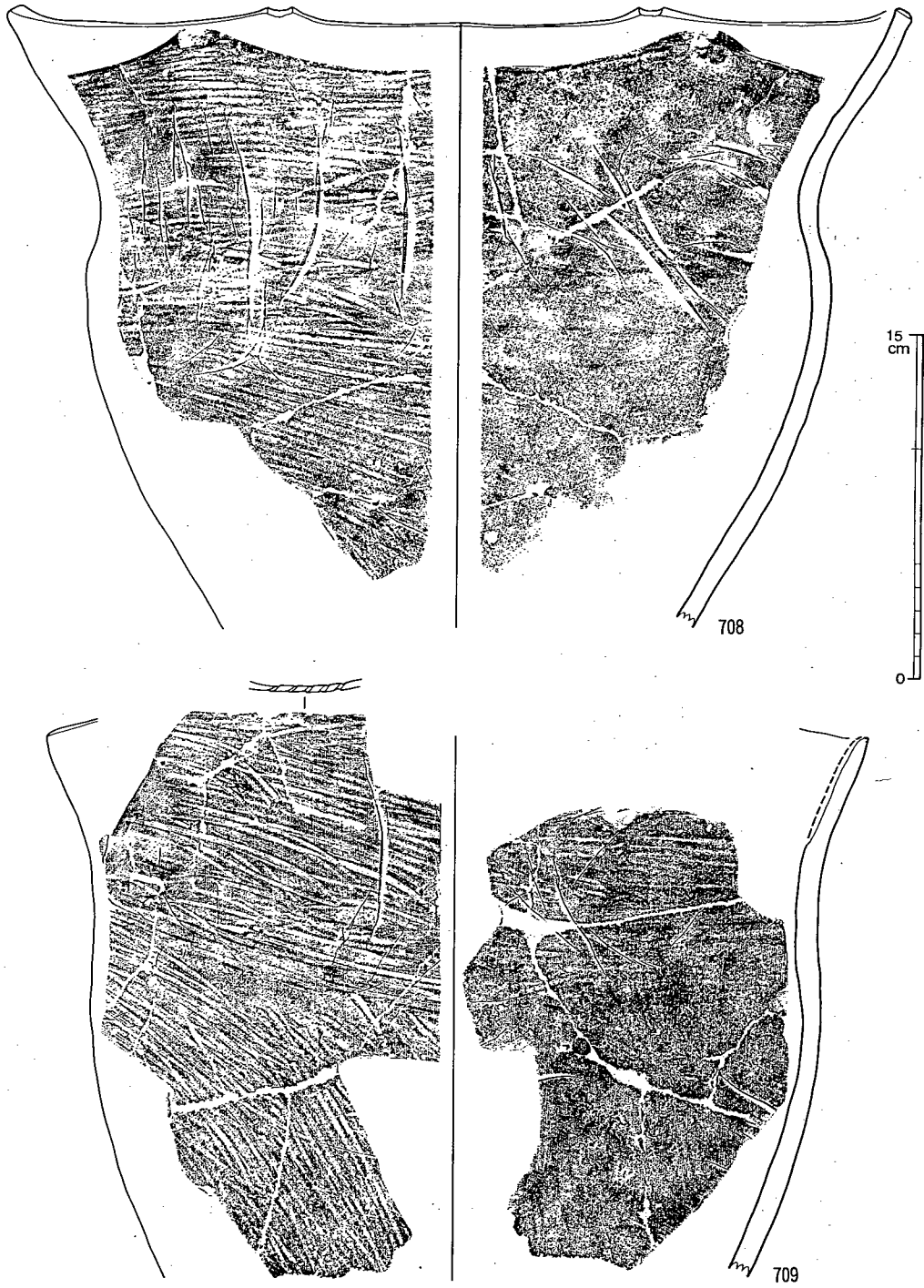
第 141 图 7 号竖穴住居跡出土土器实测图. 7 (1/3)



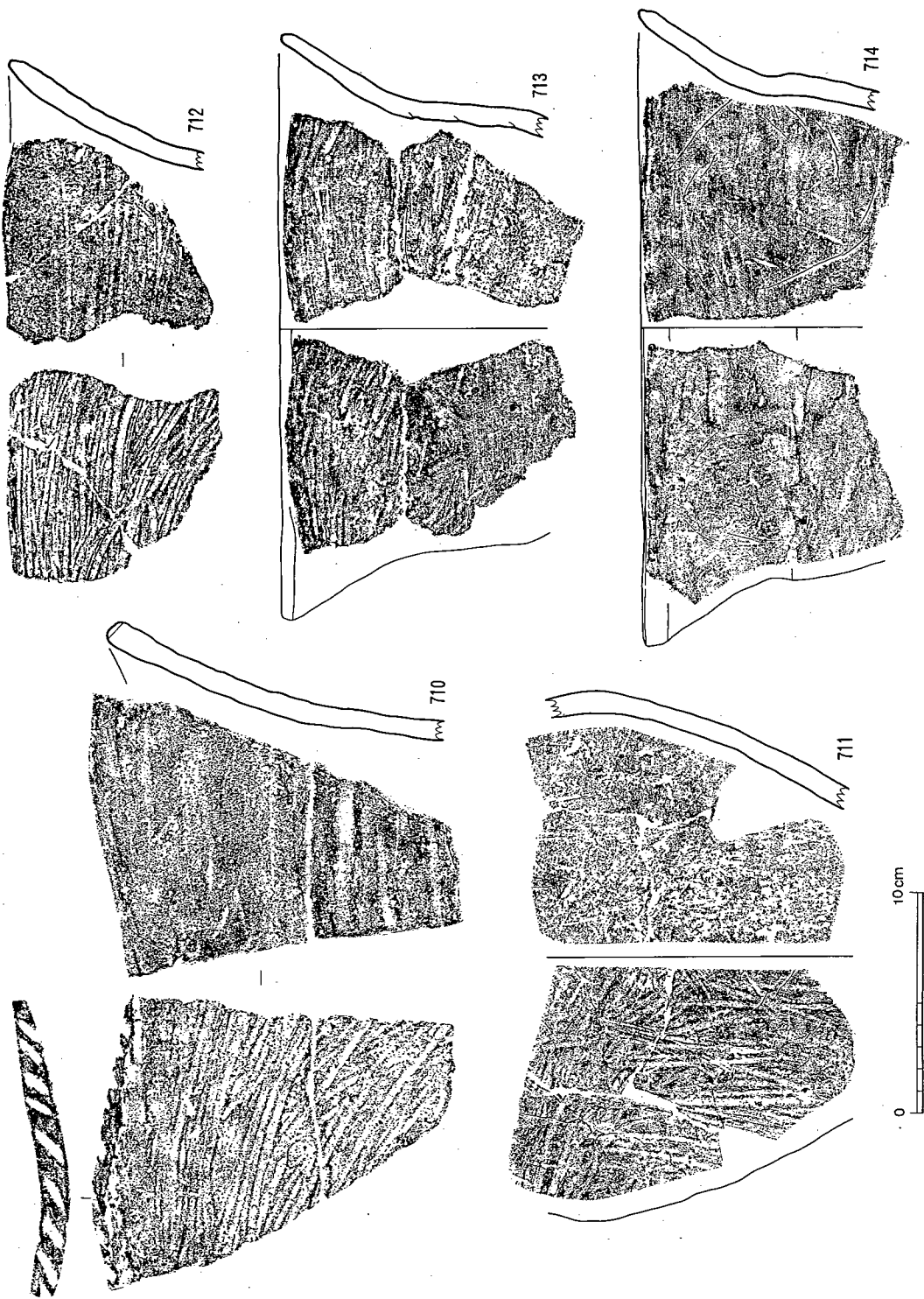
第 142 图 7 号竖穴住居迹出土土器实测图. 8 (1/3)



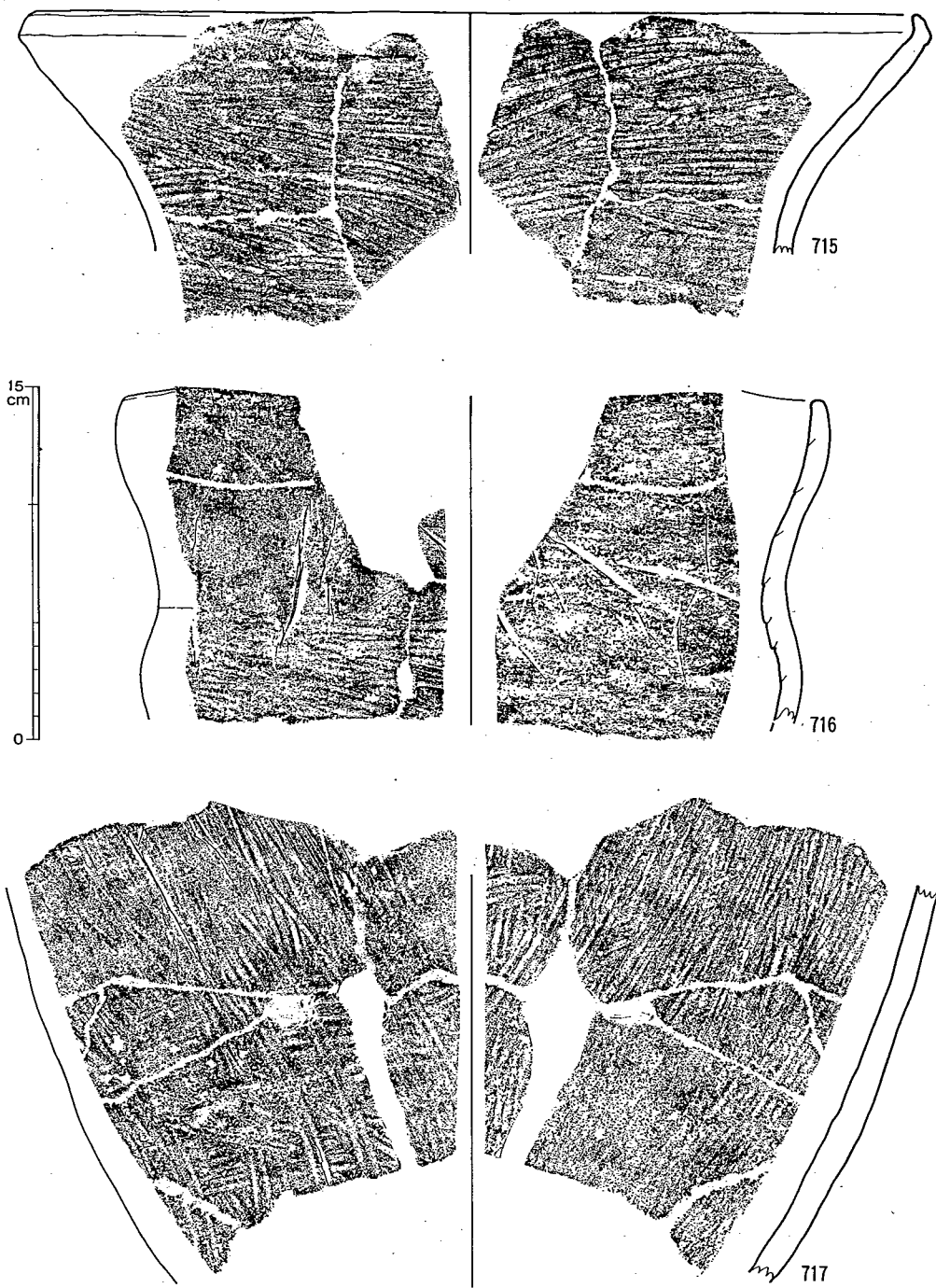
第 143 图 7 号竖穴住居跡出土土器実測図. 9 (1/3)



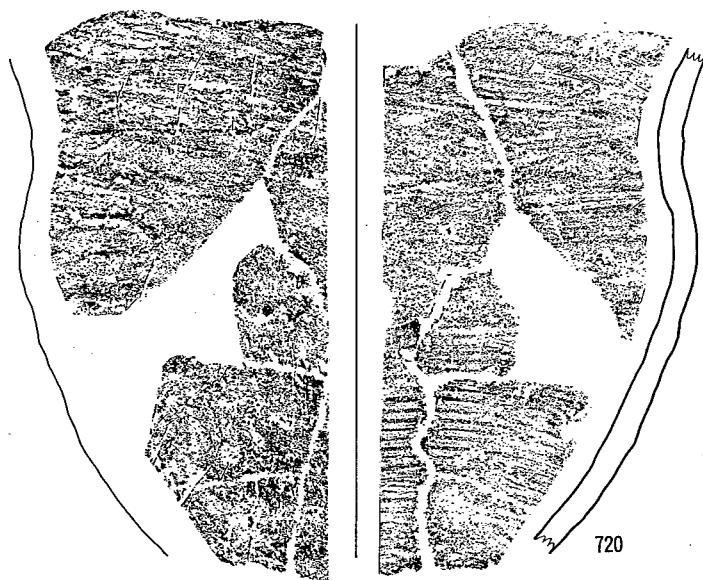
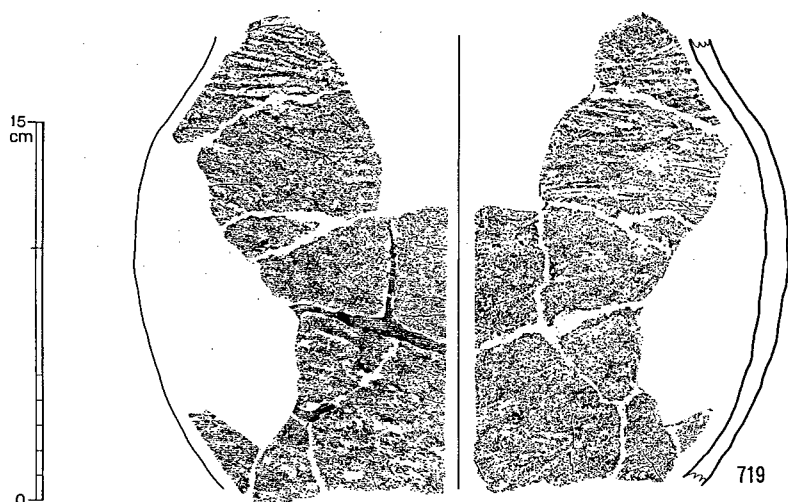
第 144 图 7 号竖穴住居迹出土土器实测图. 10 (1/3)



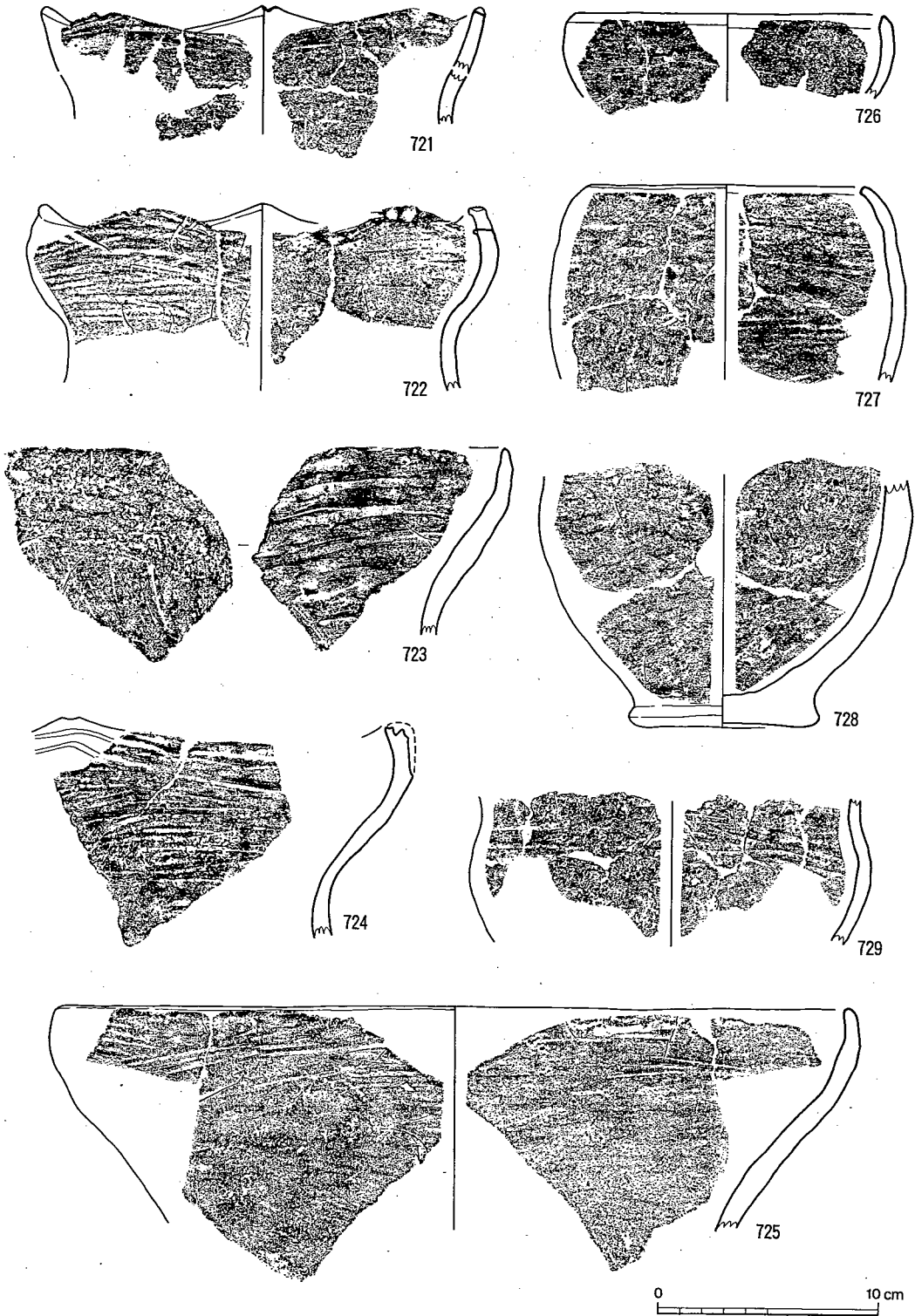
第 145 图 7 号竖穴住居跡出土土器表測図. 11 (1/3)



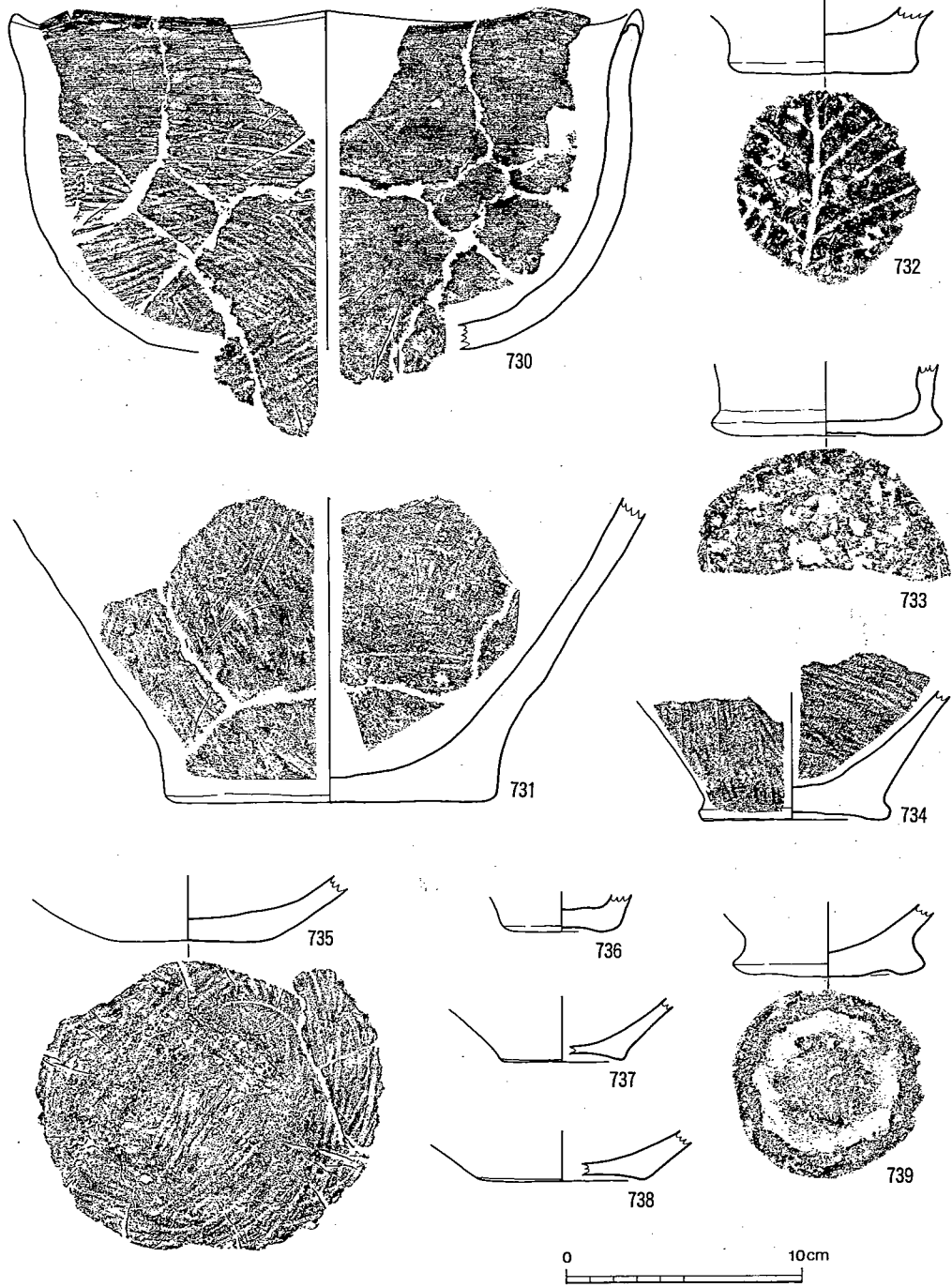
第 146 图 7 号竖穴住居迹出土土器实测图. 12 (1/3)



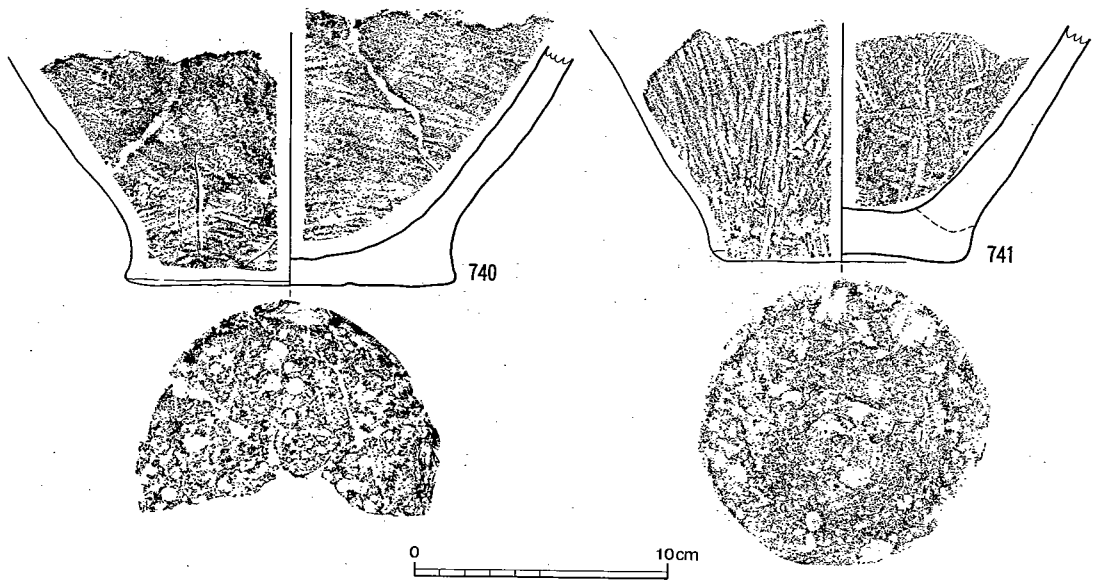
第 147 图 7 号竖穴住居跡出土土器実測図. 13 (1/3)



第 148 图 7 号竖穴住居迹出土土器实测图. 14 (1/3)



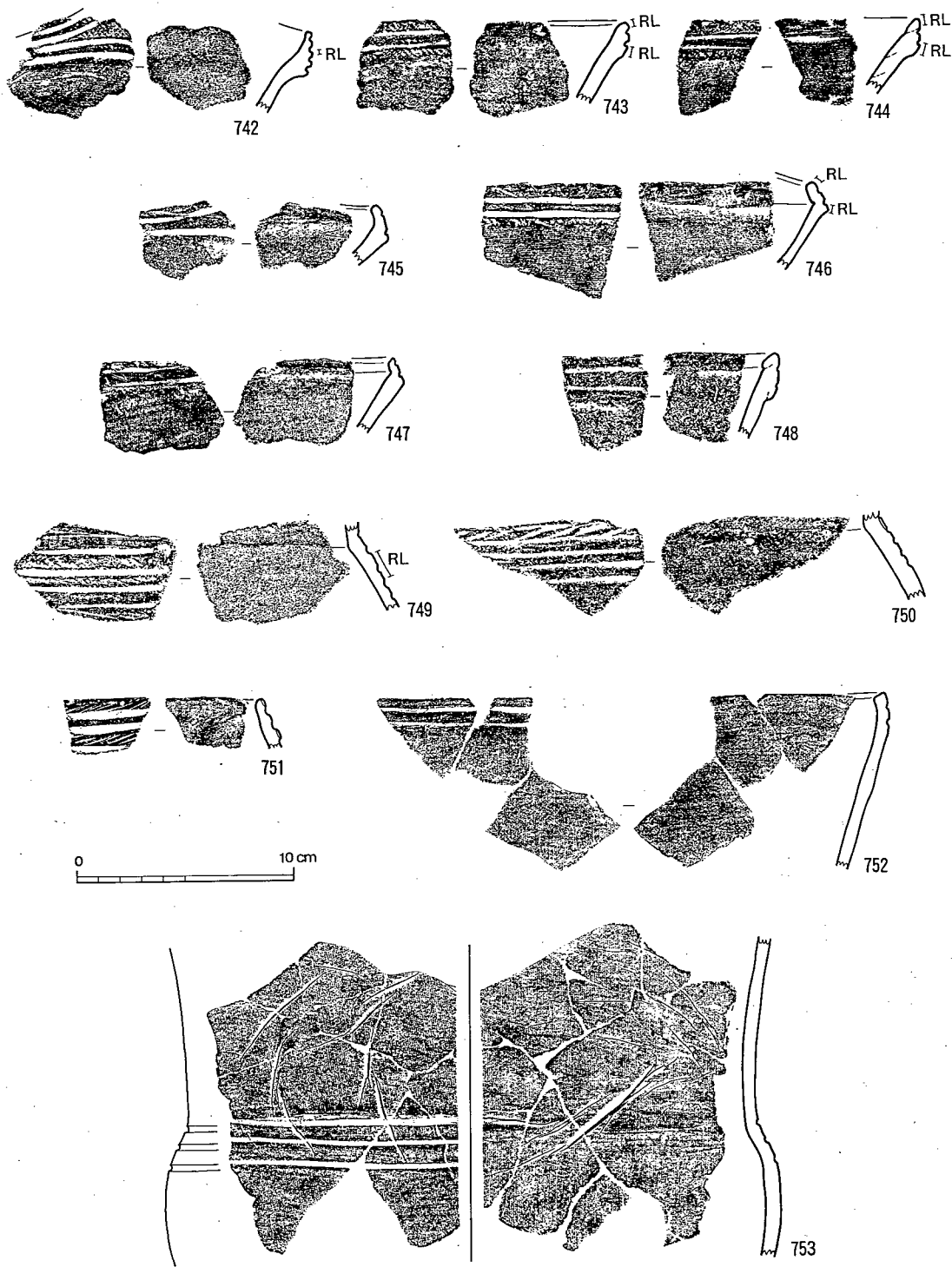
第 149 图 7 号竖穴住居跡出土土器实测图. 15 (1/3)



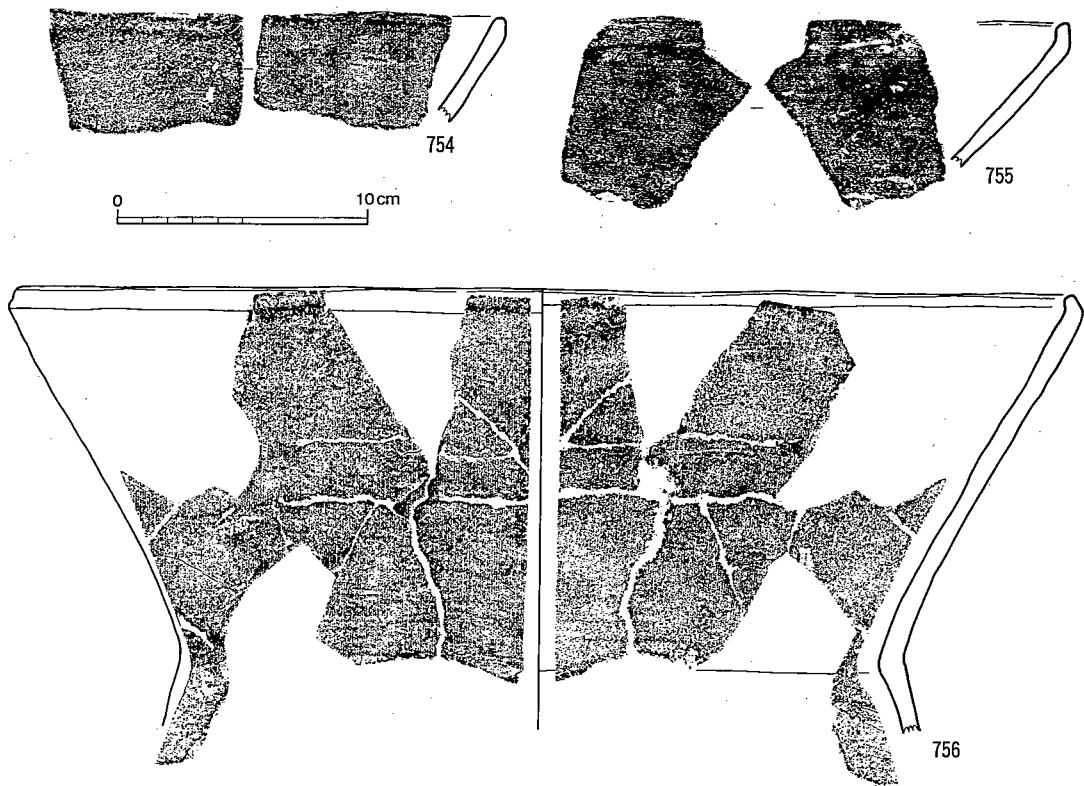
第 150 図 7号竪穴住居跡出土土器実測図. 16 (1/3)

刺突文は巻貝の殻頂部によるものである。655・656の波頂部には、「8」字状と「3」字状の隆帯文が貼り付けられる。649～655は磨消縄紋を意識・表現しているが、656～670は沈線文と縄紋（疑似縄紋）とを組合わせているものの磨り消すことない。656等は文様的に西平式へ近づいていく方向性にあると見るべきであろう。673は縄紋のように見えるが、実際は器面の剥落で、文様としては沈線文だけである。677の波頂部には口縁部内面から外面にかけて隆帯文が1本の沈線文を伴いながら貼り付けられる。682は肥厚した口縁部の外面に小さい刺突文がいくつも施され、その後にその部分だけ赤色塗布される。683は把手であろうか。685～694は口縁部や胴部に巻貝疑似縄紋が施されるもので、この場合の口縁部は内湾ぎみに肥厚する形態にはば限られる。688の胴部の巻貝疑似縄紋の上には、巻貝の殻頂部による刺突文が施される。器面調整についてはナデが多い。695～697は巻貝による条痕文を口縁部と胴部に施し、巻貝疑似縄紋のものと同じ文様効果を表出している。したがって器面調整はナデ。このタイプの器形や口縁形態は巻貝疑似縄紋のみを施すものと同じである。

698～731は無文土器。700・701は鐘崎式に伴う無文土器であろうが、その他はそれ以降に属する可能性が高い。703の口縁端部には山形状の刻みが全周する。707の波頂部には5つの刺突文が施される。器形的には口縁部が緩やかに開きながら直線的に立ち上がるものと、頸部でくびれて口縁部が内湾ぎみにわずかに肥厚するものと大きく分かれる。727～730はボウル状の鉢になろう。底部731～741のうち、732には木葉の圧痕が、733・740・741には種子の圧痕が残る。



第 151 图 7 号竖穴住居迹出土土器实测图. 17 (1/3)

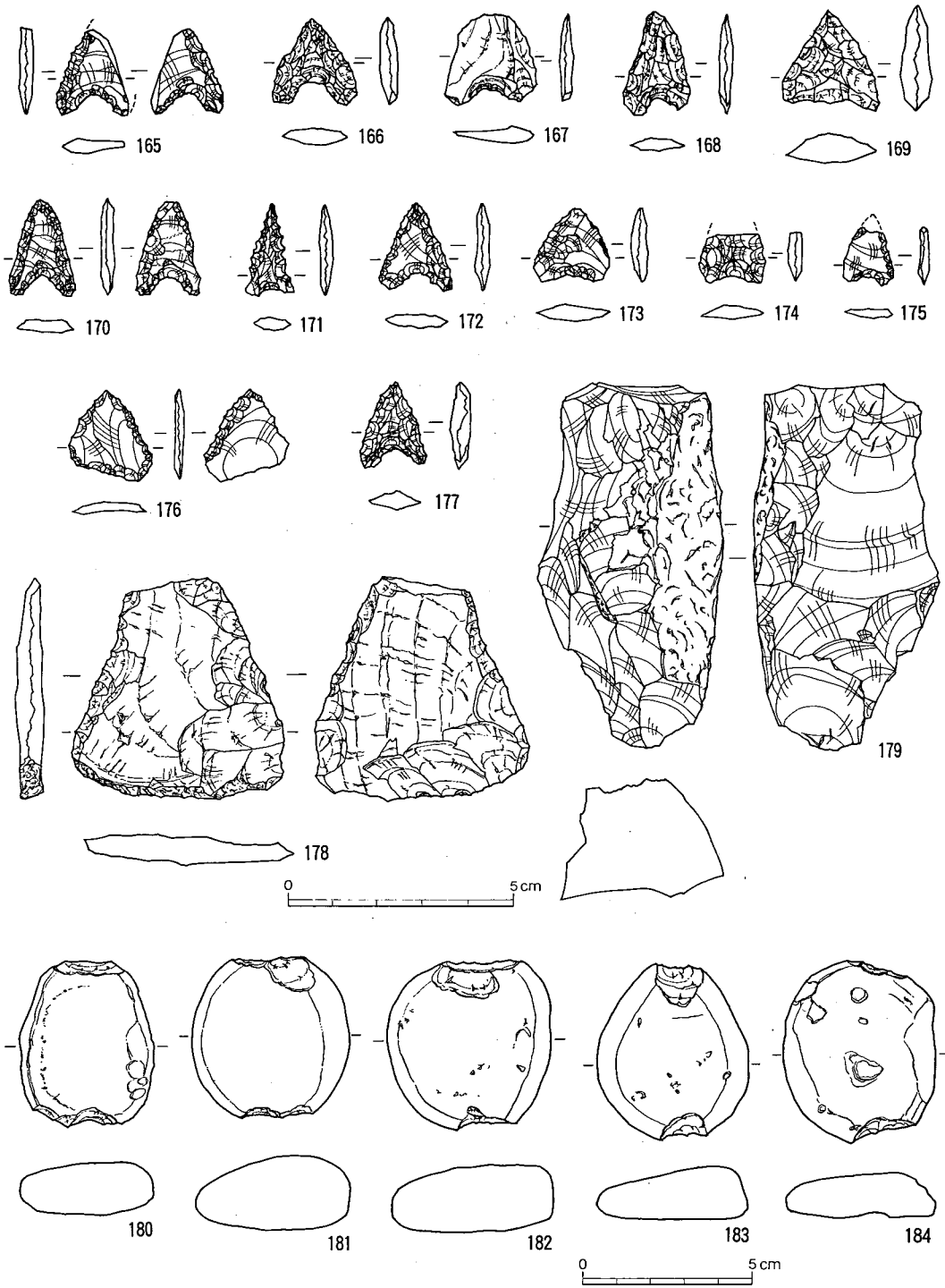


第 152 図 7号竪穴住居跡出土土器実測図. 18 (1/3)

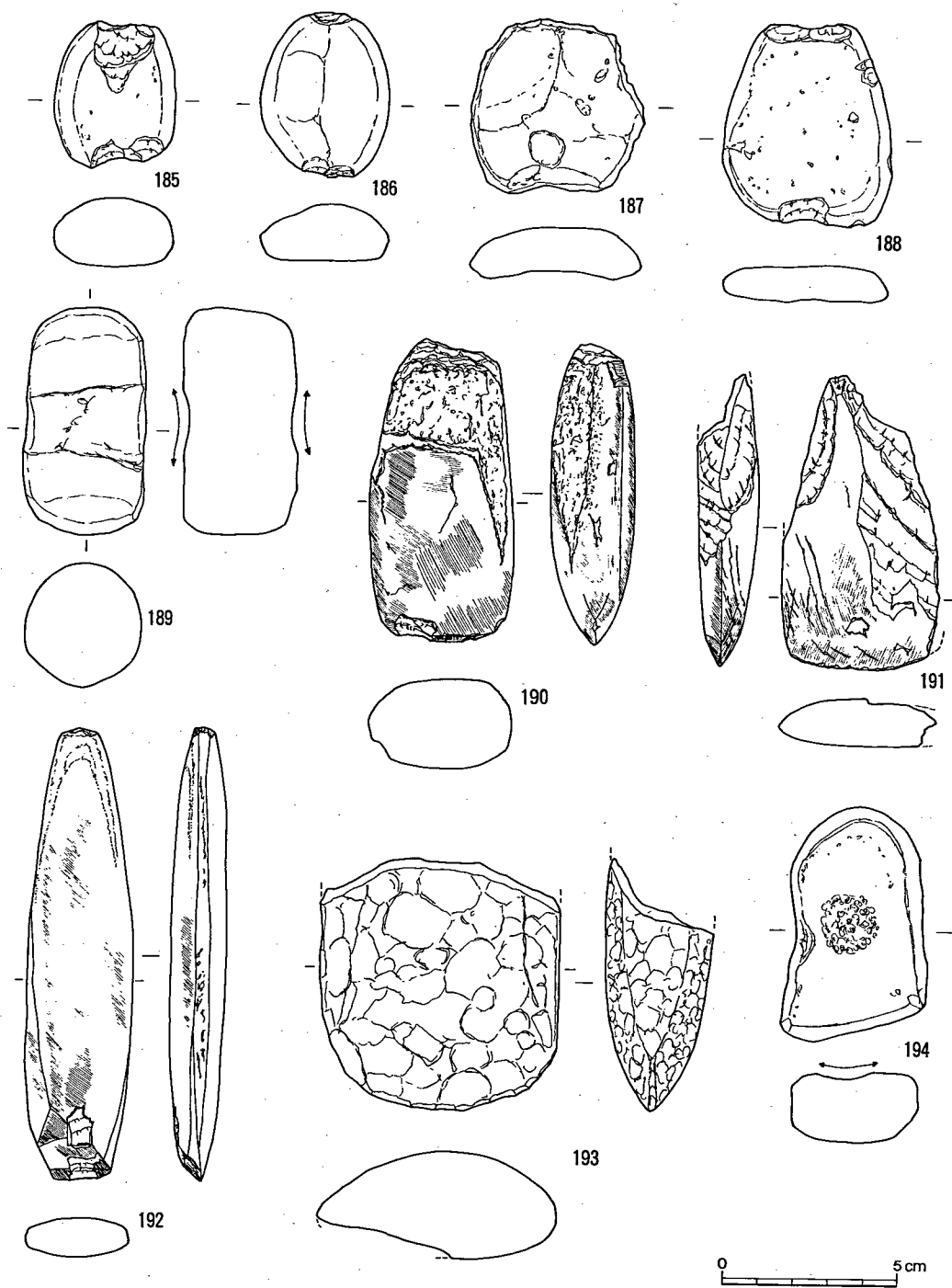
742～744・749は西平式の口縁部と胴部で、いずれもRLの後に沈線文が施される。745～748・750は太郎迫式の口縁部と胴部で縄紋は施されない。751～756は三万田式に属しよう。

石器（第153～155図）石鏃13点のうち姫島産黒曜石7点、サヌカイト4点、腰岳産黒曜石2点である。165の腰岳産黒曜石は大きな剥離痕を両面に残すが、鈴桶技法によって剥離された縦長剥片を素材としたものではなさそうである。176の姫島産黒曜石も両面に大きな剥離痕を残すが、定型的な剥片剥離技術に基づく素材から作られたものではない。178はスクレイパー。179は自然面を大きく残す姫島産黒曜石の石核。180～188の石錘は長軸両端部を打ち欠くが、189は短軸の全周が抉られる。190～193の磨製石斧のうち190・193は両刃、191・192は片刃になる。193は表面が摩滅・剥落した玄武岩質で、他は蛇紋岩製。192は特にノミ状の片刃石斧である。195～200の結晶片岩製打製石斧の多くには、柄を装着した際の緊縛痕と考えられる階段状剥離や擦れたような摩滅の痕跡が側縁に観察される。201・202は台石。

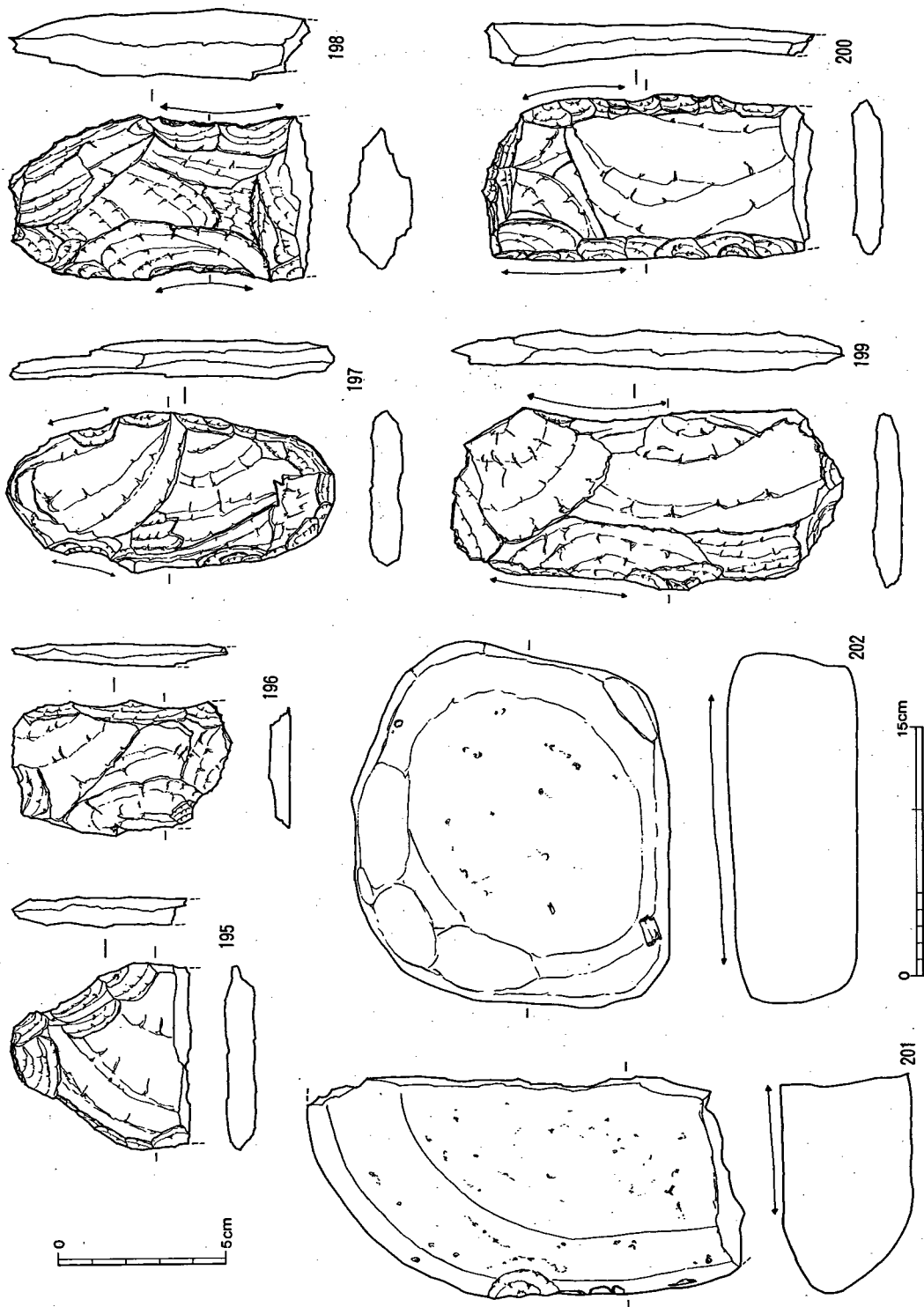
土製円盤（第280～285図）7号竪穴住居跡からは25点の土製円盤が出土した。ここでは12点を図示したが、そのうち文様を有するのは1点だけである。10は巻貝疑似縄紋が施されるもの



第 153 图 7号竖穴住居跡出土石器実測図. 1 (165~179は2/3 180~184は1/3)



第 154 图 7 号竖穴住居跡出土石器实测图. 2 (1/2)

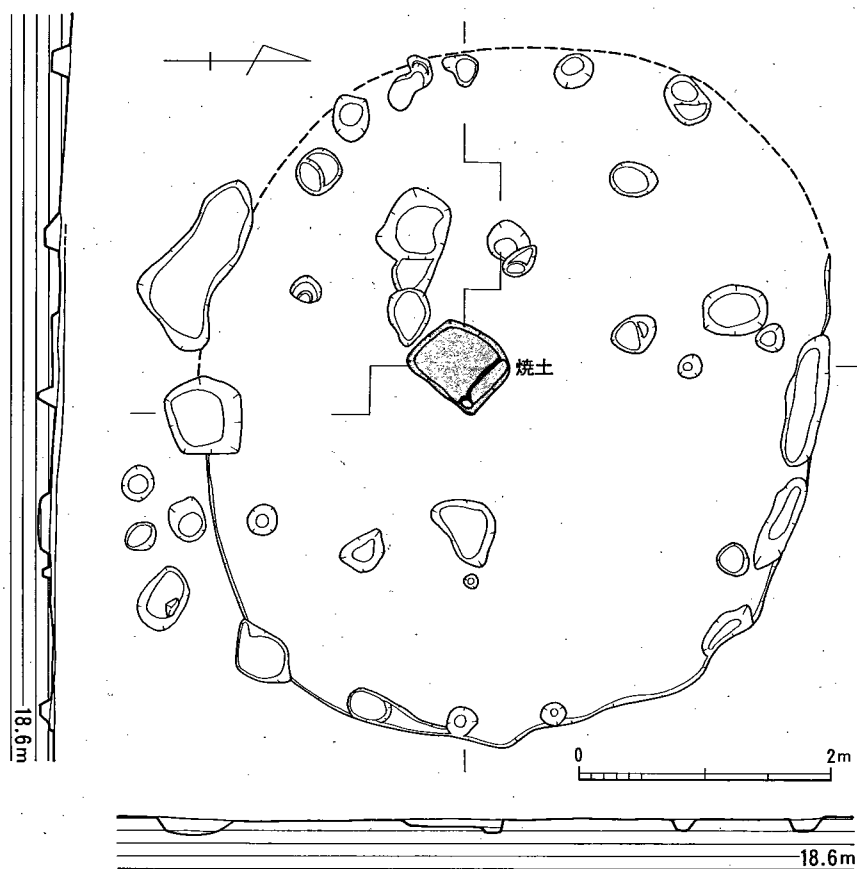


第 155 图 7 号竖穴住居跡出土石器実測图. 3 (195~200は1/3 201・202は1/4)

で、鐘崎式と西平式の間に位置づけられよう。16は無文深鉢の口縁部で、内外面に巻貝条痕文が器面調整として施される。

8号竪穴住居跡 (図版10 第156図)

8号竪穴住居跡は調査区中央部の東寄りVII E区に位置し、5号竪穴住居跡の南西2 m、6号竪穴住居跡の南東3 m、2号土壌墓の北2 m、3号土壌墓の西1 mに近接する。平面プランは5.8×4.9mの楕円形であるが、北側1/3については削平により正確なプランがわからず、この数値は推定復原による。プランが確認できた東側と南側では幅20~25cm、深さ10~15cmの浅い周溝が検出され、プランが確認できなかった北側においても周溝の代わりに小さなピットが検出され、ある程度のプランや規模を推定することができた。そもそも本竪穴住居跡は壁の立ち上がりが最高で3 cmほどしか残っておらず、当然貼り床も未確認である。支柱穴になりそうなピットは位置的にも大きさからみても確定できないが、住居跡のほぼ中央部において隅丸方形で南東端が一段低くなる70×55×6 cmの炉跡が検出された。この炉跡については石を組んだ



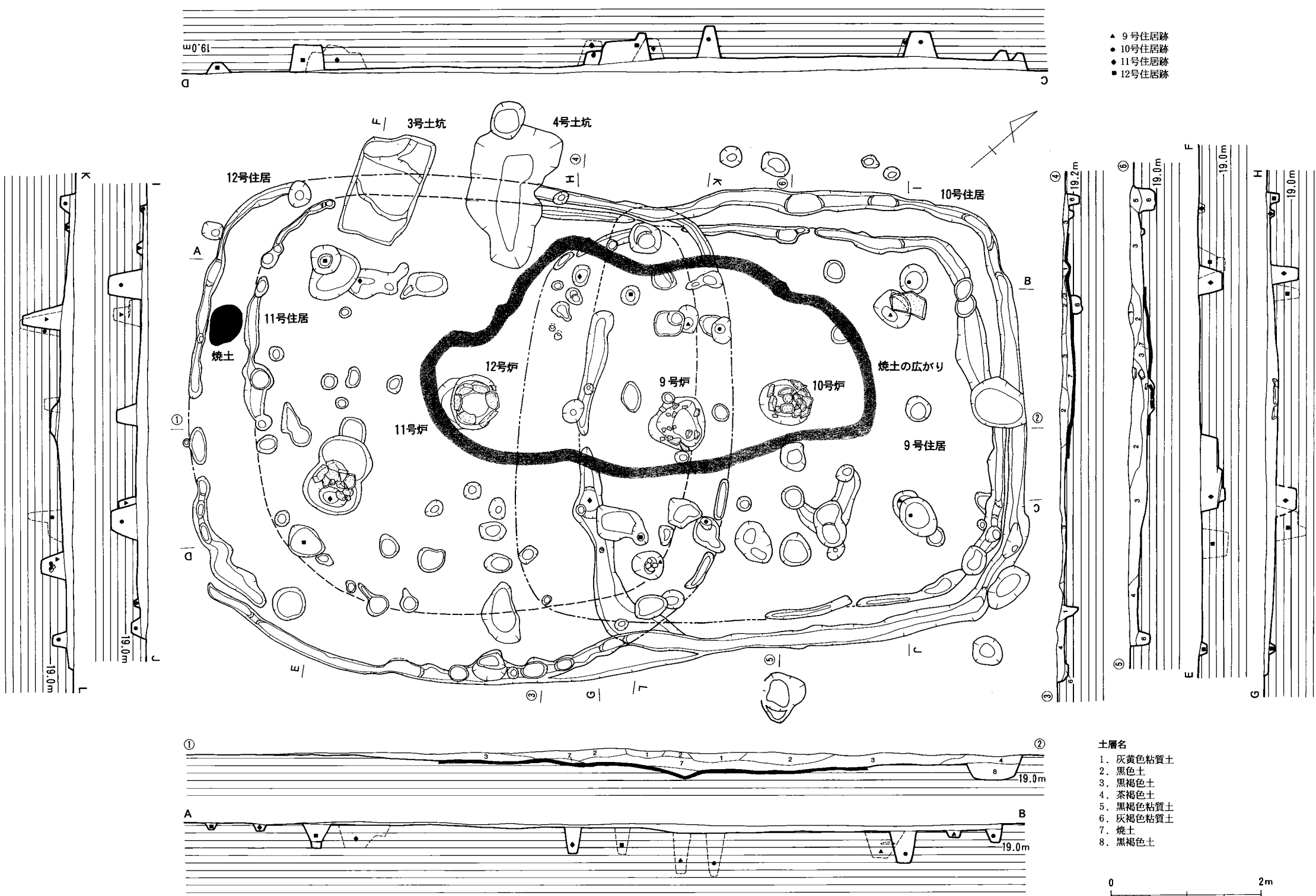
第 156 図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)

痕跡が窺えず、4・7号竪穴住居跡と同様な形態であったと考えられる。遺物の出土は少なく、ピットから数点の小さな無文土器片が出土しているにすぎず、土器・石器とも図示できていない。しかし、規模や構造から判断して1・3・5・6・9～12号竪穴住居跡と4・7号竪穴住居跡との間の年代に位置づけられるであろう。

9～12号竪穴住居跡（図版11・12 第157・158図）

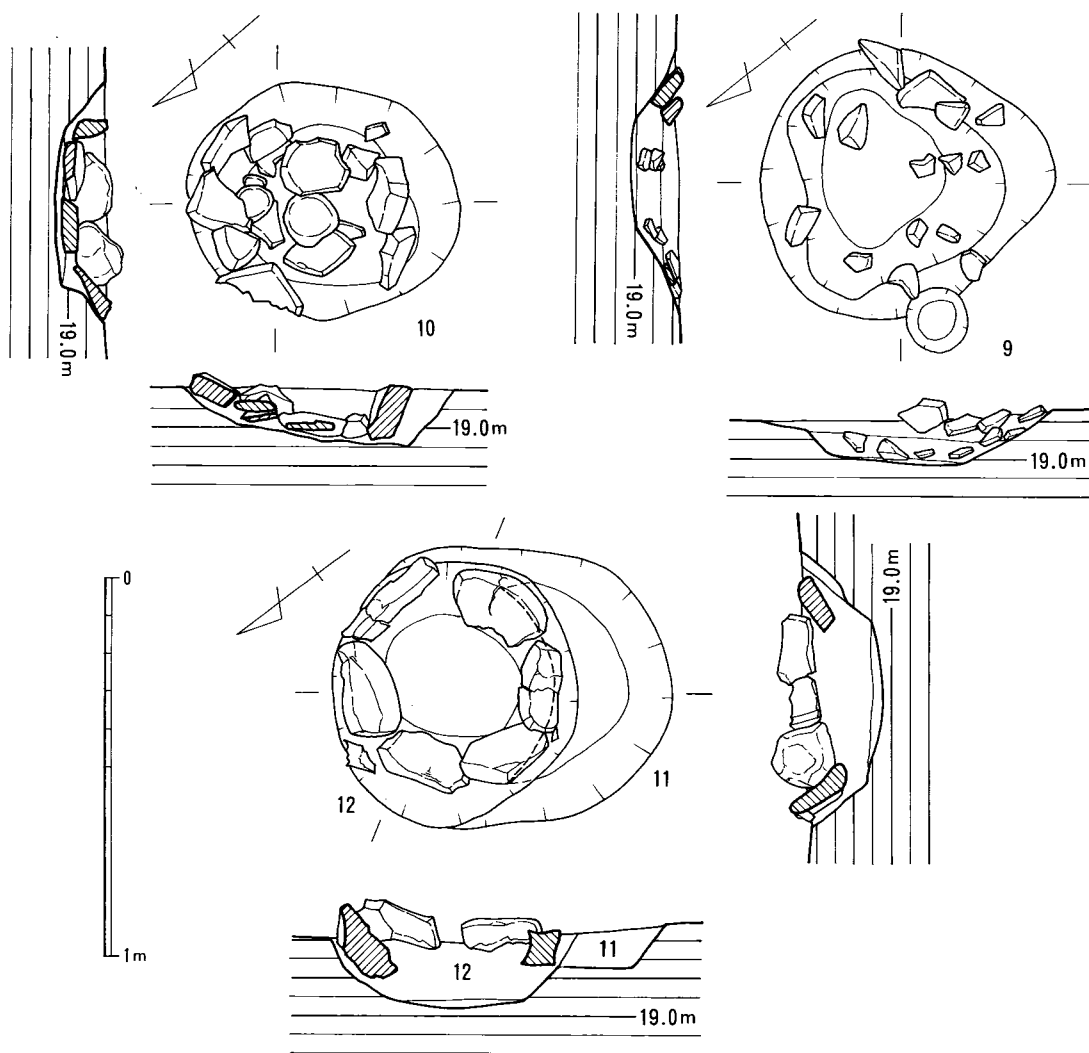
9～12号竪穴住居跡は調査区中央部の西寄りVE区からIVD区にかけて位置する4軒の竪穴住居跡群である。位置的な関係から1号竪穴住居跡や1号溝や3・4号土坑とも切り合っていたはずであるが、著しい削平により現在では4号土坑に切られるという先後関係しかわからない。当初、本遺構については数軒の竪穴住居跡が切り合っているという認識であったが、1) 全体的にほぼ同質の埋土が広がる、2) 東壁中央部については切り合っている部分がくびれることなく直線的なラインで検出された、3) 調査の早い時点で2基の石組炉が検出された、4) この2基の石組炉を取り囲むように6.1×3.3mの範囲で厚く焼けた面が検出された、といういくつかの理由から、北陸・関東以東に広く分布する大形竪穴住居跡（ロングハウス）に類似した1軒の竪穴住居跡ではないかという認識に変わっていった。そこで遺物の取り上げに際しても「2号竪穴住居跡」として対応したが、後々の検証のために包含層の場合は全体を6区画に分けて纏めて取り上げ、主要な個々の遺物については詳細な出土地点を記録して取り上げた。ところが、さらに調査を進めるに従い、1) 東壁中央部で直線的なラインの部分が切り合うようにくびれていった、2) 床面まで掘り下げた時点で2号竪穴住居跡の壁に沿うようにもう1本の周溝が検出された、3) 2号竪穴住居跡の中央部やや北西寄りの地点で石の抜き取られた石組炉の痕跡が検出された、4) 周溝が1本に繋がるのではなく4軒分の方形もしくは隅丸形状に伸びていく、5) 南西側の石組炉も作り直した痕跡が確認された、6) 床面のレベルが北東部と南西部で約10cmほど異なる、といったいくつかの根拠から、やはり4軒分の竪穴住居跡が複雑に切り合っているという認識に至った次第である。しかし、元々は深さ80cm以上はあったと想定される竪穴住居跡が年代差を経ながらほぼ同じ場所に構築され続けたとしても、土層が連続的に繋がったり、2基の石組炉を取り囲むように広く焼け面が広がったり、切り合ってくびれるはずの東壁中央部において直線的な壁ができる等、これら4軒の竪穴住居跡がすべて年代差をもって構築され続けたとするにはかなり不可解な点があるのも事実である。おそらくは、ある時点において4軒が切り合う横に長い空間において、今回検出した竪穴住居跡群とは別の空間（遺構）が存在していた可能性が多分に想定されるが、著しい削平と他に類例が稀有なことから、この点については今後の課題として残しておきたい。

さて、4軒の竪穴住居跡の先後関係であるが、周溝の切り合いや周溝の検出順序、さらには出土した遺物の年代差などから、北東部の最下面において周溝が検出され石が抜き取られた石組炉をもつ住居跡が最も古くこれを9号竪穴住居跡、この9号竪穴住居跡を切る北東部の住居



第 157 図 9～12号竪穴住居跡実測図 (1/60)

跡を10号竪穴住居跡、南西部の床面において検出され石組炉に切られる炉跡をもつ住居跡を11号竪穴住居跡、この11号竪穴住居跡を切っている南西部の円形に近い隅丸方形住居跡を12号竪穴住居跡、の順序でそれぞれを位置づけた。先述したように、出土遺物についてはその出土地点のかなり細かい記録を残していたので、どの竪穴住居跡に本来帰属していたのかを検証することが十分にできた。ただし、9号は10号竪穴住居跡の、11号は12号竪穴住居跡の床面まで掘り下げた時点で検出されており、9号と11号に確実に帰属するであろう遺物はほとんどないと考えられる。また、10号と12号の竪穴住居跡が切り合う部分については、どちらに帰属するのか判断に苦しむ遺物もあり、これらについては無用な混乱を避けるため、一括して「10・12号



第 158 図 9～12号竪穴住居跡炉跡実測図 (1/20)

「堅穴住居跡出土遺物」として取り扱った。以下、4軒の堅穴住居跡のそれぞれについて説明を行なうが、出土遺物量はパンケース35箱である。

9号堅穴住居跡（第157・158図）

9号堅穴住居跡は10号堅穴住居跡の床面に至って、その周溝が検出されたことで初めて存在が確認された住居跡である。平面プランは推定6.2×5.2mの方形を呈する。周溝の幅は10～25cm、深さ10cmを測るが、南側1/3の周溝は残存しない。支柱穴は径30～50cm、深さ40～60cmのものが4本。石の抜き取られた炉跡（第158図）は75×60×15cmで南西方向に寄るが、この住居跡と年代的に近いと考えられる小池原上層式期の3号堅穴住居跡も石組炉が中心でなく一方に寄っており、年代的な連続性を考慮すればそれほど無理な位置にあるともいえない。先述したように、本堅穴住居跡は10号堅穴住居跡を床面まで掘り下げた段階で確認されたものであるだけに、本来の床面もあるはいくらか10号住居跡によって削平されているとも考えられる。したがって、確実に9号堅穴住居跡出土の遺物といえるのは周溝と支柱穴から出土する遺物だけであるが、実際にこれらから出土した遺物は少量・小破片で、年代の決め手になるようなものはなく図示していない。

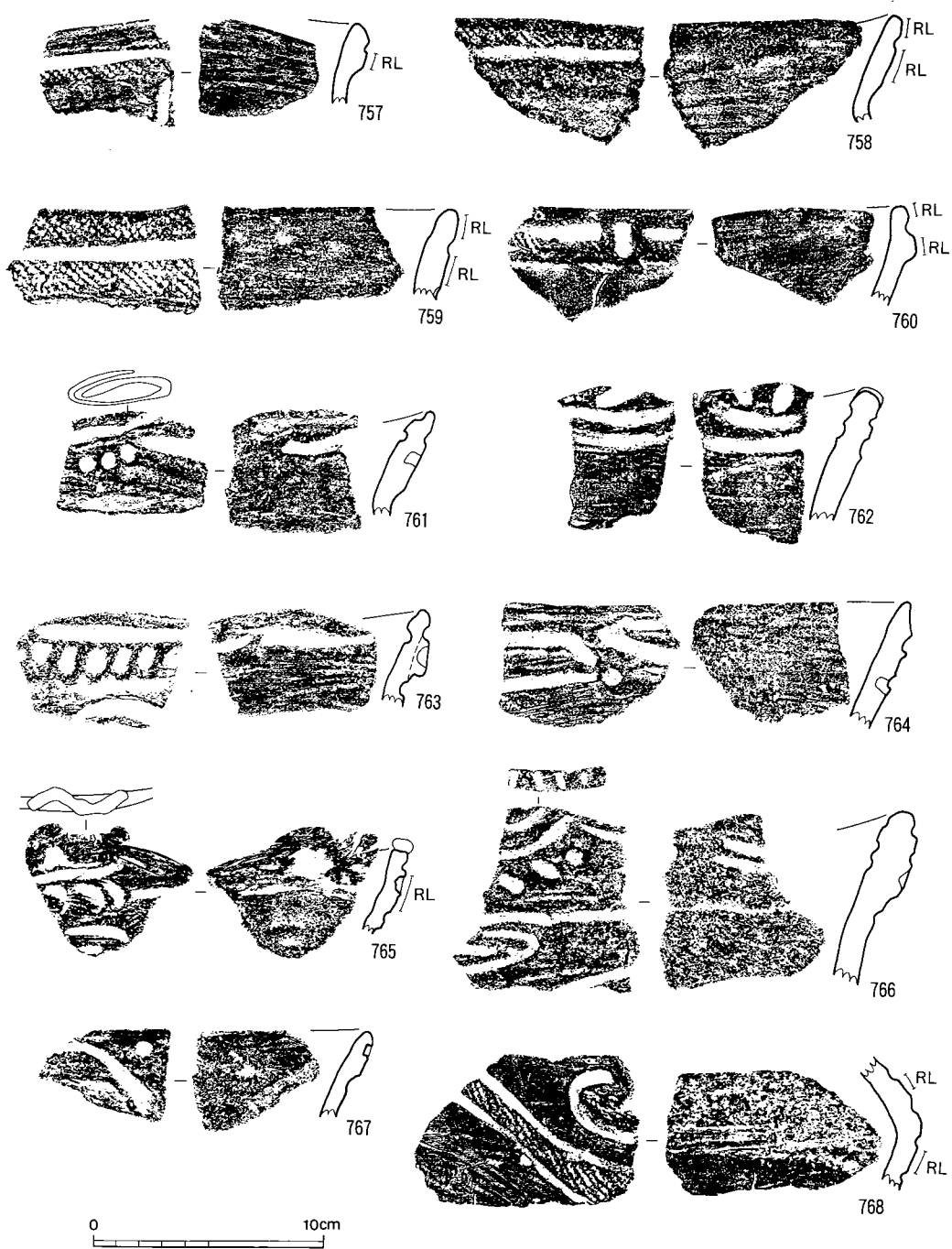
10号堅穴住居跡（第157・158図）

10号堅穴住居跡は9号堅穴住居跡を切るもので、平面プランは6.2×6.0mのほぼ正方形を呈する。幅は15～30cm、深さ15cmを測る周溝は、南側の一部が途切れるものの、ほぼ全周する。支柱穴は径30～50cm、深さ40～60cmのものが4本。ほぼ中央部にある炉跡（第158図）の規模は70×60×15cmを測り、底面に扁平な石を敷いて側面にも同様な石を設置するが、この側面の石については一部抜かれて残存しない。北隅に置かれた台石は42.9kgと重く、移動式ではなく住居跡内に据え付けられたものであろう。出土遺物の中でも11・12号堅穴住居跡と切り合っている部分については、遺物の帰属遺構の明確な分類が不可能なため「10・12号堅穴住居跡出土遺物」として一括した。

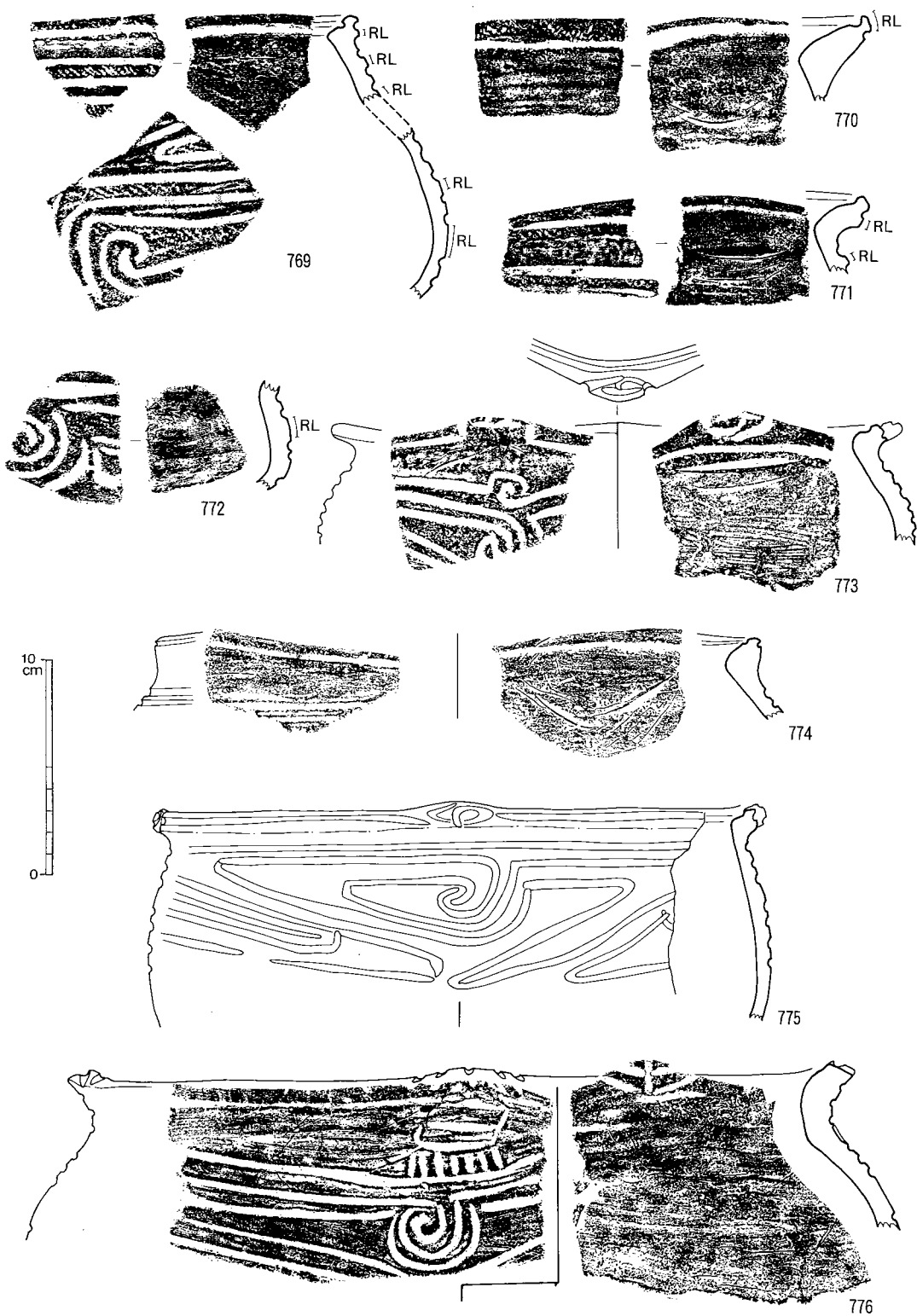
土器（第159～177図）土器については145点を図示した。先述したように、遺物の取り上げに際しては「2号堅穴住居跡」として一括に対応したが、後々の検証のために包含層の場合は全体を6区画に分けて纏めて取り上げ、主要な個々の遺物については詳細な出土地点を記録して取り上げた。したがって、確実に10号堅穴住居跡に伴うといえる遺物を抽出することが可能であった。

757～768は小池原上層式である。口縁部を肥厚させてその中央部に沈線文を引いて縄紋を施すが、765のように粘土紐を「S」字状に貼り付ける珍しい例もある。

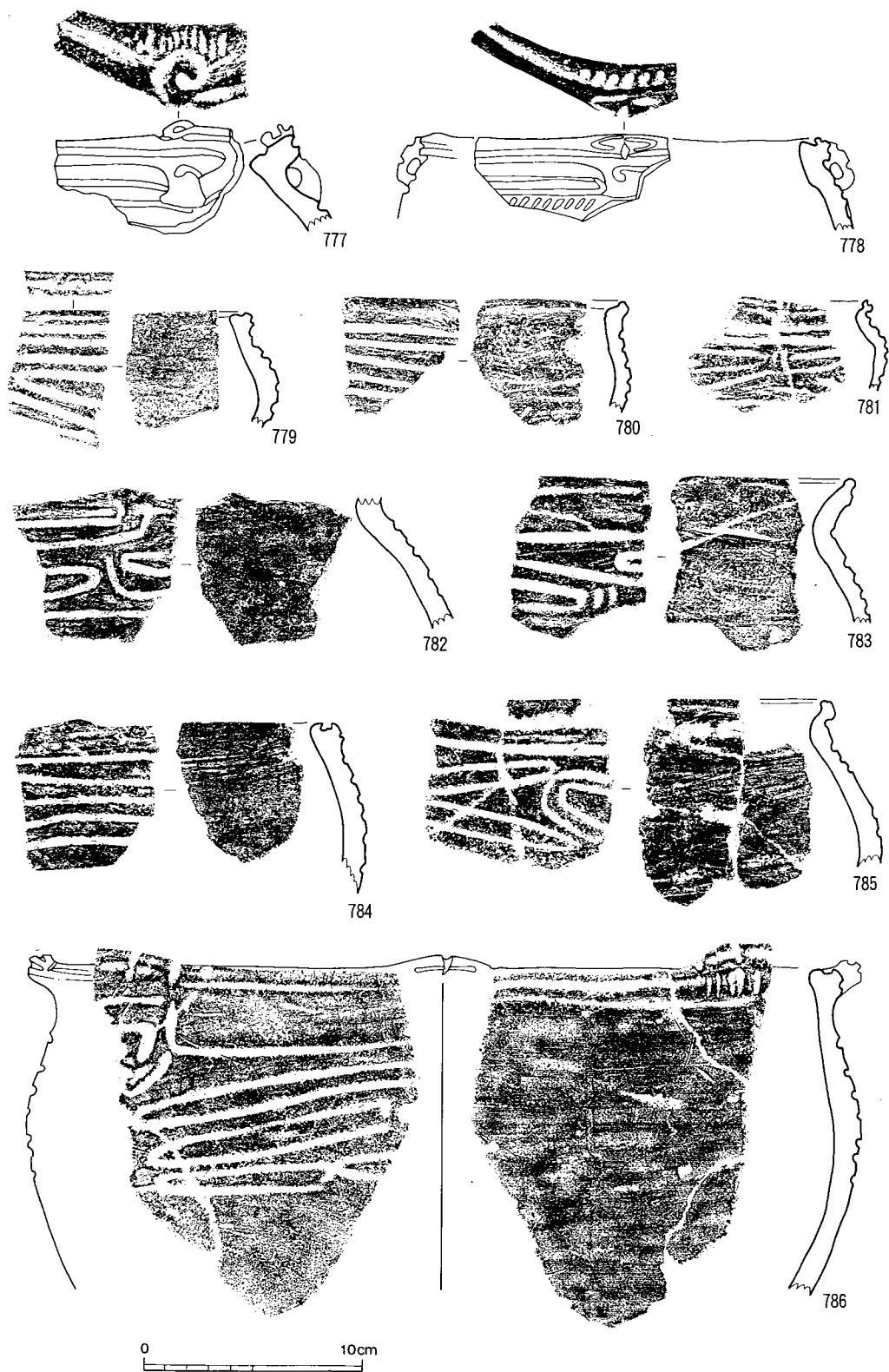
769～822は鐘崎式であるが年代幅はかなりある。769～776は小池原上層式以来の渦巻文と鉤手文との組み合わせがかなり忠実に残っているもので、古段階として位置づけることができる。この段階ではやはり小池原上層式以来の伝統として、縄紋が施されるものについては文様自体



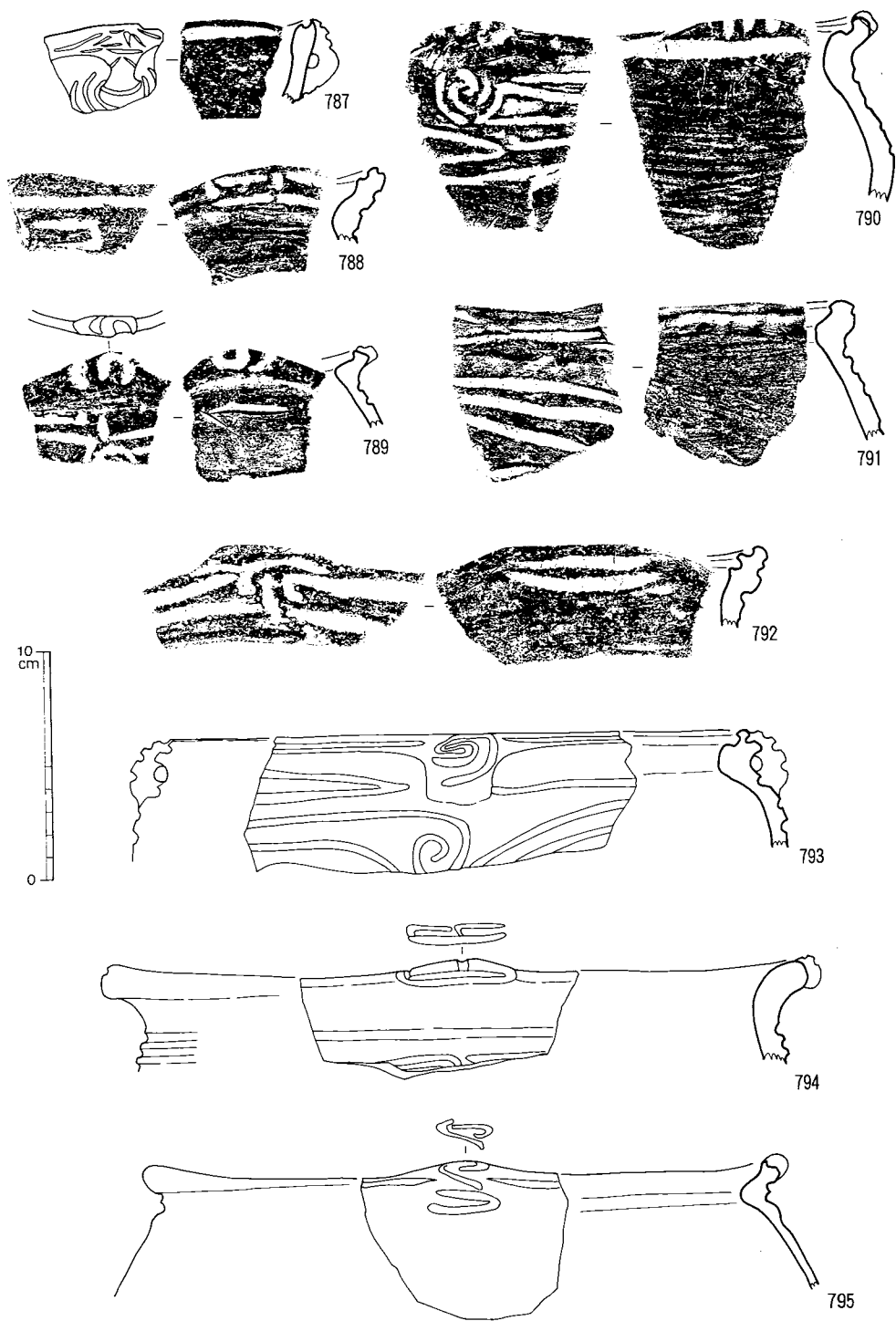
第 159 图 10号竖穴住居跡出土土器実测图. 1 (1/3)



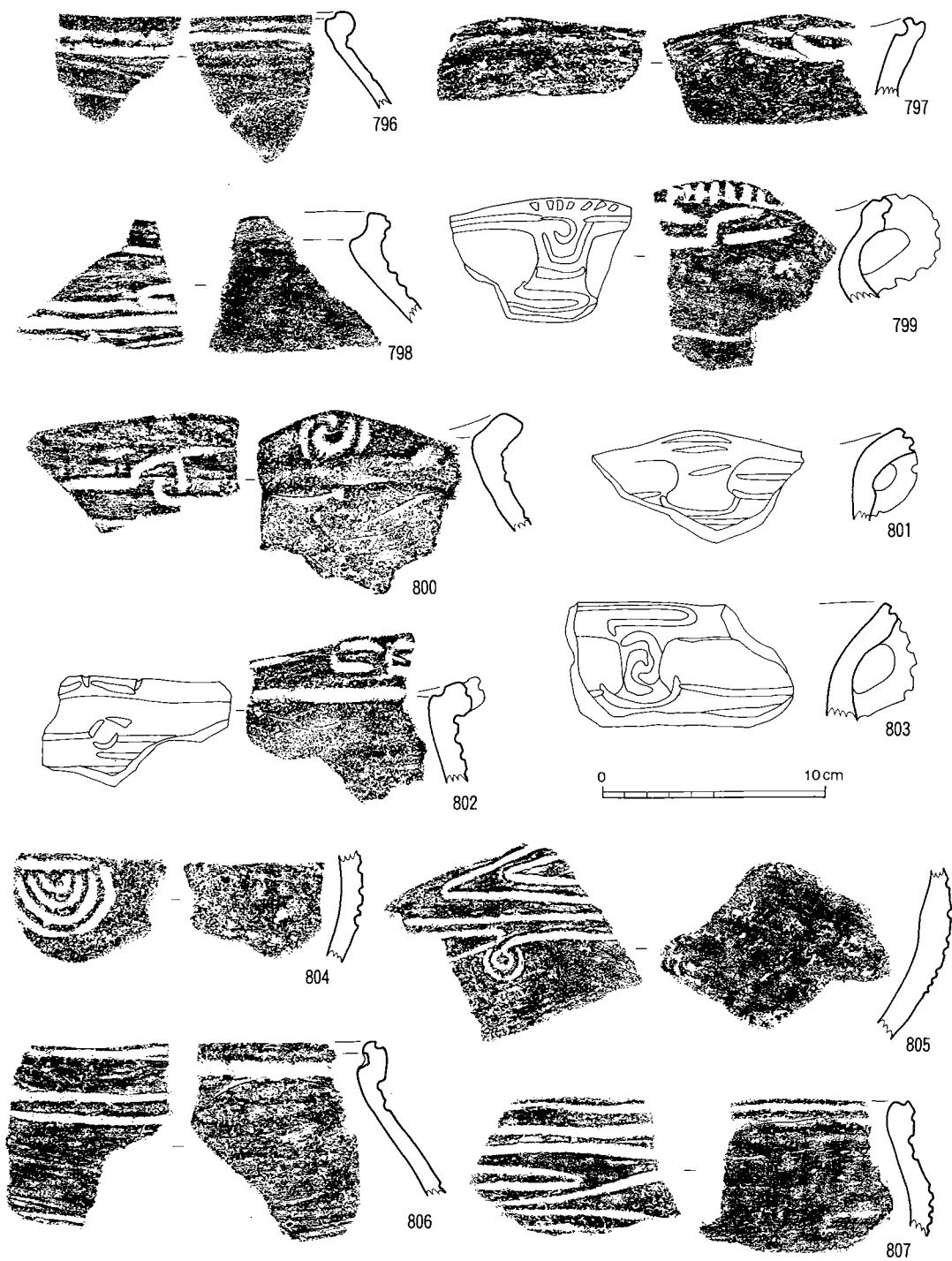
第 160 图 10号竖穴住居跡出土土器実測图. 2 (1/3)



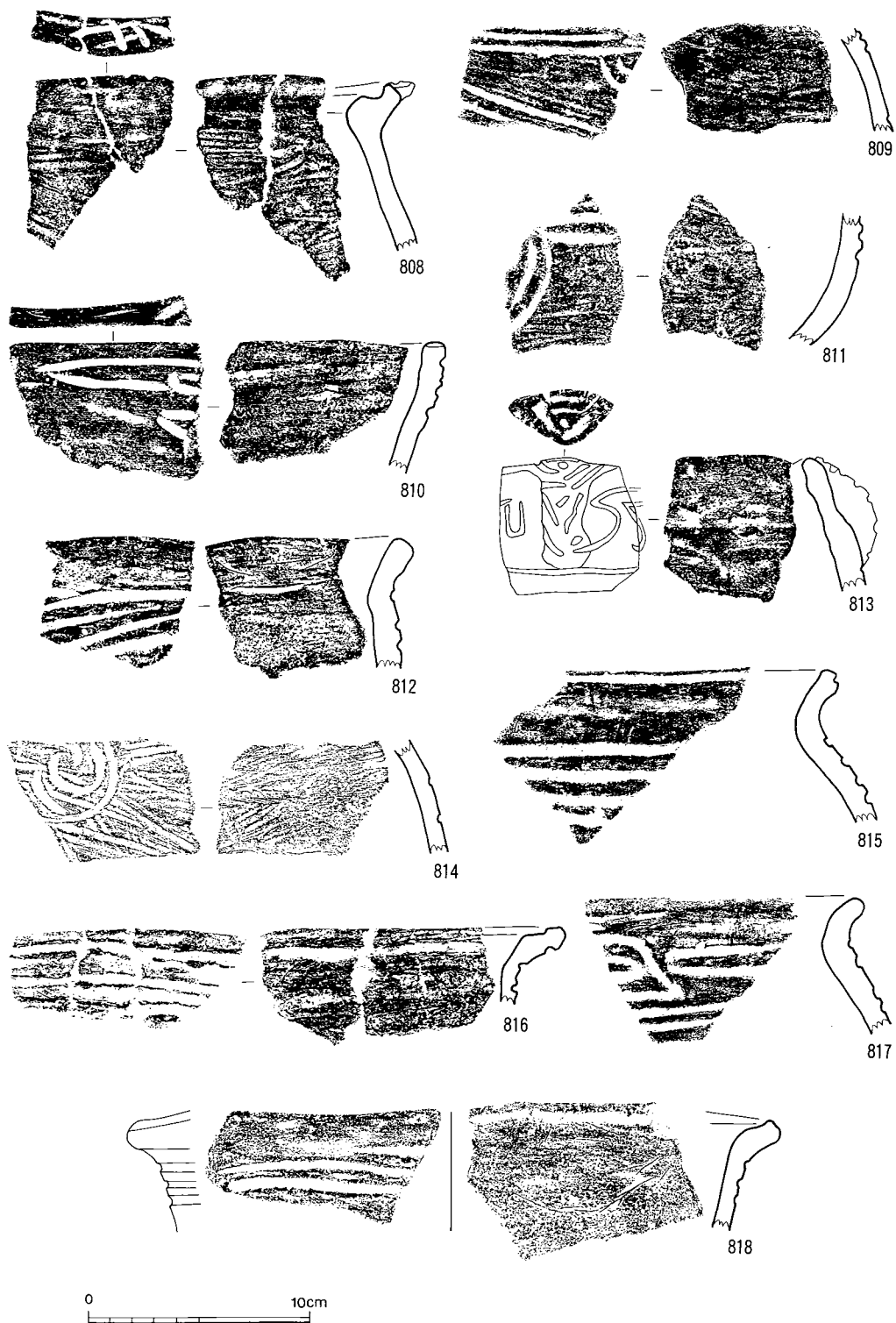
第 161 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 3 (1/3)



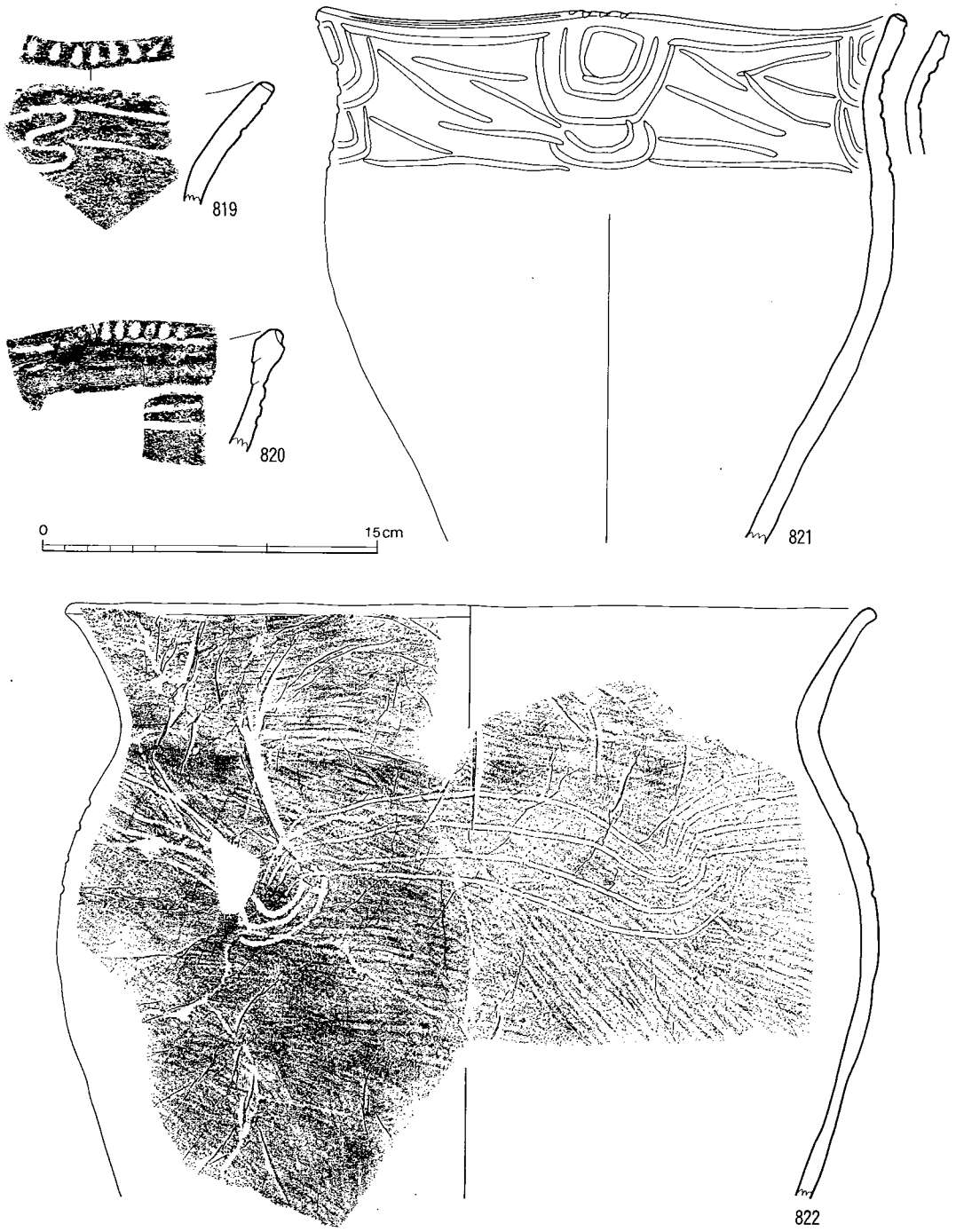
第 162 图 10号竖穴住居跡出土土器実測図. 4 (1/3)



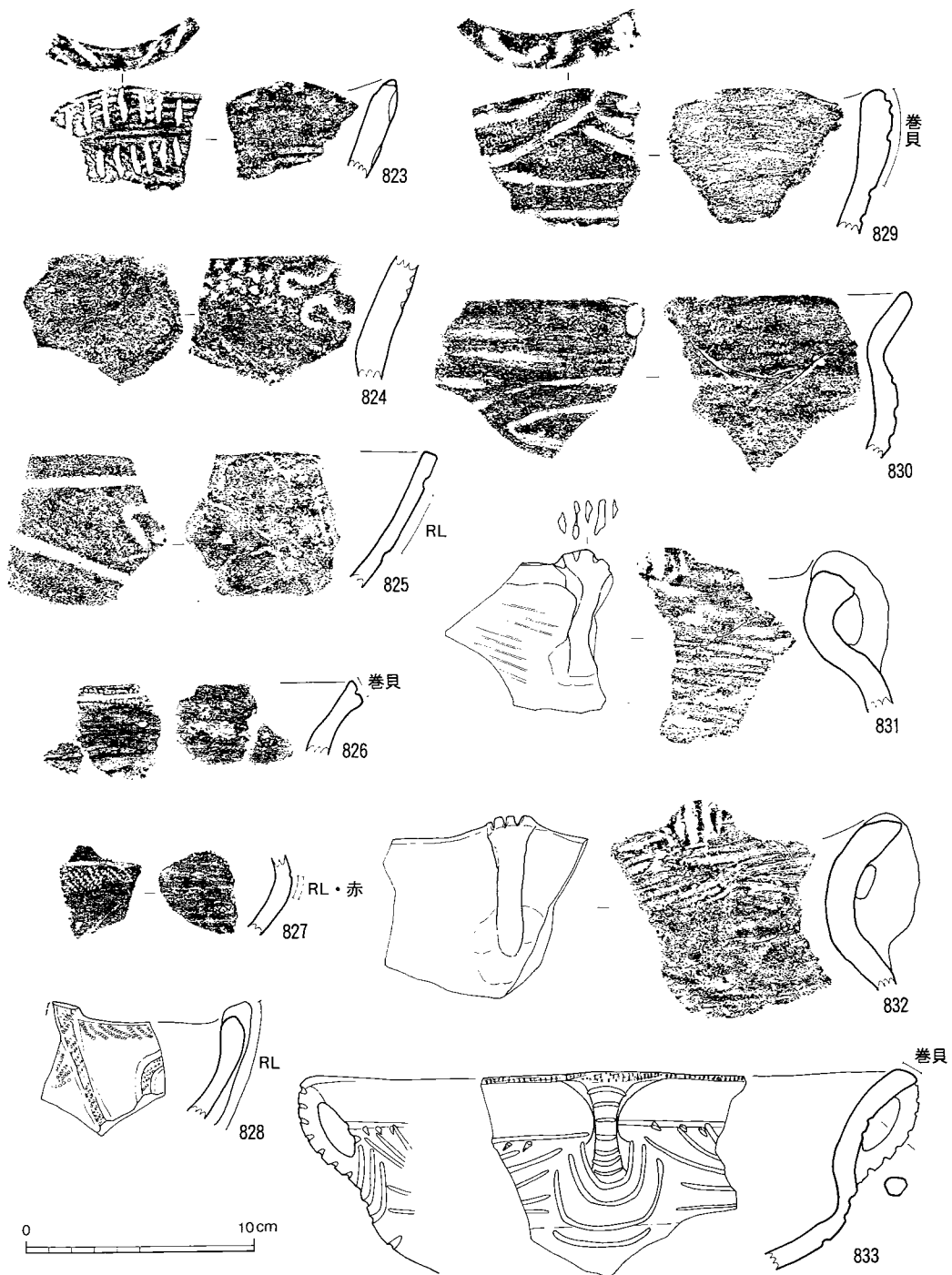
第 163 图 10号竖穴住居跡出土土器実測図. 5 (1/3)



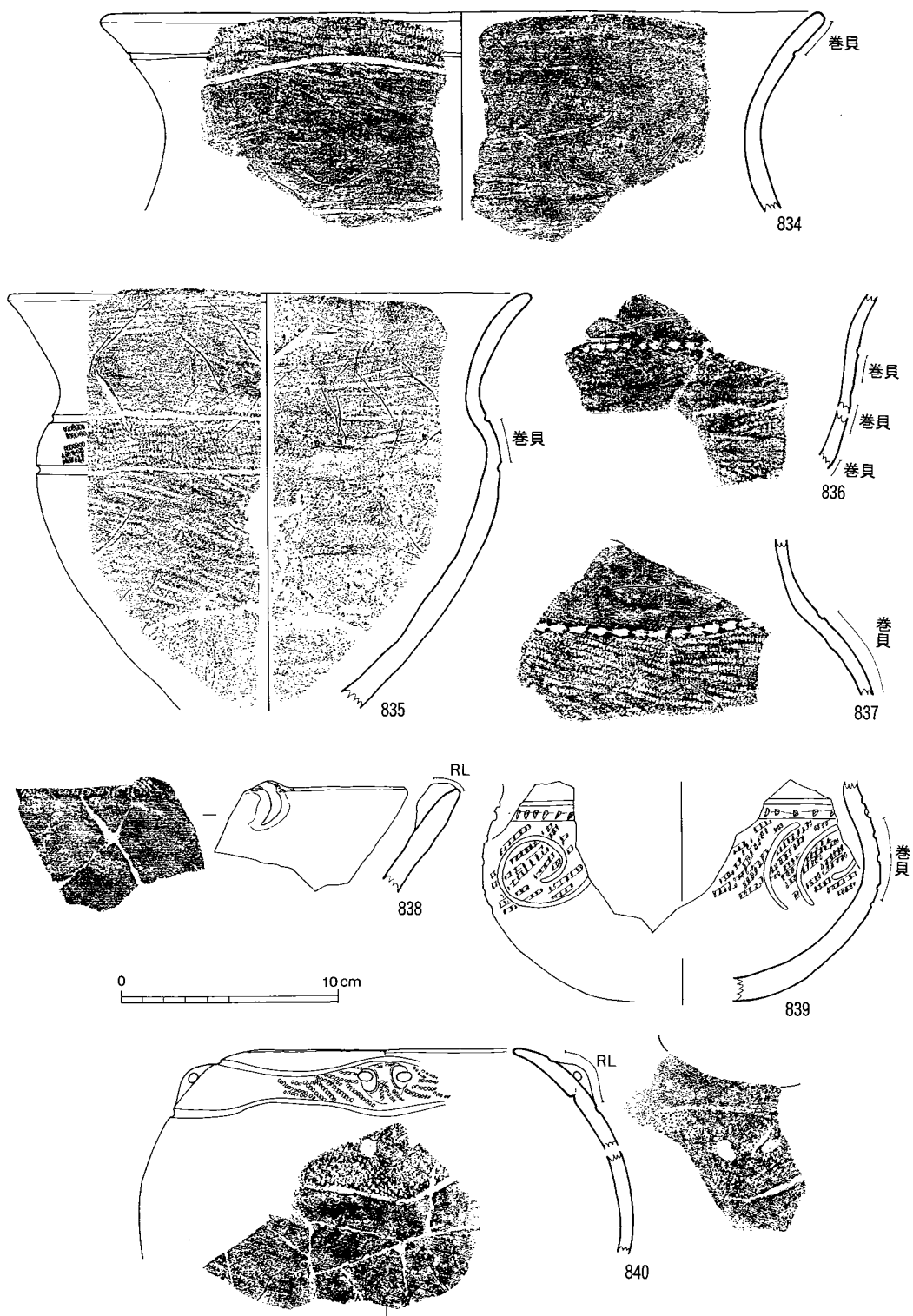
第 164 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 6 (1/3)



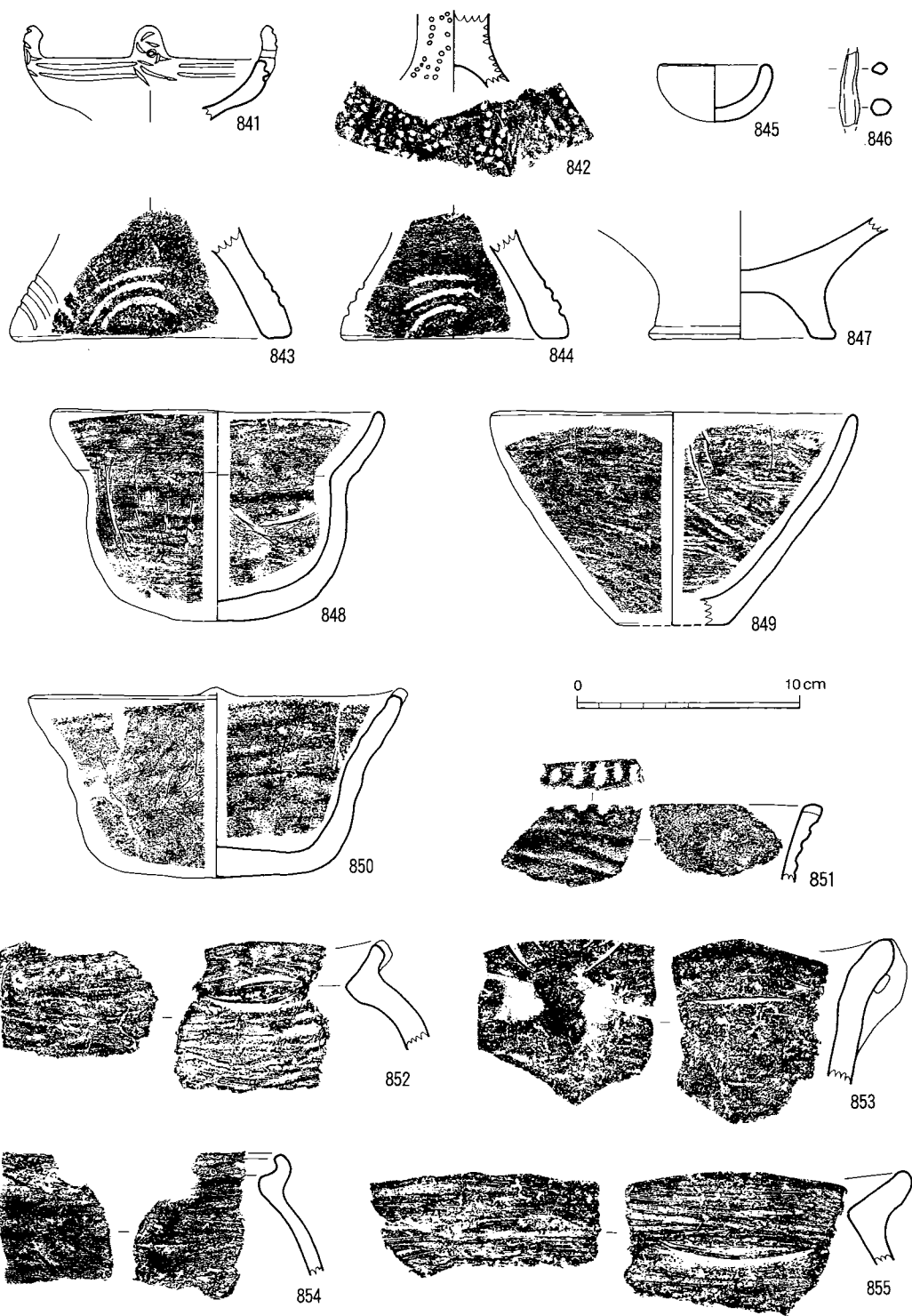
第 165 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 7 (1/3)



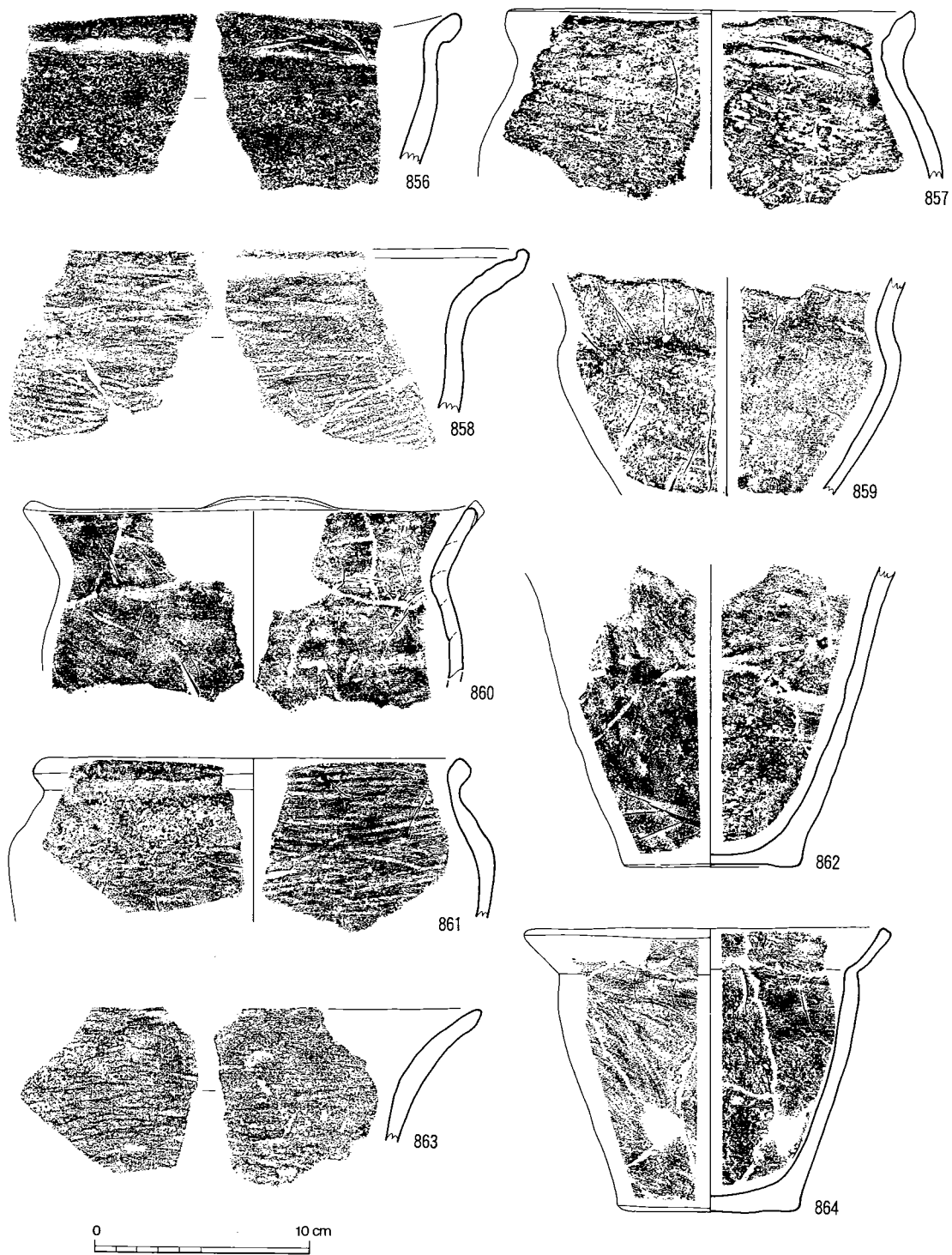
第 166 图 10号竖穴住居跡出土土器实测图. 8 (1/3)



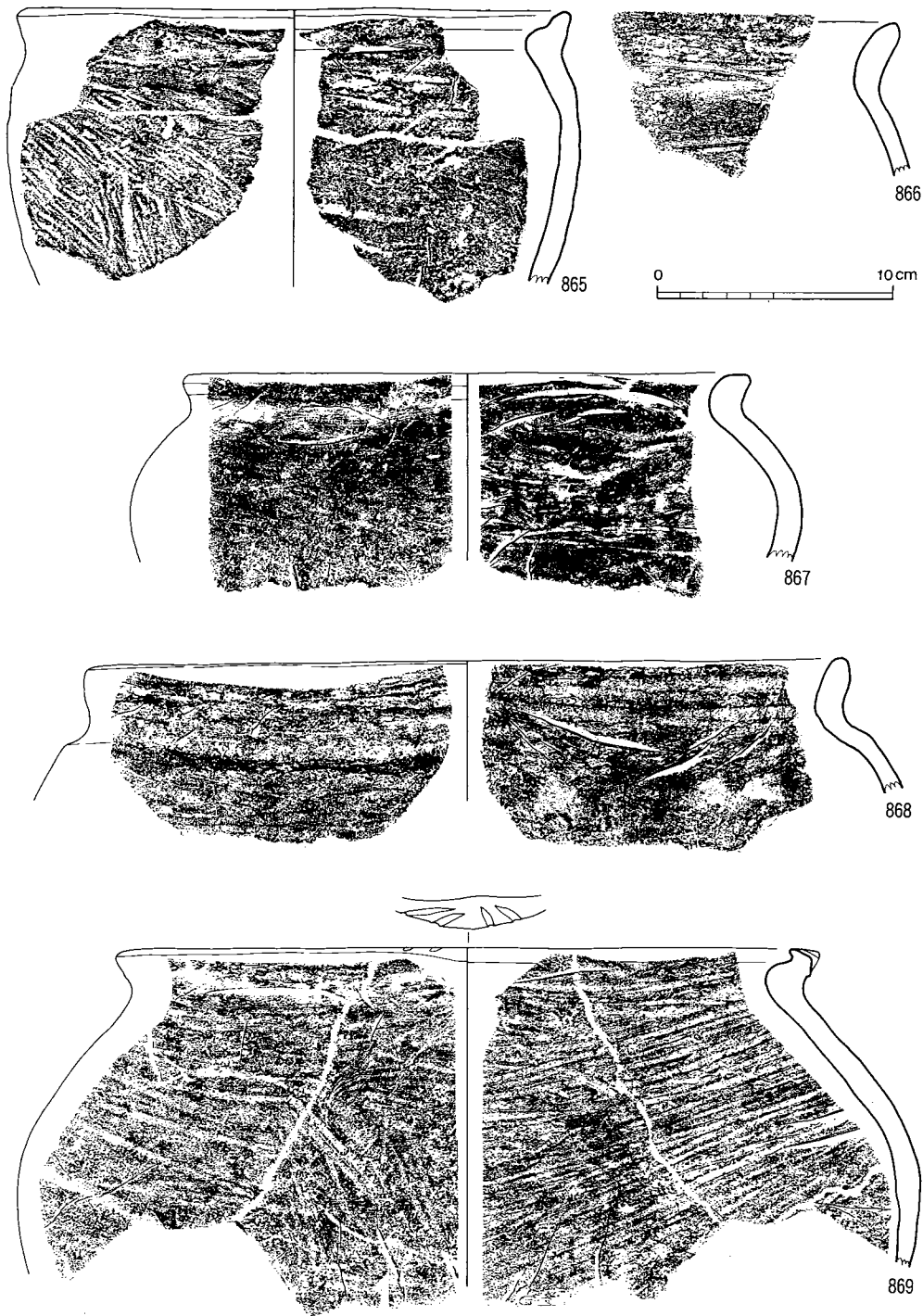
第 167 图 10号竖穴住居跡出土土器実測图. 9 (1/3)



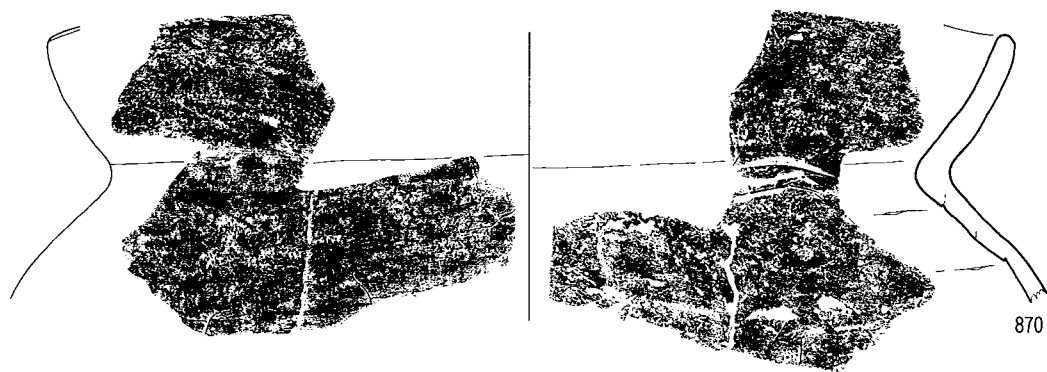
第 168 图 10号竖穴住居跡出土土器实测图. 10 (1/3)



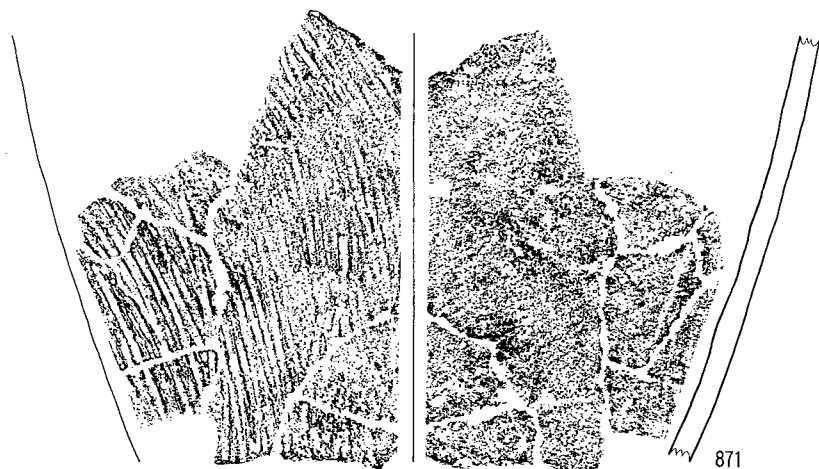
第 169 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 11 (1/3)



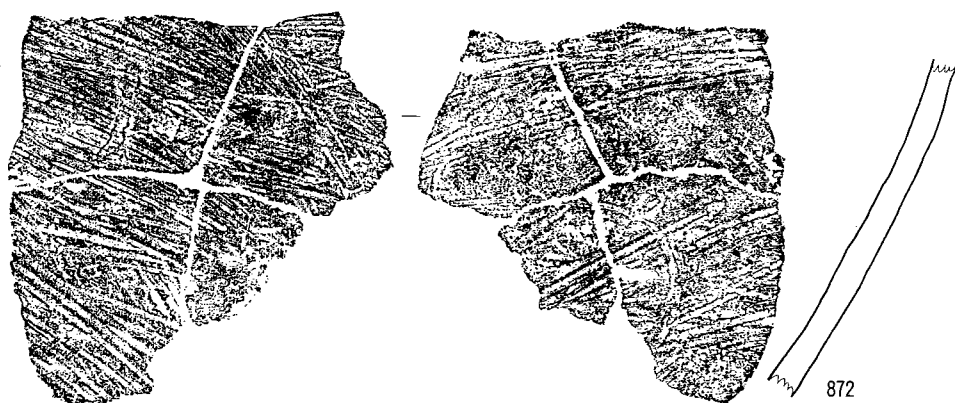
第 170 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 12 (1/3)



870



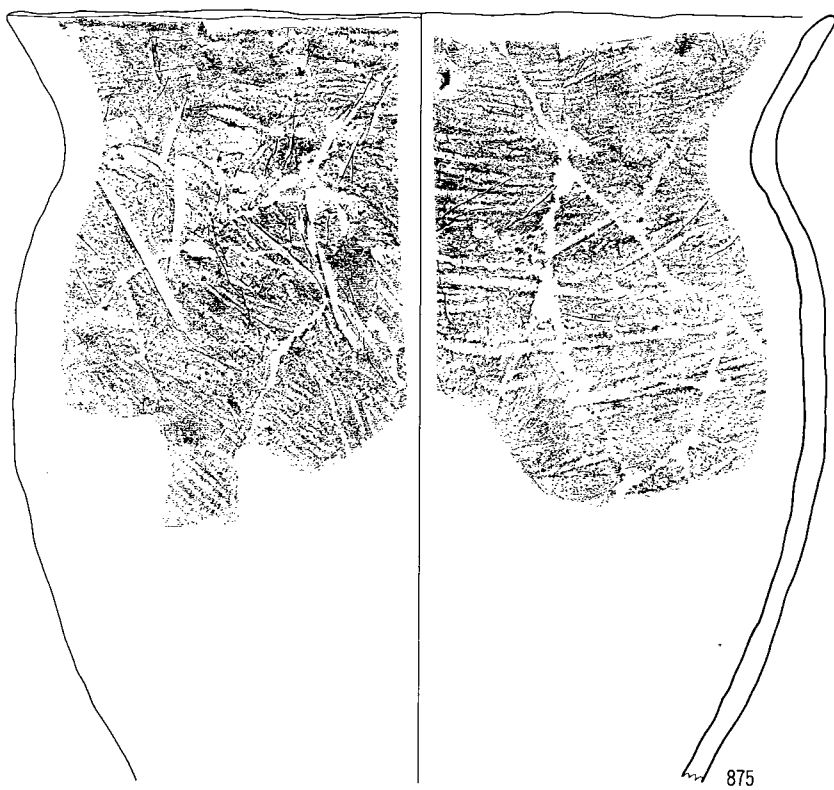
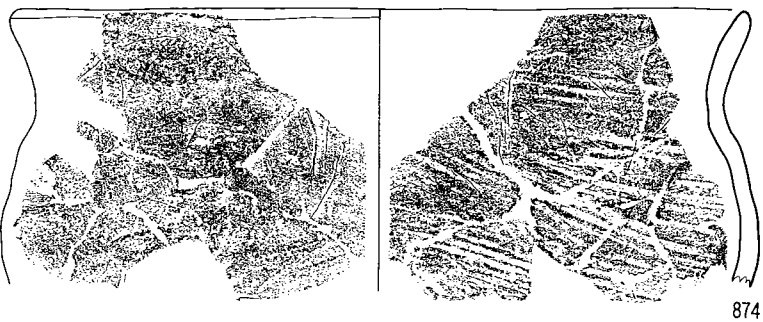
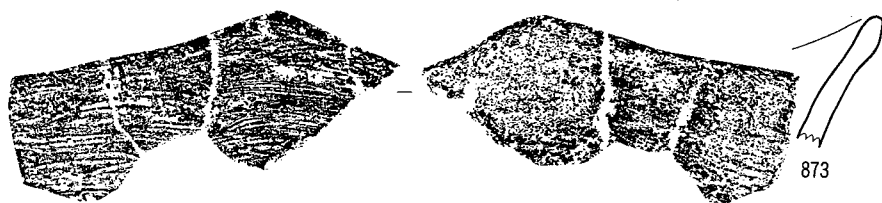
871



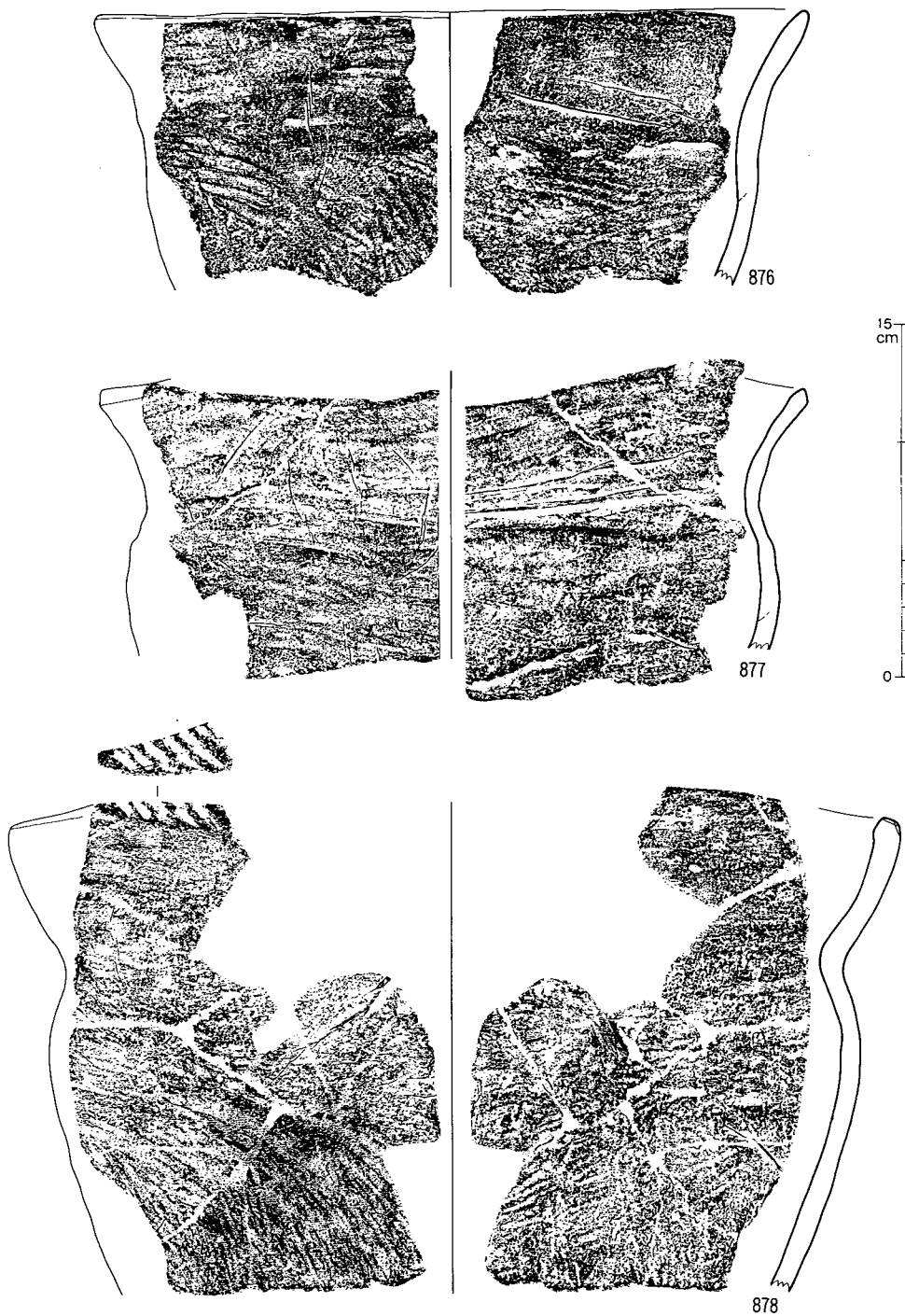
872



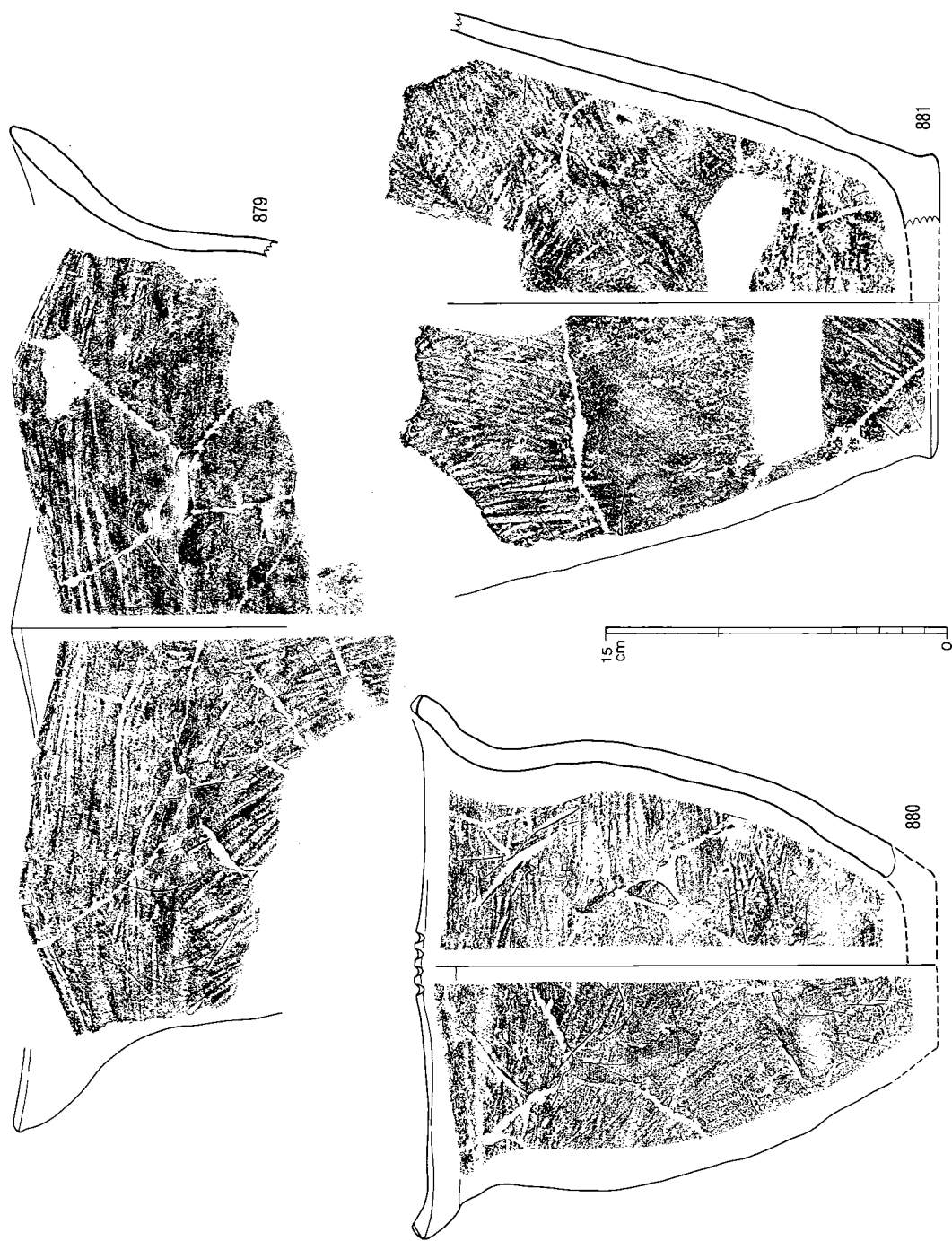
第 171 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 13 (1/3)



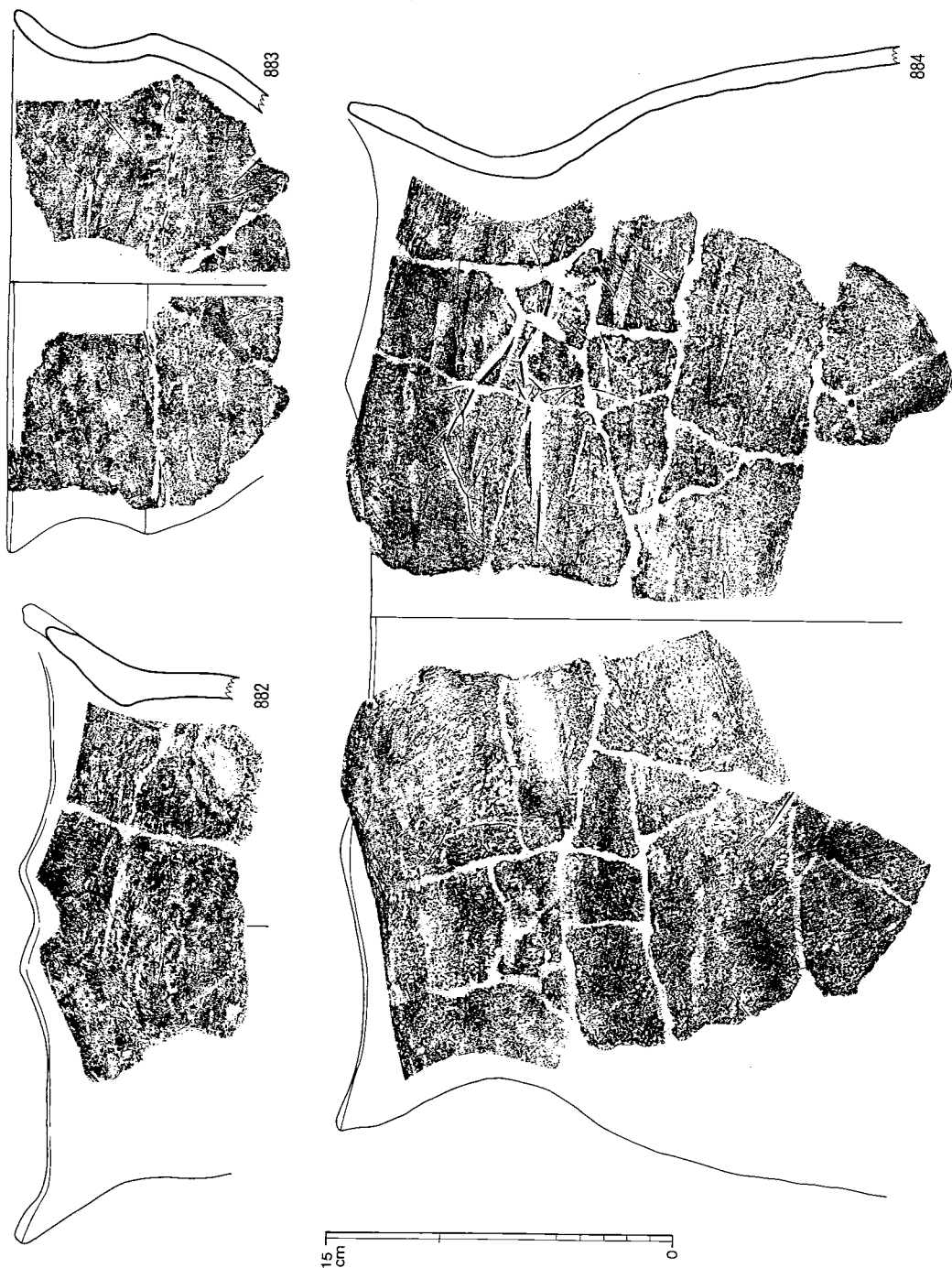
第 172 图 10号竖穴住居跡出土土器実測图. 14 (1/3)



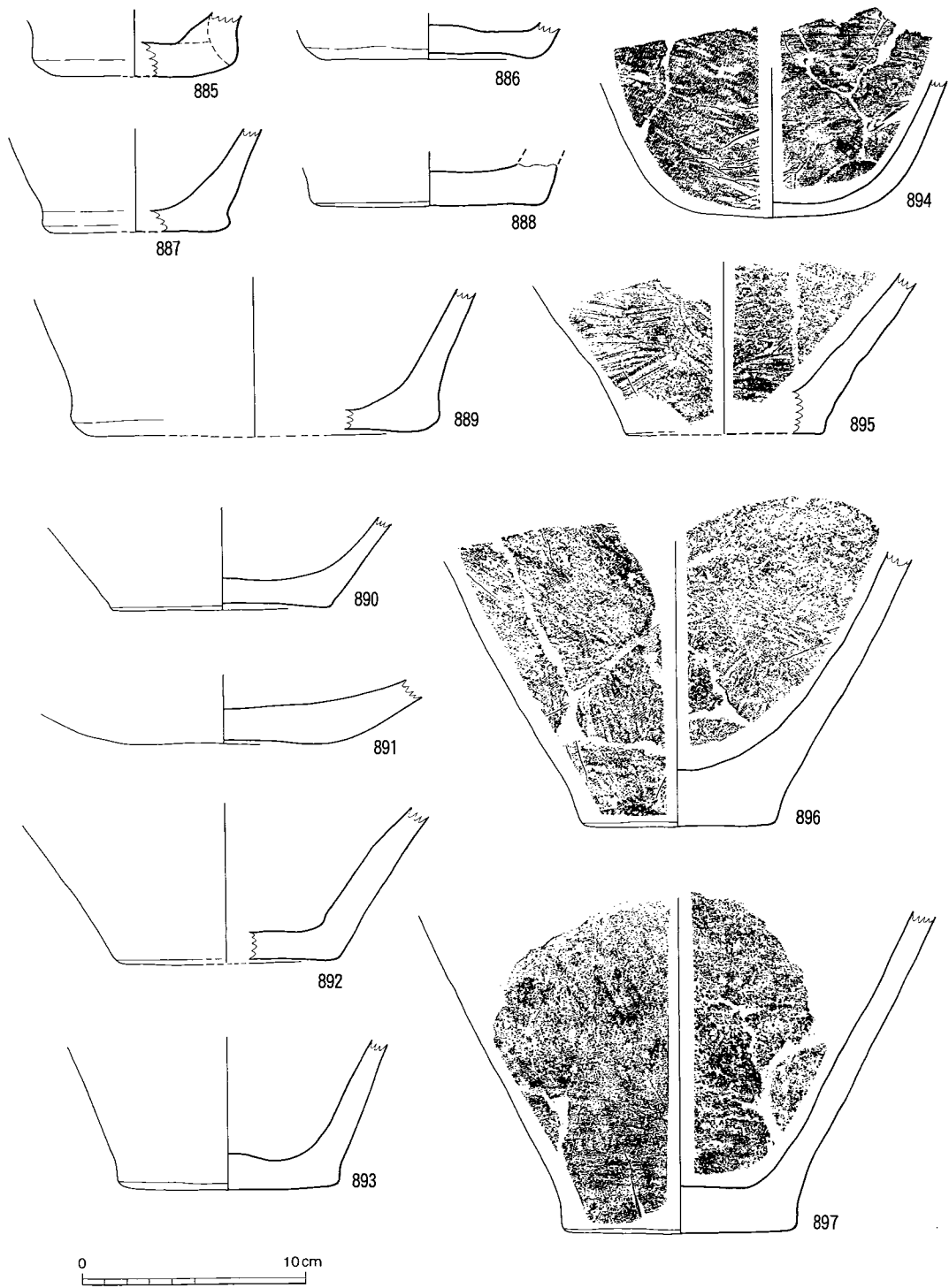
第 173 图 10号竖穴住居迹出土土器实测图. 15 (1/3)



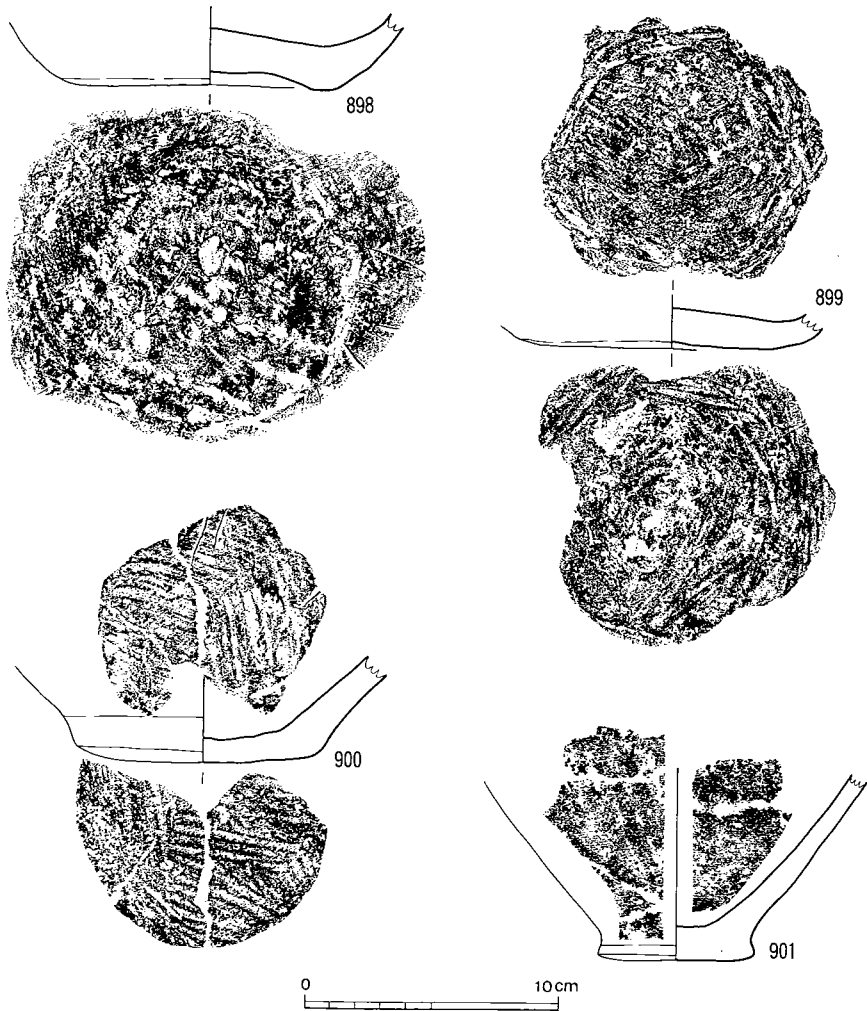
第 174 图 10号竖穴住居跡出土土器実測図. 16 (1/3)



第 175 图 10 号竖穴住居跡出土土器実測図. 17 (1/3)



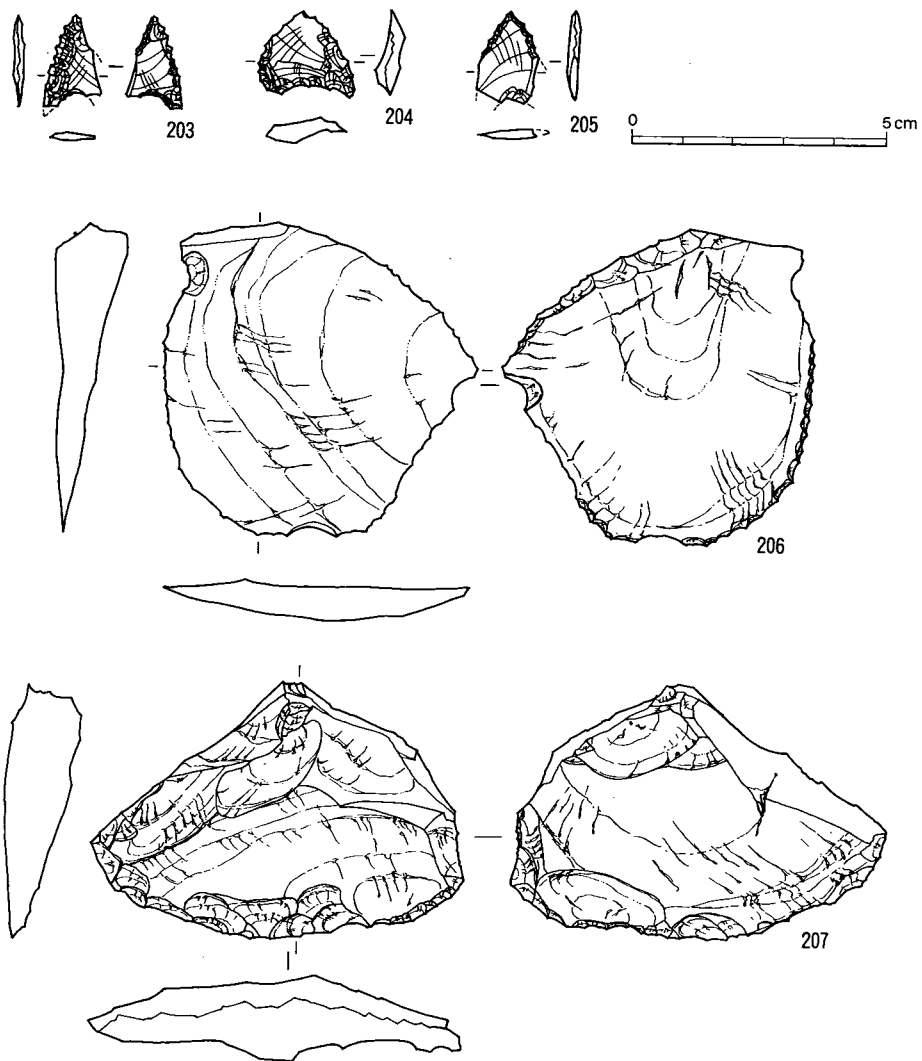
第 176 图 10号竖穴住居跡出土土器实测图. 18 (1/3)



第 177 図 10号竪穴住居跡出土土器実測図. 19 (1/3)

が精緻に正確に描かれるのに対して、縄紋の施されないものについては文様が粗く簡略化されたようなものになる。777～822は渦巻文と鉤手文の組み合わせが形骸化していくもので、中段階として位置づけることができる。795のように口縁部だけに文様が施される例は珍しい。822は渦巻文と鉤手文の組み合わせ文様の形骸化が著しいものの典型例である。内外面ともに巻貝条痕文を残し、施文部がナデによって調整されることはない。

823～847は鐘崎式と西平式の間位置づけられる一群であるが、その中でも鐘崎式により近いものであろう。ただし、823～825・829・830についてはあるいは小池原上層式になるのかもしれない。827は縄紋施文部に赤色塗布が行なわれる。828はRLの施された隆帯文が貼り付けられ、口縁部にもRLが施される珍しい資料である。831・832は同一個体で、波頂部に付いた

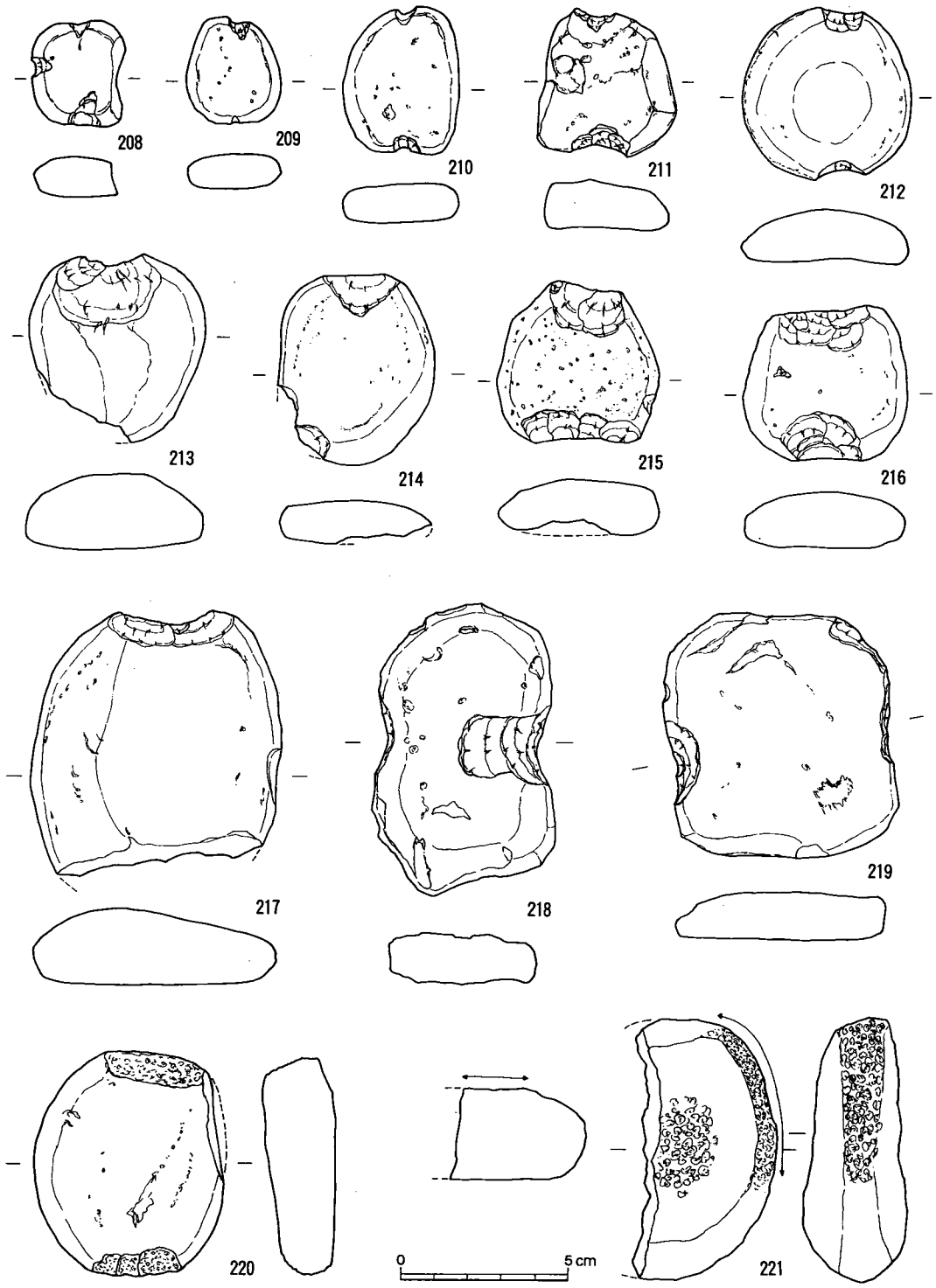


第 178 図 10号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (2/3)

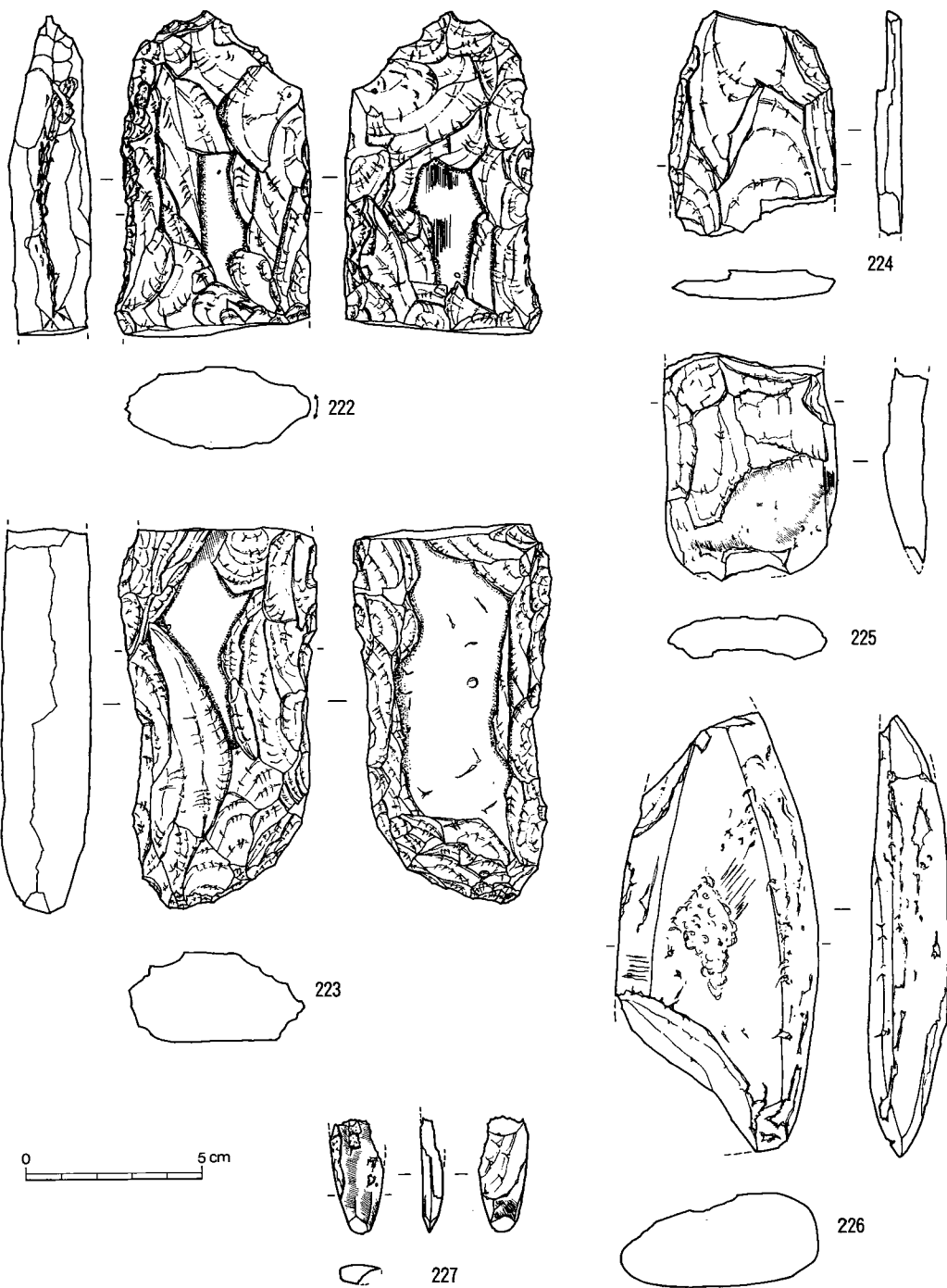
把手の上端部が強く刻まれる。833の口縁端部には巻貝疑似縄紋が施され、把手を取り囲む重弧文に向けて沈線文が集約される。838は皿もしくは浅鉢状の器形の口縁部に、RL 縄紋が施された「ノ」字状の突起が付く。840は紐孔(?)のある円形の突起(把手)が貼り付けられた後に、沈線文間にRLが施される。841はおそらく脚台が付く小型品であろう。842は脚の上部に当たるが、先の尖った工具で多数の刺突文が施される。

851は摩滅が著しいが西和田式であろう。

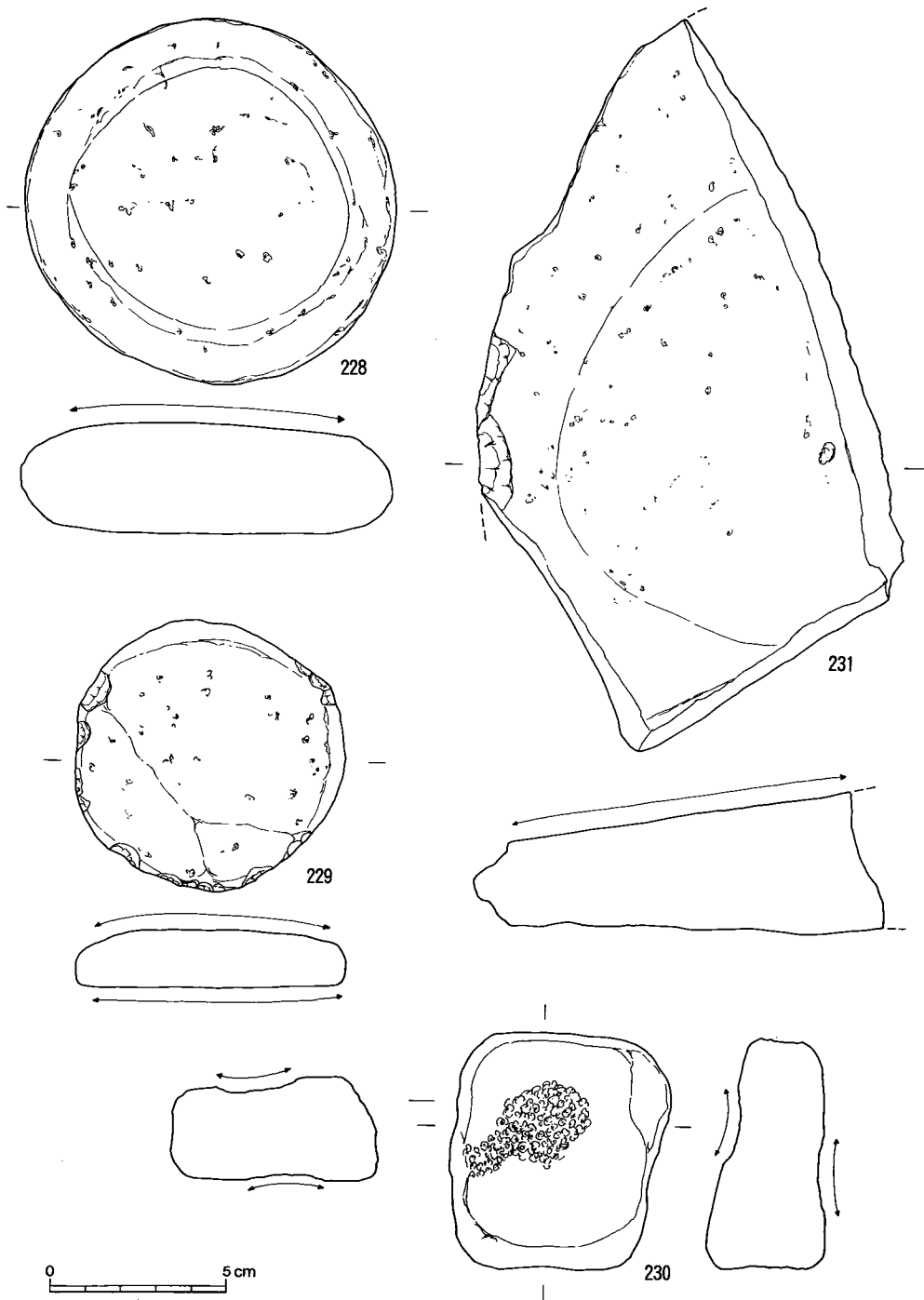
852~884の無文土器のうち、胴部が比較的強く張って口縁部が短く厚く強く外反するものは



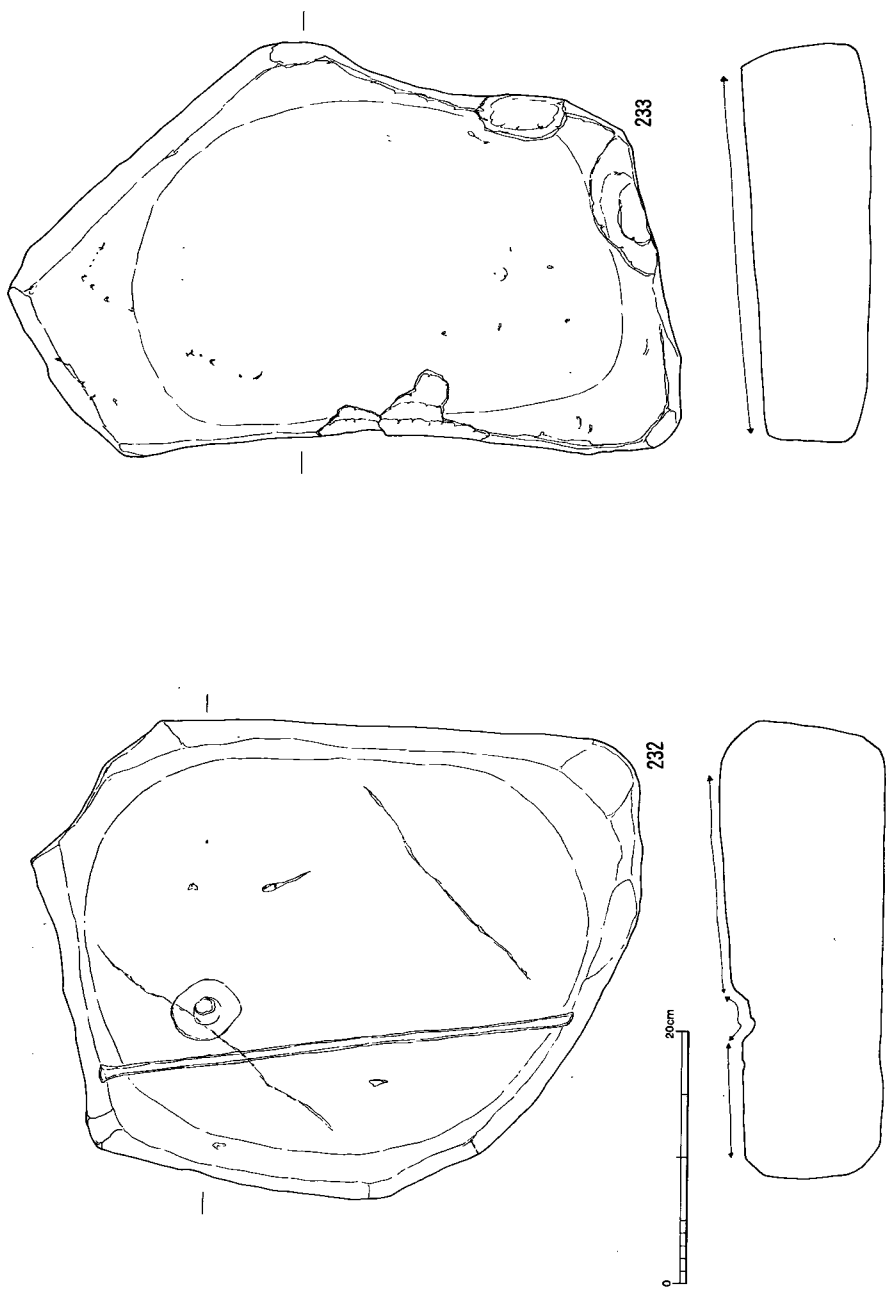
第 179 图 10号竖穴住居跡出土石器実測図. 2 (1/2)



第 180 图 10号竖穴住居跡出土石器実測図. 3 (1/2)



第 181 图 10号竖穴住居迹出土石器实测图. 4 (1/2)



第 182 图 10 号竖穴住居跡出土石器実測図. 5 (1/4)

鐘崎式に伴うもので、胴部の張りが弱く口縁部も緩やかに外反するものがそれ以降に伴うものであろう。器面調整は巻貝条痕文が多くの場合に施されるが、ナデだけのものもあり、巻貝条痕文の後にそれをナデ消すのも少なくない。

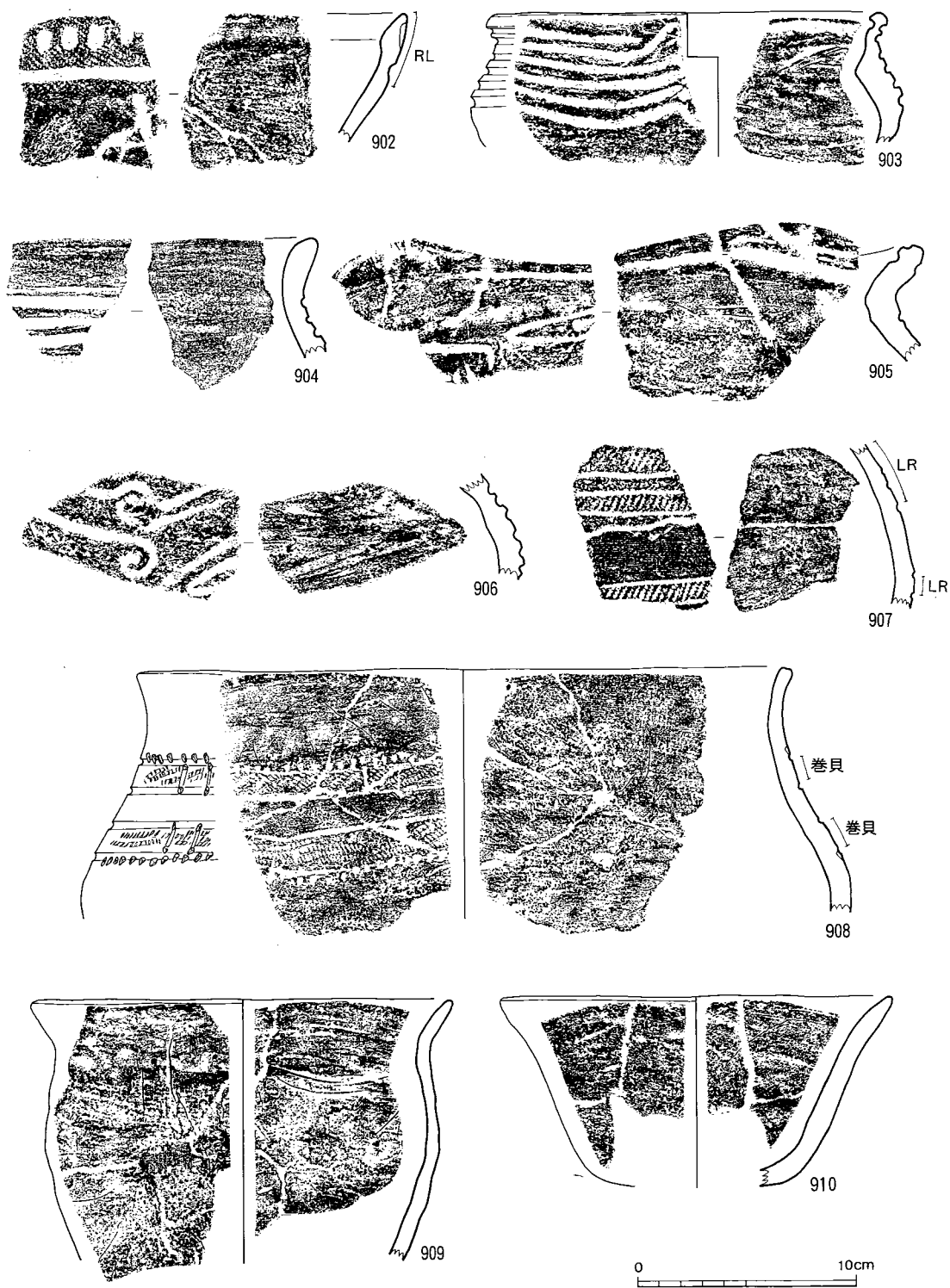
885～901の底部の中で、898には網代状の圧痕が残る。また、899・900のように巻貝疑似条痕文が施されそのまま残すものもある。

石器（第178～182図）石器は31点を図示した。203は腰岳産黒曜石製の剥離面を両面に大きく残す石鏃であるが、鈴桶技法によって得られた縦長剥片を素材とした剥片鏃ではない。206は使用による微細剥離痕のあるサヌカイト製の剥片。220は長軸両端部に敲打痕の残る敲石。222・223は安山岩質の石器。本来は同一個体で細長い形態であったものが、加工の途中で中央部付近で折れてしまい、その後さらに剥片剥離を行なっているため、現在では大きな剥離痕は連続的に対応するものの、両者はきっちりと接合はしない。両面ともに研磨が施され、両側縁ともに階段状剥離と擦れて光沢のある摩滅痕が残る。この両側縁の状況から楔として使用されたことが想定されるが、それがこの細長い形態や特異な石材との間にどのような関連性があるのかは判然としない。207は蛇紋岩製のノミ状片刃石斧で、刃部はかなり刃こぼれしている。228・229は磨石。230は両面においてくぼみ石と磨石としての痕跡が、4側面には敲石としての敲打痕が残る多機能の石器である。232・233は様々な作業に使用された台石で、232には逆円錐形のくぼみがあり、先端部を加工するために連続的な回転を繰り返すことによってできたものである。

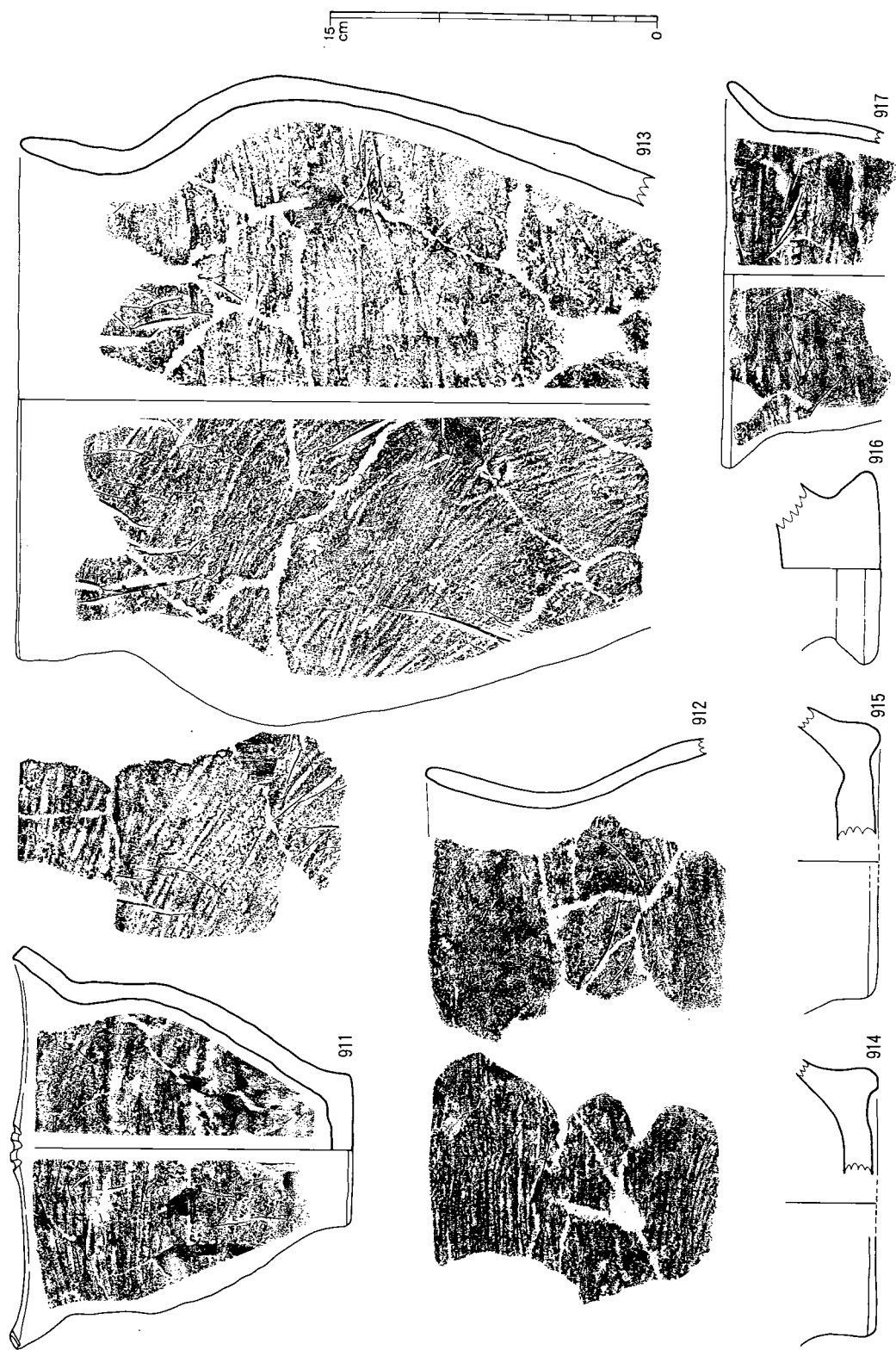
土製円盤（第282～287図）10号竪穴住居跡からは16点の土製円盤が出土した。ここではそのうちの6点を図示したが、いずれも文様はなく器面調整もナデばかりである。

11号竪穴住居跡（第157・158図）

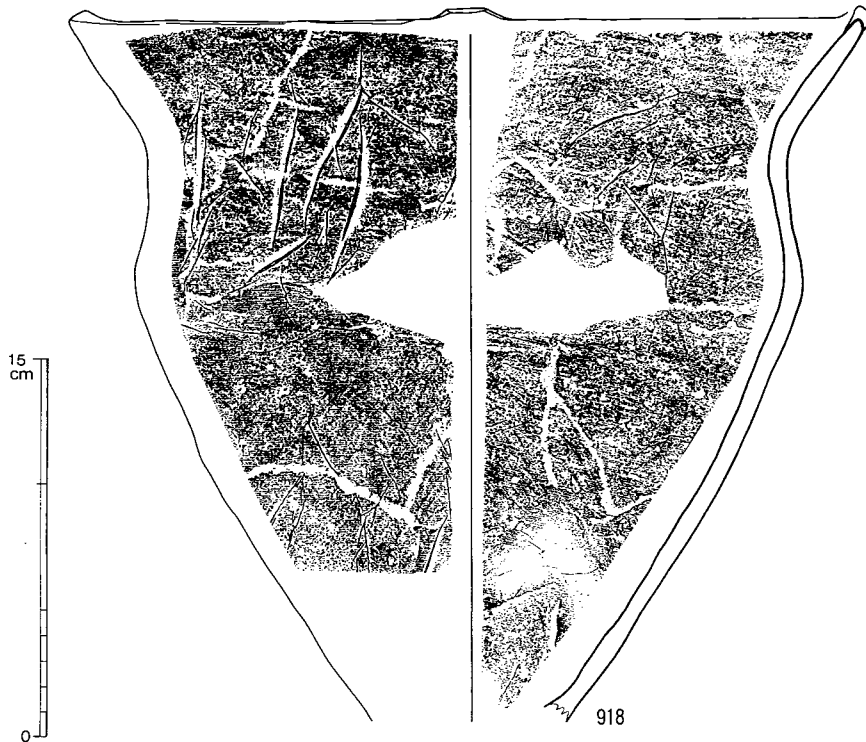
11号竪穴住居跡は12号竪穴住居跡を床面まで下げて検出された住居跡で、平面プランは推定6.0×5.6mの円形に近い隅丸方形になろうか。南西隅に残った幅10～15cm、深さ10cm程度の周溝と12号竪穴住居跡の石組炉に切られた炉跡との位置関係から、このような数値の規模が推定される。炉跡（第158図）は先述したように、12号竪穴住居跡のそれに切られているため正確な規模はわからないが、およそ径70cm、深さ20cmの規模で、焼土は多量に詰まっていたが石組炉であったのかどうかは不明。支柱穴は径25～40cm、深さ40cmのものが4本で、炉跡を中央部とした場合そこからかなり離れた位置にあったと想定される。先述したように、本竪穴住居跡は12号竪穴住居跡を床面まで掘り下げた段階で確認されたものであるだけに、本来の床面もあるいはいくぶん12号竪穴住居跡によって削平されているとも考えられる。したがって、確実に11号竪穴住居跡出土の遺物といえるのは周溝と支柱穴から出土する遺物だけであるが、実際にこれらから出土した遺物は少量・小破片で、年代の決め手になるようなものはなく図示していない。



第 183 图 12号竖穴住居跡出土土器実测图. 1 (1/3)



第 184 图 12号竖穴住居跡出土土器実測図. 2 (1/3)

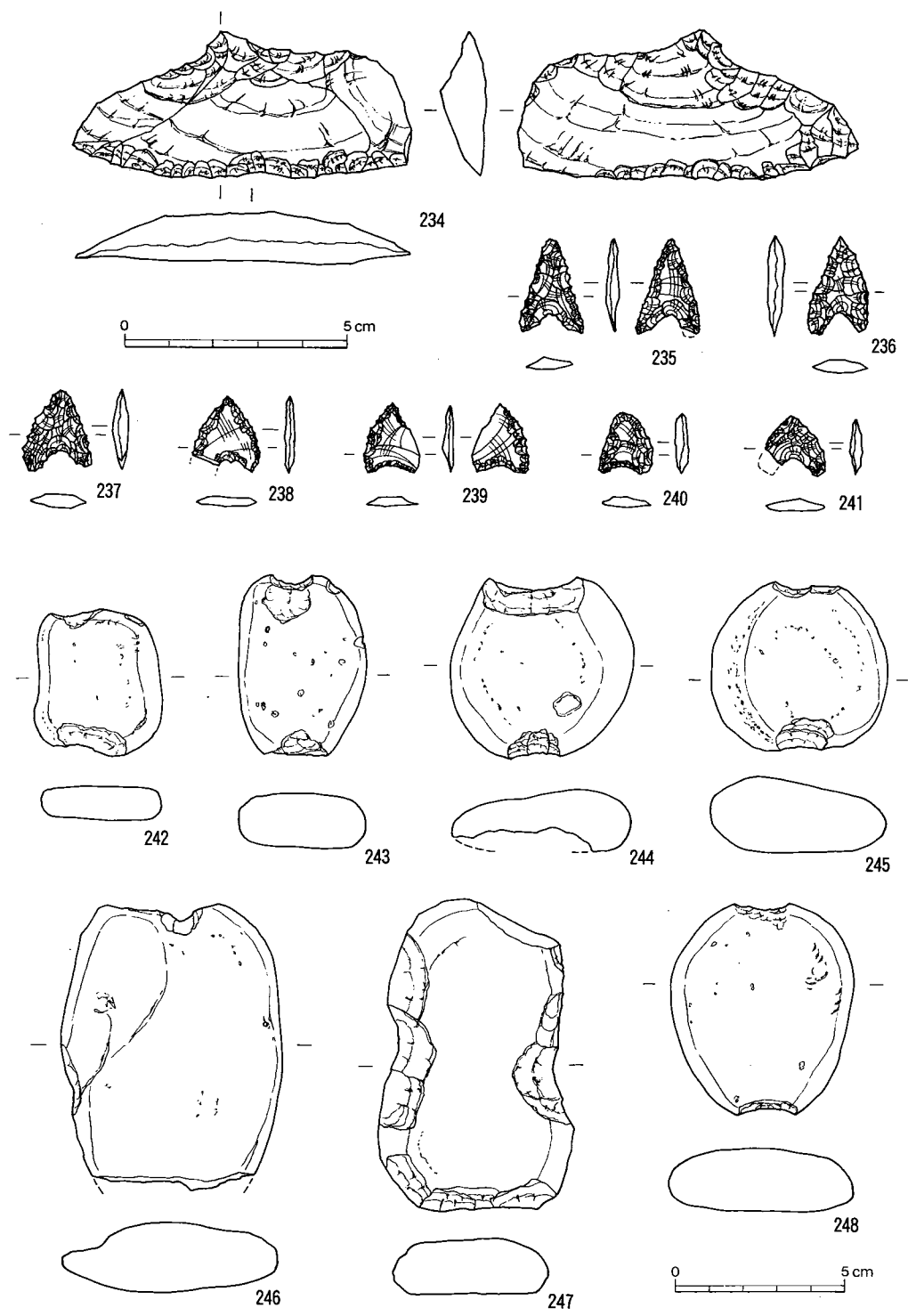


第 185 図 12号竪穴住居跡出土土器実測図.3 (1/3)

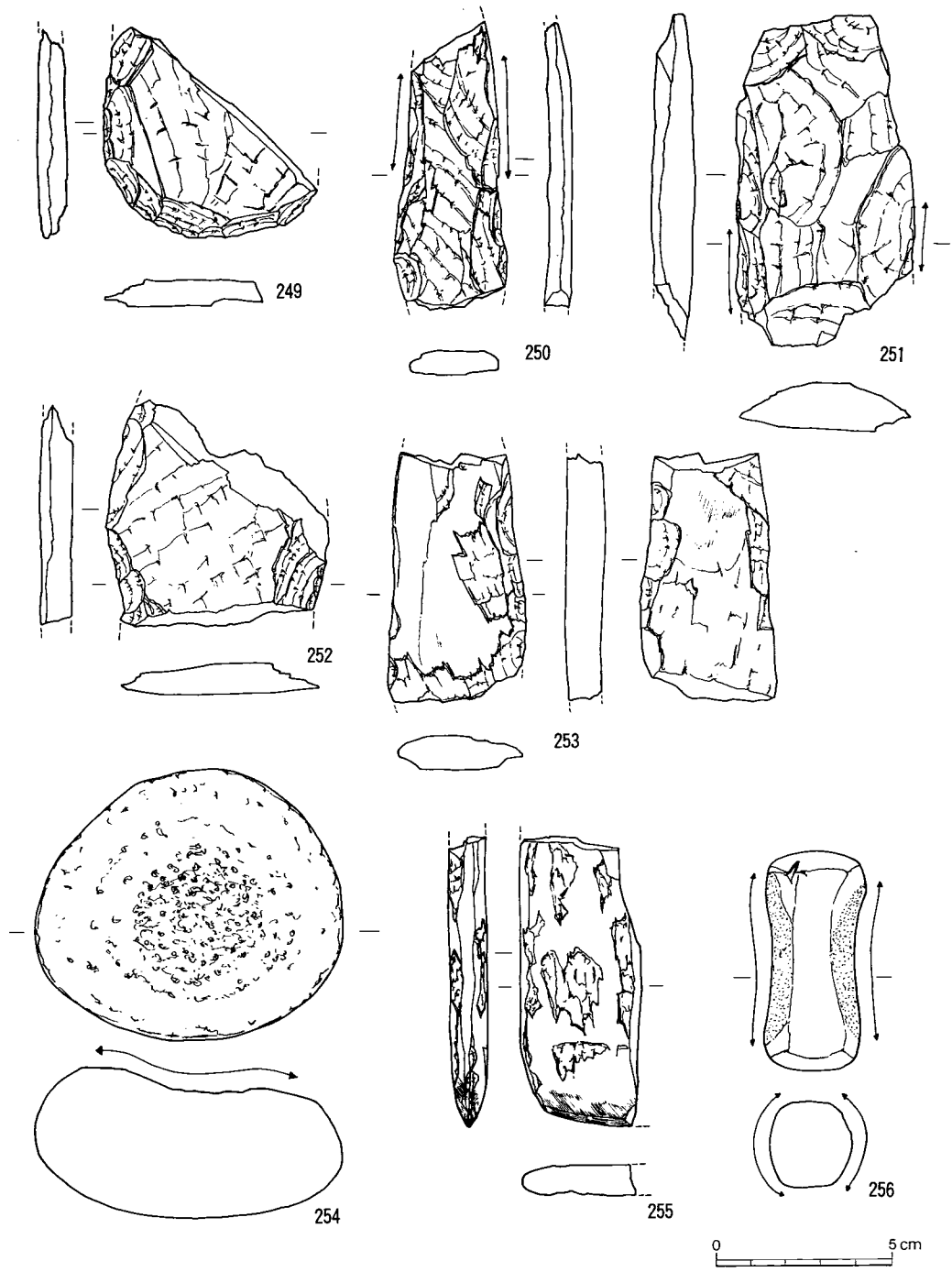
12号竪穴住居跡 (第157・158図)

12号竪穴住居跡は11号竪穴住居跡を切るもので、平面プランは7.3×6.8mの円形に近い隅丸方形を呈する。周溝は所々切れながらも幅15~20cm、深さ10~15cmで底面には凹凸が目立ち、ほぼ全周はするが南隅だけはズレて二重になる。支柱穴は径15~30cm、深さ40cmの4本で、中央部の石組炉(第158図)は65×65×20cmを測るが、この炉跡は底面に石が敷かず側面だけのものである。炉跡の周辺では10号竪穴住居跡の炉跡まで広がる厚い焼け面が検出されたため、熱残留磁気測定を実施したが、その結果については「IV 分析と復原 2. 2号(9~12号)竪穴住居跡炉跡と周辺焼土の熱残留磁気測定」で示している。遺物の出土量は9・10号竪穴住居跡と比べたら明らかに少ないが、9・10号竪穴住居跡と切り合っている部分については遺物の帰属遺構の明確な分類が不可能なため、「10・12号竪穴住居跡出土遺物」として一括した。なお、12号竪穴住居跡からは確実に土製円盤といえるものは出土していない。

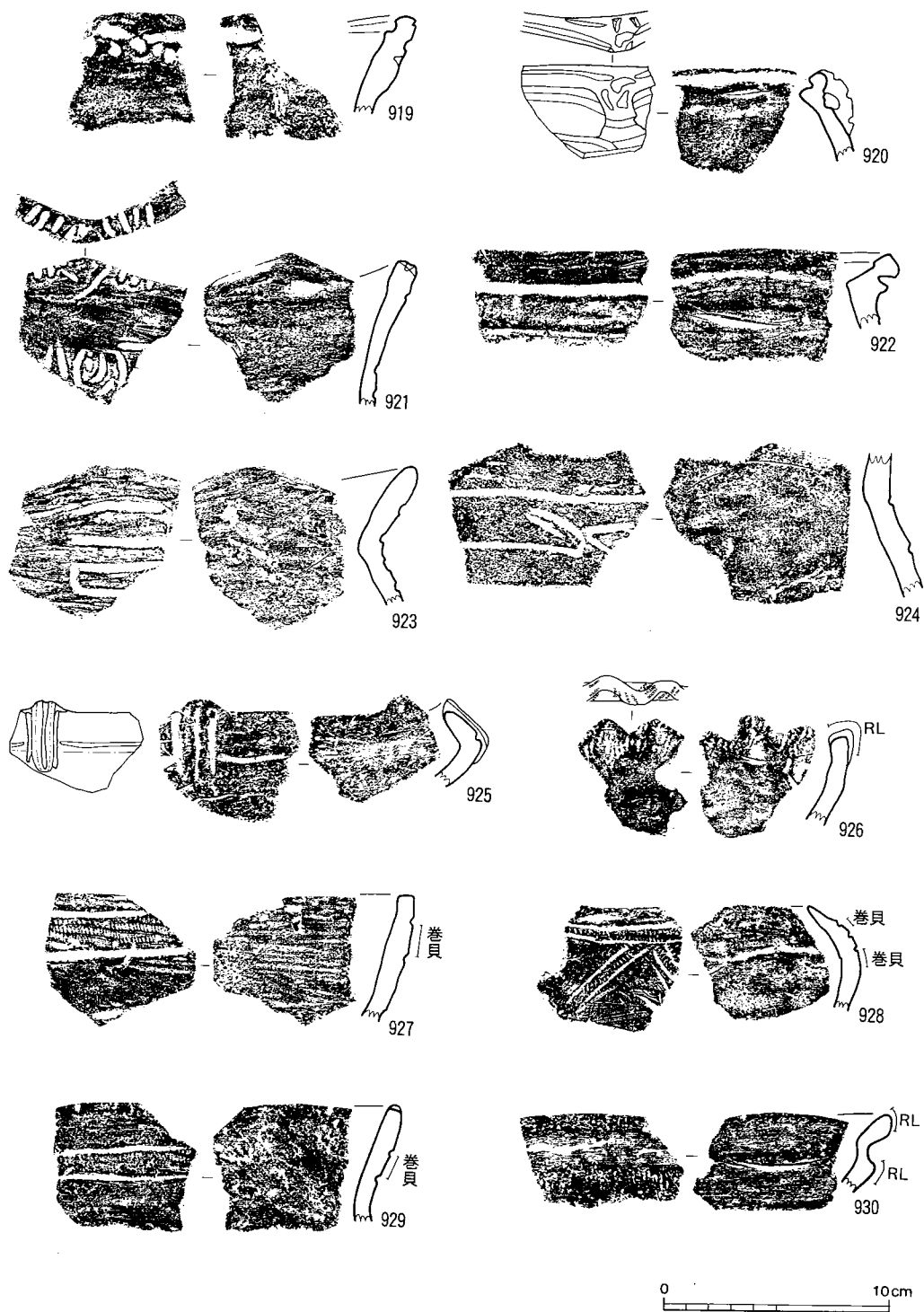
土器(第183~185図)確実に12号竪穴住居跡出土といえる土器は少なく、ここでは17点を図示した。902は小池原上層式で、RLの後に沈線文が施される。903~906は鐘崎式の中でも比較的新しく位置づけられよう。907・908は鐘崎式と西平式の間でもより鐘崎式に近い一群であ



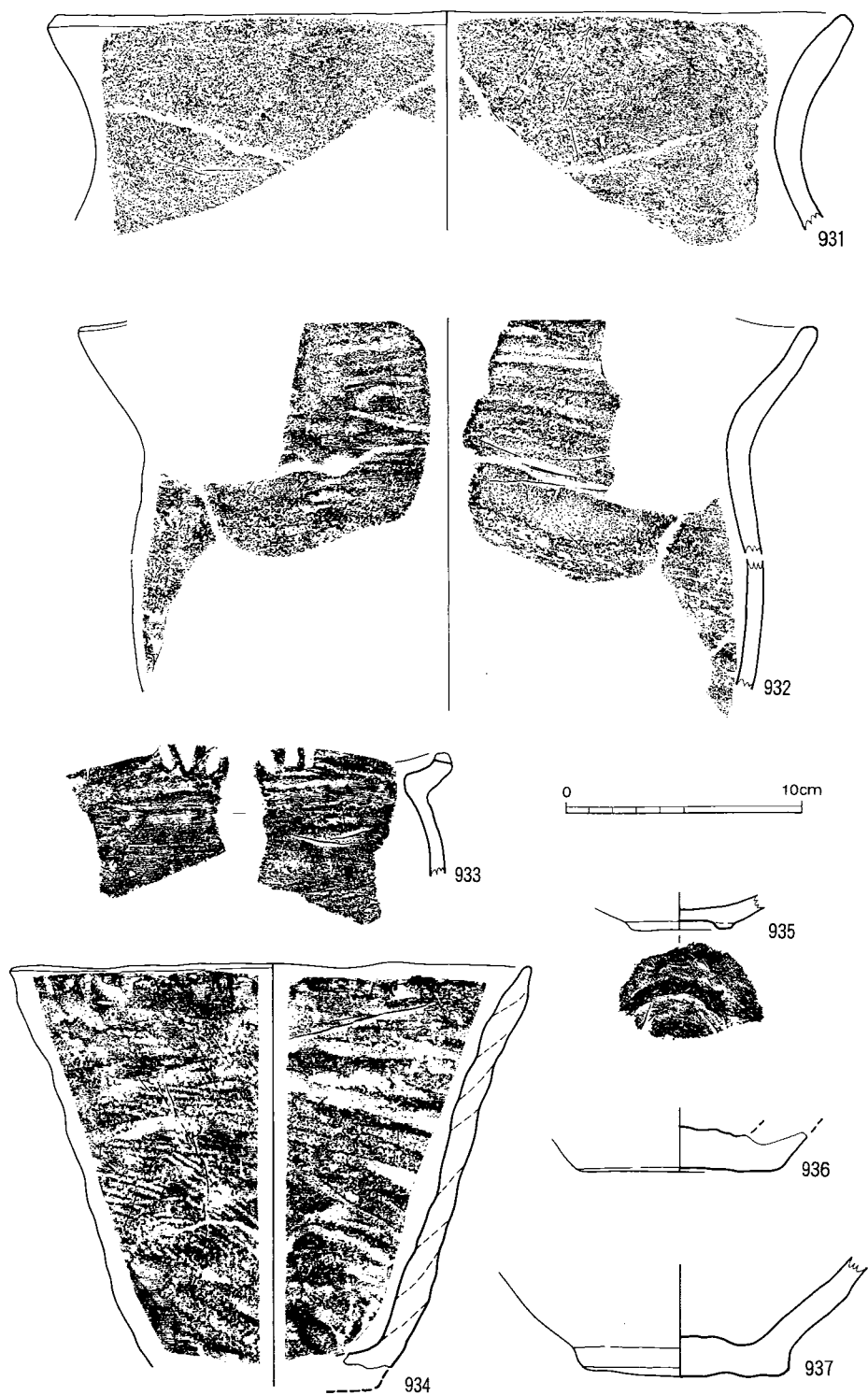
第 186 図 12号竪穴住居跡出土石器実測図. 1 (234~241は2/3 242~248は1/3)



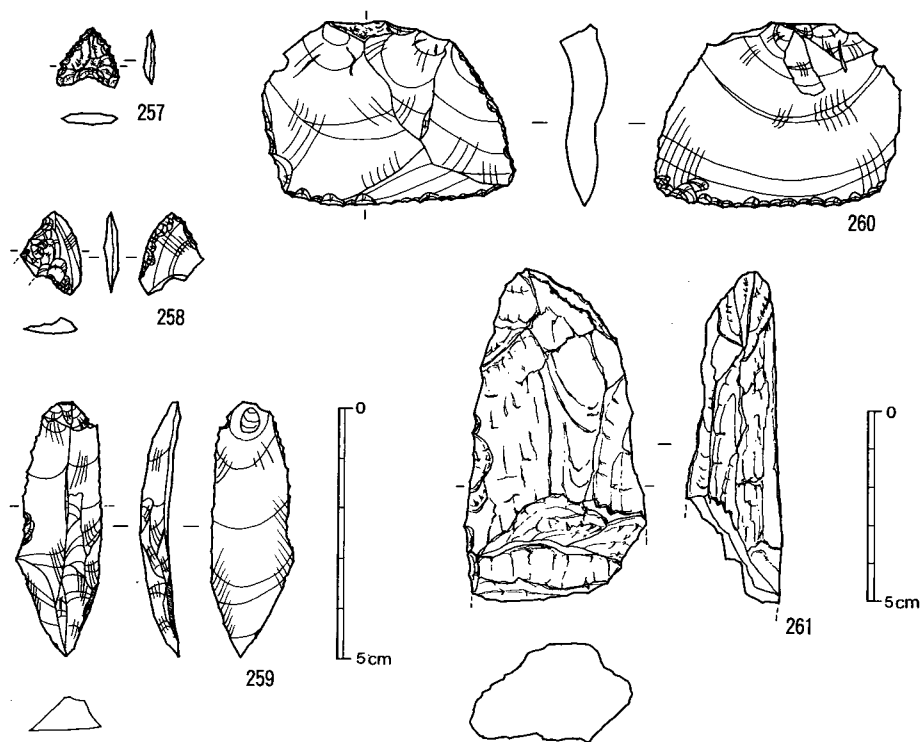
第 187 图 12号竖穴住居迹出土石器实测图. 2 (1/2)



第 188 图 10·12号竖穴住居跡出土土器実測图. 1 (1/3)



第 189 图 10·12号竖穴住居跡出土土器实测图. 2 (1/3)



第 190 図 10・12号竪穴住居跡出土石器実測図 (1/3)

る。908については、横位の沈線文→横位の刺突文・巻貝疑似縄紋→縦位の沈線文→縦位の沈線文を切る刺突文の順で施文される。911や918は鐘崎式以降に属する無文深鉢の典型的な形態である。

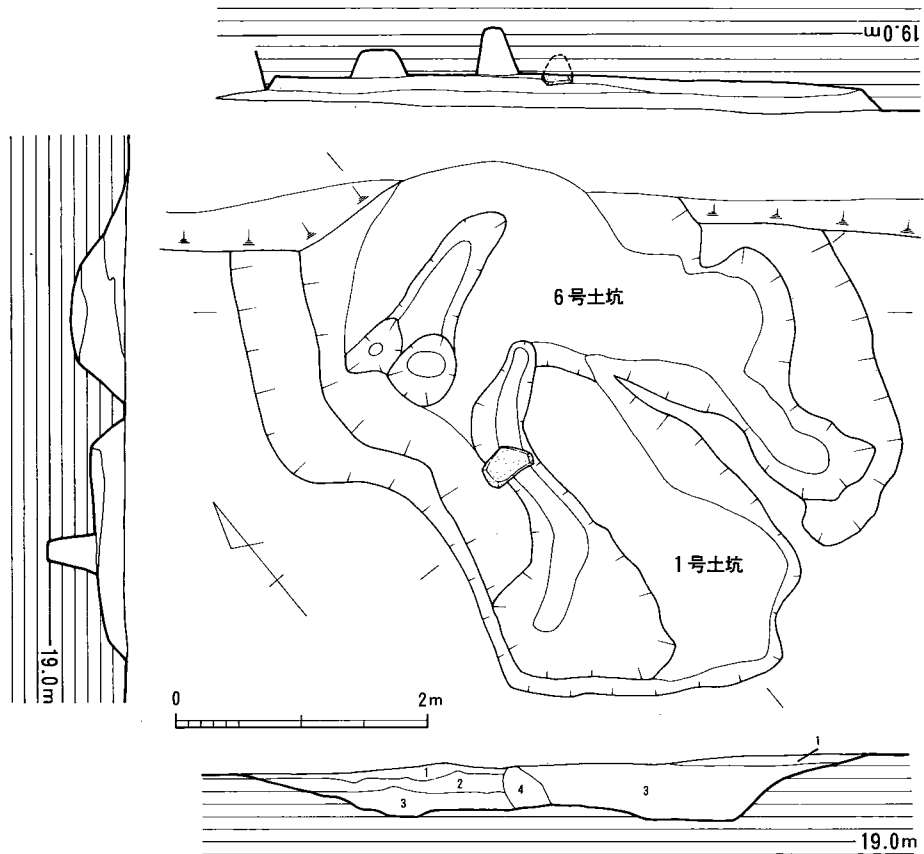
石器 (第186・187図) 石器は23点を図示した。234は大きな横長剥片を素材とする。235は腰岳産黒曜石製の剥離面を両面に大きく残す石鏃であるが、鈴桶技法によって得られた縦長剥片を素材とした剥片鏃ではない。236も腰岳産黒曜石であるが、ほぼ全面に細かい剥離痕が見られる。239のように姫島産黒曜石の中には両面に大きな剥離痕を残すものが少なくないが、いずれも定型的な剥片剥離技術によって得られた剥片素材ではなく、剥片鏃と呼ぶにふさわしいものではない。249～252は結晶片岩製の打製石斧で、250の両側縁にはかなりの摩擦痕が窺えるが、これは柄を装着した際の緊縛痕と考えられる。253は結晶片岩製の磨製石斧で、ほぼ全面に亘ってかなり丁寧な研磨が施される。256は両側縁が擦れたような感じでわずかに内湾するが、果たして使用による摩擦なのか、それとも意図的に研磨等を施したものか明瞭でないが、それが側縁全体に亘っていることは注目されよう。

10・12号竪穴住居跡出土遺物 (第188～190図)

ここでは「2号竪穴住居跡」からは出土しているが、果たしてどの竪穴住居跡から出土した遺物なのか明確に位置づけることができない遺物を一括して、「10・12号竪穴住居跡出土遺物」とした。

土器（第188・189図）919は小池原上層式。920～924は鐘崎式。925～930は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群。925は粘土紐が貼り付けられた後に、縦位や横位の沈線文が施される。926には細い粘土紐が蛇行して貼り付けられ、その後にRLが施される。930の口縁部と胴部の屈曲部には粗くRLが施される。931～934の無文土器のうち、933は鐘崎式に、934はそれ以降に位置づけられる。

石器（第190図）259は鈴桶技法によって作られた腰岳産黒曜石製の縦長剥片で、剥片鏃の素材になる。260は使用による微細剥離痕のある姫島産黒曜石の横長剥片。261はかなり厚みがあり研磨痕もないことから、蛇紋岩製磨製石斧の未製品と考えられる。



第191図 1・6号土坑実測図（1/30）

(2) 土 坑

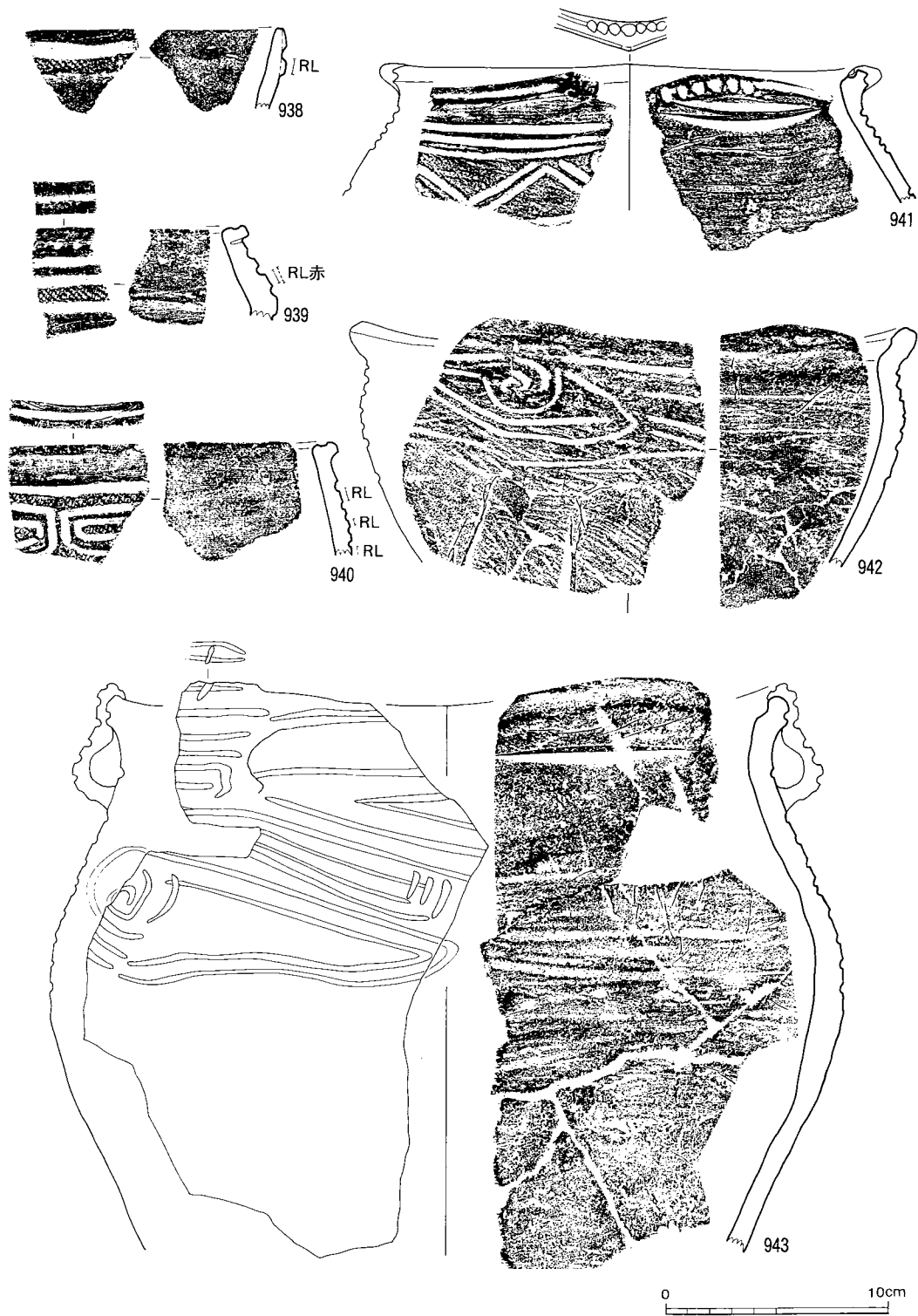
縄紋時代に属する土坑は6基検出された。いずれも不定形で性格の判然としないものばかりであるが、竪穴住居跡と同様に多くの遺物が出土している。ただし、それらは基本的には遺棄された状態の出土で、遺構の本来の機能を反映したようなものではなく完形品もほとんどない。

1号土坑 (図版17 第191図)

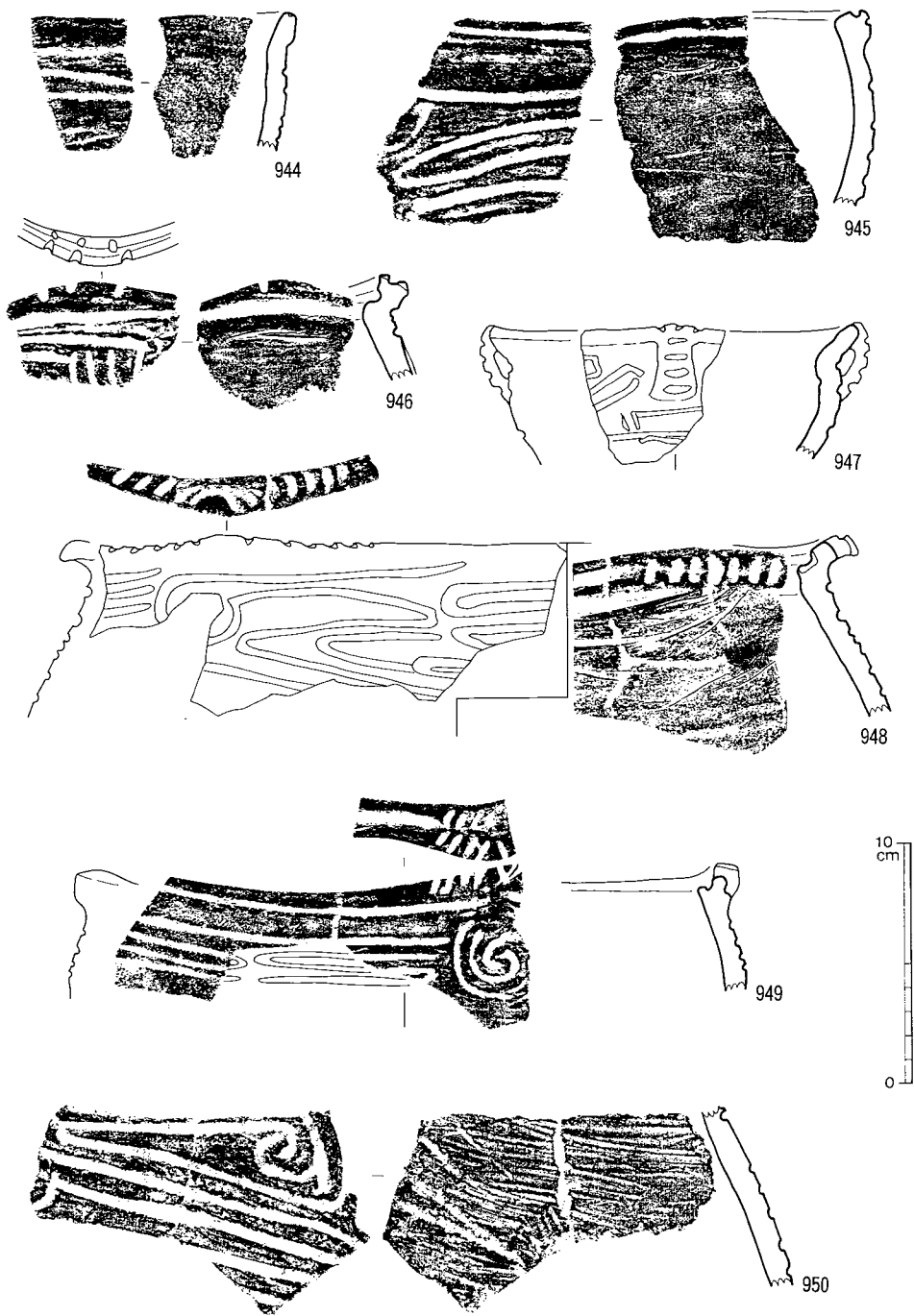
1号土坑は調査区北西部IV F区に位置し、2号土坑の南東3m、1号竪穴住居跡の北西2mに近接するが、このあたりは後世の削平が著しいところでピットもほとんど残っていない。本土坑の調査は6号土坑を切るという認識で進められ、規模は1.7×1.2×0.25mで不定形を呈する。底面は1.4×0.5mと細長くなる。埋土は大きく3層に分かれるが、いずれも小礫が多量に含まれ、下位になるにつれて粘質性が高くなる。層位別に遺物の取り上げを試みたが、縄紋土器は型的にうまく分離できなかったため、実測図は一括して図示した。最上部の1層においてのみ弥生土器(第286図)が出土しているが、2・3層からは縄紋土器しか出土しておらず、本土坑の形成年代に問題を残す。調査途中において一部埋土が類似していることから、本土坑は6号土坑とは本来一つの遺構ではないかという疑念が生じていた。しかし、遺構の検出時点においては1号土坑が6号土坑を切っていたという明確な所見と、1号土坑の最上部からは弥生土器が出土するという事実から、両者には先後関係が存在していたという認識に至った。遺物はパンケース8箱が出土した。縄紋土器については小池原上層式から三万田式まで継続的に出土しているが、鐘崎式がやや多い程度で、量的な差はそれほどない。なお、弥生土器については「3 弥生時代の遺構と遺物」において図示・説明している。

土器(第192~198図) 縄紋土器は46点を図示した。938は小池原上層式、939~953は鐘崎式、954~958は鐘崎式から西平式の間に属するもの、959~971は小池原上層式~西平式の間に属する無文土器、972~975は西平式と太郎迫式、976~983は三万田式にそれぞれ属する。939・940の鐘崎式は沈線文の後にRLが施され、それから939については赤色塗布が行われる。ここで図示した鐘崎式については一時期に限定されるものではなく、多少の時間幅が想定される。器面調整には多くの場合巻貝条痕文が施される。無文土器961・962の波頂部には、鐘崎式有文土器の波頂部と同じ文様が施される。底部968~971のうち969は西平式・太郎迫式に属しよう。971のように底部外面にまで巻貝条痕文を施すものもある。973は西平式であるが、台の付く四角形浅鉢の口縁部であろうか。2つの突起と断面三角形の隆帯文を付けた後に沈線文が施され、それからRLになる。かなり特殊な器形になるであろう。これを除いた972~975は西平式でも新しく位置づけられ、太郎迫式に属しよう。西平式・三万田式の器面調整はナデのほうが多く、研磨は量的には少ない。

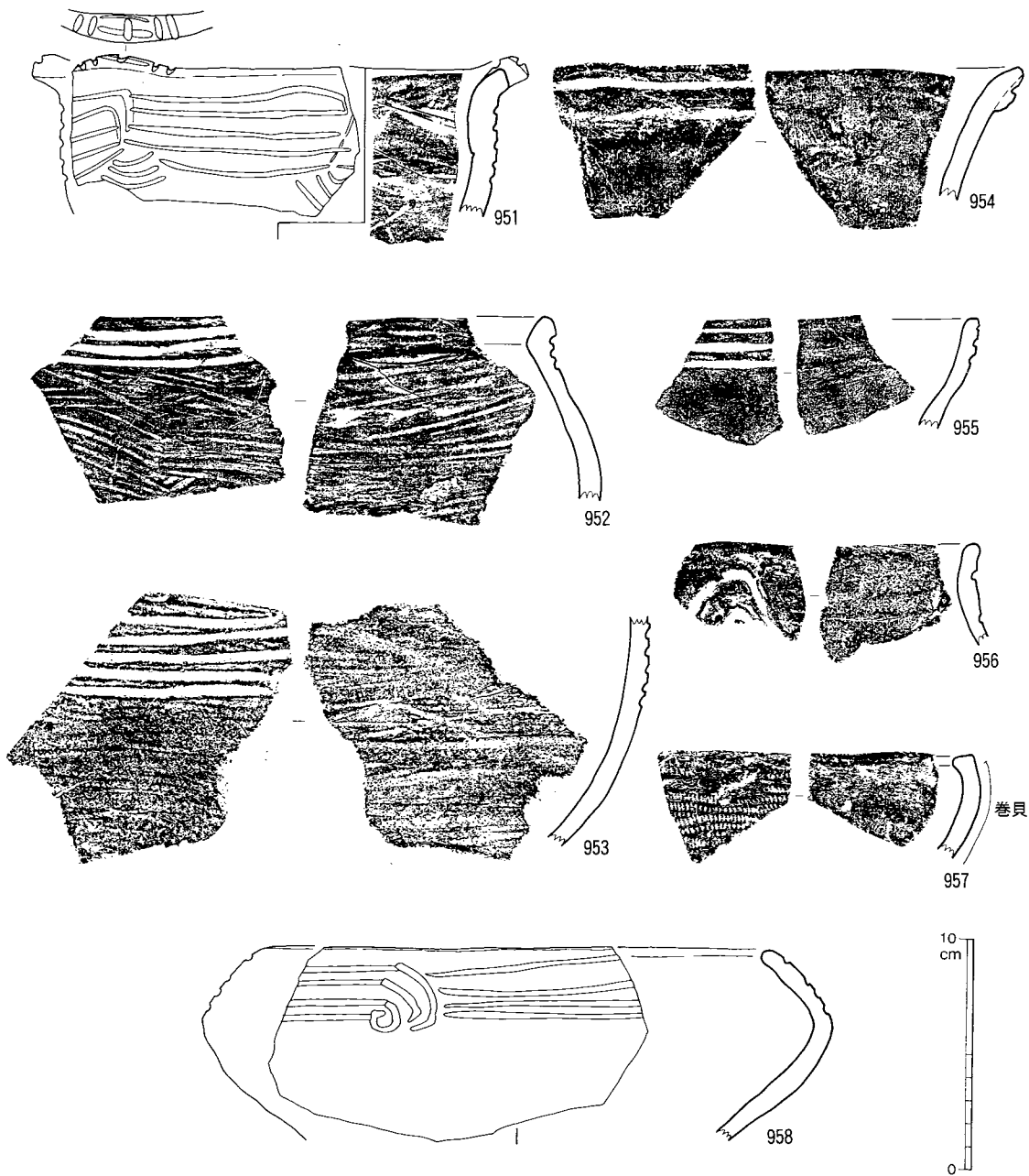
石器(第199図) 1号土坑からは12点の石鏃、2点の磨製石斧、2点の打製石斧、石錘・くぼ



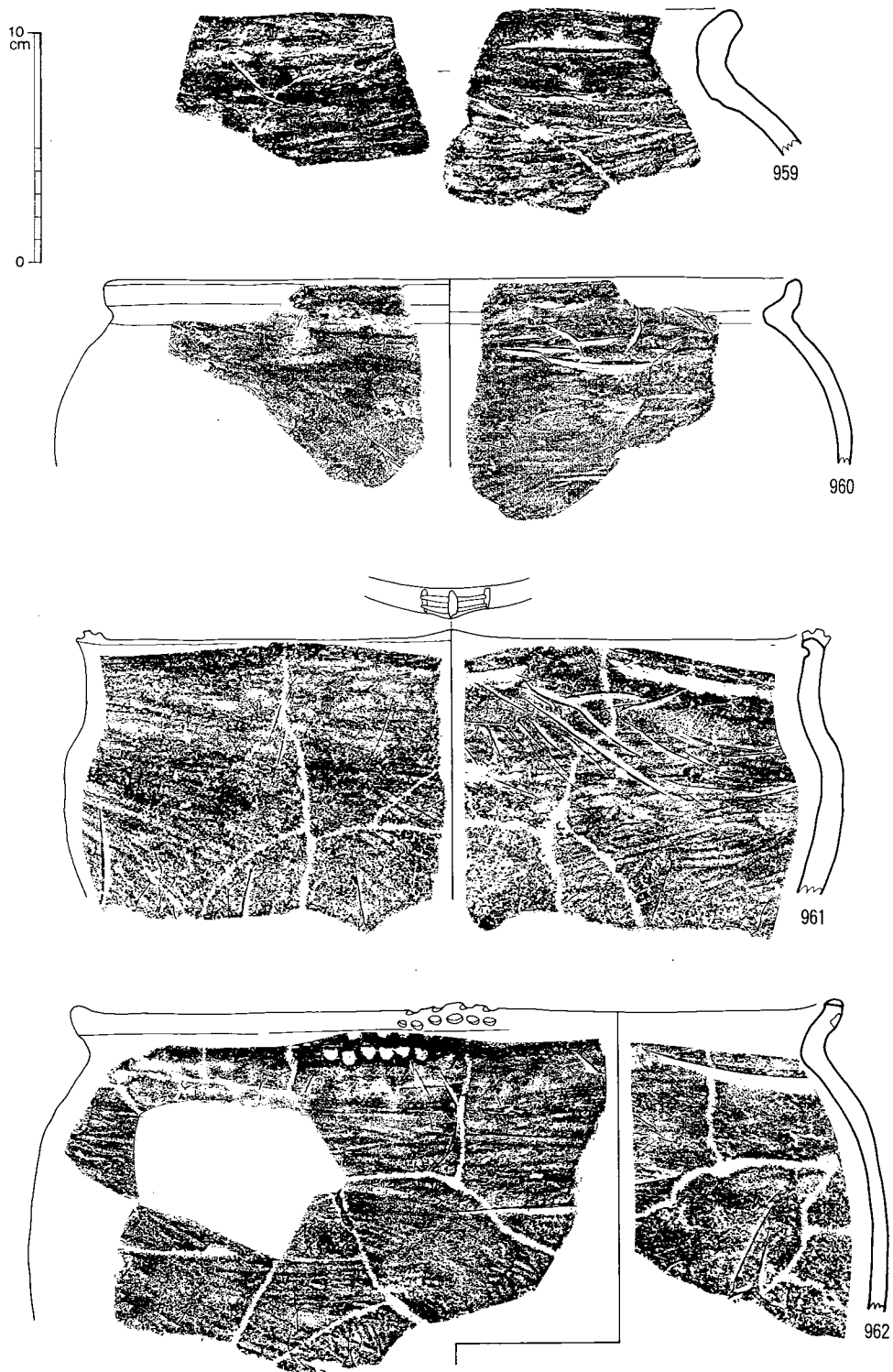
第 192 图 1 号土坑出土土器实测图. 1 (1/3)



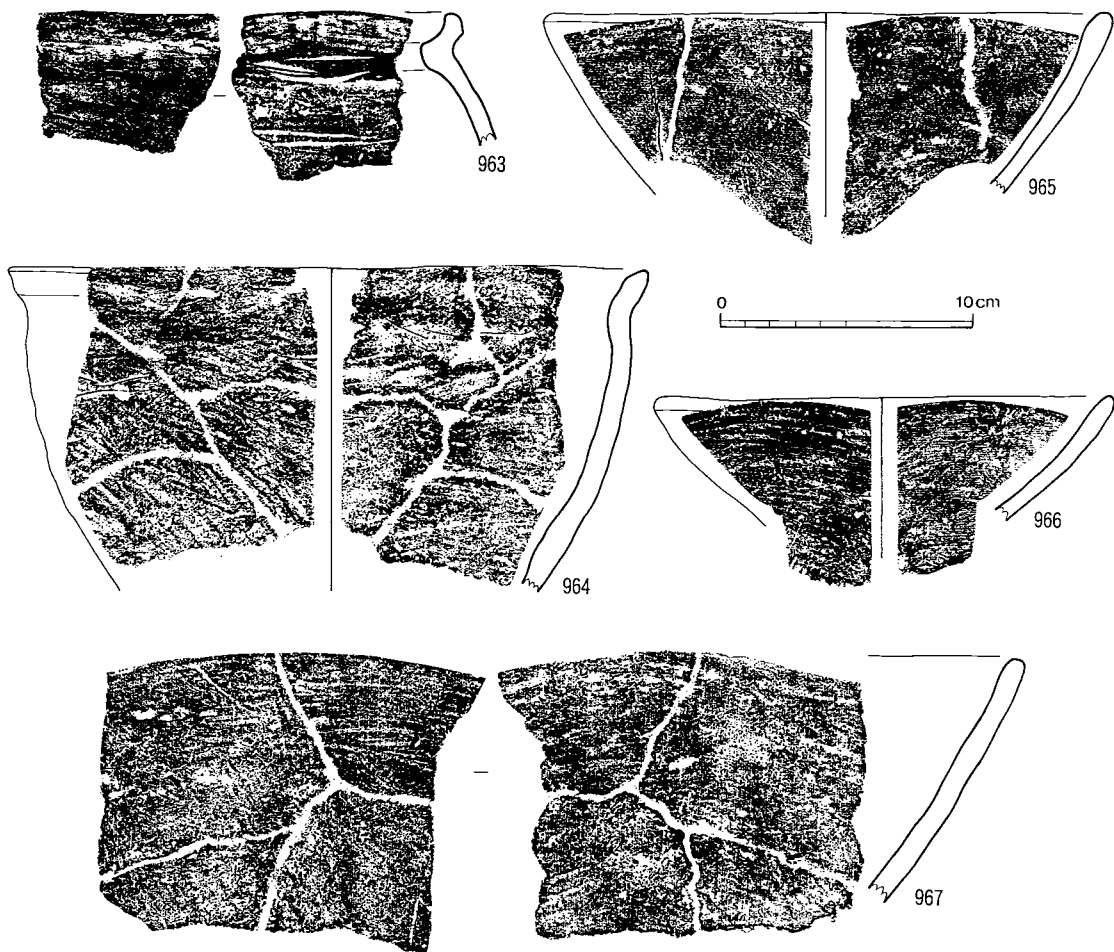
第 193 图 1 号土坑出土土器实测图. 2 (1/3)



第 194 图 1 号土坑出土土器实测图. 3 (1/3)



第 195 图 1 号土坑出土土器实测图. 4 (1/3)



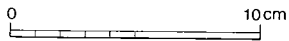
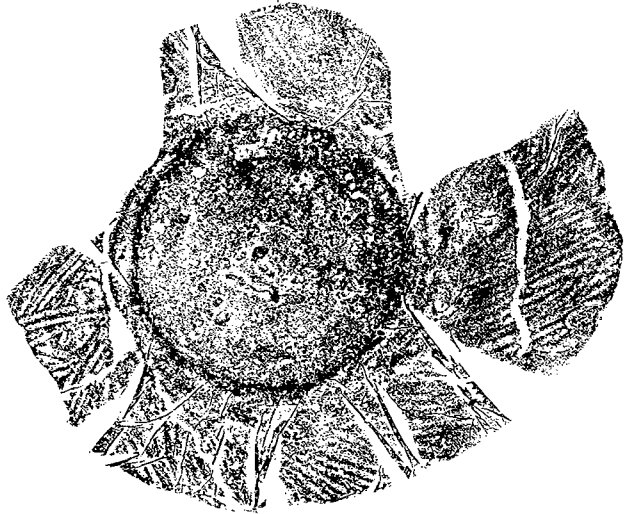
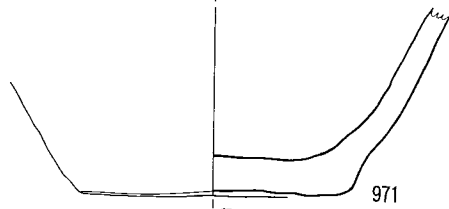
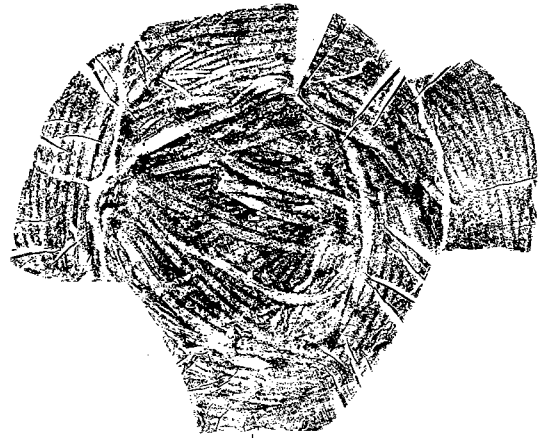
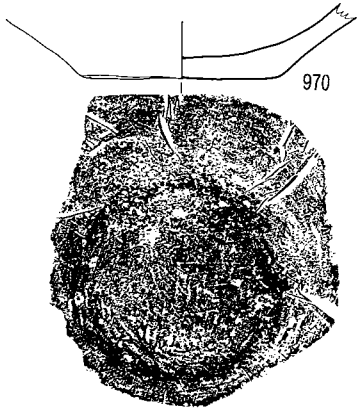
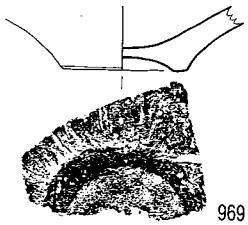
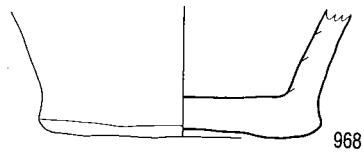
第 196 図 1号土坑出土土器実測図. 5 (1/3)

み石がそれぞれ1点ずつ出土した。262・263は腰岳産黒曜石で、前者は鈴桶技法による剥片鏝である。272の姫島産黒曜石の主要剥離面を大きく残すが、定型的な剥片剥離技法によるものではない。274・275の磨製石斧はいずれも剥離痕が多く残り、研磨された部分は少ない。277の打製石斧の側縁には柄を装着する際に生じる緊縛痕のような擦れた摩滅の痕跡が観察される。

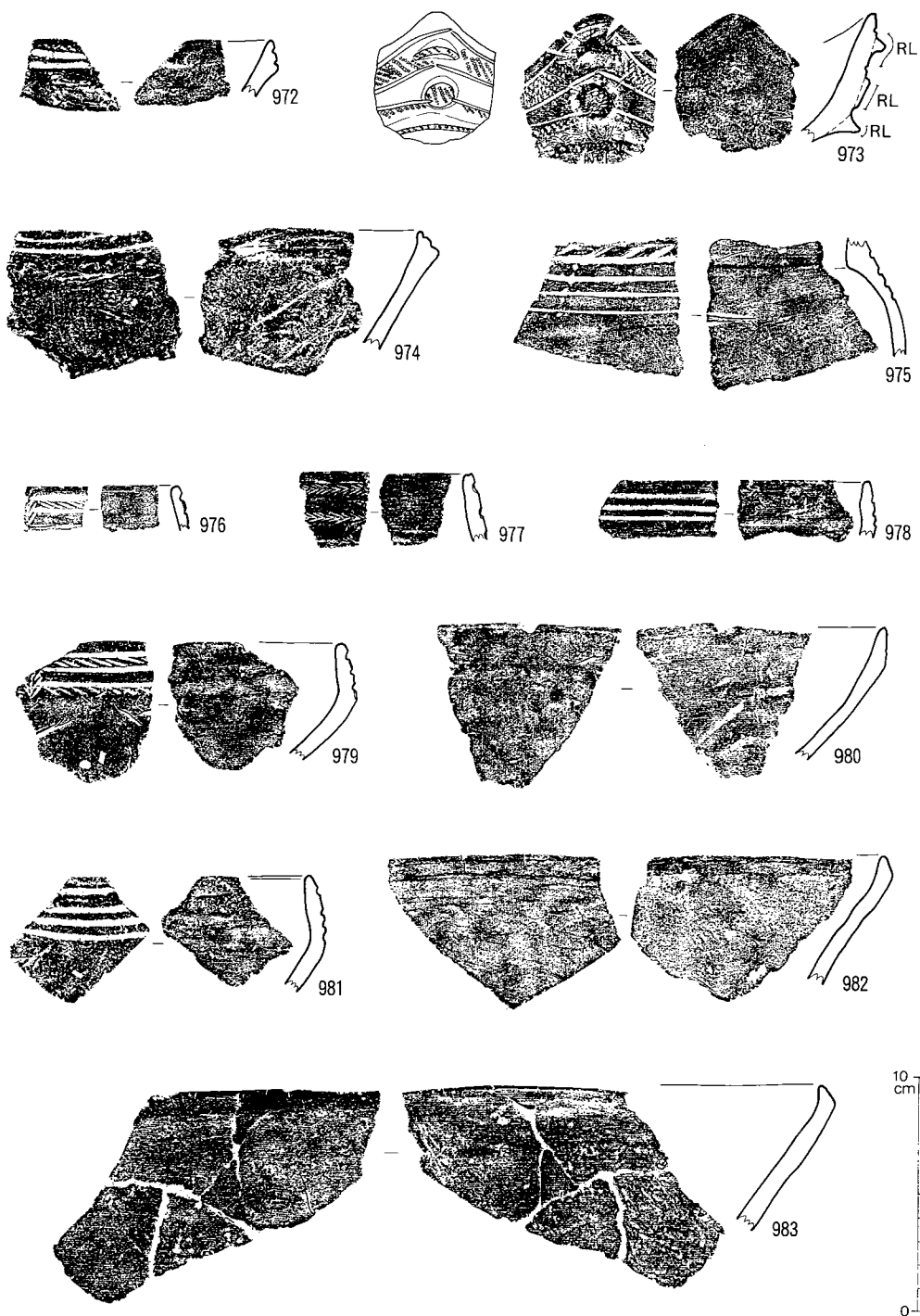
土製円盤（第280～285図）土製円盤は3点出土したが、そのうち図示した2点は無文である。87は中央部の穿孔を途中でやめている。

2号土坑（図版18 第200図）

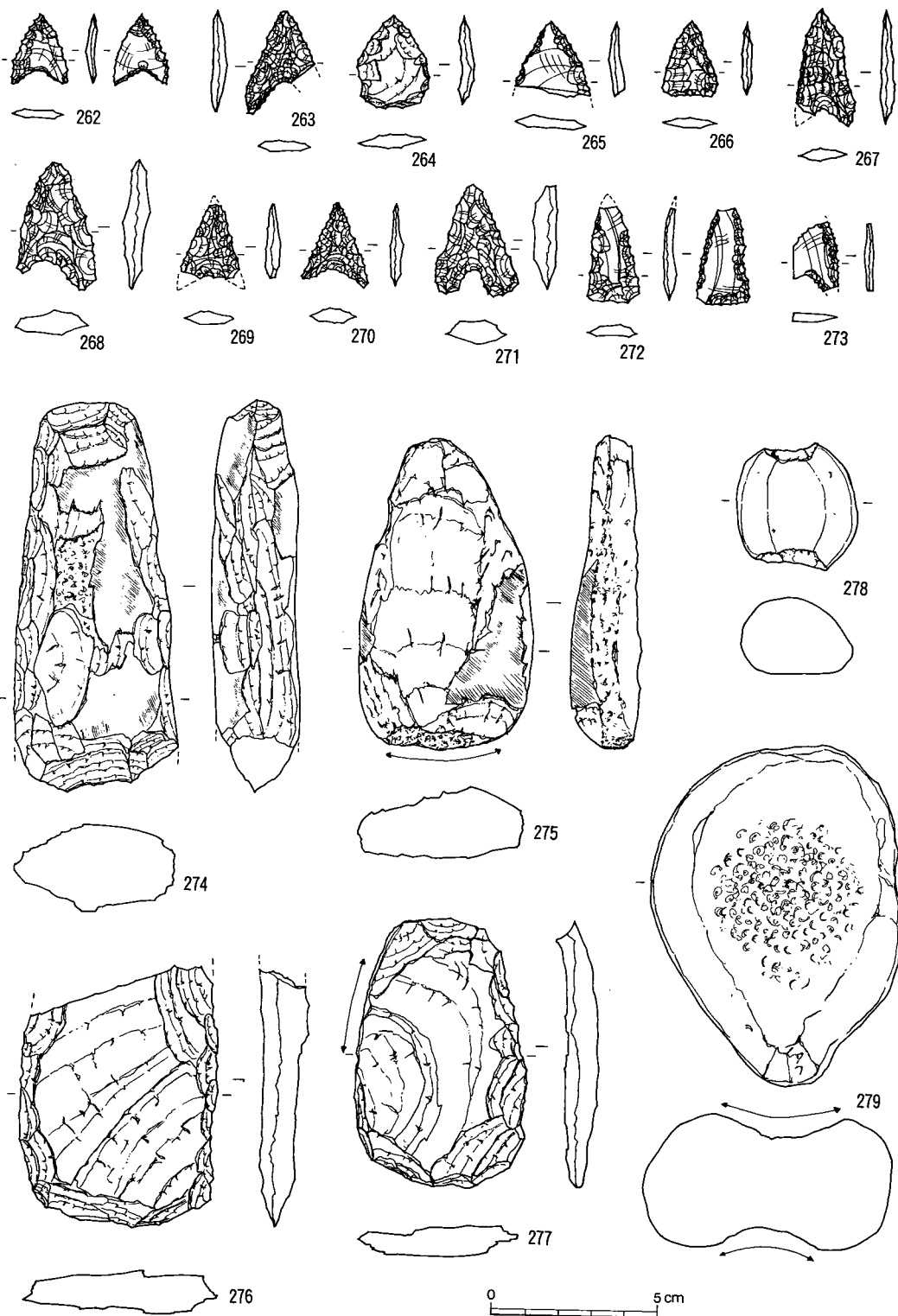
2号土坑は調査区北西端部ⅢF区に位置し、6号土坑の北西3mに近接する。このあたりは本遺跡において削平のもっとも著しい部分であり、周辺にはピットが数基見られるだけである。



第 197 图 1 号土坑出土土器实测图. 6 (1/3)

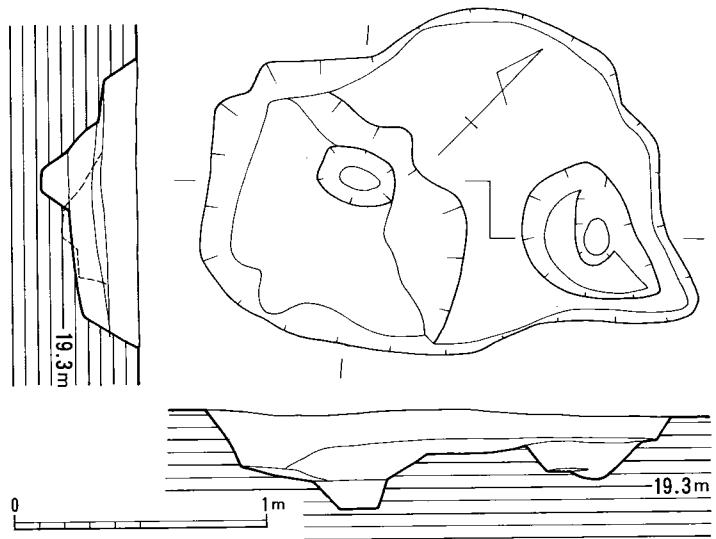


第 198 图 1 号土坑出土土器实测图. 7 (1/3)



第 199 图 1 号土坑出土石器实测图 (262~273は2/3 274~279は1/3)

規模は2.1×1.4×0.4mを測り、平面プランは不整楕円形。底面も一定ではなく、柱穴状の落ち込みもある。壁の立ち上がりは緩やかに開き、埋土には拳大から人頭大までの礫が含まれるが量的には多くない。遺物は少なくパンケース2箱で、縄紋土器については小破片ばかりで摩滅も著しい。遺棄されたのではなく、流れ込みによるものであろう。遺構の形態や遺物の出土状況から本遺跡の性格を想定



第200図 2号土坑実測図(1/30)

することは難しい。なお、土製円盤は出土していない。

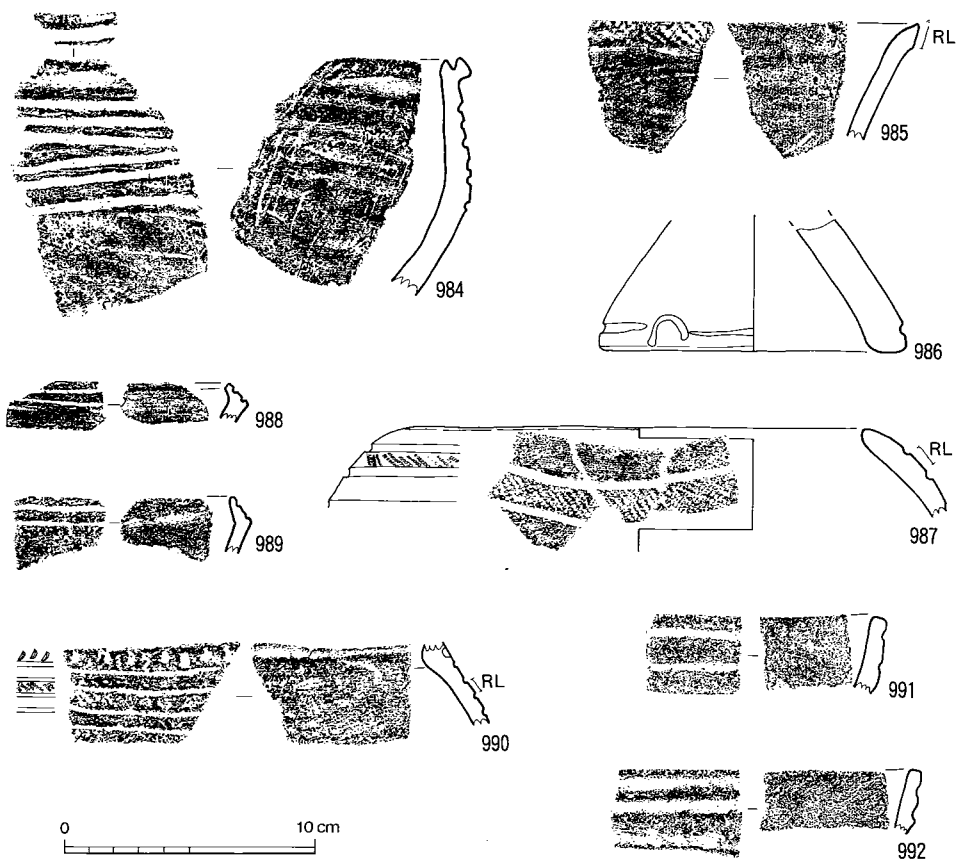
土器(第201図) 土器は9点を図示したが、いずれも小破片で摩滅を受けている。984は鐘崎式、985~987は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群、988~990は太郎迫式、991は三万田式、992は鳥井原式にそれぞれ属しよう。

石器(第202図) 石器は石鏃3点、石錘1点、くぼみ石1点、台石2点を図示した。くぼみ石や台石は拳大から人頭大までの礫と混在の状態では出土しており、一見しただけでは遺物なのか自然礫なのか判別できない状態であった。

3号土坑(図版18 第203図)

3号土坑は調査区中央部西寄りのIV E区に位置し、11・12号竪穴住居跡と切り合っていたはずであるが、著しい削平により現時点での切り合い関係は不明。4号土坑とは平行するように南西1mに、1号炉跡とは南東5mに近接する。平面プランは1.5×0.9mの長方形に近かったため、遺構の検出時点では土壙墓の可能性が想定された。しかし、底面は長方形の平坦面になるのではなく高さ15~45cmまでのいくつかの段がつき、また埋土も黒褐色粘質土の自然堆積が確認されたため、性格のよくわからない土坑という結論に至った。4号土坑とは長軸が平行しているので、あるいは年代的に平行した関連遺構ではないかという可能性も想定されたが、遺構の形態や出土遺物の年代的差から別個のものであることが判明した。出土遺物は少なくパンケース2箱で、縄紋土器については小破片ばかりで摩滅もしている。

土器(第204図) 土器は11点を図示したが、いずれも小破片で摩滅も著しい。994は小池原上

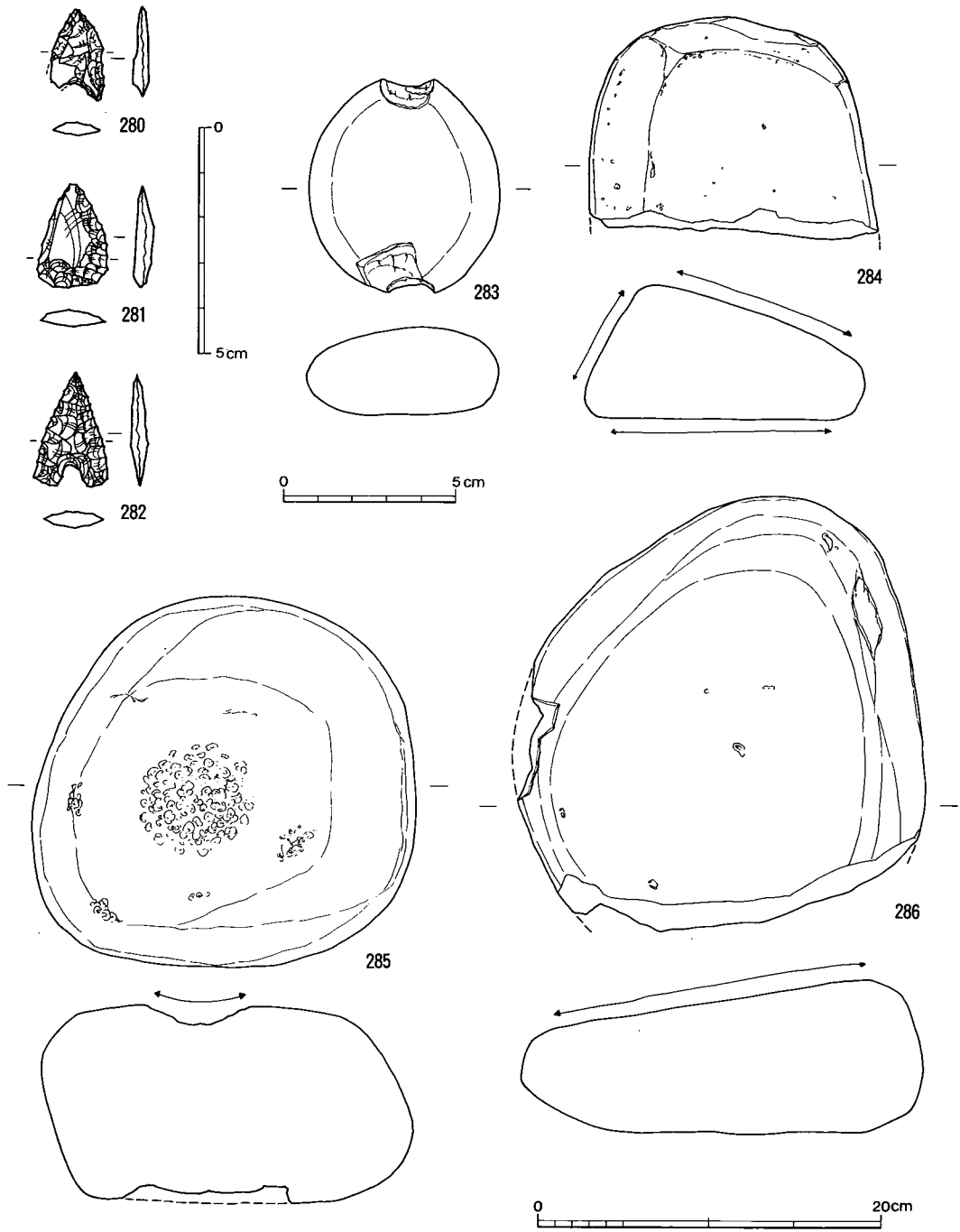


第 201 図 2 号土坑出土土器実測図 (1/3)

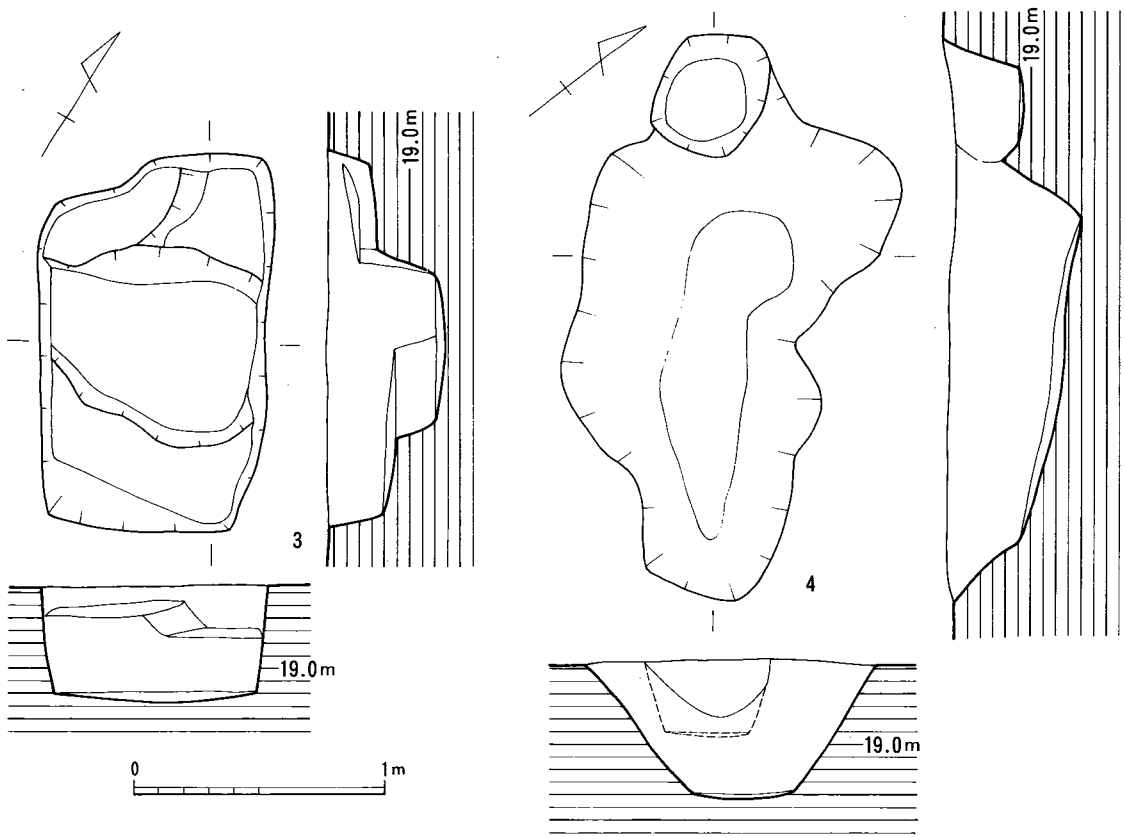
層式、993は鐘崎式、996・997は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群。998・999は太郎迫式、1000～1002は三万田式、1003は晩期の刻目突帯文土器である。995については、口縁端部の外側と内側の両端に小さな刻みが施され、口縁部は直線的に内傾するという特異な形態を有する。巻貝条痕文という器面調整から判断しても、鐘崎式以降西平式以前という位置づけはできるが、それ以上に細かい位置づけは難しい。993の口縁端部には、沈線文を施した後にその沈線文内に刺突文が施される。1003は本遺跡で唯一出土した刻目突帯文土器である。器面調整は二枚貝による条痕文で、胎土に多くの雲母が含まれる。

石器 (第207図) 石器も少なく、図示したのは石鏃2点とくぼみ石1点だけである。287の石鏃は姫島産黒曜石で全長3.5cmと大きいのが、未製品ではなくこれで完成品である。

土製円盤 (第280～285図) 出土した土製円盤は1点だけで器面調整はナデ (79)。ほとんど摩滅してなく遺存状態は良好。



第 202 图 2 号土坑出土石器实测图 (280~282は2/3 283・285は1/3 284・286は1/4)

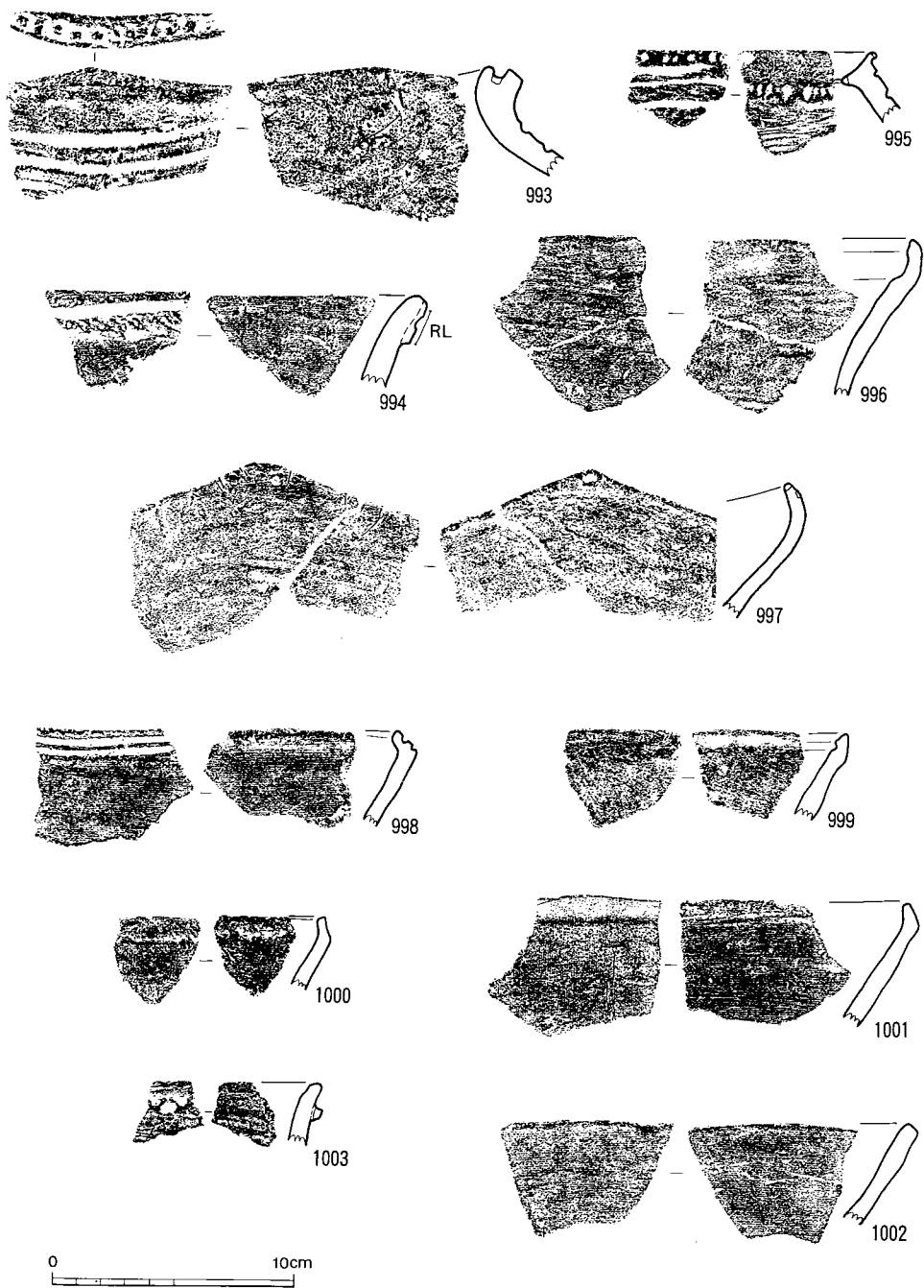


第 203 図 3・4号土坑実測図 (1/30)

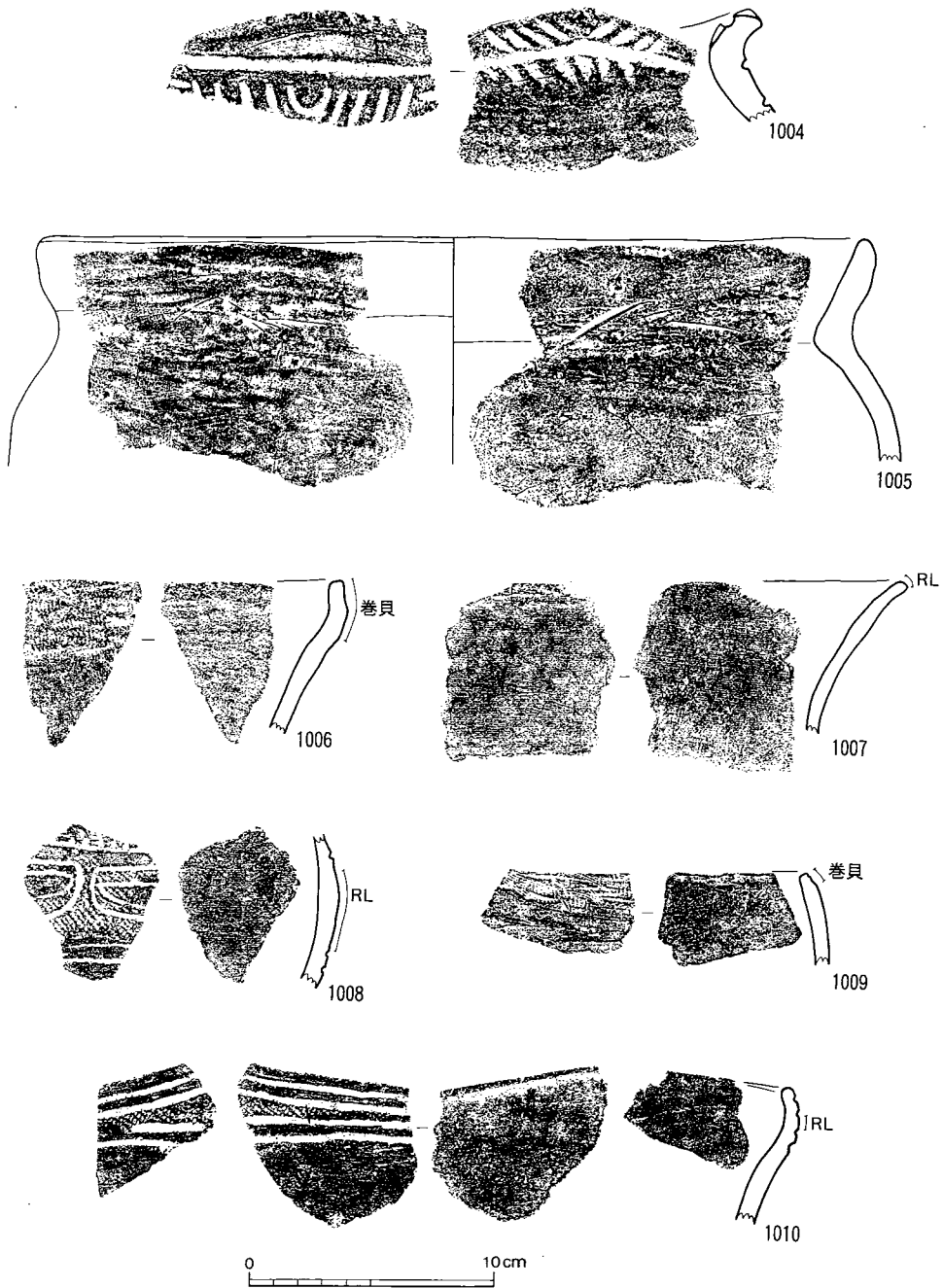
4号土坑 (第203図)

4号土坑は調査区中央部西寄りのIV E区に位置し、11・12号竪穴住居跡と切り合っていたはずであるが、著しい削平により現時点での切り合い関係は不明。3号土坑とは平行するように南西1mに、1号炉跡とは北西6mに近接する。平面プランは2.2×1.2mの北西-南東方向に長い不整形な楕円形で、深さは55cm。壁はかなり緩やかに立ち上がるが、凹凸はなく直線的。北西端には径50cm、深さ30cmのピットがあるが、本土坑に伴うものかどうかは明確でない。埋土は暗褐色土が流れ込むように堆積しており、人為的に埋めたものではない。3号土坑とは長軸が平行しているので、あるいは年代的に平行した関連遺構ではないかという可能性も当初は想定されたが、遺構の形態や出土遺物の年代的差から別個のものであることが判明した。出土遺物は少なくパンケース2箱であるが、縄紋土器については鐘崎式の新しい段階から西平式の前段階のものに限られ、破片は比較的大きく磨滅もあまりしていない。

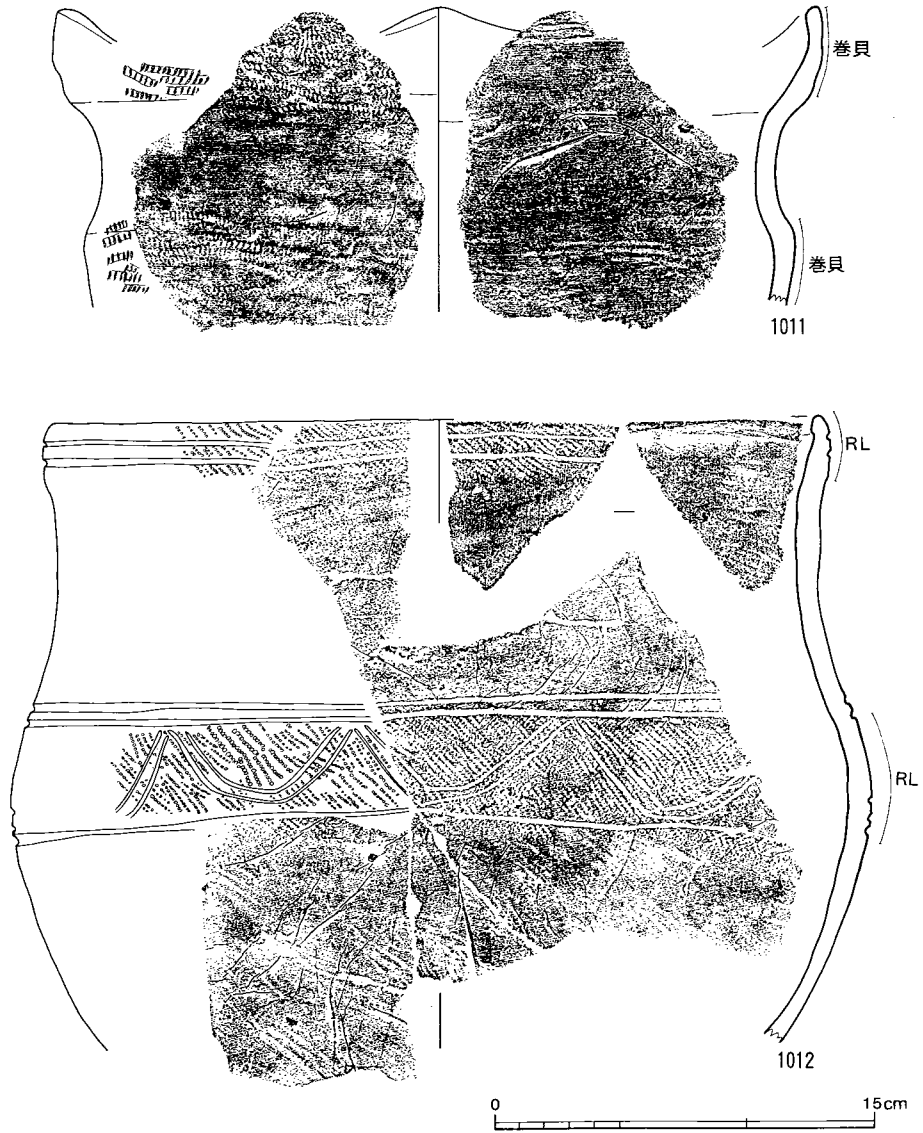
土器 (第205・206図) 縄紋土器は9点しか図示していないが、破片は大きく磨滅もあまりしていない。1004・1005は鐘崎式に属するものであろう。1006~1012は築上郡築城町松丸遺跡D



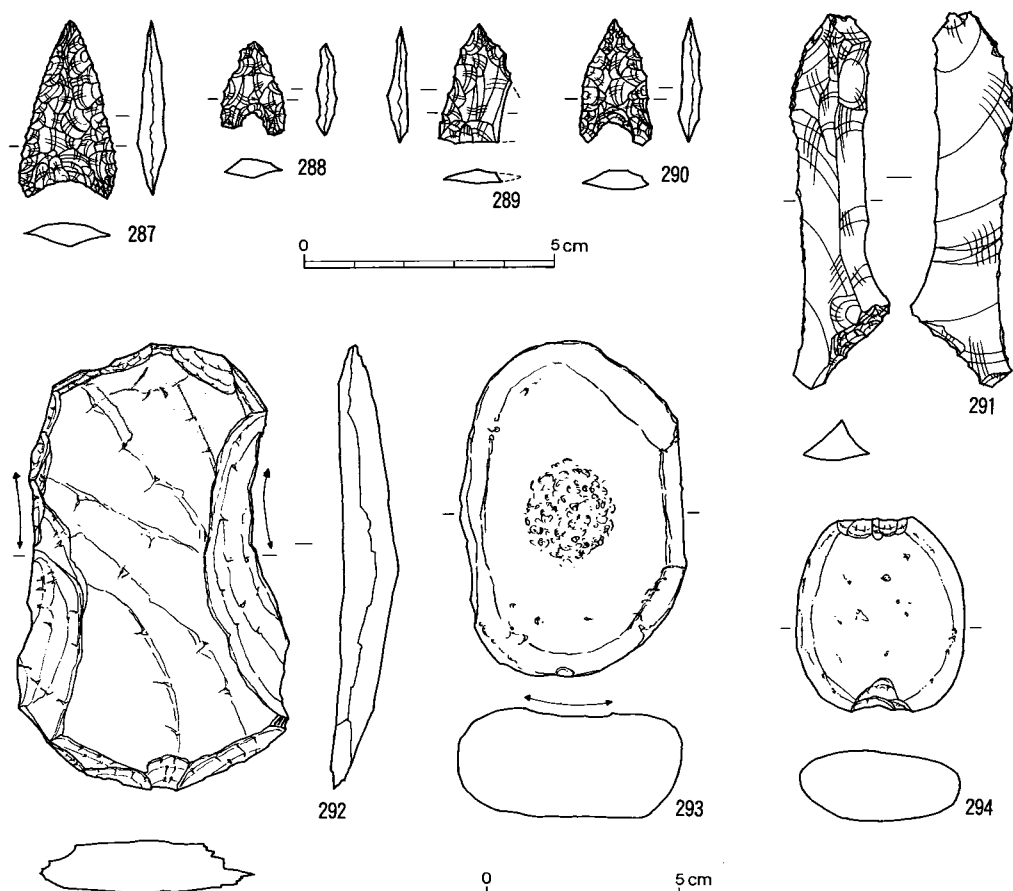
第 204 图 3 号土坑出土土器实测图 (1/3)



第 205 图 4 号土坑出土土器实测图. 1 (1/3)



第 206 图 4 号土坑出土土器実测图. 2 (1/3)

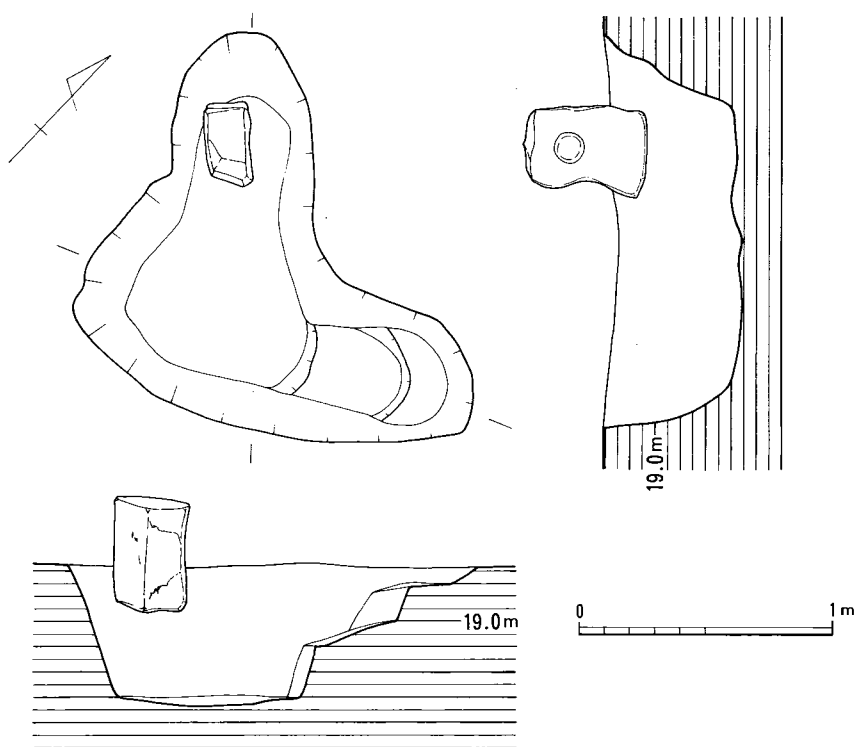


第 207 図 3～5号土坑出土石器実測図 (287～291は2/3 292～294は1/2)

地区 SX-5 から出土した西平式以前に位置づけられる一群と類似しており、年代的にも他の時期を含まない良好な資料と考えられる。1008の胴部破片の最上部の沈線文には刺突文が施され、1010の口縁部の沈線文は4本であるが波頂部では3本になり、1012の口縁部は平縁で胴部のRLは磨消されることがない等、西平式の直前に位置づけられる松丸遺跡D地区 SX-7 の資料と酷似した特徴を示している。沈線文とRLとの施文順序は一定していない。

石器 (第207図) 図示した石器は姫島産黒曜石1点 (289)、姫島産黒曜石の使用による微細剥離痕のある縦長剥片1点 (291)、打製石斧1点 (292) である。打製石斧の一端は擦れたような摩滅の痕跡が著しく、また両側縁には柄を装着した時の緊縛痕と考えられる擦れた摩滅痕が観察される。そうすると、一端に見られる光沢のある摩滅痕は柄を挟むように装着してその根の部分が石斧と擦れたために生じたものと考えられる。

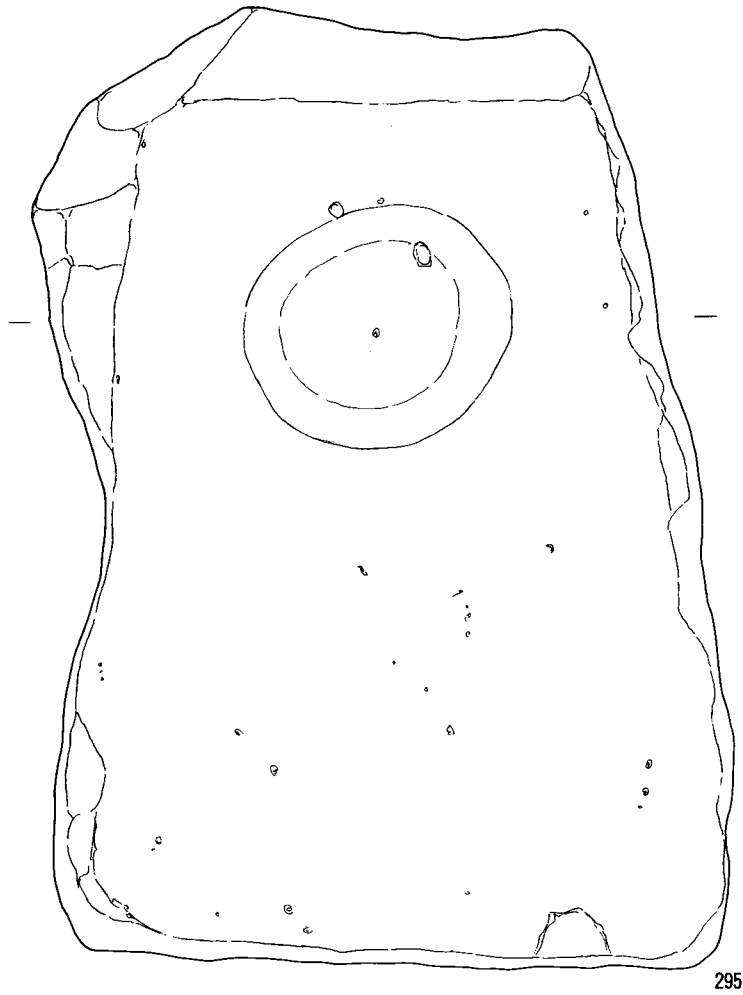
土製円盤 (第280～285図) 土製円盤の出土は4点でいずれも図示している。



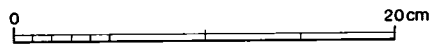
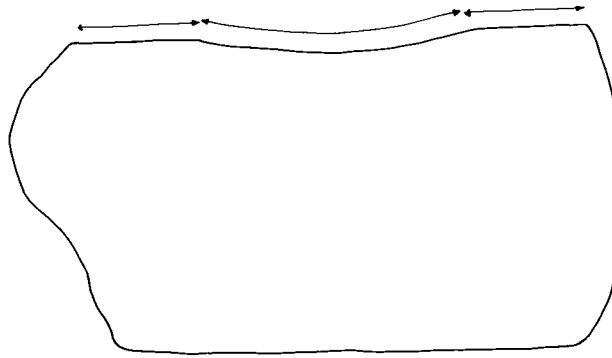
第 208 図 5号土坑実測図 (1/30)

5号土坑 (図版19 第208図)

5号土坑は調査区のほぼ中央部VID区に位置し、南西3mの1号甕棺墓、南東3mの4号甕棺墓、東5mの3号甕棺墓に近接する。この周辺は本遺跡において最もピットの多い地区ではあるが、反対に竪穴住居跡はこのピット群を取り囲むように構築されている。本土坑では50×34×17cmで重量60.4kgのほぼ直方体に近い台石 (第209図) が立ったままの状態で見出されたが、この台石自体は重機によって表土を除去していた時点ですでに存在が確認されていた。そうすると、他の遺構の遺存状況からみて本遺構もかなり削平されているものと考えられるだけに、この台石が本来この土坑に伴うものであるのかどうかは決定的な根拠に欠ける。平面プランは「L」字形で、北西-南東および北東-南西に1.6mを測り、北東端から中央部へ向けて10~20cmの階段状のテラスがあり、深さ55cmの底面に至る。遺物は極めて少なく、条痕文を有する小さい縄文土器片数点と、姫島産黒曜石1点 (第207図290) だけである。本遺構は遺物が他の遺構に比べて極めて少なかったことと、あたかも墓標ともいえるような台石が北西隅に立っていたことから、土壇墓ではという可能性のもとに調査を進めた。結果的には土壇墓といえる積極的な根拠は得られなかったが、「IV分析と復原 1. 5号土坑および1号甕棺墓における残存脂肪酸分析について」で示したように、念のため脂肪酸分析を実施したところ、加熱 (火



295



第 209 图 5 号土坑出土石器实测图 (1/4)

葬)した動物遺体(骨)の残存脂肪酸が検出されるという結果がえられた。したがって、本遺構は土壌墓としての可能性もかなり高くなってきたわけであるが、その動物遺体が加熱(火葬)されていたという報告は注目に値しよう。

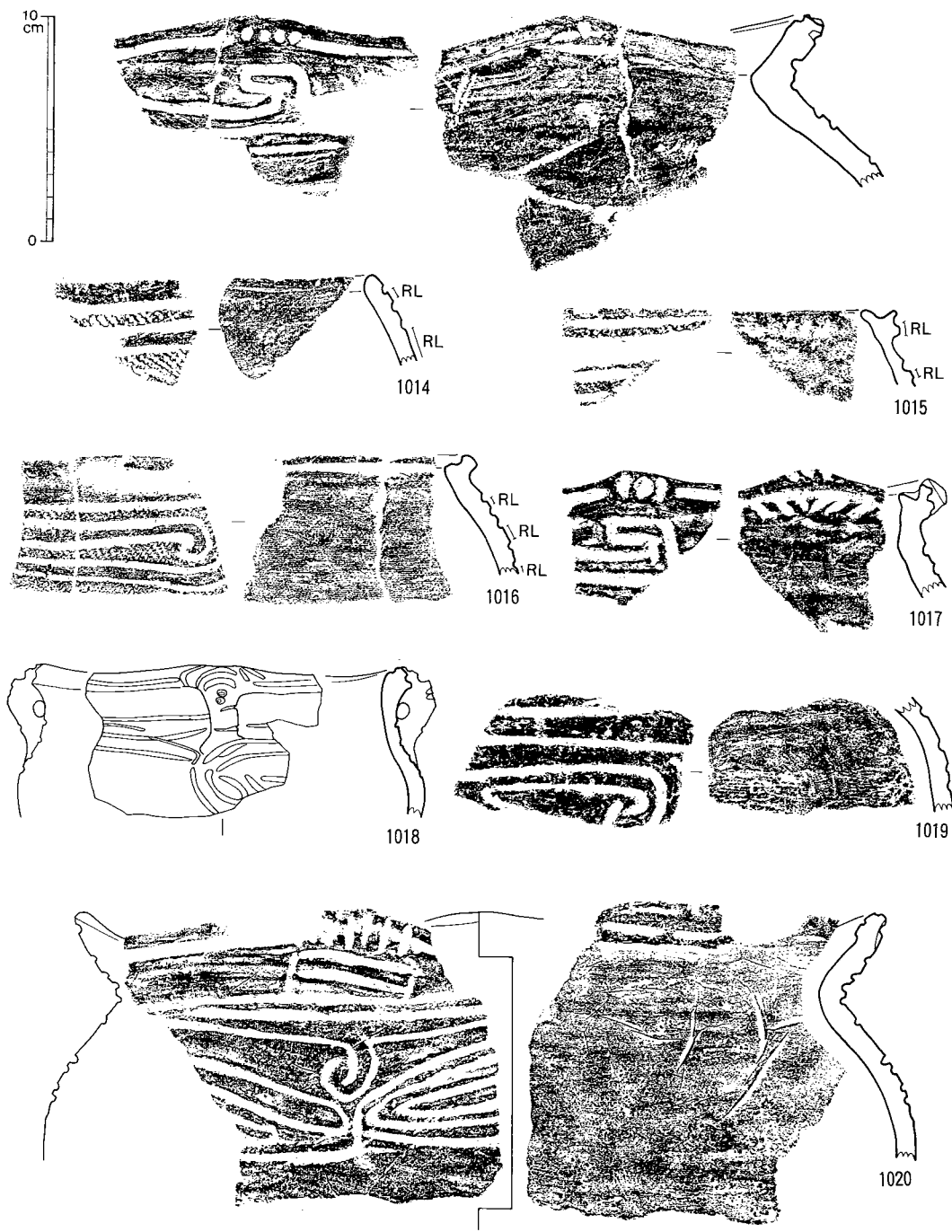
6号土坑(図版17 第191図)

6号土坑は調査区北西部IVF区に位置し、2号土坑の南東3m、1号竪穴住居跡の北西2mに近接するが、このあたりは後世の削平が著しいところでピットもほとんど残っていない。本土坑は削平が著しく、特に北西部はまったく残っていないのでその全体像は明確でないが、現存部分の規模は4.9×4.5×0.5mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は北西方向へ緩やかに傾斜していくが全体的に平坦ではなく、ピット状に深くなる部分もある。埋土は黒褐色粘質土にほぼ限られ、遺物も部分的に集中することもなかった。本土坑の調査は1号土坑に切られるという認識で進められたが、調査途中において一部の埋土が類似していることから、本土坑と1号土坑は本来一つの遺構ではないかという疑念が生じてきた。しかし、土坑の検出時点においては1号土坑が6号土坑を切っていたという所見と、1号土坑の最上部からは弥生土器が出土するという事実、さらには出土縄紋土器の型式に差があること等から、両者には先後関係が存在していたという認識に至った。遺物の出土量は多くパンケース9箱が出土した。

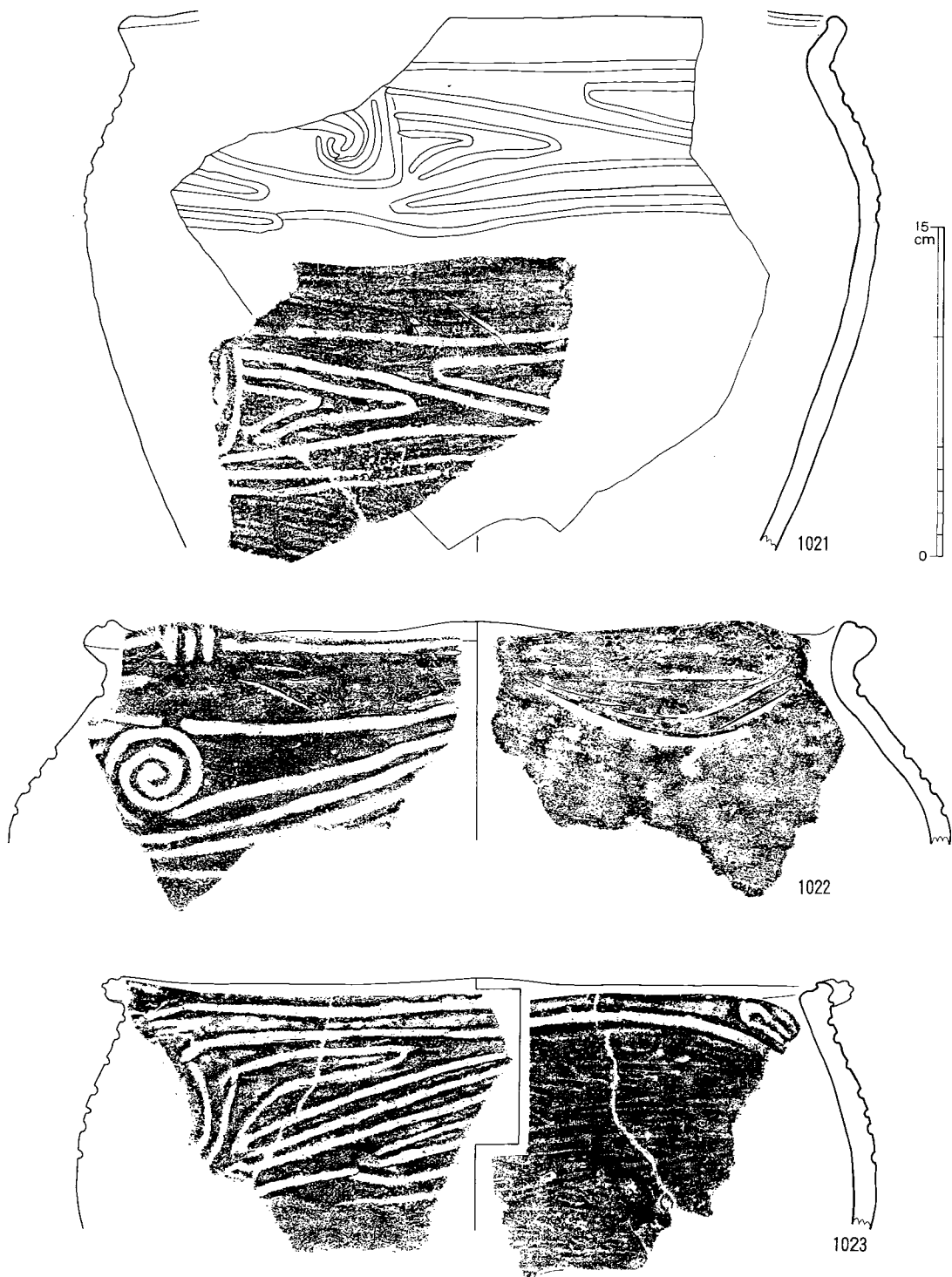
土器(第210~216図)土器は43点を図示した。1013~1046は鐘崎式で、残り1047~1055は太郎迫式と三万田式である。本土坑からは小池原上層式や鐘崎式の新しい段階から西平式まではまったく出土していない。鐘崎式の有文土器はいずれも鉤手文が残りそれが渦巻文と連続するタイプのもので、まだ沈線文もある程度太く、施文部分には器面調整としての巻貝条痕文を施さないかあるいは施してもナデ消しており、口縁部の形態も強く外反あるいは屈曲するもので、鐘崎式の中でも比較的古い要素が窺える一群に限定される。無文土器をみても、いずれも口縁部が強く外反するものばかりで、やはり鐘崎式の無文土器の特徴を有する。無文土器の器面調整もナデか巻貝条痕がほとんどで、中には原体が不明の条痕文も見られる。1047は太郎迫式の胴部破片。1048は口縁部の内面に突起の付いたボール状の小型鉢。1048~1055は三万田式で、1048の外面には二枚貝による貝殻条痕文が施され内面は研磨される。1051の屈曲部の凹点部分には、普通二枚貝の核頂部分が押圧されるが、この資料については細い沈線文を放射状に施すことによって同じ文様の効果を表出している。1053については太郎迫式の口縁部である可能性が高いが、取りあえず三万田式の一群に位置づけた。

石器(第217図)石器として3点の石鏃、1点の石錘、2点の磨製石斧、1点の台石を図示した。300は扁平片刃石斧で、全面に丁寧な研磨による加工の痕跡が観察される。301は両刃石斧で両側縁中央部やや上位には、柄を装着する際の緊縛痕が明瞭に残る。302は中央部のみが綺麗な円錐状にくぼむ台石。

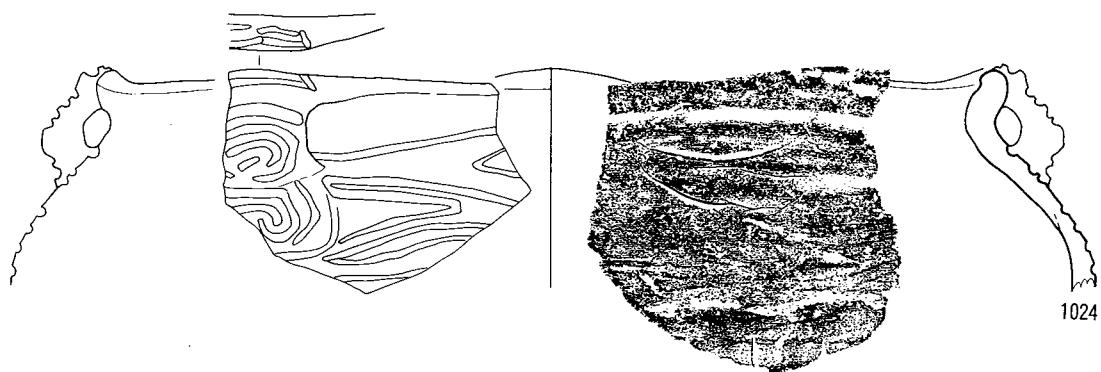
土製円盤(第280~285図)土製円盤は4点出土したが、図示した3点のは器面調整はナデ。



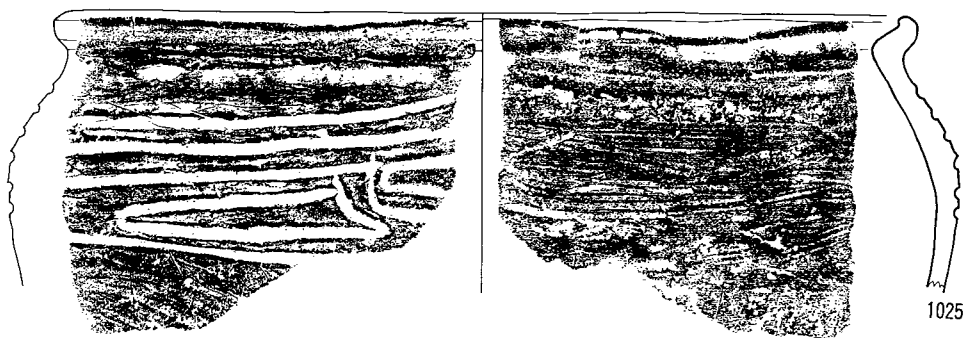
第 210 图 6 号土坑出土土器实测图. 1 (1/3)



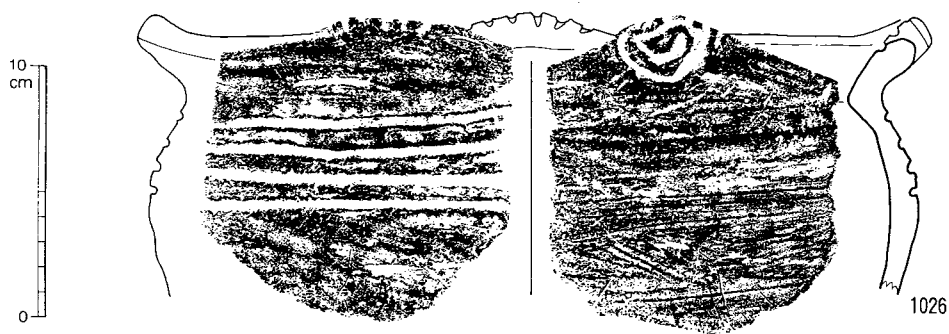
第 211 图 6 号土坑出土土器实测图. 2 (1/3)



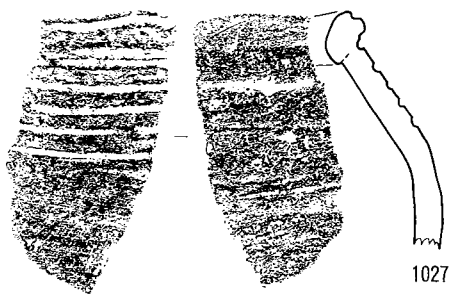
1024



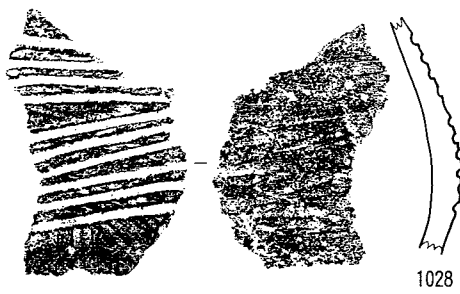
1025



1026

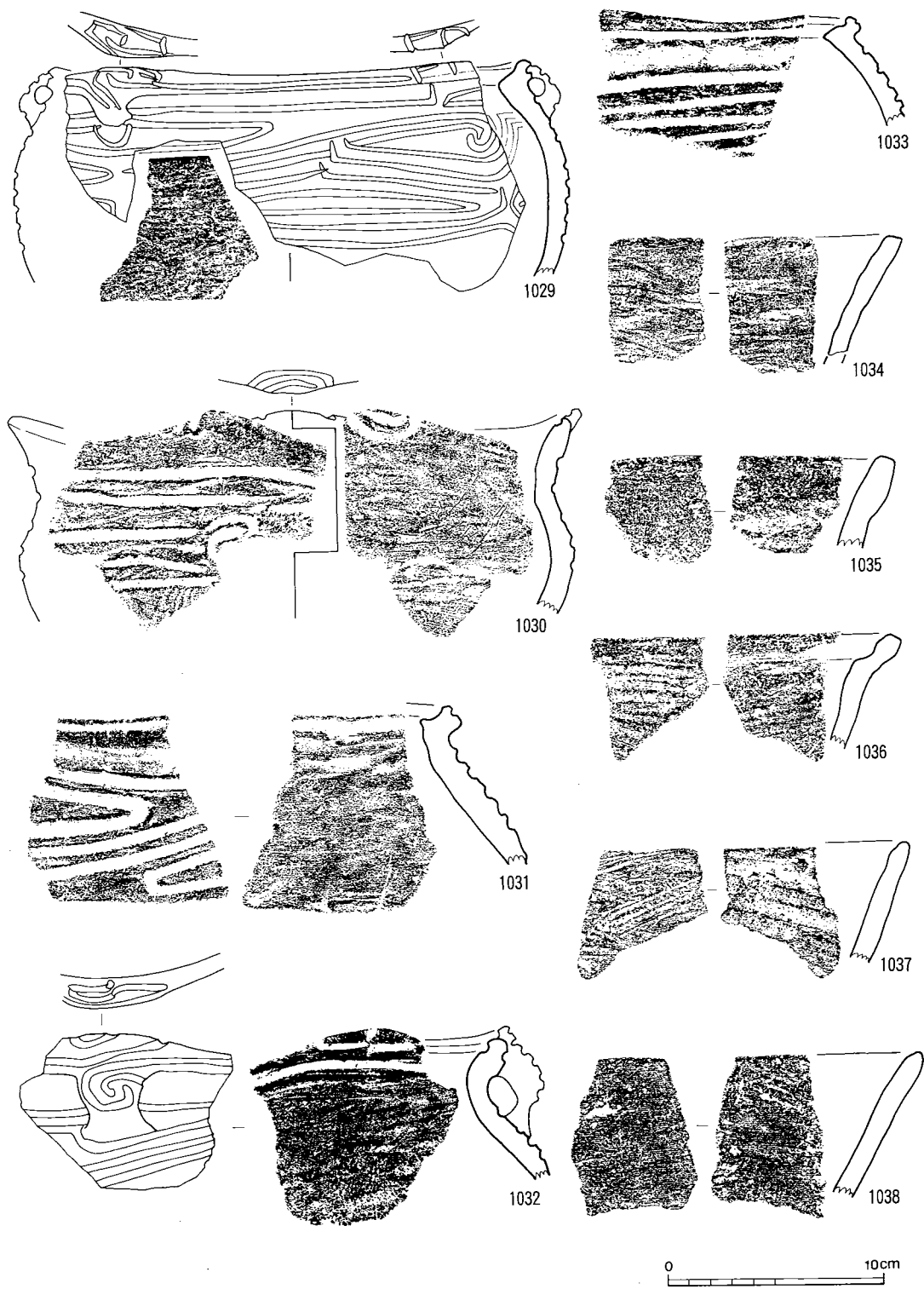


1027

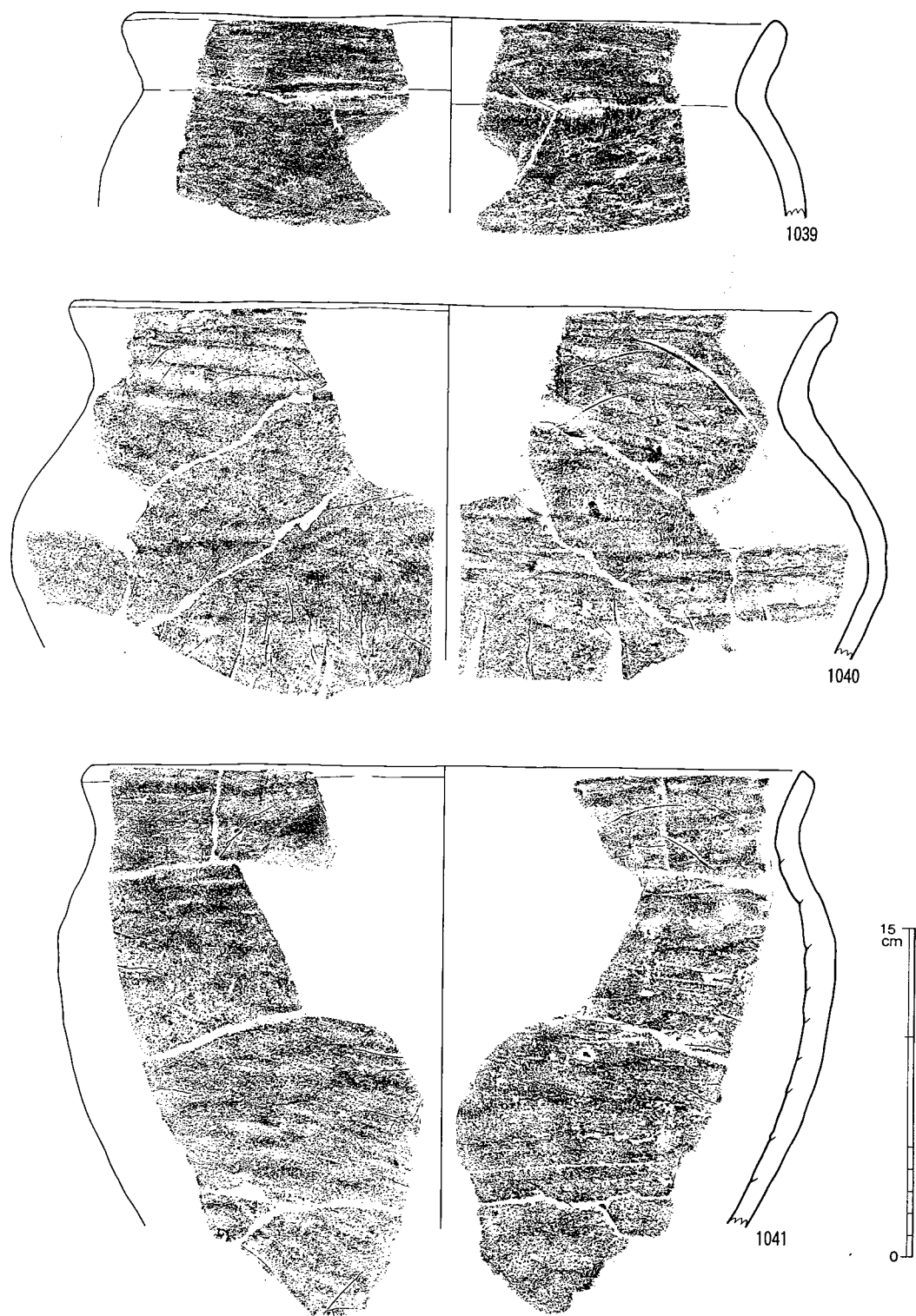


1028

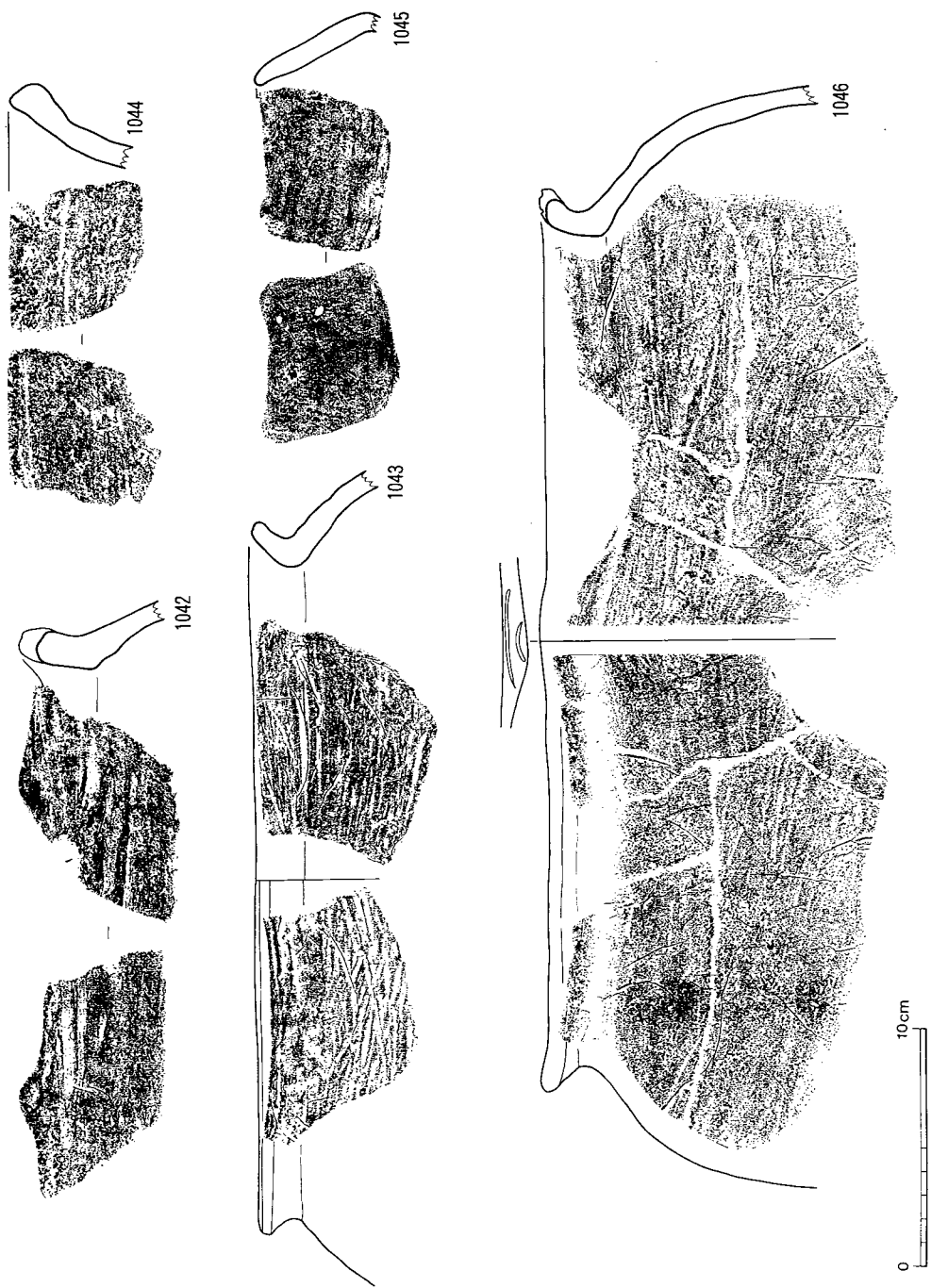
第 212 图 6 号土坑出土土器实测图. 3 (1/3)



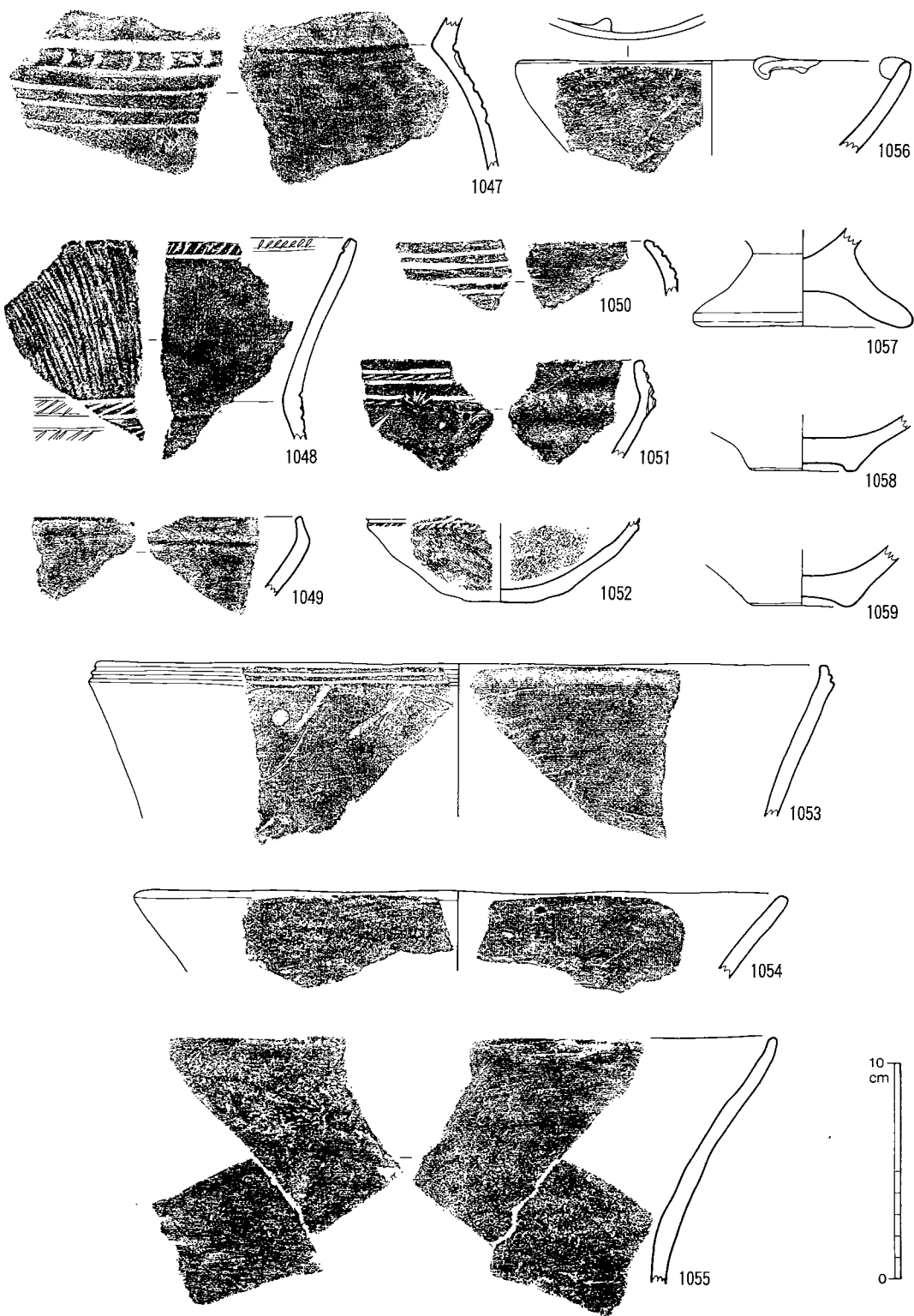
第 213 图 6 号土坑出土土器实测图. 4 (1/3)



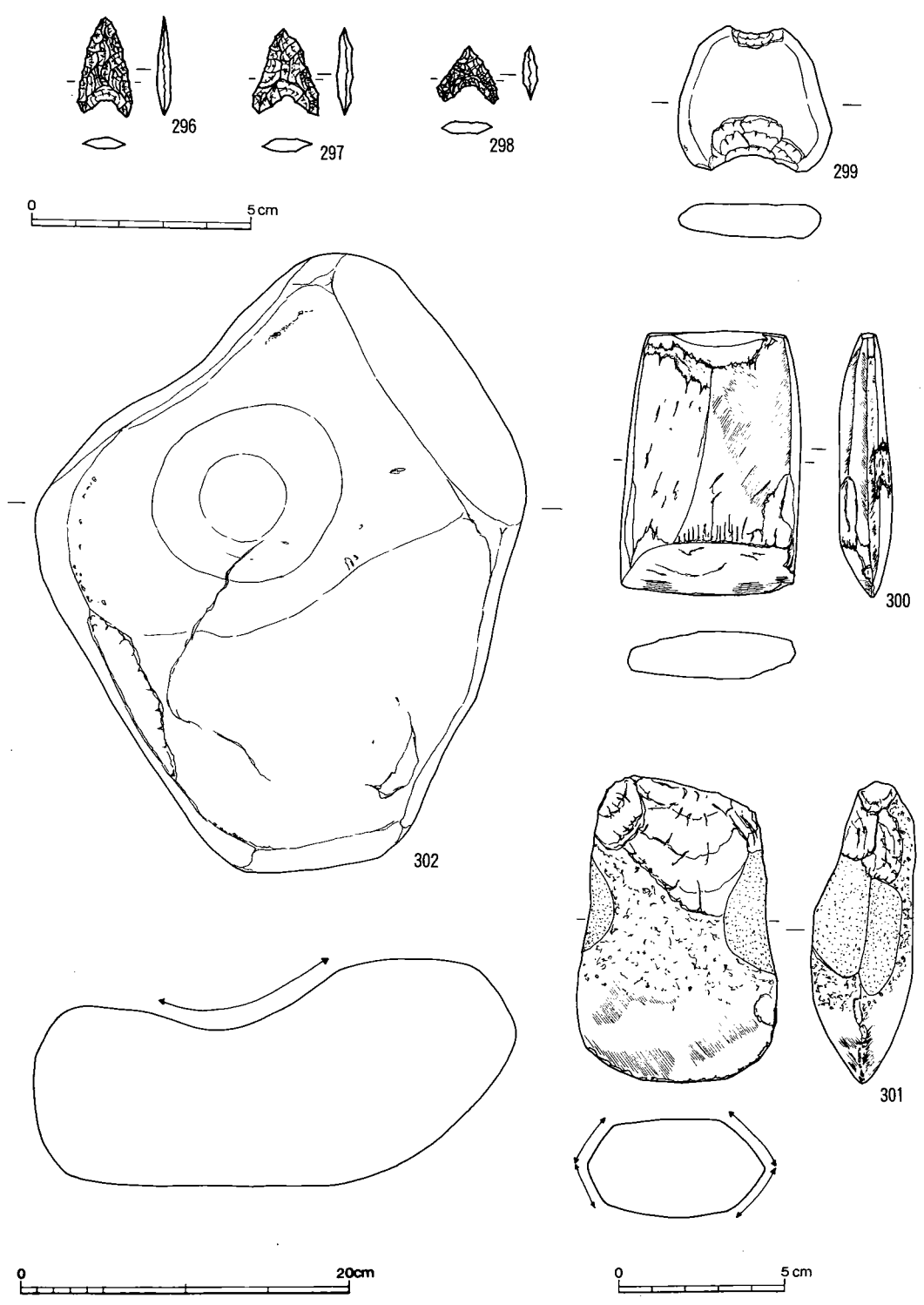
第 214 图 6 号土坑出土土器实测图. 5 (1/3)



第 215 图 6 号土坑出土土器夹测图. 6 (1/3)



第 216 图 6 号土坑出土土器实测图. 7 (1/3)



第 217 图 6 号土坑出土石器实测图(296~298は2/3 299~301は1/3 302は1/4)

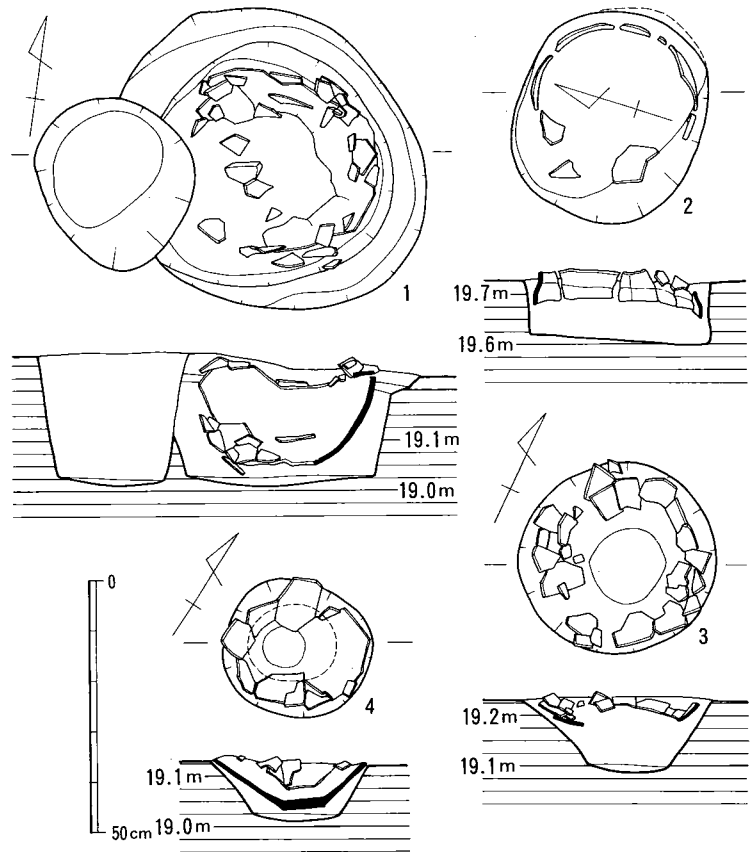
(3) 甕棺墓

本遺跡では甕棺墓として取り扱ったものが4基ある。しかし、実際に甕棺墓として使用されていたことを証明する根拠はほとんどなく、埋設土器として位置づけたほうが適当であろうが、一般的な見解から取りあえず甕棺墓とした。

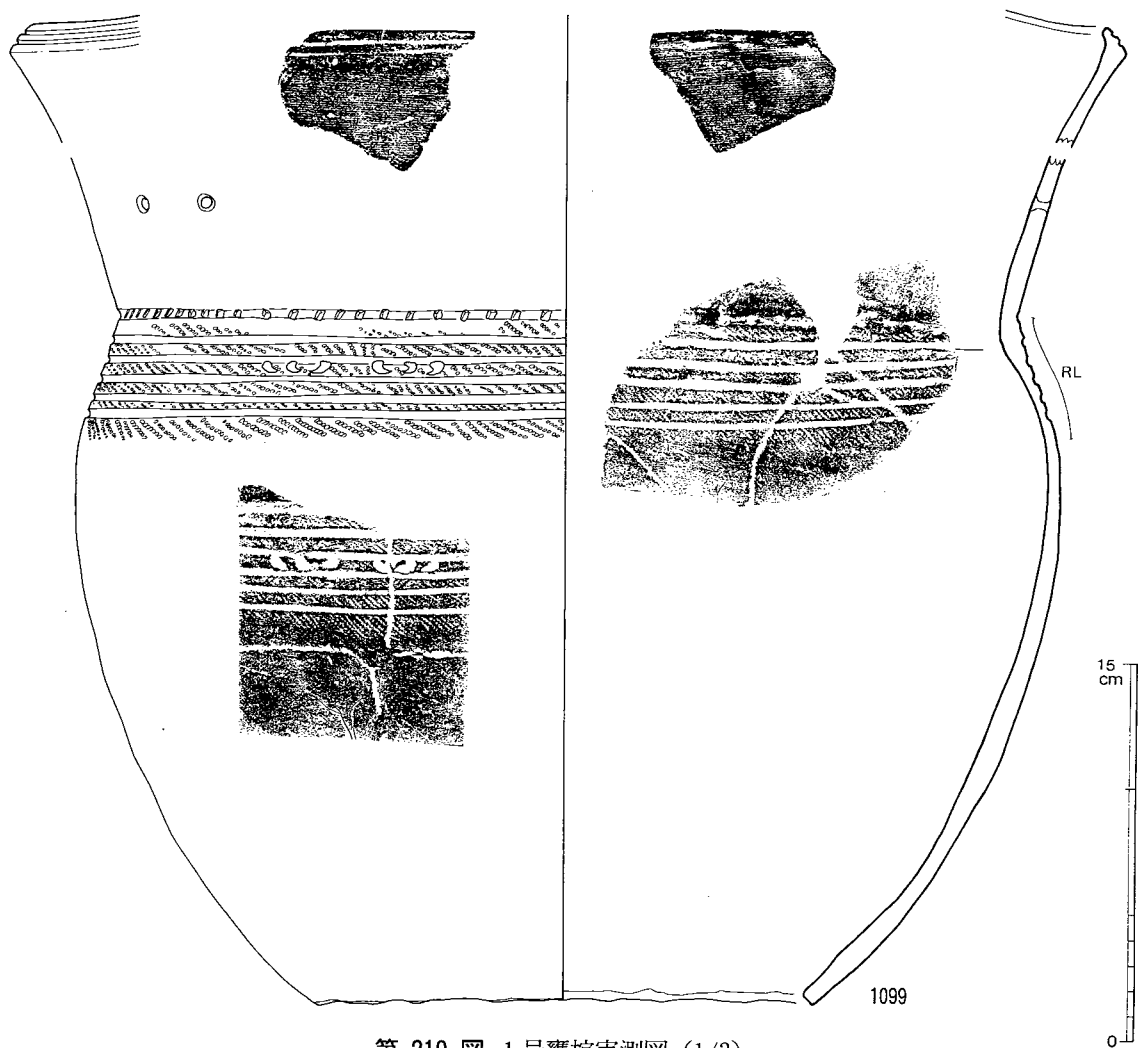
1号甕棺墓 (図版20 第218・219図)

1号甕棺墓は調査区中央部のやや南寄りVD区に位置し、2号竪穴住居跡の北東4m、5号土坑の南西5m、4号甕棺墓の西8mに近接する。掘りかたは深さ8cmほどのところで幅6～15cmのテラスが付き、65×55×28cmを測る楕円形を平面プランとしており、掘りかたと甕棺との間には比較的広い余裕がある。甕棺は本来完全な形で埋置されていたと考えられるが、実際には東側の一部が欠落するような状態で出土した。これはおそらく、この掘りかたの東側を切るピットによって取り去られたのであろう。検出時点では頸部以上が削平によって欠損していると考えられたが、甕棺内の埋土中から口縁部破片と打製石斧の破片が出土した。甕棺の底部

はなく、埋設時点で打ち欠きが行なわれていたと考えられる。なお、この甕棺内の埋土の残存脂肪酸分析を実施したところ、「IV分析と復原 1. 5号土坑および1号甕棺墓における残存脂肪酸分析について」で示したように、加熱(火葬)した動物遺体(骨)の残存脂肪酸が検出されるという結果が得られ、1号甕棺墓についてはまさに甕棺墓として位置づけられたのである。かつて、福岡県京都郡菟田町浄土院遺跡の甕棺墓からは成人女性と推定される火葬骨が出土して注目を集めていた



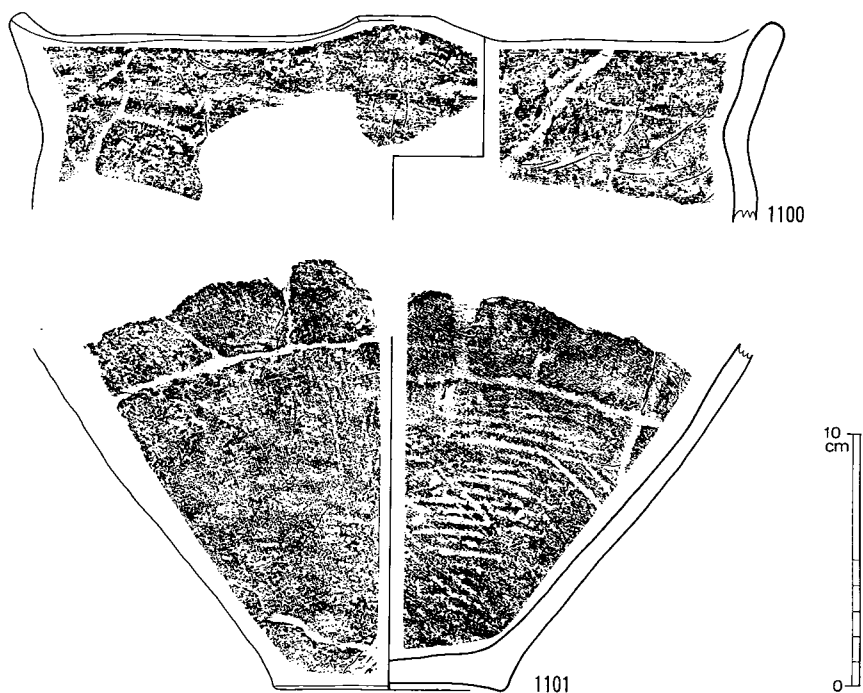
第 218 図 1～4号甕棺墓実測図 (1/15)



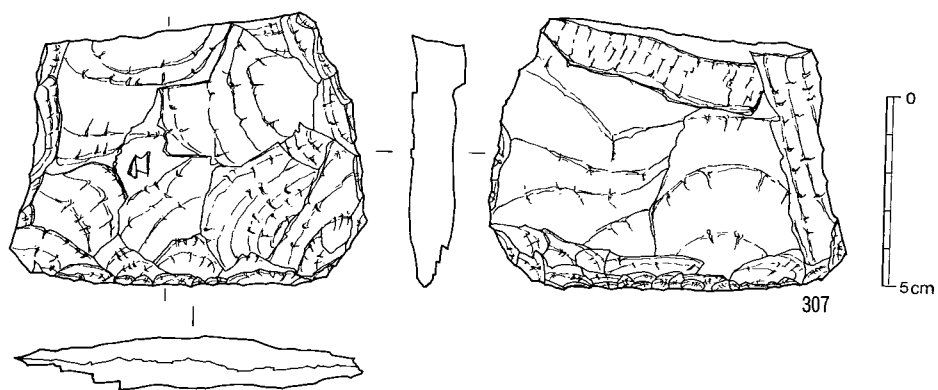
第 219 図 1 号甕棺実測図 (1/3)

が、特異な事例として済まされる傾向にあった。しかし、今回の 1 号甕棺墓の分析結果は、浄土院遺跡の評価に再考を迫る契機になるであろう。

最大胴部径 39cm、推定器高約 45cm の太郎迫式有文深鉢（第 219 図）で、口縁部には 2 本の沈線文が、胴部には 6 本の沈線文の後に刺突文や RL 縄紋が施されている。磨消しは行なわれず、三日月状の玉を抱いたような沈線文がさらに施される。外面および内面の頸部以上の部位には、器面調整として研磨が施されるが、内面胴部下半はナデだけしか施されない。典型的な太郎迫式で、荇田町浄土院遺跡の甕棺もほぼ同型式のものである。なお、本甕棺墓内上部からは第 220 図の打製石斧が 1 点出土している。



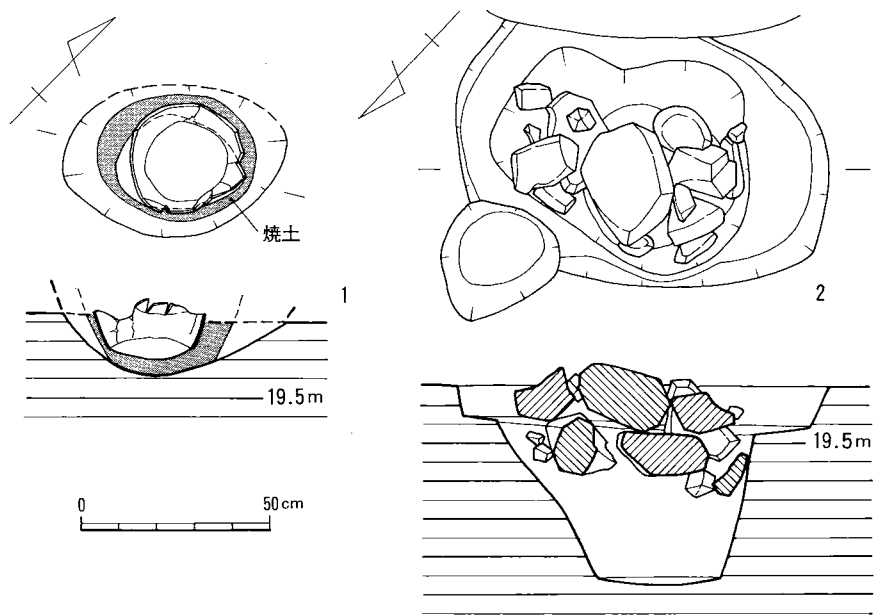
第 220 図 2・4号甕棺実測図 (1/3)



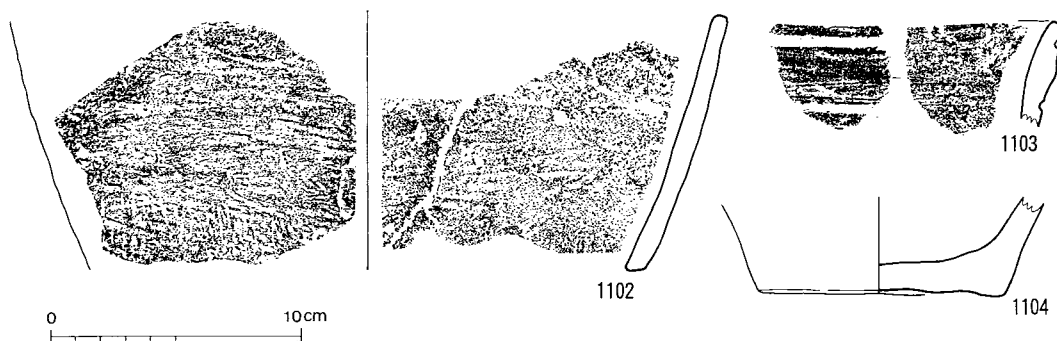
第 221 図 1号甕棺出土石器実測図 (1/2)

2号甕棺墓 (図版21 第218・221図)

2号甕棺墓は調査区中央部の西寄りⅣE区に位置し、1号竪穴住居跡を切る1号溝をさらに切るといふ先後関係を有する。掘りかたの平面プランは41×37cmの楕円形で、深さは13cmしかなくかなりの削平を受けている。ここで特徴的なのは、無文深鉢の口縁部が倒立の状態で埋設されていることである。頸部付近までしか残っていないので全容は窺えないが、底部のある深



第 222 図 1・2号炉跡実測図 (1/20)



第 223 図 1・2号炉跡出土土器実測図 (1102は1号 1103・1104は2号 1/3)

鉢でかぶせたものか、あるいは底部の除去された円筒形のものであったのかは確定できない。掘りかたと甕棺の間にはそれほど余裕がなく、かなり狭い。

甕棺自体(第221図)は口径31cmの波状口縁になる無文の深鉢で、器面調整はナデ。頸部で「く」字状に外側へ屈曲するのが特徴的。鐘崎式前後に位置づけられようか。

3号甕棺墓(図版21 第218図)

3号甕棺墓は調査区中央部の南東寄りVII D区に位置し、4号甕棺墓の北東5m、5号土坑の西7m、弥生時代の2号土壙墓の南西5mに近接する。平面プランは40×38cmの正円形で、深

さ15cmで至る底面も15×14cmの正円形になる。甕棺は底部が打ち欠かれており、この掘りかたにちょうど合うサイズであったと考えられるが、整理作業の課程で現在行方不明であり実測図を提示できなかった。

4号甕棺墓（図版22 第218・221図）

4号甕棺墓は調査区中央部のわずかに南寄りに位置し、3号甕棺墓の南西5m、5号土坑の南東6mに近接する。現存する掘りかたの平面プランは30×28cmの円形で、深さ12cmで至る底部の径は16cm。甕棺と掘りかたの間には余裕はなくかなり詰まる。底部は打ち欠きでなくわずかに上げ底状になる径9cmを測り、器面調整は外面がナデ、内面は二枚貝による条痕調整の後にナデが施される（第221図）。本遺跡から出土する縄紋土器の中でも、西平式以前に位置づけられよう。

(4) 炉跡

本遺跡では竪穴住居跡等に伴わない単独の炉跡が2基確認された。

1号炉跡（図版23 第222図）

1号炉跡は調査区西端部IV E区に位置し、2号炉跡の南西6m、3号土坑の西4mに近接する。著しい削平により深さ15cmほどしか残っていないが、掘りかたの平面プランは60×40cmの楕円形を呈する。この掘りかたの壁に沿って幅6～10cmほど茶褐色土を巡らし、それから土器を据える。この土器（第223図）は底部を打ち欠いて円筒形に整形しているが、削平のため胴部以上はどの程度残っていたのか不明。土器と茶褐色土との幅2～5cmほどの間および底面には、焼土だけが詰まる。また、土器の内部にも焼土が詰まるが、これには炭化物も少量含まれる。この炉跡を検出した時点では竪穴住居跡に伴う炉跡ではないかという可能性から周辺部において柱穴の精査を行なったが、うまく対応しそうなものは検出できず、単独の炉跡という結論に至った。土器自体は径28cmを測るものの、器高としては10cm程度しか残っていないため年代の決め手に欠けるが、少なくとも西平式以前の無文深鉢であるには間違いない。器面調整としては、内外面に巻貝条痕文の後にナデが施された様子が観察される。

2号炉跡（図版24 第222図）

2号炉跡は調査区中央部の西寄りIV E区に位置し、一部1号竪穴住居跡に切られる。検出時点での平面プランは105×70cmで、ここから10cmほど下がって幅3～15cmのテラスが付き、そこから深さ45cmで35×30cmの円形の底面に至る。底面から25cm上位までの埋土は茶褐色土で、検出面からこの茶褐色土までは、拳大から人頭大までの焼けた礫と共に多量の焼土と炭化物が含まれる黒褐色土になる。検出時点では石組炉の可能性が想定されたが、石が組まれていないことと、石組炉に使われるような比較的扁平な石も含まれていなかったことから、蒸し焼きを

行なつたと想定される焼礫群的炉跡という考えに至つた。埋土からは第223図1103・1104の縄紋土器片が出土したが、1103については鐘崎式の新しい段階もしくはそれに後続はするが西平式以前の段階に位置づけられよう。この炉跡も竪穴住居跡に伴う可能性が想定され周辺部の精査を行なつたが、対応すべき柱穴等は特に見つからなかつた。

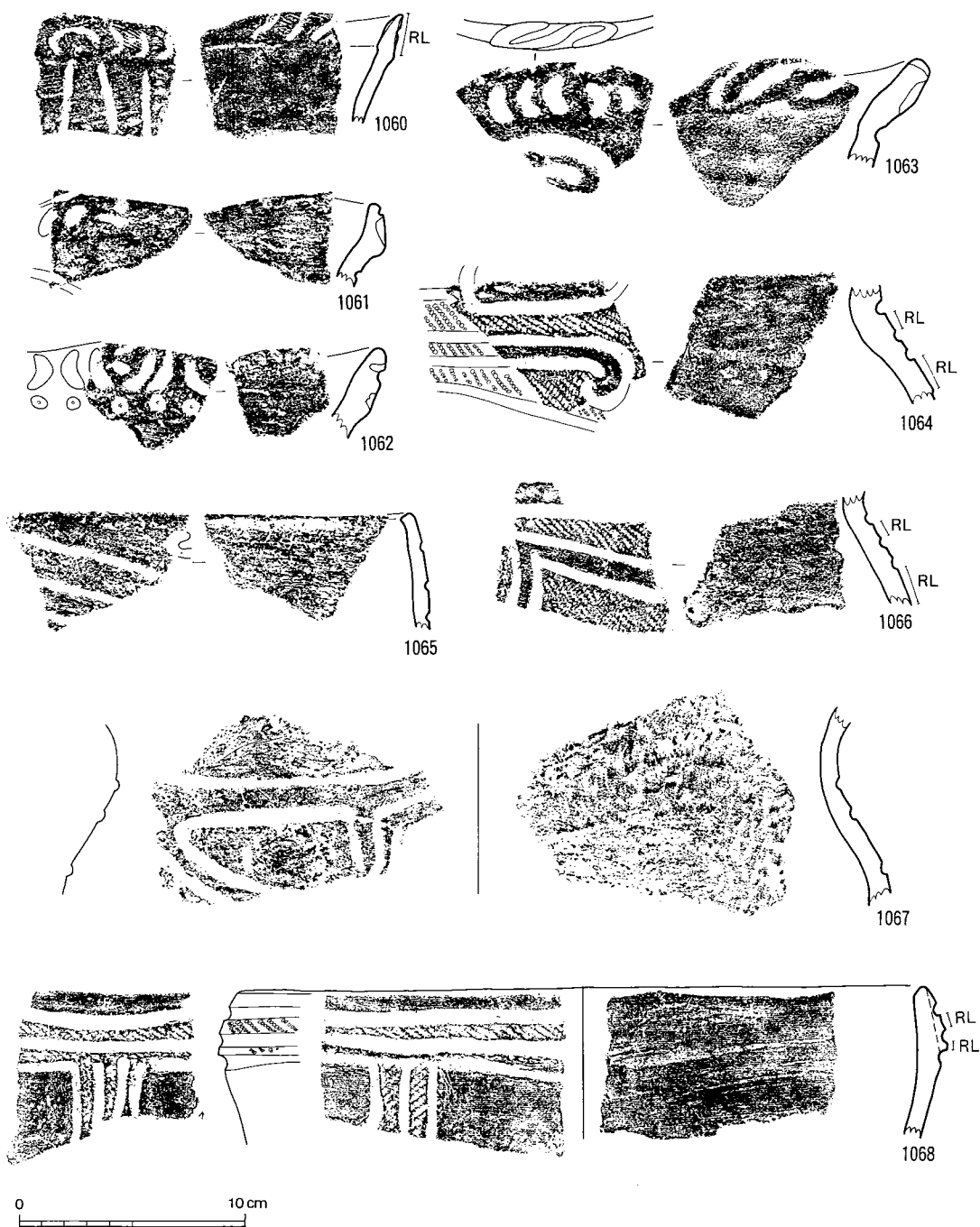
(5) 溝

本遺跡で確実に溝といえる遺構は存在しない。1号溝も溝として機能していたとする根拠は必ずしも見当たらず、あるいは細長くて浅い土坑の可能性も残る。

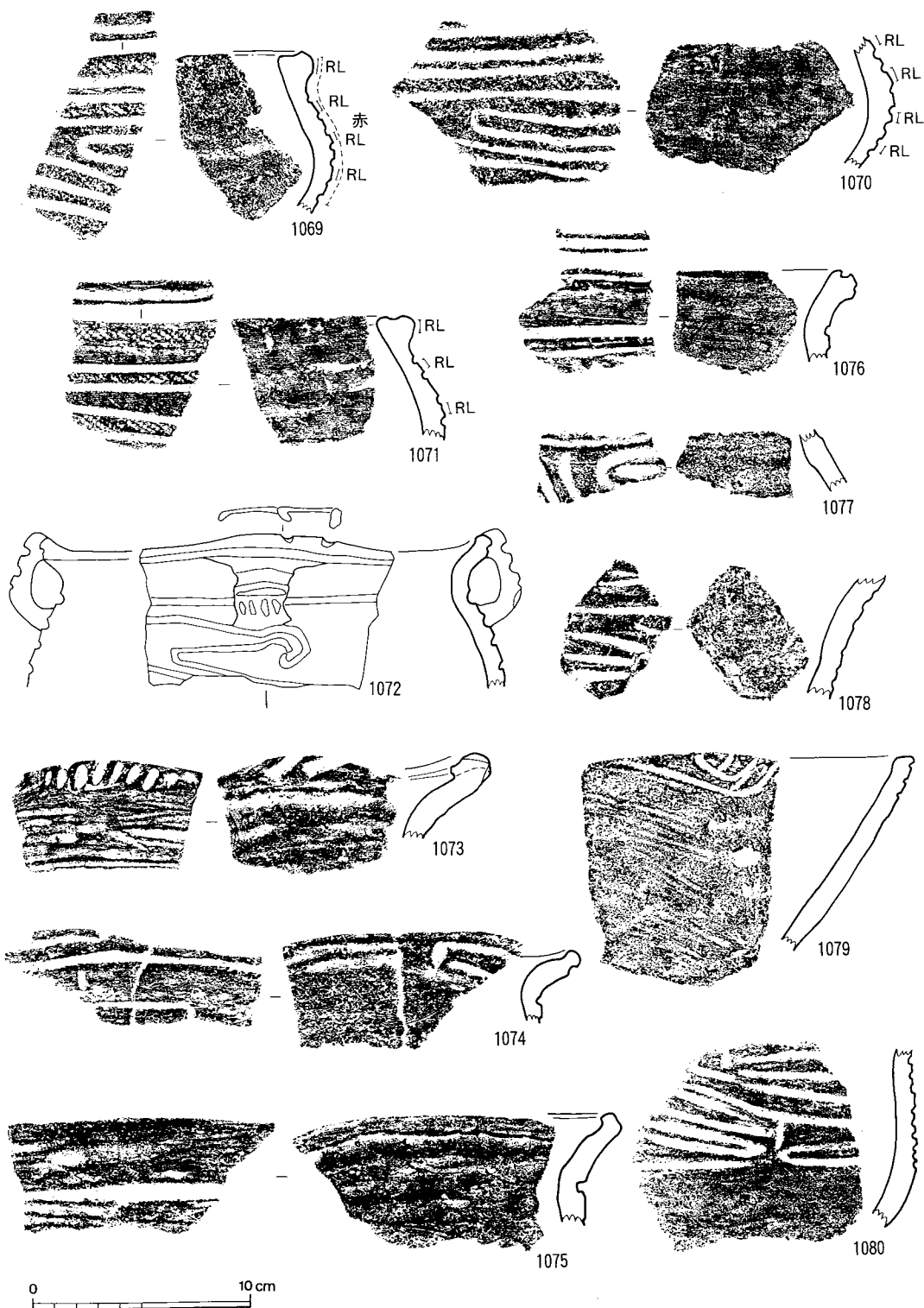
1号溝 (図版22 第5図)

1号溝は調査区中央部の東寄りIV E区に位置し、1号竪穴住居跡や2号炉跡は切るが2号甕棺墓に切られるという先後関係を有する。南東方向1mに近接する9・10号竪穴住居跡とも切り合い関係が存在したはずであるが、削平が著しいこの地点ではその関係を判別することはできない。幅2.1m、現存長3.9m、深さ0.2mを測り、北西から南東方向へ傾斜する。埋土は小礫を含む黒褐色粘質土で、遺物は全体的に広がり比較的多くてパンケース4箱分が出土。先述したように、細長くて底面が傾斜するということから溝として位置づけたが、実際に水が流れたりした痕跡はなく、遺物の出土状態を見ても他の遺構と同じく破損した土器等が遺棄されたような状態であり、浅くて細長い落ち込み状の遺構としても特に問題はない。

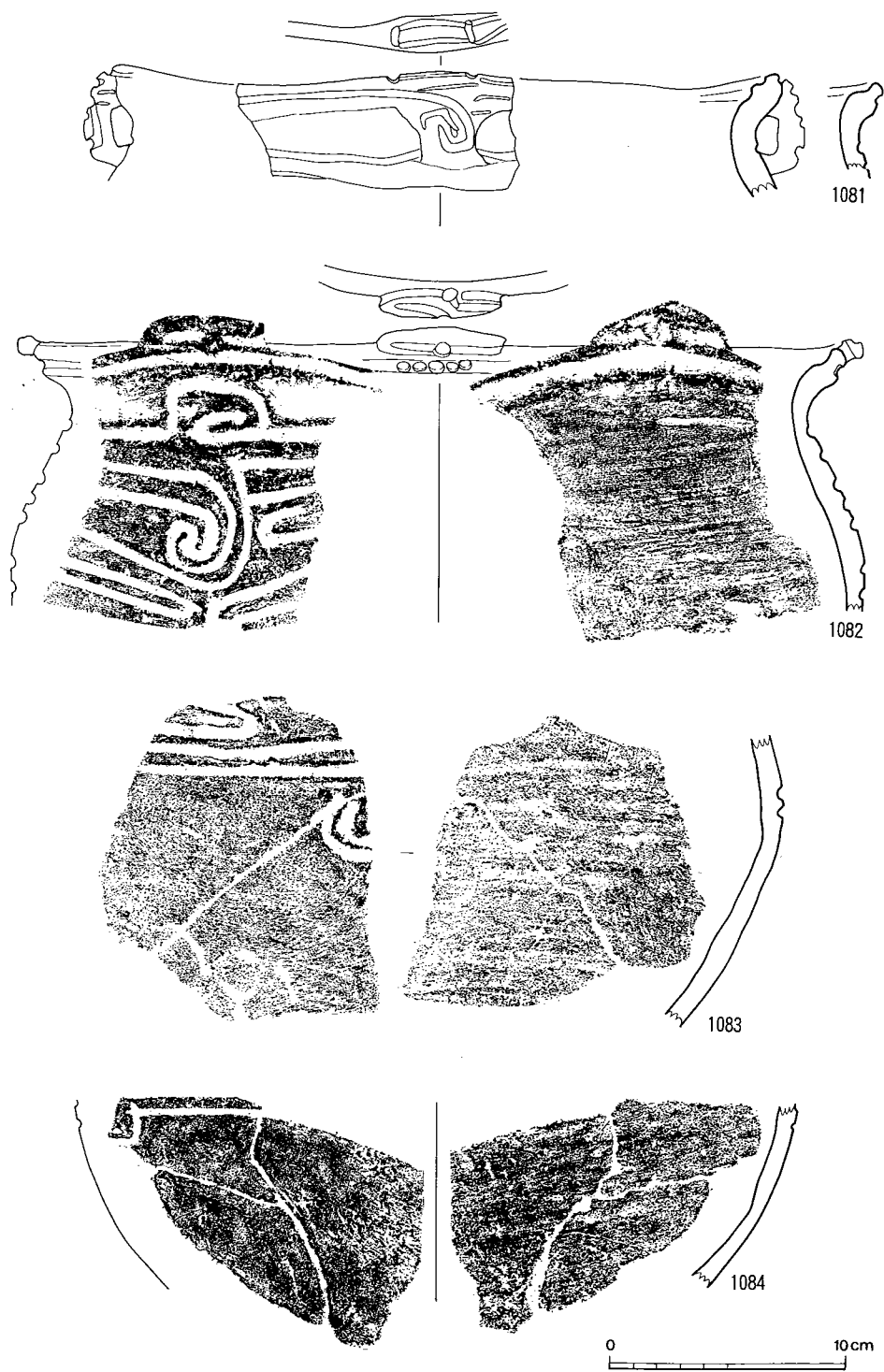
土器 (第224～229図) 縄紋土器は39点を図示した。1060・1068は小池原上層式に先行する一群。1060の波頂部へ向けて直線的に平行する4本の沈線文や、波頂部の円形文様を取り囲むような半円文、さらに口縁部を肥厚させてそこに撚りの小さいRLを施すという特徴は小池原上層式に先行するものである。1068はボウル状の鉢形で、口縁部にはRL縄紋の施された3本の沈線文が平行し、これから3本ないし4本の沈線文がやはりRLを伴いながら垂下する。2点の破片は同一個体であるが、3本垂下の破片は口縁部平行沈線文最下位の沈線文と接するようになっているのに対して、4本垂下の破片では連続的な文様となっており異なった様相を示している。したがって完形品の場合、沈線文の垂下は4方向に施されていたと考えられるが、この2つの資料は垂下の様子が異なっているので対向するのではなく、隣合わせの位置関係にあると想定される。1061～1067は小池原上層式。1069～1084は鐘崎式であるが、1079はあるいは小池原上層式に属するかもしれない。鐘崎式については鉤手文や渦巻文が組み合わさる一群で、いずれも鐘崎式のなかでも古い一群に属する。無文土器はいずれも口縁部が外反して胴部が膨らむタイプのものばかりで、小池原上層式か鐘崎式に属しよう。1089は無文の深鉢で、口縁部には鐘崎式の口縁部と同じ文様が施される。1085には把手状の突起が付くが、おそらく対向する2方向のみであろう。1096はあたかも製作途中でやめたような感じを覚える。



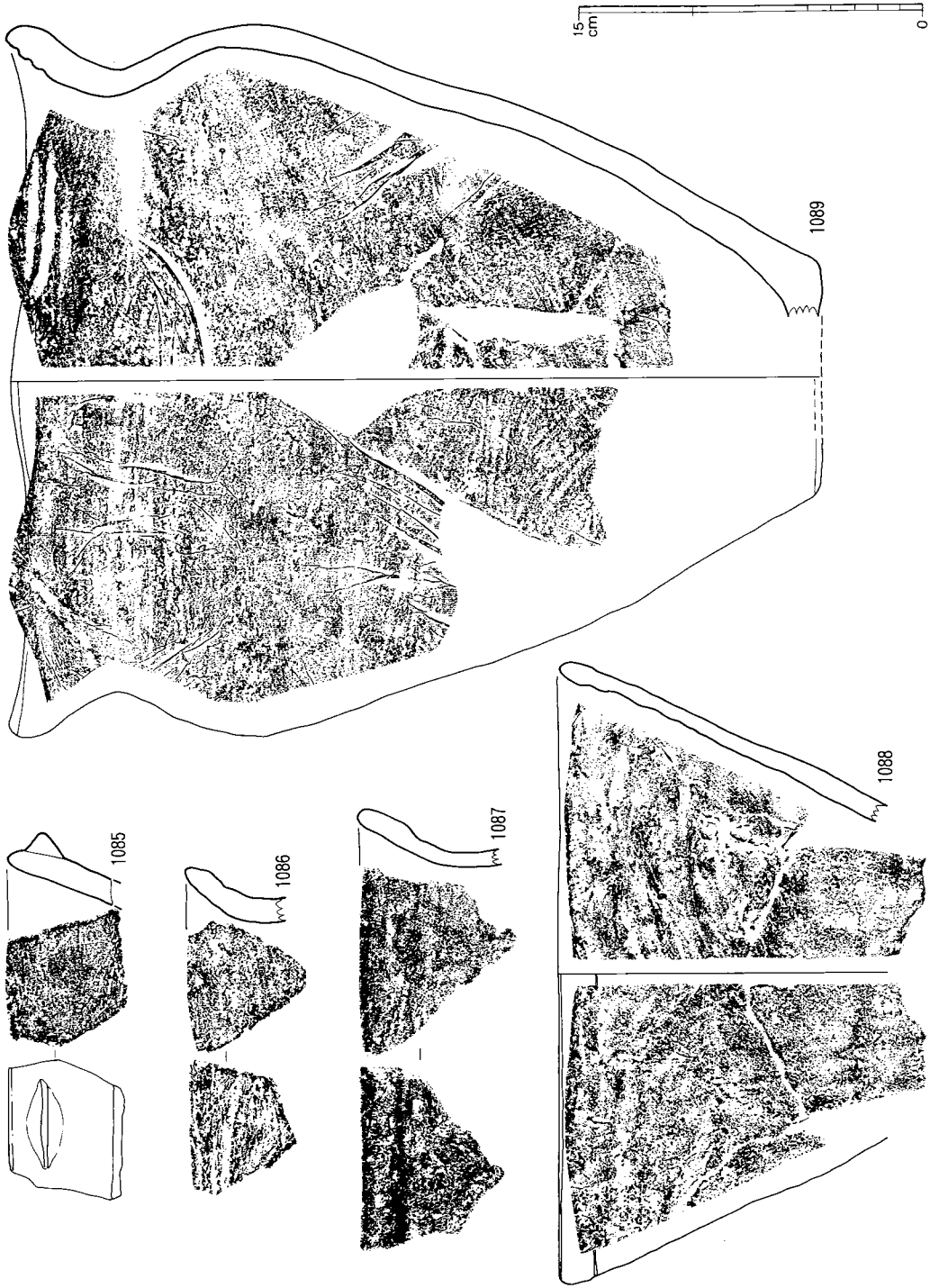
第 224 图 1 号沟出土土器实测图. 1 (1/3)



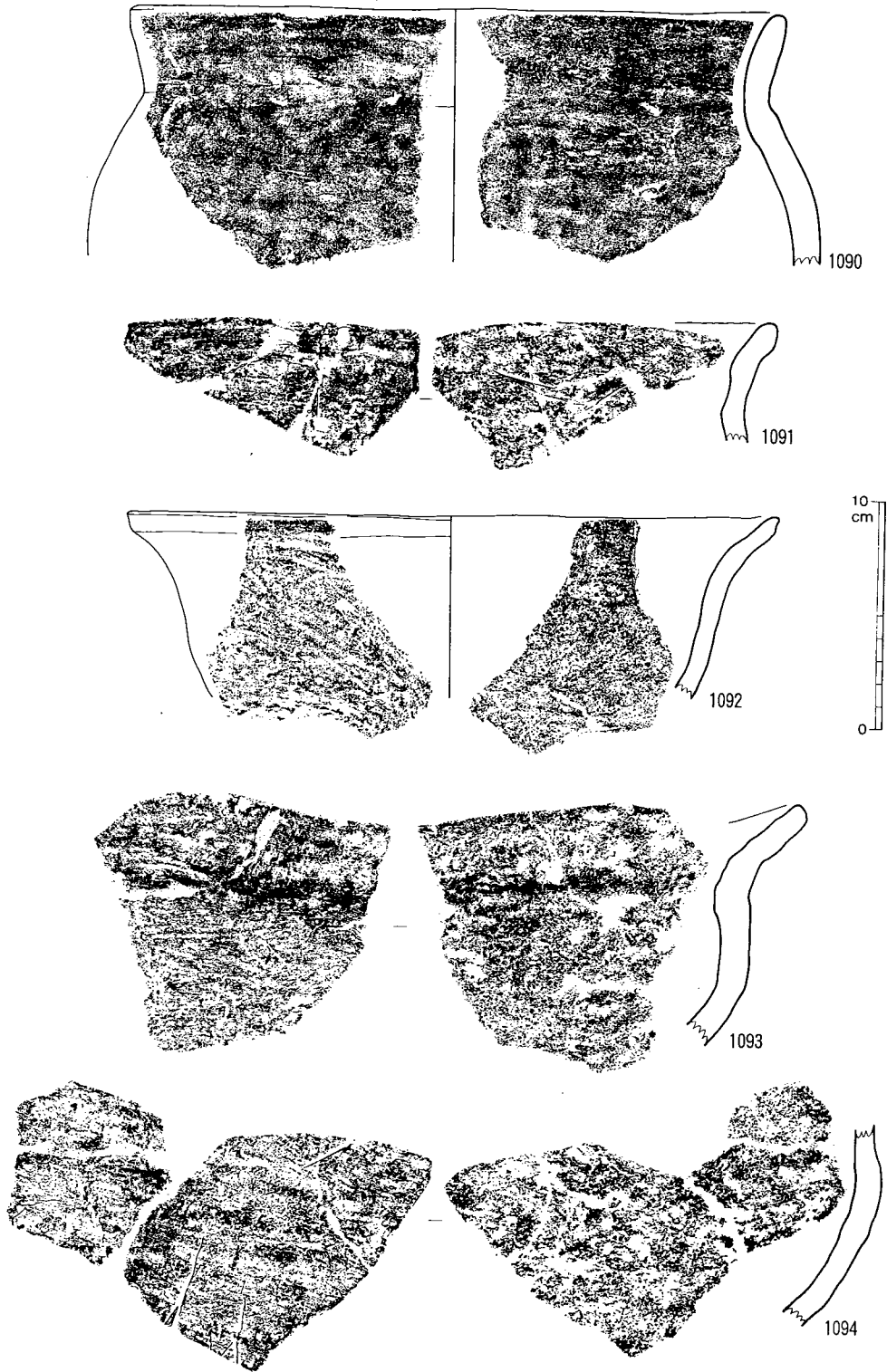
第 225 图 1 号沟出土土器实测图. 2 (1/3)



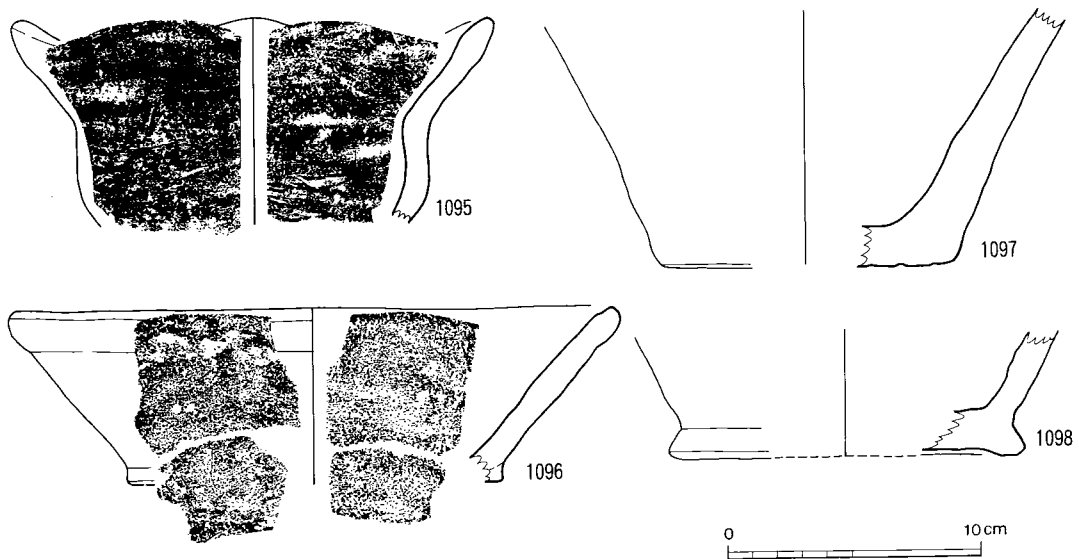
第 226 图 1 号沟出土土器实测图. 3 (1/3)



第 227 图 1 号沟出土器类测图. 4 (1/3)



第 228 图 1 号沟出土土器实测图. 5 (1/3)



第 229 図 1号溝出土土器実測図.6 (1/3)

石器 (第230図) 石器は蛇紋岩製磨製石斧を2点、石錘1点、くぼみ石1点を図示した。303は剥離痕を多く残す小型の片刃石斧。304は全面を丁寧に研磨する両刃石斧。305は両側縁が緊縛などにより擦れており、また裏面は磨石のように全面が平坦に研磨されている。

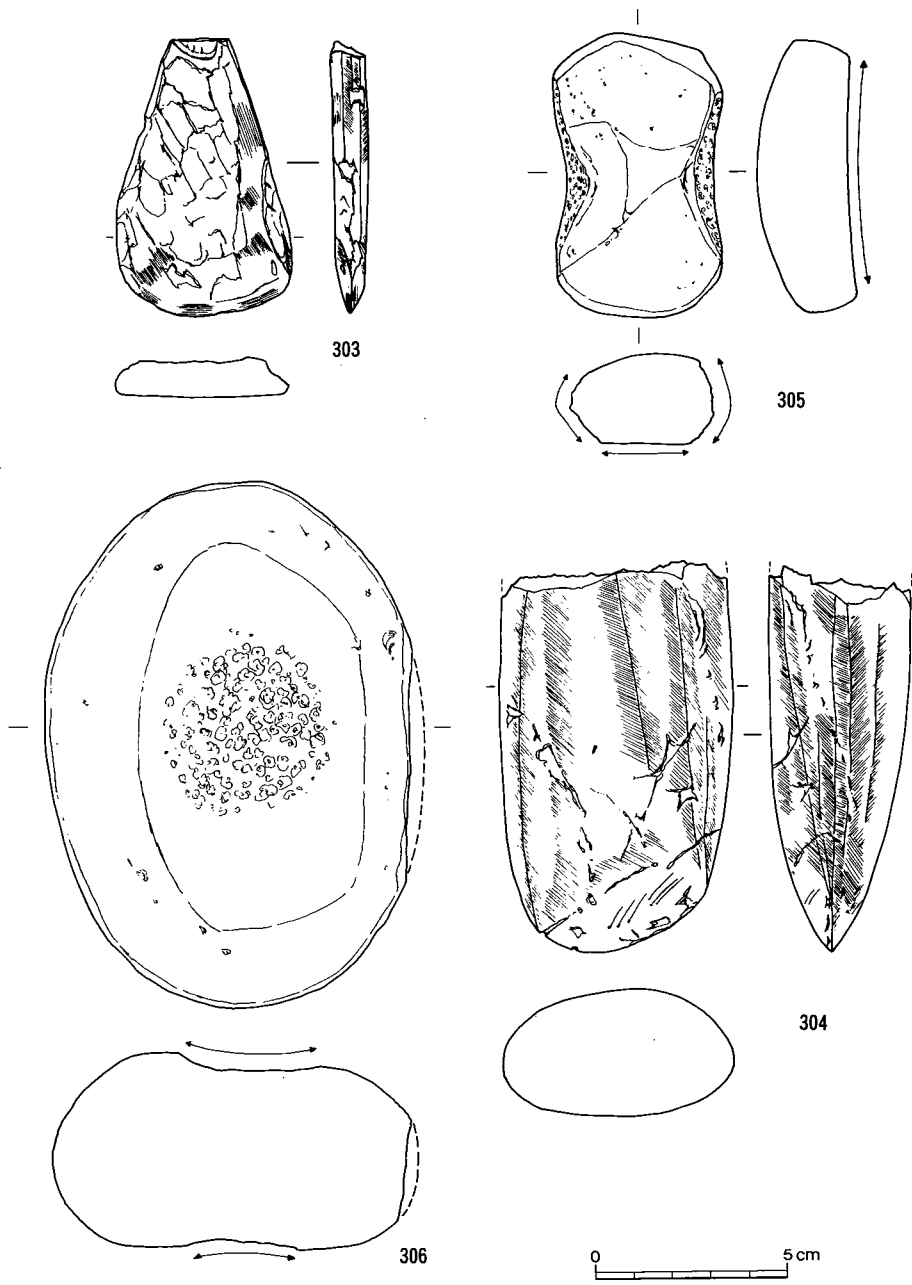
土製円盤 (第280～285図) 土製円盤は5点出土しているが、そのうち4点を図示した。

(6) ピット

本遺跡では約1500基に及ぶピットが検出されたが、出土遺物からみてもその大部分は縄紋時代に属するものと考えられる。遺物については事項の「(7)ピット・包含層出土の遺物」で取り上げるが、ここでは特筆すべき2基のピットについて説明を行なう。

ピット356 (図版24 第231・251図)

ピット356は調査区中央部の北寄りVI F区に位置する。このあたりは包含層が厚く遺物も多く含まれていた地区で、ピットの数も多い。平面プラン65×57cmの楕円形で、径35cmの底面までの深さは28cm。埋土は他のピットと同じ暗褐色粘質土であるが、このピットの上部から特殊な器形の高坏が出土した。この高坏 (第251図) は坏部の口縁部の一部が欠損するだけで、ほぼ完全な形を留めている。器高は14.6cm、坏部は四角形で対角線上で16.2cm、平行する口縁部の中心部で14.5cmを測る。四隅が高く波頂部になるが、この波頂部の対向する一対には把手があり、他の一対には把手がない。つまり、把手は2つだけ。波頂部と波頂部の間の辺にはそれぞれ2つの窓があり、真横から見ると邪視文的効果を表出する。波頂部の突起には刺突文が施

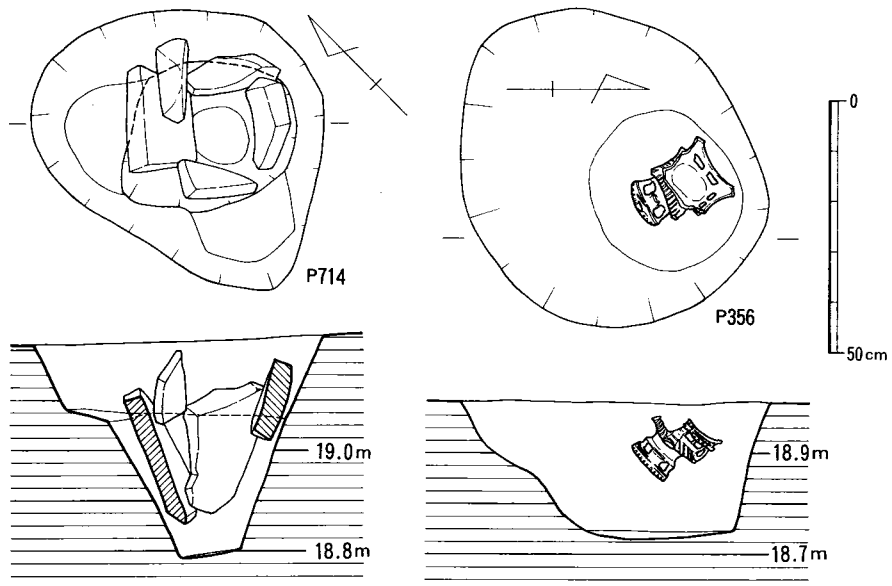


第 230 图 1 号沟出土石器实测图 (1/2)

され、口縁部付近には1本の横位沈線文を囲むように2本の沈線文が施され、一番下の沈線文にはさらに刺突文が施される。また、窓の下にも斜位の沈線文的な刺突文が施される。脚台部の底径は10.5cm、坏部と脚台部の接合部である最も細い部分で径7.3cmを測る。脚台部にも窓が開くがこれは4方向で、窓と窓の間には突起状の小さな高まりがある。底部に近い部分は分厚く肥厚して、ここにも沈線文と刺突文とが施されるが、沈線文のモチーフは鐘崎式と西平式の間でもより鐘崎式に近い一群の文様に類似しようか。そして、坏部の施文部と脚台部の施文部には赤色塗布が行なわれる。坏部と脚部は別々に作られ接合されているが、窓の位置関係にはその接合時に生じた若干のズレがある。この高坏は窓が開いていること、赤色塗布が行なわれること、特異な器形といったこと等から、日常容器とは違った用途が当然想定される。しかし、出土状況から見る限りでは必ずしもそれを十分に物語る根拠は得られていない。

ピット714 (図版24 第231図)

ピット714は調査区は調査区のはほぼ中央部V F区に位置する。このあたりは包含層が厚く遺物も多く含まれていた地区で、ピットの数も多い。平面プラン64×48cmの隅丸三角形ともいえる不整楕円形で、北西部と南部に小さなテラスが付き、径12cmの底面まで深さ40cmを測る。埋土は他のピットと同じ暗褐色粘質土であるが、寝石として長さ15~30cm程度の扁平な石が円形に組み込まれた状態で出土した。このうち最も大きい北西部の石は第275図457に図示したように34.5×22.2×4.1cmの台石である。



第 231 図 ピット714・356実測図 (1/15)

(7) ピット・包含層の遺物

本遺跡ではパンケース300箱分の遺物が出土したが、このうちピットや包含層から出土した遺物は84箱を数える。包含層の遺物は国土座標に従い、10mグリッドを組んで取り上げを行った。遺物の出土が特に多く包含層も厚く残っていた調査区中央部では2mグリッドを組んで取り上げを行なったが、観察表では10mグリッドの区分けに従いその出土地点を表記している。ここではピット出土の遺物と包含層出土の遺物を型式分類に従って一緒に図示した。

土器（第232～265図）1105～1115は西和田式。小破片は調査区全体から出土したが、大きな破片については調査区中央部南東寄りⅧD区のピットや包含層に集中する。器面調整にはナデられるものもあるが、基本的には二枚貝による条痕調整が内外面に施される。文様は横位の直線的な凹線文を中心に凹点文や曲線文が組合わさる。口縁端部には凹点文がほぼ全周に巡らされる。1113と1115は一見同一個体に見えるが、器厚や胎土が微妙に異なり、また1115の口縁端部には二枚貝による押圧状の刻みが施されることから、両者は明らかに別個体である。西和田式は縄紋後期初頭として位置づけられ、中津式との関係が注目されているが、本遺跡では中津式はまったく出土していない。

1116・1117は福田K2式である。いずれも有文の鉢形で3本沈線文を基本とし、口縁部内面の下位には明瞭な稜が作出される。1116には縄紋は施されないが、1117にはRLの後に沈線文が施される。器面調整はナデ。

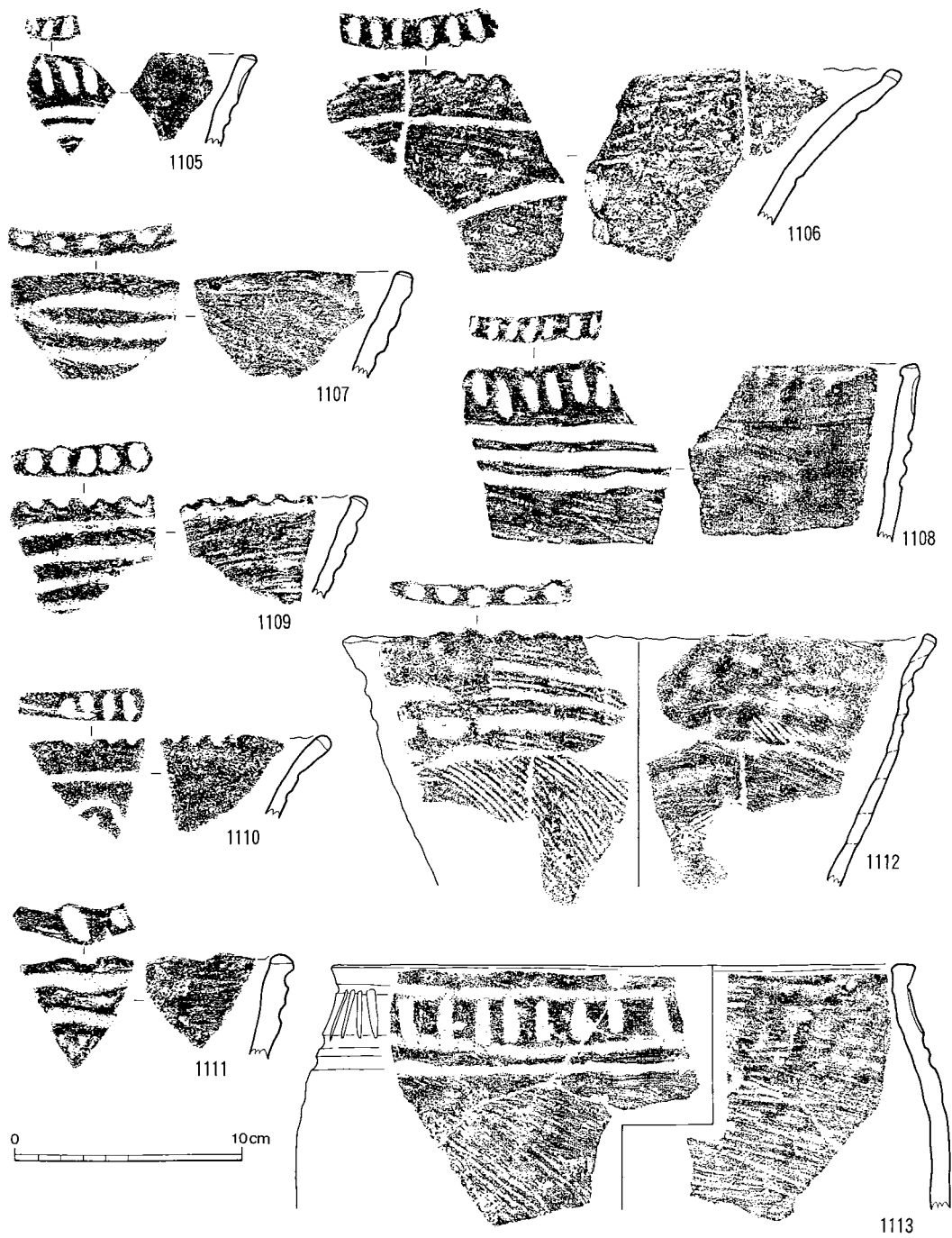
1118～1197は小池原上層式もしくはそれに若干先行するであろう一群。小池原上層式とされる一群の中でも、口縁部を肥厚させその中央部と下端部（頸部との境）に沈線文を施すものや、口縁部と胴部の文様が頸部文様を通じて連続的に繋がるものは比較的古い要素と考えられる。縄紋は基本的にRLで沈線文以前に施されるが、1121のように巻貝疑似縄紋が施されるのはごく稀であるが確実に存在する。有文土器については、縄紋と沈線文とが丁寧かつ精緻に組合わさる器形には胴部が張って口縁部が強く外反する鉢（1121・1125・1166・1186～1196）とボウル状鉢（1118～1120・1161～1165）と口縁部文様だけの深鉢（1124・1133）とが、縄紋がなく簡略化・小型化された文様が施される器形には口縁部文様だけの深鉢（1138～1149）と鉢（1123・1134～1137・1150～1160）とがそれぞれにある。波頂端部の文様は後続する鐘崎式のそれに繋がるものと仮定するなら、渦巻状のものが古く、渦巻文を意識した二つの横向きの「U」字文が向かい合うのが続き、さらに横向きの「8」字状文様へ変遷していくと考えられる。器面調整はナデが中心で、巻貝条痕文や一見二枚貝条痕文的なものもある。1131はボウル状鉢もしくは皿の脚台部である。小池原上層式にこのような器形が存在するのか管見にないが、文様は縄紋のない有文鉢に類似するので、取りあえずここに位置づけた。

1198～1224は鐘崎式。小池原上層式に比べて器高が低くなるにつれて文様が縦方向に圧縮され、外反していた口縁部は逆「L」字状になって上面に平坦面を作る、口縁部外面の肥厚した部分にあった沈線文は口縁端部へズリ上がる、波頂端部の横向きの「8」字状文様は2本の平行する横位の沈線文を両端と真ん中の3箇所に縦位の沈線文で区切るようになる、波頂部付近にあった刺突文も口縁部上面に移動する、胴部文様は鉤手文と渦巻文とが基本的には組合わさっているが沈線文は細く多条化する、という方向性で変化していく。これがさらに進行して鐘崎式の新しい段階になると、口縁部の形態はまた外反していく、胴部の渦巻文は波頂部へせり上がる、鉤手文と渦巻文が合体して流水文的な縦方向の波状文になる、といった変化を辿ることになる。この鐘崎式の有文土器では、器高の違い以外に深鉢と鉢との間に文様構成や器面調整等に明瞭な違いはなくなる。

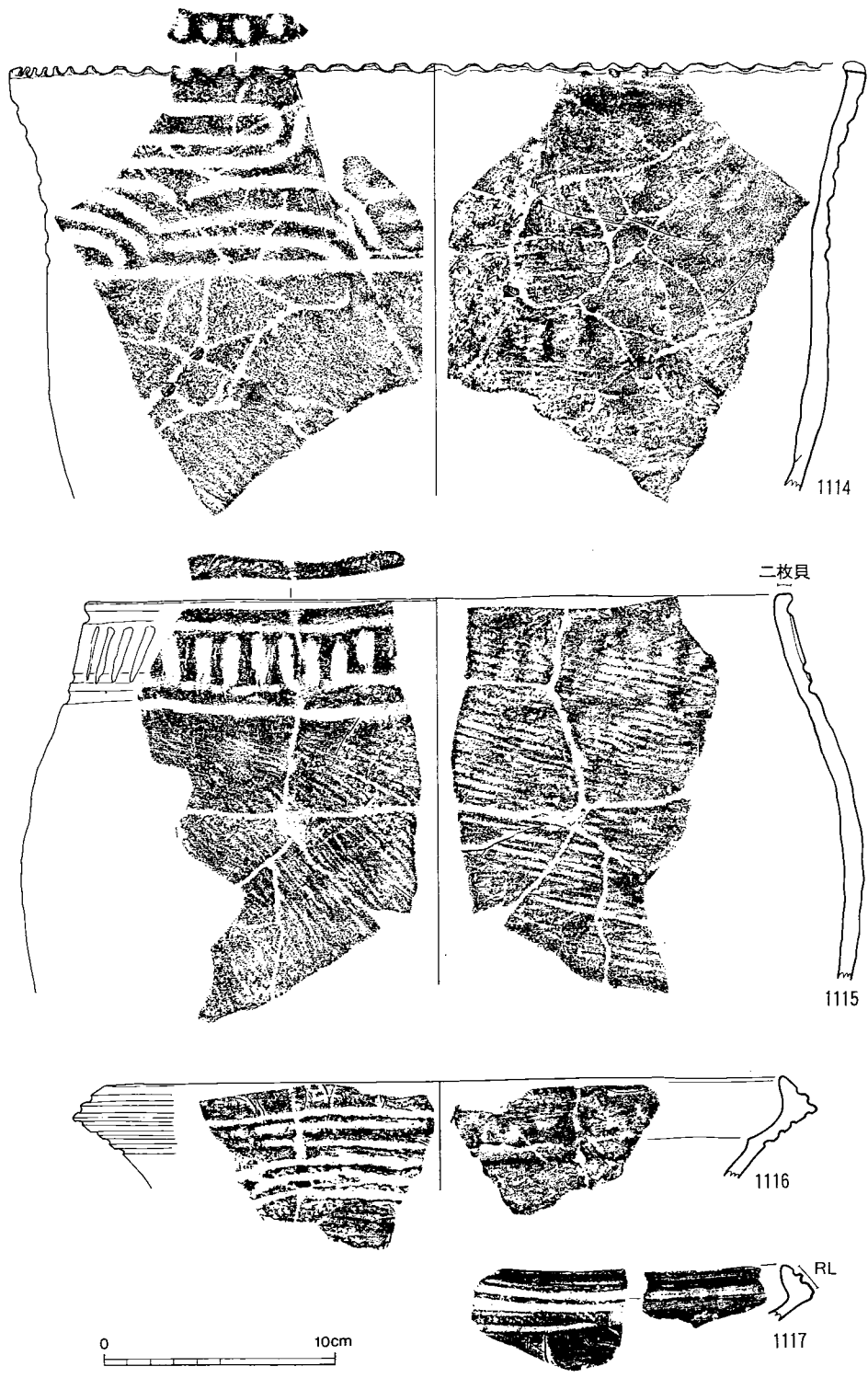
1225～1258は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群。従来、北久根山式という名称で表現されていた一群であるが、本来、北久根山式とは中・西北九州に分布する土器群であり、年代的に併行関係であっても地域色が強く別個の土器群として位置づけられる周防灘沿岸部のものについては、異なった名称が与えられるべきである。この段階は深鉢と鉢とで文様の構成が大きく異なり、器形と文様の整合性が明瞭になるのが最大の特徴である。1225・1236のように渦巻文が見られるが、これは鐘崎式の系譜と考える向きもあるが、鐘崎式の新しい段階では渦巻文は消滅していることと、深鉢と鉢との器形による文様の分化が行なわれた時点以降で見られる現象なので、他地域からの影響と考えるのが妥当であろう。RL縄紋も見られるが、巻貝や二枚貝による疑似縄紋が多用される。1227の波頂部の「S」字状突起、1233の口縁部内面の円形もしくは渦巻状突起、1234の波頂部の縦位突起、1235の2つの突起等、突起や粘土紐による文様も多い。深鉢は直線的に立ち上がる口縁部から、内湾ぎみに肥厚して横位の沈線文が多用されるものがより新しく位置づけられる。鉢は胴部の張りが強いものから、次第に緩やかになっていく。1257は4方向に把手が付くが、対向するものどうしがそれぞれ1単位と2単位に分かれる小型の鉢。波頂部にはおそらく巻貝の殻頂部による疑似縄紋が施される特異な資料である。

1259～1266は西平式と太郎迫式、1267～1273は三万田式と鳥井原式である。1270はおそらく注口土器になるであろう。

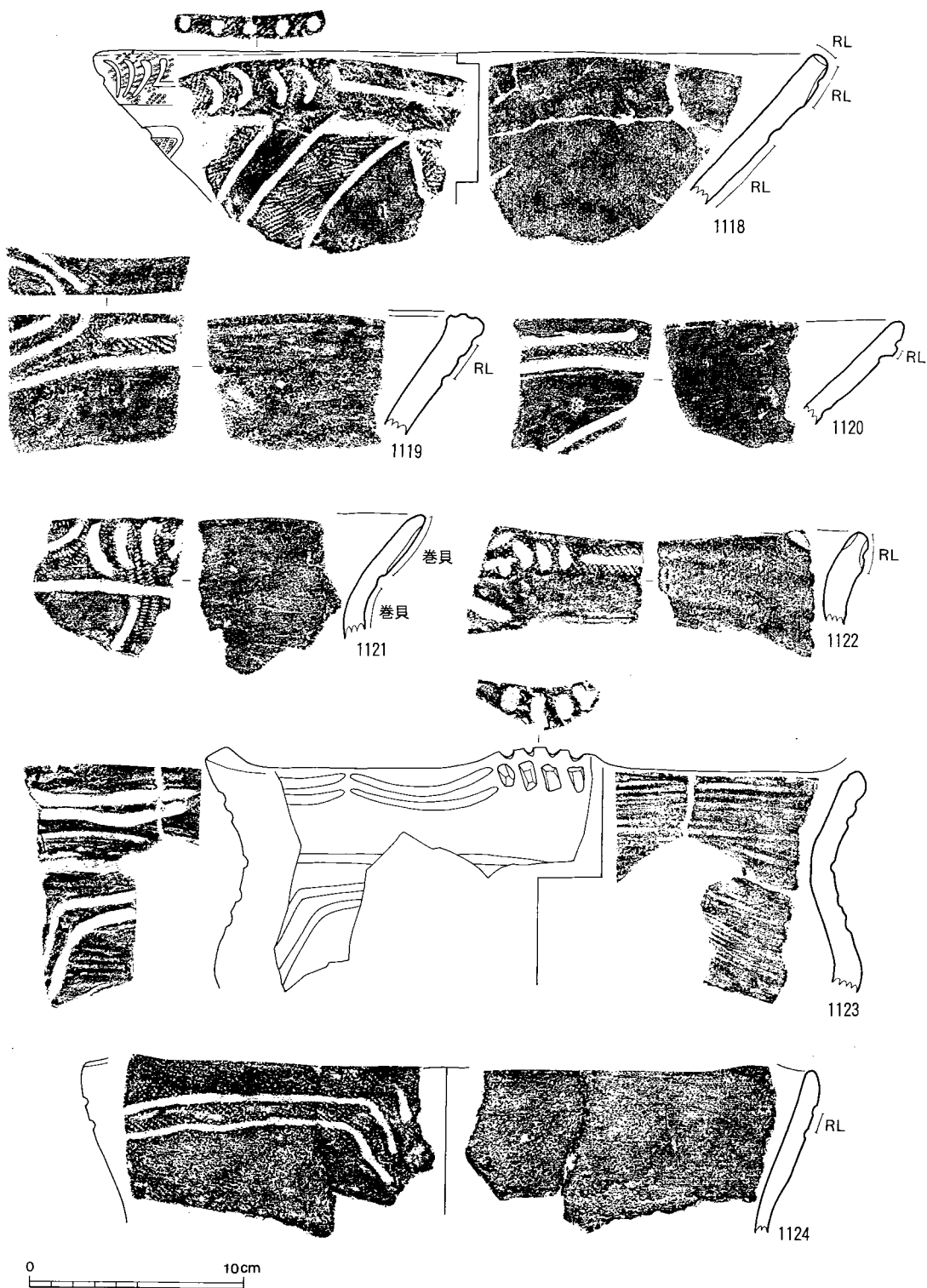
1274～1317は無文の深鉢で、小池原上層式から西平式以前に位置づけられるものである。1274～1282については、器形、口縁端部の沈線文と刺突文、把手等から小池原上層式や鐘崎式に位置づけられるものであるが、それ以外については年代的な位置づけが難しい。1283は二枚貝らしき条痕文が施され、あるいは西和田式に属するものかもしれない。1305のように頸部がくびれるものは鐘崎式と西平式の間に位置づけられよう。1318・1319はボウル状になる。1320～1326は小型の鉢。1327・1328は浅鉢になろうか。1329～1352は各種の底部。1334・1335は西



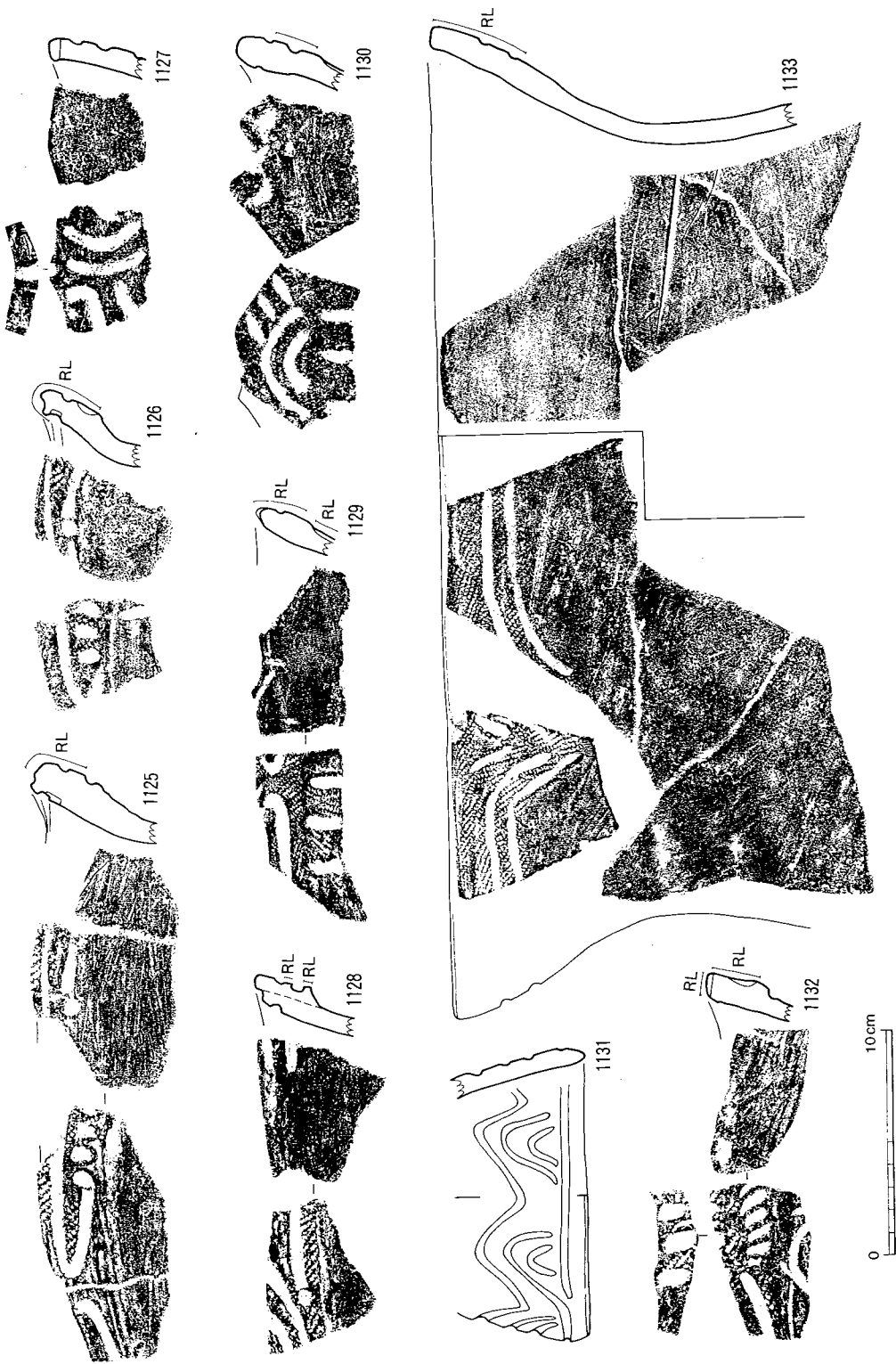
第 232 図 ピット・包含層出土土器実測図. 1 (1/3)



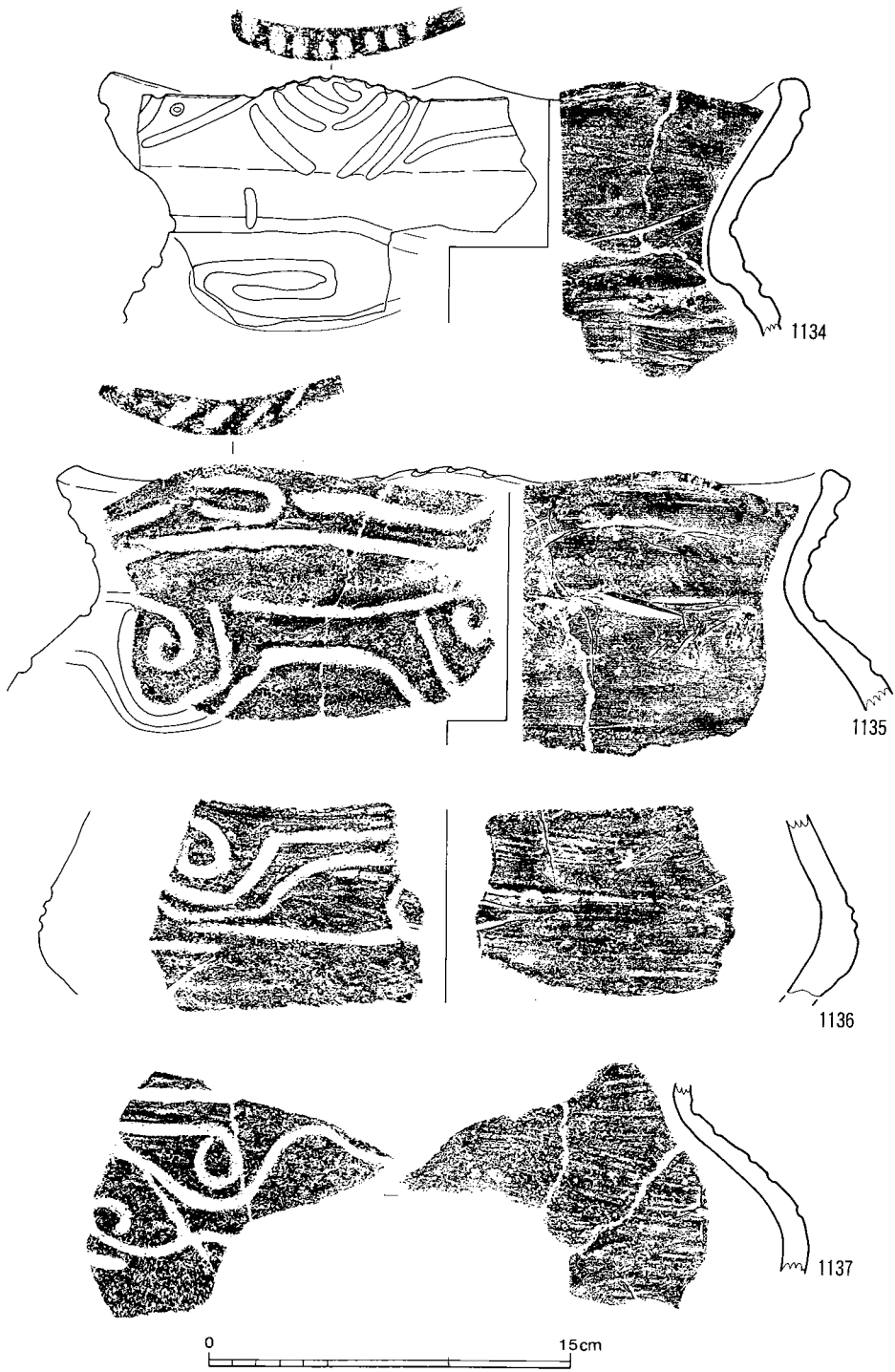
第 233 図 ピット・包含層出土土器実測図. 2 (1/3)



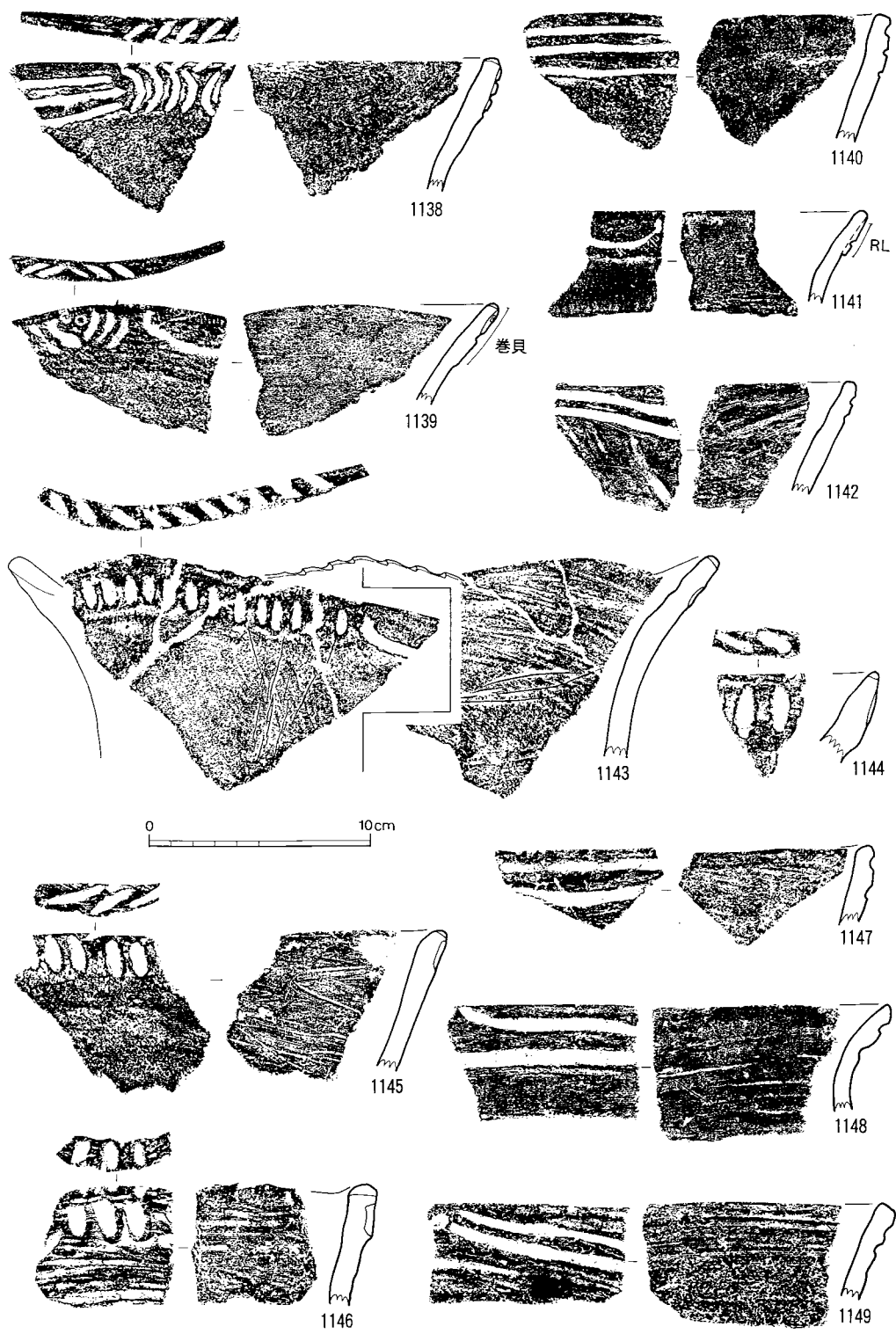
第 234 図 ピット・包含層出土土器実測図. 3 (1/3)



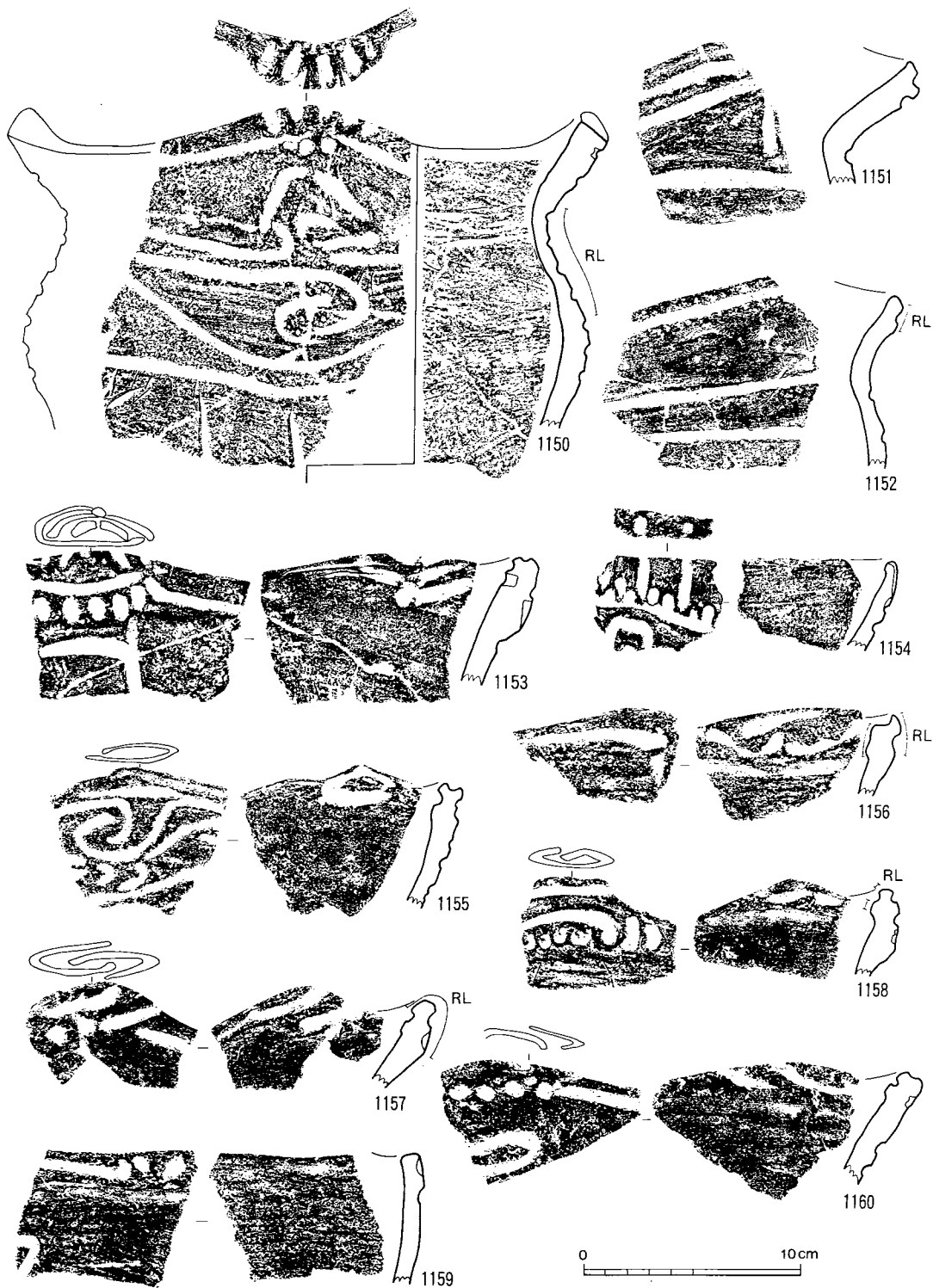
第 235 図 ピット・包含層出土土器実測図. 4 (1/3)



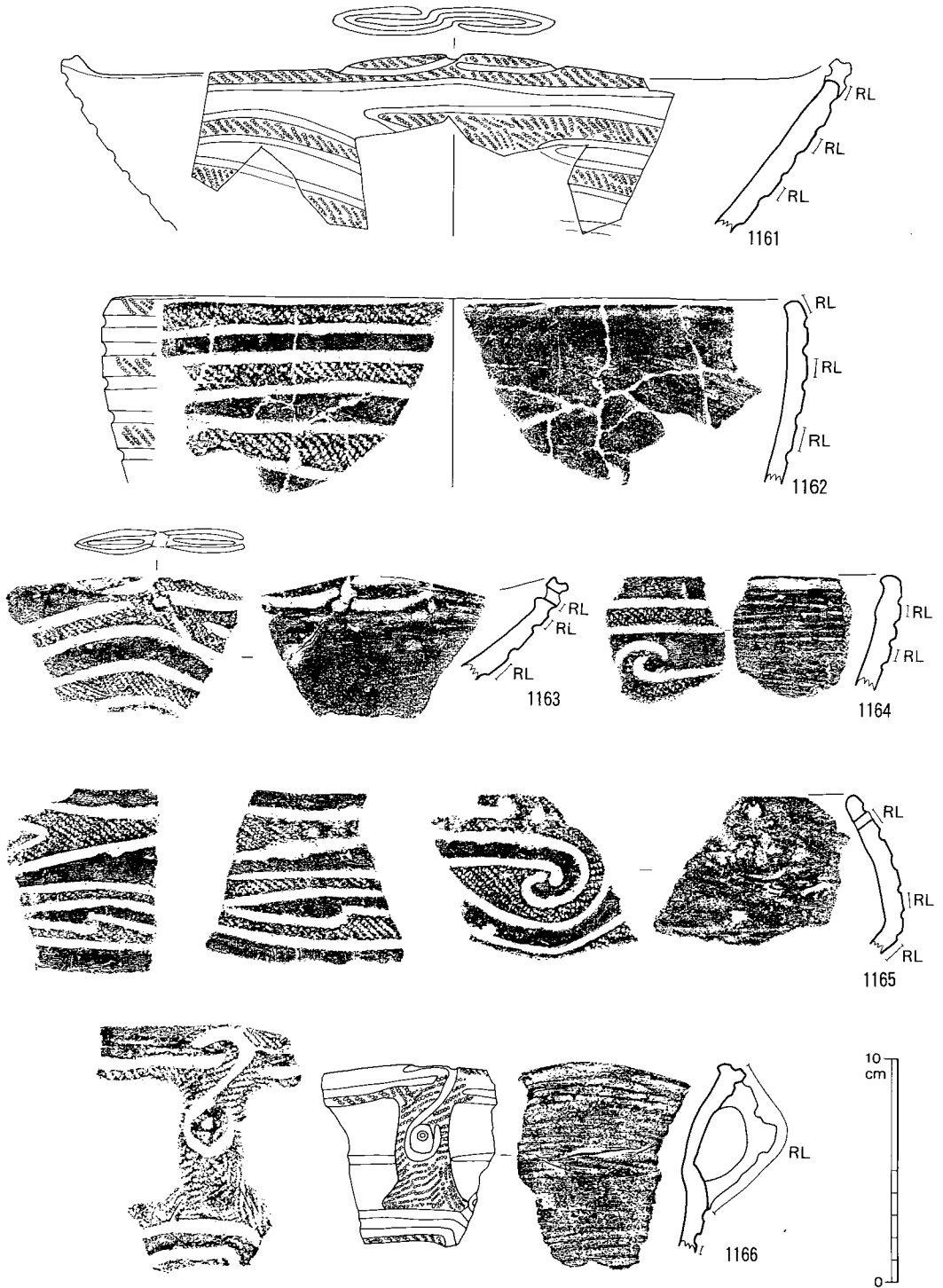
第 236 図 ビット・包含層出土土器実測図. 5 (1/3)



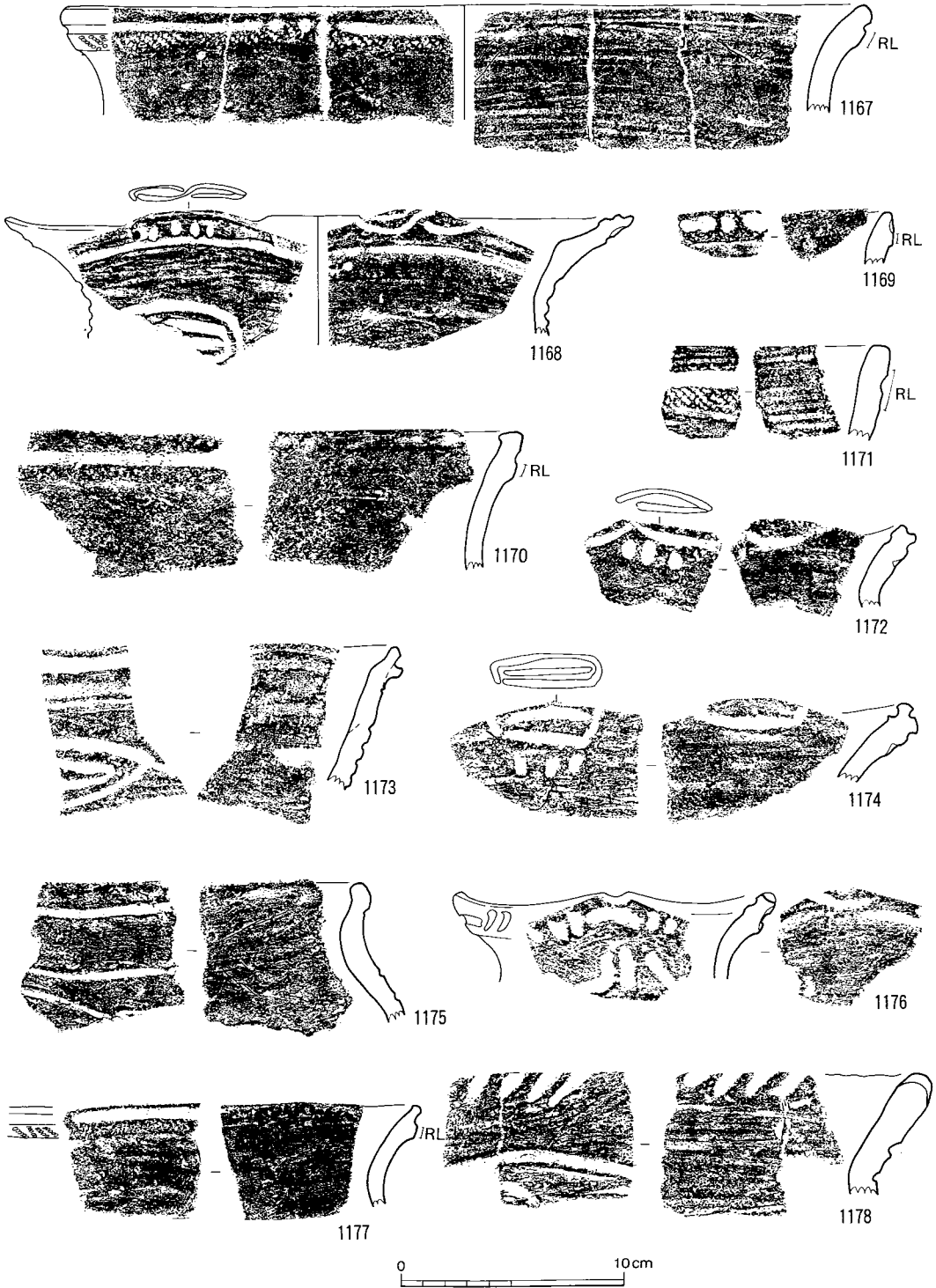
第 237 図 ピット・包含層出土土器実測図. 6 (1/3)



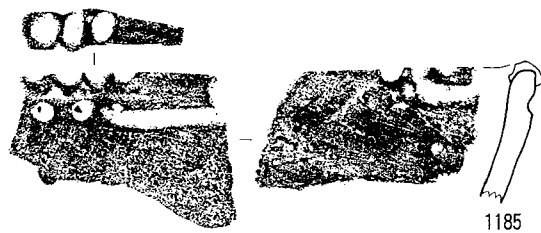
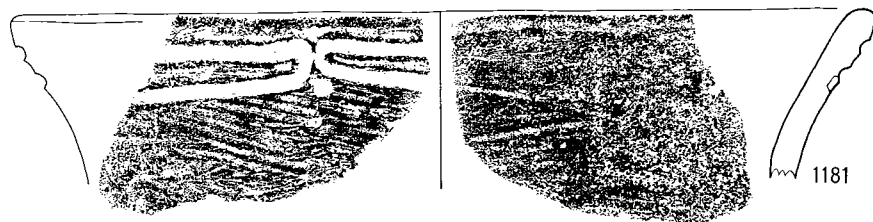
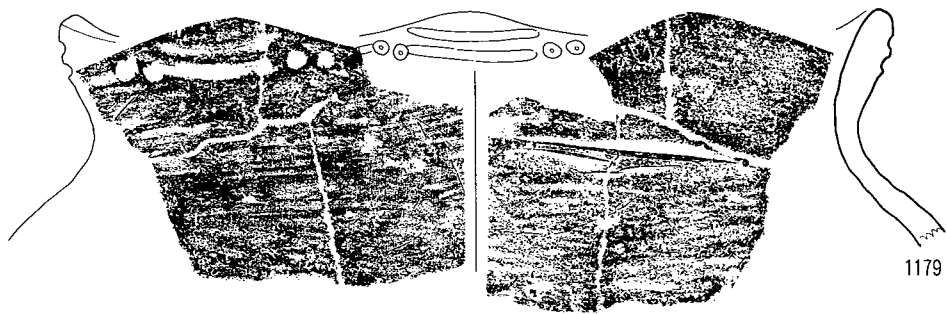
第 238 図 ピット・包含層出土土器実測図. 7 (1/3)



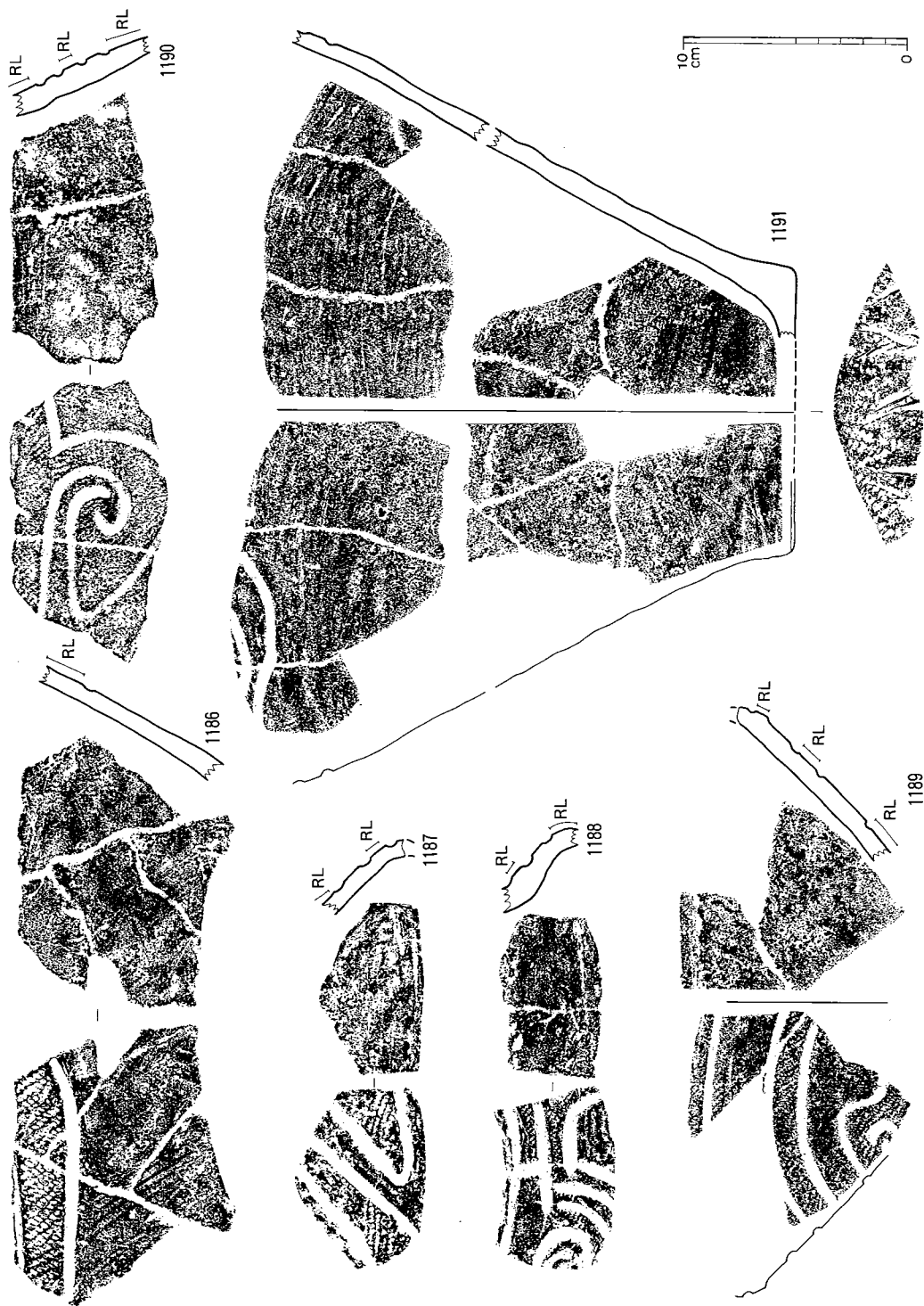
第 239 図 ピット・包含層出土土器実測図. 8 (1/3)



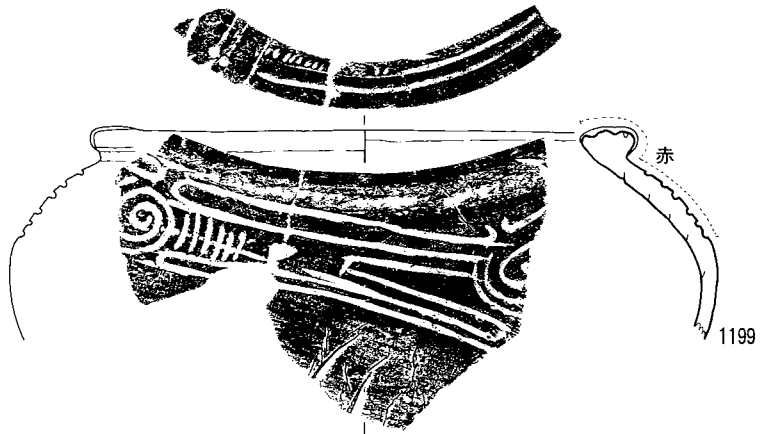
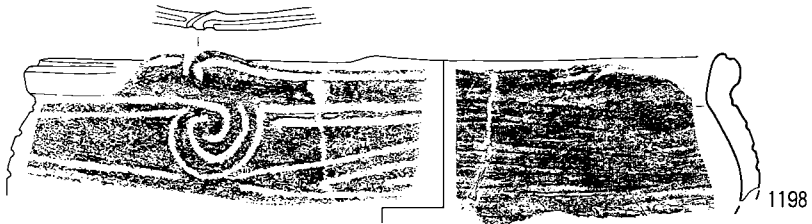
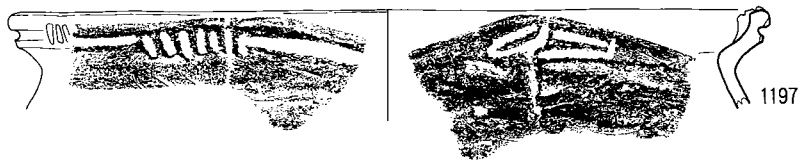
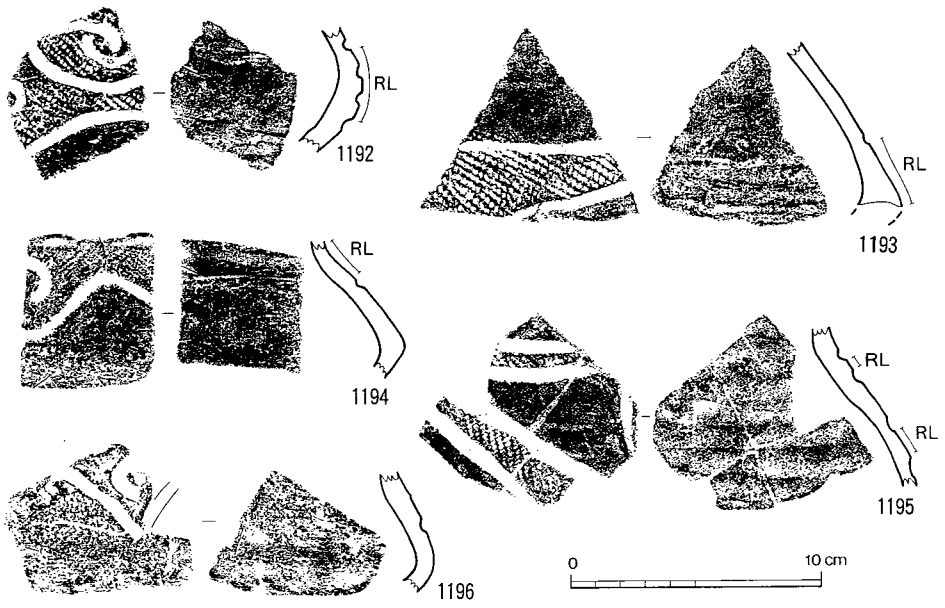
第 240 図 ピット・包含層出土土器実測図. 9 (1/3)



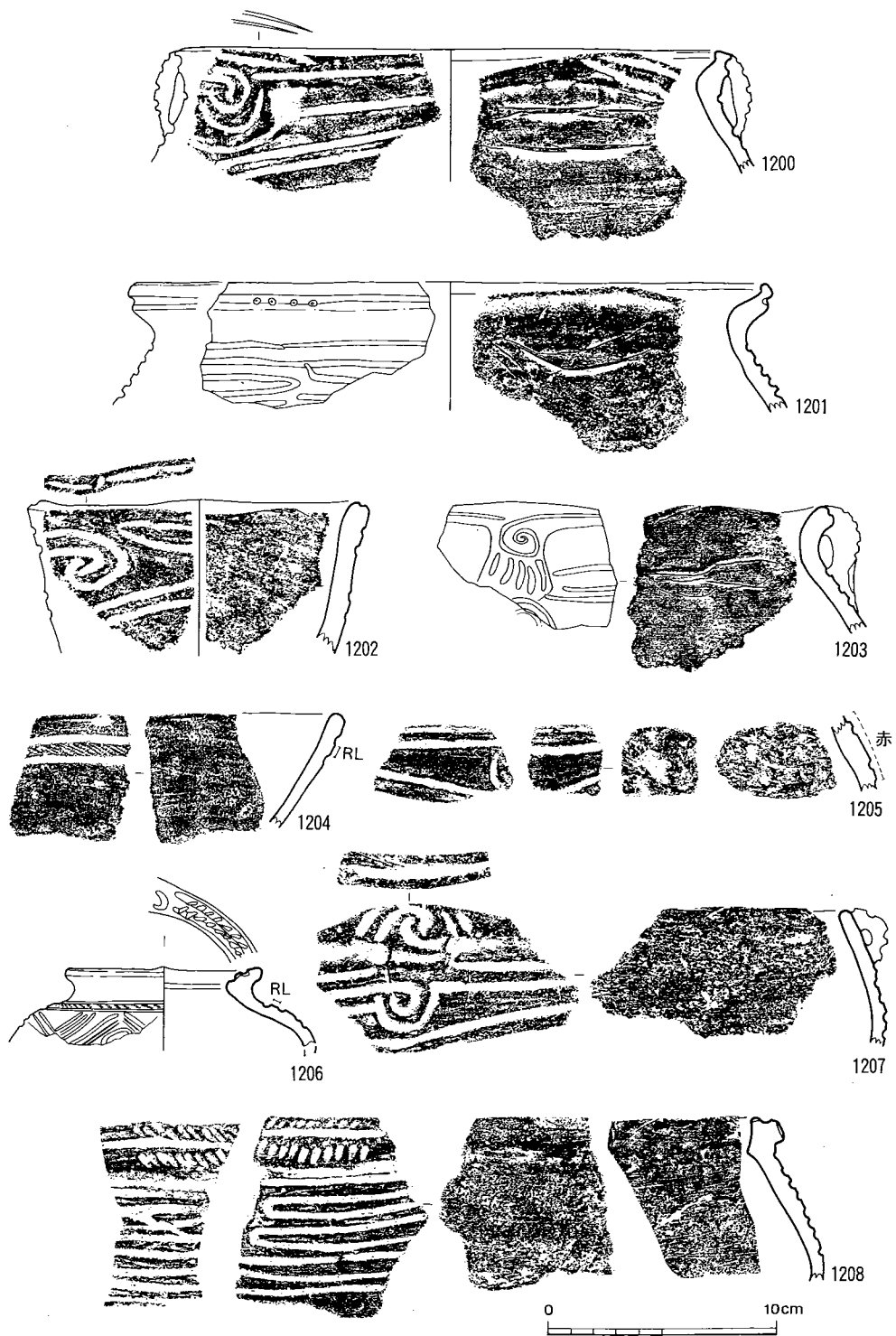
第 241 図 ピット・包含層出土土器実測図. 10 (1/3)



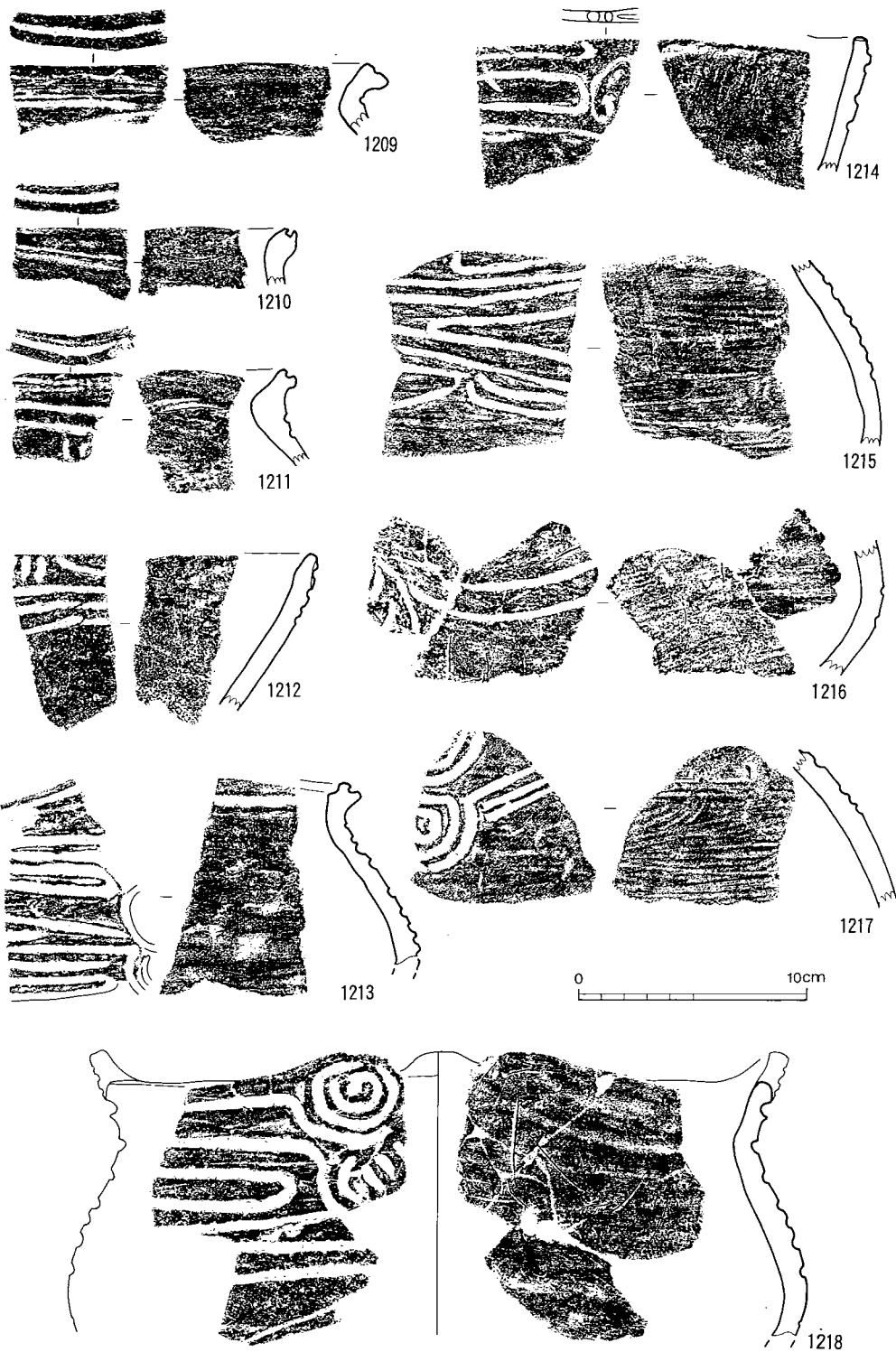
第 242 図 ピット・包含層出土土器実測図. II (1/3)



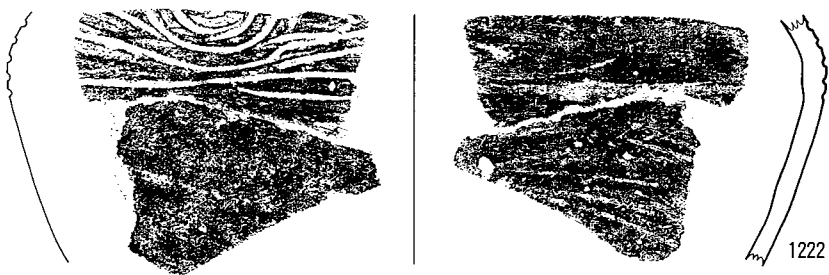
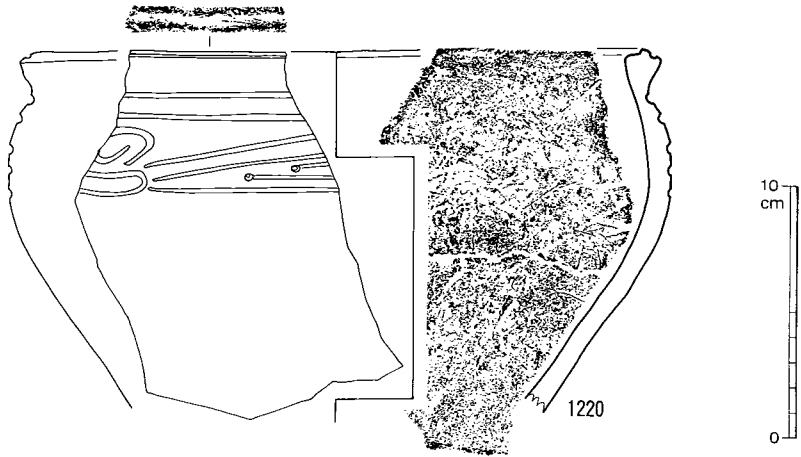
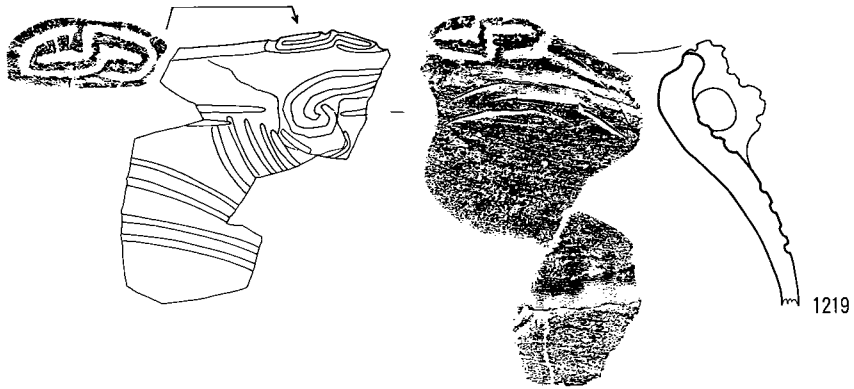
第 243 図 ピット・包含層出土土器実測図. 12 (1/3)



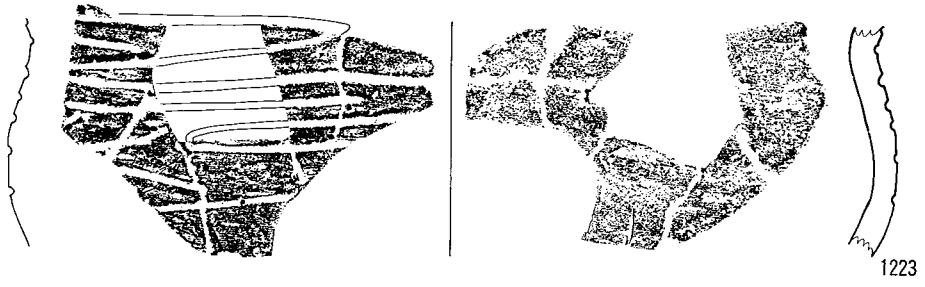
第 244 図 ピット・包含層出土土器実測図. 13 (1/3)



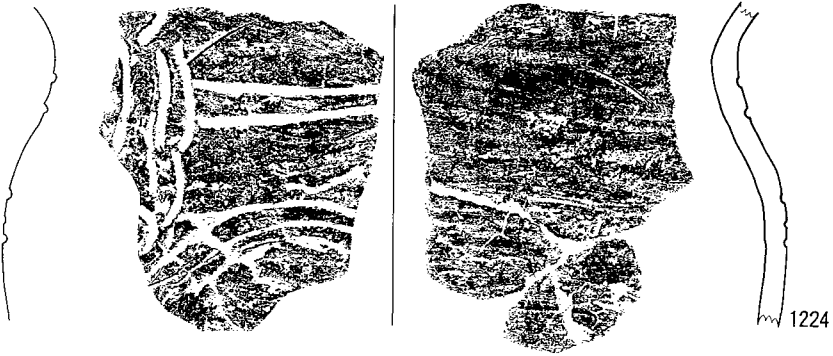
第 245 図 ピット・包含層出土土器実測図. 14 (1/3)



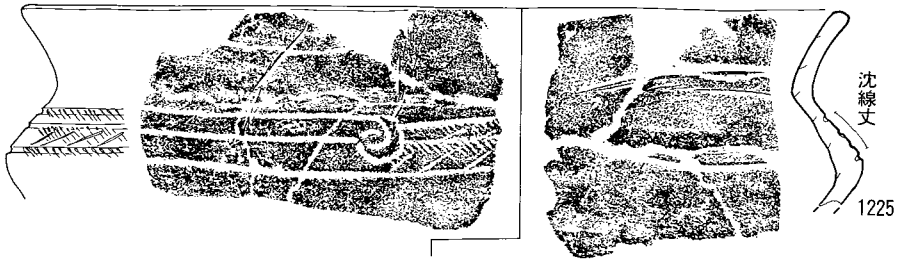
第 246 図 ピット・包含層出土土器実測図. 15 (1/3)



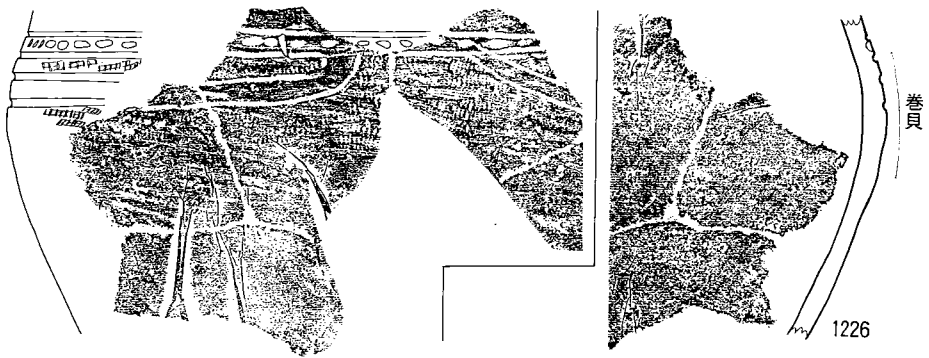
1223



1224



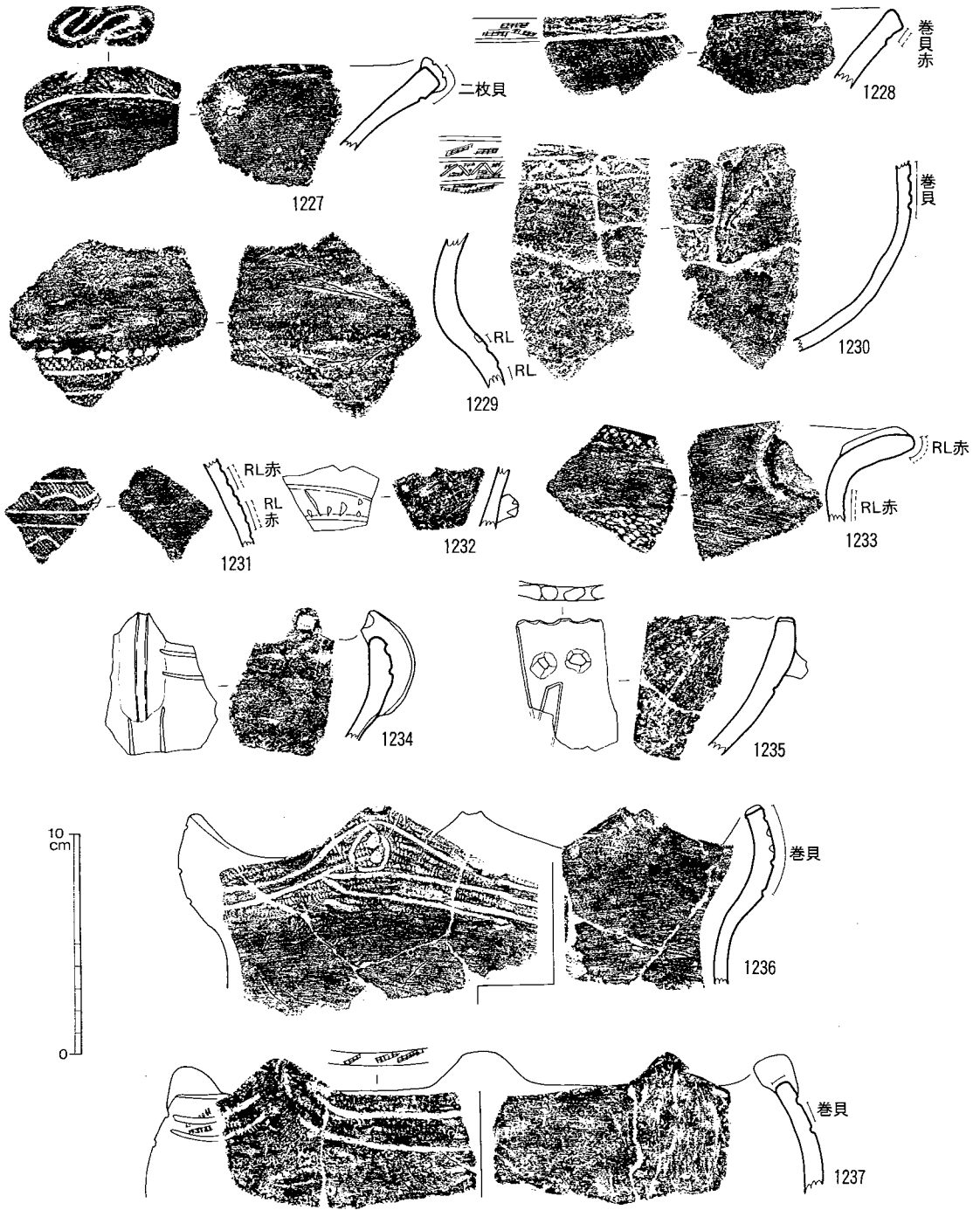
1225



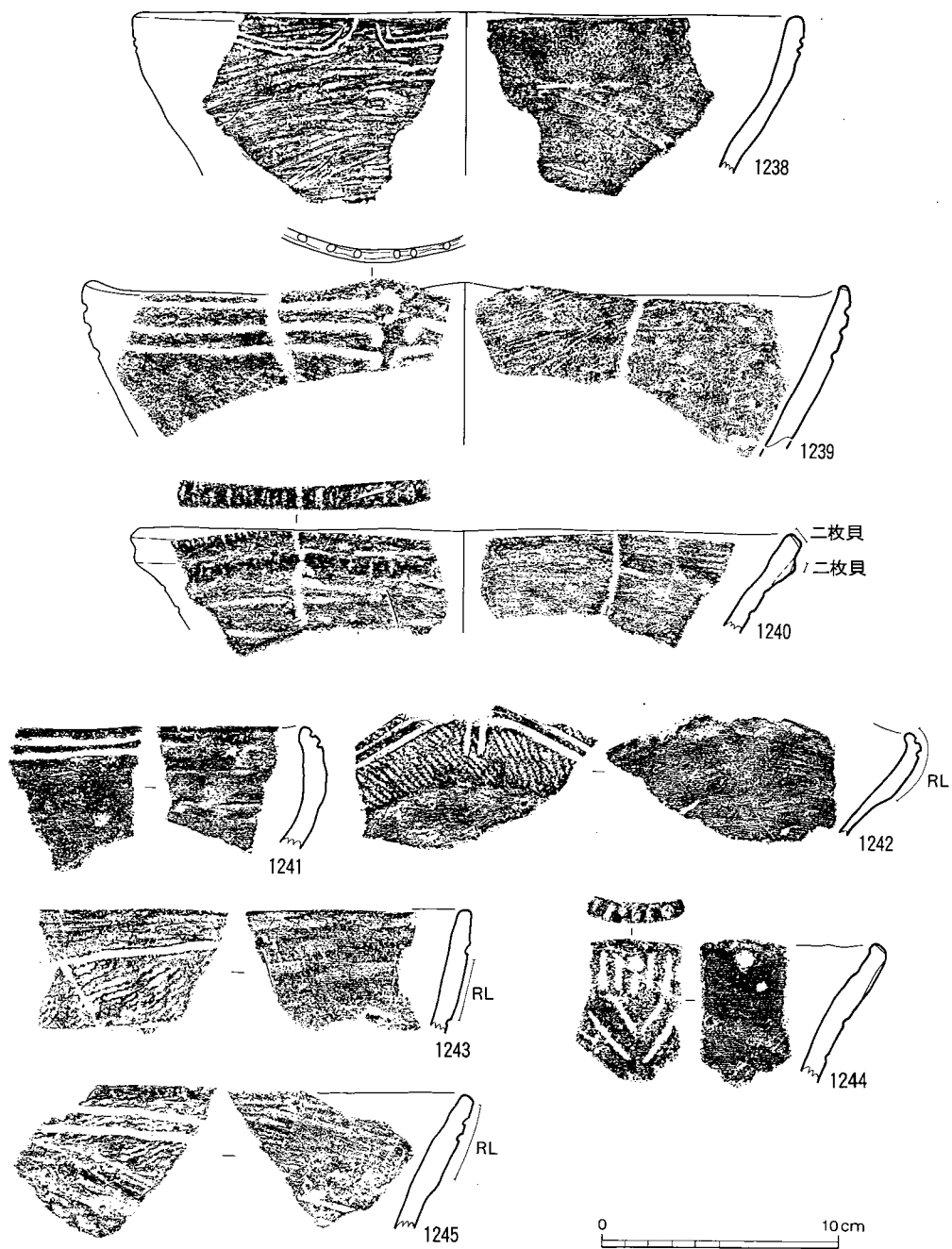
1226



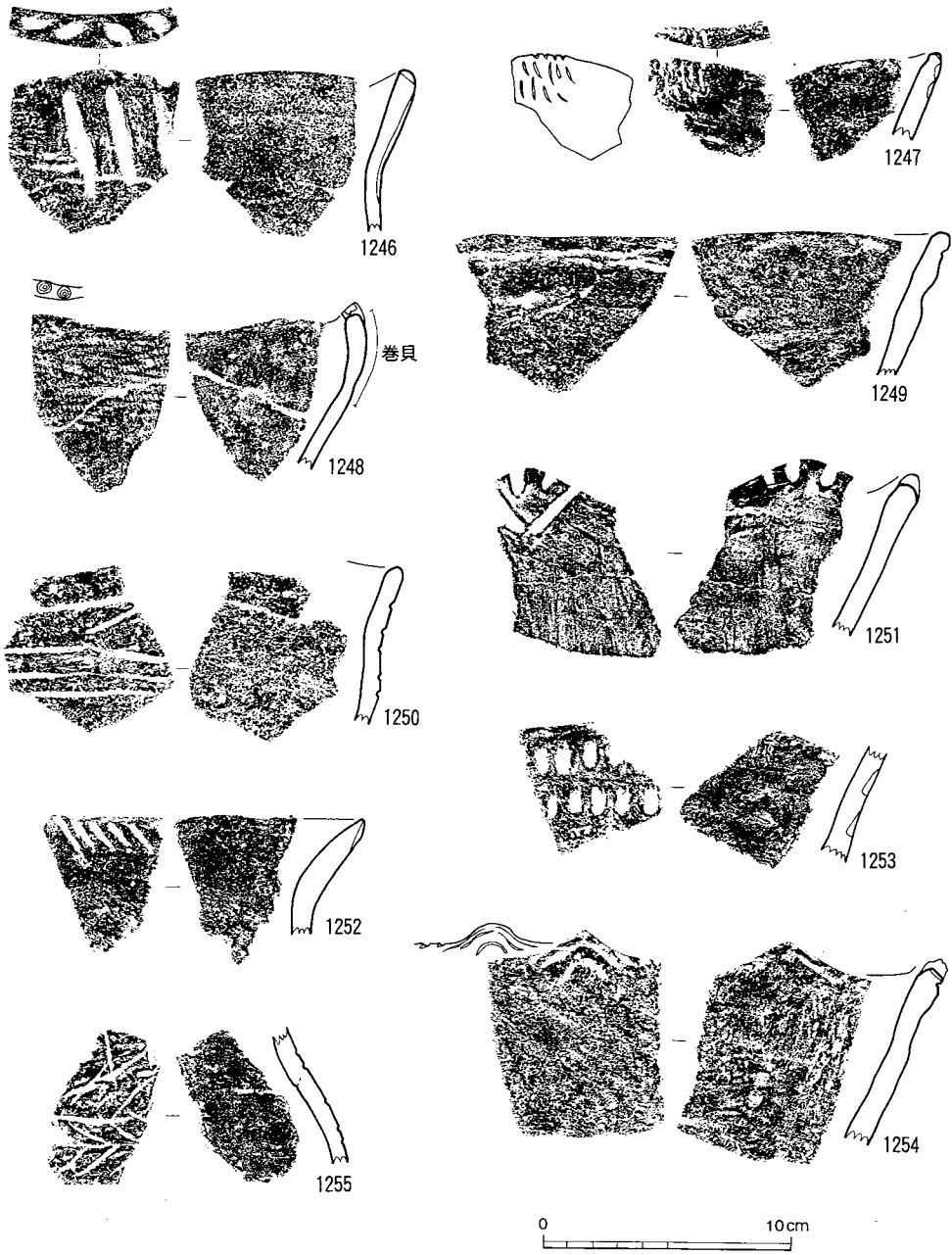
第 247 図 ピット・包含層出土土器実測図. 16 (1/3)



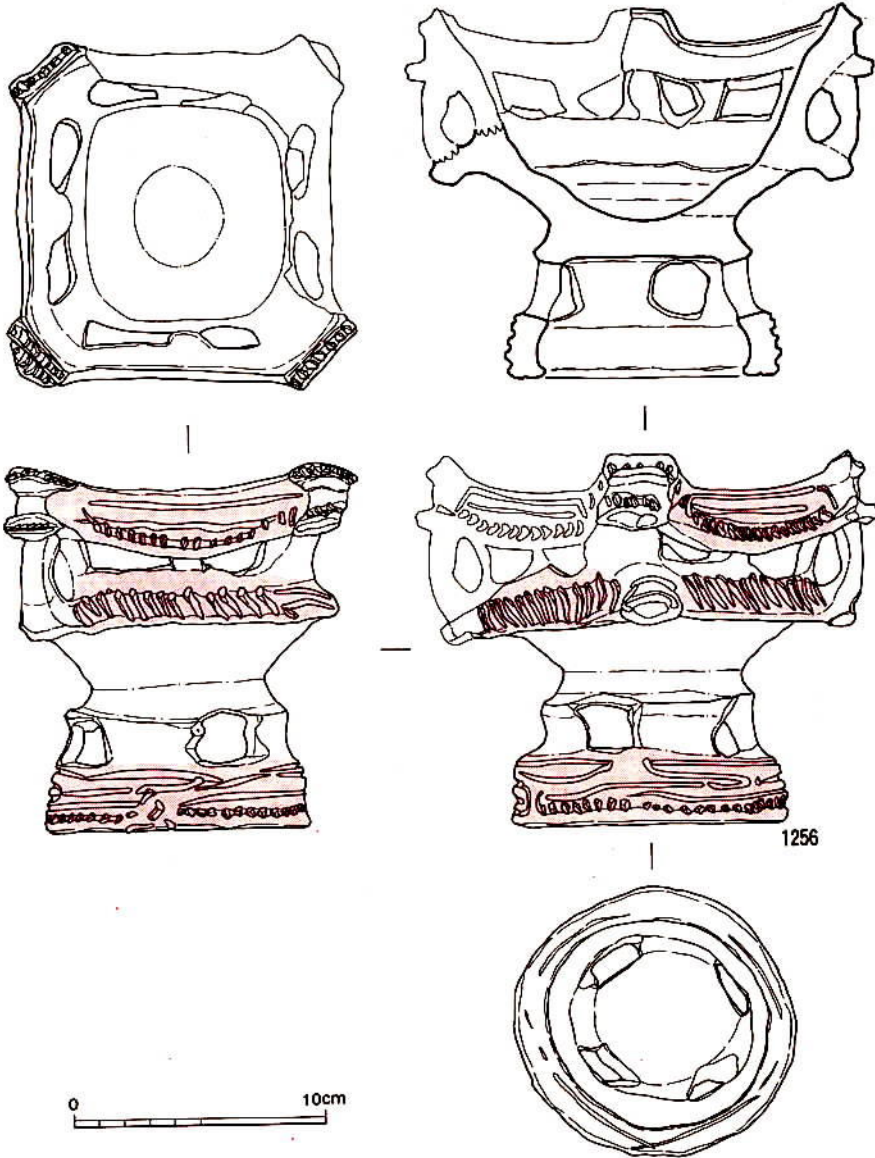
第 248 図 ピット・包含層出土土器実測図. 17 (1/3)



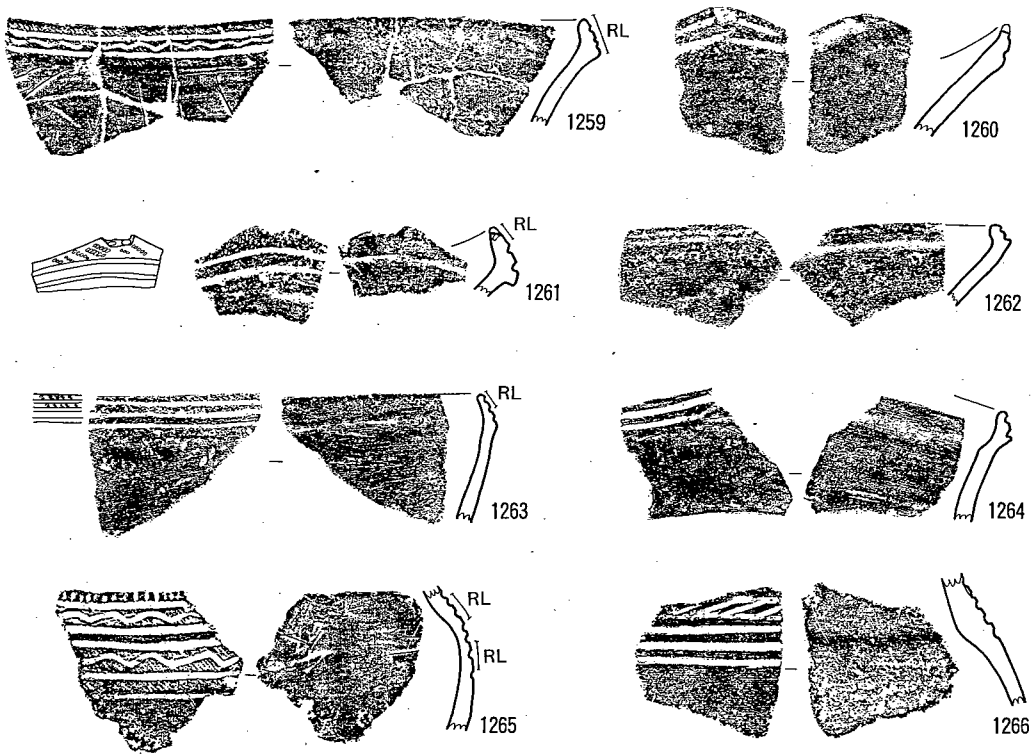
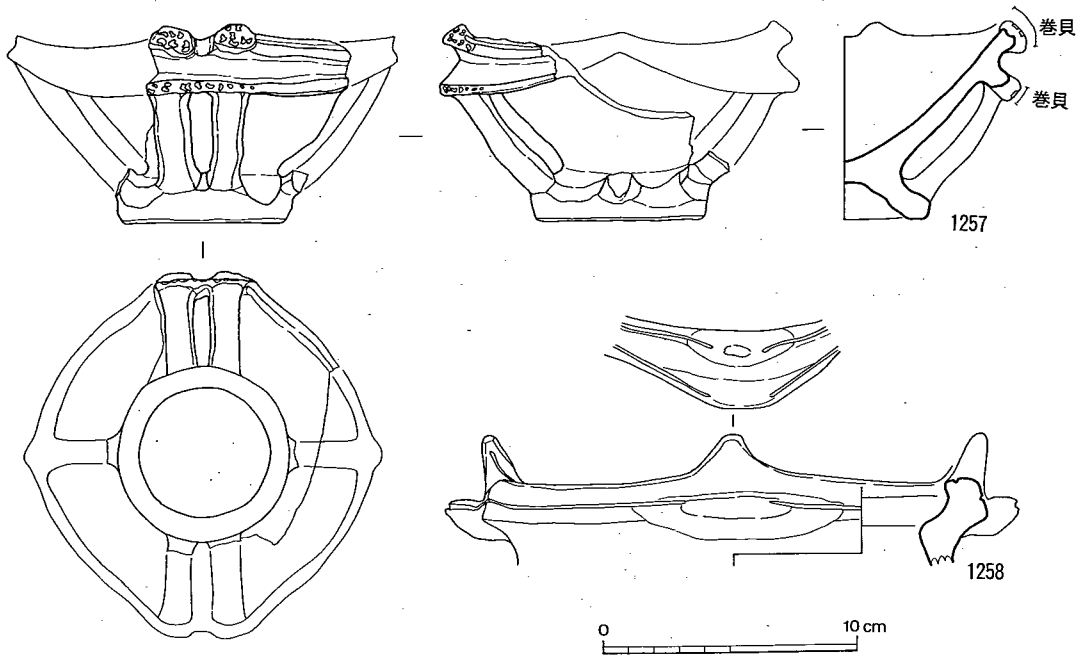
第 249 図 ピット・包含層出土土器実測図. 18 (1/3)



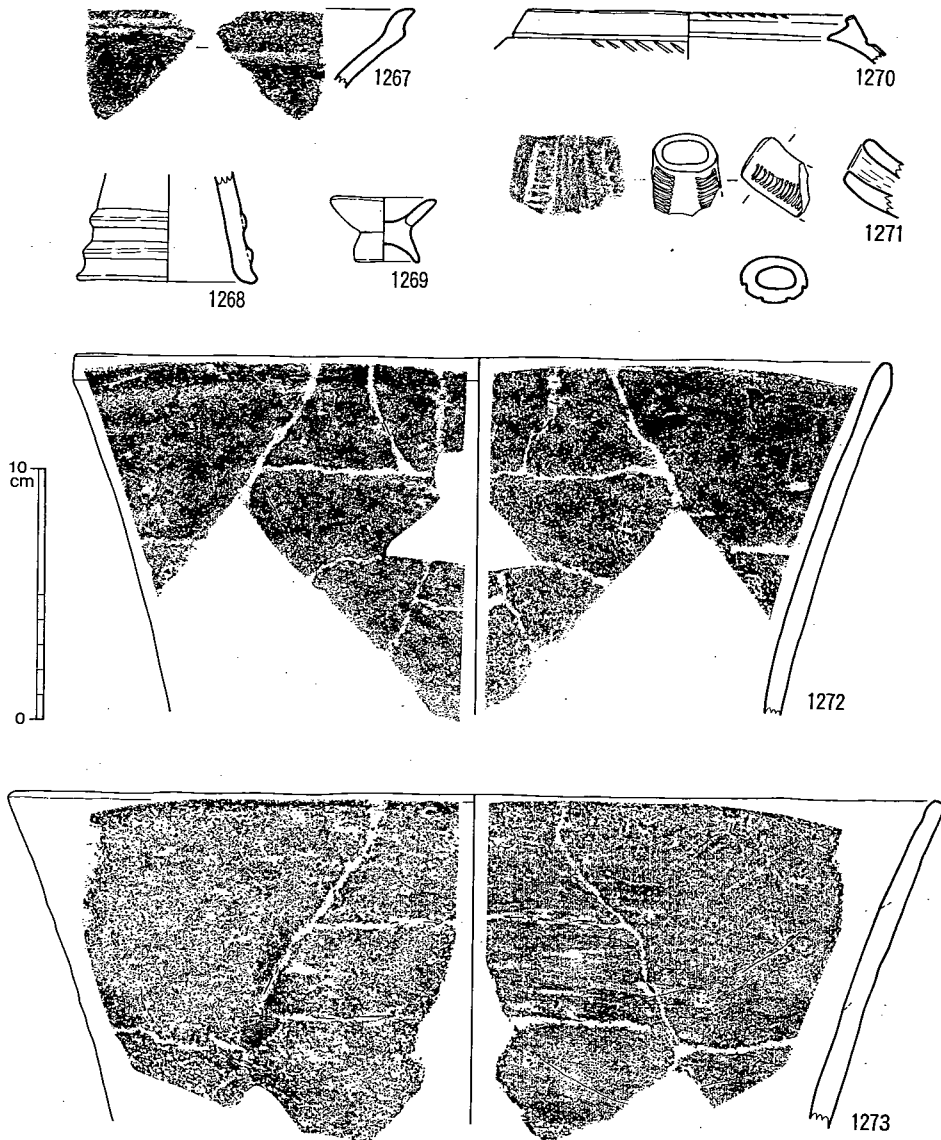
第 250 図 ピット・包含層出土土器実測図. 19 (1/3)



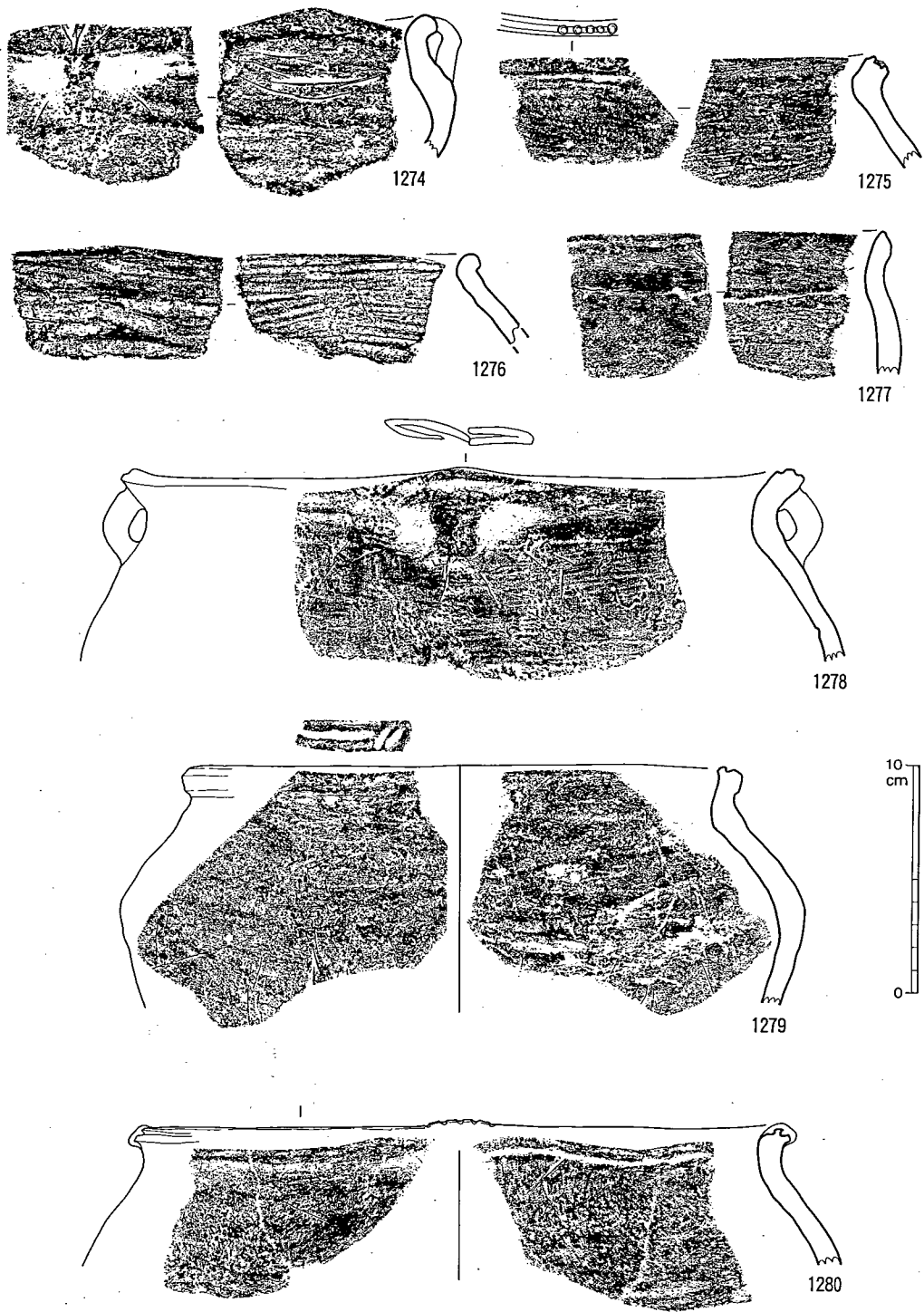
第 251 図 ピット・包含層出土土器実測図. 20 (1/3)



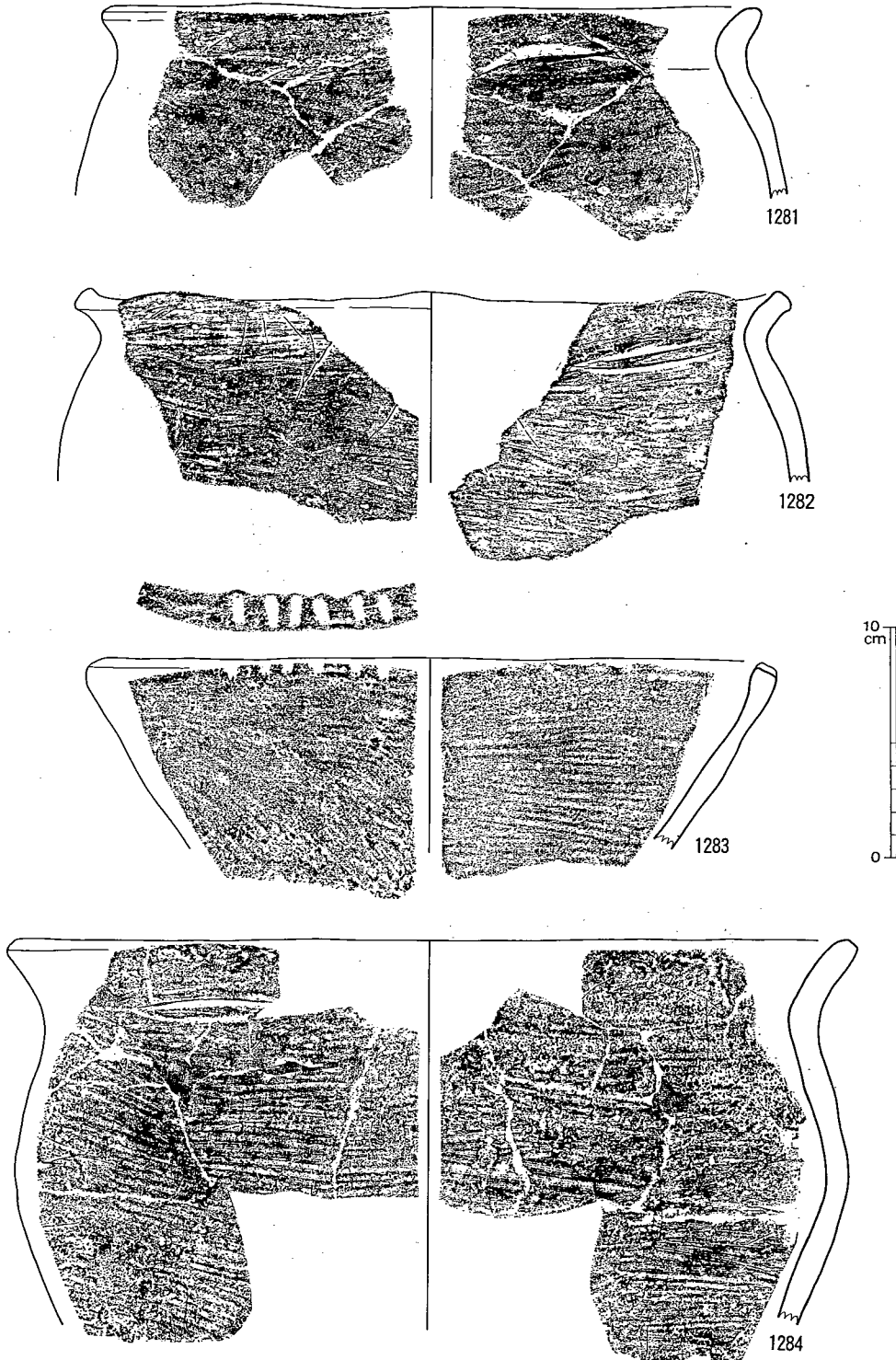
第 252 図 ピット・包含層出土土器実測図. 21 (1/3)



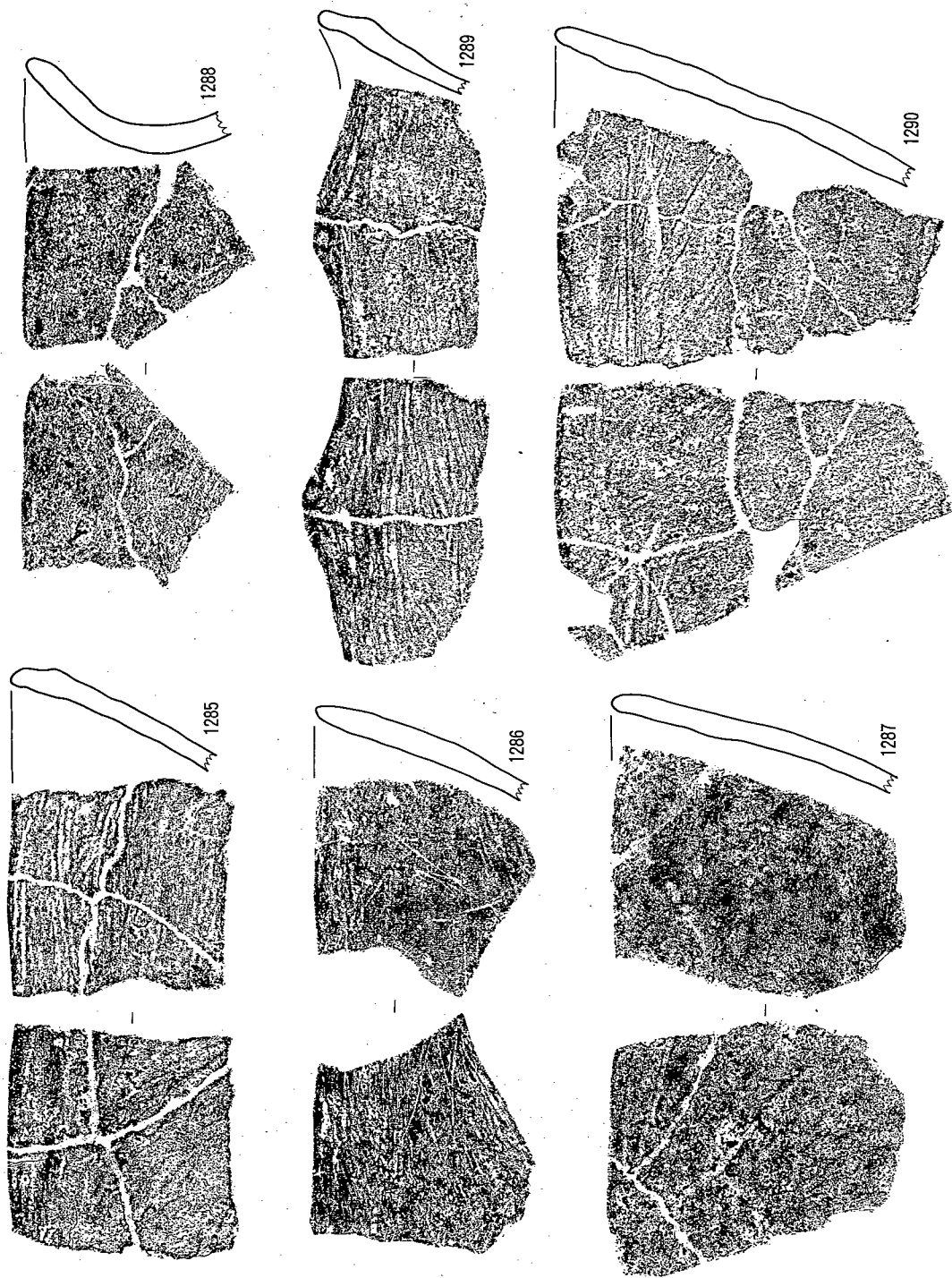
第 253 図 ピット・包含層出土土器実測図. 22 (1/3)



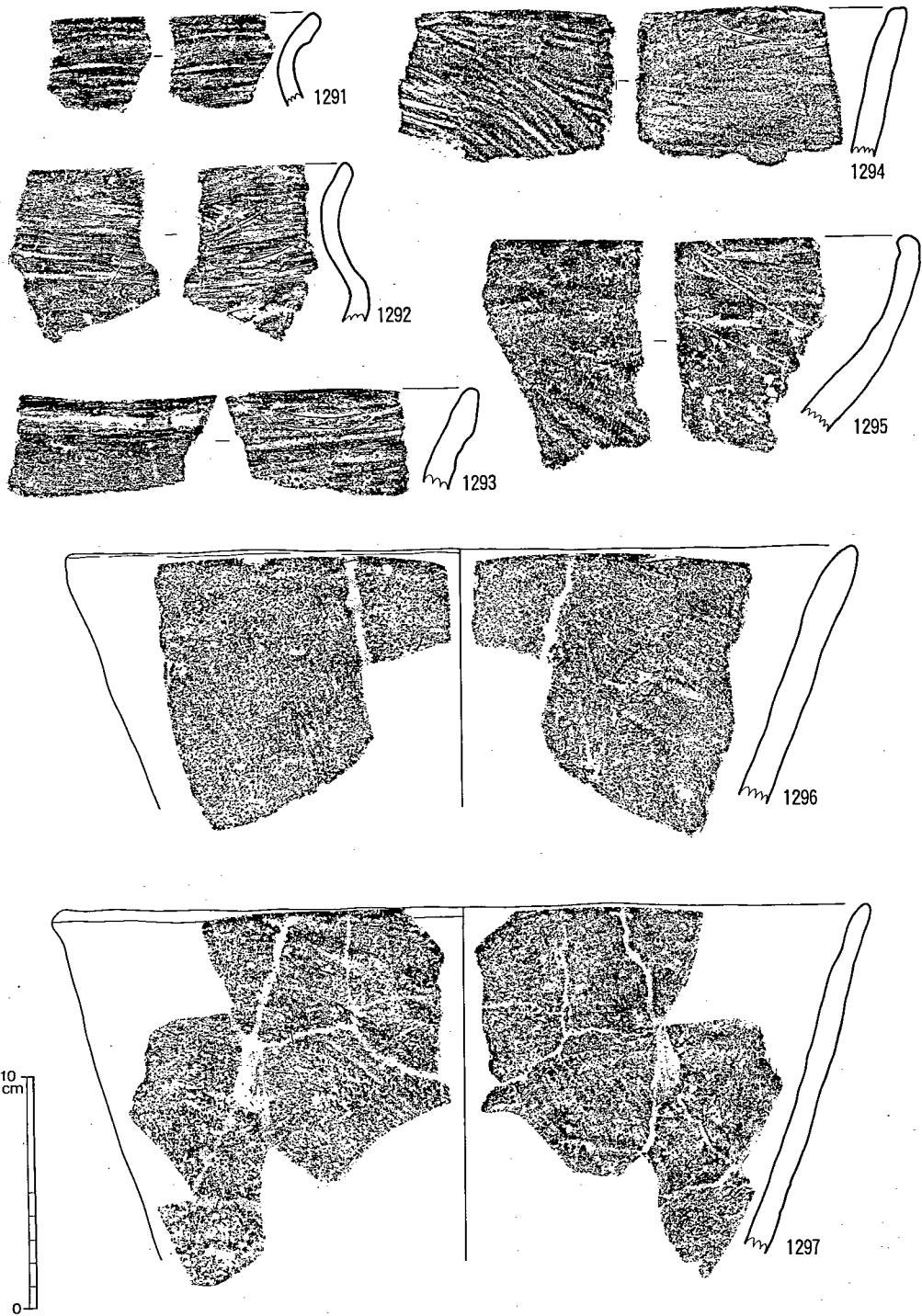
第 254 図 ピット・包含層出土土器実測図. 23 (1/3)



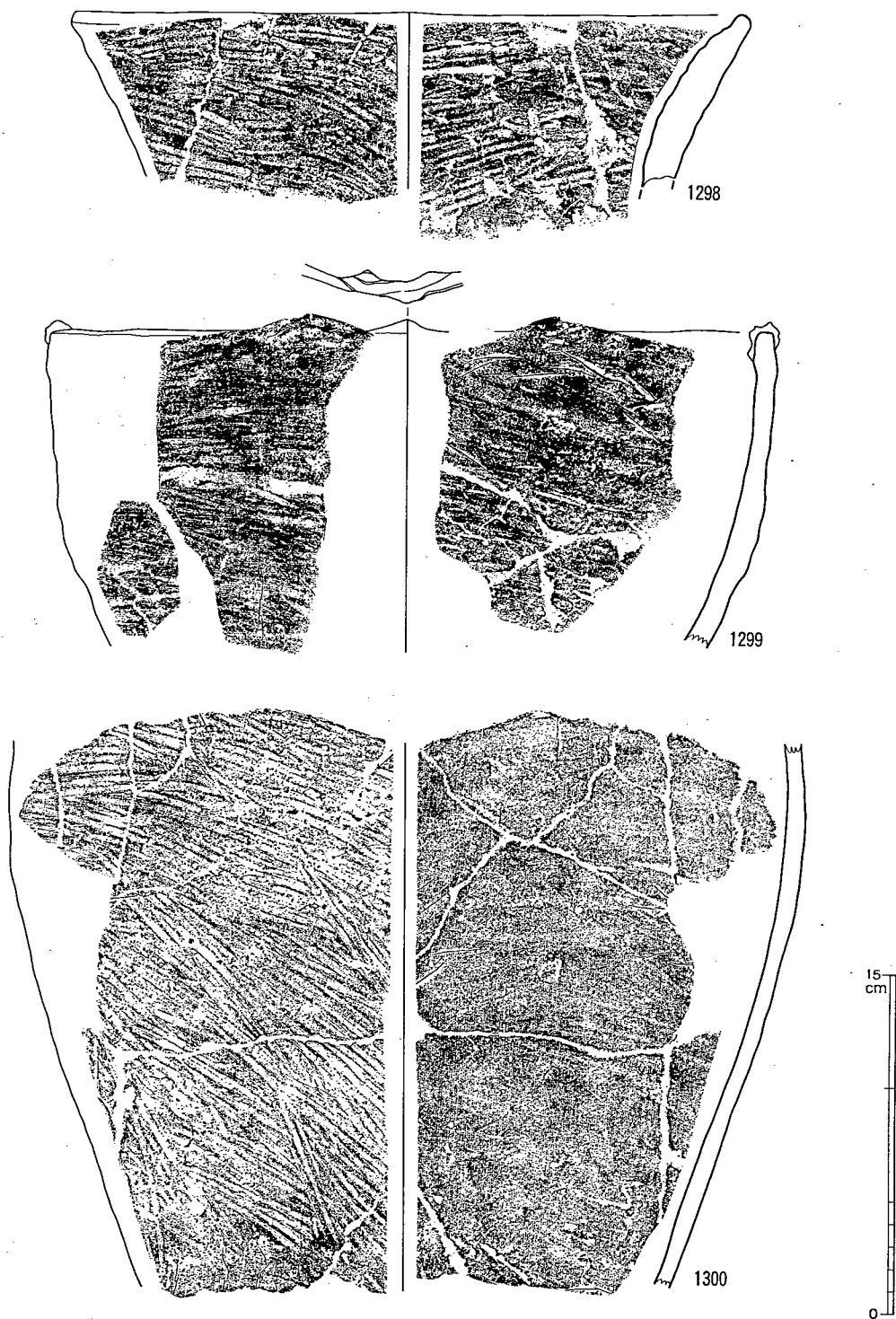
第 255 図 ピット・包含層出土土器実測図. 24 (1/3)



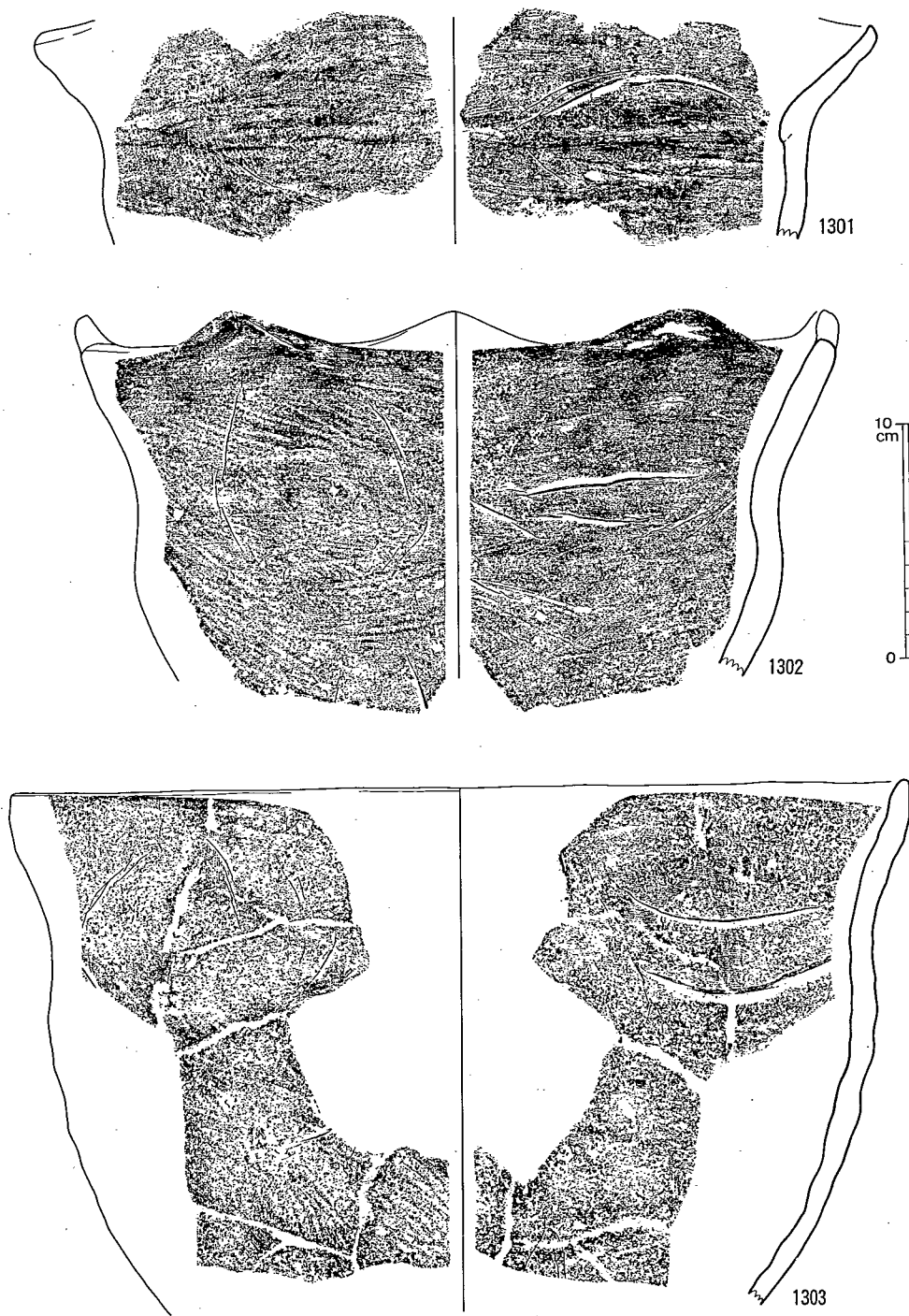
第 256 図 ピット包含層出土土器実測図. 25 (1/3)



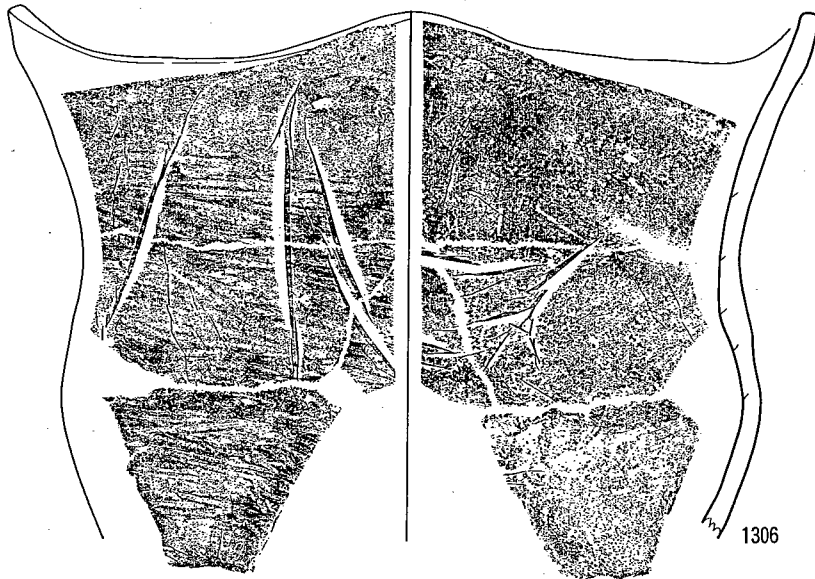
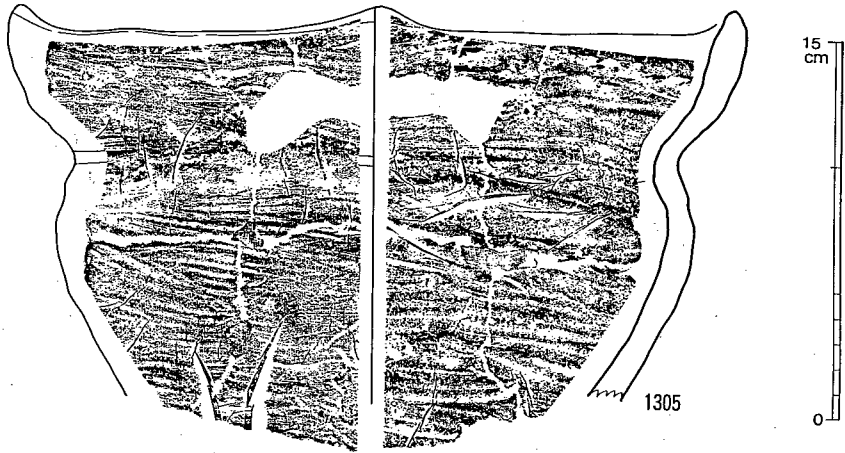
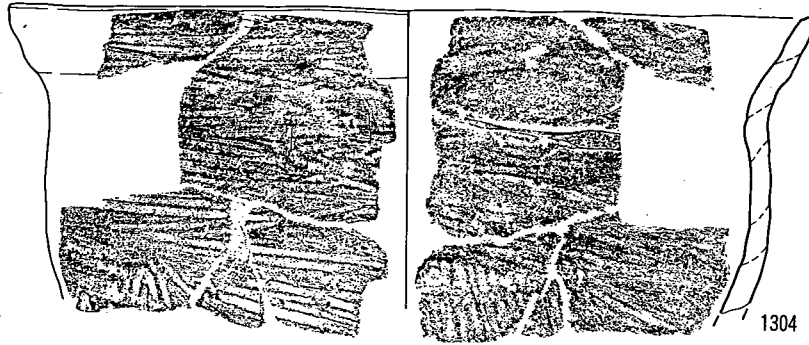
第 257 図 ピット・包含層出土土器実測図. 26 (1/3)



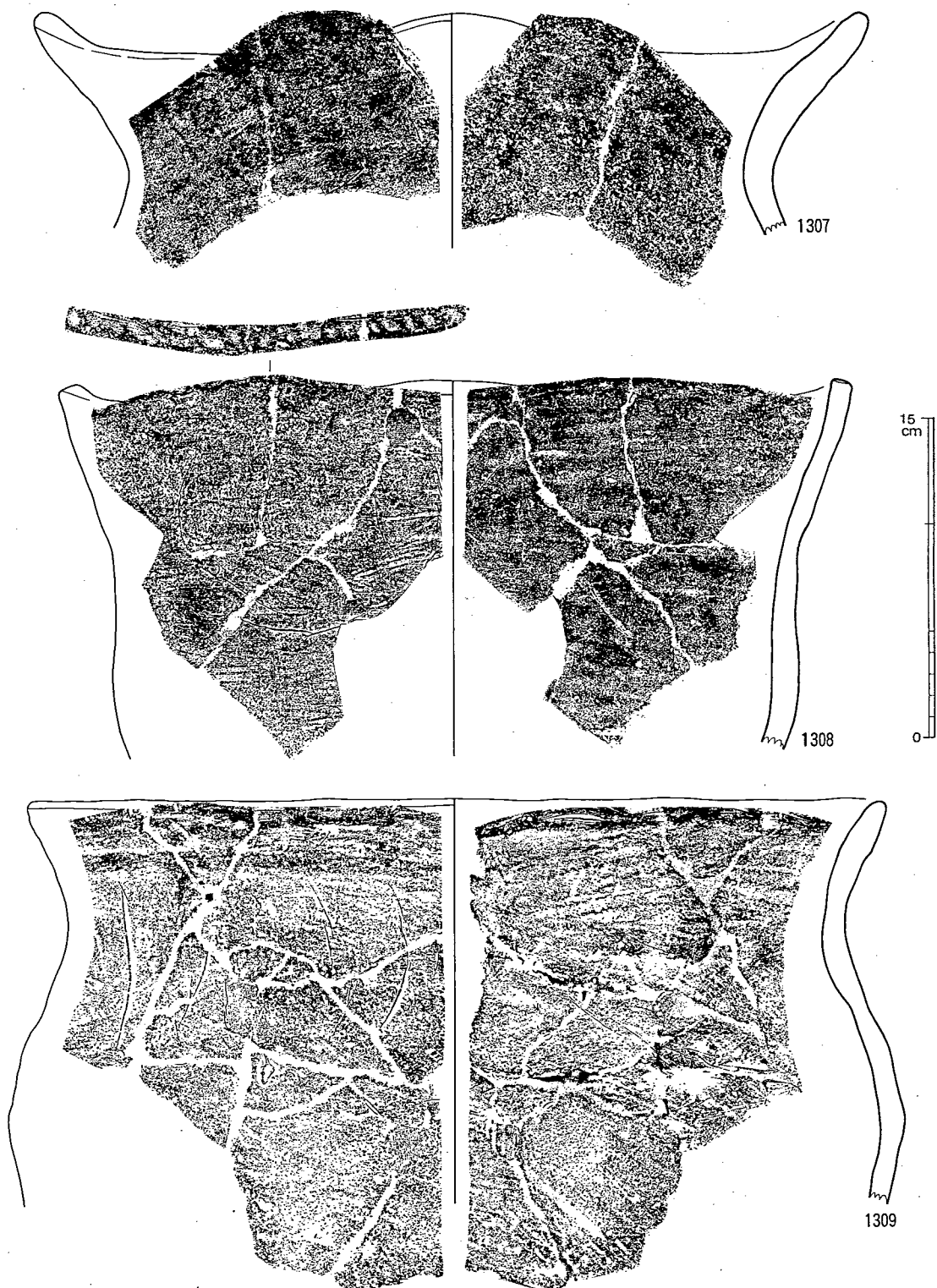
第 258 図 ピット・包含層出土土器実測図. 27 (1/3)



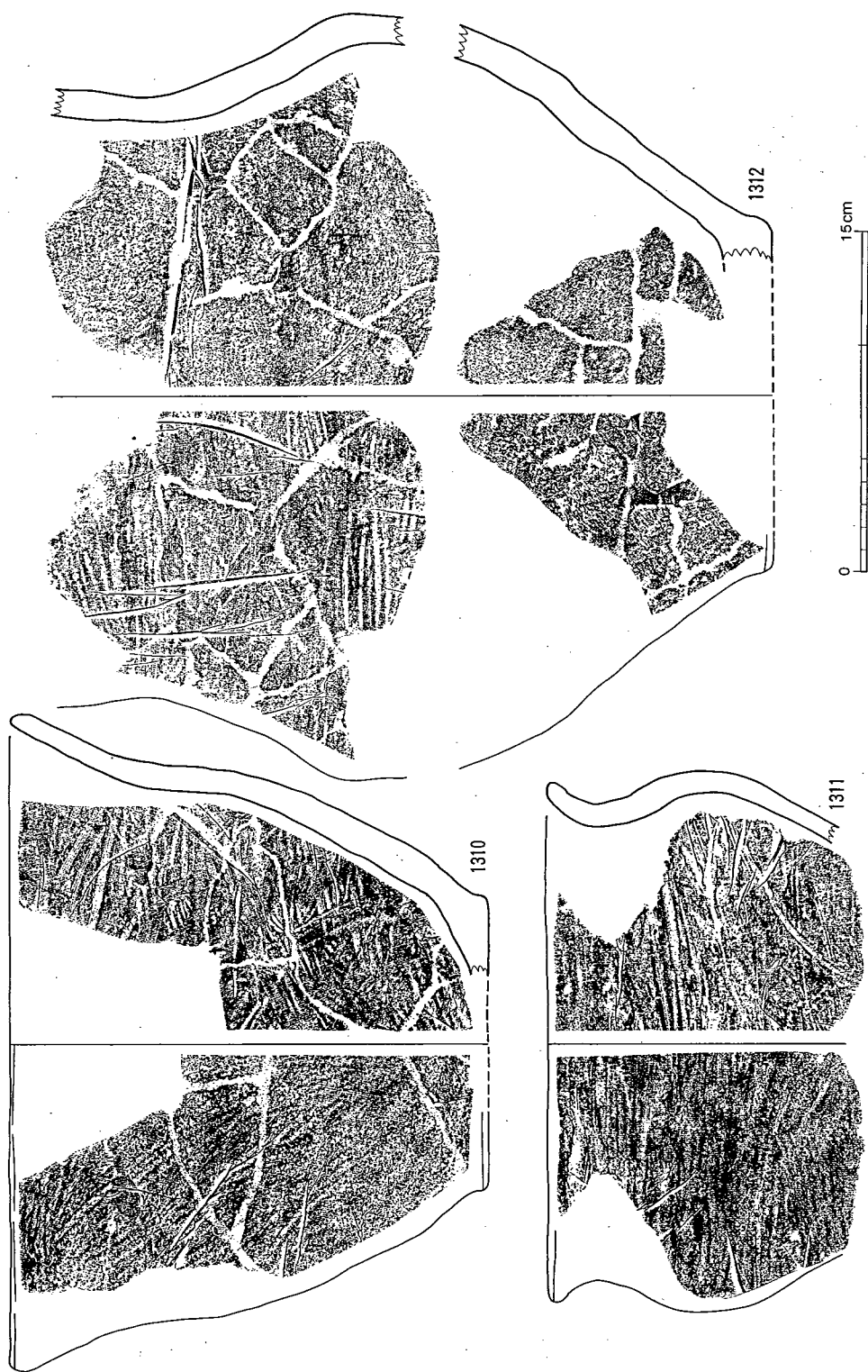
第 259 図 ピット・包含層出土土器実測図. 28 (1/3)



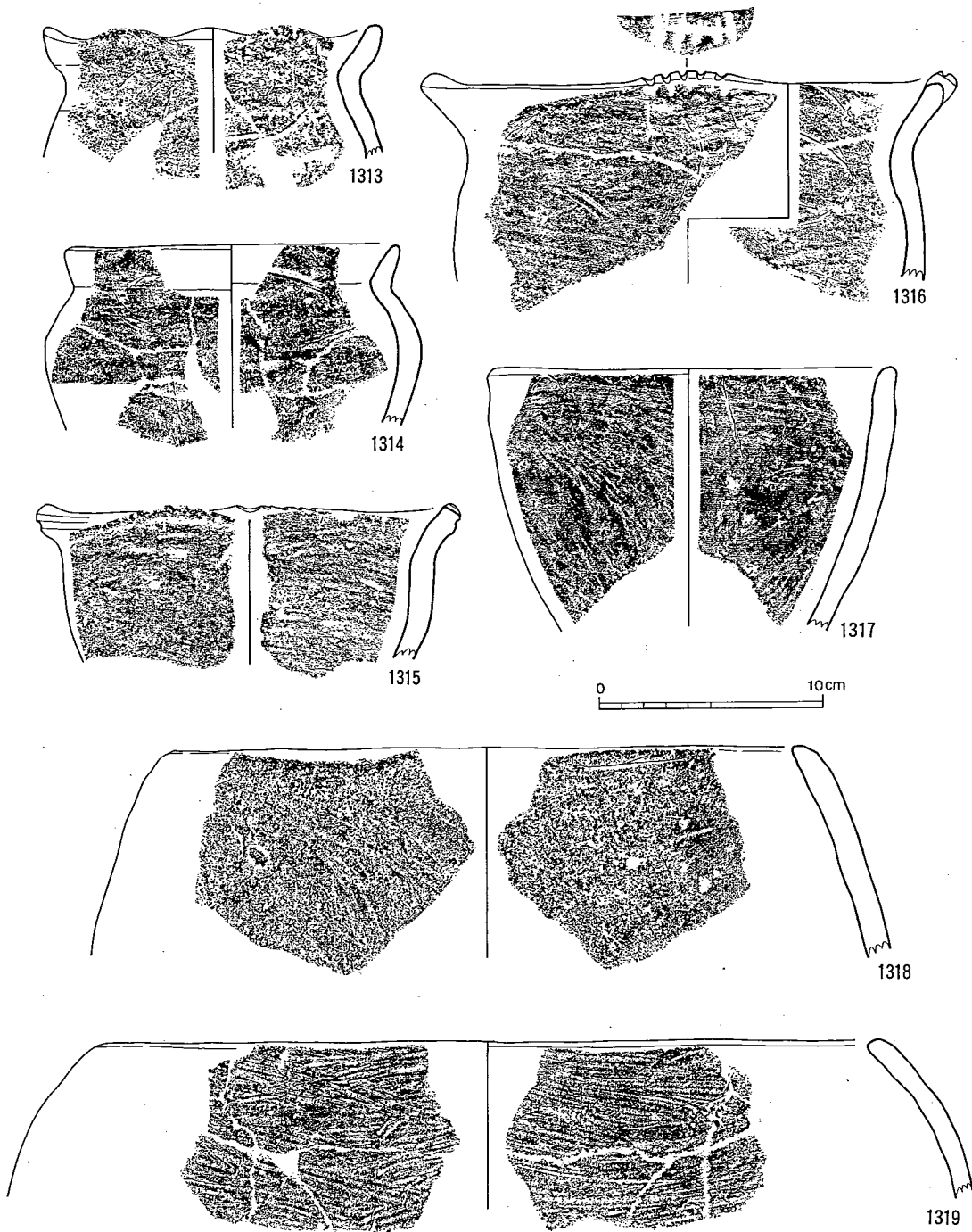
第 260 図 ピット・包含層出土土器実測図. 29 (1/3)



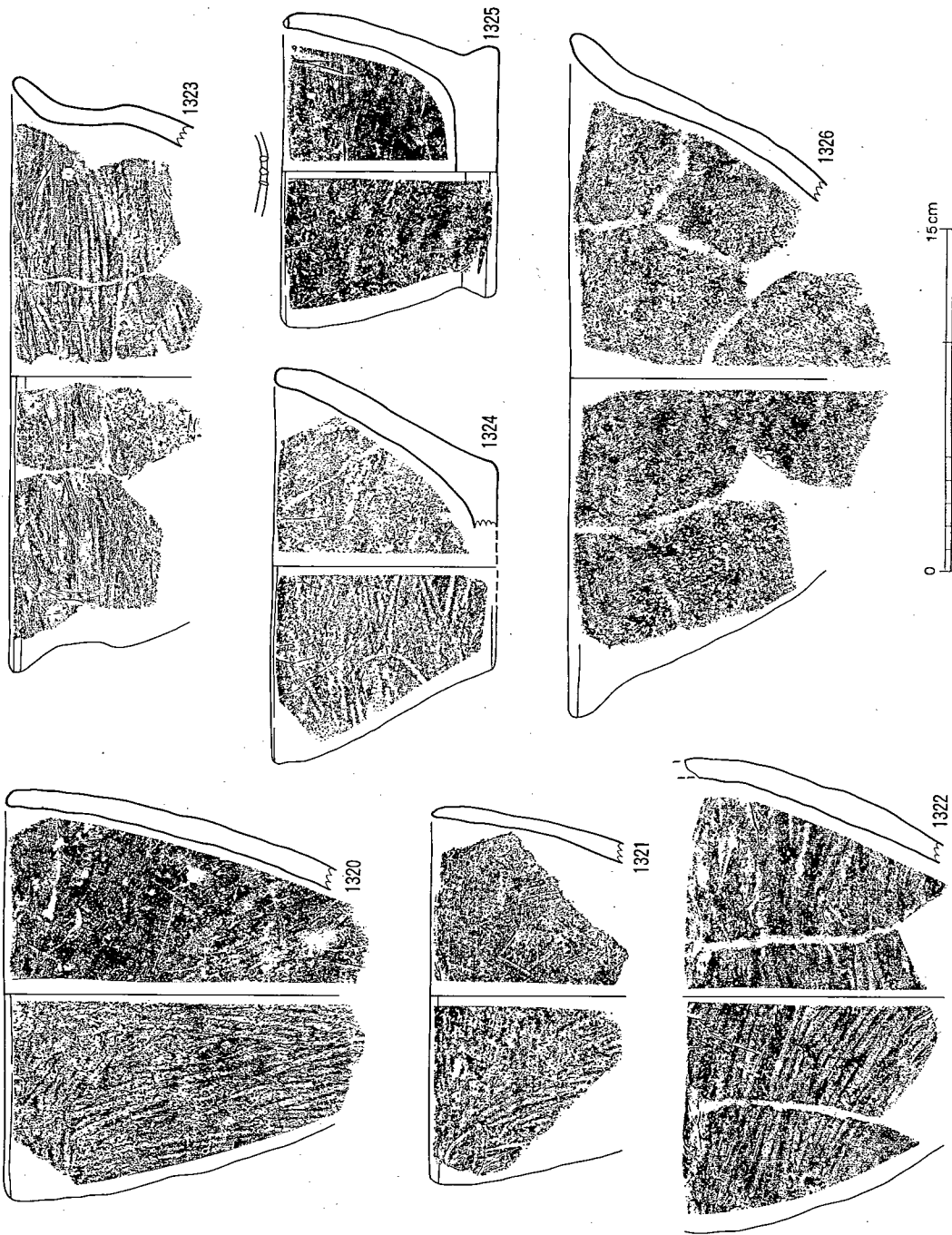
第 261 図 ピット・包含層出土土器実測図. 30 (1/3)



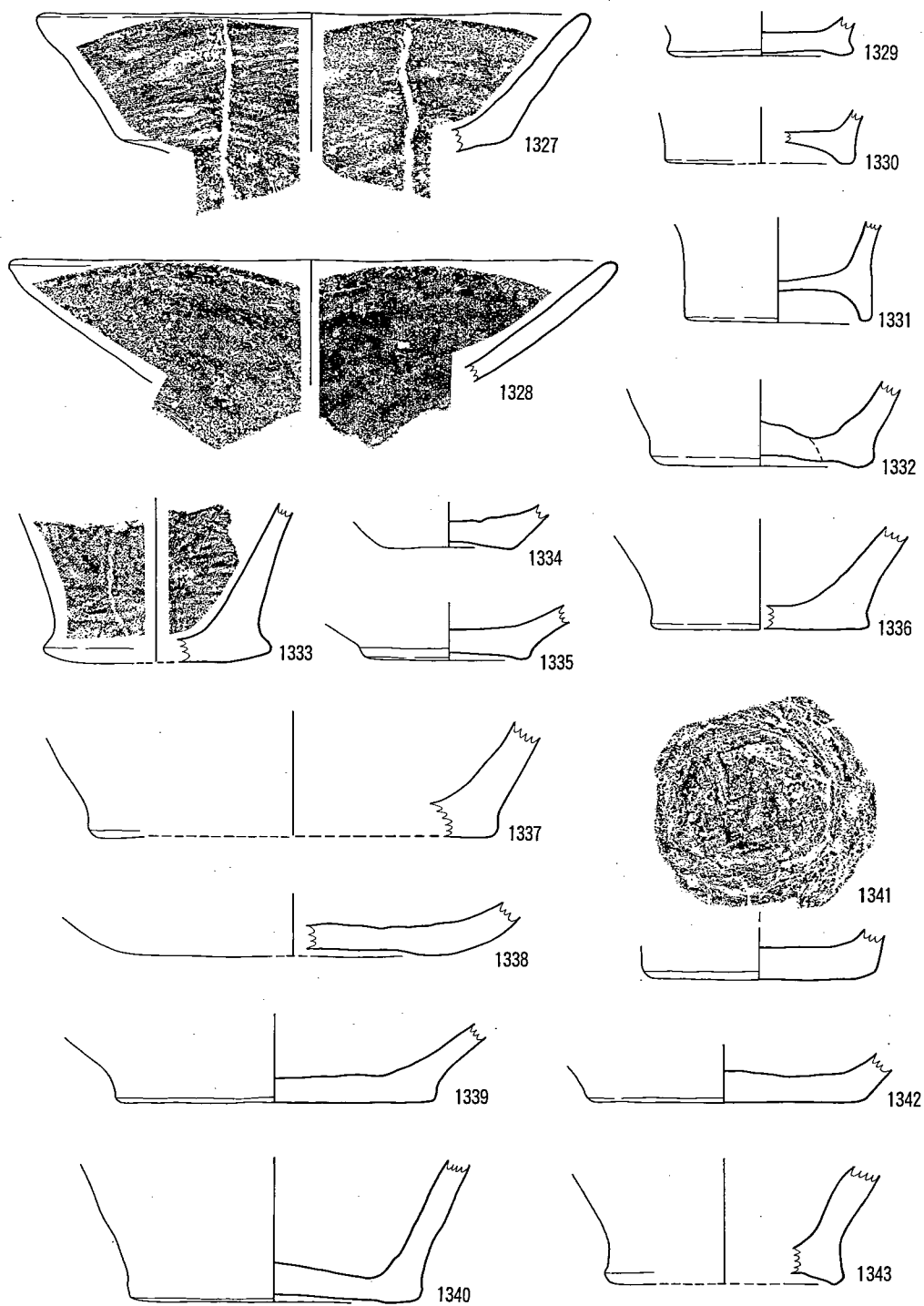
第 262 図 ピット包含層出土器実測図. 31 (1/3)



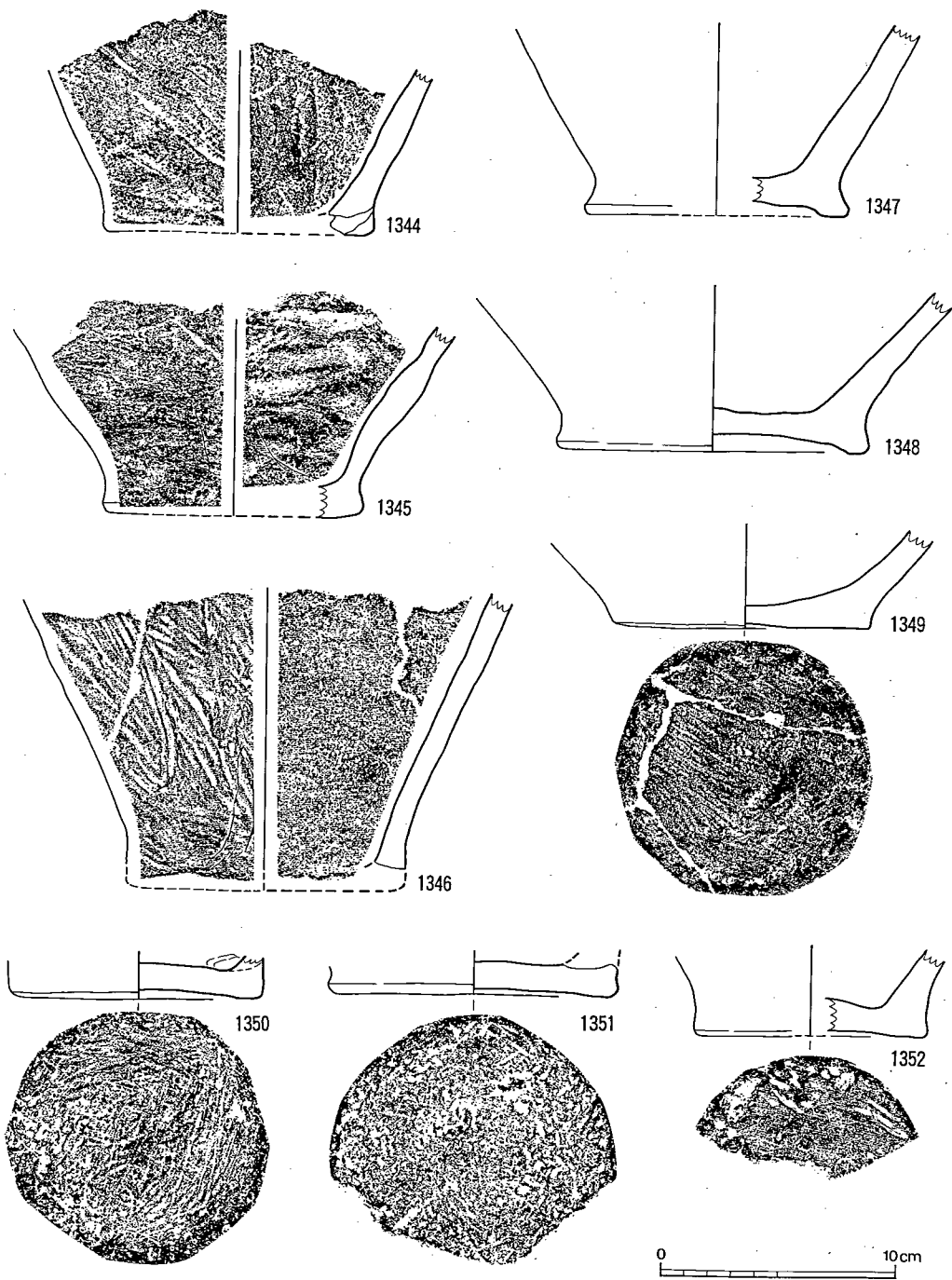
第 263 図 ピット・包含層出土土器実測図. 32 (1/3)



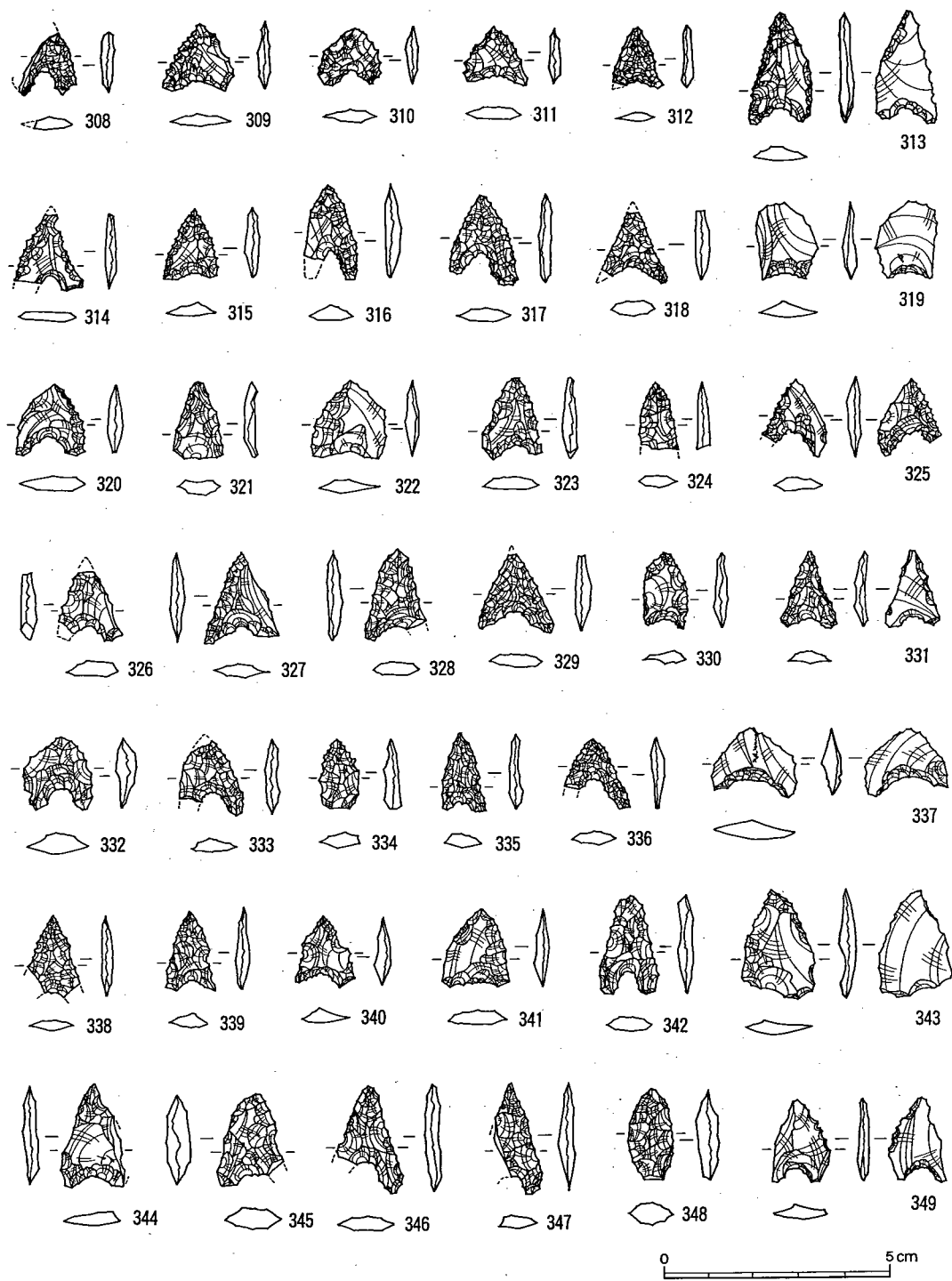
第 264 図 ピット包含層出土器実測図. 33 (1/3)



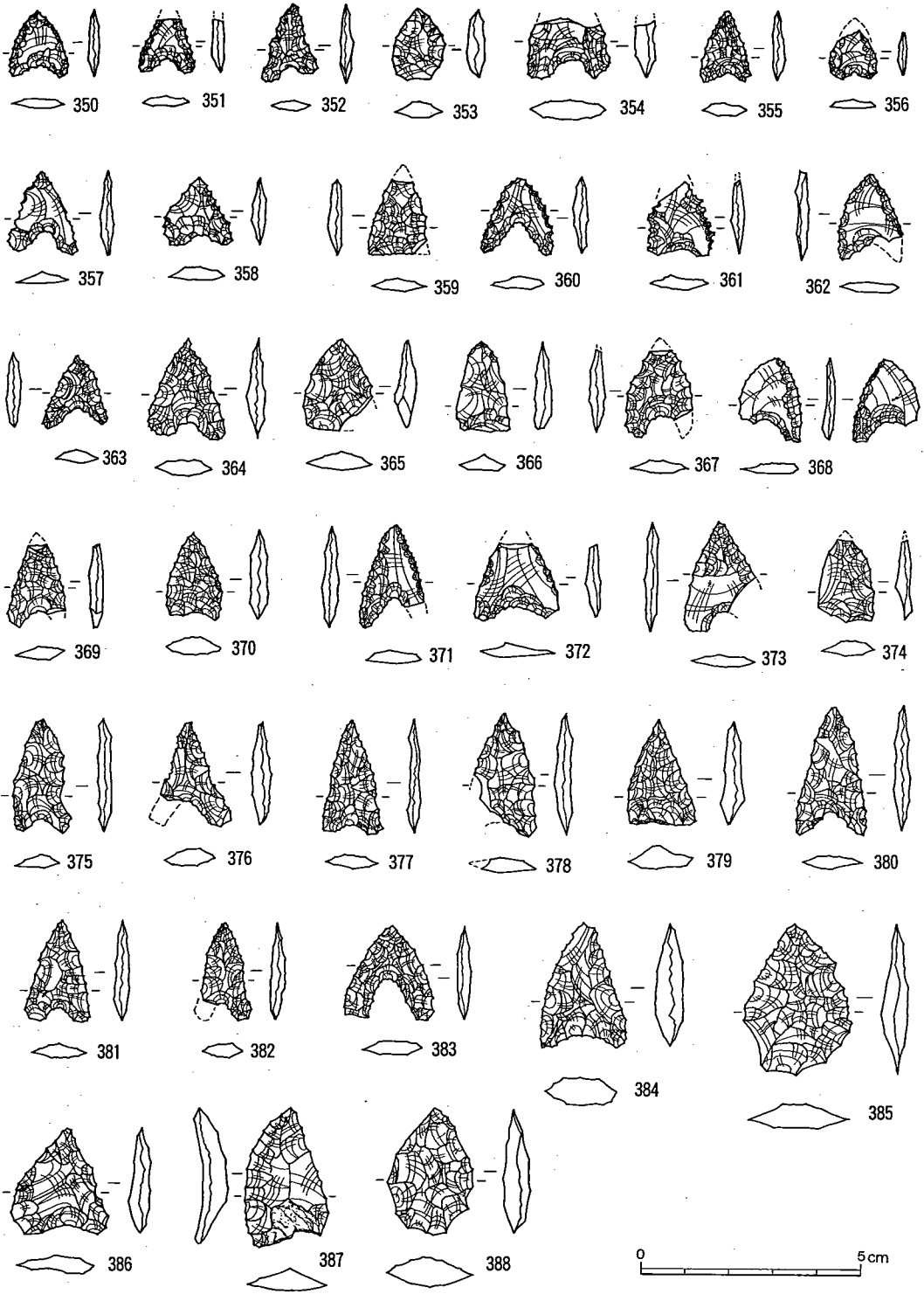
第 265 図 ピット・包含層出土土器実測図. 34 (1/3)



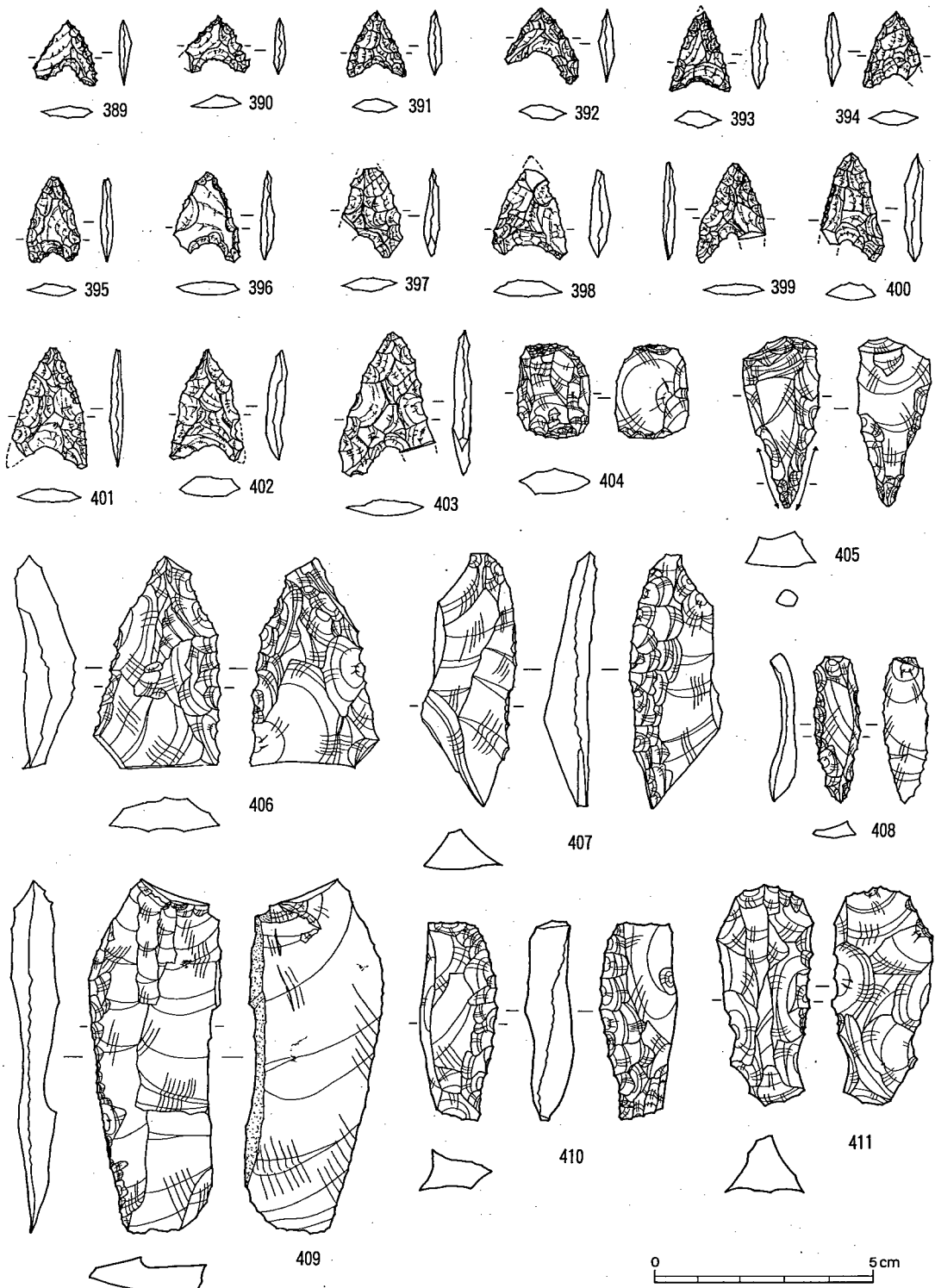
第 266 図 ピット・包含層出土土器実測図. 35 (1/3)



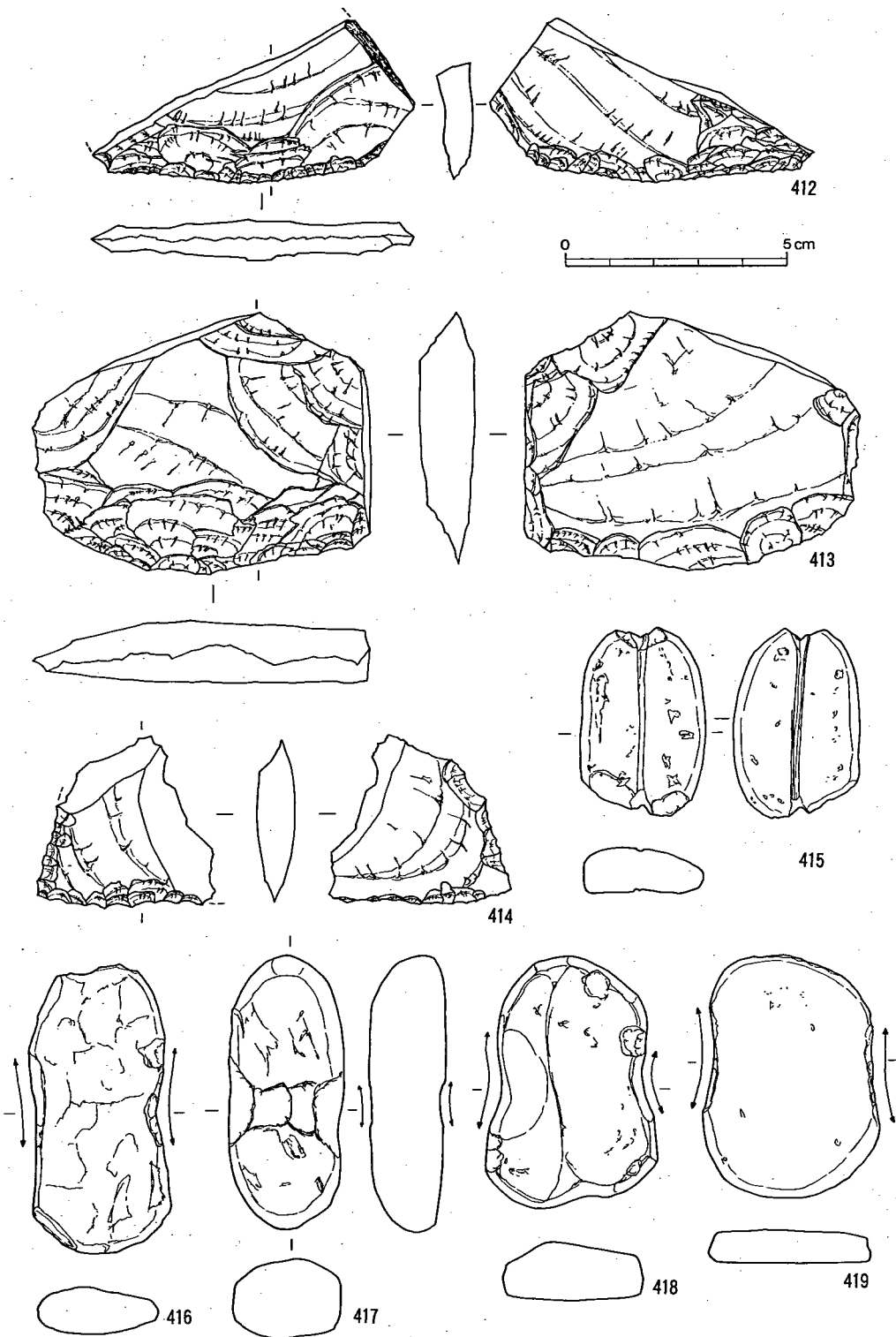
第 267 図 ピット・包含層出土石器実測図. 1 (2/3)



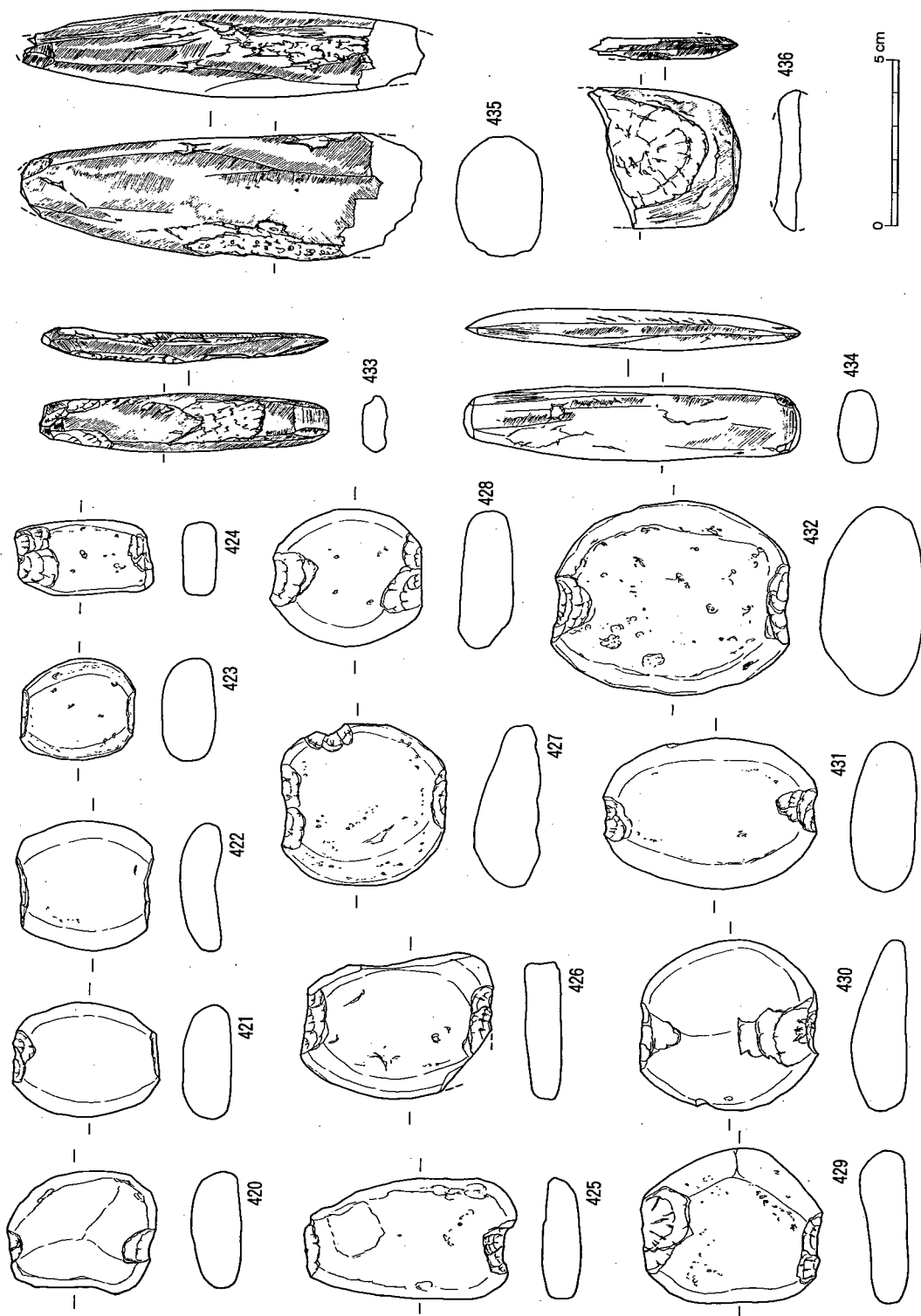
第 268 図 ピット・包含層出土石器実測図. 2 (2/3)



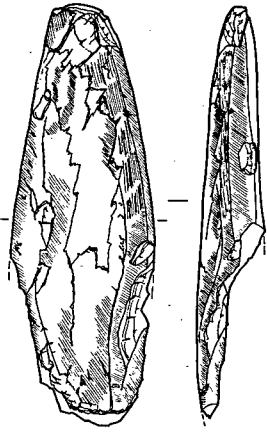
第 269 図 ピット・包含層出土石器実測図. 3 (2/3)



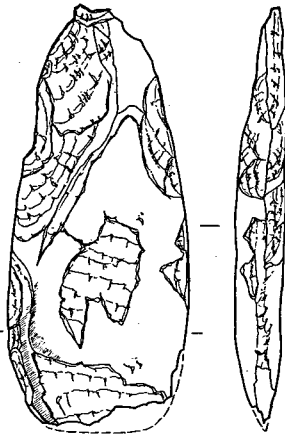
第 270 図 ピット・包含層出土石器実測図. 4 (412~414は2/3 415~419は1/2)



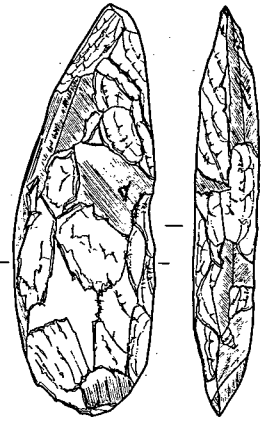
第 271 図 ピット包含層出土石器実測図. 5 (1/2)



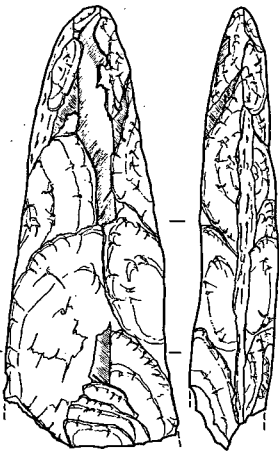
437



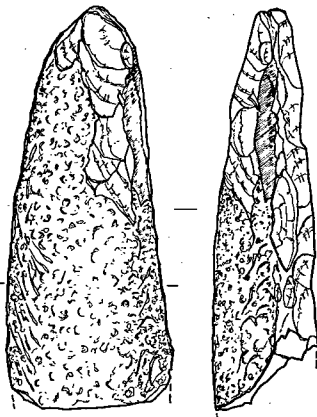
438



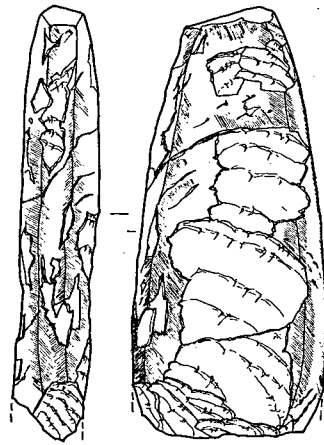
439



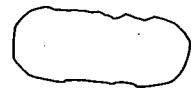
440



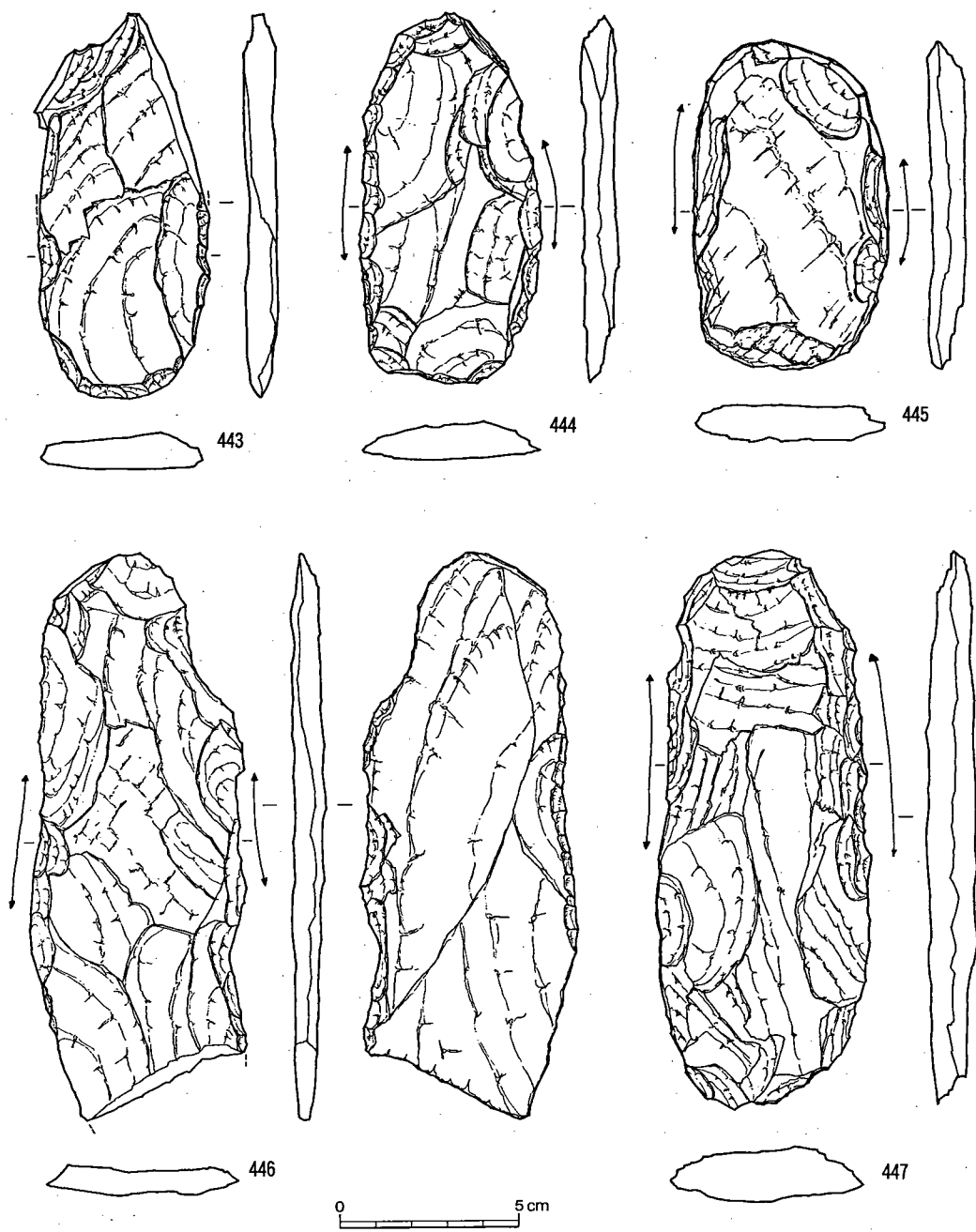
441



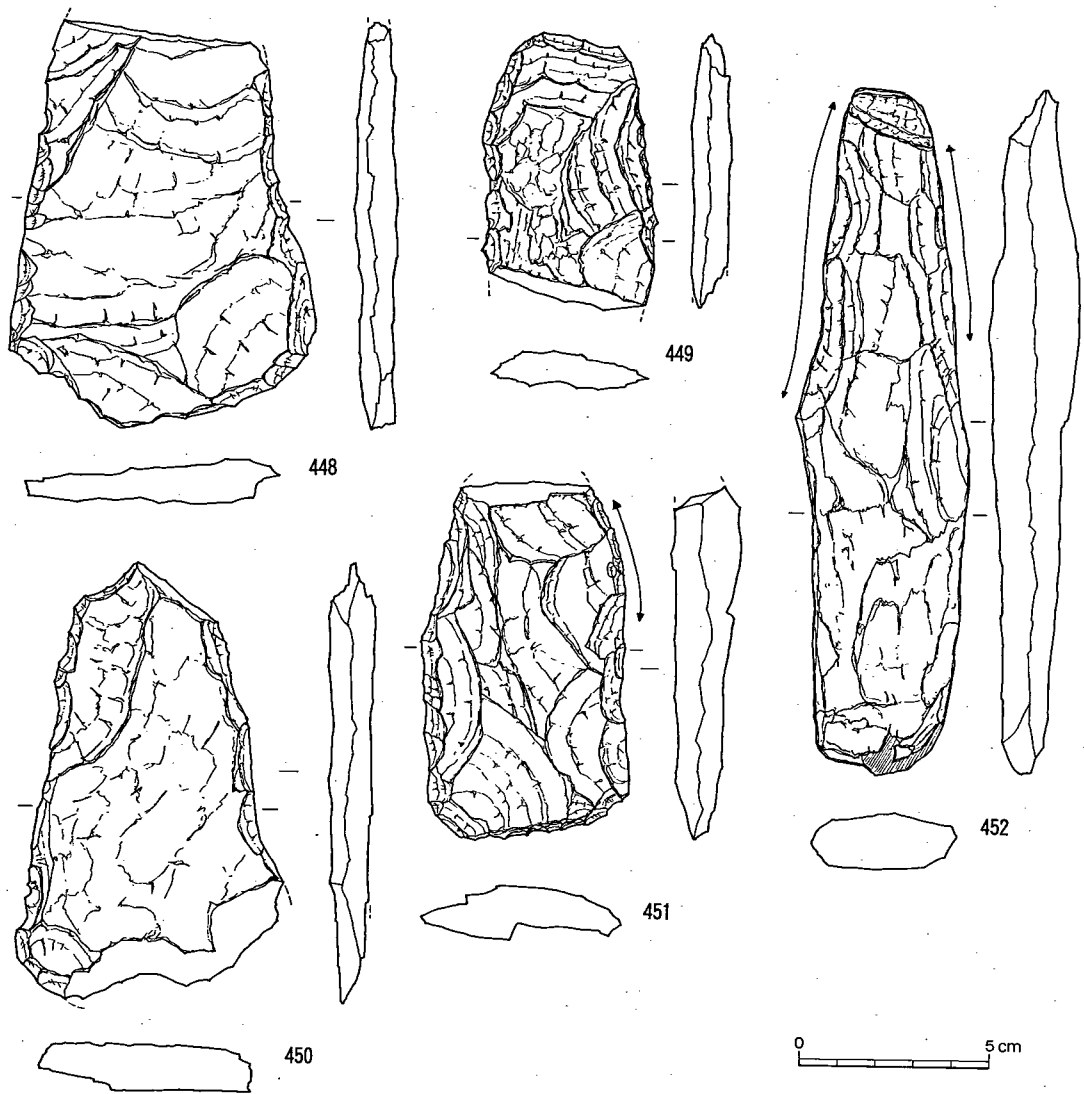
442



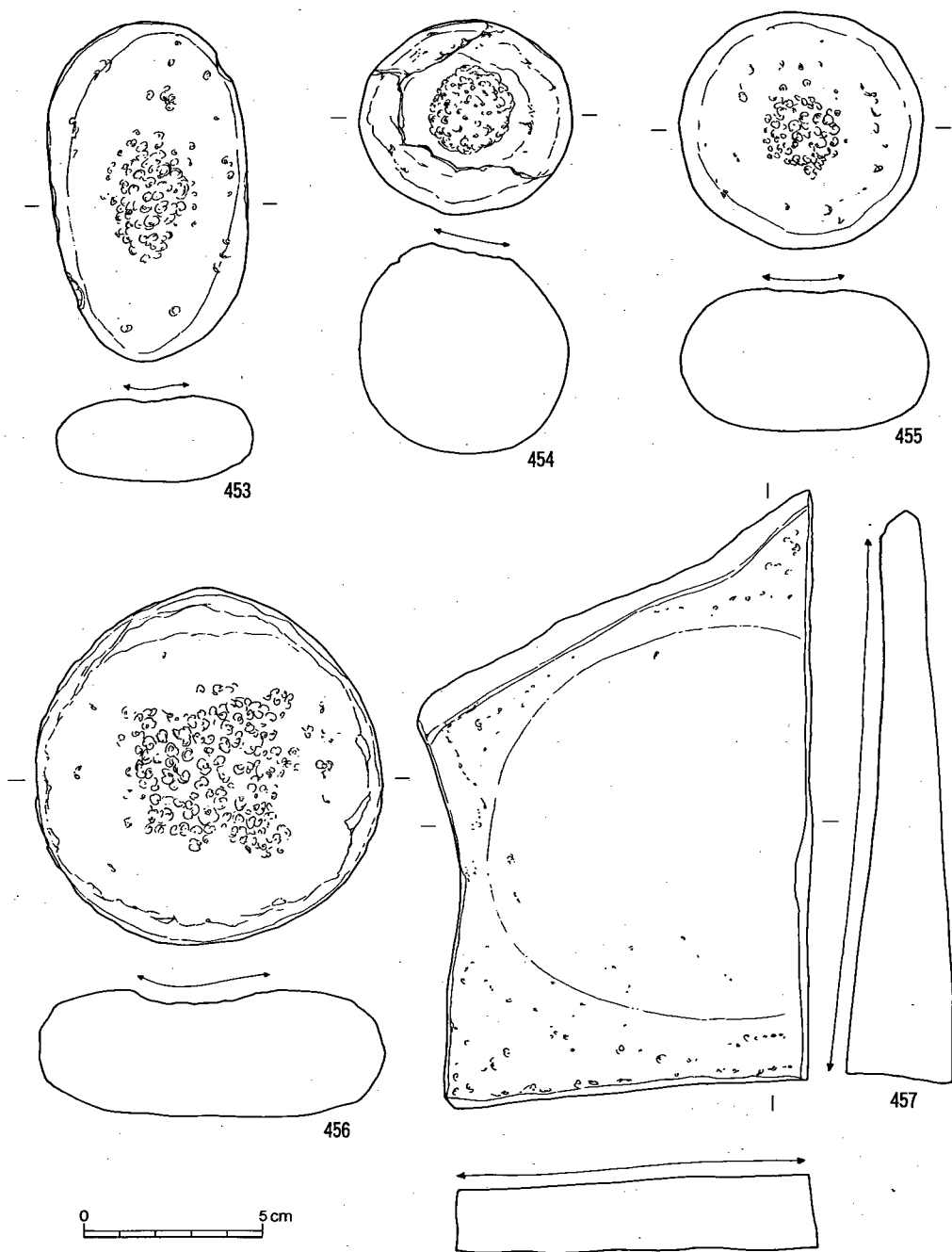
第 272 図 ピット・包含層出土石器実測図. 6 (1/2)



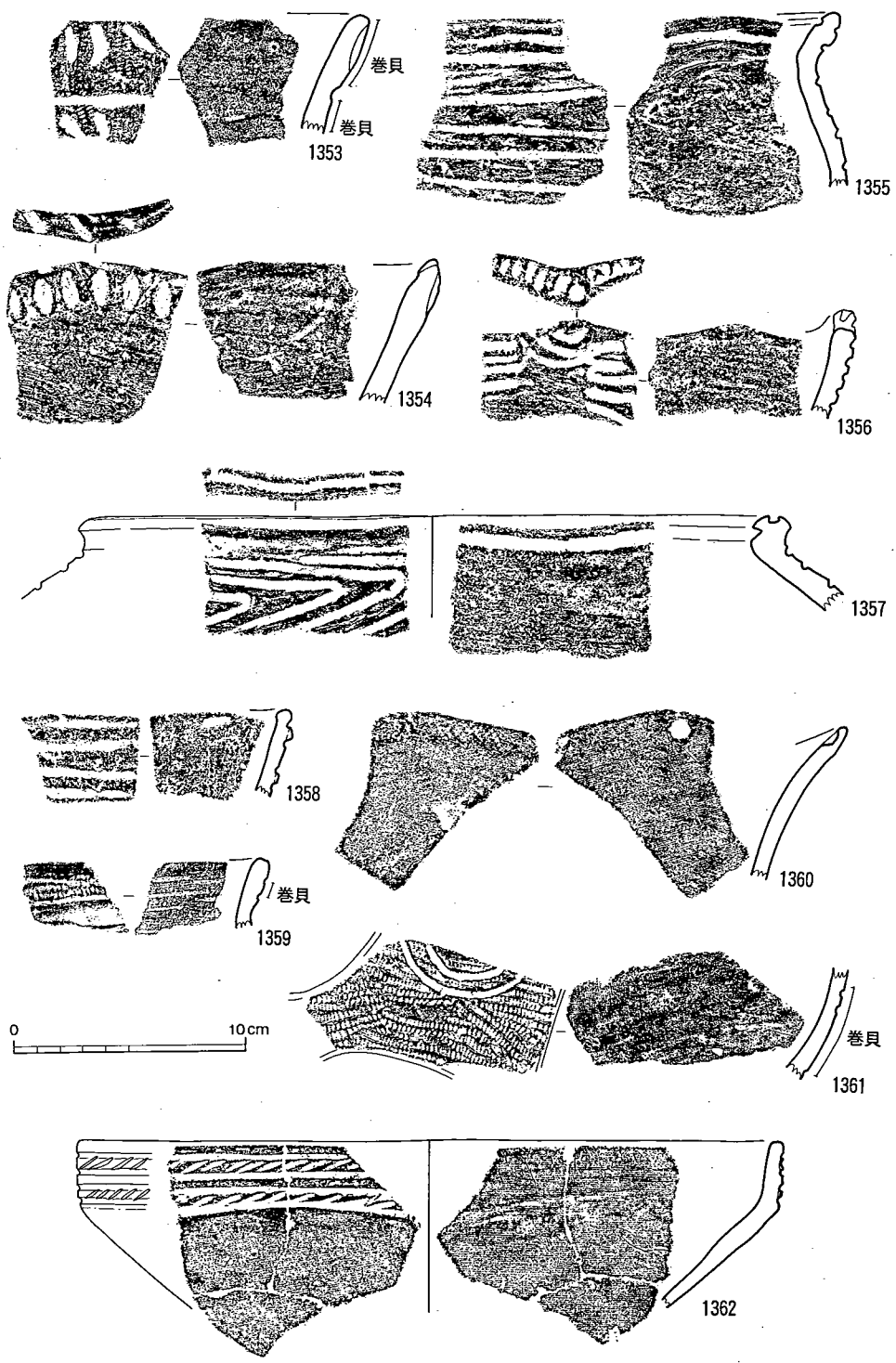
第 273 図 ピット・包含層出土石器実測図. 7 (1/2)



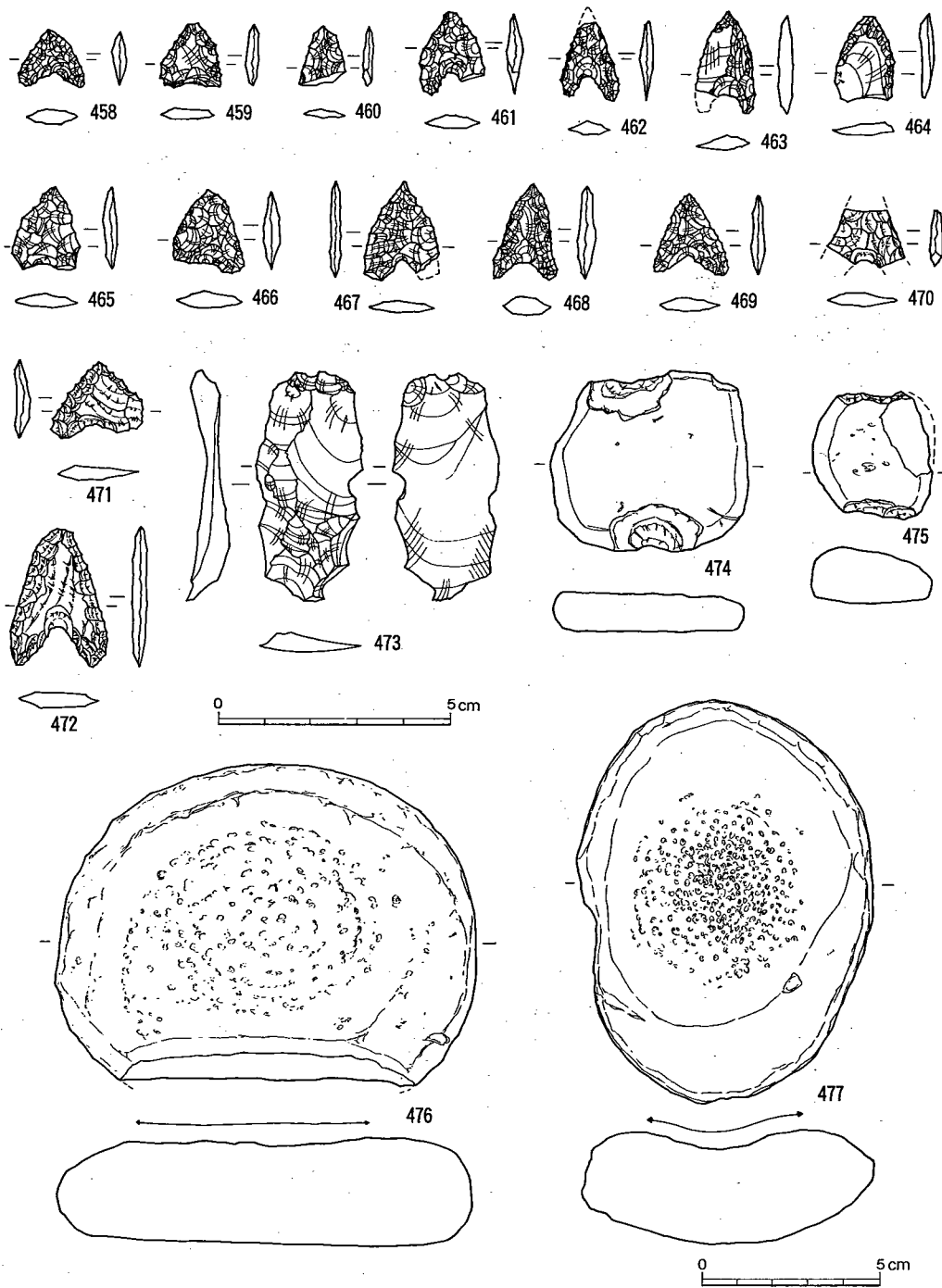
第 274 図 ピット・包含層出土石器実測図. 8 (1/2)



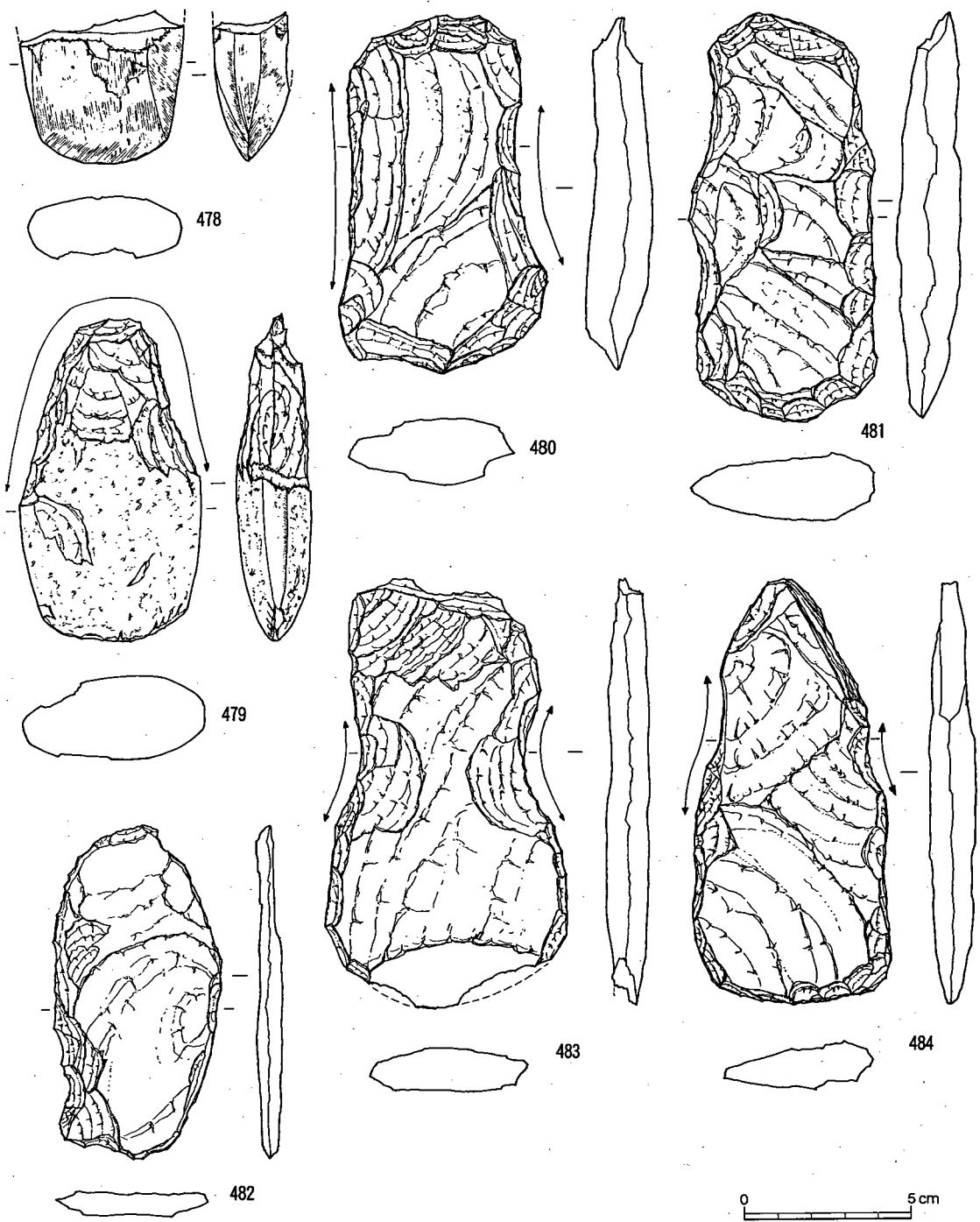
第 275 図 ピット・包含層出土石器実測図. 9 (453~456は1/2 457は1/4)



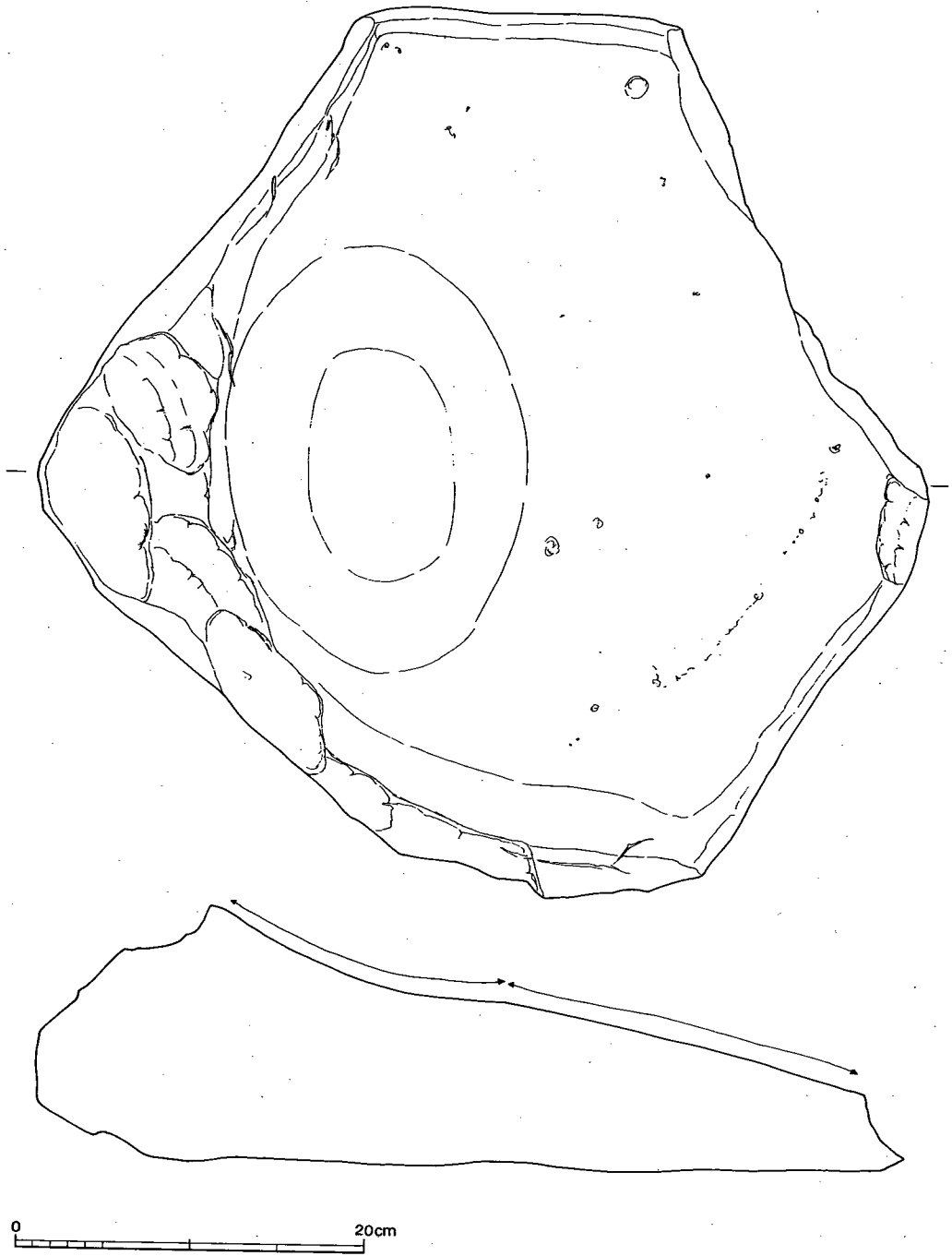
第 276 図 表採土器実測図 (1/3)



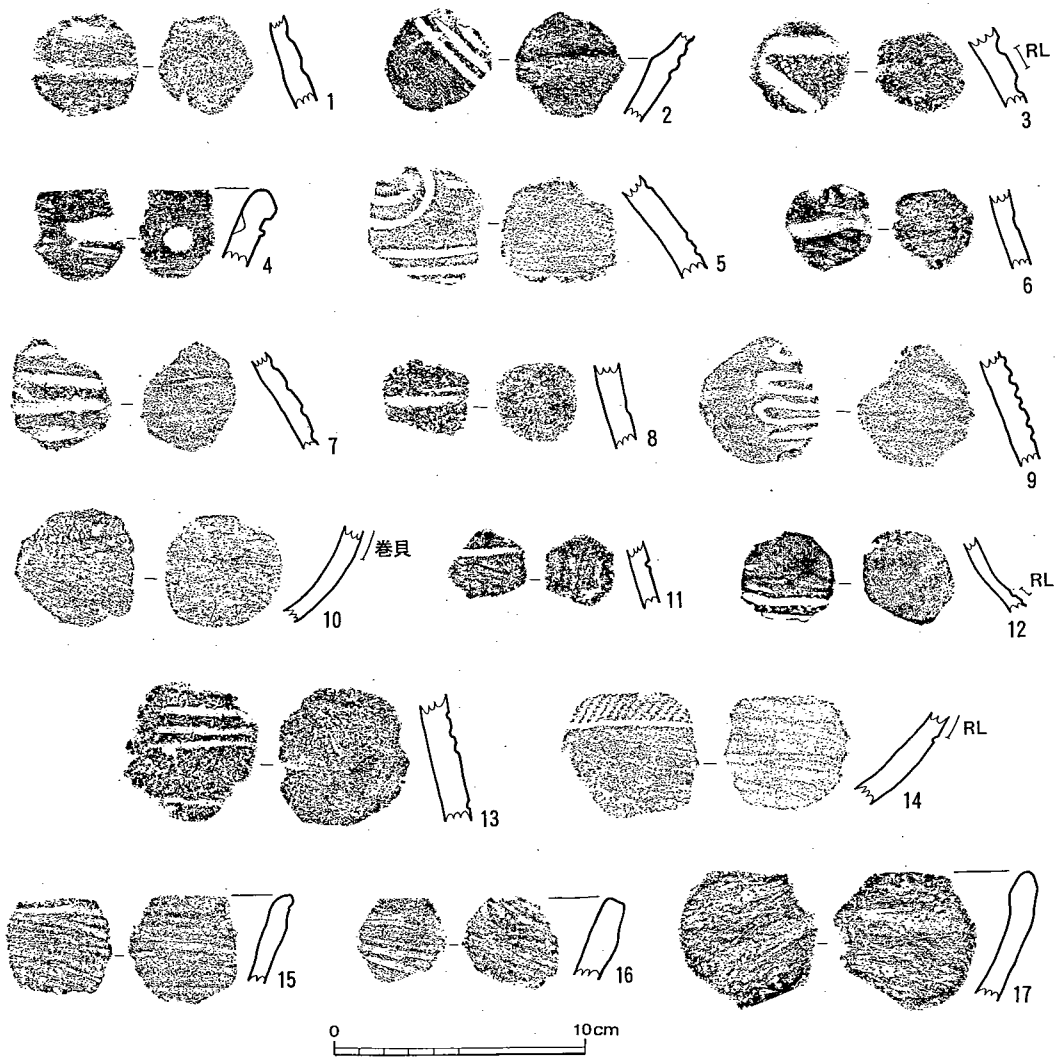
第 277 図 表採石器実測図. 1 (458~473は2/3 474~477は1/2)



第 278 图 表採石器実測图. 2 (1/2)



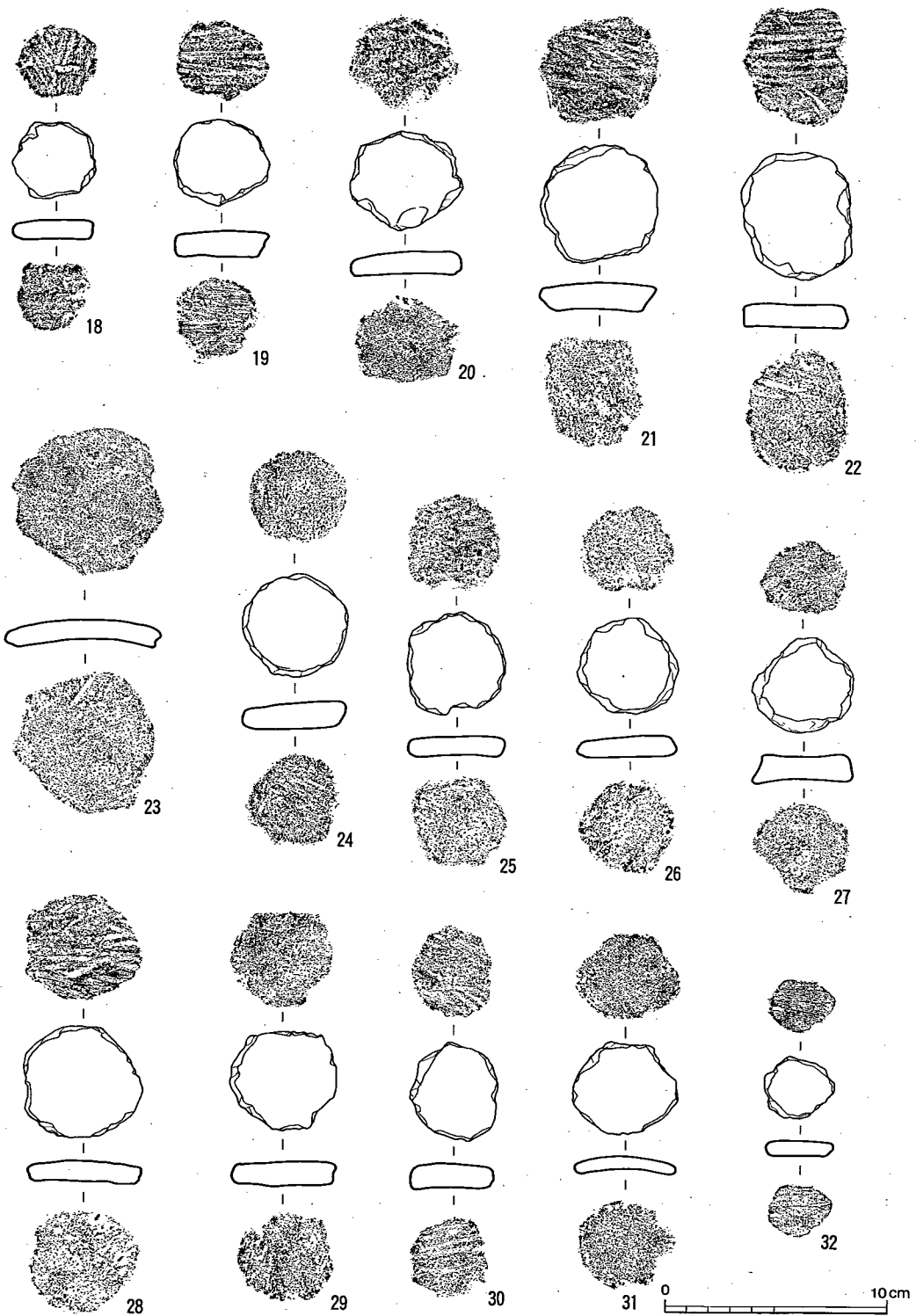
第 279 图 表採石器实测图. 3 (1/4)



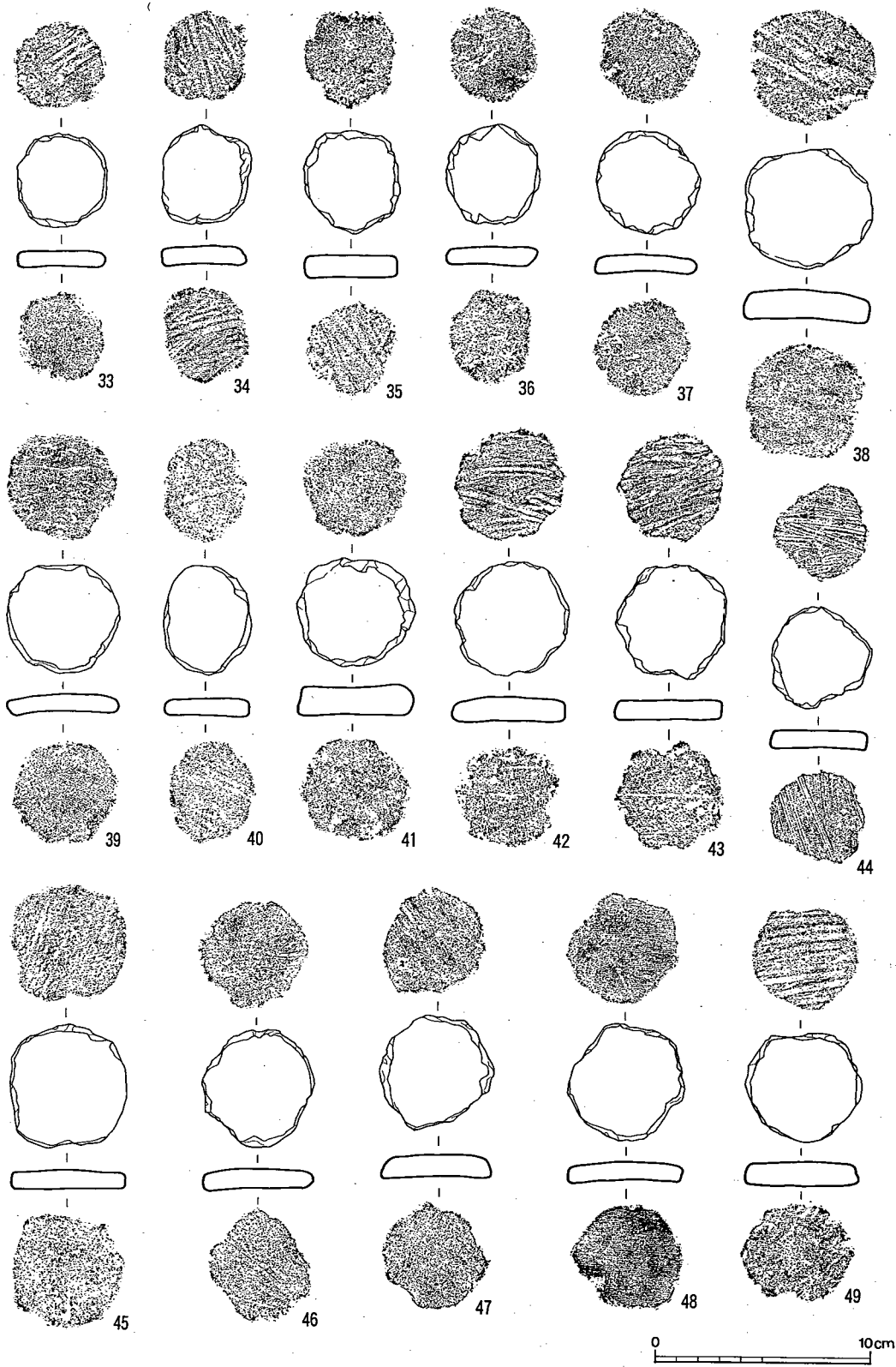
第 280 図 土製円盤実測図. 1 (1/3)

平式や三万田式の底部になろうが、他はなかなか位置づけが難しい。1351には網代状圧痕が、1352には不明の圧痕が窺える。

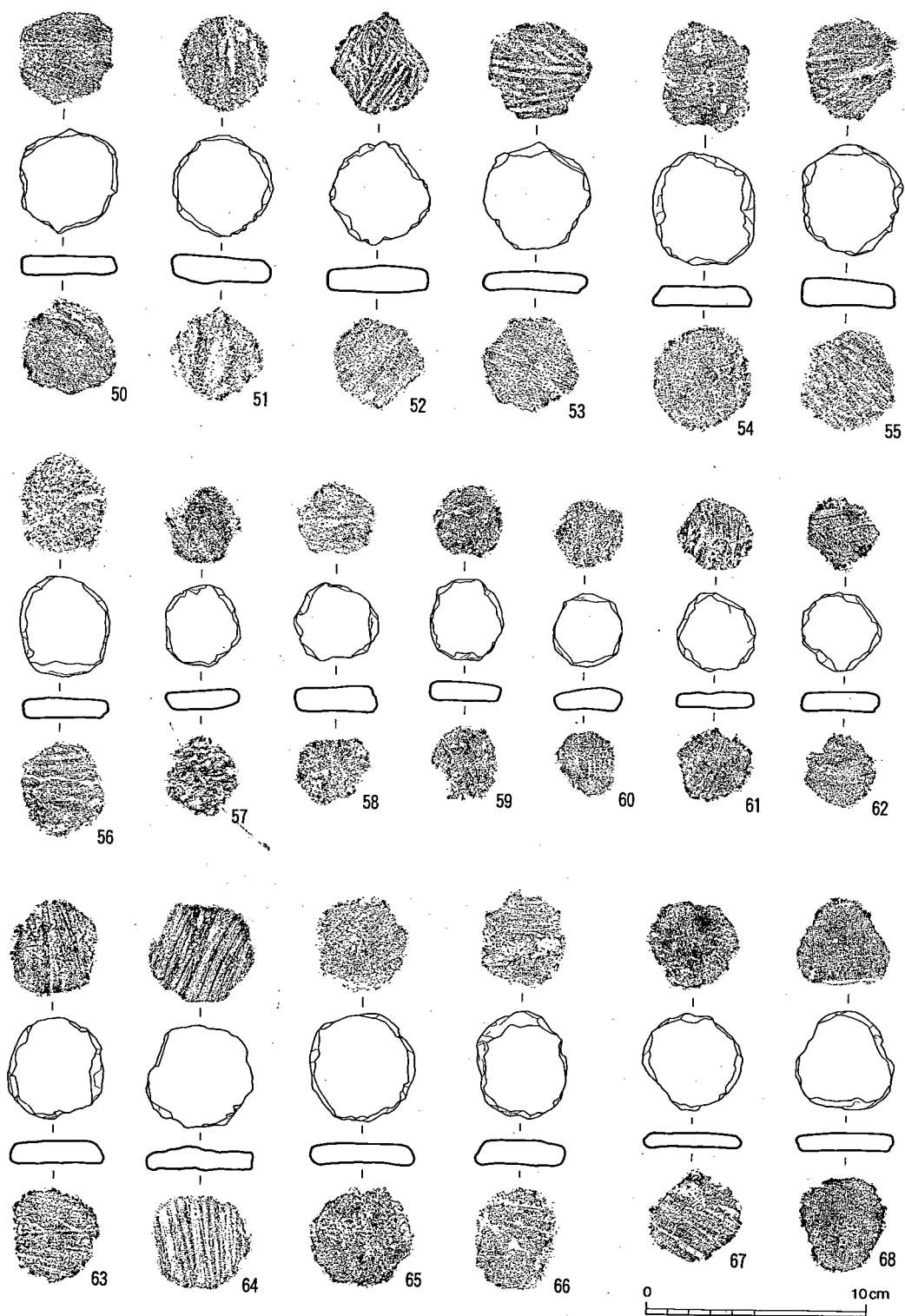
石器（第267～275図）石器は150点を図示した。石鏃（308～403）の石材は腰岳産黒曜石・姫島産黒曜石・サヌカイトに限られる。剥離面を大きく残し一見剥片鏃のように見える資料でも、姫島産黒曜石の場合はすべて鈴桶技法によって作出されたものではない。404は楔形石器で両端部に階段状剥離が窺える。405は石錐で先端部がかなり摩滅する。407～409には使用による微細剥離痕が観察される。406・411は石核、410はスクレイパーになろうか。415～432は



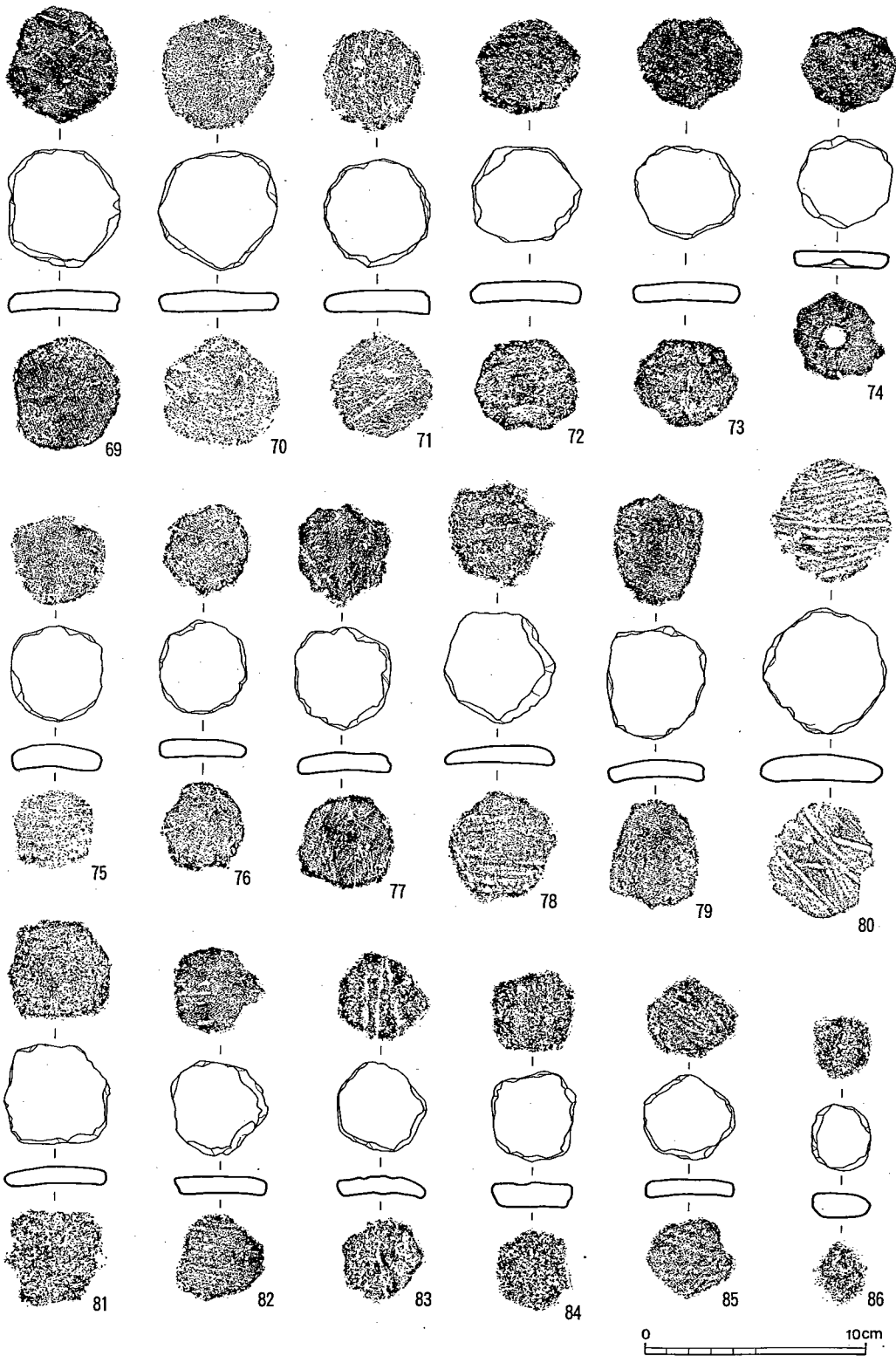
第 281 図 土製円盤実測図. 2 (1/3)



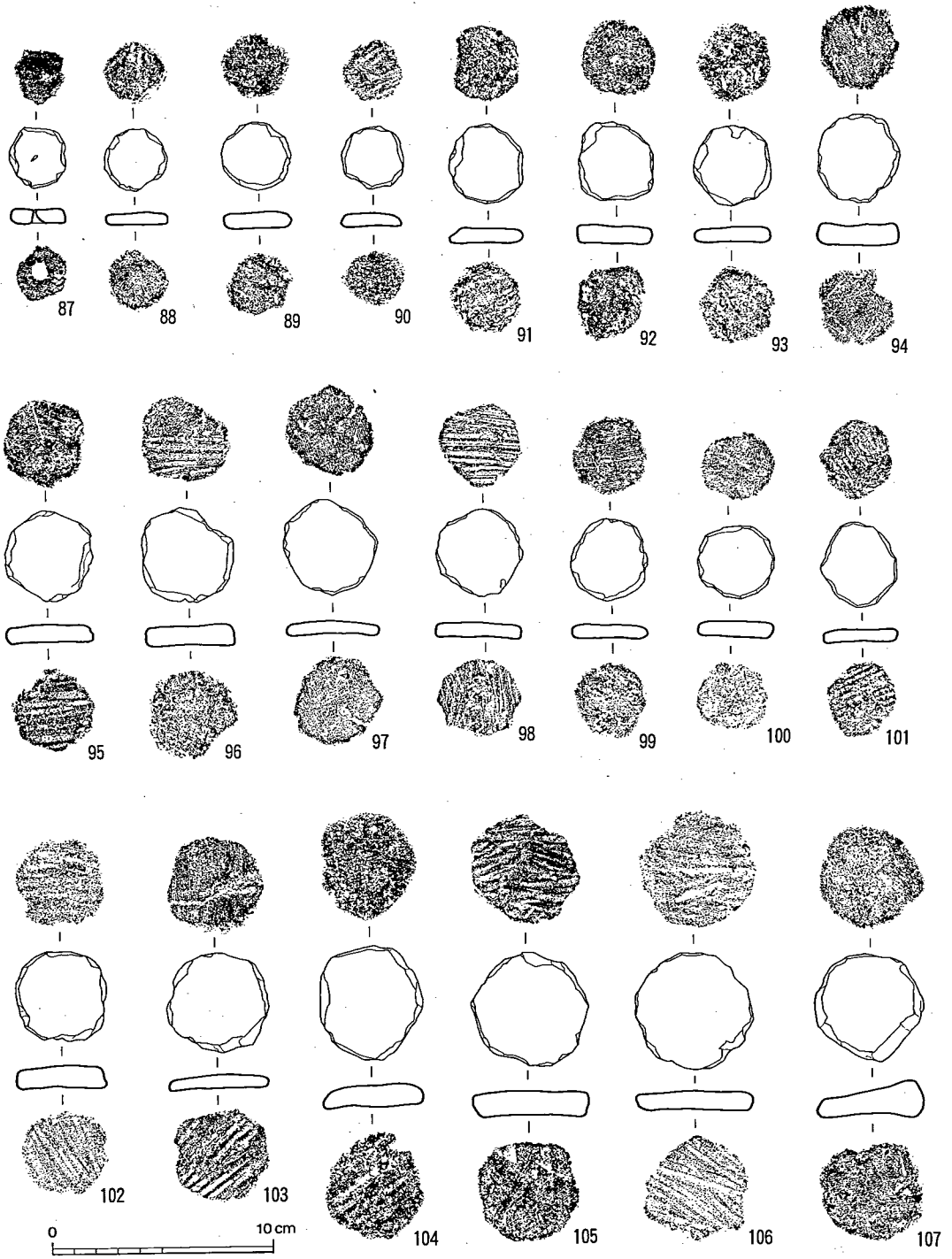
第 282 図 土製円盤実測図. 3 (1/3)



第 283 图 土製円盤実測図. 4 (1/3)



第 284 図 土製円盤実測図. 5 (1/3)



第 285 图 土製円盤実測図. 6 (1/3)

石錘。420～432のように長軸両端部を打ち欠くのが量的に最も多いが、416～419のように短軸の両端部や全周を打ち欠いたり抉ったりするのも少量ある。また415のように、長軸に沿って全周に幅・深さとも2mmの細くて小さな溝を巡らす例はこれだけである。433・434はノミ状の磨製石斧で、いずれも片刃。435～442の磨製石斧のうち、両刃になるのは435・441だけであろう。441は玄武岩であるが他はすべて蛇紋岩製。443～452は結晶片岩製の打製石斧。452は刃部のみ研磨されており、また細長くて形態的にも特異なもので、あるいは他の打製石斧とは異なった使用方法になるのかもしれない。444～447・452は両側縁に不定型な階段状剥離や擦れたような摩滅の痕跡があり、柄に装着した際の緊縛痕かもしれない。445の基端部には光沢のある擦れたような摩滅が観察されるが、これも柄との装着によるものであろうか。453・455・456はくぼみ石。454は敲石。457は台石。

土製円盤（第280～285図）本遺跡では292点の土製円盤が出土したが、そのうちピットおよび包含層から出土したものは129点を数える。文様を有するものは1・4・6・8・11～13の9点で、1は西和田式、2は福田K2式、3・4は小池原上層式である。このほかにも鐘崎式やそれに後続する型式の土器片が土製円盤として転用されているが、西平式・三万田式の土器片を転用したものは見当たらない。土製円盤の使用期間を考えるうえで、問題になる事実関係である。

(8) 表採の遺物

ここでは床土もしくは排土より採集された遺物を紹介する。

土器（第276図）10点を図示した。1353・1354は小池原上層式で、1353には巻貝疑似縄紋が施される。1355～1357は鐘崎式。1358～1361は鐘崎式と西平式の間に位置づけられる一群。1358には2本の隆帯文が貼り付けられ、その後その隆帯文の上下の付け根に沈線文が施される。取りあえずここに位置づけたが確固たる根拠はない。1362は三万田式。

石器（第277～279図）458～472は石鏃。476・477はくぼみ石。478・479は両刃の磨製石斧で、479の基端部には階段状剥離も見られるが擦れたような摩滅の痕跡も窺え、柄との装着方法が問題になる。480～484は結晶片岩製の打製石斧で、480・483・484の両側縁の抉れた部分では不定型な階段状剥離や擦れたような摩滅の痕跡が観察される。485は台石。

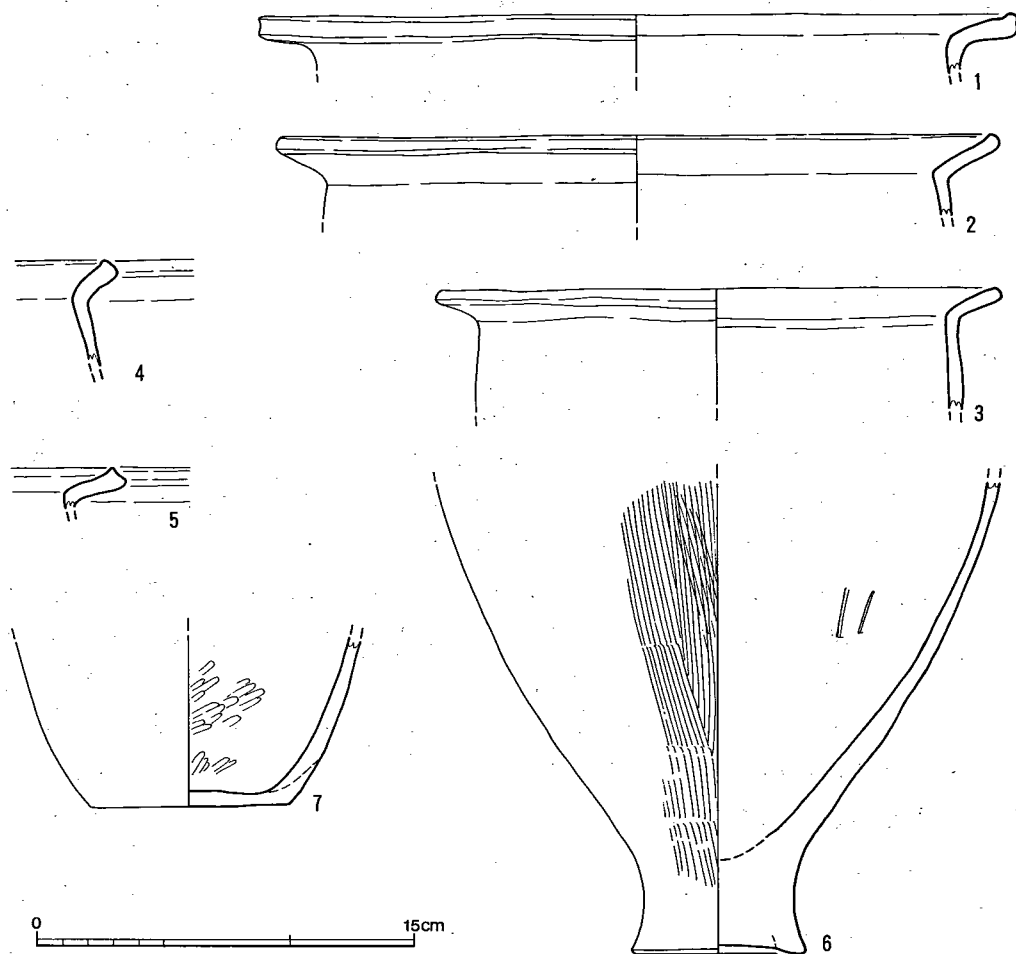
土製円盤（第280～285図）表採された土製円盤は11点を数えるが、いずれも文様がなく、多くの場合の器面調整はナデである。

3. 弥生時代以降の遺構と遺物

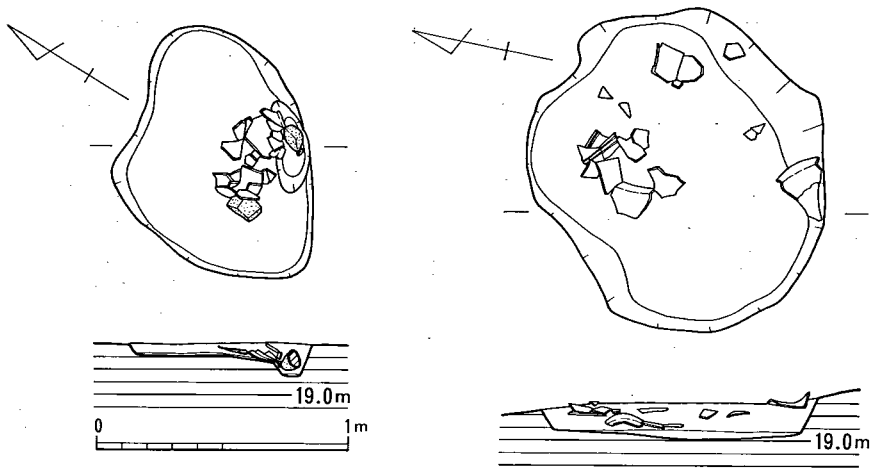
本遺跡において弥生時代の遺構と遺物は極めて少ない。角田川を挟んで対岸に立地する中村団後遺跡では弥生時代終末期～古墳時代初頭期の遺構と遺物が出土しているが、本遺跡では弥生時代中期の土坑3基と土壇墓3基が検出された他に、包含層から若干の遺物が出土しただけである。以下、順に説明を行なう。

(1) 土坑

本遺跡で弥生時代に属する土坑は1・7・8号土坑の3基である。



第 286 図 1号土坑出土土器実測図 (1/3)



第 287 図 7・8号土坑実測図 (1/30)

1号土坑 (図版17 第191図)

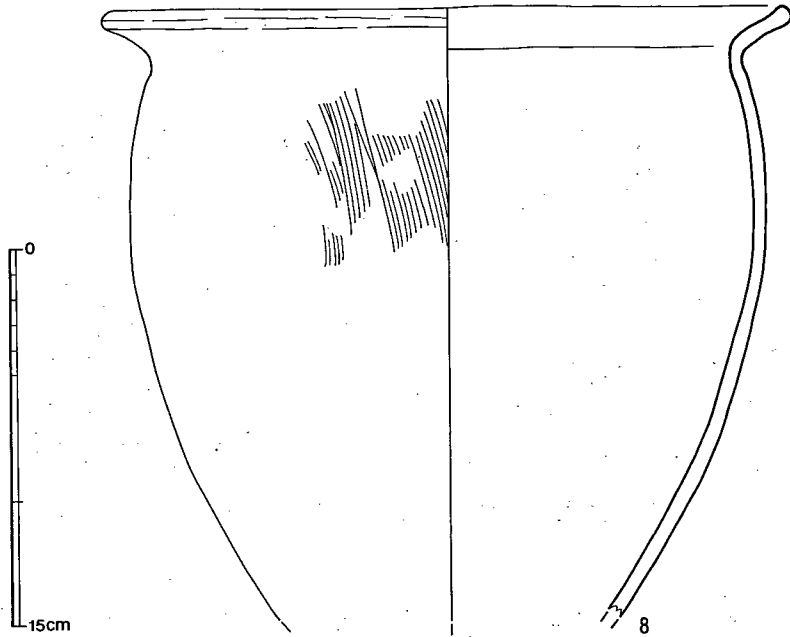
1号土坑は「2 縄紋時代の遺構と遺物」の中で縄紋時代の遺構として説明しているが、ここでも述べたように弥生土器は最上部の茶褐色粘質土から多量の縄紋土器に混じって出土するだけで、その下位からは縄紋土器しか出土していない。縄紋土器しか出土しない6号土坑を切って1号土坑があるので年代的な先後関係は問題ない。しかし、1号土坑の下位埋土では縄紋土器しか含まれておらず、果たして本土坑が弥生時代の所産であるとするにはいささか問題が残る。あるいは1号土坑の上部を切る弥生時代の遺構があったのかしれないが、削平が著しいため今となってはそれもわからない。したがって、弥生時代に属する可能性が存在する土坑としても取りあえず位置づけておきたい。

土器 (第286図) ここでは1号土坑から出土した弥生土器だけをピックアップして図示した。本土坑からは、甕と壺も破片が出土している。1～5は、中型甕の口縁部で、胴部から「く」字形に屈曲し、口唇部端が最も厚みをもち、若干ながら上に摘み上げる型式である。しかし、3は摘み上げがないが、5は摘み上げが強いものがある。口縁部と胴部の関係は、5のように不明なものもあるが、全体的に胴最大径が口縁径より大きくなることはない。6は、甕の胴部と底部で、厚味のある上げ底に張りのない胴部を特徴とし、2・3のような口縁部をもつ型式で、弥生中期前半に属する。7は、外面の摩滅が著しく不明のところもあるが、内面にヘラミガキ調整があるところから、外面も同じくヘラミガキであったと思われる、底部の割合の大きな壺というより、口径も大きな樽形小型甕とすべきものであろう。

時期的には、2・3・6が中期前半、5が中期末となり、土器片に時期幅がある。

7号土坑 (図版20 第287図)

7号土坑は調査区中央部の北西部VF区に位置し、1号竪穴住居跡の東2m、4号竪穴住居



第 288 図 7号土坑出土土器実測図 (1/3)

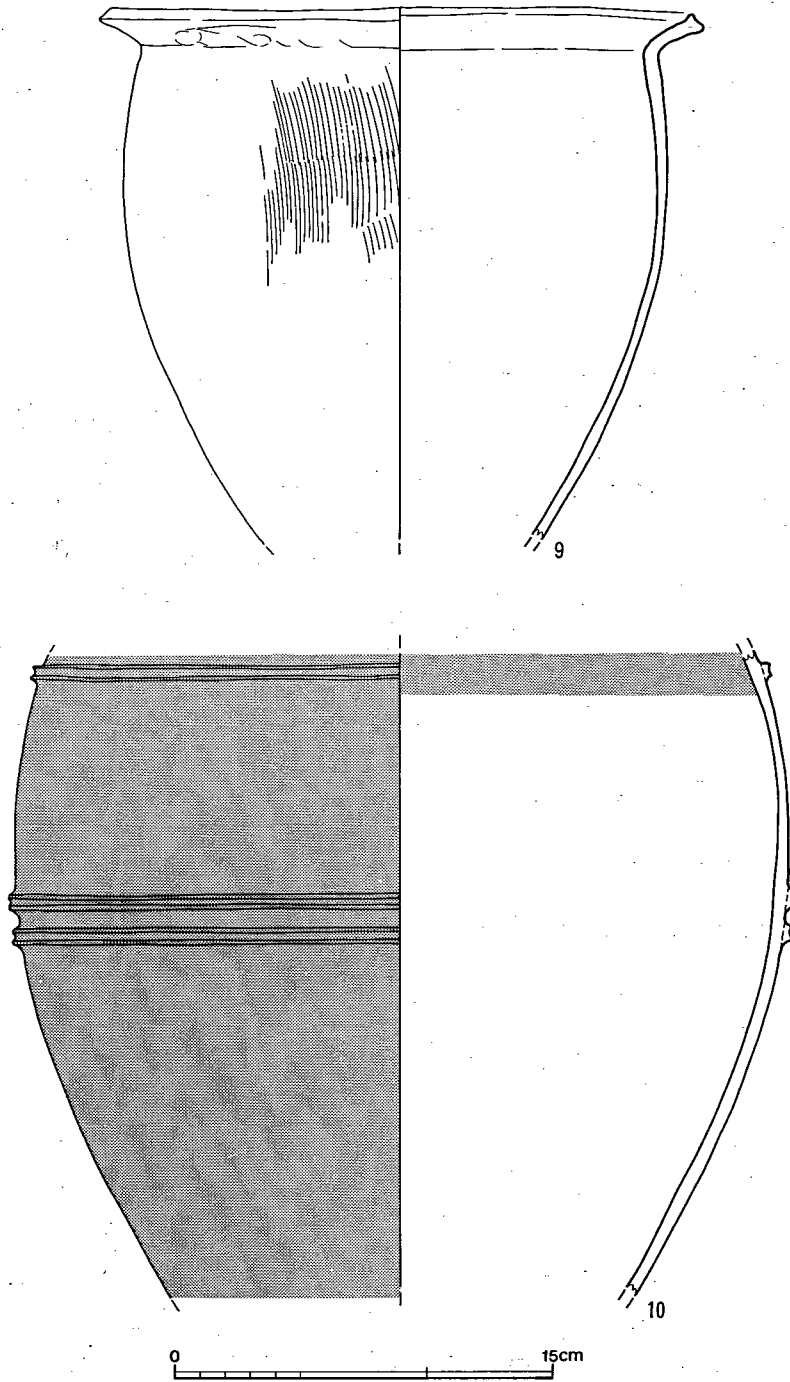
跡の西 5 m に近接する。平面プランは105×75cmの不整形な楕円形で、深さは最高で 6 cm。壁際南東隅には37×13×7 cmの細長い小穴があり、そこへ入り込むようにほぼ完形に近い 1 個体分の弥生土器が出土した。埋土は拳大の礫も多く含まれる灰褐色土である。本土坑の性格については不明。

土器 (第288図) 7号土坑からは、中型甕 1 個体分が出土している。甕の口縁部の屈曲が丸味をもっていることと、胴部が割合に張って丸味があることから、弥生後期初頭に属する。胴部外面上半に煤らしき黒色の付着物と、下半に加熱による赤変が見られる。

8号土坑 (図版25 第287図)

8号土坑は調査区南端VIB区に位置する。このあたりは角田川の川岸に近く遺構密度のかなり希薄な地区で、周辺部にはわずかなピット以外に主要な遺構はない。平面プランは130×115 cmの不整形楕円形で、深さは最高でも15cm。壁は緩やかに開くように立ち上がり、埋土は灰褐色粘質土。本土坑からは遺棄されたような状態で、甕と丹塗りの壺が出土したが、これらはいずれも完形品ではない。

土器 (第289図) 8号土坑からは、甕 2 個体分が出土した。9は、「く」字形口縁部の口唇部を摘み上げる型式で、胴部もあまり張らない。10は、口縁部を欠損しているが、口縁下と胴部に合計 3 条の口唇状突帯をめぐらす。内面の上端と外面全面に丹塗を施し、上半部いヨゴヘラミガキ調整が残っている。9・10の甕の時期は、上記の諸特徴から弥生中期末に属する。



第 289 图 8 号土坑出土土器实测图 (1/3)

(2) 土壙墓

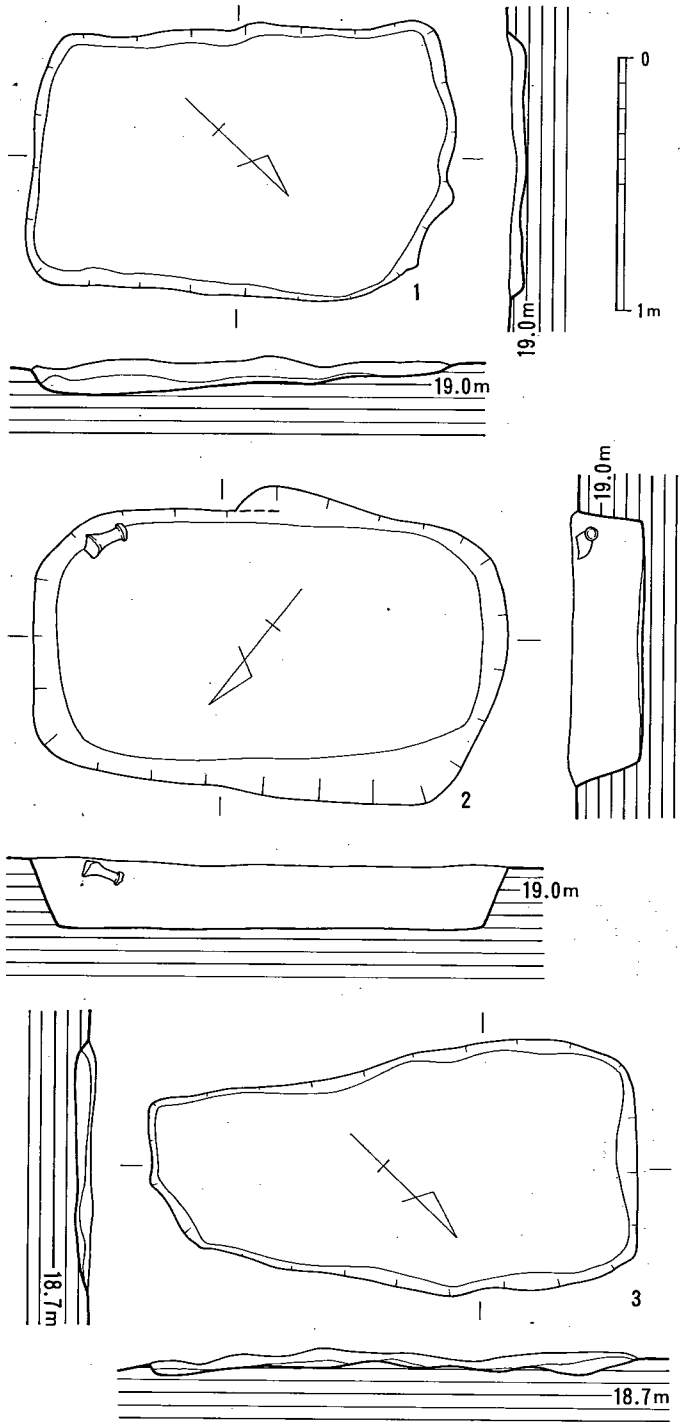
本遺跡では弥生時代に位置づけられる土壙墓が3基検出されたが、いずれも調査区中央部東側のⅦE・ⅧE区に集中する。遺物の出土は2号土壙墓だけであるが、平面プランやこの3基が局部的に集中するという位置関係から、1・3号も同期の土壙墓とした。

1号土壙墓（図版26 第290図）

1号土壙墓は調査区中央部東側ⅦE区に位置し、6号竪穴住居跡の南1m、2号土壙墓の北西7mに近接する。平面プランは165×110cmの長方形で、底面は北西から南東方向に傾斜して深さは最高で15cm。

2号土壙墓（図版26 第290図）

2号土壙墓は調査区中央部東側ⅦE区に位置し、8号竪穴住居跡の南2m、1号土壙墓の南東7m、3号土壙墓の西3mに位置する。平面プランは185×110cmの長方形で、ほぼ平坦な底面まで深さ30cm。東隅の最上部からは高坏の脚部が出土



第 290 図 1～3 号土壙墓実測図 (1/30)

しているが、果たして本土墳墓に確実に伴うものかどうか確定できない。

土器（第291図）2号土墳墓からは、甕・高杯・鉢の破片が出土している。11は、「く」字形口縁で口唇先端に厚味のある型式の甕。12は、杯部直下に三角突帯をめぐらす高杯。外面にタテミガキらしき痕跡もある。13は、体部内外面にヨコヘラミガキ調整のある鉢形土器。時期は、11の甕口縁先端部の厚味、12の高杯の三角突帯から中期前半に属する。

3号土墳墓（図版27 第290図）

3号土墳墓は調査区中央部東側ⅧE区に位置し、8号竪穴住居跡の南東1m、2号土墳墓の東3mに位置する。平面プランは長さ195cm、幅70~95cmの北西から南東へ向けて細くなる不整長方形で、凹凸の目立つ底面まで深さ8cm。

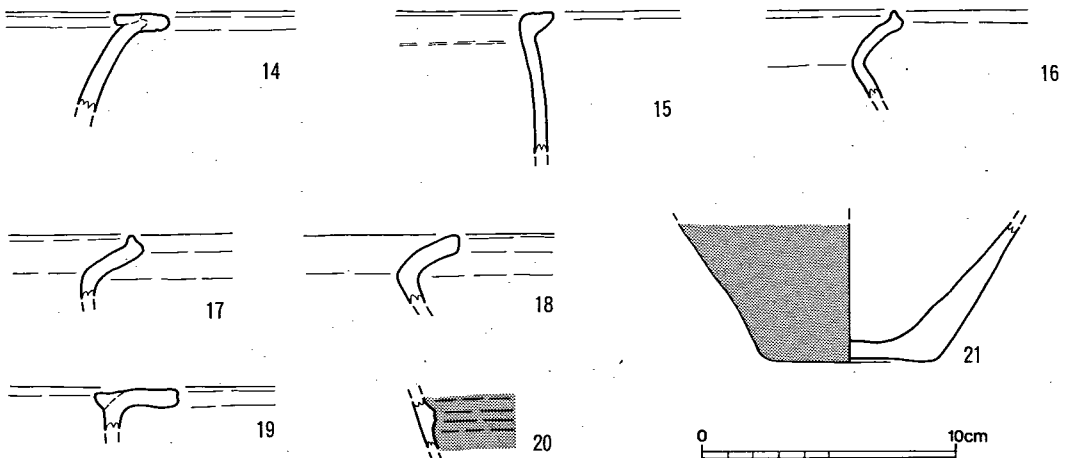
(3) ピット・包含層出土の遺物

弥生土器は、壺・甕の口縁部と底部が出土している。

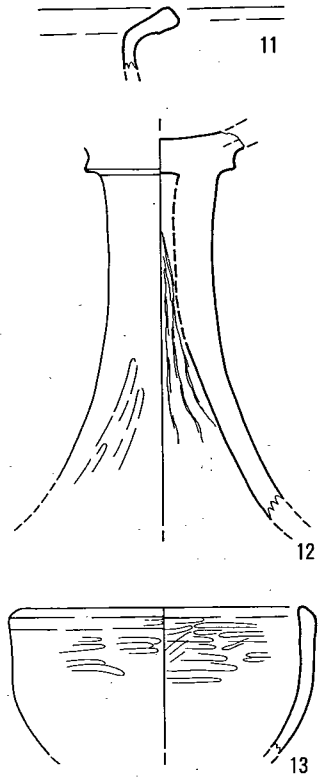
第292図14は鋤先口縁広口壺で、鋤先部が未発達である。21は壺の底部で、外面の底部まで丹塗りを施している。

15~19は甕の口縁部で、15が三角突帯の貼付、16・17が摘上口縁、18が「く」字形口縁、19が逆し字口縁である。20は、19のような口縁下の口唇状突帯で外面に丹塗りを施す。18は丹塗りの可能性があり、19が本来は丹塗りであろう。

時期は、15が弥生中期初頭、14が中期前半、16~21が中期末から後期初頭に属するであろう。



第292図 包含層出土弥生土器実測図（1/3）



第291図 2号土墳墓出土土器実測図（1/3）

Ⅲ 中村石丸A遺跡

1. はじめに

一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査の第6地点として登録されていた中村石丸遺跡は、第7地点の中村団後遺跡の北側にあり、周防灘に注ぐ角田川が貫流する谷を挟んで対峙している。中村石丸A遺跡は、豊前市大字中村字石丸124-1・2・3番地に所在し、角田川が貫流する水田面より2~3m高く、北側に急斜面の丘陵を背にし、居住地として好適地である。

試掘調査は、調査対象地とされていた宅地と畑地のうち、畑地を63年7月18日から実施した。試掘では、合計5カ所にトレンチを設定したところ、部分的にピットや新しいと思われたが石組などの遺構が検出された。また、出土品としても現代の陶磁器に混じって、姫島産黒曜石片や須恵器が若干発見されたことから、継続して発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和63年7月22日から8月16日まで実施した。調査の結果は、明治以降の現代陶磁器が出土したにも拘わらず、遺構としては確定できるものがない。ただし、明治以降も住宅地であったところを、畑地にする際に完全に近く破壊しているが、第293図のように一部用途不明の石組などが残っていた。調査面積は142㎡。

出土品としては、現代陶磁器以外に縄紋期の石器・土器片、奈良期以降の須恵器・陶磁器、近代の陶磁器も若干出土しているので、これらについて報告する。

なお、中村石丸A遺跡は、下記の遺物が出土するが、遺構として確認できないことから、遺跡として登録できないので、今後中村石丸遺跡と呼ぶのは、B地点の縄紋遺跡としたい。

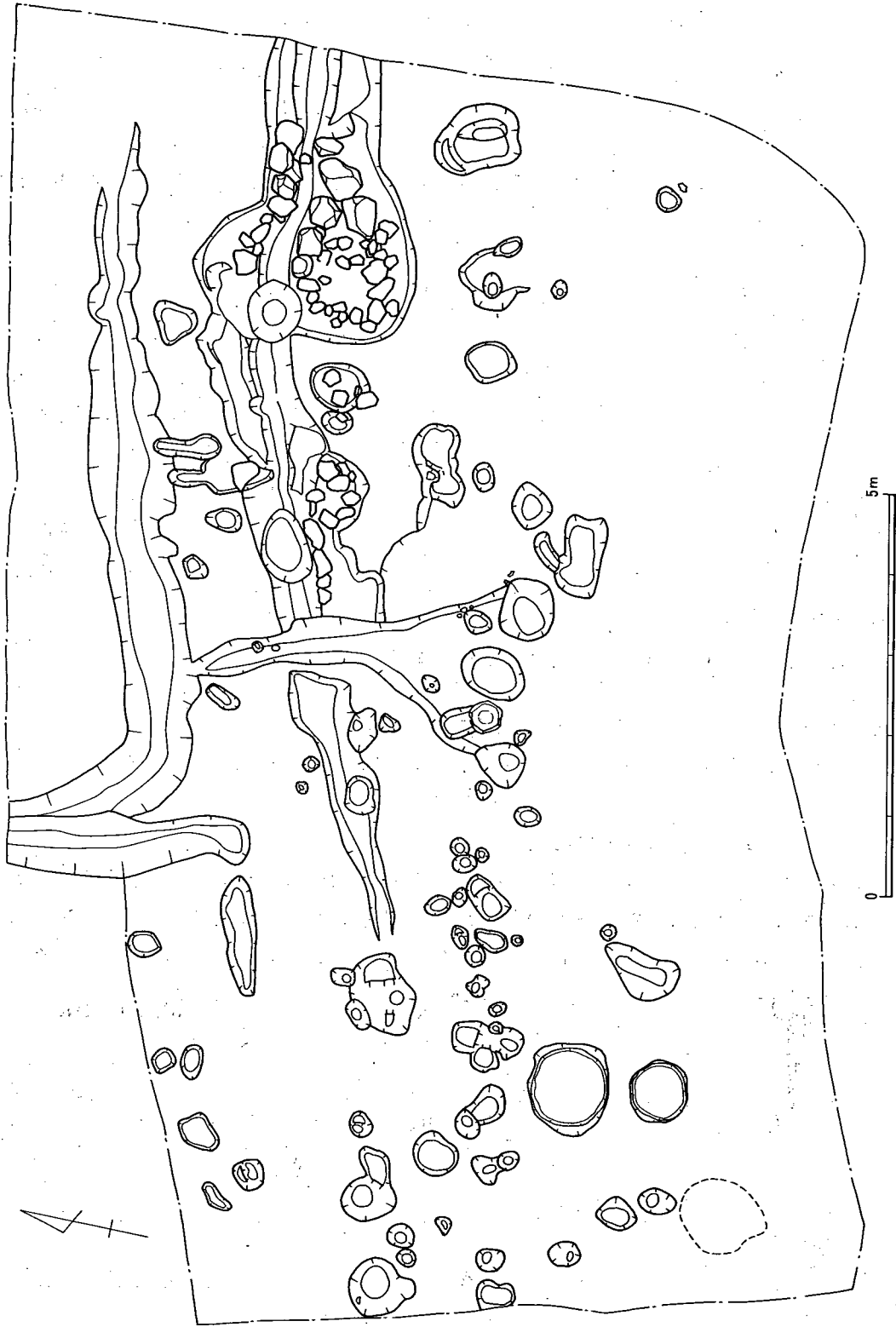
また、調査は福岡県教育庁指導第二部文化課参事補佐兼調査班総括柳田康雄が担当した。

2. 遺物

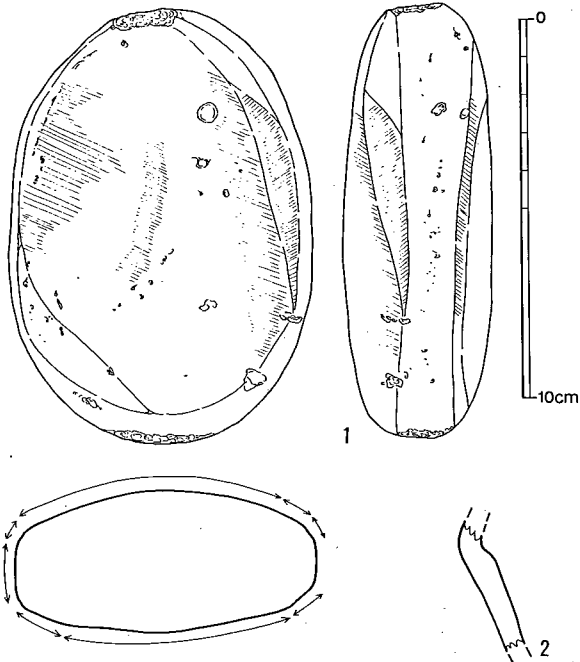
遺構としては、現代の宅地建設や畑地造成で完全に破壊されて遺存しなかったが、縄紋・奈良・江戸期にこの地が利用されたらしく、若干の出土品があったので簡単に説明する。

(1) 縄紋期の遺物

第294図は、縄紋期と思われる石器と土器片である。1は磨石兼敲石で、扁平な楕円形を呈する。全面に平坦な面をもっていて、光沢もあり、割合に高質な石を使用している。長辺の両端に敲打痕もあり、敲石としても使用されている。大きさは、長径11.4cm、短径7.9cm、厚さ



第 293 図 中村石丸A遺跡遺構全体図 (1/80)



第 294 図 中村石丸A遺跡出土縄紋土器・石器
実測図(1/2)

3.9cm、重さ571.3g。

2は縄紋土器と思われる小片で、
角閃石などの混入具合から弥生土器
などではなく、縄紋後期の土器であ
ろう。

(2) 奈良期の遺物

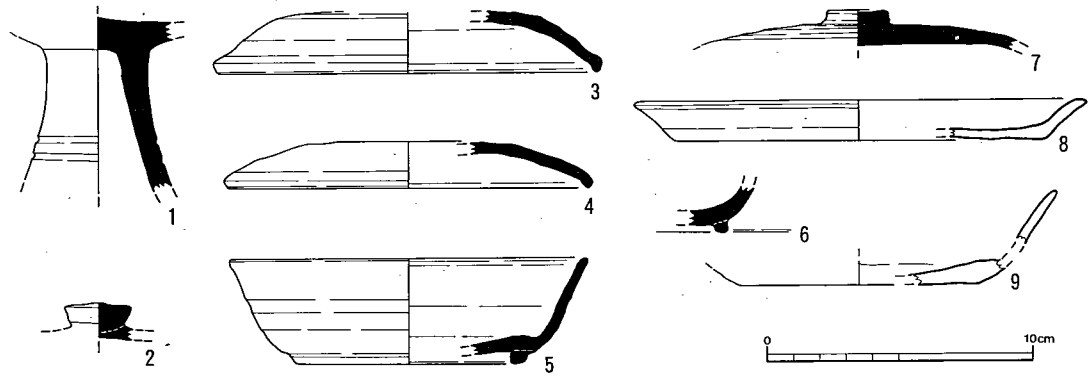
第295図は、奈良期に属すると思
われる土器片である。1は須恵器高
杯で、短く太目の脚部に2条の沈線
文をめぐらしている。2～4・7は
須恵器蓋で、2・7が扁平つまみを
もっている。3・4の蓋は、先端部
のみを若干屈曲させるタイプで、3
が内外面回転ヨコナデ、4が外面手
持ケズリ後ナデ調整している。ヘラ

ケズリなど古い様相を示すが、先端に新しい様相もある。

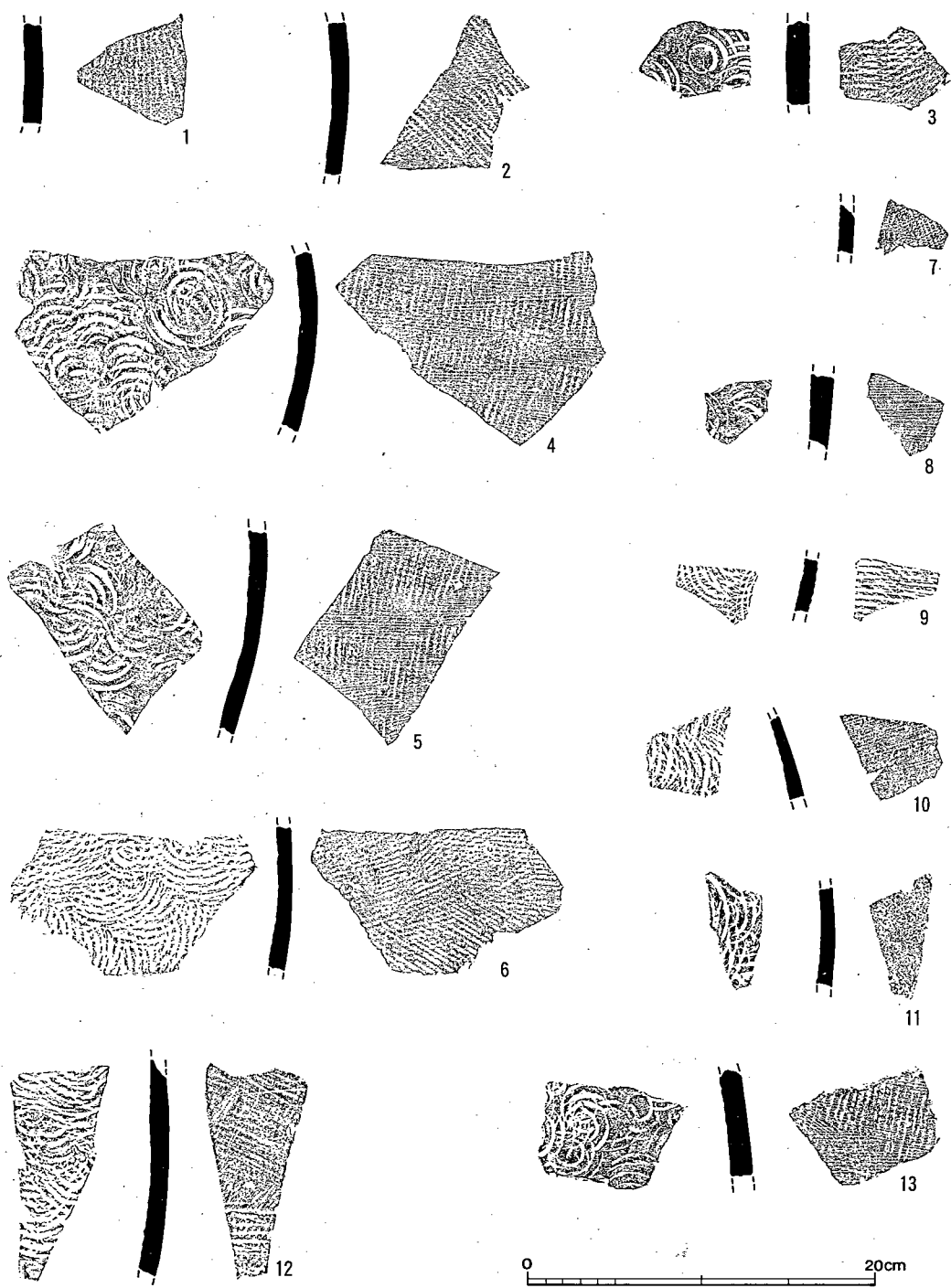
5・6は須恵器高台杯身で、低い高台を貼付けている。器面調整は、全面に回転ヨコナデ
ある。

8・9は土師器皿で、全体に摩滅し調整不明。

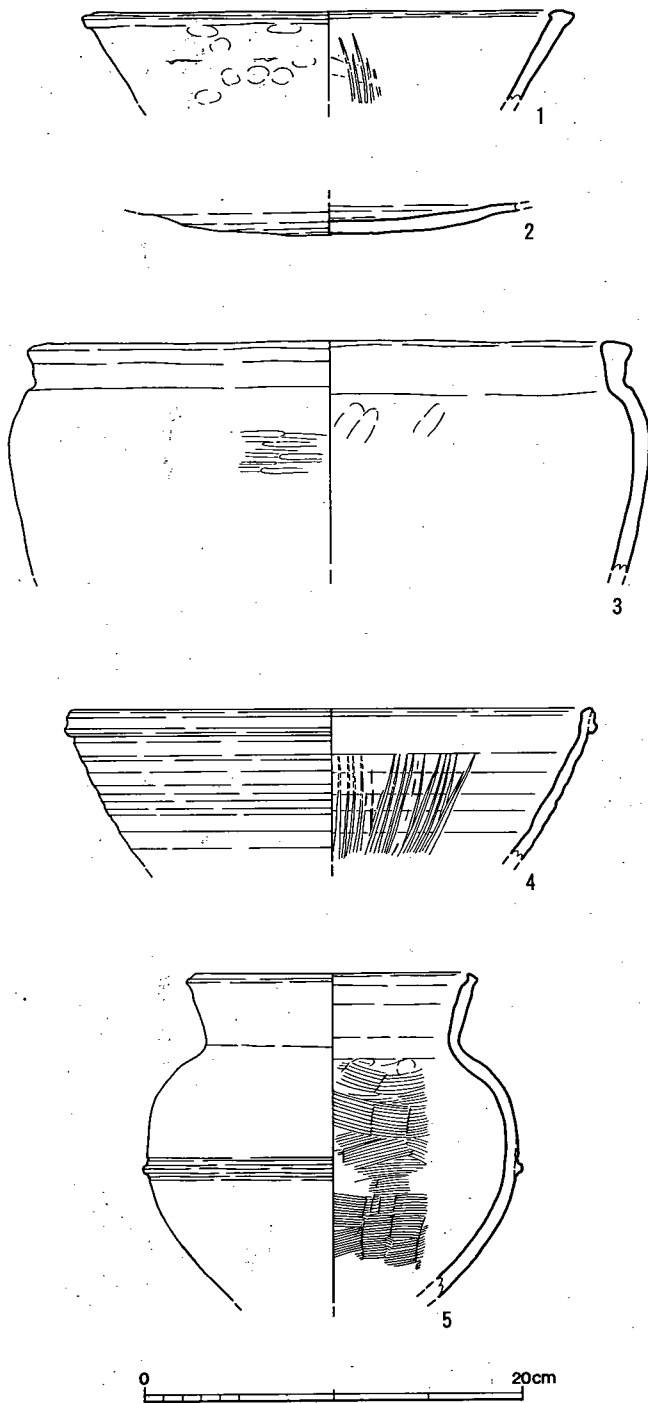
これらの土器片は、大半が地山直上であるが、7・8がP-18、9がP-12から出土している。
第296図は須恵器大甕片で、1・2の内面が当具痕を完全にナデ消して凹凸が残っている。3
は、内面の当具痕を一部ナデ消している。他は外面にタタキ、内面に当具痕が残るが、外面の



第 295 図 中村石丸A遺跡出土須恵器実測図.1 (1/3)



第 296 図 中村石丸A遺跡出土須恵器実測図. 2 (1/4)



第 297 図 中村石丸A遺跡出土土器実測図 (1/4)

タタキを一部ナデ消したり、カキ目を施したりしている。出土地は、8がP-9、9がP-13から、他が地山直上であった。

須恵器と土師器の時期は、杯蓋のヘラケズリなど古い様相もあるが、全体に8世紀中頃から後半の範囲で考えたほうがよいであろう。

(3) 中世以降の遺物

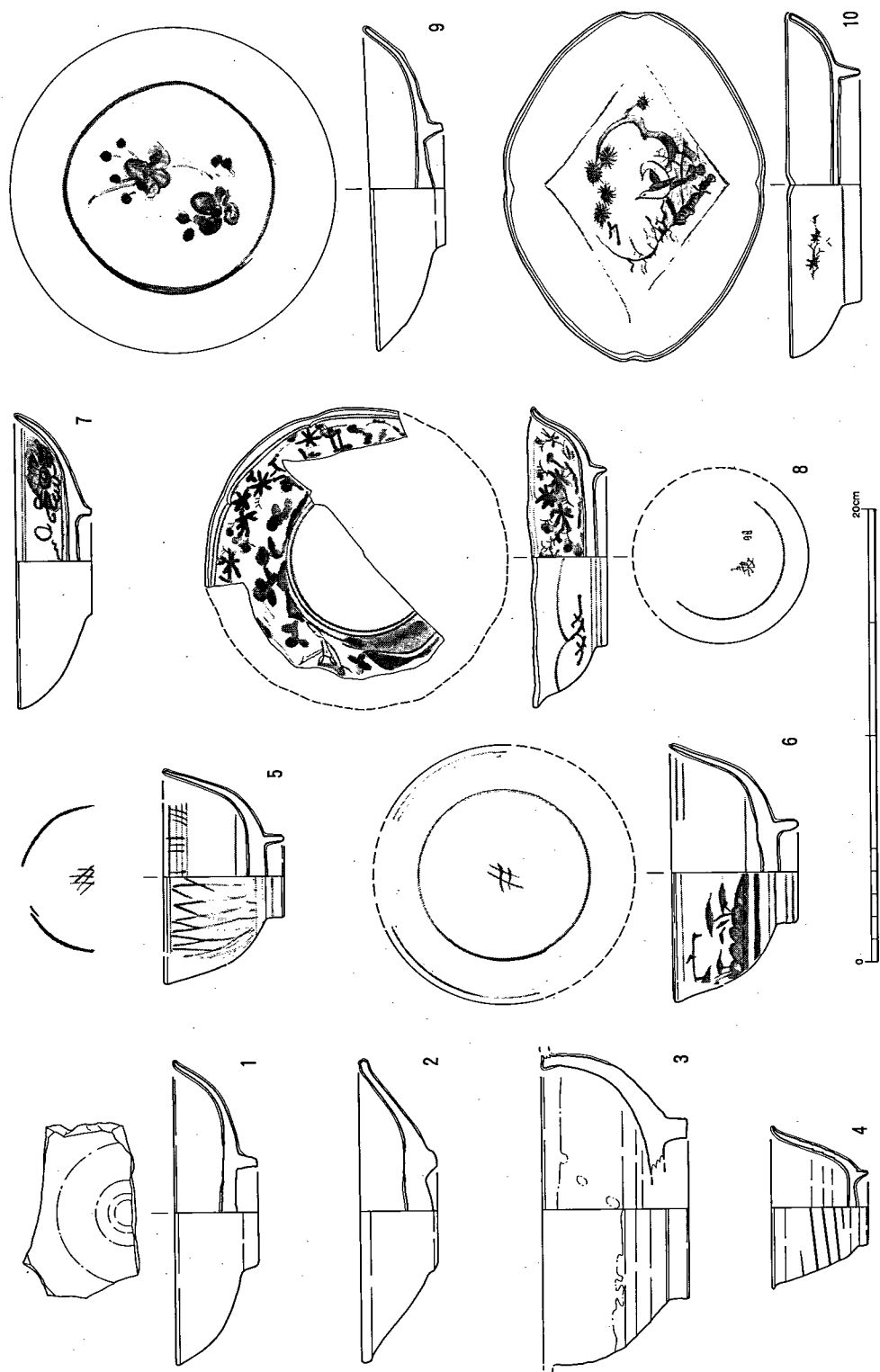
第297・298図は、中世以降の主に江戸後期陶磁器である。第297図1～3は瓦質土器で、1が播鉢、2が底部、3が火舎である。1・2が14世紀、3が江戸後期であろう。

4は陶器の播鉢で、19世紀後半頃の小石原産であろう。

5の土器は、直口壺形をした土鍋で、外面全体に煤が付着している。時期は、江戸後期頃であろう。

第298図1の青白磁高台皿は、14～15世紀頃の南宋景德鎮産で、露胎の高台が高い。図示できなかったが、11世紀の白磁碗・13世紀の鎬連弁の龍泉窯青磁碗の細片もある。

2の小皿は、胎土から17世紀前半頃の古上野系で、内面に目砂跡、底面が露胎になっている。3の碗は、17～18世紀前半頃の古上野系刷毛目で、口縁部のみ釉がかかり、他が露胎となっている。4は全体



第 298 图 中村石丸A遺跡出土陶磁器実測図 (1/3)

に釉がかかる江戸後期のもの、5・6は19世紀前半頃の伊万里のくらわんか手である。

7～10の染付皿は、9が18世紀前半、他が江戸後期のものであろう。

これらの出土品から、縄紋期に一部で角田川左岸に居住していた縄紋人が関連し、奈良期以降にも人が住み、江戸後期に現在の集落の基礎が築かれたものと考えられる。

最後に、近世の陶磁器については、福岡県立美術館普及課長副島邦弘氏のご教示による。



第 299 図 中村石丸A遺跡全景（北西から）

福岡県行政資料

分類番号	JH	所属コード	2133051
登録年度	7	登録番号	7

一般国道
10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第8集

中村石丸遺跡

福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査

平成8年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812 福岡市博多区東公園7番7号
電話 (092) 651-1111

印刷 株式会社 川島弘文社
〒812 福岡市東区箱崎ふ頭6丁目4番4号

一般国道
10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書 第8集

中村石丸遺跡

福岡県豊前市大字中村字石丸所在縄紋時代遺跡の調査

付図 中村石丸遺跡遺構配置図 (1/200)

1996

福岡県教育委員会

Y+7580

Y+7600

X+88780

Y+7560

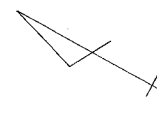
Y+7550

X+88740

X+88720

X+88700

0 10m



付図 中村石丸遺跡遺構配置図 (1/200)